連載専門誌

対人援助学マガジン

Vol. 9 No. 2

第34号

September 2018

対人援助学会

NO. ３４　M O K U J I

目次		002-003
ハチドリの器	見野　大介	004
執筆者＠短信	執筆者全員	005-018
知的障害者の労働現場	千葉　晃央	019-022
臨床社会学の方法（22）	中村　正	023-032
カウンセリングのお作法（16）	中島　弘美	033-038
難病の訪問カウンセリング（4）	藤　信子	039-041
復活新連載　エア絵本-ビジュアル系子ども・家族の理解と支援（1）-	岡田　隆介	042-046
蟷螂の斧　「続・家族理解入門」（4）	団　士郎	047-056
社会的養護の新展開　３	浦田　雅夫	057-058
不登校経験を持つ若者たちのもう一つのキャリアパス（3）	北村　真也	059-090
幼稚園の現場から（34）	鶴谷　主一	091-098
福祉系対人援助職養成の現場から	西川　友理	099-103
境界あれこれ（9）	河岸　由里子	104-110
生殖医療と家族援助	荒木　晃子	111-114
高齢者とのドラマセラピー	尾上　明代	115-121
きもちは言葉をさがしている（33）	水野　スウ	122-130
盆踊り漫遊（3）	竹中　尚文	131-133
男は痛い！（28）	國友　万裕	134-141
ひとこまマンガ	三嶋あゆみ	143
援助職のリカバリー（27）	袴田　洋子	144-146
周旋家日記（24）	乾　明紀	147-151
役場の対人援助論（26）	岡崎　正明	152-156
臨床のきれはし（2）	浅田　英輔	157-159
新版K式発達検査をめぐって	大谷　多加志	160-162
講演会＆ライブな日々	古川　秀明	163-168
養育里親～もうひとつの家族～（22）	坂口　伊都	169-173
周辺からの記憶　―東日本大震災家族応援プロジェクト―（20）	村本　邦子	174-203
病児保育奮闘記（19）	大石　仁美	204-206
対人支援　点描（15）	小林　茂	207-210
海の向こうに出てみれば―最終回―	石田　佳子	211-215
清武システムズ14	しすてむ きよたけ	216-221
精神科医の思うこと（10）	松村　奈奈子	222-224
おくのほそみち　（10）	奥野　景子	225-232

「ケアプラン」の価値	馬渡　徳子	233-234
東成区の昭和　思い出ほろほろメモ	柳　たかを	235-242
介護福祉を巡る断章（最終回）	臼井　正樹	243-246
町家合宿 in 京都 （8）	山下　桂永子	247-251
そうだ、猫に聞いてみよう（11）	小池　英梨子	252-258
先人の知恵から （21）	河岸　由里子	259-263
私の出会った人々（7）	関谷　啓子	264-269
うたとかたりの対人援助学 （8）	鵜野　祐介	270-274
あぁ結婚 （7）	黒田　長宏	275-281
PBLの風と土（6）	山口　洋典	282-287
接骨院に心理学を入れてみた（5）	寺田　弘志	288-292
現代社会を『関係性』という観点から考える（5）	三浦　恵子	293-299
対人援助通訳の実践から（5）	飯田　奈美子	300-303
マイクロアグレッションと私たち（4）	朴　希沙	304-308
保育と社会福祉を漫画で学ぶ（3）	迫　共	309-311
「余地」―相談業務を楽しむ方法－（3）	杉江　太朗	312-317
統合失調症を患う母とともに生きる子ども（2）	松岡　園子	318-331
生体肝移植ドナーをめぐる物語（2）	一宮　茂子	332-343
「盲ろう者」として自分らしく生きる（2）	中條　與子	344-345
新連載　木陰の物語にまつわる対話（1）	岡田隆介×団士郎	346-357
編集後記	編集長＆編集員	358-359

ハチドリの器 17

見野 大介

Mino Daisuke

上：蒼天釉茶盌
左：翠釉ランプシェード
下：桃花鳥釉六角鉢

第３４号
執筆者
＠短信

新連載　岡田隆介

過去に二度ほどシリーズを書いたけど、正直、苦痛だった。文章を読むのも書くのも好きじゃないということを改めて知った、それは今も変わらない。

で、ふと思った。そんな人はいっぱいいるだろう、だったらそういう人が対象のシリーズがあっていい。ターゲットは、対人援助マガジンの目次とページ数でめまいがする読者だ。

目指したのは絵本だが、肝心のイラストや漫画が描けない。で、パワポを使ったエア絵本にした。文章の何倍も時間がかかるが、暇のある自称パワポ芸人だ。

「ビジュアル系　子ども・家族の理解と支援」、ネタ・根気・寿命のどれか一つが尽きるまで、緩く続けてみたい。

新連載　岡田＆団

編集長の私が、岡田隆介さんと共同の連載をはじめた。

グラフィック　メディスン（GM）との関わりは,本文前書きのところで触れた。新たな描き方でマンガの新作を創れるのが楽しい。今回の作り方は二人のラリーである。

いろんな場所に、新しい形式を作り出していくのが面白くて仕方がない。そこには

いつも、あだ花にしないための継続への思いが重なる。広げた店を、命続く限りと思いながらこなしている。

こんな感覚になったのは七十歳を過ぎてからだ。古くさい不要品だと言われないよう、何事によらず、ゆっくり考えて歩み出したい。

こちらの不定期（？）連載についての岡田さんのメッセージは、記事の最後に。

第二回　一宮　茂子

私は大学病院に就職して間もないころ、何回か甲子園の全国高校野球選手権大会で救護班のひとりとしてバイトをしていました。100 回目となる今年は多くの感動ドラマが生まれました。とくに秋田の金足農が次々と強豪高と戦って準優勝するまでの過程は漫画以上のリアルドラマでした。

一方、カンカン照りの猛暑で熱中症の危険性もあり、球児たちや応援団、観戦者や大会関係者の皆さまの健康状態がとても気がかりでした。主催されている朝日新聞社と日本高等学校野球連盟さん、来年は何らかの対策をお願いしたいです。

第二回　松岡　園子

「グループホームで暮らせないかな…」

今年の 1 月に入院した母が退院後につぶやいた一言と、私の心の中で実家をグループホームにできないかという思いが芽生えだした今年 3 月。

色々と調べ、動き、7 月にようやく運営法人となる組織が NPO 法人として神戸市で認証されました。初めは、実家を改修して…と考えていましたが、市の担当の方と話している内に、国の補助金を受けて新築できるかもしれないということになりました。考えもしていなかった方向へ進んでいきますが、面白い展開です。チャレンジしてみようと思います。

週 1 回通っている小説教室がとても楽しいです。20 代から 90 代までの方が、小説や詩、エッセイを書こうと連日連夜、奮闘しています。50 代以上の方が圧倒的に多く、人生経験が豊かな方々のお話を聴いていると、世界が広がっていくような気分になります。

クラスゼミは、毎週「合評」と呼ばれる 2,3 作品の批評を軸に進んでいきます。戦後の体験を書き残そうとしている方や、ご自身の病気の体験を物語に織り込み、作品に仕上げている方もいらっしゃいます。そんな方たちの創る物語を毎週読ませていただいていると、私の体験なんてまだまだ、苦労の内に入らないなぁと思わされることがたくさんあります。

第二回　中條　與子

前回の6月15日号から、あっという間の3ヶ月だった。地震、大雨、猛暑、そして台風と、たてつづけに起きた。

震災の時、電車が動かなくなり、線路の上から職場まで歩くことになった。もちろん職場に行かず、家に帰るという選択肢もあったが、職場まで約3キロ、自宅まで約30キロ。必然的に近くの職場に行くことを考えた。幸い、所持しているスマートフォンのバッテリーがあったので、ナビゲーション機能のアプリで、3キロ歩けば行けるということがわかった。そして、夕方になって電車が動かなかったら、家に来ても良いと声をかけてくれる友達もいた。心強い気持ちで街を歩くことができた。

土地勘がなくても、迷いながらも、人に聞きながら歩いていくと、いつも見る建物、緑色の看板が見えてきた。それを見て、職場の近くに近づいていることを知ることができた。それでも電池があれば行けていたが、電池がなければ、職場に辿りつけた自信がない。

私にとってスマートフォンは欠かせないものであるが、スマートフォンに頼らないで目的地に行ける方法も、不可能かもしれないが、考えたいと思い始めている。

杉江　太朗

とある都道府県の、とある児童相談所で働いている杉江太朗と申します。今回が 3 回目となります。よろしくお願いします。

最近小川糸さんの「ツバキ文具店」と「キラキラ共和国」という小説を続けて読みました。とある代筆屋さんのお話でで、その代筆屋である主人公が依頼を受けて手紙を書く際に、その代筆依頼に応じて、

内容はもちろん、便せんなのかはがきなのか、ペンなのか筆なのか、それとも万年筆なのか、字体は、字の色は、切手は、封筒は・・・・と無数の選択肢の中から、「これ！」というものを選び書き上げるという、まさに「読む側にどう伝えるのか」ということを考えさせられる小説でした。

まさに私にとってのこの対人援助学マガジンも同様です。皆さまにどのように伝わっているかはわかりませんが、メディアで叩かれているように、児童相談所の仕事は、ツライだけではありませんよ。どんどん権限だけ与えられて締め付けが厳しくなっているような印象はありますが、きちんと「相談機関」としての余地が残っていると思っています。そんな余地を大切にしながら今日も生きています。

迫　共

社会福祉に関係のある漫画を題材にしたドラマが、同時期にふたつオンエアされています。
『健康で文化的な最低限度の生活』（原作、柏木ハルコ）と、今回とりあげた『透明なゆりかご』です。

漫画を実写化してドラマや映画にする場合、どこまで原作に忠実にするかという問題があります。原作の枠組みを大きく外れると原作のファンが怒るでしょうし、逆にまったく同じでは発見がありません。絵だからできる表現と、生身の人間だからできる表現があります。ふたつの漫画とドラマを見比べて、表現のあり方について考えたりしています。

朴　希沙（Kisa　Paku）

フィンランドに来て約2ヶ月が経とうとしています。今までとは全く違う場所に行くと、時間がたつのが長く感じられます。もう半年も経ったような気分です。フィンランドは本当に森と湖がたくさんある国で、不思議な静けさが漂っています。ここで過ごしていると心が落ち着いて、今までのこと、そしてこれからのことについてじっくりと考えることができます。たまには、日常を離れて旅をするのも、いいものなんですね。

浅田　英輔

国家資格となった公認心理師。9月9日に第 1 回試験が行われ、私も受験することにした。これを書いている 8 月末はまさに受験勉強追い込みの時期なのだが、そういうときこそ原稿がはかどりますよね！

三浦　恵子

6月の大阪地震，そして7月の西日本豪雨災害など，被害に遭われた方に心からお見舞いを申し上げます。

西日本豪雨災害の直後には所属している複数の職能団体で災害対策本部が立ち上げられました。私自身も後方支援の一端を担いながら現地入りをする会員をサポートすることを息長くやっていきたいと思っています。特に西日本豪雨災害は，被災地域も広域にわたることもあってか，全国ネットによる報道から情報を得ることは難しい現状です。現地で地域活動を様々に行っている知己を通して，現地のニーズを汲み取りながら，それに応じた支援を続ける必要性も痛感しています。

思えば20代から様々な活動に参加する機会に恵まれました。自分が企画しどんどん事業を進めていった時期もあります。「まず自分が動く」ことから少しずつ「支える人を支える」というスタンスにシフトしていくきっかけは，平成23年3月11日の東日本大震災でした。

震災直後の GW に被災地に入るボランティアに登録したものの，直前に転倒事故に遭い一時期杖歩行となってしまいました。申し訳ない気持で一杯になりながらその旨を事務局に連絡した際，担当者とお話しする中で，「支える人を支える」支援の在り方について示唆を得たことがきっかけです。

こちらの連載においても，「社会で起きている事象　を自分自身から切り離さない」ことの重要性について度々言及させていただいていますが，そのことを自分自身の胸にも改めて刻み込んでいる夏です。

寺田　弘志

8月のはじめに、ホームページの製作会社からカメラマンがやってきた。接骨院のみならず、いろんな治療所・エステサロンなどに撮影に行っているそうだ。今回、製作会社に新しく作ってもらうホームページでは、次のような点に力を入れた。

たとえば、同じ肩こりでも、いろんな施術の仕方があることを知ってもらいたい。そこで、メニューごとに8種類ずつの施術方法の写真を載せることにした。左半身の施術は省略し、主に縮みすぎた筋肉を伸ばす施術に絞った。伸びすぎた筋肉を縮める施術は、ほんの一部にとどめた。それでも施術だけで100カットくらい撮ってもらった。

90分のタイムリミットを30分ぐらいオーバーしてしまった。カメラマンいわく「ずいぶんたくさんの施術の仕方があるんですね」
私「他の接骨院は、施術の仕方は多くないのですか？」
カ「こんなには多くないですね。たいてい、イメージみたいな施術風景を何枚か撮るだけです」
私「そうでしたか。たくさん撮影させて、しかも時間超過してすみません」
カ「いいえ、大丈夫ですよ」

後日、写真が上がってきて、メニューごとに写真を選んで説明文をつけるという作業をした。製作会社への連絡用に、旧ホームページにアルバムをアップした。せっかく作ったので、アルバムはそのまま残すことにした。
もしよろしければ、ご覧ください。
https://teradasekkotuin2.jimdofree.com/

飯田奈美子

今年の夏は暑かった。この暑さは母と娘にはこたえました。保育園は大人で徒歩 5 分くらいのところにあります。しかし、暑さ

や保育園にいきたくない病のため娘が歩くことはなく、抱っこでの登下園をしていました。さすがに母も疲れ、常にイライラしていました。しかし、なんとかこの状況を改善しなければと考え、電動自転車購入しました。なんて楽なんでしょう！娘も自転車に乗れることがうれしく、喜んで保育園に行くようになりました。こんなことならばもっと早くに購入すればよかった。たかが自転車されど自転車。自転車ひとつで互いに機嫌よく朝を過ごせることができ、自転車に感謝です。

山口洋典

1 年前に過ごしていたデンマークでも猛暑と聞き、それが摂氏 20 度を超えた日が続いていることを指しているのだと知ったとき、40 度という数字を目にした日本との違いを改めて痛感しました。そんな酷暑

が続く日本の環境に戻って 5 ヶ月あまり、バタバタした暮らしが続いています。5 月の自転車事故の怪我は落ち着いた 7 月には、現地 1 泊という強行日程で米国・ニューオリンズでの「国際サービスラーニング・地域貢献学会」で発表してきました。ジャズの発祥地として知られるまちの文化的な側面を楽しむことなく、Jazzy なスケジュールを無事に送ることで喜びとしました。

（写真、あまりにピンスポットすぎる照明だったために後に場所が変更になったポスター発表の会場）

関谷　啓子

今年の春にやっと70歳を迎えて待望の「高齢者乗車証」を」得た。

今まで、外出の度にバス・地下鉄をいかに回数少なく利用して用事を終えるか・・と頭を使っていたのでありがたいことこの上ない。

7月のある日、バス停には先客があった。夏というのに分厚い冬のコートを着ている高齢者だ。徘徊かなあ～と思いつつ一緒のバスに乗り込んだ。見ると足元が少しおぼつかない様子。こちらも気になるので見ないようにしながら視界の中においていた。

5つ目くらいで降りるらしい。最前列に腰掛けていた私は彼が降りるのをぼんやり見ていたのだが、降車の時におもむろに取り出したのは、ボロボロの K 銀行の通帳であった。ええっ！！！高齢者乗車証ではない。

運転手さんどうするかな？と一瞬気になったのだが、その対応が素晴らしかったのだ。若い彼は一瞬だけ固まったけれど、次の瞬間にはニッコリ笑って「気をつけて降りてください。ゆっくりとね。ありがとうございました」と声をかけ、本当に老人が降りきって歩道を歩きはじめるまで発車せずに待っていた。

見ていた私は彼の機転の効いた対応に感心すると同時に嬉しくなって、一日幸せな気分だった。

同じ日の夕刊には「市バスの運転手が障害をもった人への対応の悪さ」が記事になっていたので、特に印象深く覚えている。

家の近くにチェーン店のお手頃な理髪店が開店してからもう五年ほどになる。夏休みともなると子供のお客さんでよく繁盛していて活気があるのが見ていて気持ちが良い。

私は、小さい頃は母が、大きくなってからはずっと理髪店で顔剃りをしてもらっている。その日も漫画を読みながら順番待ちをしていた。

人品卑しからぬ紳士の理髪が終わって会計することになったら、こう言った。

「今持ち合わせがない。君、すまんが後でこの住所に取りにきてくれ」、「携帯電話でご自宅に連絡してもってきてもらえませんか？」、「いや、今誰も家にいないのだ。取りにきてくれれば払うから。」

上記のようなやりとりが暫く続いたが、店長が出てきて言う。

「分かりました。お客様が待っておられますので、取りに行けませんが、代金はまた次回の時に一緒で構いませんから」

と言う訳で一件落着？

残された店員は不満げだったが、「またと言ってもすぐに来られる訳じゃなし。いいから早く次のお客さんを・・」と店長に促された次第。

認知症の高齢者か？新手の寸借詐欺かはわからなかったが、私は認知症の方だと思いたい。こんな風に対応してくれる人達のいる街は暮らしやすいなあ～と思った。

高齢者が増えて、みんなそれなりに自由に動く街、動ける街が良い。緩やかに受け入れながら、それぞれができる範囲で負担していければ良いなあ～と思っている。

自分が少しずつ年齢が高くなると、今まで見えなかったことに気付き、知らなかった喜びを知る。悪いことばかりではない。

今、ホスピスにいる同い年の友人が「死を目前にした今だから見える景色があり、聞こえる音がある」と話してくれる。

友人の話は後ほど。

黒田　長宏

8月13日に記す。今日明日は祖母の新盆で、例年よりかなりの来客が見込まれ、大変かも知れない。既に午前中に4人も来客である。ほとんど母親が仕切ってくれていて、私だと自分の家でありながら居心地も悪い感じさえある状況。そういうのもあって、なんとか今の状態は変化させないといけないのだ。言葉を交わせたり、悪い事ばかりではないが、コミュニケーションを気軽に出来ないタイプは周囲の縁者にも複雑な感じを受けてしまったりする。母親はそういう点が大したものである。日頃から付き合いをしてきている。そういう所が母親に似なかった。母親が倒れたら、どうなるのだろう。それもあって、パートナーが現れてくれないかとも思う。本文と重なることしか短信でも今回は書けなかった。記録的な異常な猛暑であるが、今後毎年なんてならないでいただきたい。

鵜野祐介

昨年末に某ミニシアターの会員登録をしたのがきっかけで、月1回のペースで世

界各地が舞台の作品を観るようになりました。

チベット「草原の河」、フィンランド「希望のかなた」、スウェーデン「サーミの血」、ジョージア「花咲くころ」、宮城・岩手・福島「一陽来復」、イングランド「日の名残り」、高知「四万十　いのちの仕舞い」、韓国「タクシー運転手」・・・。

今日観たのは「ラジオ・コバニ」というシリアのドキュメンタリー映画で、命がけの撮影にまず驚嘆しました。スクリーン越しに火薬の匂いや腐臭さえも漂ってくるような、とても正視できない凄惨な場面もありますが、歌や踊りや未来への希望も描かれていました。シリアに平和を！と願わずにいられません。

臼井　正樹

現在、『対人援助と親密圏』ということでまとまった文章として整理することを試みている。この拙文でもよいし、あるいはこれから出るかもしれない本を読んでいただいて、多くの人たちから、介護福祉に関するプラスの価値をどのように言葉にするか、いうことに力をお貸しいただければ幸いである。

山下桂永子

7月末、今年も無事に町家合宿を終えることができました。今年は本当に開催が危ぶまれました。

そう、猛暑です。連日のインフルエンザにかかったような（今年の初めにかかったんですけど）気温。合宿の 1 週間前には町家のご主人から連絡があって、「今年はさすがに暑さがひどく、泊まることをおすすめしない、昨日からのお客さんは、暑さで夜寝れず、今日は他の宿泊施設にうつっていった。慣れている山下さんはともかく、初めてくるこどもさんは体調がねえ、、、」と言われていました。

他のスタッフとも話し合い、悩みに悩んでいたところに台風襲来。予測不能の動きを見せた台風のおかげなのか少し気温が下がり、ぎりぎり二日前に町家合宿開催を決めました。そして実際の台風による影響は、町家の看板が落ちたり、夜中の風の音に、参加者たちは眠れないなどはあったものの、暑さによる影響などはほとんど（まあ例年通り 30 度はあったんですがもう感覚麻痺しちゃってました）なく、町家にエアコンがなくても 1 人 1 台の扇風機で十分快眠、行きたいところに行って見たいものは見てといつものように京都市内を縦横無尽に動き回りました。

前後どちらに 1 週間日程がずれていても、おそらく中止だったと思うので、奇跡的に無事に行えたことは、本当にホッとしました。

来年また開催の時期にヒヤヒヤしてしまうのだと思いますが、無茶はしないで、冷静に頑張ります。いつも応援してくださっているみなさまありがとうございます。これからも応援（できれば陰ながらでなく、オープンに）よろしくお願いします。

尾上明代

前回、太極拳を始めたことを書いた気がするが、その時間に毎週の仕事が入り、もう行かれなくなってしまった。でも、身体を動かす時間は絶対に確保しようといろいろ算段し、結局、振付家の香瑠鼓さんのダンス・ワークショップに通い始めた。

ダンスそのものも好きだが、セリフや歌の即興などもあるので、私の仕事ともつながりがある。何より自分の身体を感じながらのびのびと呼吸ができるので嬉しい。

いろいろなメニューの中で特徴あるプログラムとして、「バリアフリー・ワークショップ」がある。障害がある人・ない人が一緒にダンスの表現空間を楽しむという主旨ですごく良いコンセプトだと思う。一つだけ残念なのは、（少なくとも私が参加したときは）いわゆる健常者は、（私以外では）アシスタントのダンサーたちと、障害をもつ参加者の親御さんたちだけだったことだ。私がほんとの「逆」バリアフリーになれたらいいな、と思う。

WS の最後に皆で歌いながら踊る「世界中が踊る日まで」というピースは幸せな気もちになれて大好きだ。今後も自分自身のメンテナンスのために続けたいと思う！

小池英梨子

ノラ猫生活を続けるために個人事業で開業しました！

屋号は**「猫から目線。」**職種はアシスト業（そんな職種があるのかは不明だが申請に通ったのでいいのかな）。

後ろの方からサポートするよ、というより何かを達成するためのアシストパスをしっかり出したいという思いを込めてみました。

仕事内容は大きく分けて2つ。1つ目が「単発で猫の手も借りたい時」簡単に言えば猫に特化した便利屋です。

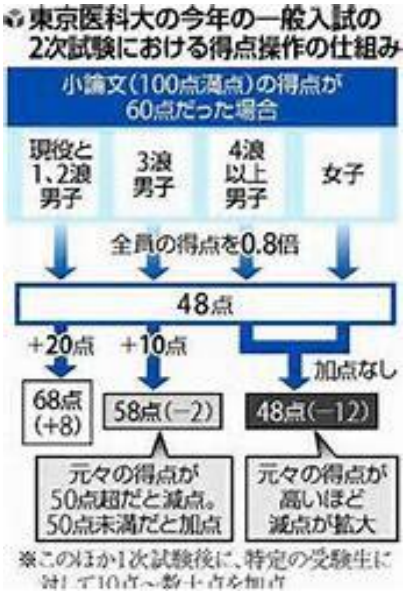
依頼を受ける条件は、遠回りにでも猫（または動物）にメリットがあると言えること。2つ目は「がっつり猫の手を借りるプラン」NPO や小さな動物病院などの運営サポートです。気になる方はご連絡ください(^^)/

松村奈奈子

今年のお盆のふたつのお食事会でのお話。

大学時代の後輩が国境なき医師団で大活躍。帰国するたびに我々夫婦とお疲れさまのお食事会をします。彼女から世界の国々の不思議なお土産をもらったり、現地のおもしろエピソードを聞くのがいつも楽しみです。

しかし、今回の夏季休暇で帰国した彼女が食事会で力説したのは「東京医大」の女子差別問題。「聞いてくださいよ！」「やっぱり私の受験でもあったと思う」「同級生百人に女子が十数人だけってずっとおかしいと思ってたんです」などなど。



そして、8月16日の我が家での恒例大文

字パーティでのこと。前の職場の後輩、産休明け女医さんが力説「受験で女子差別ってずっとあったし、今さらって感じですよね！」「でも、やっぱり子どもがいる今は当直できないし、迷惑かけているし・・・」などなど。

そして私も力説。20年以上前、予備校の受験指導で「医学部受験の理科の選択は、物理が有利。女子が多く選択する生物は大学側が点数調整をして女子の合格数を減らす」なーんて言われて、苦手な物理をしぶしぶ頑張りました。

もちろん、我々はみな「東京医大」卒ではないんですよ。これまで話題に上る事がなかったけど、やっぱりみんなずっと思ってたのか・・・

就職での女性差別はずっと言われてるけど、大学受験で女子差別ってね。みーんなおかしいと思ってたけど、入試の最終合否判定はブラックボックスなんでどうしようもなかったし。でも「やっぱりおかしいよね！」って思ってたんだ・・・

「やっぱり」という言葉をいっぱい聞いたお盆休みでした。

奥野景子

学生時代を含めて実家を出てもう10年以上が経つ。大阪、静岡、三重、京都、東京と色々な土地で物件を借りてきたが、どこの土地でも物件がらみの不都合に遭遇したり、嫌な思い出が残っていたりする。

学生時代のオートロックがないアパートでは知らない男の人に玄関前までついてこられた。古い職員寮では大量のゴキ〇リがいた。綺麗なオートロック付きのマンションに住んだけど、隣人は週に数回大声で大喧嘩、上階の人は深夜までゲームとアイドルの曲を大音量で楽しんでいた。院生時代、隣人のベランダはゴミ袋であふれていた。引越し先では、早々にトイレのドアノブが外れ、玄関の鍵が閉まらなくなり、真夏にエアコンが壊れた。東京では退去時のトラブルから、引越し先で機能しない管理会社と大家さんに振り回された。

でも、初めての一人暮らしでは、友達とピザパーティーデビューを果たしたし、古い職員寮では建物内でクワガタ、蛍を見るという貴重な経験もした（とても田舎だった）。上階の人のおかげで、AKB48のデビュー曲をテレビで知る前に歌詞も含めて知れていたし、院生時代の家では友だちと修論をした。エアコンが壊れた時は、働く電気屋さんの姿から担当していた人のことを思い出し、シェアハウスでは今まで知らなかった世界を垣間見ることができた。

今の物件での生活は、まだ落ち着かない。ただ、これから良いこともあるのだろうと思っている。でも、毎回物件がらみの不都合や嫌な思い出に上書きされてしまう部分があるのも事実だ。別の箱に保存すれば良いのに上書き保存されてしまい、濃淡ができてしまうことが歯がゆい。だけど、それも仕方ないのか…と思ったり、思わなかったりもする。

柳　たかを

日航 123 便墜落事故は本当に事故なのか？

今、関心がある話題が一つある。33 年前に起きた JAL123 便墜落事故だ。1985 年 8 月 12 日のお盆 休み、夕闇近い東京羽田から乗員乗客 524 人を乗せ大阪伊丹空港を目指したボーイング 747・ジャ ンボジェット機が離陸後 20 分過ぎに、相模湾上空で爆発音と同時に機体のコントロールを失い、 そのあと約 30 分間不安定なフラフラ飛行を続け、最後に岐阜県と長野県の県境の御巣鷹山に墜落、 墜落から 16 時間が経ってようやく 4 人の女性が奇跡的に救助された。この墜落事件のニュースは忘 れられない。

1960 年代のわが家の白黒テレビのブラウン管で大ヒット曲「上を向いて歩こう」をトレードマークのニコニコ顔で軽快に歌っていたアイドル歌手・坂本九（九チャン）も乗客の一人だっ たからだ。 公式な事故原因は、このジャンボ機が過去に起こした尻もち事故で後部圧力隔壁に損傷を受けボーイング社が修理したが、一部修理ミスを残したまま運用を続けるうちに劣化が進み、ついに事故 当日に破壊が起こり、機内の与圧エアーが尾翼内に一気に流れ込み、尾翼の 2/3 を吹き飛ばしてし まったことだという。同時に尾翼部に集中している油圧系統が全て破壊され、油圧で補助翼をコ ントールをすることも出来なくなった。コクピットの機長・副操縦士・機関士の 3 人は、残された 四つのエンジン推力のコントロールでフラフラ上下左右に蛇行しながらも何とか羽田空港に戻ろ うと格闘した。 富士山を機体の右側に見ながら大きく右旋回し北上、山梨県内で一度 360 度回転した後、群馬県 と長野県に挟まれる御巣鷹山方面に向かいそこで墜落している。

当時の写真週刊誌「フォーカス」で見た凄惨な墜落現場の写真、奇跡的に救出された川上慶子さ ん（当時 12 歳）が、自衛隊員に抱きかかえられホバリングするヘリに引き上げられる写真は象徴的 な映像だ。 ところがその後、この墜落事故の本当の原因が意図的に隠ぺいされていたかのような記事を目に すことが多い。当時とちがい近年のインターネットの普及で遺体収容に直接関わった歯科医師に 取材した記事や墜落直後に地元の若者たちがバイクで現場の山に駆けつけ、数時間後に墜落地点 にたどり着いた時に見た話など真実と思える新たな情報を見聞きできるようになった。

事故は隔壁の修理ミスが原因で起きたとして解決済みで、インターネットでつぶやかれる数々の 疑問や墜落原因の再調査など今さら問題にもならないらしい。 これは、2017 年 2 月から報道が過熱した「森友学園」「加計学園」問題も似た構図で、国会を巻 き込んだ大騒ぎも責任の所在や真実はウヤムヤなまま、「国民はすぐ忘れるさ」と決めつけてい るかのような政権のごう慢さによく似ている。

JAL123 便で同僚スチュワーデスをなくし、墜落原因を自分で独自に調べていくうちに、これは隔 壁破壊が墜落の原因ではないとの確信に至った元日本航空客室乗務員でノンフィクション作家・ 青山透子さん。 彼女が河出書房新社から今年出された「日航 123 便 墜落の新事実」を近く手に入れ、さらに詳細 を知りたいと思っている。

齋藤　清二

ここ 3 年半にわたって連載を続けてきた「あ！萌え」の構造ですが、個人的な事情で、今回は休載させていただくことに

なりました。楽しみにしていてくださった方がおられたら、深くお詫び申し上げます。

近況報告ですが、つい先日立命館大学大阪いばらきキャンパス（OIC）で行われた、日本パーソナリティ心理学会（通称パー心）の自主シンポジウム「オタクのパーソナリティーキャラクターとの関連に注目して－」に参加しました。この内容はもちろん本連載の関心事と直接的な関連をもっているのですが、何よりも最近、自分の関心事項しか情報が入ってこない狭い世界に閉じこもっていた感じなので、「オタク」「腐女子」「コスプレ」といったこの界隈での最新の情報を知るよい機会となりました。シンポの会場では各自コスプレ衣装で発表しようということになり、私はもちろんそんなことはやったことがないので躊躇したのですが、周囲の先生方からの協力もあり、以下の写真のようなカオスな空間が会場に出現しました。

石田佳子

拙稿『海の向こうにでて見れば』は、今回で終了させていただきます。当初は異文化圏での生活が珍しく、驚きに溢れていたため、日本の社会や日本人を少し異なる角度から眺めることが出来るのではないか？との期待を抱いて寄稿し始めました。しかし最近は、マレーシアでの暮らしに馴染んで違和感なく過ごしているため、日本が遠のき、あまり鮮明に見えなくなって来ました。また、私の直感が〈そろそろ「対人援助」という馴染み深い場所を離れて、別の課題にも挑戦してみたら？〉と囁いているように感じています。

この約 3 年間、私にとって3ヶ月に一度巡って来るこのマガジンの〆切は、惰性に流れがちな生活の中で自分を振り返り物事を考える貴重な機会になっていました。このような機会を与えて下さいました編集局の皆様と、拙文をお読みくださいました方々に、心よりお礼を申し上げます。

しすてむ♪きよたけ

1つの分野だけでものごとを見ない、見られないのがぼくの特性です。そこで、今回違う動きを取り入れてみました。

大学院に入学した 2012 年から、東日本大震災復興支援プロジェクトに参画してきたのですが、今年はプロジェクトとしてでなく、青森と岩手に個人的に行ってきました。8 月末でした。

きっと、これまでプロジェクトで得たことは何であるのかを、自分で見つけ、具体的に実践に反映させたいと思ったのだと思います。

ぼくは、何か1つの土台があって、仕事をしているのではなく、むしろ、動きながら作っているので必要だと思ったのでしょう。

答えは出ていませんが、もう少し動き続け、社会にいる自分の位置を見たいと思っています。

今回の本編では、僕の経験と頭の中。そして、そこから見えてくる社会を書いてみました。毎回、そんなつもりなんですけど、どうもうまく書けない。今回も、そんな感じに仕上がっています。ビジネスになるためにはどうしたらいいのか。そして、日常生活に起きた「老害」（嫌いなワードだから、触れてみました）について綴っています。

小林茂

今回の短信は、自戒のひと言につきます！

6月、7月は、月の2／3ほど自宅に居ることができない生活でした。8月は、1／2強ほど自宅に居ることができず、自分でも、どうしてこんなに予定が入ってしまったのだろうと呆然としています。職務の立場上、引き受けなければならないものが多く、自分本位になれないことがありました。

そんななか、職場の健診もあり、右目の視力の低下（たぶん、前日、夜中に仕事から戻り、翌朝4時に起きて車で移動して帯広市の病院に健診に受けに行った影響もあると思います。）や、食道にポリープが見つかったり、疲労の蓄積だけではない目に見える影響をつきつけられました。

周りの人は、「いつまでも若くはないから…」というけれど、いやはや身体と生活を労わらなければならない現実を知ると考えなければならないと思わされます。

（9月9日に公認心理師の第1回目の試験があります。なんか準備ができていないまま突入しそうです。厳しい～。）

＜温泉紹介＞

☆馬追温泉

場所：〒069-1311　夕張郡長沼町字フシコ番外地

TEL0123－88―3737

明治中期の創業で、約 1 世紀にわたって親しまれている秘湯。無色透明のお湯は慢性関節リウマチなどに効果があり、飲用もできます。長沼市街地からバスで15分。馬追遊歩道沿いに四季折々の自然が楽しめます。

内湯一つだけなので、長居は難しいかもしれません。

泉質：単純硫黄冷鉱泉。源泉加温かけ流し。飲用可能。

内湯1か所のみ。うっすらと硫黄の香りがする無色透明のお湯。

営業時間、料金など：年中無休。午前10時～午後9時。

日帰り入浴料金大人500円

水野スウ

2015 年の夏とよく似た感覚を、この夏ふたたび味わっています。3 年前に出した「わたしとあなたの・けんぽう BOOK」の続編を、安倍政権の政治を巡る動きと連動しながら、同時進行形で書いていたからです。

思い立ったのは、春は名のみのまだ雪深いころ。その時点では、9条に自衛隊明

記の案と国民投票について、簡単に説明したミニパンフをつくるつもりでした。でもその後、モリカケ疑惑・自衛隊日報隠し・財務官僚セクハラ・厚労省ずさんデータなどなど、現政権から活火山のごとく問題噴出。これじゃさすがに改憲まっしぐら、ってわけにいかない、という状況が生まれて、その分、私には考える時間が与えられたな、と思いました。

それから半年余り、くんずねんず（四苦八苦、の金沢弁）しながら原稿を書いてきて、今やっと大詰めの作業中です。「けんぽう BOOK」を出したあと、憲法のおはなし出前に行った先々で、「憲法って、9条だけじゃなかったんですねぇ、、、」というたくさんの声を聴いたことは、今回の本づくりの大きな支えでした。

それと同時に、これまであいまいな距離をとってきた9条とも、私なりに真剣に向きあいました。憲法に自衛隊を書き込む、ということにどんな意味があるのか、どんな変化が起きてくるのか、多くの人に自分ごととして考えてほしくて、そんな問題提起もしている本です。憲法という固そうなジャンルの本でありながら、憲法でつむぐ物語のようにも読める、ちょっと不思議な本になりそうですよ。

中島弘美

『カウンセリングのお作法第16回』は「リフレクティングチーム」について取り上げました。これは、対人援助学会第 11 回研究会において参加者の皆さんに体験していただいたものです。

ほぼ初対面の人が 5 名ずつのグループを作り、クライエント役とカウンセラー役を順番にする多人数でのカウンセリングをしました。そのエクササイズ資料を載せています。

今から 18 年前の 2000 年夏に、シカゴとヒューストンを訪れました。そこで、ソリューションフォーカストアプローチや、コラボレイティヴアプローチの実践に触れる貴重な機会がありました。私にもリフレクティングチームに入ってほしい、とにかく、さまざまな意見がクライエントにとって必要だというのです。もっと英語を勉強しておくべきだったと反省をしたことはいうまでもありませんが、その経験をもとに、このエクササイズの手順を作りました。

現在、社会福祉の現任研修にも取り入れ、この方法を体験してもらっています。最近、企業でもこの方法が注目されていることを知りました。これらの考え方が、援助現場で働く人たちに少しでも役立てばうれしいです。 以上

藤信子

7 月の終わりから 8 月初旬、スウェーデンのマルメに行った。5 日間の学会が終わり、翌日はゆっくりしようと隣の町のルンドに出かけた。スウェーデンで 2 番目に古い大聖堂があり、古くからの大学があり、中世の街並みが残った緑の多いきれいな街だった。

野外博物館（広い敷地にいろんな時代のいろんな建物～農家とか司教館とか裕福な人の屋敷とか～がある）は広いので全部は回り切れなかったが、馬小屋を民芸品の資料館にした建物の一部に(私にしたら)突然に不思議の国のアリスに出てくるキャラクターがあったり、ぬいぐるみのようなものがあり、子どもが遊んでいた。

しばらく庭を歩いていると、男の子がお母さんを相手に木の剣で、チャンバラして遊んでいた。その剣はそばのケースにいくつか入っているようだった。博物館に馴染むように備えてあるのかなと、分からないなりに考えた。

そういえば、朝食会場に行く途中のスペースに、子どものテントや遊ぶスペースがあった。ホテルの中の子どものためのスペースは、日本ではあまり見かけないと思う。いろんな場所で子供が大人と一緒にいることが出来て楽しめるようにしているのかなとか、福祉国家というのはやはりゆったりしているのかなとか、根拠なく考えた。日本で少子化を心配している人は、そういうところを見て欲しいと思った。

千葉晃央

実家倉庫にずっとあった8ミリフィルム。映写機がないから見ることができなくなって約 40 年？フィルムはずっと保管されていた。調べると、富士フィルムに送るとDVDにして、返ってくるらしい。早速、利用してみた。送ったのは 7 本。昭和 47（1972）年の秋田でのお宮参り。年不詳 4 月 7 日撮影の東京多摩湖、井の頭公園。昭和 49（1974）年 4 月 27、28、29 日撮影　神奈川県伊豆箱根。昭和 51（1976）年撮影七五三。昭和 52（1977）年 10 月 23 日宮城県広瀬川いも煮会。昭和 49（1974）年 4 月撮影、東京石神井公園お花見。撮影日不詳　箱根彫刻の森。以上 7 本立てである。画像をクリアに処理もした上での仕上がりときき、期待は高まった。ネットで申し込み、段ボールが届き、そこに入れて出荷。ちょうど 1 週間で仕上がってきた。代引きで料金支払いだった。

どきどきしながらDVDを再生した。亡くなった祖父、祖母たち、そして母も、父もとにかく若い！生き生きしている！みなぎっている！晩年、20 年半身麻痺で過ごした祖父もしっかりと歩いている！当時の街並み、富士山、高い建物がない自然豊かな伊豆の景色！素晴らしい。実家の以前の姿、更にその前の姿もあり、当時の町内の景色も確かに見覚えがある

自分の赤ちゃんから幼稚園までの姿も新鮮。当時来ていた服のデザイン、その肌触りもなんとなく思い出したりするから不思議。音がないのもよくて、何度も観てしまった。一族は代々受け継がれていることも実感。実家に送ろう。速達で！と思い、さっき京都駅の郵便局に行ってきたところの 23 時。

中村正

私の社会病理学の先生である佐々木嬉代三先生が亡くなった。立命館大学の副総長を務めた後、2005 年に退職され、その後、名誉教授となり特任教授を 5 年務めて 70 歳を迎えて完全に退職された。

先生が副総長の時に対人援助学会に関係の深い立命館大学大学院応用人間科学研究科が開設されている。その後は研究会などを続けられ、大学にも来られ、学会にもよく参加されていた。もうすぐ 79 歳の誕生日を迎える直前の 8 月 30 日のことである。

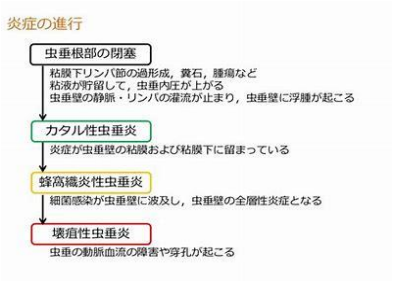
大学院生の頃からお世話になったのだから 35 年程の時が経つ。対人援助学会の発起人にもなってもらった。その時先生は日本社会病理学会の会長をされていたからでもある。今年の 5 月中頃に脳梗塞を患いリハビリに取りかかろうということだったがその前からの肺気腫が憎悪し、帰らぬ人となった。

この夏、8 月 24 日にお見舞いした時の握手の感触と交わした言葉が最後となった。その時はすでに起き上がることもできずにベッドの傍らで話ができた程度だった。それでも社会病理学を愛しておられた先生は、「おい中村、今年の学会はどこだ？」というので、「関学で 9 月 29 日からですよ。」と答えたら、「そうか、近いところやな。じゃあ今年も行くわ！」といつもの調子で言われた。先生には今年の学会誌の巻頭言をお願いしていた。脳梗塞で入院された後にこの原稿が未完であることを気にしていたので、口述筆記をしようと考えていた。その約束が果たせないままとなった。原稿の概要はほぼ完成していたが言語の回復が十分でなくリハビリを待って行おうと考えていた。先生が最後に何を書こうとしていたのか、家族に許可をもらって準備中のものだった書きかけの原稿をいただき完成させたいと思う。先生の研究意欲の旺盛さは衰えていなかった。社会病理学が本当に好きで、生涯かけて追求して来られた先生の遺志を継いでいく責任を感じた次第である。

袴田　洋子

この夏、人生、初めての全身麻酔と緊急手術を受けました。急性虫垂炎で。いわゆる「盲腸」ってやつです。

8 月 15 日（水）の朝、みぞおちが痛くて目が覚めて。胃薬飲んでも、全く改善せず、「これは、ちょっとやばい」と思いました。救急車呼ぼうか、悩みましたが、救急車呼ぶと、受診歴が無い場合、どこの病院に搬送されるかわからないので、仕方なく、夫の運転で最寄りの総合病院に行きまして。一般外来だから、診察まで、順番を待つわ待つわ待つわ、レントゲン待つわ待つわ待つわ、造影 CT 検査待つわ待つわ待つわ。



途中、トイレで嘔吐したり、ベンチで唸りながら、初診受付してから、6時間後の 16 時 30 分、ようやく「急性虫垂炎疑い」で、外来からそのままオペ室へ。

オペ前、お医者さんも看護師さんも「オペすれば、楽になるから」と言ってくれて、その言葉を信じて、全身麻酔で痛みから解放、、、されるはずが。腹、切った後も、痛みはあるよ、と誰も教えてくれず。オペ後の ICU での一晩は、ハラは痛いし、コシは痛いし、管だらけで引っかかるし、眠って意識を落としたいのに、あちこち痛くて眠れない。私は、重症の腹膜炎でもう死ぬんだ、と思っていました。

オペ後の患者さんは、こんなに辛くて苦しい思いをしていることを初めて理解しました。ごめんなさい。それと。「盲腸（急性虫垂炎）」って、すごい痛いです。あんなに痛いのに、なんで、あそこまで軽んじられるのか、納得いきませんが、そりゃ、治るからですよね。自分は、今回、蜂窩織炎性虫垂炎ってことで、軽度・中度・重度の虫垂炎の中の、「中」でした。腹腔鏡手術ゆえ、術後は短期間で済み、19 日（日）に退院しました。23 日（木）には、良・普通便も出て、完全復活しました。

団遊

兼業、副業、複業、ダブルワーク。呼び方は様々ですが、最近それらを解禁する会社が増えました。ぼくが 10 年ほど前に同様の方針を打ち出し、実践し始めた頃は、ほとんどの人が懐疑的でした。

会社は営利を追求する集団としてだけでは、機能しなくなってきています。作れば売れた時代においては、営利の追求が社員の暮らしの豊かさに直結していました。年功賃金が担保され、我慢はいつか報われる仕組みでした。しかしこれからは、そのようなことは期待できません。

一方で時代がどう変わっても、社員が暮らしの豊かさを望むことは変わりません。とすれば、ピボットすべきは「営利の追求」の方であり、これを「社員の成長支援」に書き換える必要に迫られていると感じます。さもなければ、優秀な社員から会社を去り、会社が持続するための血肉である営利すら担保できなくなってしまうでしょう。

ところが、見渡していると「社員の成長支援」がままなりません。「社員の成長」とは何かを定義できている会社も多くないようです。相変わらず売り上げマシーンに仕立て上げることを「成長支援」だと考えている会社もあるようです。このような時代錯誤なマネジメントがまかり通るのは、現在のマネジメント層の多くが昭和的根性論で育てられてきたためです。それではいけないことは分かる。でも、どう振る舞えばいいのかの答えが見当たらない。気付いたら「今時の若者論」を同僚としてしまっている。そんな風になりたいとは 1 ミリも思っていなかったのに……。

ぼくの目にはそんな風に見える現況において、次号から、人材マネジメントをテーマにした新連載を始めることにしました。「新卒の就職活動」にフォーカスして連載を続けてきた「街場の就活論」は終了します。10 年以内には完全に崩壊するであろう新卒一括採用も含めて、もう少し大きな視点でぼくなりに経験を積み重ねてきた「人材マネジメントの肝要」を書いていこうと思います。

大石仁美

母の死に寄せて思うこと

母が 92 歳で亡くなり、四十九日も終えました。ああ、一つの時代が終わったなぁというのが実感で、淋しいとか、悲しいというよりなんだかほっとしたのが正直なところです。

母は、5番目に生まれた初めての女の

子で、（4番目に生まれた待望の女の子が、生後まもなく死んでしまったため）父親にそれはそれは可愛がられて育ったそうです。お茶、お花、和裁、洋裁、編み物など一通りなんでもこなす人だったので、家族は皆その恩恵を受けましたが、プライバシーという概念は彼女の脳内にはなかったので、自分の思う通りに事が運ばないと、つかつかと人の心に踏み入って、土足で壊してしまったとしても、悪いなどという感情が湧くことはなく、自分がしてあげていることが分からないあなた方が悪いのだと結論付けて、謝るということはありませんでした。

当然夫婦仲は悪く、母の感情を爆発させた暴言とそれによる父のすねた行動を身近に見ながら、「まったく反対のことをしているなぁ。なんで母は気づかないんだろう。そうすれば、

父は素直に母に感謝するのになあ、」と悲しく二人を見つめていた子ども時代を思い出します。

母は京都、奈良にきて博物館等を巡るのが好きでした。ある時、熱心に古文書を眺めている母に感心して、「こんな難しいことよくわかるのね」と言いましたら「わからん！」と母。えっ？と一瞬その答えにびっくりしていると「幼いころより父親に連れられてよく来たのよ。」と懐かしそうに眺めているのです。

その時私は理解したのです。母がファザコンだったのだと。父とうまくいかない理由がそこにあったのだと。

母の父つまり私の祖父は、仏師で、豪快な人でした。人の面倒見がよく、情の熱い人だったので、いつも家にはひとの出入りが絶えませんでした。母はそんな父親から、誰よりもかわいがられている自分を自覚し誇りに思っていたようです。男性の基準を自分の父親におき、父親のように尊敬できる人、父親のように、自分を愛してくれる人を伴侶に求めていたのです。

その意味で夫である私の父は、物足りない人でした。彼女の求めるものと現実との落差に怒りをぶつけていたのだとやっと理解出来ました。

可哀そうなのは私の父でした。我儘で言いたい放題の妻を、まるごと包み込んで愛せるほど度量の大きい人ではありませんでした。家に帰るとストレスで激しいぜんそく発作をおこし、入退院を繰り返す父でした。晩年になって、家ではいっさい食事をとらず、旧知の女性宅で食事を作ってもらい、就寝のためだけに帰宅するという生活をしていると本人から聞きました。家で食事をしないのは母への抵抗で、もはや意地です。

「80歳を過ぎると、毎日車を運転して食事に通うのはやっぱりしんどい。」

「家で食べようよ。頼んであげるから」と言った時の父の悲しそうな顔を見たとき「いいじゃない、しんどいのなら無理に帰ってこなくても。その家に居たら。のこりの人生、好きなように生きても罰あたらないよ。」私のこの言葉に驚きの表情をした父でしたが、本当にこの日から家に帰ってこなくなりました。母の激怒は凄まじく、外に女がいたなんて！どこのどんな女だ、と詮索しては父を罵倒し毎日のように怒りを私にぶつけてきましたが、私は知らないふりを通しました。父は7年前に88歳で、その人の家で亡くなりましたが、このころから、母の毒舌は影をひそめ、認知症が急速に進み始めました。夫が亡くなった後、老後は好きなことをして人生を楽しむという女性は多いようですが、存命中も亡くなってからも、人生を楽しむという選択肢を彼女は選び損ねたようでした。

人と人を繋ぐのは、思いやりの心です。思いやりのある優しい言葉が心を動かすのです。

言葉は命を吹き込むことも奪うことも出来る。言葉は生き物。そのことになぜ気づかなかったのか。

自分が誰かもわからず、息子や娘の顔もわからず、グループホームの職員に看取られて亡くなった母ですが、生き方を変えるターニングポイントはいくつもあったのになあと、あとからしみじみ思う私です。

村本邦子

今年からドクターの院生たちを受け持つことになったので、私も真面目に研究をしようと決意し、この夏はじっくり勉強することにした。学生に戻った気分で基本的な研究法の文献を読みながら、7 年間もためこんでしまった大量のデータからいくつかの切り口でピックアップし、整理する作業をしていた。

まだ途中であるが、これらをまとめて、これから少しずつ発信していきたいと思っている。「被災と復興の証人になる」とプロジェクトを立ち上げ、伝えるべきたくさんのことを頂いてきたのに、動き回るばかりで、きちんと表現することができていない怠慢を反省している。

時々、どう考えるべきか頭を抱え込んでしまうこともあるのだけど、基本的にわくわくして、とても楽しい作業だ。しかしいかんせん、この後のスケジュールもすでに満杯状態･･･。

國友万裕

イオンシネマ桂川には滅多に行きません。僕の住んでいるところからは行きづらいので他の映画館を利用しています。ところが、8 月の中旬、例の超話題作『カメラを止めるな』がここでしかやっていなくて、行くことになったのでした。ネットでチケットを予約していて驚いたのは、イオンシネマは 55 歳からシニア割引が適用というのです！　ということは、あと半年で俺はシニア扱い！！　1100 円しか払わなくて良いということになります。嬉しいような、悲しいような、複雑な気分でした。

50 を過ぎると残された時間をしみじみ考えるようになります。50 代で死ぬ人はそうそういないけど、60 代で亡くなる人はたくさんいる。うちの父も 65 だったし、埼玉の義理の叔父は 68 でした。その一方で 90 過ぎて元気に生きている義理の叔父もい

るので、まだ余生がどれくらい残されているのかはわかりません。だけど、死ぬ確率は年をとるに連れて、少しずつ高まって行くことは確かなのでしょう。

年をとると時間の経つのも加速度的に速くなって行きます。あと 10 年、20 年なんてあっという間に過ぎるでしょうね。大事に時間を過ごさなくてはなりません。ところが、この頃、ワクワクすることというのがないのです。楽しいことがあっても昔ほどワクワクしなくなって来ています。これは年のせいなのでしょう。もう一度ワクワクしたいなあー

これからは若い友人をたくさん作ろうと思っています。スポーツもやってみたい。ファッションもちょっとマッチョに笑。

年を取っても、できる限り、学生がたくさん下宿している界隈で暮らして、若い気分のまま一生を終えたいです。ナイーブな、万年お坊ちゃんのおじいさんになりたい。それがとりあえず、これからの夢です。

北村真也

認定フリースクール　学びの森　代表

http://manabinomori.co.jp

2000 年より、京都府亀岡市で学習者の変容をめざした能動的な学び場「学びの森」を運営しています。不登校の生徒たちが学ぶ「フリースクール」と「ハイスクール」、ひきこもり経験のある若者たちが学ぶ「ユーススクール」、発達障害を持つ生徒たちが学ぶ「放課後等デイサービス」、学校に通う生徒たちが学ぶ「探究スクール」の 5 つのスクールを展開中。今年度から京都府教職員研修を担当。亀岡市教育委員。

古川秀明

歌声喫茶が見直されています。高齢者人口が増えているのもありますが、みんなで歌う楽しさが求められているのかもしれません。今の高齢者の方が歌声喫茶で歌う歌が、私の好きな歌と一致してきています。フォークソング、ニューミュージック、グループサウンズなんかが主流となり、昔の主流だった童謡、唱歌、軍歌が少なくなっています。

でもよく考えたら、昔の歌声喫茶で歌われていたのは当時の流行歌だったのだから、歌声喫茶のあり方も変わって当たり前かもしれません。

西川友理

京都西山短期大学で保育士養成をしています。

2 年前の秋に初めて浦河べてるの家の「当事者研究」を実際に体験し、大きなショックを受けました。「これ私もやりたい！ていうか、私に要るわ、これ！」と考えてから、様々に一緒に考えてくださる方の力をお借りして、今年の 1 月から「支援者の当事者研究会 at Osaka」という会を 2 カ月に一度のペースで実施しています。この会に対しては、協力者も賛同者も反対者もいて、あらゆる人の思いが今の場を作っていると思います。

この場のあり方を、試行錯誤しつづけています、失敗も成功もうっかりミスも神様の采配もあり、努力と話し合いと冗談と放り投げで対応しています。なかなかこれでよしと落ち着く間がありません。

ただ一つ、この会の準備と運営をしてきたことで、大きな変化を感じています。それは、参加者にとって安全と安心さえ確保できていれば、「何とかしなきゃ！」と思い過ぎない方がいい、ということです。もちろん「こうしたい」という思いはありますが、軸はそこにあると認識しつつも、緩やかにあるという中庸に耐える感じ。なんというか心のインナーマッスルをおだやかに鍛えられている感じです。

10 月には名古屋で、当事者研究全国交流集会があります。当日の分科会には「支援者の当事者研究」とか「子どもと当事者研究（教育者・福祉の現場で）」、さらには「家族のかたち」などという文字が…。うーん、どれに参加するか、めっちゃ迷う！

中村周平

今回、原稿を挙げることが出来ませんでした。申し訳ありません。

近況報告としましては、熱中症に二度も見舞われるアクシデントがありました。今夏の暑さは。本当に異常なものだと身を持って体感した次第です。

また、これは嬉しい報告ですが、街中で応用人間科学研究科の院生の方から声を掛けて頂くことがありました。なんと、ノーサイドを読んでくださったとのこと。

自分の伝えたいことが、誰かに伝わっていることを実感できるのは本当に嬉しいことです。院生さん、本当にありがとうございました。

坂口伊都

19 歳の息子が一人暮らしを始めました。通学するのにドアツードアで 1 時間半ぐらいかかっていたので、通えない距離でもなかったのですが、どれぐらいの家賃なのかを先に父母で不動産会社に行って確認し、これなら何とかなりそうとなりました。息子に3件内見してもらい、息子自身が決めました。親の一押し物件とは違いましたが、なかなかいい物件を選んだと思います。

息子を見ていると体験して学び、吸収していく子なのだなと感じています。初めてのバイトも一所懸命していますが、これといった目的もなく、地震で電車が全て運休している時も片道1時間かけて自転車で通っていました。妹に「お兄ちゃん馬鹿なの？」と言われていましたが、まぁ働き続けることは力なので、自分のお金で生活をすることを体験してもらいましょう。本人も一人暮らしをしたいと思っていた時期で、背中を押す形になりました。動物でも人でも、本能的に巣立ちの時というものがあるのかなと感じました。

息子は、引越の前日になってもなかなか荷造りしなかったり、引っ越したら冷蔵庫に自動製氷機がないと驚いたり、味噌汁を作ろうと意気込んだら味噌を買い忘れたりして、いろいろなため息が出ます。100 円ショップに行って、玄関マットや棒のおしゃれな芳香剤を買ったりして、意外な

一面を見せています。この先、いろいろ失敗もあるでしょうけど、面白い人生を歩んでくれそうな予感がして、楽しみです（笑）

河岸由里子（臨床心理士）

【あ～受験生】

もうすぐ高齢者の仲間入りかと思う歳になって、受験生になるとは思ってもいなかった。脳は確実に老化していて、さっき覚えたこともすぐに忘れるし、今やろうとしたことも「何しようとしたんだっけ？」と分からなくなったりするような状況なのに、新しい知識、法律等を覚えるのは至難の業。仕事を断るなど考えられないし、次々と仕事が入る中で、勉強する時間を取るのも難しい。友人はスマホに入力したものを読み上げてくれるアプリを利用して、運転中も学んでいるという。色々な人が、「このテキストが良い」とか「あの問題集が親切だ」とか言っている。誰が作ったのか予想問題のプリントが回ってきたりもする。みんながみんな勉強していると、置いて行かれている気になって少し焦り、その次には、「まあ落ちてもいいか」と諦めの気持ちになる。10 万人も受けるという公認心理師試験。臨床心理士資格は一体何だったのか？現任者講習を受け、沢山の出費もして・・・。あ～あ。やってらんない！！

岡崎正明

父が昨年頃から病をえた。すぐに死に至るような病気ではないが、難病である。ときどき目が見えにくくなったり、物が飲み込みにくかったりする。疲れやすくもなったようだ。古希を過ぎたくらいだから、無理がきかなくなってくるのはある程度当然なのだろうが、本人は相変わらず忙しく働きたいらしく、困ることも多いようだ。遠くまで車を運転したりするため、心配して母も私たち子どもも注意するが、当然のことながら素直に聞く訳がない。

先日お盆休みでのんびりしていたら、「運転手をしてくれ」というので、たまの親孝行半分と、地域の交通安全への貢献半分で引き受けた。近くには住んでいるが父子二人で行動することなど滅多にないことだ。隣で道案内をする父は、いつも通り堂々とエラそうで、人にものを頼む態度ではない。亡くなった伯父の善行（2 割）や悪行（8 割）を笑いながら語り、相手との約束の時間に遅れても「30 分は大丈夫なんじゃ」と反省のそぶりはなく、予定通り事が運ぶと「ほれみい。わしの言う通りじゃろ」と喜んでいる。私は半分あきれつつ、半分は「これのどの部分を引き継いでしまったんだろう…」と落ち込み気味に心当たりを考えていた。当人は知る由もないだろうが。

途中、父が母との電話で「今日は運転してもらって、ほんまに助かっとるんじゃあ」と自慢げに話すのを聞き、それでもこの人に褒められると嬉しくなってしまうのだなあと、しみじみ感じてしまった。

見野 大介

夏のイベントラッシュも終わり、注文と秋のイベントに向けて制作をと思った矢先に、ギックリ腰やってしまいました。結果的に、これが欲しいと思っていた長期休暇となりました。ストレッチなど体のメンテナンスの必要性を痛感する夏となりまして、ストレッチとマッサージクッションで腰をケアする日々です。いつまでも若い気分でいてたら駄目ですね（笑）

浦田雅夫

いろんなことがあった夏。地震、大雨、台風。つくづく、吊り橋の上のような国であることを再確認。被害に遭われた方々へお見舞い申し上げます。

2歳の子はよく無事で。「おじちゃん、ぼく、ここ」存在証明。テレパシーで、おじちゃん到着。逃亡犯の居所もおじちゃんなら探せそう。いつも変わらないのは、我が生活習慣。夏休みの宿題、ああ最終日。頸椎痛久々に入ったMRI。狭い。成長を止めないと。

団士郎

定年退職して半年足らず。ほとんど前と変わらない慌ただしい日々を過ごしている気がする。でもあちこちに、隙間が出来ている感覚はある。一息つけるのである。

金、土、日と遠征して戻ってきた月曜日は予定が入っていなかったりするので、留守中に届いた郵便物やメールの対応、宅配の処理などをする。締切りの近づいてきている原稿の対応もする。

以前は、この月曜日が午後授業で、夕刻からクラスター（院のゼミ）だった。そして翌火曜日は家族療法の授業だった。ここがフリーになったのはゆとりだ。

その結果、道楽の読書がはかどる。いや、Amazonの中古書注文がはかどるといった方が適切かもしれん。コンスタントにバンド・デシネ（フランスのグラフィックノベル）にも手が出るようになった。コミックスなんだけど、なかなか読めないのだが。

＊

本マガジンでは話題の鴻上尚史著「不死身の特攻兵」（講談社現代新書）を読んで、これを舞台人の氏に書かせたのは使命感だろうと思った。そして今、私が果たすべき使命は何かなどと考えた。

使命の一つはおそらく、自分が知ることになった現代社会の非公式な情報資源・資産を、出来るだけ正しく記録して伝えることだ。これと真逆の行為が、記録の歪曲、改竄、焼却だ。

そんな出来事が今、世に現れ、話題になっているのには歴史的必然がきっとある。受け止めるべきメッセージは、口先評論、揶揄の仲間入りではなく、あなたの果たす使命は何ですか？という問いだ。

先人の智や資産、己に授けられた天分を、自分が世界を要領よく泳ぐ道具としてしかみられない者は、悪しき欲望の洗脳から逃れられないまま、時代に溺れることになる。

さんざん私達を洗脳してきた「時代」に対して、革新的行動のヒントは頭の中にたくさん存在するはずだ。

それを一つでも果たすことが、今を生き、次世代のためにわずかながらも貢献する事ではないかと思う。

大谷多加志

来月の（発行日からすると今月）公認心理師試験を受験するため、いったい何年振りかという、試験勉強に取り組んでいる。「久しぶりに基礎から学びなおして新鮮だった！」とか「学生の立場に改めて立つことができた！」とか、無理矢理ポジティブにこじつけてみようとしても、やっぱり“何

やってるんだろう”感はぬぐえない。まだ何の実体もないものについて、心から“欲しい”と思う動機があるわけはなく、「今しか取れない（移行期間がある）」「ないと不利になる（かも）」という薄っすらとした不安に動かされている実感と、だからといって「関係ない」と無視することもできない自分に、どこかうんざりしているのだと思う。

そんな折に、鴻上尚史氏のネット記事が目に入った。マガジンの書簡型連載でも触れられていた「不死身の特攻兵」の著者である。鴻上氏が語る「同調圧力の強さ」と「自尊意識の低さ」という日本人の特徴と、国家資格を巡る狂騒は、無関係ではないと思う。鴻上氏の言う、「フィールドを変える」「小さく戦う」という立ち向かい方は、スッと胸に落ちた。自分にできるやり方で「小さく戦う」ことを続けようと思う。

馬渡徳子

今春より、金沢大学大学院に、社会人枠入試で進学した。現役で、仕事とプライベートの調整をしながらの通学は、なかなか大変だが、様々な国からの留学生も多く、絶好のリフレッシュにもなっている。

先ず、最初から英語に泣かされている。全編英語の授業に、まったく理解できずにこれは英語を習いに行かなければならないかと困っていたら、担当指導教官に、「あなたは、ソーシャルワーカーでしょ。英語塾に行く前に、その仕事の特性を活かして、やれることがあるでしょう。」と助言頂き、「おお!! そうだ。 留学生と友だちになって、助けてもらえばいい。それに、英語が堪能な水野スウさんという友人もいる。娘婿も英語が得意だ。リウマチ患者会の役員にも、英語の先生がいた。」と、自身の自助・互助の力に改めて気付くことができた。

そんな「仲間の力」で、何とか前期二度の英語での発表を乗り越えることができている。 本当に、「ありがとう」。これからも、よろしくです！

竹中尚文

今年の夏も暑い。私が暮らす田舎で、周囲の農家が野菜を買っていた。七月初旬の大雨に続いてのカンカン照りで、野菜が枯れてしまった。そんな状況の中で、近所の人から「水不足と暑さで硬くなってしまったオクラだけど、食べるか？」と好物をいただいた。

今回は、インド風オクラの炒め物だ。とっても簡単なサイドメニュー。

【作り方】①オクラを 1～1.5 センチ程の輪切りにする。輪切りというのかなぁ。硬いオクラだったら、電子レンジで加熱しておく。②フライパンにバターを入れて熱する。本当はギーを使うのだけども、入手困難なのでバター。バターの量は多め。目安は、オクラが足湯をするような量。③バターを十分に熱したら、クミン(粒)をいれる。クミンシードだから熱でパチパチというと、風味が出てくる。④オクラをフライパンに入れて、塩を振る。⑤クミンパウダーとカルダモン(イライチ)パウダーとホワイトペッパーを加えて、さらに熱する。レッドペッパー(一味唐辛子)もお好みの量で。⑥ガラムマサラを加えて味を調えて、できあがり。※ここに書いた香辛料だと普通のスーパーマーケットの調味料の棚で売っている。

【音楽】調理場で流すのは、シヴクマール・シャルマとザキール・フセインのセッション。共にインド音楽の奏者。シヴクマール・シャルマはサントゥールという楽器の奏者。サントゥールはペルシャから中央アジア及びインドの楽器で、箱に貼った何本もの金属弦を枹子のようなもので叩く。インドでサントゥールといえばシヴクマール・シャルマといわれる。タブラはインドの代表的なパーカッション。ドラムの表面を手のひらで押すことで、音の高さを変えて演奏する。ザキール・フセインはその父アララカと共にインドを代表するタブラ奏者。ここでお薦めするのは “Shivkumar Sharma Rag Madhuvanti & Rag Misra Tilang” 1987/1988

【告知】前回にお知らせした『七日参りのお話 —大切な人を送った人へ—』自照社出版 ¥1,000＋税が Amazon で買えない。紀伊國屋ウェブストアで購入できる。買って下さい。

荒木晃子

島根県のクリニックに、毎月の出張業務がスタートして、はや 12 年が過ぎようとしている。定期以外の松江訪問を入れると、通算 150 回は大阪—松江間を往復していることになるだろう。

過去に、父、母、愛犬を亡くした折も、休むことなく業務を継続してきた私に、今年初めて、出張業務をキャンセルせざるを得ない出来事が起きた。6 月後半の大阪北部地震である。23 年前の阪神淡路大震災を耐え抜いた自宅マンションに、今回は大きな被害もなく大事には至らなかったが、室内は相当なありさまだった。

しかし、それ以上にダメージを受けたのは自身のメンタル。そして、メンタルの不調に伴う体調不良だ。災害の大きさと人が受けるダメージが必ずしも比例するとは限らないことを体感した。

ひと月に一度のカウンセリングを長年継続するクライエントさんや、やっとの思いで予約を取っていただいたカップルに申し訳ない思いを抱きつつ、7 月の業務を終えた翌 8 月。今度は、台風の上陸で、出発日の航空便が直前に欠航となった。慌てて、何とか島根へいけないものかとネット検索し、新幹線も止まった陸路に一本だけ高速バスが運行可能とあり、化粧もせず慌てて飛び乗り何とか業務日程をクリア。そして翌週、今度は、佐賀県へ向かう

航空便が福岡空港のトラブルのため、上空で約30分の旋回の後着陸。福岡から佐賀行きの高速バスの乗車時間に間に合わず、面接予定時間ぎりぎりに現地到着となる始末。

続けて来週は、北海道旭川市で生殖医学会の口頭報告があり、その準備に追われる日々を過ごしている。TVでは、出発予定日に大型台風が関東を直撃するとの予報が流れている。果たして、当日の伊丹空港から羽田経由、旭川空港までの移動には、何が起きるのだろう。

島根（クリニック業務）、佐賀（突然、難病を発症した児と家族の合同面接業務）、旭川（日本生殖医学会にて共同研究の報告）、東京（日本家族心理学会にてシンポジウムを企画）、島根（クリニック業務）と 5 週連続の出張に、不足の事態に対応する力量を身につける必要があることを実感する今日この頃である。

木村晃子

1回休み

対人援助学マガジンは、創刊号から書かせてもらっています。回を重ねるごとに、締め切りが守れなくなり、書く内容も迷走。

書くことは面白い。テーマの取り上げ方や書き方は、後になって読み返してみると自分の心情の波が見えてきます。マガジンは、私の人生記録になっているようです。

もともと、私は、きちんとしている方だったはずなのに、いつもの間にか、締め切り遅れの常習になってしまいました。そして、今回は、遂に原稿を書くことができなくなりました。

竹中さんとしている書簡型連載も、自分の本編も・・・

忙しい訳でも、気持ちが落ち込んでいる訳でもありません。書きたいと思うことがなくなってしまったのです。ぎりぎりまで考えていました。でも、やっぱり思い浮かばないのです。それでたどり着いたのが、「1回休み作戦」。1回休んだら、次はどんな気持ちで締め切りを意識するのかな、と思いました。

次は、復活できるような気がします が・・・

私の毎日は、朝目覚めて、仕事をして、夜眠るという平和な毎日です。

北海道　フリーソーシャルワーカー

鶴谷　圭一

末娘が今春大学に入学して上京し、ついに夫婦二人暮らしの人生に入った。久しぶりに夫婦で旅行に行こうということになり、夏休みに 27 年ぶりに香港に行くことにした。夫婦での海外旅行も 27 年ぶりだ。

香港では日本人幼稚園に2年間勤務していたので、そのあたりの懐かしい場所を巡ろうということになって、記憶を頼りに北角（パッコ）の街をウロウロして、住民しか入れないマンションのエレベーターをスルリと入って、懐かしい幼稚園の入口にたどり着いた。この幼稚園のマンションの 27 階に住んでいたのだ。

果たして幼稚園はそこに27年前と同じ看板を掲げて存在していた。アポ無しだったがドアを覗くと香港人の事務員さんが居るではないか！トントンとガラスを叩いて開けてもらって、事情を説明し園内（マンションのワンフロア）を見せてもらった。当時 270 人ほど園児がいたけど、今は 60 人ほどだそうだ。27 年前はイギリス領だったし、日本企業も地下鉄開発やなんかで建築業と金融業をメインに多くの日本人を送り込んでいた。香港は今でもどんどん進化を続け、埋立をして土地が広がったり、トンネルを掘り、新界という中国方面にどんどんと開発を広げているのであちこち工事だらけだ。なのに中国企業がほとんどの仕事を取っているのか、日本人の出る幕はなくなってしまったのだろう。ちょっとさびしい。

現地香港人の話を聞いても、一日 150 人の中国人が香港に移り住んできていて、中国人と香港人の軋轢も強まっているという。そのうち大国に飲み込まれていくのだろう。

幼稚園の話に戻って、園のパンフレットを見せて頂いたら驚いた！29 年前に私たちが赴任したときに今は亡き園長（日名子太郎先生）が設定された教育目標、教育の方法がそのまま記載されていた。私が設定した行事もいくつかそのまま継続されていた。良いのか悪いのか・・・でも少し嬉しかった。

原　町　幼　稚　園
http://www.haramachi-ki.jp
メール　office@haramachi-ki.jp
インスタ　haramachi.k
ツイッター　haramachikinder

速報

（鶴谷さんからのメッセージ、編集長判断で掲載します。）

今回原稿で使わせて頂いている論文を書かれた井内先生の園、北海道安平町のはやきたこども園の園庭を挟んで向かいの道路が震源地だったそうです。

井内先生は現在 FB で発信しながら、子どもたちのケアのためにボランティアを募り奔走しておられます。

現在進行中ですが、災害時の対応が非常に参考になります。
https://www.facebook.com/sei.iuchi?fb_dtsg_ag=Adz0FEsJf9Tq7FgnH-1fKaWTyh0q_jbnN1zraWxos33bWw%3AAdyHL8h5eB4M1N_n0O9g119GPrSpx7XP78b6tIBFybY5nA

乾　明紀

「隗より始めよ」という言葉があります。ご存知の通り「大きな事を成し遂げるには身近なことから始めなさい」、「まずは自分自身から始めなさい」という意味ですが、改めてこのことの難しさを証明する事件がありました。障害者の雇用水増しです。『障害者の雇用の促進等に関する法律』には以下のように書かれています。

（事業主の責務）

第五条　すべて事業主は、障害者の雇用に関し、社会連帯の理念に基づき、障害者である労働者が有為な職業人として自立しようとする努力に対して協力する責務を有するものであつて、その有する能力を正当に評価し、適当な雇用の場を与えるとともに適正な雇用管理を行うことによりその雇用の安定を図るように努めなければならない。

（国及び地方公共団体の責務）

第六条　国及び地方公共団体は、障害者の雇用について事業主その他国民一般の理解を高めるとともに、事業主、障害者その他の関係者に対する援助の措置及び障害者の特性に配慮した職業リハビリテーションの措置を講ずる等障害者の雇用の促進及びその職業の安定を図るために必要な施策を、障害者の福祉に関する施策との有機的な連携を図りつつ総合的かつ効果的に推進するように努めなければならない。

事業主であり、推進役である省庁や地方自治体が、法律の趣旨とは異なる利益を目指してしまいました。これを奇貨として、社会全体で障害者雇用や社会連帯について見直し、2020 年のパラリンピックを迎えたいですね。

三嶋あゆみ

災害の多い日本。災害時の生活保障や避難所対策、医療・福祉対応を国の予算で確保してほしいですね。個人や自治体まかせじゃなく。

川﨑二三彦

しばらく休載

研修講師を引き受けると、当日使用するスライド資料はいつも、概ね9割方作っておいて、研修前日に完成させるようにしている。準備が早すぎると、なぜそんな作りをしたか忘れてしまい、研修中に自分で驚き、混乱してしまうからだ。

この日も、翌日の研修に備えて職場で鋭意努力し、どうやら無事終了したのはよいとして、当日朝に確認してみると、作ったはずのものがない。職場の PC に残して USB に入れ忘れたのである。幸い5時には起きていたので応急処置はすませたものの、苦心惨憺した元の完成品がほしい。と思った瞬間、閃いた。度重なるミスに鍛えられた私は、こういう時に強いのである。

「悪いけど、私の PC を立ち上げてくれないかな。デスクトップ画面の右下隅にあるフォルダーから〇〇ファイルを探して、送信して欲しいんだ」

若い職員に頼めば、朝9時開始の研修にぎりぎり間に合うのである。だが、無情な返事。

「データが重すぎて送信できません」

自分でも気づかないまま 29 メガものデータ量になっていたのである。この御時世、やはりクラウドに保存すべきなのだろう。送信作戦は諦め、応急処置ファイルを使った。無念の思いは残ったものの、参加者が何も気づいた風ではなかったのは幸いだった。

というような教訓を生かして、次の研修に臨んだのだが、はたまた悔しい結果になってしまった。

「ジェノグラムを読み解く」というテーマで準備したのだけれど、妊娠記号の意味を説明するところで肝心の記号がスライド上に出てこない。前日の修正でいろいろ触っているうち、何らかの事情で当初入れていた記号が消えたとしか考えられない。

「妊娠が家族に大きな影響を与えている と言いながら、家族図には肝心の妊娠記号がないような報告書もありました」

こんな説明をしたのだが、ふと我が身を顧みれば、まさしくそれを目の前で体現していたのが私自身であった。全く情けない。というような呆け講師活動を続けている今日この頃、諸般の事情で、連載をしばらく休載します。復活するときには、新企画が出るかも知れません。

（2018.08.30 記）

1 工程@1 円～知的障害者の労働現場

34：　人生をかける価値があるか？

千葉　晃央

仕事を辞めたいと思ったことは？

「仕事を辞めたいと思ったことはありますか？」と学生に聴かれることがある。それは誰でも一度は思ったことがあるだろう。私の場合、そのきっかけは自分の仕事のできなさ具合である。利用者さんや、他のスタッフの方と、適切にコミュニケーションをとることができなかったり、ご家族からいただいた大切なご意見であったり、職場の改善がうまくいかなかったり…である。全て私に起因する。逃げ出したくなるぐらい悔しい思いだった。そういう思いはしたくないので、学びたいと思い、気になる研修はできる限り出るようになった。この分野の知見には、常に触れ続けるよう行動をしてきた。東京での研修をはじめ、学会や気になる勉強会があれば遠方でも参加した。

力不足の補い方

自分の力不足。それを補うためには研修参加だけでは不足だった。個別スーパーヴィジョンも継続的に受ける機会を持った。その流れが、今も私の複数の活動につながっている。その後、進学、そして事例検討会など複数の研修会を主催した。自分が気になることは他の人も気になるはずと、一人で学ぶのはもったいないと、同じ思いの方々と一緒に勉強をしていった。そこでは近接領域や、同業種の方にたくさんお目にかかった。その中で、自分の仕事の質や、他の職場の状況を知り、自分自身の仕事への評価、職場への評価を更新していった。相対化の作業であった。自分たちの仕事がこの業界のどのぐらいの位置になるのか、自分たちの職場の強みはどこにあるのか、またのびしろはどこにあるのか、そんなことが明確になっていった。こうして自分を新規更新し続けていないと利用者さんの利益は守ることができないと感じていた。

障害者問題の克服に挑む！

私はたぶんこの仕事に魅了されているのだろう。仕上がった仕事の質を通じて、障害を持った方々がきちんと評価される。それこそが、障害者問題の克服である。そのために自分が力になれることがあれば、惜しみなく組みたい。

自分自身がこの世に生まれてきて、意味があるように生きたい。そう感じた 10 代の頃があった。現在、この仕事について、約 25 年。やりがいがあるから継続ができている。社会的弱者、社会的不利を解消する戦いに身を置いている。そんな闘争心を持っている。また持たないと、この仕事は務まらない。

歴史を振り返っても、障害者問題は戦いの歴史である。当事者や、当事者をサポートをする人々が表に出て、戦って、批判も受けながら、現在を獲得してきたのである。

私の現場は、目の前の仕事を、納期を守り、品質を守り仕上げる。その仕事の質に対して、企業が認めて、期待をし、仕事の依頼を受ける。

障害を持つ方々が支援している！

障害を持っている人は支援を受ける存在であって、世の中に貢献できることはない？！それはとんでもない！勘違いです！その証明に身を置いているのである。

利用者さん、そのご家族さんは「障害」という言葉だけで、他者から「できない」とみられる経験をしている。そういった社会から疎外された経験がたくさん存在する。これを乗り越え、相手に認めざるを得ない事実を積み重ねていくのである。しかも淡々と。社会に「あなたたちにぜひやってほしい」そう思われなければならない。注文をもらい、応える。通常の経済活動に参加する。それこそが社会参加であり、経済活動への参加であり、自立生活の一端である。

いないと成り立たない事実

障害者の就労という領域では成果が上がっている業種の一つは、リサイクルや清掃業務といった環境にまつわる仕事である。公園の清掃、マンションのメンテナンス、廃棄物のリサイクル事業などが挙げられる。これはさらに環境問題との闘いという側面もプラスする。さらに人生をかけて挑む価値がある課題ではないかと感じている。そのためには利用者とともに職員も汗をかいて働く。

こうした社会事業的側面も知的障害者の労働現場には含まれている。利用者さんができなかったことができるようになるというだけではない。その理解だけでは不足といえる。社会において何をしているのか？どんな意義があるのか？それが見えていないといけない。

少しの環境さえ整えば

実感として、少しの環境さえ整えば、働くことができる人がたくさんいると感じている。働けない人はいない。この証明に挑む。人は誰でも、誰かの役に立ちたいと感じてる。「ありがとう」と思ってもらいたい。「ありがとう」と言ってもらいたい。「また、頼むね！」といわれたい。「あてにされたい」「頼りにされたい」。それこそが生きるよろこびであり、明日を迎えるのぞみである。価値のない人間なんて誰もいない。少しの創造的な工夫さえあれば、それを社会に突き付けることができる。

創造的な工夫！それが職員には求められ

ている。この連載ではその創造的な工夫を取り上げて書いてきた。

障害者雇用水増しは最悪なメッセージ

中央省庁での障害者雇用の水増しがひどい。これは何を示しているかわかるだろう。国は障害者は「働けない」と思っている。働いてもらうつもりはもともとない。働けなくて当たり前。そういう手間はかけられない。国のお墨付きで障害者は働けない！といっているようなものである。働く価値がないといっているのである。人を馬鹿にしている。ますます、この戦いはやりがいがあるし、人生をかける意味があるように強く感じている。

BACK ISSUES

業務の適正化はできるのか？33　2018 年 6 月

安全衛生委員会 32　2018 年 3 月

施設というコミュニティ 31　2017 年 12 月

職場づくり 30　2017 年 9 月

健康管理 29　2017 年 6 月

音 28　2017 年 3 月

救世主になりたい援助職 27　2016 年 12 月

事件について 26　2016 年 9 月

クルマ社会と福祉政策 25　2016 年 6 月

施設が求める「障害者像」はあるのか？　24

2016 年 3 月

連絡帳 23　2015 年 12 月

におい 22　2015 年 9 月

作業着 21　2015 年 6 月

食べる 20　2015 年 3 月

通勤 19　2014 年 12 月

クスリの作用、人の作用 18　2014 年 9 月

倫理観でかたづけられる暴力 17　2014 年 6 月

触れる 16　2014 年 3 月

対談企画 「教育と福祉の連携を模索する」2014 年 3 月

情報の格差 15　2013 年 12 月

20 年前のノートから 14　2013 年 9 月

そうじのねらい 13　2013 年 6 月

個別化の暗部 12　2013 年 3 月

グループワークの視点 11　2012 年 12 月

実習生がやってきた！10　2012 年 9 月

月曜日のせいやな 9　2012 年 6 月

所得を決める福祉職？82012 年 3 月

世界とつながる社会福祉現場 7　2011 年 12 月

この現場へのたどり着き方 6　2011 年 9 月

障害を持つ友達と過ごすとは？巻末座談会

2011 年 9 月

旅行がない！5　2011 年 6 月

職員の脳内回路 4　2011 年 3 月

たかがガムテープ、されどガムテープ 3

2010 年 12 月

利用者が仕事上の戦友 2　2010 年 9 月

障害者自立支援法で不景気に！？1　2010 年 6 月

臨床社会学の方法

（22）暴力の遍在と意識化

中村 正 *

*Ritsumeikan University

1．脱暴力支援の苦渋

もう 20 年近く前のことだがある雑誌に次のような一文を寄せたことがある。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「男らしさを問うということ」

責任ということをよく考えるようになった。男性問題に関心を持つ仲間とともに、メンズサポートルームを発足させ、家庭内暴力の加害者を集めて暴力を繰り返さないためのグループワークに取り組んで以降のことだ。

男性と暴力というテーマは、考えてみれば常に私たちの前にあった。たとえば、戦争は暴力そのものだ。戦争責任という言葉。従軍慰安所をおそらくは利用したであろう多くの兵士たちは自らの内面を語らない。絶望的なまでの沈黙のなかにある。

「ナヌムの家」という記録映画をとおして、忌々しい記憶を直視し、もつれた糸を紡ぎだし、重たいことを語り始めた女性たちとは対象的だ。強かんや強制わいせつの被害者も同じだ。いつも被害者、弱者、被差別者が立証責任を負わされる。語りだすのは常に思い出したくない側からだ。

こうした出来事はトラウマ（心の傷）となって沈殿している。これを外傷記憶という。さらに被害者は、それを物語記憶に変えることを余儀なくされる。そうしなければ癒されないからだ。個人がすべてを傷として押さえ込めておくことはしんどい。

もちろん外傷記憶を物語記憶に書き換えるには、援助者が必要だ。社会の理解もなければならない。この過程の重要性を教えてくれたのは性犯罪や家庭内暴力の被害者を支援するフェミニスト・カウンセラーたちだった。

そして思うことは加害者にもまたなんらかの援助者が必要だということだ。加害者もまた沈黙のなかに生きている。多様な形態の家庭内暴力の加害者、他人を傷つけ、物を盗んだ非行少年、従軍慰安

所を利用し、虐殺をしたであろう元兵士たちの閉ざされた心の扉を開けるのは並大抵ではない。

「どうも男性たちは反省するが悩まない傾向があるようだ」という、性暴力に取り組む弁護士さんの言葉を聞いたことがある。たしかにそうだ。まず、その瞬間を語る言葉がない。表情がない。感情がこもっていない。分析し、評論し、反省するのは上手かもしれない。しかし、そうした言葉は上滑りしている。変に饒舌なのだ。借り物の言葉と感情のような気もする。

けれども、そこにいたるまでの「脱感情作用」（暴力、非行、殺人などを行うことを可能にする麻痺状態）が男らしさのなせるわざであるとすれば、こうした問題現象の背後に男性役割（男性性）が一役買っていそうだと思う。非暴力グループワークをとおして、加害男性たちには、精神科医であれば「失感情症」などとラベルを貼りたくなるような現実が見いだせる。加害者を援助するということに関して、まだその術は開発されていない。援助のための思想も理念も欠如している。これからだ。

家庭内暴力の加害者たちの語りを援助していると、つらいことがたくさんある。プログラムの提供者としてではなくて、夫として、父親として、そして男性として突きつけられる問題があるからだ。暴力へと駆り立てる男らしさがそこに垣間見えるのだ。これらは多くの男が生きている現実でもある。それは暴力を問い糺す側にも諸刃の刃となってつきささる。男性解放なんてまだ早いという声にどのように応答するのか。いつも自問している。

（『部落解放』第 478 号、部落解放研究所、2000 年 12 月号）

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

そして 2018 年、なお現実は変化していないどころかこの悩みは深まるばかりだ。枚挙に暇がないほど暴力が噴出しているからである。部下のハラスメントがあり悪びれる様子もなく「ハラスメント罪はない」と開き直った大臣がいる。大学アメリカンフットボール部の違法プレイ指導は暴力そのものである。他の種目のスポーツでも監督やコーチへのハラスメント告発が相次いでいる。オリンピック開催を機にスポーツ界のスタンダードが軋みを立てているのだろう。土俵で倒れた男性にいち早く駆け寄り救命活動した女性看護師に対して女人禁制の場所だからそこから降りろと指示がでた。大学入試における女子学生差別（後に浪人生差別も）もあらわになった。性的少数者は生産性がないという発言もでた。不幸な子どもをつくらないという「善意」「公共」の名のもとに強制不妊手術問題が実施された。現在、相次いで訴訟が提起されている。

2．社会の問題なのか個人の問題なのか−男性性を扱うことと特権の扱い方

暴力はそれを語るものにも自己の有り様を問いかける不快なテーマだ。罰にくわえてしょく罪へと加害者を援助することも必要だ。しかしまだその社会制度は開発されていない。援助のための思想も理念も欠如している。しょく罪することと被害者の権利を守ることの両立はいかにして可能なのだろうか。

一方では、すべての男性が暴力的なのではないということを認めつつも、他方では、こうした暴力事件を引き起こすのは男性たちであることが多いということも無視できない。この二つの間をどのように埋めることができるのか。換言すれば、男性としての加害者性に根拠をおく自己否定的な言説でもなく、男性もまた被害者だという開き直りの自己肯定的な言説でもない、男らしくあることを強制され、期待されることの苦しさと違和感と無力感を語り、そうあることを強いる社会の分析と、そしてそうではない性と生があることやそれを望む男性がいることを示すことが大切だと考えている。

レイプ、戦争、過労死などに関わる男性自身による私的経験もふくめた男性としての発言が必要だ。DV 加害のバタラーたちの行動変容もまた同じような文脈でここに位置づく。脆弱であるがゆえの虚勢もちろんそれぞれ性質は異なる問題群である。しかしたんに個別の事件や筆禍・舌禍ではすまない社会問題や社会意識が根本に横たわる。これらはすべて社会的差別であり、暴力問題である。いたるところにある暴力、暴力が遍在しているといえるだろう。儀礼・慣行、スポーツ、教育、政治のあらゆる場面に暴力が宿る。

とも言い得る男性たちの複雑な内面生活について、適切な環境関係性、場そして語彙があれば男性たちは確実にその脆弱さや内面を語る力を秘めていると実感している。

もちろん、男性の性と生が特権や利益と裏腹な関係にあることについても自覚的でなければならないが、ここで考えておきたいことは、集団としての男性と個人としての男性のあり方に違いがある点だ。だから、その特権や利益も男性同士の間では不均衡に配分されていくこととなる。男性同士の関係性のあり方にもまた暴力という主題が入り込む。このズレこそが男性という立ち位置の特権に気づき、矛盾を自覚する隘路をつくる。

3．加害の言語化のための社会意識の変更

また、必ずしも刑事罰とはならない暴力が多いことも特徴だ。暴力を振るう者は居直る。暴力のすべてが加害、犯罪、悪とはされないので、暴力を受ける被害の語りも大変であるが、加害の語りはさらに難渋する。

加害は常に過少評価や中和化される。相手も悪かったと正当化することが多い。たとえ語りがあったとしてもその加害の

話は「いやいや・しぶしぶ」となる。それを支えているのは、以前からも指摘している社会の共軛関係である。強く言えば共犯関係である。つまり暴力を許容している意識である。時には暴力を肯定する社会意識もあり、そうなると暴力を社会問題として語ることを困難にし、社会意識が問題構築の邪魔をしている。

そして暴力が発生するところには非対称な関係性が存在しているので、その非対称性は上下関係のように作用し、被害の側も言語化がしづらく、相談さえできなくなり、自己抑圧となる。名乗りでることに負荷がかかるし、関係のなかにとどまるように自己を抑圧する。つまり、加害者による被害者非難、他罰的な態度や意識、自らの行為の正当化や中和化、自己決定という名の自己責任がつながると、被害者なのに「自分が悪い」という自己嫌悪をつくりだす事態となる。

こうして社会のもつ意識、暴力としての認知の程度が、これほど多様な種類の暴力の可視化を決める。暴力が遍在しているのはこの共軛関係のためである。こうして共軛関係は加害の物語化を困難にする。この困難さは、関係性のなかの暴力なので、そうした関係性を構成してきたことの合意と同意、そして自己決定と自己責任をめぐってやっかいな課題を生起させる。性犯罪の構成要件の規定にあるような、暴行・脅迫の存在、さらに抵抗しなければならない被害者像を基準にして性暴力を定めていることがそもそも被害と物語化を困難にし、加害の物語化が進まない背景である。加害の側に有利な物語化が社会のなかには存在しているともいえるからである。暴力や脅迫に向かって抵抗する義務が果たされないと性の暴力の被害者にはなれない。性にともなう暴力の加害からすると、強引さや力強さ、パワーの行使、そして犯罪直前までの暴力性は等値される。あるいは日常の愛の交歓や説得や駆け引きとひとつづきになる。その媒介に男性性ジェンダーがおかれている。

4．暴力のナラティブをフレーム化するもの−マスターナラティブの考察

しかしそうはいっても国際社会の動向もあり、関係性に遍在する暴力問題の認知がすすんできた。世界保健機構 WHO の「ICD-11」の議論が進んでいることを紹介しておきたい。「疾病及び関連保健問題の国際統計分類」改訂作業であり、新規項目が追加されている。「外因の特性」として「暴力及び虐待の側面」が追記され、そこでは関係性が問題視されている。「加害者−被害者関係」「加害者の性別」「暴行及び虐待の状況」の 3 点である。ICD に位置づけられるということは、暴力が公衆衛生の課題として位置づけられることになり、関係性にも注意が必要ということでは、男性と男性の暴力の側面の指摘もできる。そして個人の問題ではないという意味でもある。こうして健康問題として暴力の定義がなされ、そこで

の関係性が対象になっていることの意味は大きい。これについては別途詳述したい。

この過程は、社会構築主義として本稿でも紹介したが、「ワード word がワールド world を創る」過程といえるだろう。分類体系の変化は、名付け、定義、ラベルをめぐるアリーナ（競技場）のようだ。強調しておきたいことは、このアリーナには、社会で主流になっている意識がマスターナラティブとして影響を与え、加害や暴力の語彙と文法をフレームづける。例をあげておこう。

一つは、刑法の性犯罪の定義（構成要件）が象徴的である。性犯罪についての大幅な法改正が行われた（2017 年）、一言で言えば厳罰化である。しかし刑法の「暴行又は脅迫を用いて」という構成要件はそのままである。この「暴行又は脅迫」は、「反抗を著しく困難ならしめる程度」の非常に強いものであることが必要とされている。暴力や脅迫に遭遇して、そこまで抵抗できるだろうか。「逃げられたのではないか」「もっと抵抗できたのではないか」という被害者非難もおこりやすい。深刻な事態に陥ると身を守るため、加害者を逆なでしないように行動することがある。抵抗するどころか何もできない。あるいは、何もしないのがよいと判断することもある。抵抗しなければならないことや暴力行使が前提となっているストーリー化の変更が要請されている。

こうなると加害者は被害者が抵抗しなかったので合意の上だと勝手に思い込む。性犯罪の意識にこのストーリー化はかなり影響を与えている。俗にいう「嫌よ嫌よも好きのうち」という意識として加害のナラティブが都合良くフレームづけられる。合意の上だという加害側の解釈がまかりとおることもある。このストーリー化の軸が変わらないと暴力加害は成立しない。暴行・脅迫がないと性犯罪は成立しないということは、暴力と性がそのぎりぎりまで結びつき許されるというストーリー化の軸をつくる。

二つは、自己決定のストーリーである。「私の勝手でしょ。」という意識を助長させるような、あるいは「偽りの自己決定」と思わせるような言葉が流通している。たとえば「援助交際」という言葉がそうだ。次々に登場する風俗産業の業態もこれを念頭に置いている。「JK ビジネス」もそうだろう。17 歳以下の高校生年齢が対象になるのでこうした名付けが奏功していく。それに従事する側も利用する側も何か問題の核心から遠ざかり、見えなくなっていく実態がこの名付けである。常に風俗業では独自な言葉が常に創られ、名付けがなされている。この言い方は主体的な選択であるかのようなストーリー化といえるだろう。その言葉を使うことで何事かがやり過ごされていき、飼い慣らされた日常へと関係性が練り上げられていく。

三つは、正当化や中和化のストーリーがある。「臨床社会学の方法」の連載の最

初に「暗黙理論」をとりあげた。これは主観的現実としてのインナーボイスであり、認知のスキームであり、行動化への歩みだしである。同じように、「ナンパしてついてきた女なんだから。」「一緒に遅くまで酒を飲んでいたんだ。」と強制性交を合理化する性犯罪者は多い。類似のことは、「もっと鍛えて欲しいとその生徒は言っていた。保護者も頼みにきたことがある。」と体罰教師は語る。「これはしつけだ。」と虐待する親は語り、「単なる夫婦喧嘩だ。」と DV 加害男性は語る。「冗談のつもりだった。」といじめる側は語る。これらは加害者のインナーボイスである。私は「悪魔のささやき」と呼んでいる。「やめとけ！やばいぞ、それは犯罪だ。」という「天使のささやき」ではない。しかしこの「悪魔のささやき」は社会の「つぶやき」とも共振している。こうしたインナーボイスを私は「暗黙理論」と呼んでいる。加害の言語化は困難であるが、それを聞き出しながら加害者臨床を展開している。

5. 問題の自然史−問題を名付けることのせめぎあい−社会のなかのストーリー化の軸が問題

交際相手からの暴力、DV、ストーキング、いじめ、家庭内暴力、性問題行動等は見知らぬ者同士の暴力ではなく、何らかの関係性にある者同士の暴力である。それは最初からそうなのではない段階がある。暴力を含むので、その関係性は対等なものではなく非対称性があると想定する。

これらは、出来事・事件として表面化するが、多くは自然な関係性のなかの日常の営みに根ざしている。社会病理学ではこれを「問題の自然史」としてとらえてきた。親密な関係性における暴力は何らかの関係にある者同士で起こるので、その出来事の文脈を成している思考、行動、意識の日常や慣行を見据えることが重要となる。氷山の上の部分のような事件の、その下にある日常が見逃せない。

関係性を視野に入れると、紋切り型の「問題化」だけでは解決にならないことも多い。特に出来事が起こる対人関係や家族関係が見えてくる。そうなると被害と加害は錯綜する。被害と加害がくっきりと表面化する通り魔のような事件ではないこの種の出来事は、日常のコミュニケーションや相互作用の関数ともいえ、当事者たちの日常の問題への処し方・過ごし方、関係の営み方、とくに葛藤の解決の仕方の独特さがみえてくる。何が問題なのかをめぐる「名付けのせめぎ合い」を見なければならない。

つまり定義と構築をめぐる公論である。たとえば、子ども虐待はしつけとは異なること、情熱的な恋愛とは異なる度が過ぎた追跡や脅迫はストーキングであること、夫婦喧嘩ではなく DV であること、恋人同士でも DV 類似の行為があること、夫婦のあいだでも性暴力類似のことが起こること、遊びや冗談ではなくいじめや

ハラスメントであること、愛情の裏にはコントロール行動もあること、薬物使用は意思の問題でしょうと思われがちなこと、不登校は再登校が、ひきこもりは家を出ることが解決であると語られること、被害者の落ち度が斟酌されて性暴力が中和化される場合があること等数多く指摘できる。

関係性の病理は、つながりの問題という意味である。親密な関係性はつながりすぎをもたらす。わかりやすいのは愛情が重荷になることだ。私は脱暴力のためのグループワークや面談、そして家族のやり直し支援をしているが、その過程では被害者からの話も聞く。そのなかで語られる暴力はつながり方の捻れともいえる。親密な関係性における暴力は愛と暴力の重なりから生じてくる。いくつかを紹介しておきたい。

「彼がいないと寂しくて不安になる。いつでも一緒に行動する。」、「服を買うときにはいつも一緒に着いてくる。僕の好みの女性になって欲しいと言って注文が厳しい。自分のセンスが活かせない感じがする。」、「交通の便のよくないところに住んでいるので本当は免許が欲しいし、必要だけども、免許を取らせてくれない。運転が下手だからって言う。だからいつも彼の車で行動することになる。」、「私が医者にいくといつもそれは男性の医者だったかって聞く。」、「同窓会にいくというと嫌な顔をする。」、「DV を受けていて、なんだか彼といる方が安全だと思うような意識になったことがある。実家に逃げていると追いかけてきたり、メールが頻繁にはいったりするので結局一緒にいることで落ち着く。」、「帰宅する直前になると『もうすぐ着くね。お帰りなさい』というメールが入る。」、「今日は何をしていたのかと聞いてくる。」、「死んでやるといわれると別れられない。元の関係に戻ることが多い。」等、枚挙に暇がない。こうして愛は苦痛に展開していく。

最初は良かった関係性がこうして徐々に変形していく。束縛、暴力、コントロールになる。DV というワードは被害を名乗りやすくした。加害と被害は男性、女性に関係なくおこる。それは愛情なのだが、このままいくと負担や重荷になる様子がみえてくる。この愛の重荷は、それ自体が社会問題と名付けられるようなクリアな問題ではない。何気ない日常の積み重ねがあり、ひとつひとつはそれなりの存在感のある関わりでしかなく、ゆっくりと愛が重荷になっていく様子がみえてくる。名付けにくい相であるが、デート DV は恋人同士の関係を対象にして、若年層のかかえる関係性の病理を浮かびあがらせた事になる。

6．つながりが変形していくこと

暴力が遍在しているということは、日常のつながりに危険が宿ることを意味する。その関係性がずれていく。暴力を定義していくためには事件が契機になっている。最近のいくつかの例をあげておこ

う。

一つは、リベンジポルノである。2013年 10 月に発生した三鷹ストーカー殺人事件を機にリベンジポルノへ対処する契機が強まり、2014 年 11 月に国会で成立した。いわゆる「リベンジポルノ被害防止法」がある（「私事性的画像記録の提供等による被害の防止に関する法律」）。第三者が被写体を特定できる方法で、プライベートなものとして撮影された性的画像記録を不特定又は多数の者に提供した者を罰する法律である。問題はそのデジタル映像を撮影したその時は良かった関係の自然史があったということだ。「撮られるとドキドキする、特別な人だからいい、ノリノリだったらいい、撮られているのもプレイのうち」等と被害者もその時の様子を語ることがある。

二つは、セクシャルハラスメントにおける「迎合メール」と呼ばれるものを指摘し、コミュニケーションの特徴を把握すべきであり、字義通りの意味ではなく、関係性への配慮を要請している。厚生労働省の厚生労働省労働基準局長通達「心理的負荷による精神障害の認定基準について」（2011 年 12 月 26 日付け）のなかで指摘されている点である。セクハラによって引き起こされる精神障害を労災認定する基準についての内容である。その中で、「セクシュアルハラスメント事案の留意事項」として、セクシュアルハラスメントが原因で対象疾病を発病したとして労災請求がなされた事案の心理的負荷の評価に際しては、特に次の事項に留意するべきとした。

具体的には、「セクシュアルハラスメントを受けた者は、勤務を継続したいとか、セクシュアルハラスメントを行った者からのセクシュアルハラスメントの被害をできるだけ軽くしたいとの心理などから、やむを得ず行為者に迎合するようなメール等を送ることや、行為者の誘いを受け入れることがあるが、これらの事実がセクシュアルハラスメントを受けたことを単純に否定する理由にはならないこと」を明示した。

三つは、先の共軛関係に関心が向かうようになってきた。たとえば傍観者の罪である。兵庫県 K 市の事件である。20 代の女性職員にセクハラをする当時の副市長（解職）を止められなかったとして、その場に同席していた上司の 50 代男性職員を戒告の懲戒処分にした。女性の体に触れた飲み会後のカラオケでのこと。副市長はこのセクハラを理由に解職されたが、K 市は、女性がその後も体調がすぐれないことを根拠に懲戒処分を決めたと報道されている。その場には別の男性職員もいた。管理職ではないため処分はしなかったという。ハラスメント行為のあった場で止めなかった「傍観者」の責任、この場合は管理責任も含めて問うたことになる。他にも「傍観者」の責任は争点となった事案がある。「上司である所長が、先輩から暴言や暴行、一人居残り残業などのハラスメントを受けていたこ

とを知りながら、何らの対応もとらなかったどころか、問題意識さえ持っていなかったことがパワハラ防止義務に違反していると指摘された事例（日本土建事件・津地裁平成 21 年 2 月 19 日判決)」である。また、セクハラを放置したセクハラ相談担当職員について違法行為を認めた判決も出ている。「セクハラ相談窓口の担当だった課長が、セクハラがあったことを認識していたのに、加害者をかばう発言をして何も措置をとらなかったことが違法行為であるとして、市に損害賠償責任が認められた例である（A 市職員事件・横浜地裁平成 16 年 7 月 8 日判決)。

四つは、アウティングである。ある男子院生の出来事が記憶に新しい。ゲイの男子学生から告白された異性愛の男子学生がそれを第三者に話をしてしまった。個人の大事な情報が漏れたことを知った当の学生が自死をした事件である。カミングアウトとは全く異なるものだ。秘匿しておかなければならない事情をもって人は関わり合っている。秘密は誰にでもある。パッシングは、重大な事実を秘匿して生きざるを得ない日常行動のことであり、取り繕い、やり過ごしとも言われている。セクシャルマイノリティはパッシングもよく経験している。その秘密が暴露されていく。このアウティングは「同性愛パニック」でもあり、ホモフォビア的心理の典型である。アウティングの背景には社会的差別がある。パッシングせざるを得ないことがあり、それが合意なしにアウティングされることは深刻な事態をひきおこす。社会がある特定の支配的な物語、この場合は異性愛主義の物語で成り立っていることについてマジョリティは無自覚となる。カミングアウトやアウティング、パッシングという言葉で把握される関係性をめぐって実にいろいろな社会問題がみえてくる。

こうした変化は脱暴力や暴力の顕在化にとって有益である。暴力を振るう側の都合の良い言い分が通らなくなっていくからである。関係性についてのこれまでの見方が変化し、社会意識の問題点を可視化させる言葉の変化ともいえる。

そのつながりの他方は、被害相談となる。ハラスメントを受けた心理的な影響から必ずしも理路整然と話すとはかぎらない。むしろ脱線することも十分想定される。被害のナラティブにかかわる相談者が特に注意したいことは、相談による「二次被害」だ。

たとえば、１）相談者の落ち度や責任を指摘する「あなたにも落ち度がある」「あなたにも問題がある」、２）相談者の性格を問題にする「あなたは神経質すぎるのではないか」「あなたは生真面目すぎる」、３）行為を過剰に一般化する 「そんなことはよくあることだ」「会社というのはそんなところだ」等だ。相談者の精神的負担を少しでも軽くすることに心がけ、真摯に耳をかたむけるようにしなければならない。暴力の加害の語りに影響を与える語彙と文脈がみてきたように変

化していることを踏まえての暴力の被害相談となるべきだ。

その被害は独特な関係性におかれたなかで発生するので関係性の病理の理解は大切となる。キーワード風に列記しておきたい。被害者非難（ガスライティング）、自責の念（加害者との同一化）、他罰性によるコントロール、Coercive Control 行動、学習性無力感、暗黙理論等である。

7．個人の責任を問うことと社会問題として語ることの「あいだ」

暴力は日常の暮らし方とも関わっていて、突然のように降りかかるものではない。じわじわとそこに存在するようになり、暮らし方の一部に自然になっている。まさに暴力の遍在であり、日常性である。さらに社会の側の脱暴力への環境整備（治療的司法等）の遅れも加害荷担的に共軛関係をつくる。そうなると適切な被害化と加害化がすすまない。

とはいえここで紹介してきたように現在はこの定義をめぐるせめぎ合いが随所でおこり、軸が変化しようとしている。被害と加害のフレームの変化のためにも名付けが大切となり、どんな言葉と文脈で暴力として可視化し、対応をするのかのせめぎ合いをみるべきだろう。これらの側面を、関係性の病理、日常性の病理、共同性の病理と特徴づけてきた。非行、いじめ、自殺のように、従来から社会問題化されてきた社会病理現象だけではなく、失踪・家出、逃走、いじり・いじめ、無視、多様なハラスメント、ネットいじめ・リベンジポルノ、社会的迷惑行為、微細な日常的差別（マイクロアグレッション）、セルフ・ネグレクト、ヘイトとフォビア（憎悪と恐れ）、アウティングとカミングアウトの相克等の新しい関係性の病理を理解する言葉がある。ワードがワールドをつくる構築主義の見地からすれば、こうして意識化される問題群を整理していくことをとおして暴力の遍在と意識化の作業となる。これは社会病理研究・社会問題研究の一環となる。これまでは十分に扱いきれなかった現象、名付けにくいもの、不可視化されているものに対象を定める問題群である。引き続きここで紹介していくことになる。

社会病理学・臨床社会学
なかむら ただし
（2018 年 8 月 30 日受理）

カウンセリングのお作法　第十六回

グループやチームで問題解決をする

CON(こん)カウンセリンオフィス中島　中島(みずとり)弘美

今回、お話しするグループカウンセリングは、その家族面接の発展形です。特徴は、多数のカウンセラーが一度に同席して、個人あるいは、家族の支援をするスタイルです。

進め方（次ページ表の左端をごらんください）

まずは、そのカウンセリングの進め方の説明から始めます。約九十分の面接は、

A質問時間
B話し合いの時間
C感想発表の時間

大きく三つの流れがあります

A質問時間（四五~六十分）

それぞれのカウンセラーは一人ずつ順番にクライエントへ、問題解決につながるような質問、ソリューショントークをして、クライエントはその質問にこたえていきます。従来の面接のようなスタイルです。

カウンセラーの話し合いをオープンにする

B話し合いの時間（二十五~三十分）

次は、カウンセラー全員で、A時間に得られた情報をもとに、クライエントの問題に対して、自由に話し合いをします。その様子をすべてクライエントにきいていただきます。

これまで、ワンウェイミラーの後ろで話し合いをしていたところをオープンにするのです。事例検討会にクライエント自身も参加するようなイメージです。

多数のカウンセラーが同席する

カウンセリングは、何か問題を抱えている人と、カウンセラーが話し合いをします。もともとはクライエントとカウンセラーによる一対一の面接が主でした。のちに、家族やカップルを対象に面接をする家族カウンセリングもおこなわれるようになりました。

その家族面接の方法のなかに、共同治療者として、複数のカウンセラーがカウンセリングにかかわるスタイルがあります。

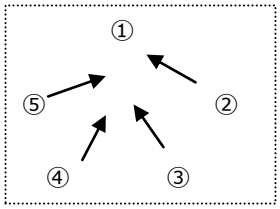
家族と直接に面接をするカウンセラーと、ワンウェイミラーの後ろで、面接全体をみるカウンセラー(ひとりあるいは複数)とに、役割をわけて、支援するスタイルです。

エクササイズ　リフレクティングチーム体験

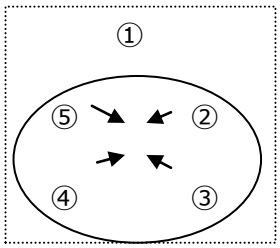
生活において自分自身が実際に困っていることや職場の小さな事例を取りあげて、グループの力を借りて問題解決を体験する！

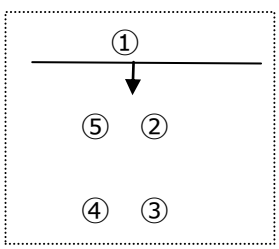
リフレクティングチーム体験で得られること
1　複数の人の力を借りて問題解決する方法を知る
2　言葉かけや質問の仕方のトレーニング
3　事例検討の方法を知る
4　クライエント体験ができる

<table>
<tr><th></th><th>時間</th><th>クライエント（エピソード提供）役 1 名</th><th>カウンセラー（面接者）役　他全員</th></tr>
<tr><td>A
クライエントさんの
相談内容
確認と
質問時間</td><td>45
～
60
分

8 分</td><td>A 1　相談内容=グループのメンバーに話してもかまわないと思う少し困ったこと、事例について簡潔に話す
例）「朝、なかなか起きられないのでそのことをみなさんに相談します」
A 2　どうしてその内容を取りあげたのかの理由を説明する。
例）私がよく陥るパターンである
いろいろな人の意見をききたい
具体的な方法対策を望んでいる
A 3　質問スタート
カウンセラーからの質問に順番にこたえる
 

①　クライエント役
②③④⑤　カウンセラー役</td><td>A 3　カウンセラーは、決められた時間まで、ひとり一問ずつ順番にクライエント役に質問をしていく。
クライエントさんが、
☆どのようなことを話したがっているのか、
解決力を引き出すにはどうしたらいいのかを
想像しながら工夫をして質問をする
例 a）これからどのようになっていったら良いと思いますか？
例 b）最も恐れていること、心配していることは、
どんなこと、どうなることですか？
例 c）これまでためしてみたことで、少しでも役に立ったこと、効果があったことはどんなことですか？
例 d）今よりもひどくならないようにするためには、
何に気をつけたら良いと思いますか？</td></tr>
<tr><td>B
カウンセラー全員での
話し合いの時間</td><td>25
～
30
分

5 分</td><td>B1 グループから少し席を離れて座る
B2 カウンセラー役の話し合いを黙って聞きながら、内面に浮かんでくる思い、考え、ひらめきなどをしっかりと確かめる。（うなずかない、）
 
</td><td>B2 クライエントさんが聴いていることを前提に、クライエントの問題についてカウンセラー役全員で自由に話し合う。
（順番は関係なしのフリーディスカッション）
共感したところ、クライエントさんの良い点、うまくいっている点、具体策、経験談、社会資源の提供など。
（クライエントさんに話しかけないこと、追加で質問しない）</td></tr>
<tr><td>C
クライエントさんの感想発表の時間</td><td>5
～
10
分

1 分</td><td>C1 話し合いをきいて感じたこと感想を自由に話す
 
</td><td>C1 カウンセラー役の話し合いのどの部分が役に立ったのかを確かめながら、感想を黙ってしっかりときく
(話を付け加えたりしない、念を押したりしない)</td></tr>
</table>

参考文献「ナラティヴ・セラピー～社会構成主義の実践～」シーラ・マクナミー、ケネス・ガーゲン編　金剛出版　1997

『グループやチームで問題解決をする』

リフレクティングチーム体験

リフレクティングチームとは

少し言葉の説明を付け加えます。

多数のカウンセラーのことをリフレクティングチームといいます。

リフレクティングとは、「聞いたことを理解し、反応する前に考える」の意味で、カウンセラーはリフレクティングを意識して、発言することになります。

このリフレクティングチームの話し合いをきいているクライエントは、カウンセラーたちが問題をどのように受け止め、どのようなリソースを発見し、解決のためのアイデアやプランをもっているかに耳を傾けます。

カウンセラーが重要なポイントであると考えて発言をした点も、クライエントにとって、すでに承知していることや、何も役に立たないと感じる意見かもしれません。あるいは、反発を招くような意見かもしれません。有益か否かにかかわらず、すべて、クライエントの前で明らかにします。

以前、家族の前で対立意見を意図的に表面化する『グリークコーラス』という技法がありました。が、このプロセスはクライエントを前にして、カウンセラー同士が、思いのまま、そのままを話し合うのです。

C感想発表の時間(五~十分)

クライエントはBの話し合いを聞いて、感じたこと、考えたことを、カウンセラーに対して、自由に述べて、面接は終了します。

これまでのカウンセリングであれば、カウンセラーの意見、あるいは共同治療者とともにまとめられた意見をクライエントに話すため、見方が偏るマイナス点が見られました。

その上、カウンセラーのポジションが上で、クライエントが従うというような関係を作り出すこともあったと考えられます。

しかし、このグループカウンセリングは、さまざまなカウンセラーの意見を耳にすることで、クライエント自身があらゆる角度から考えることができ、かつその内容を取捨選択しながら、解決や改善に役立てられるのです。きわめて、クライエントの主体性が発揮されるのです。

リフレクティングチームを体験するエクササイズの手順

1 グループ分け　5～7 人ずつのグループを作る

7 名以上になると人数が多すぎて話し合いがしにくい。3 名以下だといろいろな意見が出にくい。

人数が多い時は、クライエント役、カウンセラー役以外はオブザーバー(観察する)役になる。

2 役割を決める

クライエント(エピソード提供者)役　1 人

カウンセラー(相談支援員)役　4～6 人　クライエント役以外の全員

多人数の場合は、オブザーバー役

A 質問時間のはじめにクライエント役の相談内容確認する

・クライエント役は相談内容=所属グループのメンバーに話してもかまわないと思う、自分が本当に困っていること、事例について、思い浮かべる。

・相談内容を簡潔に話す

例)　朝、なかなか起きられないのでそのことを相談します。

・どうしてその内容を取りあげたのか、何を得たいと思っているのかの内容を説明する。

例)　私がよく陥るパターンである　/いろいろな人の意見をききたい

具体的な方法対策を望んでいる等

A の質問　スタート

カウンセラー役からの質問にクライエント役は順番にこたえていく　　以下　B　C　へ移る

『グループやチームで問題解決をする』

個人面接や家族面接よりも効果を実感する！

リフレクティングチームエクササイズ

対人援助学会第十一回研究会で、このエクササイズをとりあげ、参加者の方々に体験をしていただきました。

リフレクティングチーム体験エクササイズで得られることは、次の4点です。

1複数の人の力を借りて問題解決する方法を知る

2言葉かけや質問の仕方のトレーニング

3事例検討の方法を知る

4クライエント体験ができる

エクササイズをする際は、本来のカウンセリングの約五分の一の時間を目安にしてすると、全員がカウンセラー役とクライエント役を体験できます。実際にそれぞれの役をやることで、グループカウンセリングの意味するところを感じることができます。

A質問時間（8）分
B話し合いの時間（5）分
Cクライエントの感想をきく時間（1）分

最初に、クライエント役の人は、生活においてささやかなことだけれど、自分自身が実際に困っていることや職場の小さな事例を取りあげて、簡潔に話します。

さらに、どうしてそれを取り上げたのか、何を得たいのかについての話をします。

以下、グループカウンセリングがスタートします。

参加者の感想から

体験した人の感想は、

・いままで、考えてもみなかった意見もきけて、参考になった。

・ひとりで考えているときに比べると問題に対する考え方が短時間で広がった。

・どのように質問をしたら効果的なのか、その練習になった。

・職場の事例検討のときにやってみたい。

・社会福祉士の授業のワークでやります。

以上のように、クライエントは、多数の支援者やカウンセラーのコメントを受け取ると触発されることが多く、グループカウンセリングの効果を実感できると考えます。

リフレクティングチームに関しては、聞きなれない言葉が多くでてきます。それをまとめました。

CON 子さん　心理カウンセラー

わかりにくい言葉の説明

ワンウェイミラー　→　面接室の隣に別室があり、その別室から鏡を通して面接室の様子をみることができる、見ることができるのは一方側からのみ。マジックミラーともいう。

社会構成主義の見方　→　「当たり前とされる現実が実はわれわれがつくりだしたものである」という見方

リフレクティング　→　「聞いたことを理解し、反応する前に考える」の意味

ソリューショントーク　→　解決に焦点をあてた話し合い。どのようにすれば解決に結びつくのかを考えていく。対称となるのはプロブレムトーク。何が原因で、問題であるかに焦点をあてた話し合い。

グリークコーラス　→　**Greek chorus ギリシアコーラス**　家族療法において、ワンウェイミラーの後ろにいる共同治療者が、面接をしている治療者や家族に対して、ダイレクトなメッセージをすることが、家族変化を促進すると考えられる方法。ギリシャ演劇で登場する合唱から名づけられた。

ちょっと、むずかしい気がする、、、

はてな子さん　カウンセリング初学者

難病の
訪問カウンセリング（４）

藤　信子

　難病の訪問カウンセリングの特徴を見る時に、私が考えている１つのポイントは、病気を抱えながら何をしたいか、何ができるかを一緒に考えることだと前の回の最後に書いた。今回はそのことから見てみようと思う。「何をしたいか」、それは「これからのことを考える」ことと言えるだろう。これは、あることに対して不安や恐れを持ったり、苦痛を感じたりして社会生活において不自由を生じる神経症などに対する心理療法とは、少し重点の置き方が違っているようにも見える。この不安や社会生活あるいは対人関係等における不自由さについて考える時には、簡単に言えば今までの生活の中で、その不安等を引き起こす元

となったが意識の上では埋もれていることを思い出し、その問題の歴史に自ら納得する過程と言えるだろう。

一方、ハートの訪問で私が行っていることは、現在の療養生活についての心配、悩みなどを聞き、患者本人や家族のソーシャル・サポートについて考え、その利用も勧めることもする。A さんは、70 代の男性だったが、訪問の前の保健の説明では、本人と配偶者・子どもたちとの間で、呼吸器をつけることに対する意見が分かれ、本人の意思に反して、呼吸器装着になり患者も家族も落ち込んでいるということだった。患者本人は「こんなつもりじゃなかった、妻や娘になんでもしてもらうことになってしまった」と、手術したことを悔やまれる。前に書いたように、ALS の場合進行が早く、呼吸の麻痺が生じることが予想されるので、医療従事者はそのような場合に呼吸器を装着するかどうか、本人と家族の意思決定が出来ているかどうかを時々聞くことになる。呼吸器装着に関しては、判断が揺れることがあるし、意思の確認ができないと、病院に入院すると呼吸器を着けることになるからである。こんなはずじゃなかったという話はあり、この患者・家族はそういうケースだった。以前されていた仕事のことから始めて、趣味について聞いてみた。するとこの人は趣味の友人が多くいて、今もお見舞いに見え、その時は本人が良く話すという妻の話である。車の運転も好きでいろんなところに行ったことも話されるが、自分はアウトドア派なので、身体が動けなくなると意味がないと言われる。しかし妻は友達が自分が運転するから一緒に出かけようと誘ってくれる、と話される。そこから車いすを自分用にすること、車いすで乗れる福祉のレンタカーがあることなど、保健師が話すと外出の話をしてみるが、、やはり「動けないのに生きているのは自分にとっては意味がない」と言われる。しかし外出の話をする時の妻の生き生きした様子を見て、介護をしている奥さんは A さんが外出されたり、楽しまれるのがうれしいと思います、と話した。介護をするのは大変だけれど、本人が家族に笑顔を見せることが出来るのは、ケアする人にとって嬉しいことにつながるということを伝え、落ち込んでいる本人に家族との生活に目を向けることを考えてもらいたいと思った。

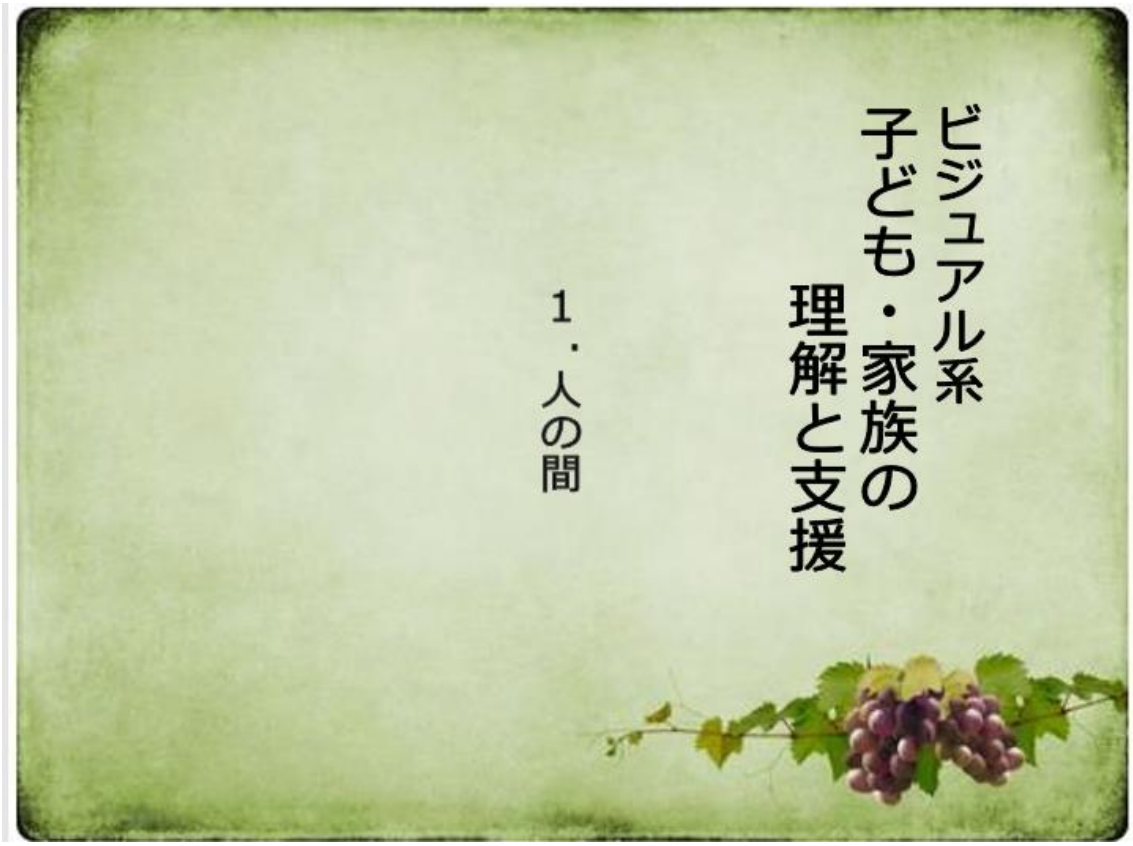
B さんは、ALS の診断を受けてから呼吸器は着けないと決められたが、身体が次第に動きにくくなってくることなどを考えると「死にたい」と繰り返しておられるということだった。仕事のことなど聞いているうちに、この頃はなかなか行けない故郷のことを話だし、そこで過ごした子ども時代の風景や遊びなどを、懐かしく楽しそうに話す様子は、「死にたい」と言われている時の様子とは全くちがっていた。楽しみは遠く離れている孫に電話を

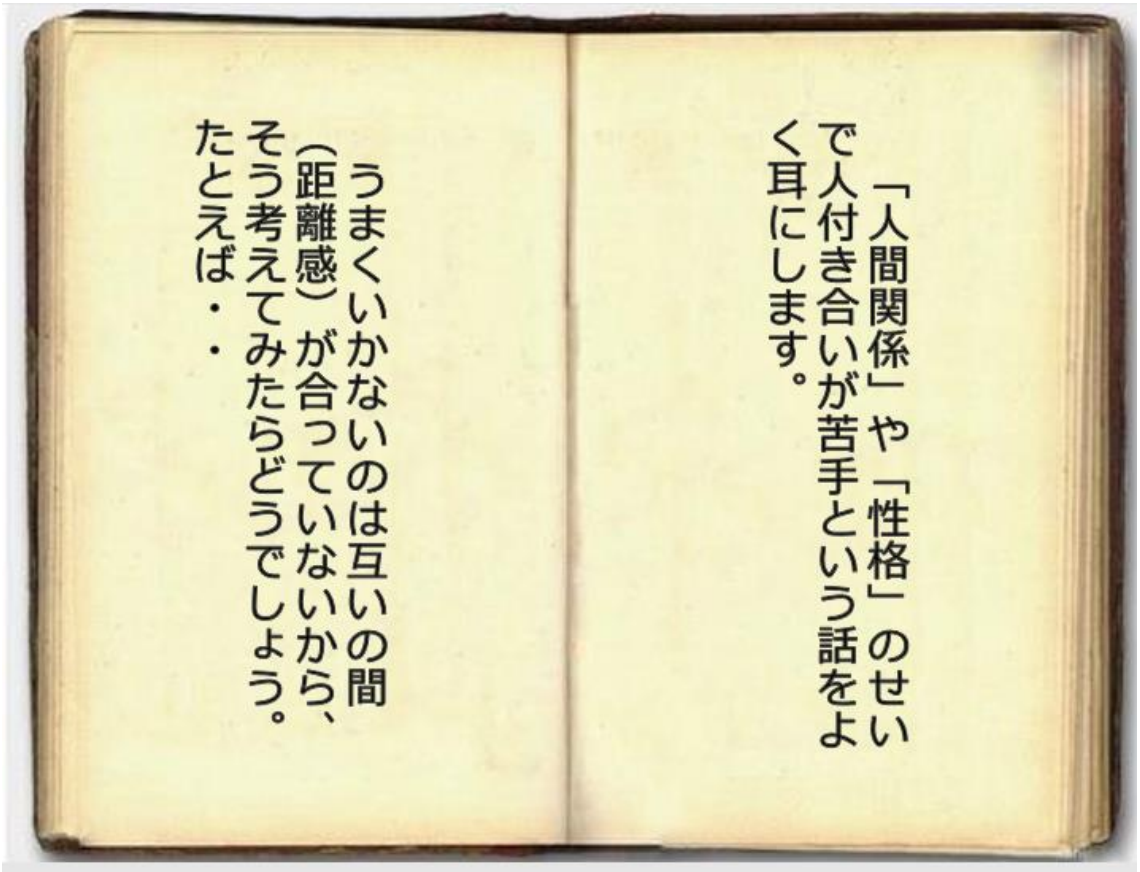
する時だというのを聞いて、B さんが子供のころ故郷でどんなふうに遊んだか、懐かしい景色など伝えたいことを録音して、そのお孫さんに残しませんか？と提案してみた。話の中に孫に伝える大事な風景というような響きを感じたからである。この提案は気に入られて、そうしましょう楽しみです、と賛成が得られた。

A さんは、身体が動かないことで生きている意味がないと思っていたことから、友人や家族の思いを考える方向に少し目を向けるような話になった。B さんは可愛い孫に自分の故郷のことなどを伝えるという役割を見出したと言えるだろう。自分の外に目を向けることで新しいことを考えるようになったようである。

難病のカウンセリングが「これからのことを考える」というのは、身体の自由な状態がいつまでも続くものではないこと、そして命が終わる時のことを考えることにつながることだろう。もちろんこの二人のように、周りを見渡して、友人や家族のことを考えられるという余裕が生まれない場合は多い。むしろ、本人・家族ともに、病気に対する理解が乏しく、病気であることを認めるには抵抗があるらしいという場合も多い。そのような場合は、今の不自由さ、困ることは何か、それに対して、どんなサポートを考えられるか、道具的なサポート面を重点的に話すことも多い。そして患者本人を支えるために、介護する家族のサポートには何が必要かを相談することも大事なことだと考えている。それについても、今の状態から次のことつまり「これからのこと」を考えていると言える。

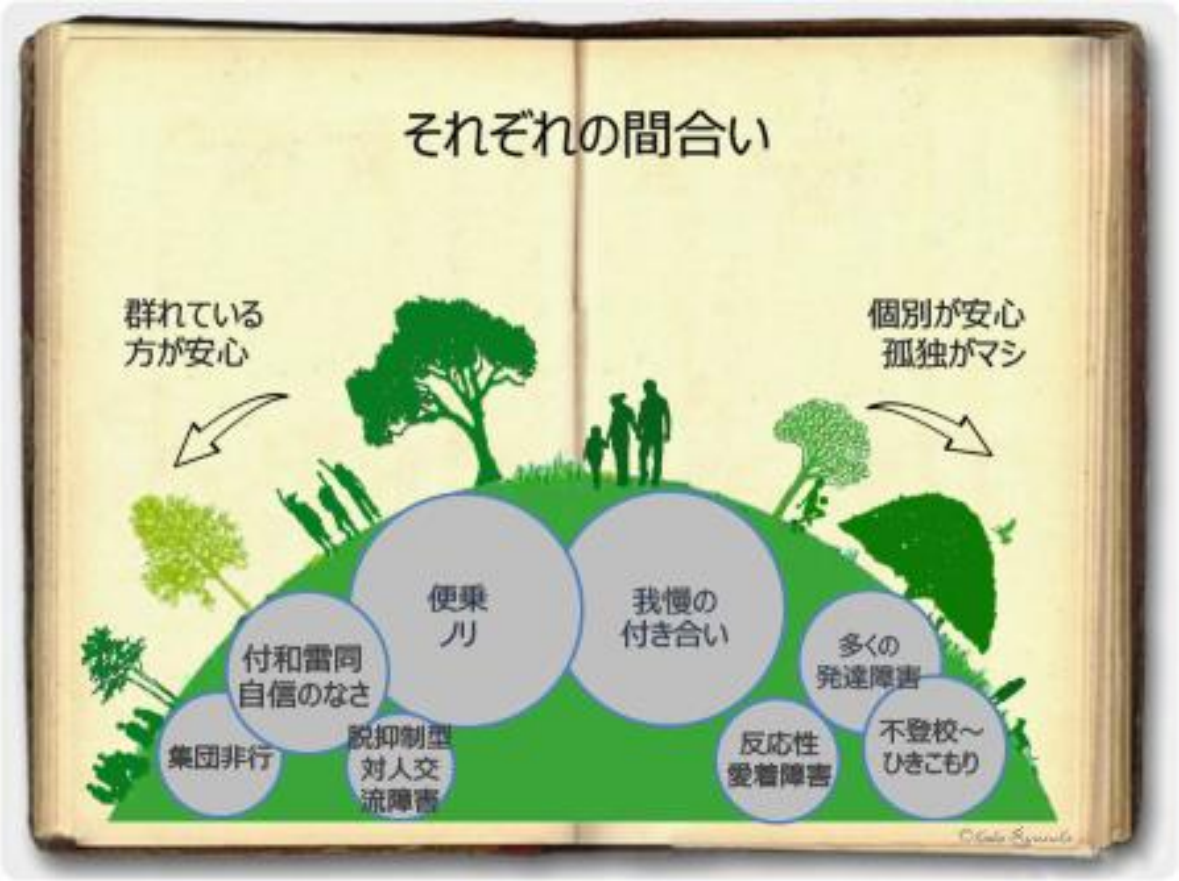
よく考えてみると、統合失調症の人の面接をしていた時は、なぜ今のような状態になったかについて、一緒に考えたわけではない。長く話し合っているうちに症状と自分の特徴に気付くということはあっても、私はそこを最初に面接のポイントにしたわけでなかった。毎日の生活の中で、どうしようかというようなことを一緒に考えてきたと思う。高次脳機能障害の人との面接も似ている。これは問題の元を探して理解し納得するという方法ではなく、できるところから「これから」のことを考えていくということである。ただし、そのためには今までの生活を聞くことは大切になってくる。その人らしさを探すことで「これからのこと」を考えるヒントが見つかることが多いと思うからである。

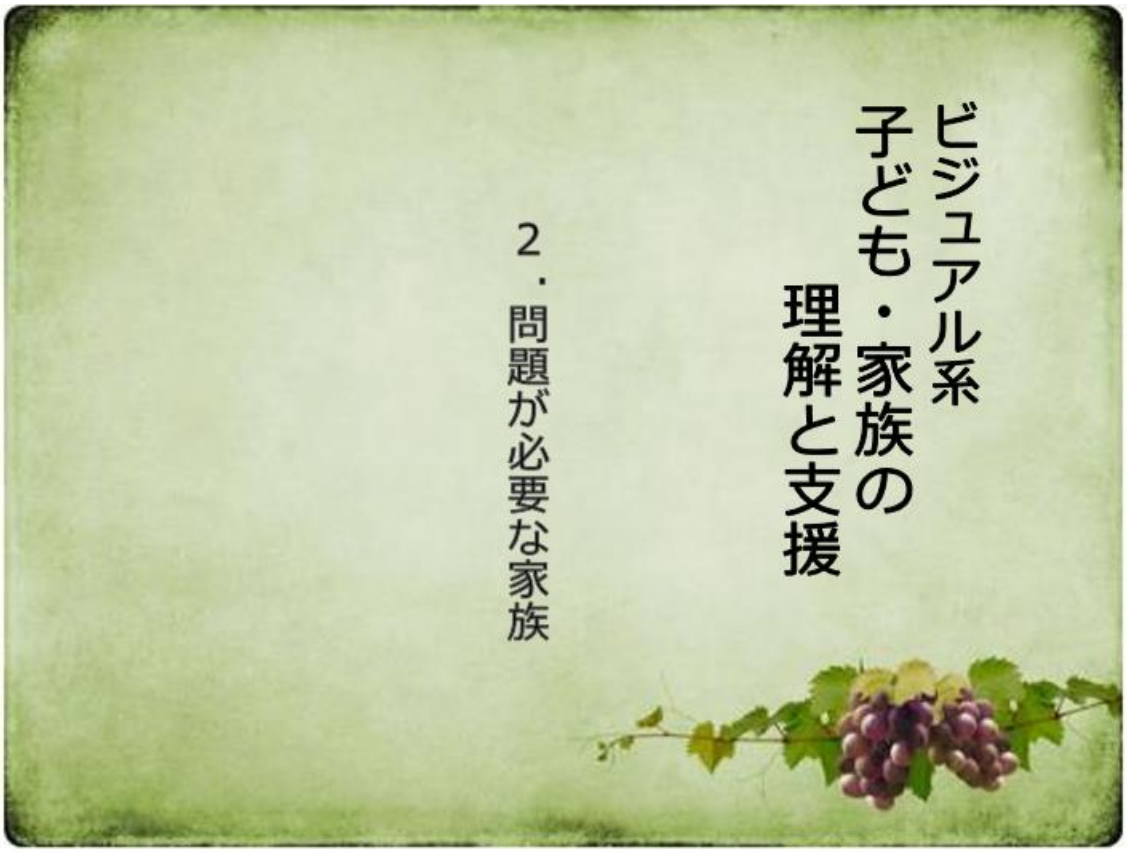

ビジュアル系
子ども・家族の
理解と支援
1．人の間


「人間関係」や「性格」のせいで人付き合いが苦手という話をよく耳にします。
うまくいかないのは互いの間（距離感）が合っていないから、そう考えてみたらどうでしょう。
たとえば・・

こんなに幅があるのだから、両端がうまく付き合うなんて無理な話。

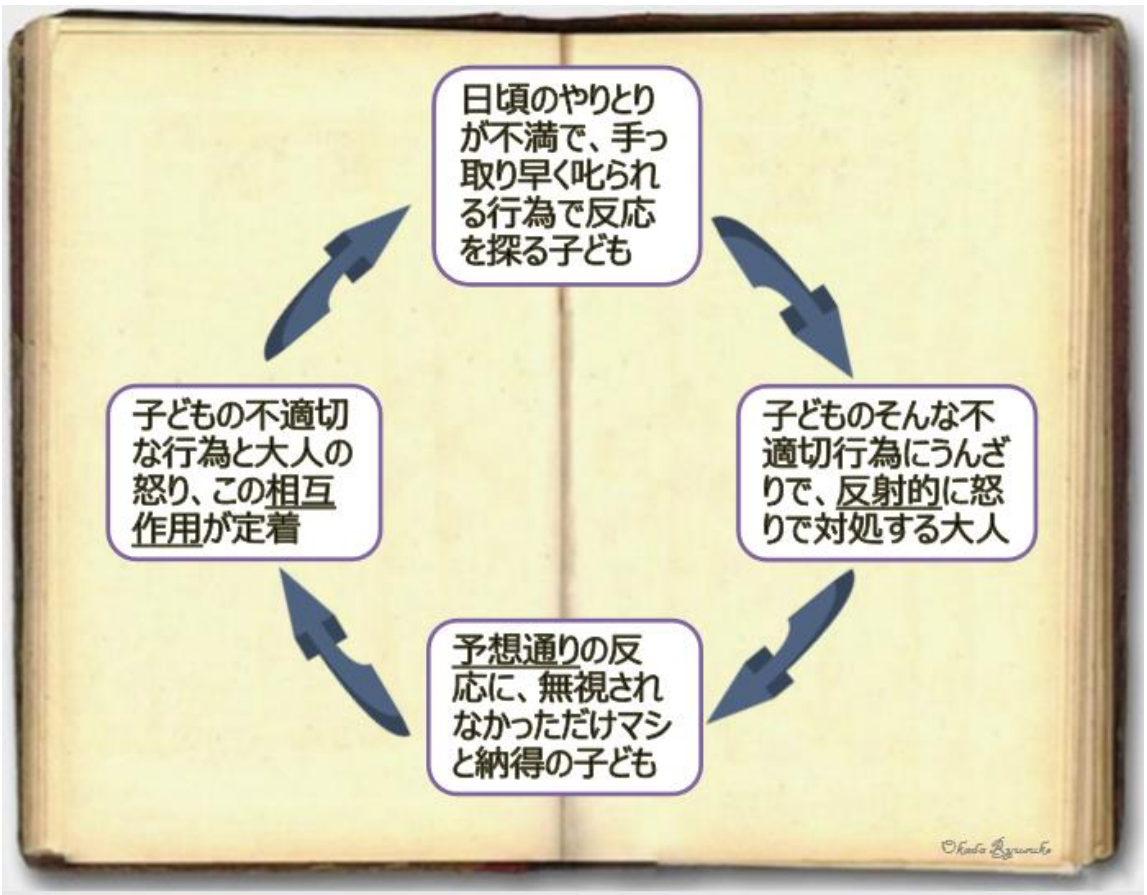
自分のポジションを知り、間が合う人と付き合う、それが自然な生き方だと思います。

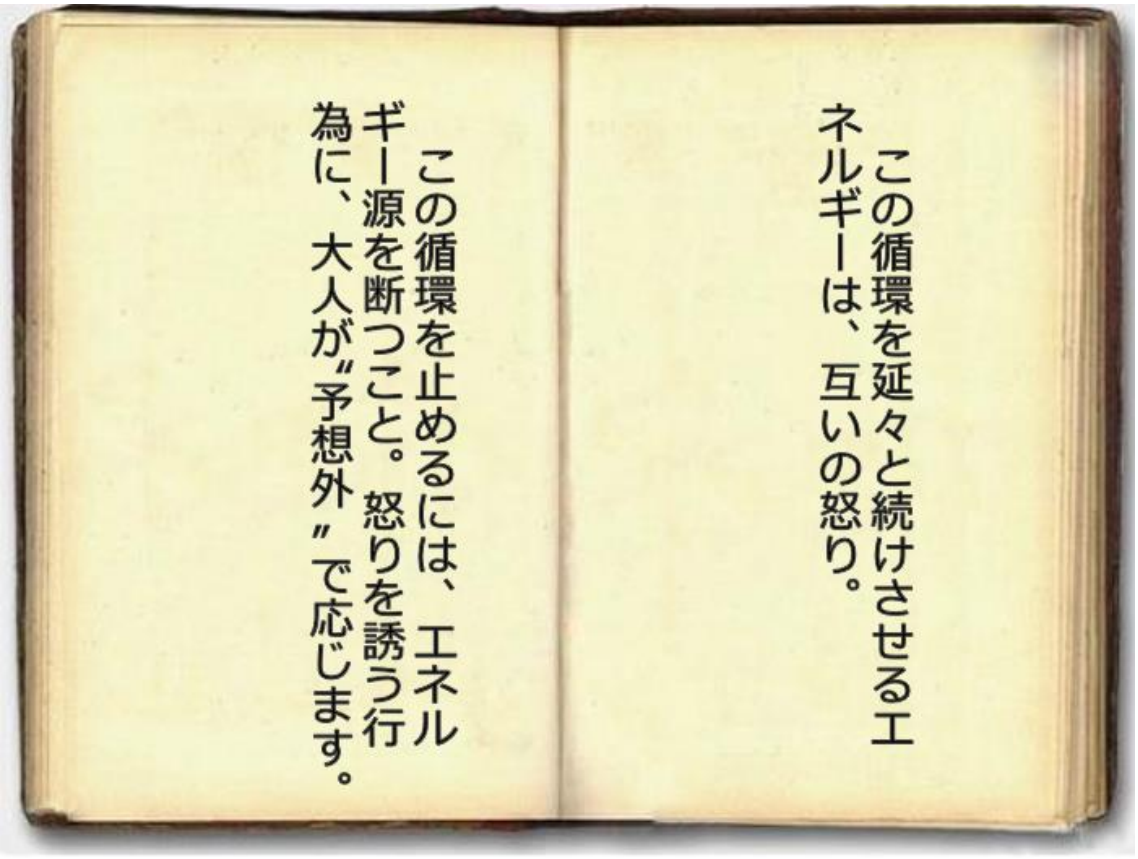

それぞれの間合い
群れている
方が安心
個別が安心
孤独がマシ
便乗
ノリ
我慢の
付き合い
付和雷同
自信のなさ
集団非行
脱抑制型
対人交
流障害
多くの
発達障害
反応性
愛着障害
不登校～
ひきこもり

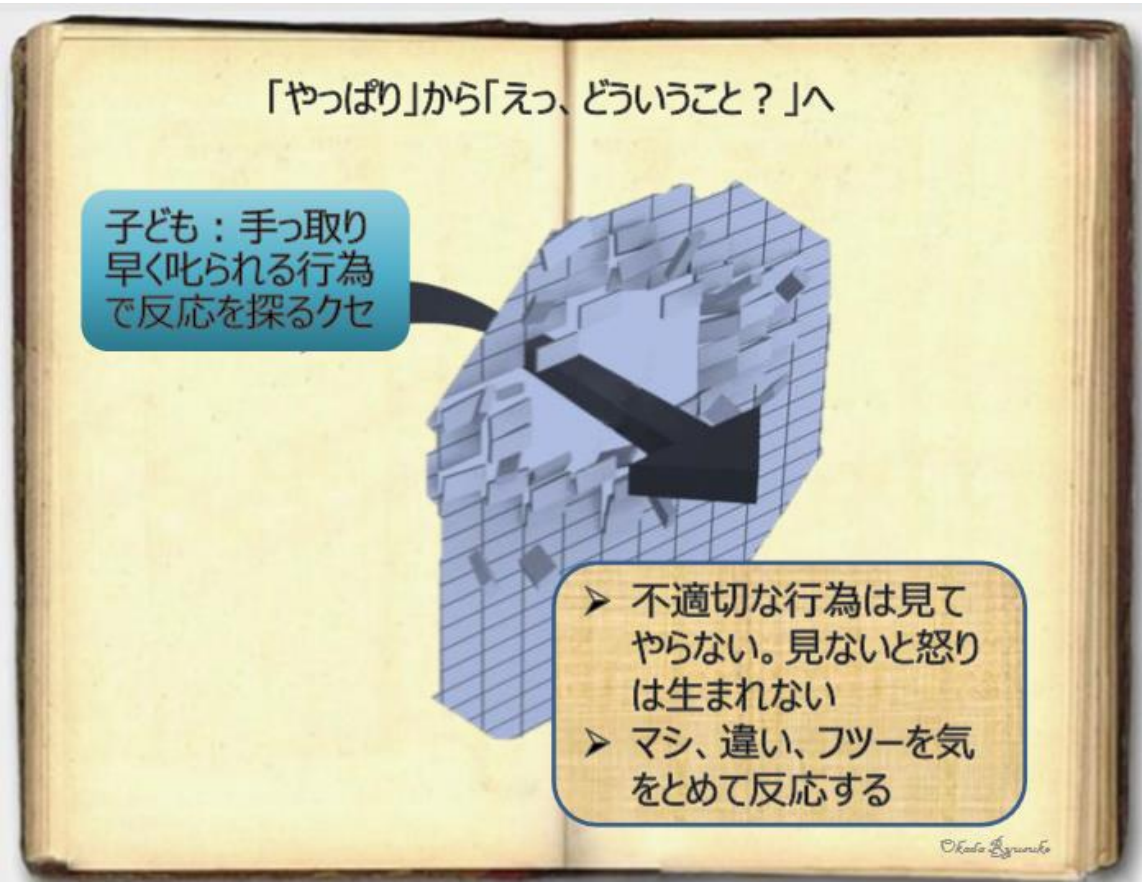

ビジュアル系
子ども・家族の
理解と支援
2．問題が必要な家族

これではいけない、そう思いながら同じことを繰り返す家族は少なくありません。

変化を拒んでいるのは、「思わず反射的に」、「つい習慣的に」、「いつしか自動的に」というパターンです。




この循環を延々と続けさせるエネルギーは、互いの怒り。
この循環を止めるには、エネルギー源を断つこと。怒りを誘う行為に、大人が"予想外"で応じます。


「やっぱり」から「えっ、どういうこと？」へ
子ども：手っ取り早く叱られる行為で反応を探るクセ
➢ 不適切な行為は見てやらない。見ないと怒りは生まれない
➢ マシ、違い、フツーを気をとめて反応する
Okada Ryusuke

続・家族理解入門

家族の構造理解・応用編

第４回

団士郎

退職してから、コンサートツアーのように全国でワークショップを繰り返している。先日は東京（両国）、群馬(渋川)、富山(高岡)と三日間連続だった。そこでは「家族理解」という言葉で表していることを、参加者に繰り返し話し、実習して貰う。

支援、援助には様々な要素がある。だがその根底にあるのは、対象者理解である。逆に考えれば明白だと思うが、誰にも理解されていないと思って沈んでいる人の沼が一番深い。

この世界で、誰かは自分のことを分ってくれている！そう思えたら、一息つけたり、もうひとがんばり出来たりする。

基本的なところで、人は皆、自分のことは自分で引き受けて生きてゆく。だからその時、周りの誰かの理解が届いているのは有り難い。

家族理解WSでは、基本的にこの一点の実現のための考え方とスキルを実習している。たいそうなことではないから、繰り返していると上手になるし、現場で役立っている実感も持てる。それが専門職援助者としての自分の安定感にも繋がる。

四　同胞サブシステム

家族の構造について考えるとき、サブシステムの話になると、関心のおおかたは「夫婦・両親」に向く。家族にとって、中核となるサブシステムがカップルであることは異論のないところだ。

一方で近年、ある種の家族の切なさを秘めたテーマとして、同胞サブシステムのことが浮上の気配を見せている。確かなデータを持っているわけでも、そう大きな時代のトピックスになっているわけでもないが、日常の臨床場面で私はなんとなくそう感じる。

背景として予想しやすいものの一つが高齢化社会だ。子どもの数は少なく、両親の寿命は延びた。年金問題のずさんさに代表されるように、社会の様々な前提のあっけない崩れは、個々人の老後に少なからぬ不安を抱かせている。振り込め詐欺被害の底流にも、これがあると思う。

こんな時、人が自分の未来を思って、なにがしかの防衛的行動に出るのを止めることはできない。その影響が兄弟姉妹のある家族関係に反映してきているのではないだろうか。

かつて多人数の同胞関係には蓄積されたパターンがあった。そんな中で育った人にも同胞イメージの共有があった。そこでは共存や分担は自明の理屈だった。

一方、この三、四十年、社会の表向き主張は個の確立、自立だった。家制度の名残のある大家族には否定的気分が主流となり、核家族が囃された。共同から個へ、共用から個人用へ、大家族から核家族化へ、この価値観が戦後社会の消費拡大を促し、経済復興のベースになってきた。しかし現在、それがまた方向を変え始めている。

いうまでもないことだが、私達の社会はいつも変化し続けてきた。それが結論に到達することはない。いつも揺れ動き、加えて右肩上がりの経済成長も誤解である事を実感させられた。変化することは止められないし、良くなるばかりの変化ではないことも認めざるを得ない。

家族という枠を放棄するなら、今とは違った現実も登場するだろう。しかし人は「家族」という括りを止めようとはしなかった。

個別にはそれを訴えた人も、実行した人もいた。少子化も非婚化も家族の継続を拒否しているかのように映るし、社会は家族の解体を推し進めたがったようにも見えた。しかし私は、この考え方の根底は、とても「家族」欲望的だなと思う。

自分の家族や親子関係に苦言を並べたベストセラーを書いた女性の中に見える家族観は、見事に古典的家族への欲望に思える。家族は古くて新しいテーマである。誰が家族論を語りたがっているのかに関心を向けておくのも大切だ。

家族解体論は新しそうで古くさい。深まらなかった繰り返しの問題意識だ。

実家との距離

家族に関する、今日的戦略志向として、実家との距離の話題が登場したのを興味深くみた。ここには当然、心理的、物理的両面の距離が含まれる。

私が指導に関わっていた修士論文の中に、「女子学生の就職希望条件」を調査したものがあった。

今日の社会は、男女雇用機会均等法や男女共同参画社会などの言葉に表わされる方向で進められてきた。そして女性にも総合職の機会をと求める時代がしばらく続いた。

ところが最近の女子学生の就職希望条件を調査してみると、男子学生との間に、大きな違いが見られる項目があるという。

それは就業地に関する地理的希望である。多くの女子学生ができれば自宅から通える、あるいは

いざという時に、数時間で実家に帰宅できる場所を望んでいるという。

これを親離れの出来なさなどと短絡するのは一面的でしかなさそうである。彼女たちの多くは、大学進学については実家を離れて下宿している。ではなぜかと言うことになるが、それは後述する。とにかく、この点だけは男子学生の就職希望と大きく異なっている。

これは実際、私の世代の共働き主婦であった知人の口からも、こんな風に聞かされた。

「娘が東京の大学に行きたいと言った時、周囲は反対したんだけど私は賛成したの。都会に出て、いろんなものを見聞きして、可能性にチャレンジしてくれたらと思ったの。私の時代も、ずいぶん自由にはなっていたんだけど、やっぱりなかなか実行できないことはあったでしょ。だから娘の人生のじゃまはしたくないと思った。

ところがね、いよいよ卒業という時になったら、家に戻って地元で就職しようと思うって言ってきたのよ。なんなのそれって思った・・・。でもそうか、最近の女の子って、そんな考え方の人も多いんだ・・・」

他にも、離婚後に実家に戻った三十代の姉親子と未婚の妹との間で、年老いた両親の取り合いのような意味不明の心の傷合戦をしているケースにも会った。

私が気になっているだけかもしれないが、近年、同胞サブシステムに関わる葛藤がいろんなケースの背景に見えているように思う。そしてそこには、親世代との世代間境界ラインの設定失敗が漂っている。

子どもが離れられないのか、親が離したくないのか。子どもは離して欲しいのか、つかまえていて欲しいのか。気持ちから言えばまさにアンビバレント、両方に決まっているのだが、親の行動としてどれが適切かの答はずっと昔に出ているはずだ。

人は基本的に自分のことを自分で面倒見られる自立を目標に、育てられてきたものだ。そしてそれが確保されたところで大人になった同胞の付き合いが成立するのだろう。

＊

女子学生だけに見られた就業地希望は、女性の生き方に関する優れた総合的判断の一面だとも言える。

彼女たちは就職時に、いずれは実現したい結婚も、出産も、子育ても、そして当たり前のように増えた離婚の可能性も含めた人生をイメージしているらしい。

その場合、暮らしのベースを馴染みのある地域社会、そして子育て支援の人的資源（実家の親）の得やすい所にと考えるのは、かなり戦略的だと言えるだろう。

二世代をまたぐ兄弟葛藤

親世代と

友人は兄弟二人の核家族で育った。兄が大学進学で家を出て、三年後に彼も大学進学で家を出た。そして先ず兄が卒業を迎えた。卒業の時期、どこで就職し、どこで暮らすかは様々な要因で決定される。

詳しいいきさつは知らないが、結果的に兄は地元には戻らず関東で就職した。

一方、二年後、友人は地元に戻り、自宅から通勤するようになった。その後、一家に何があったのかは知らない。細々した家の中の事情をいちいち聞かされる程の行き来もなかった。

彼の母が入院中だと聞かされたのは、「実はもうそれほど時間がないのだ・・・」と知らされた時だった。そしてあっと言う間に亡くなった。女性の平均寿命を考えると、ずいぶん早死にだった。

ここに初老の父親が一人残された。兄はそのまま関東で結婚しており、友人も結婚をして家を出て、子どももあった。

単身になった父の今後について、兄弟を含めたどんな話し合いがなされたのかは知らない。ただ、

亡くなる直前、友人は母から、「残るお父さんのこと、よろしくね・・・」と託されていたようだ。

ちょうどその頃、兄も転勤で関西勤務になり、大阪近郊の賃貸マンションに親子で暮らしていた。両親の住んでいた一軒家を一部増築し、友人（弟）一家がそこに入る話は、兄との相談抜きに進められたらしい。

こういう話を想像も含めて考えてみると、実際悩ましいことが多い。というのも、それぞれに配偶者がいて、そこには意見が存在する。父親は彼ら兄弟の肉親だが、今後の日常生活を考えると、兄弟よりもそれぞれの妻の意見が重要になるのは当然だ。ところがこんな話をフランクに腹蔵なく話し合える義理の姉妹などなかなかない。

そして彼ら家族の間にも、そういう難問が立ちはだかったのだろう。これが兄弟の意思疎通が決定的に困難になる始まりだった。兄弟家族間の行き来は全くなくなった。

祖父はずいぶん長い間、兄の子ども達に入学祝いや、卒業祝いなど送っていたそうだが、そのことに一切反応はなかった。

そしてやがて父も他界。この段階で兄が、法定相続分の確保にいきなり動いた。遺産といっても居住していた次男と共同名義の古家と土地以外、ほとんどなかった。不動産の父親名義分が相続対象になった。

とはいえ現に弟一家が住んでいる家である。評価額も実際は土地だけのものだった。このような場合の多くは、年寄りが世話になったという気持ちで、兄から相続放棄が申し出られて終わることも少なくない。

しかし彼らの場合、話し合う余地もなく兄は相続分を主張した。弟一家にすれば、土地・家屋を売却して兄の相続分を支払い、自分たちは転居するなど出来ない話だった。

兄弟で家庭裁判所の調停に出向くことになり、結果として友人は数百万円を兄に支払うことになった。

息子の進学でものいりな真っ最中に、兄への支払いのために新たなローンを組んで対応した。滅多にそんなことを話さない彼だったが、弱音を吐くようにこの話をした。

子世代に

そんな彼が今、自分の息子のことで、自分自身と全く同じ事態を抱えている。二人の息子の父親である彼は、長男との音信は希である。弟は自宅から大学に通い、結婚もした。その経過にいちいち両親は関わっていた。しかし兄のことはほとんど話題に上らない。まるで彼自身の兄と親との関わりの再現のように、親として弟に偏って近くいる。

友人は二人の息子の親として生き始めたとき、将来自分がこんな風になるなど思ったことはなかったろう。おそらく日々の暮らしがそれほど顕著に兄弟で区別されていたわけではない。小さな違いの積み重ねと、時々生じる選択の指し示す方向に従っていたら、こんな所にたどり着いたということだ。

愛情と名付けられたパイの大きさには限りがある。我も我もと求める子どもたちに親は、おそらく平等配分しているつもりだったのだ。しかしもらう方はそう思えなかった。とくに与えられた分量が少ないと思ってしまった者の記憶にそれは焼き付く。

カップルにおける男女の愛情は何等分かするものではない。しかし同胞の受ける愛情は、頭数に等分される。そしてそこにあるわずかの多い少ないに、いつも同胞は反応するのだろう。

腹違いの姉弟

古い友人（女性）から聞かされた話だが、妻というものは配偶者が亡くなってからも、その不貞やそこで生じていた結果を、簡単には認めも忘れもしないという。

友人の父が亡くなる直前、病院に来た見舞客

が職場の部下などではなく、母に内緒でずっと関わりのあった女性との間の、腹違いの弟だったと伯父から聞かされた。その話を友人は、意外にあっさり現実として受け止めた。

親子関係が事実として証明される材料はたくさん残されていた。しかし腹違いの弟は、何かを要求して現れていたわけではなかった。むしろ何かを求めずとも、立派にやってゆけるように支えてもらった実父が、臨終の床にあると聞かされ、「ありがとうございました」と言っておきたかったと現れたのだった。

細心の注意を払い、病院で付き添う妻(本妻)に気づかれないようにと、苦労しての面会だった。亡くなった後の葬儀にも、会社関係者として出席していたらしい。

相続

初めて知った弟のことだったが、友人の弟妹も比較的スムーズに事実を受け入れた。そして遺産相続の話し合いの中で、姉弟はあの人にも相続権があるのではと考えた。そして、法的な結論はともかく、話し合いはしておく必要があるという認識に至った。三人は一致して、「もうお父さんはお墓に入ってるんだし・・・」と思っていた。

そこで友人(長女)の口から母に、事実が告げられることになった。しかし母の怒りは予想以上のものだった。絶対に許せないという夫への思いを、残された腹違いの息子とその母親に向けた。

友人はしばらく母の側に立って、悔しさや無念さにつきあった。しかし母の話を聞きながら、そこまで厳しく拒否するものかと何度も思ったという。

なるほどと思ったのは、それが金銭問題ではないというのが、余計にこだわりとして爆発していたことだ。もし腹違いの弟が金銭的に困っていたのなら、母の気持ちはまだ納まったのかもしれないと友人は言った。

それなら、幸い自分たちは経済的に困っているわけではない。気の毒だからと少しくらいは考えても良いと、母はたぶん言ったと思う。

しかし事実はそうではなく、自分の知らないところで夫は、毎月きちんと生活費を送り、その息子を大学まで進学させ、節目には我が家でしたように、彼にも父親役割を果たしていた。だからきちんとした社会人に育っている。母はそれが許せなかった。

自分たち(姉妹弟)は突然現れた血の繋がった弟が、きちんと暮らしていて、わきまえを持って登場していることを良しと思っていたが、母にはそれが許し難かった。だから嘘をつかれたまま死なれて、まだこの上、私が何をしなければならないのだと怒ったのだった。

結局、事の決着はほぼすべて友人(長姉)が、動いて行った。しかし伏せておくわけにもいかないので、随時報告はしたのだそうだ。母親は経過を聞かされるたびに怒り、不安定になったそうだ。

血と契約

妻と夫は血縁のない赤の他人である。その上で、強く結ばれているはずの契約関係当事者なのだ。だからそこに知らされていなかった嘘があったことを母は認めることも、許すこともできなかった。

亡くなってしまった父のことを、今更責めても益のないこと・・・などと考えられるのは血縁者なのかもしれない。そういう意味では家族の中で配偶者は孤独なのかもしれない。

友人はそんな歳になって現れた弟に興味深く関心を向けていた。そして表には出さなかったが父親の行状も、それほど批判的には見ていなかった。むしろ言葉の端々に、彼ら母子にきちんとしてあげていた父を、男らしい人だと思っている節もあった。だからそれぞれが安定した暮らしの自分たち三姉弟に、新たに弟が加わったことを、意外な喜びと感じているところもあるように見えた。

これを一般的だとは思わないが、こんな話を聞くと同胞サブシステムと夫婦サブシステムは決定

的に異なるものだなぁと思う。そして改めて、家族の存在を左右するサブシステムは夫婦なのだと思う。

おわりに

少子化の流れの中、一人っ子も少なくないとなると、家族の議論に兄弟姉妹のことが当然のようにエントリーされているとはいえない時代になった。だから同胞サブシステムのことを深く考えたことがなかった。昔から言うように「兄弟は他人の始まり」だと認識していたら、そう困ることもないと思っていた。

中国は長らく一人っ子政策を採っていた。その国策が変更された今、一人っ子世代の問題を社会問題として抱えて今が動く。一方で、少子化対策に苦慮する先進各国がある。後者では先ず、兄弟姉妹の出生を推進する方向で一致をみている。

このどちらにおいても、同胞サブシステムの葛藤や課題は浮上しにくくなっている。しかしそこに問題がなくなったわけではない。

時代と共に家族観も変化し、かつて抑圧と忍従の象徴だった家父長制の「家」の記憶も多数派のものではなくなった。社会に共有された家族意識も変化し続けている。

いつの時代も、何事もなく平穏無事に暮らす自分たちを想像することなどできはしない。今を生きる家族には、今の苦しさや大変さが解決課題である。その解決指針にひょっとすると、昔多くの人々が毛嫌いして逃れたがった三世代家族が再登場してきているのかもしれない。

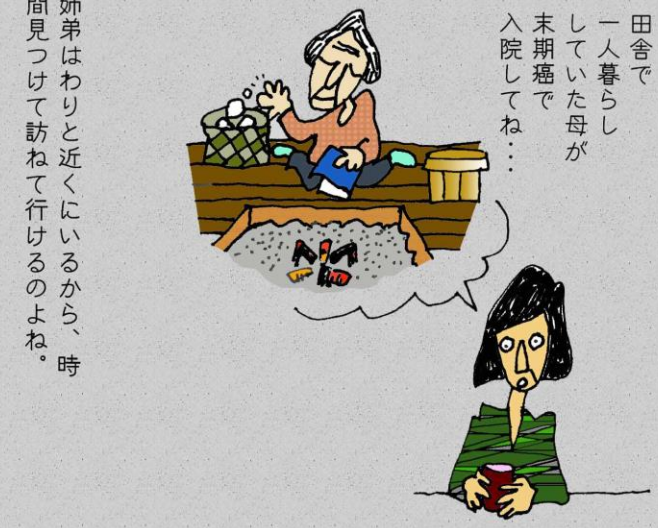
今日の子育て支援策が、現実吟味を経て到達する姿は、ひょっとすると昔ながらの大家族テイストになる気配すら見え始めている。

人は誰もそれほど賢くはないし、結論の出た世界に生きることもない。いつも途中経過の堂々巡りだ。はたして私たちは、いったいどんな家族を実現したときに、満たされるのだろう。

お客様控え

木陰の物語

団　士郎



姉弟はわりと近くにいるから、時間見つけて訪ねて行けるのよね。

でも私の所は遠いから、そう何度もってわけにいかないじゃない。

普段はこっちが甘えてばかりだったから、思い切って介護休暇を取って故郷に帰ってたの。

老後に予ども達に迷惑かけたくないと強く思っていた人だから、仕事を休ませて申し訳ないって最初済まながってね。

聞いたら、ポックリ寺とか、コロリ観音なんて所に、バスツアーで行ったりしてたのよ。

でも、こちらも覚悟決めて行ってるわけだから、時間はあるのよね。

病室で一日一緒に
いるでしょう。
いろんな事が
話せてね。
初めてかもしれない、
あんなに長く
いろいろ話したの。

そしたら
こんな事を言うのよ。
ぽっくり逝きたいと
思っていたけど、
本当にそうなったら
最後に子ども達には
会えないで
死んでしまうことに
なるなぁと
思ったんだって。

それで一週間くらいは
寝込んでからにって、
お願いを修正に
行ったんだって。

二人で
大笑い
しちゃった。

入院することになって、
貴女とこんなに
ゆっくり過ごせて、
嬉しかったって言ったの。

でもそれは
私の方こそでね・・・。
最後に
あんな風に
過ごせて、
思い残すことは
ないって
お葬式で
思えたの。

でもね、
こんな事も
あったのよ。

姉とはちょっと
歳が離れていて、
弟はすぐ下
なんだけどね

ある日、母が、
「家のことは何もかも
放たらかしで出てきて、
恭子（姉）に任せたけど、
引き出しの中、
見るだろうなぁ・・・」
って言うの。

「気になるものなら、
取ってこようか？」
と言っても、あの子は
きっと気にするからねぇって。

お客　2

「何のこと？」
って聞くと、
宅配便の控えの
綴りだって言うの。
几帳面な母だから、
そういうモノも
きちんと管理
してるのね。

「恭子のところにも、
お前にも健太にも
収穫の時期や
旬の季節には、
みんなに
送ってたんだよ」

「でもね、何気なく見てたら、
あんたの所に送った伝票の
数が、恭子の
ところより
大分多かったの」

「お前の所は
子どもも
多いし、
食べ盛りは
大変だろうと
思った
だけなんだ
けどね・・」

「恭子はそういうこと、
気にするからねぇ」
って本当に
心配そうに
言うの。

「そんなこと、お姉ちゃんは
思わないって」
私は本当にそう思っていたの。

ところがね、
介護が長引く
ことになって、
何度か行き来する内、
ちょっと無理言って
姉にお願いすることが
出来たとき、

母が亡くなりかけて初めて、
姉のことを自分は知らな
かったんだって気づかされた。

そして母は、
姉のことを
知っていたし、
私が姉のことを
理解していないって、
それも知って
たんだなぁと思う。

お客　3

家族って不思議ね。
弟のお嫁さんも、
「お義姉さんに
遠慮してる」って
彼に言うらしいのよ。
兄妹って難しいわね。

こんな兄弟姉妹間の話は、
これまでにいくつも
聞いた記憶がある。

そこにはいつも、
愛情の話が絡まっていた。

両親が姉妹を
公平に扱わなかったと
訴えていることが多い。

人は誰かに、
自分を一番
大切にして
もらわないと
気が済まない
もののようだ。

そして、
してもらった
ことは忘れても、
してもらえ
なかったことは
何時までも覚えている。

「上手に
死ぬのって
大変ね…」、
彼女がそう
つぶやくのを、
私は黙って
いろんな事に
ちょっと胸が
詰まりながら
聞いていた。

お客　4

社会的養護の新展開３

― 出口から入口へ ―

浦田　雅夫

京都造形芸術大学

施設を出てから

「養護施設のアフター・ケアの問題は，施設長をはじめ職員によって実際に心して行われてはいるが、施設に現在いる児童の養護に手をとられて、時間も労力も費用も乏しく、余り退所児童の補導にまでは手が届かぬというのが実情で、折角養護した児童がどうなって行くか、気がかりになりながら、つい放ってしまうという傾向にあるが、何とか道を拓いて、立派なアフター・ケアを確立しなければならないと思う。そのためにはアフター・ケア指導員を施設に設置する必要がある。」

これは、約 60 年前に潮谷総一郎氏が書いた論文の一部である。潮谷氏の論文から 45 年が経過した、2004 年、児童福祉法の改正を受けて、児童養護施設等では、ようやくアフターケアが義務化された。しかし、具体的に誰が何をどこまでしなければならないのか不明確な部分がたくさんあり、児童の担当職員が自身の休日にボランティアで関わり続けるということも珍しくなかった。また、潮谷氏の指摘の通り、必要とされながらも、実質的には関われないということもあったのだろう。また、アフターケアに係る公的な経費支弁がなかったことも大きい。

東京都では 2012 年より各施設に自立支援コーディネーターをおき、リービングケアからアフターケアまで計画的 に支援を行っている。これは、まさに潮谷氏のいう「アフター・ケア指導員」にあたるものだろう。

潮谷氏はアフターケアについて、さらに以下のように述べている。

アフターケア事業ネットワーク

「日本全国主要都市に養護施設、児童福祉司、児童委員などで相互連携のとれるアフター・ケア宿泊施設をつくって、退所児童がどこへ行っても、その最寄りのアフター・ケア宿泊施設の活動で指導してもらい、温かく迎えて貰えるならば、どんなにか幸いであろうと思う。そのようなアフター・ケア宿泊施設を新設する運動もまた必要ではないか。アフター・ケアの組織的活動、有機的機能をもつことが望ましい。」

近年、各地で「退所児童等アフターケア事業」ができはじめている。2014 年 10 月時点

での厚生労働省調べによると「退所児童等アフターケア事業」を行っている事業所は、全国で 20 か所となっている。しかし、今、現在、全国でどれくいの団体が退所者支援を実際に行っているのか、どのようなことを行っているのか、実態は定かではない。

そこで、アフターケア相談所「ゆづりは」を運営する高橋亜美氏を中心に、この 6 月、東京で「アフターケア事業全国ネットワークえんじゅ」設立記念シンポジウムが行われた。全国津々浦々すべての団体ではないが、多くの団体がこのネットワークに参加している。退所者にかかわらず、だれもが進学や就職、転勤、結婚等々で転居をする。潮谷氏がいうような「宿泊」まではできない事業所のほうが多いと思われるが、全国のどこへでも、退所者が相談できる体制ができることはよいことだ。行政区分にとらわれず、支援を行うことが実質的には必要である。また、親を頼ることができない人は退所者に限定されることではない。退所者に限定せず、ひろく若者の相談やサロン活動を行っているところもある。これらは、今後の課題だ。

さて、これまでになく、退所後の支援が近年、注目されるようになり、2017 年 3 月末に厚生労働省は、「社会的養護自立支援事業等の実施要項」を定め、2017 年度から 18 歳（措置延長の場合は 20 歳）到達により措置解除されたもののうち、「自立のための支援を継続して行うことが適当な場合」について、原則 22 歳の年の年度末まで個々の状況に応じて引き続き必要な支援を実施するとした。」

支援コーディネーターを誰が担うのか、各自治体によって異なるが、何れにせよ措置解除前に協議の上、「継続支援計画」を作成することになった。適切な運用を期待したいが、反作用として、「甘やかしてはいけない」といった声も少なくはないだろう。

筆者がかかわる京都のメヌエットでは、施設等を退所した若者を中心に相談支援のほか、月に１度、食事会を行っている。ご飯を食べてまったりとすごす１日。

京都ならでは、お供えのお下がりを頂戴することもあり、ありがたく当事者でわける。「なんか法事のあとみたい」といった人がいた。そう、法事のあとに親戚中でお供えを分けるあの感覚。施設でもなく、実家でもなく、でもちょっと世話焼きな、親戚みたいな、おばちゃんやおっちゃんが待っている。

facebook ：Minuet Kyotoaftercare
mail：kyoto.aftercare@gmail.com
tel：075－811－0600

第３章　キャリアの接合点

―南丹ラウンドテーブル（2）―

北村　真也

「南丹ラウンドテーブル」の「南丹」というのは、この知誠館のある亀岡市を含む地域の呼称です。そして「ラウンドテーブル」というのは、この地域で青少年の支援に携わっている教育、福祉、心理等の援助者のための学びの機会として 2011 年に自主的に立ち上げられた学びの場です。それが 2012 年からは、京都府の地域力再生プラットフォームとしての位置づけを得て、今日に至っています。

南丹ラウンドテーブル自体は、年 4 回実施され、毎回 3 時間を通したディスカッションをおこないます。その実施においては 2 つの約束が決められており、毎回冒頭でそのことが繰り返し確認されています。一つは、参加者はその所属の一員としてではなく、個人として参加してもらうこと。そしてもう一つは、それぞれが当たり前に考えていることに対してあえて問い直しをおこなうというものです。例えば、日々若者の就労支援にあたっている人があえて「支援とは何か？」ということを考え直してみる、といったことです。この省察的な思考が、支援という大きな概念を揺さぶり、概念そのものを更新させていくきっかけとなっていくことを期待しているのです。現場に働く人間は、私も含めて現実的な対応に追われ、俯瞰的な視点や大きな概念を更新させることに対しての意識が薄くなりがちです。そこにあえて楔を打ち、さらに自分たちとは違った領域の人たちから、違った角度の意見を求めることを通して、簡単には答えの出せない問いに考えをめぐらせてほしいと思ったのです。具体的な参加者としては、学校の管理職、教員、京都府（青少年、福祉、心理）の職員、児童相談所、保健所、NPO 職員、マスコミ、大学院生、大学生、知誠館の生徒や卒業生、その保護者等が挙げられます。

南丹ラウンドテーブルでは、知誠館代表でもある私が、ここで日々繰り広げられる若者たちのエピソードと、それを捉える私たちの社会臨床学的な視点を伝え、それをきっかけとして、参加者によるディスカッションがおこなわれます。そして、その進行は、京都学園大学人間文化学部教授の川畑隆先生にお願いしています。今年度のラウンドテーブルは、それまでとは少し趣向を変えて「若者のキャリア」ということに焦点化して考えてきました。だから、本稿においてみなさんにご紹介するのは、若者のキャリアというテーマに沿ったラウンドテーブルの記録です。キャリア形成という課題を抱える若者たち、あるいはその渦中を生きている若者たち、そしてそのキャリア形成を支援する、あるいはその決定に関わる大人たち。そのようなさまざまな視点が交差する学びの場の可能性を考えてみたいと思っています。

なお、以下のエピソードに登場する南丹ラウンドテーブルの参加者のうち、塾長は私、北村真也、川畑は

進行役の京都学園大学人間文化学部教授の川畑隆先生を指し、他の実名表記は知誠館のスタッフたちです。それ以外の参加者は、個人が特定されないようにすべてアルファベット表記とさせていただきました。また、発言の内容で個人が特定される可能性があるものにつきましては、具体名を省略しています。

2. ストレーターではない若者たち

「ストレーター」、それは大学まで一度も躓くこともなく進学していき、2 回生の後期から就活のためのボランティア経験を重ね、3 回生の夏にはインターンシップへ参加、そして冬から就活を本格的に開始するといったようなライフスタイルの、日本のマジョリティである人々を指すコトバです。前回のラウンドテーブルでは、まさにそんなストレーターである学生さんたちに集まっていただき、就活の実態を赤裸々に語ってもらいました。そして今回は、一転してストレーターではない若者たち。すなわち歳若くして様々な挫折体験を味わってこられた方々4 人に集まってもらいました。具体的には、かつての知誠館の卒業生が 2 名、現役生が 1 名、そして知誠館とは直接関係を持たない方が 1 名です。

ストレーターではないみなさんは、果たしてどういったキャリア観を持ち、キャリア形成を経験されてきたのか。そんな話が聞けることを楽しみにしながら、ラウンドテーブルはスタートしていきます。

塾長「知誠館の北村です。今日は、私の現役の生徒たちもいます。私のこういう姿をあんまり見たことがないので私自身もドキドキしてるんですが、宜しくお願いします。まず、ラウンドテーブルっていうのは何なのかを簡単に説明します。元々は、不登校とかひきこもりの支援に関して教育委員会や行政の方が入って、どういう風にしていったらいいかっていう会議を随分やってました。ところが、一向に突っ込んだ話し合いができないんです。皆さんそれぞれに立場があるので、立場があるとなかなか話が進まないんです。基本的には、前例がないことはやりにくいっていうのがある。そのうち誰がこの会議に出るんやとか、そんな話も出てきたので、埒(らち)が明かないなっていう思いがあって途中で辞めました。それで、私は川畑先生と随分長いお付き合いをさせてもらってて、二人という個人と個人で話してると結構いい話が出てくるので、そしたらそういう人たち…、個人として集まれて本音でしゃべれる人たちが集まれる場っていうのをどうしても作りたいなっていうので、このラウンドテーブルを作りました。ここでは参加に際しての条件が 2 つあって、個人として参加してくださいということ。それから、もう一つは、当たり前とされることを問うてみたい、問い直しの場っていうのをものすごくしたいなって思いがありました。そして、この二つを柱にしてやってみたいなということで、川畑先生に協力してもらいながら、もうこれで 3 年目に入ります。大体年 4 回やってますから、過去 10 回くらいはやってきました。そして、ここではいろんなテーマについてずっとやってきたんですけど、その中で実は、さっき自己紹介していただいたＨさんとの出会いっていうのが、ものすごく大きくてですね。実はＨさんがキャリアっていうことについてやりたいっていう思いを示していただきまし

た。それで、ほのぼの屋さんっていう、精神障害のある方が働いている、すごくおいしい料理を出してくれるフレンチレストランがあるんですけど、そこに二人で行って、そこを作り上げられた西澤心さんっていう方とお会いする機会があったんです。いろいろインタビューをとることがあって、いろんなことを考えさせられました。今振り返って思うと、そこでは障害を持った方々のキャリアの実現っていうのがテーマとしてある。今までは、なかなかお金ももらえず、お給料っていっても１ヶ月 1 万円とかだったんですけど、そこで働くようになって１ヶ月 10 万円とか、自分で部屋を借りて生活できるだけの給料をもらえるような、そういうことができるようになってたりするんです。そこの当事者の方のキャリアがありながら、もう一方で大事なのが、西澤さんっていう方のキャリアもここで作られていってるんです。だからその方は、そういう取り組みをしながら自分自身のキャリアを作ってきたわけです。これはすごい、私にとっては面白かったんです。で、それからキャリアについていろいろ考える機会があって…与えられるキャリアって一体何やろう？とか。キャリアをデザインするって何やろうとか。いろんな問いが私の中でも出てきました。で、キャリア、キャリアって、世の中でものすごくよく使われる。大体、そのキャリア支援は就職支援を指しているコトバなんですね。でも、果たしてそうなんだろうか？っていうことをものすごく思うんですね。実は前回のラウンドテーブルは、就活の渦中にいる大学生を３人ここへ来てもらい、就活で一体どんなことが起こってるのかをしゃべってもらう機会を持ちました。有名な大学を皆さん出られてて、中学、高校と優秀にやってきて大学に入って、皆がやってるように就活をして、就活も今結構ほんまに大変やっていうのもよくわかりました。その中で、最初は自分はこんなことをやりたいって思っていた夢がどんどん削がれていくっていう挫折があったわけです。しんどいしこの辺でいいやって思って就職する子もいっぱいいるっていうのもわかりました。ある意味で彼らはストレーターって呼ばれる子たちです。つまずくことなく真っ直ぐやってきている。マジョリティです。多数派なんです。その多数派の就職へ繋がる部分っていうのが、あんまり理想的な、夢のような世界では多分ないなと。けっこう厳しい世界なんやっていうのを私たちは改めて知るわけですね。一方で、例えば引きこもったり、一旦つまずいたりした人のキャリアをどう作っていくかっていうのは、なかなか普通の人みたいにいかない。少しそういうところをサポートしていかないといけないんじゃないか？っていう、そういうキャリアに対する考え方もある。それで今回は、ある意味いろんなとこでつまずいたりした人たちに、つまずきながらそこで何か考えたりとか、思い返したりしながら、もう１回動き出そうとした人たちの話をぜひ聞いてみたいなと思いました。それで、何人かピックアップさせてもらってお話を伺おうと。一応、ピックアップした人は、Ａさん、Ｂ君と、Ｃさんと、Ｄ君と。ほとんど同じ世代。で、私がお願いしたのは、それぞれの人にそれぞれのテーマというか、キーワードがあって。Ａさんの場合は、「地に足を着ける」という、あのコトバがものすごく残ってるんです。Ｂ君にもはっきりあって、「得体のしれない不安の解明」っていうのが、キーワードとしてずっとある気がする。Ｃさんは、

このごろよく言うのが、「異文化との出会い」とか。そんなことをよく言う。それから、D君、彼は「自分のキャリアを作りたいということ。」キャリアを作りたいと思って、いくつも仕事を変えていくんですよね。彼にはこだわりがあって、いろいろ仕事を変えてきたような印象がある。それもすごく私にとっては印象深い。そのあたりを何か話を聞けたらなと思うんですけど…」

この場に集まった、ストレーターではない若者たち。それは私たちの教え子であったり、このラウンドテーブルの参加者であったりするのですが、彼らのキャリアを私は以前から知っていました。そしてそのキャリアには、それぞれ私によって次のようなタイトルが付けられていくのです。

「地に足を着ける」
「得体のしれない不安の解明」
「異文化と出合う」
「自分のキャリアを作る」

これらのタイトルのついたキャリア、それはある文脈性を備えたキャリアであり、キャリアそのものが物語を描いています。その物語こそが彼らの生きている意味を表現しているのかもしれません。

では、Aさんから順に語ってもらうことにします。

Aさん「改めましてご紹介にあずかりました、Aです。昨日、9月27日で27歳になったんですけれど、私の最終の学歴は高校の通信教育を19歳で卒業した…通常より1年長くかけて卒業したというのが最終学歴です。障がい者支援施設が運営している美術館の企画やプロジェクト、ワークショップをしたり、施設の中でも障害のある人や引きこもりの人達と一緒に畑仕事をしたりとか絵画のプログラムを作ったりとか、っていうことを今しています。私は元々は、物心ついた時から宝塚に入りたくて。宝塚の男役のトップスターになるというのをずっと夢見て生きてきたんです。子どもがあまりふわふわと夢見るっていうタイプではなくて、本気でなる、としか思ってなかったですし、テレビで流れてくる宝塚の映像を見ていても、憧れの世界というより、私は必ずその世界に行くんだ、っていうかなり強い意識と…なぜか自信があったっていうような。それればかりを考えて生きてきました。で、そのためにバレエや声楽、ピアノのお稽古をしたりとかっていうことをしてたんですけれども、ただ、逆にそういうことを考えていたからなのか、小学校から割と悩みが多くって。同じ学年の子たちと馴染まないな、っていうのを感じていて。でもとても仲は良かったですし、小学校は100人程度の小さな学校だったので、クラスも1クラスでずっと上がっていく感じで仲は良かったんですけれど、自分と考えてることとはどうも違うらしいっていう感じはずっとしていて。かまってあげたい、とかっていう気持ちはあったんですけれど、自分が今考えていることを本当に共有できる同い年のお友達はいないな、っていう気はすごくしていました。で、家に帰って母と話したりとかっていうことの方が多くて。あとは宝塚のことばっかり考えていたので、それはあまり苦痛ではなかったんですけれど。でも、中学、高校と思春期になっていく時期に、そういうこ

とがどんどん大きくなっていって。意識はしていなかったんですけども、大きな心が折れてしまう瞬間っていうのがあって。それは15歳の時だったんですけれど、これまで行けていた学校にも行けなくなってしまって。体力も非常に落ちてしまった。もちろん宝塚を目指していたんですけども、それに取り組めるような体力も気力もなくなってしまったっていうのが15，16，17くらいにあったんですね。で、宝塚っていうのは18歳での年齢制限がありますので、諦めなければいけないということが自分の中で来るんですけども、これで諦められたっていう気持ちもあったとは思うんですが、これまで持っていた夢のようなものがなくなった瞬間に、次どうやって生きていけばいいのか分からない。それに似合ったものが見つからないといけないと思っていたし、見つからない現実に対してとても不安で。どんどん不安も募っていくし、自信があっという間になくなっていくし、自己肯定感なんていうものが1ミリもなくなっちゃって、っていうような時期が10代、20代前半とかなり続いていました。そんな時に、施設で利用者の人達と過ごしたりとか、施設はすごく自然環境に恵まれているので、そこで花を一つでも植えて見たりとか、いい空気の中に身を置いてみるっていうことからやってみたらいいんじゃないか、って提案をしてもらったのが19、20歳くらいの時だったと思うんですけれど。で、施設の中で障害のある大人の人達と、あと一緒に畑仕事をするドイツ人の女性と出会うんですけれど、彼女との真冬から始める畑仕事とが、私の中で大きな一つの転機になりました。その地に足が着いていないっていうエピソードを前に話させてもらったのが、畑仕事につながっていくんですけれど。それまで、Bさんが感じていらしたような「得体のしれない不安感」っていうのもすごくあって。あと、全ての感覚がどんどん失せていくので、すごくつらいんですけれども、なんか、感覚が非常に鈍麻になってきている感じもあったし、感動したりとか心が動くっていうようなことがなくって。何を見ても何に触れても笑いたくなかったし、っていうようなこともありました。明らかに自分が、社会の中に参加していない感じがすごくあった。本当にリアリティのないことを、すごくリアルに感じていた。しかもそれは、不安とか怖さを伴っていて。そういう社会に出て行くっていうことが、自分には到底無理だっていう風に思ってました。ですけれど、思いがけず畑仕事っていう…自分は全くしたことのない人間ですけれど、真冬の亀岡で。そのドイツ人の女性はずっと農業をドイツでしてきた人だったので、彼女と、目の前に積んである落ち葉を丁寧に積み直して腐葉土を作るっていうことを始めて。それは本当に寒いところで、着込んで、白い息を吐きながら土を作っていくっていう、生まれて初めての経験をして。それが非常に気持ちよかったんですね。人目も気にしなくていいし、自分はすごく身体が動かせて。で、気づいたら土が出来上がっていく。で、その土を使って春先に小さなハーブの種をまいていくっていうことをして。その芽が少しずつ大きくなっていって、また土に植えていってっていうことを毎日毎日空の下で…、寒いって感じてみたりとか、昨日より少し暖かいかもしれないとかって思いながら作業をしていくことが、自分が想像していた以上に、

すごく感覚を研ぎ澄ましていってくれて。「ああこの感じ、病気になる前に感じた感じだなあ」とか。何ともいえない抽象的な感覚になってしまうんですが、「この感じ、そういえば昔知ってたな」とか、「今私、この人とのやりとりで感じがちょっとリアルになった」とか…本当に日に日に体験としてあって。ある時、その施設から畑に行く農道を、テクテクと長靴を履いてその人と歩いていたことがあって。その瞬間に、「本当に今、地に足が着いた感じがする」って、すごく思う時があったんですよ。で、亀岡って冬場霧が多いじゃないですか。あの霧のかかった感じと、自分が足が着かずに歩いている感じっていうのが、苦しかった自分の 10 代後半の時期をすごくイメージとして持っていて。それが「今、私は確かに歩いている」、しかもそれは歩いているという身体的な行為と、自分の心の感じが一致している、っていうのを農道を歩きながら思って。一人ですごく感動して、少し病気がよくなったかもしれない、って思えたのがその時だったんですね。それが 21，22 歳だったと思いますけれど、結局そのドイツ人の女性とお仕事をした丸々2 年間の中で、敷地内にある畑を２人だけでずっとお仕事をしたんですね。で、もちろんコトバも通じないので。それが一つ大きなポイントだったのかもしれないんですけれど。コトバが通じないから、日本語でとても不安になっていたコミュニケーションっていうのが、そもそも言語のコミュニケーションが成立していないので、とりあえず片言の英語で通じた時に大満足だし、ちょっとした単語の違いなんて関係のないディス・コミュニケーションにつながらなくって。出来た、とか関われた、っていうことが一つずつ蓄積されていったっていうのもすごくよかったと思うし。で、少しずつ英語が話していけるようになったっていうのも、気づいたら自信になっていったっていう、後からのお土産みたいな感じですけれど。そんなことがすごくあった。なので、私は畑仕事っていうものに思いがけないくらい助けてもらったし、自分の不安定なイメージっていうのが、身体と手と足を動かすことによって、その成果が出来上がってきた作物とか植物っていう存在によって確かめられるっていうことをその時期出来たっていうのはすごく大きかったのだろうなと。で、同じ時期に、施設ではアートプロジェクトっていうのがあって。アートを使って地域の人とか障害のある人とかと一緒に、新しい関係を生み出していくっていうボランティアを始めたんです。今度はそのアートっていうのが、これまでの自分が持っていた価値観とか、主流のイメージとかっていうのにどんどん新しい視点を入れ込んできてくれて。私もこんなに自由に考えていいんだとか、若いアーティストとかは、子どもの頃のわくわくした感じを大人になっても同じように感じてコトバにしたり作品にしたりしているんだとか。そういったところが、私も同じように考えてていいんだっていう助けにすごくなっていったということもあります。そういったところで不安だったことが、解消というより…、別の方法で出会いとしてもたらされて。それが畑だったりとか、アートプロジェクトでの作家との出会いとかっていうことにつながっていったんですけれど。そうやって少しずつ、一人また一人って出会っていく人が増えた。またその人とのやりとりっていうのが増え

ていくことによって、社会に自分が出て行っている感じっていうのも確かに経験ができて。で…、まあ少し端折りますけれど、気づいたら、美術館のスタッフをしているっていうようなところなんですけれども。一番大きな転機としてはそういうことが一つありました」

塾長「なるほど。ありがとうございます。すごいリアルに話してもらい…。」

川畑「土を作る…」

Aさん「花を育てたりっていうよりは、私は土作りが本当によかったなと。一番寒い時に土を作れたっていうのが一番よくって。今でも土を作っているのが一番好きです」

塾長「何て言うかな…、こう、毎日毎日、来る日も来る日も何かをし続ける。私は片一方でヘレンケラーを思い出していて。リアルな感覚みたいなのが蘇っていく。そのためには、ずっと継続的にやり続けるものがある気がする。それともう一つは…こういうことがあるまで、Aちゃん自身はこれまでいろんな人と出会って、もちろん生きてたわけやけど、でも何か、それはもう一つリアリティがなかったのかもしれない。その感覚が蘇って来るみたいなことだったのかもしれません。」

久しぶりであったAさんの語りに、私は聞き入っていました。私の記憶の中では、このラウンドテーブルでAさんが初めて自己紹介をした時、「地に足がついてなかった」という表現をしたように思います。ですがその時の彼女は、まだほとんどコトバを持たない状態だったようにも思います。辛かった過去に触れるたびに感情がこみ上げ涙が流れていました。

そんな状態から彼女は自分のコトバを手に入れ、こうやって一つ一つ、確かめるように語り出していったのです。それは土づくりに表現されていたように、決して派手な過程ではありませんでした。毎日毎日、ただ黙々と続けられる作業を通して、彼女は自分と向き合い、自分のコトバを温めてきたのかもしれません。だからこそ、そこには彼女の物語が表現されているようにも思えるのです。

塾長「Aさんの話の中にB君の話もちょっとあったけど、「得体のしれぬ不安」みたいなものと、「地に足が着かへん感覚」それはちょっと近いんかな…？」

Bさん「そうですね…確かに、近い感覚を持ったことはあるんですけど。地に足が着かないというよりは、僕の場合は、周りとの距離感がいまいちよくわからないというか。僕が元々ここに来る前に、中学校時代に不登校になりまして。原因が、いじめだったり中学校に馴染めなかったりとか。そういうものが原因というか。ただ、原因というのも自分の中ではまだはっきり分かっていないんですけど、そういうのがあって、ここに来て。いろいろ勉強したり、マツモトに買い物に行ったりしながら、ちょっとずつ周りと慣れるような感じにはなった気はしたんです。だけど、未だに人との距離感というか、自分がどういう風に接したらいいのかとかがつかめていないところがまだ若干残ってる感じがしますね。ただそれはその後、高校でも友達と出会うんですけど、そういったところで個人個人とちゃんと付き合えたり、話してて楽しかったりとか。そういうところでちょっとずつ自分の実感として回復していってる感覚はありました

ね」

塾長「Ｂ君のことで思い出すのは、彼はものすごく本を読むのが好きで。本読んでたよな、割と？」

Ｂさん「うーん、むしろここに来るようになってから読み出した」

塾長「ＧＴという教材があって、小学校の。それを 10 級から１級まで全部終わらせたんですよ。結構難しい教材なんやけど。算数とか数学はいまいちだったかもしれないけど、国語はすごく長けていて。来る日も来る日もその教材をやり続けた。すると、何が変わるかって、彼は、最初動きもぎこちなかったんです。ロボットのように動いてたから。発する言葉も３パターンくらいしかなくて。何聞いても「まあまあ」とか「大体」とか。そんな風にしか言わなかった。それがある時、お母さんが面談で、「手が動くようになりました」っておっしゃったんですね。それは、彼はほとんど引きこもってる状態で、カチカチに固まるので、手は一切動かない状態。それが、手と足が同時に出たりしてぎこちなかったのが、ようやく手が自然と動くようになりましたということです。それを私はエピソードとしてすごく覚えてて。小さい子どもの頃は、多分そういう風に動いてたと思う。でもそれがどこかの段階で、「地に足を着け始める」、そういう作業があったのかもしれへんし。そんなことを少し思ったりもした。結構コツコツとやってたイメージがあるんやけど、どう？」

Ｂさん「そうですね…何がそう、っていうよりは、いろんな積み重ねがあって緊張がほぐれたっていう方があると思うんですけど。亀岡には鍬山神社っていうところがあるんですけど。あの辺から通ってたんですけど、結構距離があるんですね。20 分から 30 分くらいかかるんですけど、それをお昼間に自転車で動くことによって…、周りの目とかは気にしながらは来てたんですけど…、それがほぼ毎日続くことによって、別に外に出ても大丈夫なんだっていうのが、徐々にわかってきたっていうのもあったんじゃないかと思います」

Ｂ君の場合も、積み重ねた自分の行動や経験が緊張を解いたと言います。人前に出ると過度の緊張に苦しんでいたＢ君。彼の表現を借りると、「得体のしれない不安」そして「相手との距離感」というキーワードが飛び出します。その 2 点が、よくわからないのだと言うのです。そんな中、お母さんに連れられて、知誠館へとやってきたＢ君。実はＢ君こそが、私たちが初めて出会った不登校の生徒であり、初めて出会ったひきこもりの生徒だったのです。だから彼と出会うことがなければ、私がこうやってこの原稿を打つこともなかったのかもしれません。

そんなＢ君でしたが、知誠館に通い始めて１年半、彼はまるで別人のようになっていきました。高校では生徒会活動に参加、そして文化祭ではバレリーナに扮し、白鳥の湖を踊るわけですから…。そしてＢ君は今、大学院で不登校研究に取り組んでいるのです。「得体のしれない不安」にどう向き合うべきなのかを、論文にまとめていきたいのだそうです。

塾長「Ｃさんのことを少しだけしゃべると、Ｃさんは別に不登校…になったことはなかった？でも、学校には行ってなかったよね？」

Ｃさん「行かなかった時もありました」

塾長「引きこもってはいないよね？」

Ｃさん「遊んでました」

塾長「遊びに出てた。何年生くらいにサボり始めるようになったんだったっけな？」

Ｃさん「中学２年生くらいですかね」

塾長「２年生くらいから、学校をサボるようになった。学校をサボって何をしてるかというと、サティ（大手スーパー）に行ったり。髪の毛は茶色。そういう感じで学校に行かなかった。でもまあ中学３年になって、ぼちぼち高校に行かないとなっていう風に思って、ちょこちょこっと勉強して入れる高校に入ったものの、すぐ辞めるんやね。どれくらいで辞めた？」

Ｃさん「３ヶ月弱です」

塾長「３ヶ月で辞める。辞めた時は 16 歳かな？そっから、大体 20 歳くらいまで…」

Ｃさん「もうちょっとです」

塾長「21 歳くらいまでだらだら。そんな生活を送る。そこで、彼女は変わるわけ。助産師になりたいと思う。それが 22 歳。それで、看護助手という仕事なら資格がなくても出来るから、そこで働きたいと思う。ところが、中卒なんですよ。高校すぐ辞めてるんで。そうするとどこの病院も雇ってくれないということで、今、園部にある知的障害者施設で、介護の仕事をしている。それで、看護師になりたいと思って自分で勉強するもののテストは全然分からへん。っていうことで知誠館に訪ねてきたのがこの春です。それから、もう…びっくりするくらい勉強するんです。びっくりする。手本のような生徒。それと、ものすごく他の生徒達の面倒をよく見てくれる。彼女、ものすごく健気に勉強するんです。で、それをやっていくうちに、何か自分の中でも様々な変化が見られたりとか。こういう環境って、初めてでしょう、きっと。多分勉強って学校の時も機会としてはあったと思うんだけど、全然取り組み方とかが違う気がするんやけど」

Ｃさん「私が学校に行くのは、休憩時間とか放課後でした。そんな感じ。授業中は怒られるんで、保健室とかにいました」

塾長「すごく聞きたかったことで、昨日も聞いてたんだけど、そんな風に生きてたのが 21 歳くらいまで。何で変わるんやろうね？21 歳って。何なんやろうね。自分の中で意識が変わり始めるのは。何があなたをそういう風に変えさせたんかな？」

Ｃさん「いつまでもふらふらしてたらだめやなって思ったのが最初ですね…」

塾長「そう思わせるきっかけみたいなものはあったの？」

Ｃさん「きっかけは…多分なかったんじゃないかな。これっていうきっかけは、私にはわからないです」

塾長「ふうん。じゃあもう一個。助産師っていうのは、どうして助産師になりたいと思った？」

Ｃさん「何で助産師になりたいか…」

塾長「Ｃちゃんにとって助産師って何なの？」

Ｃさん「えー…命を扱う仕事ですかね…」

塾長「看護師じゃなくて助産師になりたいんや」

Ｃさん「…ですね」

塾長「中学校時代、全くと言っていいほど勉強してないので、ベースは多分小学校くらいの知識。でも彼女は諦めないんですよ、絶対。何なんやろうって思うくらい。現代文の問題をやっても一問も合わない。でも彼女は諦めない。私は本当感動するわけ。この子はほんまに諦めへん。何か自分の人生を歩きたい、って思ってるし。「レジリエンス」というコトバがあります。辛い状況からの回復力といいますか、その強さのことです。自分のキャリア、自分

の人生を作っていく強さなんですよね。皆と同じ人生を歩くっていうわけじゃなくて、私は私の人生を歩きたいから、っていう。そこの強さがいる。そういうのをどこかで感じてて。B君のひたむきさもどこかでそういうのにつながるかもわからへんし。Aちゃんのそういうところにつながるのかなあとか。そういうところに感動しますね」

Cさんには不登校経験があったわけではありません。彼女は、中学時代から学校をさぼる癖があったらしく、とりあえず高校へ入学したものの 3 ケ月で退学、その後フラフラと 21 歳まで過ごしていたと言います。ところがどういうわけか、ふと気がつくのです。このままではダメだと。そこから彼女は変わり始めます。

知誠館に入学し、高認合格を目標に勉強して、それから助産師になるために看護の専門学校の受験を目指し出します。そしてやがて私たちは、彼女の一生懸命に取り組む姿に魅かれ始めます。その強さやひたむきさ。そこに、決して諦めようとしない彼女の人生への態度を見るのです。しかしきっとそんな彼女の強さは、まるで意味をなさなかったかのように思える 21 歳までの生活が支えているようにも思うのです。問題のある状況が新たな機会を生み出していく、まさに機会開発へと向かう変容過程を彼女は生きているのかもしれません。

塾長「D君も強いよな？」

Dさん「いやー、自分では全く今もそんな風に思わないですね。未だにそんなに強いなんて思ったことないし。小学校の時から僕は勉強嫌いで、ずっと勉強してなかったです。体育と音楽だけ4とか。高校までそのままつらつらと来てしまって、このままでは卒業出来ないってなった時に、知誠館に来させてもらって…ものすごく不純な動機で来たなと。そこからもう、小学校の学習からやり直しで、ドリルみたいなので勉強して。今でも勉強はできる方ではないけども、ここに来た時に思ったのが、塾長がもっと若くて、溌溂と…、バーベキューとかしたはってね。この人はなんか、周りの今までの大人と違う生き方をしてはるなと。楽しそうに生きてはるなと。好きなことをやって、なおかつ家族を養う分の収入は保ってはって。こういう生き方があるんや、こんな風に生きてもいいんやって。周りの環境に生き方が決められてるような感じやったんで。こんな、1を取ってて卒業も出来ないようなやつは、ある程度体力があったら誰でも出来るような仕事をしないといけないんだろうなと思ってたんだけれども、そこを変えてもらって。そこから、楽しく生きないとなあと。今までは面白くなかったんです。決められてて。選べるって言うけど、周りの環境見てたら選べないやん、って思ってて。そこでパンと変わったことは今でも忘れませんし…。そこからいろいろありましたけど、まあ子供ができたんでそこから大学は行かずに働くわけですけど。理想は決まってるわけですよ。塾長みたいな感じで、好きなことをやってご飯食べたいなと。でも自分のやりたいこともわからへんわけです。現実働いてたら職場にこういう人はいないわけで。周りの優しい人、今までいらっしゃった先生たちも（職場には）いないわけで。ずっと延々と同じ作業をやってて。「これ何の部品ですか？」って主任に聞いたら「わからへん」っ

て答えられる感じやったから、これはあかんと思って。つまらないというか、それを調べるほど興味もない。じゃあこれは好きじゃないんかな、と。そういう感じで…いくつも仕事を変えた理由はそこかな。最低限ご飯を食べられる分だけは、っていうのが僕にとっての現実味。地に足を着けるポイントは、嫁と子どもを食わす、っていうところは最低限しないといけないし。でも、楽しく生きたいんです。理想と現実の、そこの溝がこんなに大きいから。勉強も足りてないし、好きなことすらも分からへんし、何に懸けたらいいかも分からへんし。それが埋まるまでがずっとしんどかったですね。嫁との喧嘩も大量にありましたし。上の子がダウン症っていう形で生まれてきたので、それも多分結構大きくて。言い方はあれやけど、普通の健常者に比べたら出来ひんことがすごく多いし。ダウン症だからこそ出来るっていうこともちろんあるけど、それを見つけるまでも大変やし。自分も好きなことを見つけられてないのに、子どもにそんなこと見つけられるのか、果たしてっていう感じでちょくちょく塾長のところに来ていろいろ聞きながら少しずつ埋めていったのかな。自分なりにですけど。今は理想と現実の差がこれくらいに狭くなって来てますね。そこのバランスを取るのが楽しかったりするんで。人生楽しいって言ったら大袈裟ですけど、上手に回せるようになり出したのは知誠館がきっかけですかね。そんな感じなんですよ。」

塾長「Dさんはだから…高校卒業して、大学行きたいって言ってて。海洋大学行ってイルカの研究とかをやりたいとか言ってたんやけど、付き合ってる彼女がいてて、その間に子どもが出来るっていう。それで彼は泣いて。やっぱり要するに自分は行きたかったんだけども、その夢を諦めないといけないと。私に泣いて言った記憶があった。だからあれが…年齢で言ったら19かな？」

Dさん「そうですね」

塾長「それでその子は、ダウン症だったんや。まあ…神様はそうやって彼に一つの試練を与えるんかって片一方で思ったりもしたんやけど。職も、彼の中では転々としていくわけやけど、ただ転々としてるわけじゃないわけよ。いろいろ模索しながらで。今彼が何をしてるのかというと、保険の…あれは自営みたいな形？」

Dさん「そうですね、一応ファイナンシャルプランナーっていうのをしていて…」

塾長「そういう仕事を彼はしていて、二人の子どもがいて。こうやって生きてるわけやね。たいしたもんやなって思いながら。家族がいながらそうやって彼は生きようとしてるわけやから。そういう世界なんですよね。何でこういう話を話してもらいたかったかっていうと、皆豊かなんですよね。私からすると豊かな世界なんですよ。だから、普通のマジョリティの学生たちの就活ってあんまり豊かなイメージがなくって。それは通過をしていかないといけないのかもわからへんけど。こっちの話はすごいドラマになってて。それぞれあれやこれやといろんなことがあるような気がするんやけど…」

D君の話では、私がそれまで知っている大人たちとは違い、実に楽しそうに生きているという感想を持ち、「自分もそんな風に生きたい」と思ってくれたようです。どういうわけか、私自身に憧れてくれるようになったのです。憧れはとても強い動機になり

ます。憧れの存在とは、生きたモデルのような存在です。従って、日々観察の対象となり得るのです。それまでどこか諦めかけていた自分の人生に、彼はどこか希望を見出し始めます。

それからは勉強も大変頑張ってやり始め、大学進学を目指すようになっていくのですが、そんな志も挫折せざるを得なくなります。当時お付き合いをしていた彼女が妊娠、そして結婚、出産と、めまぐるしい流れの中でD君は若いお父さんになっていきます。そうせざるを得なかったのです。そして彼は、家族を養うためとにかく働くのですが、彼の頭の中には依然、楽しみながら働きたいという思いが存在していました。結局D君は、職を転々としながらもそんな人生を追い求めることになるのです。そしてとうとう、ファイナンシャル・プランナーという、自分で納得のいくキャリアを手に入れたのです。

塾長「ありがとう。ざっとこれで4人の話を聞かせてもらって、1時間まわってしまいました。最初に言ったけれども、このラウンドテーブルっていうのは「問い直し」っていうのが大きなテーマとしてあるので。私はキャリアっていうことをものすごく問い直したいっていう思いがあって。ストレーターじゃない人達って、ある意味つまずいた人。でもそのつまずきっていうことこそが、大事なキャリアだよなと思ったりする。つまずかないとわからないというようなことがね。でも従来のキャリア支援っていうのは、つまずかないような道をどういう風に提示しますかとか、どういう風に支援しますかとか。そういうような方向性を持っているように思う。でも実は、つまずく事はすごく大事だって…。でも片一方で、ここに来る生徒たちは本当に、最初は自分の物語を描けない状態でやってくる子がほとんどです。地に足が着かなくて、どうしようもない状態で来る子ども達、若者達っていうのがほとんどです。要するに、つまずきの中で壊れていくとか、閉塞状態になっていくとか…。でもやっぱりつまずくことっていうのはものすごく大事な過程なんやと思う。でも片一方でそうやってつぶれていく人たちがいて、また一方でででもそこから、自分の物語を作り上げていく人たちがいる。一番最初のAちゃんの話で言ったら、地に足を着けてる感覚を蘇らせる、みたいなこと。そこの違いって実はものすごく大事なのかなっていう感じがするんですよね。そう考えると、キャリアっていうのを考える時に、そこら辺が実はポイントかなっていうのがあって。そんなことを思いつつ、川畑先生にバトンを渡そうかなと思ってるんですけど…。」

川畑「いやー…僕、今の話聞いててめっちゃ面白かった。そんな面白い話を聞くのも面白いけど、そんな面白い話を私は出来るやろかって思ってね。そんなことを考えると悔しくてね。今からちょっと話す話は、全然関係ないじゃないかって思われるかもわからへんけど、私の中では一緒でね。今仕事でも興味としてでもやってるのは、中学生とか小学生のみなさんとかにやる、心理検査があるんですよ。審判形式発達検査っていうのがね。子どもと遊ぶ検査なんですよ。赤い積み木をならべて積んで、それと同じトラックを作ってもらうとかいう検査があるんですよ。発達検査って聞いたら嫌いやって言う小児科医がいるくら

いでね。変な心理職が検査して発達指数が 80 やって言ったらお母さんがそれを悲しんだりっていうことなんかから、役に立つどころか害ばっかり与えてるじゃないかって言うようなことが今でもあるようなものなんやけど。そうじゃなくて、子どもと遊ぶわけでしょ。そこから、その子どもの目には世の中がどんな風に映ってるのか。聴覚障害がなければ世の中のいろんな音が届いてるわけやけども、その中でどんな意味を感じて、見たり聞いたりすることが、その子の行動にどのように影響を与えているのか。それでどうやって動いて生活してるのか、どんなことがスムーズに行かずに生きにくいという風に感じてるんやろうか、みたいなことを検査やった私が、あたかも自分のことのように語りたいっていうのが、それ以上なくそれ以下でもない思いというか、願いなんですよ。だから、検査というものを子どもとの間に置きながら、どんな風に僕と人間関係を作るんやろか、みたいなことを全部見ててね。そこからそういう仮説を出す、っていうことを一生懸命やってて。そのために、出来るのと出来ないのとには何の差があるんやろう、出来ない子にはどんなことが見えてないんやろうって一生懸命考えるんですよ。そうして見ていって、なるほどなというイメージが浮かぶ。それを適切にコトバにしたりする。形式発達検査を使ってお仕事をしてる人たちにその事を話したりすることも多いんだけど、そのことが結構役に立ってもらってるところがあって。いや、それがね。自分が面白いなって思って、してる事と、それを使ってお仕事してる人のニーズに合って、自分としての、ぴしっとしたことをやれてるな、っていう。やっとこの齢になって感じてみたりね。そういう感じがすごくあるんですよ。それでね。そういう体験っていうのは…大人と子どもの違いは何だっていう中で、大人っていうのは、思ってる事と言う事が違う。そういう側面を持ってないと大人の世界は生きられないから。だけど子どもは、思ってる事とする事が一緒の方が天真爛漫やし、そう言われるわけでしょ。そういう意味で言えばね、価値じゃなくて、いろんなことが一致してる、子ども体験、みたいなことなんかなと思ったりね。子ども体験っていうのが…塾長さんが言うような、つまずきの中にある価値、みたいなのにつながるようなところがあるんかなとか思ったりね。みたいなことを今思ってるんですけどね。…まあ、序論として」

面白い展開になってきました。本来進行役の川畑先生が、当事者たちの話に感化され、自分自身のことを話し始めたのです。場がいつもとは、少し違った磁場を作り始めることになります。

塾長「私とか、自分のことを大人と思ってないかもしれません。結局大人になれないのかなとか思いながら。死ぬまで子どもか、とかって。私、50 歳になった時焦ったんですよ。50 歳っていうのは、ある程度出来上がった人になるかなって思って。40 代までは、まだ若造かって言われるんやけど、50 歳になった時プレッシャーがあって。わあ、50 歳か、とかって。そんな感覚がものすごくありました。だから、生徒がここにいてて、彼らを子どもだとかってあまり意識してないかもしれません。例えば、C ちゃんにはC ちゃんの人生…っていうコトバはちょっと大きいかもしれへんけど、それを私と出会うことで、どこかで共有して

る感じがする。私の中にCちゃんの人生がどっか入り込むっていうか。その反対の事もあるかもしれません。その感覚が、何となく私はあります。それはKちゃんにも、Mちゃんにもあるのかもしれないけど。それは彼らの人生でもなくて、私の人生でもなくて。どこか共有されていくような世界。だからどっかDさんともそんな感じやと思うねん。Dさんのことは、自分の一部でもあるような感覚がありますね」

私も感化されていたようです。ここでの私の主張は、援助者と被援助者とが、実は双方向の関係にあるということ、そしてそれは決して上意下達的なものではないということです。援助の過程ではその関係の中に、それぞれが関わる世界が出来上がっていき、その世界を共に大事にしていく。そんな援助観を表現しています。

塾長「Gさんも、現場で多分いろいろ支援とかっていう枠組みの中で仕事されているわけですが、いろいろと感じられることがあるんじゃないですか？」」

Gさん「いや…あんまりね。支援ということを考えてしてないんですよね。まあそこまで行ってないのは未熟だからかなっていうのもあるんやけど、これ以上、悪くならないように、目の前にいる人とただ対話をしてるだけ。そのことが悪くならないことにつながっているのかもかもわからないんだけども、とりあえず前の人の話を聞いてるだけ。それしか出来てないし、それしかすること無いかなと思う。その後ろでは、働いててもらわないと駄目なんですけどね。制度とか何とかっていうのは活用していかないとあかんのやけど、とりあえず目の前の人っていうことしか思わないなと。今の話聞いてて、学校に行かなかった人たちがいてて、でも私は学校は行ったけど、そう言えばその時習ってた書道塾はかなり行かなかったなと思った。まず、行けって言われて行き出したのが嫌やったのかもしれないけど、途中で行かなくなりましたね。バレまして、ものすごく怒られて。行かへんのやったら辞めろっと言われました。で、辞めなかったんですよ。で、辞めなかったら今でもやってるんですよね、実はね。これ何なんやろうって…」

塾長「へえ。今もまだやってらっしゃるんですか？」

Gさん「やってるんですよ、性懲りもなく。長いな〜って、ふと。でもよく考えたら学校は行かないと仕方ないものって割り切ってたのかもしれへん。だけど、その書道塾にはなぜ行かないといけなかったのかが、その時はわからなかったのかもしれません。でも辞めろって言われたら、負けん気が強いから、「なにくそ、辞めへんわ」って思って、まだ続いてるんですよね。というか、これしか残ってないんですよね。最後これで食べれたらいいわっていう思いもあるというか。そんな感じやなあと、子どもの頃の自分を思い出しましたね、皆さんの話聞いてて。でもそれも出会いとかタイミングが偶然組み合わさって、出来たこと。ほんまに偶然なんじゃないかなあ。今の自分がこの状況であるのが偶然なんじゃないかなあってすごい思いますね。仕事もずっとこの仕事をしてるわけじゃないじゃないですか。私だって、転職といえば転職ですよね。3年か5年経ったらあれやってこれやってってね。全然違うことやるわけですよね。ある種の転職を重ねてきたなっていう感じはある。でもどの仕事も面白かったし、どの

仕事も楽しもうと思ったところはありましたね。だから、たまたま違うことになったものに興味を持てる自分やったのかもしれませんけど。興味っていうのを、じゃあそれを楽しもう、また変わったらそれを楽しもう、っていう感じ。それをしみじみと感じました。皆さんのお話を聞いてて。そんな感じです」

川畑「どうですか」

Hさん「いや、皆さんの話聞いてて、なんか豊かやなあと。私は…大学までスッと来て、今の職場に入る時は1年間ゆっくりさせていただいた。だけど、そこまでは順調に行ってて。そこからの人生は違うんですけど。いろんな出会いがあったり。全然違う分野に異動しますからね。転職するかのように付き合う人たちが変わるので、そこからの人生はいわば広がりがね、専門分野で特化していないその分だけ、いろんな人とのつながりとか広がりが出るんですけども。でもそこまでの人生って、学校生活で知り合った人くらいしか幅がないんですよね。でも、今のお話を聞いてると、その中でいろんな転機を経て、今があるわけですよね。それは大きな出会いがあったり、いろんなことをしているわけで。その時は、非常に大変で、苦しかった思いを抱えてらしたのかもしれへん。けれど、そこが何かのきっかけで変わっていった時に、何かすごく豊かな感じとか、そんなものを感じるんですよね。で、自分を振り返ってみると、小さなつまずきはいっぱいしてます。大きなのをしてないだけで。それって、どうなんやろなあ、結構皆さん、そういうことを経た後はしなやかに生きてはるよなって。今聞いてたら。外から見てたら、そういう風に見える」

Ｉさん「だけど、しんどいと思いますよ」

Hさん「うん、しんどいのはしんどいと思いますよ」

Ｉさん「いやー、今いい意味で聞いたんですけどね。学校は行かなあかんとこやと思った。それからね、異動…転職を受け入れつつ。でも転職っていう一から違う分野に入れられるっていうのを絶対に受け入れながらそれに合わしていかはる能力ってすごいなって思って。行政の方とお会いする度に思うんですよ。そして吸収して、見事にこなされますでしょ。だからすごい能力やなって思うんやけども。それで、豊かやって言っていただくけど。そんなの思えないでしょ。ものすごく辛くて、今ちょっと明かりが見えたりちょっと自信も出来たりするのかなと思うけど…。例えばやけど、GさんとかDさんとかってやっぱりある意味強いですよね。それで、今豊かやって評価してもらってる皆さんってやっぱり、いわゆる不器用。それで、その時はいたたまれない思いをして。苦しくって、精神的にもある意味で病んでるとか。問題視されてたりとか。そういうのって、学校から見たら大変じゃないですか。で、そういう評価ってビンビン感じてるじゃないですか、本人たちは。で、めちゃくちゃ弱いんですよ。受け止めていけない。だけど合わせられないという。で、合わせられないけど、これをやるという強いものも見つかってないという」

Dさん「それがわかったら、早いんですけどね」

Ｉさん「そうそう。だからこう、迷ったり隠れたり。それから自分の中でね、いつ明けるとも知れない暗闇にいますよね。その時のいたたまれなさとか、苦しいって思うし。選ぼうと思って選んでるわけじゃないし、どっちがいいとかじゃなくて、選べないんですよ」

Dさん「気質みたいなもんやね」

Ｉさん「そう。だからそれで私、Gさんが偶然というコトバを使わはったのも面白いなと。偶然

やと、全ては。でも必然やとも言えるんですよ。その個体に備わってる道は、なれない者にはなれない。だけど、大多数が学校は行かなあかんものや、とかっていうのが作られてると、なかなか外れるのは難しい。外れたくて、外れてるわけじゃない。やっぱり行かないといけないところに行けないようになっていくしんどさっていうのはある。だけども何とか、道を見出した人たちは、そりゃ面白いし、すごいなあと。こんな道もあるやん、って言ってあげられるじゃないですか。で、そういうのを言ってあげられるのを、ちょっと前に言ってあげられたり受け止めていってあげられたらね。親や学校がね。そんな生き方もあるんやなあ、ええなあ、今、道を探したはるんやなあ、とか言えるようになるくらい…。この頃、段々月並みになってきましたけど、多様やということが普通になっていったらいいなあと。だからどっちがいいっていうものじゃないし、格好いいなあと思いましたよ、Gさん」

Dさん「その対応力の方がすごいと思いますよ。こちらからしたら出来ないわけですから」

Iさん「そうですよね。強いし、しなやかですよね。これもまた豊やし。強いし。それこそ一つのことを続けたはるんですよ。その中でいっぱいいろんなことを獲得したはるんやろうなと思いますよ。それで書道を続けてはるとことか、面白い。でも苦しいやろうなあって。ほとんどの人がやってる時にやれないしんどさ。それが思春期の時にやって来るし。思春期やから揺れるしね。Cさんが、何でじゃあ学校行こうと思うようになったのかっていう時に、いつまでもフラフラ出来ないしって言わはったけど、それだけじゃない何か、動かされる、決断するものっていうのがあるんやろうし。そんなことに皆、この4人は、ここでなんとかしないとあかんなあっていうのが、意識できる時とできない時があるけどやって来る。やって来るものを持ってるっていうことは幸せやけど、なかなかそれが来ない人もいるって思いますね。」

挫折からの再出発。それは「セカンドキャリア」としての意味を持ちます。ファーストキャリアが個人の人生を保証しきれない時代の中では、むしろセカンドキャリアをどう構築できるかが問われているように思います。セカンドキャリアは、ファーストキャリアの反省の上に成立します。「自分が本当にしたかったことは何か？」、「どこに問題があったから自分は挫折したのか？」、「これからどんな風に生きていきたいのか？」。様々な問いの上に、セカンドキャリアは成立するのかもしれません。

川畑「例えば、赤ん坊が生まれた時っていうのは100%世話してもらわないと生きていけないから、完全に守られてるわけでしょ。それで段々子どもが大きくなっていくんだけども、やっぱりほら、ずっと世の中から守られんと生きていけへんからね。だけどその中で大人になってくると、守られてることの中にも決められてると、飽きてくるとかね。どこかの時点で、もう誰も守ってくれへんから、自分で自分を守らないとあかん時に入るんやと思います。だからその時に、自分で自分を守る時に何か支えがないと立ってられないとか。その支えがなかなか見つからへんとかね。みたいなことがやっぱり起こってくるんかなあと思って。で、何で20歳過ぎてからっていうのがあったでしょ。ちょっと間違いかも

しれんけど、体力のピークっていうのが 19 歳くらい、っていうね。そこからもう下がってくるっていうことを思うとね、体力だけじゃなくて、脳機能もいろんなものも 19 歳にピークが来てね。そういった時に、なんて言うのかなあ…一人で生きていかないとあかんっていうようなことを思うような時期に差し掛かる。20 歳前後で。それが制度で言えば成人式過ぎてからとか、その前からとかいろいろあるけどね。なんか、そうなるんやろうなあと。そういう時に何か見つかればいいんやけど。見つからなかったらなかなかしんどくなるのかなあと…」

Dさん「なんか、そういうタイミングが来るのが早い気がしますね、今の時代っていうのは。情報がすごく錯綜してる時代やから。成人式ってずっと昔に 20 歳って決められたんだと思いますけど、今の若い子って…」

Ｉさん「でも、もっと昔はもっと早かったですよ」

Dさん「そうですか」

Ｉさん「14 歳とか、その辺で元服してるじゃない」

Dさん「それくらいで、いいんちゃいますかね」

Ｉさん「そっちの方が、私は理に適ってると思うんですよ」

Dさん「そうですよね。そっちの方が…」

Ｉさん「つまりそれ以上は、今度はちょっと近代化っていうか…いろいろ知力の時代になっていくから。学力を身につける期間も長くなっていくし。でも個体としてはぎりぎり 20 歳くらいまでって言われたように、そうなんだろうねえと。だから昔は仕組みが追い付いてなかったから寺子屋で終わったし。不登校が出来るっていうのは、学校があるから不登校って言われるのでね。小学校でやめといてあげたら、それなりに皆どっか手伝いに行ったり、勉強好きな子は勉強したり、っていう風に出来るわけですよ。だからやっぱり、高度…何て言うんですか。そういう社会になってから、その人に合った道はある意味で狭められていってるんやなあって。まあしょうがないからね。逆戻りは出来ないから」

川畑「戦後も不登校多くてね。でも、不登校してたけど家の手伝いはするとかね。それだったら仕方ないな、って、問題にはならなかったんやね」

Ｉさん「そうそう。やっぱり第一次産業が主体やった時はいいんですよ。だからやっぱり知力偏重の時代、社会になっていく中で、能力の格差、そこで判断されるようになってくるからコンプレックスを持たないといけないようになっていって。それで精神的にもしんどなるよね」

Ｅさん「学力的な能力と、第三次産業に入っていったのと、もう一つ、学校とかで言うと「生きる力」とか出てきた時代に道徳心の教育っていうのが出てきたみたいに、問われる能力が増えてきてる。それ自体が、個人に押し付ける能力っていうところになってきてるんじゃないのかなっていうのは、何となく僕は産業の流れでは、思う節があって。多分コミュニケーションの話には、なっていくんでしょうけど。やっぱりその、空気を読んでいかなきゃいけないとか。空気なんて読めやしないのに。そういったコトバが出てくるのも、どうしても個人が何に対して付けなきゃいけない能力かわからずに、皆がそれぞれを気にしながら生きていくっていうのは、やっぱり教育場面と、そこから大学卒業以降の就職へと差し掛かる現場に見られる教育と現場の一致しない関係。そういう現状には差し掛かってるのかなって思いますね」

今回は、参加者同士の中で、どんどん話が展開していきます。これは過去のラウンドテーブルの中では、際立った傾向だったのかもしれません。支援される側の当事者たちの語りが、参加所の語りの世界を誘発しているかように私たちには映っていました。そんな中、大学卒業後 5 年間のフリーター生活を経験し、再び大学院へと舞い戻って来たＥ君のライフストーリーにみんなの関心が集まります」

Ｉさん「フリーターを 5 年ですか？」

Ｅさん「はい」

Ｉさん「それから、大学院の学費というか、それの一応の目処を立てるだけは貯めたんですか？今からもそんなに不安とかないんですか？何とかなる？」

Ｅさん「それは、めちゃくちゃあるのはあると思うんですよ。やっぱり皆の流れっていうのを考えると、就職をしていて。会社が潰れるか潰れないかの不安っていうのは、経済の流れであるかもしれないんですけど、やっぱりその基盤を持たないっていう不安はありますよね。でもまあ、最悪路上で過ごすってなった時は、税金払いたくなるんだろうなって思ったりするんで。あの、まあある程度の食っていく仕事はしていかないといけないかなって思いますね」

Ｉさん「ある程度食っていくために必要なお金って、どれくらいやって思っておられるんですか？別に正しい数値じゃなくて、感じで。去年の日本人の平均年収が 403 万円とかっていうのを、昨日聞いてたんやけど。それを高いねえ、低いねえっていういろんな感想がありましたけど、今自分はそれより低いですって答えてる非正規職員もいたしね。それをどう思うかというのことやけどね」

Ｅさん「僕、月 12 万くらいあればいいじゃ…」

Ｉさん「いいんじゃないだろうかと」

Ｅさん「そうですね。あとは家賃をどんどん下げていかなきゃいけなくなるのか。いいステーキを食べたくなったら服を古着屋に売りに行くのかっていう選択肢がだんだん迫られてくるのかなっていう風に思いながら、いる感じですけど」

Ｉさん「そう、403 万円だそうですよって言ったら、街頭で女性たちが、「これで子ども出来たら苦しいよね。無理だよね」とかいう感想を言ってましたけどね。ふーんと思って聞いてたんですけどね」

塾長「まあ所帯持ってての話ですよね。子どもが出来て、みたいな話でしょ」

Ｉさん「子どもが出来たら苦しいよねっていうような話でね。述べてましたけどね」

塾長「そうですよね」

Ｉさん「でもサラリーマンの平均やったから、そんな人達も含まれてるし、いろんな職種があるとは思うけど」

Ｈさん「非正規の人も、入ってたんじゃないですか？」

Ｉさん「入ってるのかな？だから、どういうことを基準に何を目的に生きていくか、何を優先にして生きるかっていうところによって変わってくるけどね。でもさっきのＤさんの立派な理由、奥さんと子どもを食べささないと、っていうとこから始まるのって、いい動機ですよね。そこからキャリアが本当についていくっていう」

川畑「いい動機っていうか、地に足が着いた、基本、根っこみたいなところですやんか。そこは外せないみたいなね」

Ｄさん「そうですね。まあそれも行き当たりばった

りで出てきただけなんで、別に…」

川畑「逆に言えば、出てきたことやからって言っても「知らん」って言うわけじゃないじゃないですか。そこを根っこにしてね」

塾長「やっぱり、でもずっとこれまで人間関係をつないできたもんな。その仕事をずっとつなぐ…、誰かに紹介してもらってこうなったとか。いろいろあったやん、これまでも…」

Dさん「はい、ありましたね。周りの人には恵まれてますよね」

ストレーターではない若者たちのキャリア形成には、必ずと言っていいほどそこに「出会い」があります。要するに、他者の介在が存在するのです。「変容」と「他者の介在」、そこにはとても重要な関係が存在しているようです。

塾長「全くそれはすごいな思う。私、割と最近にある銀行マンと話したんです。銀行マンって、30いくつくらいになってくると、やっぱりいろんな意味でストレスが増えてきて。自分としては納得が出来ないことをやらないといけなくなる。不条理で自分では到底、納得出来ないわけですよね。でもそれは、やっていかないといけない。しかも 30 歳くらいになってくると立場的には管理職になっていく。ということは、部下にそれをやらせないといけなくなる。そんな不条理なことをしなければならないことも、かつて日本が豊かな時代、年々所得が上がっていく時代は、少なかったかもしれません。例えば不条理なことをやらなくても、売り上げは上がってたかもしれないからです。そういうことがやっぱりあって、大体管理職になるくらいに退職する人って結構多かったりする。でも、子どもさんはいないんやけど、やっぱり所帯はあるので、辞めても次の選択肢がないっていう風に思うし、そこでずっと続けないといけなくなる。そういう話をわりと最近して、そういうことは現実に結構ある話なんかなっていう感じを持ちましたね。ただそういう状況の中であっても、自分が納得できるものを見つけていくのかなって思ったりもするんやけど。私は組織の中に居ないので、わからないんですよ、その感覚が。D君が、私のことをやりたいようにやってきたはるって言ってましたけど、現実はなかなかそう簡単には運ばない。上手くいかないこともいっぱいあるけど、でも組織にいないだけ、痛みは自分で背負ったらいいだけって思えるので、まあ不条理っていうものをあんまり感じないかもしれないなあ」

Hさん「組織の中にいると、あれですよ。あまり気が進まないこともやらないとあかんし、辞令一枚でどっか行って仕事しないといけないわけやから。そういう辛さとか、本当はこの仕事がしたいんやけどなって思ってても、いつかはその職場を離れなあかんっていうことがある。自分がその組織の中でずっと、未来永劫やれるわけではないし。歳重ねてきたらその組織をやめていく時が来るんで、それまでに、後に続く人をちゃんと育てとかないとあかんとか。そういうのがあるから、どうしてもそうならざるを得ない。そういう時に、本当にこの仕事嫌やなって思って。もう辞めたいなって思うことは何回もありますし。何でこんなこと徹夜してやらなあかんねんって思いながら、でも間に合わなかったらそれはそれで問題やし、仕方ないなって思いながらやってきたことはいくらでもありますけど。ここ最近ですよね。I先生とお付き合いさせていただくような職場に来てから。この

仕事って結構面白いやんとか。今の仕事でもそうなんですけど、面白いやんって。自分がそこでやってることが、何かの役に立ってるなってはっきり見えてくると面白いと思うんですけど、この仕事って、目に見えない部分が結構ある。今やってるのがどう活きてるんやろうっていう部分も結構あるんですよ。歯車の中なんやけど、全体の中で歯車の位置がわからへんから、とにかく何かやらされてるっていう感じしか残らない」

川畑「工場と一緒やね」

Hさん「そうなんです、まさにその通りで。そんな感覚の時が、若い頃によくありました。これって何のためにこの作業、集計やってるんやろうな、これ何の意味があんのやろうなっていうのはよくありました。それを徹夜してやらないといけなくって。こんな辛いことはない」

塾長「その時はやっぱり、我慢をしてはるんですか？」

Hさん「そうです。これ終わったら飲みに行ける、とかね。これ終わったらちょっと休み取って遊びに行ける、とかね。そんな感じですよ。何か先に、自分がやり終えたことに対する小さなご褒美を持っておかないと…」

川畑「こういうある程度まとまった仕事が出来てて、いきなり国から、こうしろって言ってきたりするわけでしょ。それで嫌やなとかって思うんやけど、それで言ってたら負けじゃないですか。それは面白くないから、そういうことを急に厚生労働省が言ってくれたから、実はこういう仕事に発展できた、という風にね。出来るだけ持っていこう、という風には言ってましたね、職場では。出先の児相やったから、いろんなことが自由やったからね。自分の思ってることとしてることが出来るだけ一致するように頑張ろう、みたいなことはしてましたね」

Hさん「だから、意識が変わってきたのは30歳になる前くらいからですかね。仕事って、辛いことばっかりやったら面白くないやん、何か面白いことを仕事の中で見つけようか、っていう風に変わってくると変わってきました。例えば、私は東京で勤務していたんですけど、いろんな方と会う。この人たちとお話ししてたら楽しいやんな、とか。こんなこと知らんかったわっていうような。そういうところで、面白いと思えたら仕事が面白くなっていく」

「組織をどう考えるのか？」あるいは「組織の中における自己実現とは何なのか？」、「そんな大人たちの葛藤を彼らはどう乗り切ってきたのか？」。まさにそんな話に、若者たちが耳を傾けています。

川畑「はい。いろいろ話が出てるわけですけど。ちょっと、それぞれの人ね。年齢もいろいろ、立場もいろいろやし。自分に引き寄せたところで、こういうことを思う、みたいなことがあれば、皆さんしゃべってみません？どうですか、Ｊさん」

Ｊさん「そうですね。始めの５人の皆さんの話を聞いてた時に、私も自分だったらこんな風に話せるかなって考えながら聞いてたんですけど。私は、大学進学まではずっとストレートに来たんですけど、その間につまずきって呼べることはあったんです。大けがをして運動が出来なくなったりとか、親とすごいもめたりとかはあったんですけど、無理矢理に、普通の方に、大部分の方の道に戻された感じがして。それが嫌だったはずなのに、何でここまで行けたのかなっていうのは聞いてて思

ってました。親が教師っていうのが大きいかなって思ってて、それのせいだって思って大学入ってから爆発したんですけど。それまでに、自分が考えて行動するだとか、親に逆らってみるだとか。そういったことが出来ていたら、そんなに大きな爆発にはならなかったかもしれないし。あんな痛手を負わなかったかもしれないしっていうのを考えてました。あんまり上手くまとまってないんですけど、そんなことを思ってました」

川畑「いやいや。Kさん何か思ってることは？自分の年齢なりに、自分の生活に引き寄せてとか」

Kさん「私も結構回り道して、この夏に高校の単位が取れたっていう状況で。高校が今の高校で3校目なんですけど。皆さんの話聞いてて、いろいろ考えさせられました」

川畑「どんな感じがする？今、出てる話聞きながら」

Kさん「うーん、話すの苦手で、知誠館に来た時は、高校2校も辞めてるんで。高校卒業するためにっていうので来させてもらったんやけど、塾長には、その後の進学どうする？大学行く？とか。そういう進路を出していただいて。高校卒業するっていうのがあれやったので、そこまで考えられなくて。何て言うか、いろんな道を教えてもらったっていう感じです」

川畑「それはいい感じ？」

Kさん「はい」

川畑「ああ。ありがとう。Cさんどうですか？何かあれば」

Cさん「そうですね、私はまだ目標っていうのが見つかっただけ。地に足が着いたとか、その瞬間はやっぱり嬉しいですよね」

Dさん「その瞬間はあった？地に足が着いたっていう」

Cさん「私ですか？私はまだまだ着いてないと思います。まだここで目標に向かって勉強させてもらってますけど、まだまだ着かない」

Dさん「ああ。ちょっと聞きたかったんやけど、看護師とか助産師っていうのが、ふっと出てきたの？」

Cさん「ああ…私、親が看護師なんですよ」

Dさん「ああ、そうなん」

Cさん「なので、その影響もすごく大きいです」

Dさん「あんまり理由も無くっていう人を見たことなかったから。そういうことか」

Cさん「そうですね。日々親の話を聞くので。まあ看護助手として働きたいなって思って、範囲を広げて面接行ったんですけど、やっぱり中卒っていうだけで、面接さえしてもらえないところもありますし。看護師の仕事ではないですけど、私は今の施設で働けてよかったなって思ってます」

大人の援助者に交じって、知誠館の生徒たちが自分の考えをコトバにしていきます。それは決して理路整然としているわけでも、流暢なわけでもありません。しかし、その一言一言にはしっかりした質量感があるのです。

川畑「なるほど。小林さん、何かどうですか。思ってることがあれば」

小林「ちょっと脈絡がずれるかもしれないんですが、子どもの育ちを考えるっていうテーマに沿って、一応私なりに考えてたんですが…。今学校で働かせてもらってるっていうこともあって、学校での教師の意識とか立場をすごく考えてて。今ちょうど、休みがちというか、もう不登校になるのかなっていう子も学校にいたりするわけです。でもその子に対しての学校の対応っていうか、目指すところ、OKとするところは、学校に来ることとか、

進級することとかが、その子に対しての対応の中心課題なんです。でもやっぱり、不登校という形で表れてるのは、その本人にとってはレジリエンスを身につけることへ繋がるような大事なつまずきというか…、敷かれたレールに対して、それをよしとしない自分の意志とか、その背景にあるその時、その時の家庭環境とか、あるいは人間関係とかの悩みや自分の深い葛藤が表に出たことなんで、そのせっかくのつまずきを、学校の表面的な対応だと、それをないがしろにしてしまうのかなって、本人の悩みをやり過ごさせてしまうことになるのかなって思うんです。じゃあ、どうしたらいいのかなって考えてたんですけど、やっぱり学校の対応とか指針とか、学校っていう枠の存在は必要やと思うんですけど。例えば学校の中で、生徒指導で決まりを守ることを指導する教師側は、決まりを守るっていうことは伝えるべきでしょう。だけども、教師の価値観まで押し付けるのはどうかなって…。掘り下げると、教師の価値観って私が思ったのは、教師になる人は、ひかれたレールに乗っかっていける人、ストレーターっていうマジョリティの人が多いと思うんです。何の疑問もなくレールに乗っかっていくことを自分たちがしてきて、それをベストとする感覚を暗に押し付けてしまってるところがあるのかなと。価値観とか驕りとかも入ってしまってって思うと、Dさんの塾長さんに対する感じみたいに、やっぱり教師って、Dさんにとっての塾長さんみたいな存在で、キーパーソンであるべき存在やと思うんです。だけど、やっぱり価値観を押し付けというか、枠にはめようとすることで、それが出来ないのであれば、どうなんですかね。でも一番はっきり思ったのは、教師の社会人枠を半分以上に出来たら、もっと多様な対応ができるように変わってたのかなって、現状はだいぶ違ってたのかなって思ったりしてました」

塾長「*今聞いててね。私の中にも、つまずくことって大事やっていう思いがあるのね。でも、つまずいた人にとっては、つまずきたくなかったというのが、正直やと思うし、さっきHさんが言ってたみたいに、やりたくなくてもやらないといけないことがあるというのも事実なんでしょう。多分、誰もつまずくことを最初から望んではいないし、あるいは、どうしようもない現実っていうのを認めないといけないことってあるわけですよ。私の上の子の場合は、いろいろハンディがあるのでね。ある意味どうしようもないわけですよ。何をどうしようが、現実はやっぱり覆っていかないっていうことがあるし、どうしようもないことを引き受けないといけない。でもどうしようもないことに、片一方で人は潰れるんですよ。でもどうしようもないことに、人は何か希望を見出したりとか、そういうことがあるような感じがするんですよ。その違いがめちゃくちゃ大きい。今日はここ知誠館で実際に学んできたりとか、今学んでたりとかする生徒たちがが結構いるのでね。例えば、私たちは体験活動っていってどっか行ったりするんですよ。車でね。結構皆、盛り上がるんですよね、無邪気に。ここには普通の塾の子も来てるので、どっちかって言うとそっちの子は、冷めてるんですよね。盛り上がらない。でも、知誠館の子は、結構皆盛り上がる。この違いはいったい何なんやろうと思ってね。終わった後も帰らずにKちゃんとMちゃんでマンガをいっぱい描いたり。何や訳のわからんことをやってるんやけど、キャッキャ言*

って盛り上がってる。でも一方で、皆どうしようもない現実っていうのを背負ってるわけですよね。そこにね、どう表現したらいいのかな。改めて何か思わされるんですよね。それが何とも言えないんですよね」

問題や挫折といったネガティブなものをポジティブな機会へと変換して未来を拓くのか、あるいはそのネガティブなものの中で潰れてしまうのか。その違いは大変大きいように思います。先の「セカンドキャリア」ということと「機会開発」、この二つの概念はとても密接につながっていくのです。

川畑「それ、コトバで表現してほしいな」

塾長「いや、コトバも足らんのやと思います。私いっつもCちゃんにコトバ足りてないで、って言ってるんやけど、私もそれをコトバで表現しきれないんやけど、そうしたい。それで、そういうことを表現できる場っていうのをやっぱり作っていきたいっていう思いもあるし。ものすごく微妙なことで、こっちに転ぶとそこで潰れていくんですよ。でもこっちに行くと、そこから希望が生まれるんですよね。これって何やろう？自分の中でそういう感覚がある。だから、それを豊かさとか、つまずきの価値とかっていう風に…それをコトバで表現すると、すごい陳腐な気がします。コトバが足りない気がする。そんなことを、小林さんの話を聞いてて思う」

Hさん「こっちに転ぶか、そっちに転ぶかってあったけど、私が振り返ってみると、そういう時って諦めなあかん。まあ仕方ないやん、みたいな。スパッと、仕方ないやんってその時は考えちゃうことが多くって。これやりたいんやけど、仕方ないやん。だから、こっちやらないと仕方ないやん、みたいな。そんな感覚で今まで生きてきた。それってすごくいい加減なところで動いてる部分があって。どうしようかって真剣に悩んで悩んで、ってあんまりしてないよな、いい加減に生きてきてるよなって…」

川畑「さっきのね、車の中での話。あんまり盛り上がらへん場合は、他のこともいろいろ考えるから。だから分散して、どれにものめり込めない、みたいな感じがあって。でも盛り上がると、そこだけに集中して盛り上がれる、みたいなね。いや、さっきの学校の先生の話であったけど、先生が生徒の話聞いてね。君の気持ちはよくわかるけど、それじゃあ生きていけないのよね、みたいなことを言われたってどうしていいかわからへんし、みたいなね。そういうこととどっかで重なるんですよね。そういう風に言えば、一つのことに一生懸命になれるのは幸せですよ、やっぱり。でも、遊んでる時間にもっと勉強してたらとか思ってたら、そりゃ社会的にはそつなくいけるかもしれんけど、どれが一番好きやねんって聞かれたら、どれも好きじゃない。みたいに言わざるを得ない、みたいにしたらあんまり幸せじゃないですよね」

Hさん「それって、わかるような気がする」

川畑「うん…幸せじゃないんだけども、それを幸せと思わされて生きてる、みたいな部分が…無いんかなあ」

Hさん「わかる部分もある」

川畑「いや、最近本が出て…まだ読んでないんやけど。大阪で子どもらをほったらかして餓死させた事件がありましたでしょ。あのお母さんが、週刊誌レベルやけどいろいろ見ていったら、小さい頃からいろんなことに気を遣う子やったらしいんですよ。家庭の中もいろいろ

あってね、難しくて。子どもやけど、ずっと大人みたいな感じで生きてきた子でね。結婚しても、いい奥さんなんですよ。子どもが出来ても、いいお母さんなんですよ。ところがある日プッツンしてね、入り浸ったところがホストクラブなんですよ。それ見てるとね、何かいろんなことに配慮してっていうのは持たへんのやろうなってね。入り浸った先のホストクラブなんて、そこでは子供でいられる、みたいな場所ですやんか。世の中に配慮しなくていい。みたいなこと考えるとね…これが好きやからそれに浸っていられる、っていうのはすごく大事やし、能力やし、力やし。みたいなね。そういうのが許されへんところがあるのかなって。(Mさんに向かって) あの私が中3の頃に、大人の人がいろんなことしゃべってる中で聞いたような経験は全然なかったなと思うんやけど、あなたとしてはどんな感じがする？いろいろな話をここで聞いて」

Mさん「何て言ったらいいのか…」

川畑「聞いてた話の中で、ここが面白かった、ここがピンときた、みたいなところある？」

Mさん「私はまだ、だんだん進んでいってるところなんで…、いろんな、人生っていうか。自分の中で、20歳とか、どんな風にそうなっていったらいいかっていうのを、いろいろ聞かせてもらった気がする…」

川畑「はい」

塾長「実は彼らは、月に一回やけれども、皆が自分自身のライフストーリーを語るっていう場を開いてるんですよ。その中学生のトップバッターがMちゃんでした。彼女は、初めてみんなの場の中で語るんやけど。その時に小林さんは初めて来たんやね。で、小林さん、もう感極まってしゃべれへん、みたいなことがあって。でもMちゃんはよくしゃべってくれたし、みんな感動した、その時は、ちょっとどうかなって思ってたんやけど、彼女はとてもよくしゃべったんですよね。本当にいろんなものを抱えて来てるので、今まで語れなかったことが、いっぱいあるわけ。いろんなことが実はぐるぐるぐるぐる回ってるけど、やっぱりコトバに出来ない。言っても聞いてもらえなくって傷ついたりとかっていうことがあったんやろうと思うんやけど、ようやく彼女が語り始める。今日も実は、彼女が来るってことを私自身は全然知らんかった。でも彼女は実はこういう場に興味があったんや。そうやんな？」

Mさん「はい」

塾長「そうやんな。だから彼女はやって来る。だからこのMちゃんが、こういう場で、全然知らん人達の中で、緊張もするし、たどたどしく語るわけやけど。でもそこに、いっぱいの何か思いががあるわけなんです。これがねえ、何とも言えないわけですよ。私からすると、そういうものをキャッチしてしまうんやけどね、何かね。私自身の中にある何かを呼び起こされるんですよね。そういうものに、自分自身が支えられてるのかなって思ったり。今日はAちゃんがトップバッターでいっぱいしゃべってくれたので…、やっぱりこう、すごくコトバが出てきたのにびっくりしています。前はそんなイメージは全然なかったので。コトバがこう、乗るんやね。コトバは不自由なんやけど、すごい大事なんですね。だから川畑先生に言われたことじゃないけど、コトバで表現したいなって私も思うんやけど…」

川畑「コトバにならないって言ったら、家庭内暴力ですよ。家庭内暴力っていうのは、そこにコ

トバにならないコトバがいっぱい詰まってるわけやからね。それがコトバになれば、殴らなくても済む、というね。しゃべってるのが、コトバがあるからわかるわけで、コトバにならへんところにっていうのもあるわね。はい。あと30分くらいの時間になりました。テーマに縛られなくても、何でもいいのでしゃべってみましょう」

Ｂさん「コトバの話と被るかもしれないんですけど、僕の中でキャリアを考えるにあたって、不安と、コトバっていうのが結構重要なものとしてある。元々しゃべるのがあんまり得意ではない方なので、僕の中ではしゃべるコトバよりも書くコトバの方がウェイトが大きいって思います。考えてみれば、引きこもりからの脱却というのが、ここに来て、定時制の高校に行くんですけど、そこで、毎年年末に作文を書かされるんですね。一年間を振り返るっていう。それが冊子になって毎年残っていくんですけど、それが積み重なっていく中で、自分が抱えてることと、社会的なこととかを考えるようになったり。自分の過去とこれからどうしようかっていうのを考えるようになったり。で、いざ受験になって大学に進むんですけど、その時に何をしたいかっていうのが、自分の中で、マスメディアに関係したいっていうのがあって、そういう方向に進むんですけど。自分の中のことをコトバで表現するっていうより、周りのコトバに振り回されてたっていうか…それをかなり気にしてきたっていうことが大きいと思って。そういう中で大学に入るんですけど。大学でも、その頃から本を読みだして。その感想を書いてサークルのフリーペーパーに載せるっていうことをしてたんですけど。そうする中で、自分の中の考えを文章にして出すっていうのが徐々に好きになってきて。それが一番大きかったのが卒業論文なんですけど。卒論がなかったら大学院に行ってないでしょうし、ここにもいないでしょうし。そういう意味で、コトバっていうのはキャリアとほぼ同義のコトバっていうか。そういう風になりつつありますね」

塾長「今は、自分のコトバを作ろうとしてるんやね」

Ｂさん「多分そうやと思うんですけど」

塾長「そんな感じするわ」

Ｂさん「実際、その不安っていうのについても、見通しは立ってはいるんですけど。ただその、ちゃんと専門用語で○○的不安っていうのがあるんですね。ただ、それを自分の不安とイコールで結びつけるのはちょっとまだ抵抗があるんですね。この不安は概念的なものというよりは、個人的な蓄積によってできたものですし。それをわかりやすいコトバにしたいっていうのが今のところの目標」

塾長「なるほど。私なんか、すごい執念やなあって思う。中学の時にここにやって来て、結局それをテーマにして大学院まで行くんやから。執念やなあ」

Ｂさん「前からその不安っていうのはあったと思うんですね。小学校、幼稚園の頃から。それが不登校、引きこもりっていう形で現れただけやという風に何となく思ってはいるんですけどね」

川畑「手垢のついていない自分のコトバ、っていう感じ…」

Ｈさん「今の話を聞いてて、自分のキャリアっていうものは、実は自ら獲得していくものじゃないですか。コトバも自ら獲得していくもの。そこは共通点があるからそういう風に感じてはるのかなあっていう風に、今の話を聞いてて。だって、キャリアって、人から与えら

れるものではないと私は思ってるので。自ら獲得していくものだから。一般的に使われてるキャリアって、職業的な意味での、職業能力、経験を含めたものを言ってるけど、人生の中で考えたら、一つ一つの経験がキャリアなんじゃないかなあと。それはいろんな形があるんじゃないかなって。それは一つではないよなあって」

川畑「皆さんの話を聞いてね、真面目やなっていうのをすごく思うんですよ。一般的に言われる「真面目」って、真面目な人ってちょっとな…っていう風に言われる「真面目」なんやけど、例えばＥさんの言う、自分はすぐ辞めてしまうんやから、そこで雇ってもらうの申し訳ないって思うこと。自分の中での整合性に対して、めっちゃ真面目やん。でもそれは、世間に対しての真面目さじゃなくて、自分がそうしたい。それが、自分が獲得するキャリアっていうのと重なったなあって。子どもが出来たからっていうのも」

Ｈさん「そこのところは、自分に向き合ってる所が非常に真面目やっていう風に感じてて。私は自分に向き合ってないのかな…、ふらふらしながら。結果的に、世間的に見れば真面目って言われる部分なのかもしれないけど、自分自身の中では、果たして真面目なのかなっていうのは常にあります。ある意味、川畑先生がおっしゃってたのは、自分自身にしっかり向き合って、そこのところで、しんどい思いをしたり大変な思いをしたりとか。そんなところにぶち当たってしまったっていうところを含めてね。そういう風な感じを、今の話を聞いてて…」

川畑「そういう意味で、自分は真面目なんやろうか、っていう疑いをちゃんと持ちながら自分を見ていくのも「真面目」っていうことになるのと違うやろうか」

塾長「私、今のＢ君の話を聞いてて、ヘレンケラーが日本に来た時に、アンラーニング unlearning って言っていたことを思い出しました。アンラーニングって、ラーニングのの否定形なんです。だから直訳したら「脱学習」とかって意味になるんです。これを、その時の通訳したのは、鶴見俊輔さんなんですよ。鶴見さんは、これを「学びほぐし」って訳した。セーターの糸をほぐすみたいな感じかなあ。だから私たちは、コトバの世界の中で生まれてるので、生まれた時からコトバの意味を背負って生きてるわけでしょ。それを一回ほどくわけですよね。ヘレンケラーは、高熱でいろんなものを失うわけやけど、それはサリバン先生っていう人と出会う中で意味を獲得していく作業があって。それを彼女はアンラーニングってコトバで呼ぶわけです。Ｂ君の場合、コトバはいろんな意味をもう持ってしまっているので、そこに自分のコトバを編み込んでいこうとすると、一旦ほどかないといけないのかもしれない。そういう作業があるのかもしれません。まあいろんな、当たり前の中に生きてる部分がいっぱいあるんやけど、当たり前って何なんやろうなあ、っていうのをどっかでほどいていく。そんなことは、いっぱいあるような気がするんやけど」

Ｈさん「当たり前って言われると、そこで思考停止してしまう。考えなくなってしまいますよね。「それが当たり前やん」って言われると。それがずっと、世間では多くあって。私が思ってるのは、だから自分自身何も考えてないのかなあって。世間の常識って言われるものに対して。そんな感覚はあります」

塾長「でもその「当たり前」からちょっと道を外れ

ていくと、すごいストレスがかかっていったり、すごいしんどかったりとか。それが子どもとか、多感な時期とかやったら、もう恐ろしい世界がやって来るんやろうなって思うんです。ものすごく孤独やし。新しい生徒がやって来ると、ここにいる生徒達は、その子にどうしていったらいいんやろう、とかっていうのを私に投げかけてくるんです。いろんなことを。それは私にとってはものすごい救いなんですね。私たちが何かを考えるっていうんじゃなくて、同じ位置にある子どもたちが一生懸命考えてくれる。何とも言えない世界が展開するんですよ。感動しますよ。それがまた、さりげなくて。コミュニティの温かさっていうのは何なんやろうねって思うんですよね。そういうのがものすごくあるんですよ。そこにすごく救われていったりっていうのがあったり。そういうところに何かコトバがあったら、新しいものを何か提示できるのかもわからないし。自分のコトバを得ると、強くなる。それはやっぱりそう思う。だって人に伝えられるからね。コトバってすごい大事やと思う。Kちゃんも、随分支えになってあげたよね。それが大きい。彼女は卒業式の時に、送辞を語るんですよ。そうしたらうちのスタッフなんかは、「私とか小中高と卒業式で一回も泣いたことないのに、大泣きしました」とかって言ってましたね。何がこう感動させるのか。Kちゃんは、私、絶対読むの嫌やって言ってたんやけど、そこのコトバの力っていうかね。そんなきざなコトバや難しいコトバが並んでるわけでもないんやけど、質量感が全然違うんやね。そこで編み出されるこの子のコトバの力が…」

「機会開発」にしても「セカンドキャリア形成」にしても、その過程にコトバはとても大事な働きをします。従って当事者である若者たちが、それ以前に自分のコトバをしっかりと身につけているかどうかは、とても大事なポイントになるのです。借り物のコトバではなく、自分自身のコトバ。それを身につけていくためには、何度も自分自身を振り返る省察的な思考が必要となるのでしょう。

川畑「はい。そしたら時間があと20分くらいあるんで、最後に一巡、今日の感想などがあれば」

Dさん「えっと、初めて参加させていただいて、この存在を知ったのは、塾長が本を書かれて。その中にあったから知ったんですよ。そんなことしたはったんやと。読んで思ったんですけど、崇高なレベルの話をしたはるんやろうしっていうのもあって、あんまり参加出来ないんじゃないかなって思ってたんです。僕の仕事は、人間味に触れることがすごくあって。それがやり甲斐であったりするんですけど。そこら辺の部分で、いろんな人の気質に触れておくって、すごい勉強になるんですよね。おっしゃってたように、ずっと我慢出来る人もいるし、出来ない人もいるしっていう話があるので。すごい勉強になりました。もうちょっと自分の時間も作ろうかなと。こういうことを考える時間を作らないとなって思いました。本当に、ありがとうございました」

Bさん「この夏休み、高校生が書いた作文の添削をしてるんですね。そのテーマがちょうどキャリアなんです。だいたい80本くらい読んだんですけど、高校生のキャリア像っていうのがすごい偏ってるっていうか。仕事オンリーというか。そういうのばっかりだったんで、この場で話されてるようなことに変えてい

けたらいいなという風に感じました」

塾長「キャリアは、ビジネスキャリアっていうのと、ライフキャリアっていうのがあるので。ライフキャリアになるとより大きい概念になるね」

Ｂさん「そういう感じで書いてる子も中にはいたんですけど、どうしても仕事に直結してしまう子がとても多い」

Ｌさん「仕事のキャリアっていうのに限定されたら、私なんてキャリアないよねっていうのが答えやと思うんですね。だって資格もないし、経験もないし。でも、今まで自分がいろんなことをやってきたのもあるし、やらされてきたこともある。それで得てきたことをちょっとずつ組み合わせて積んでいって、今の自分があるし。これがキャリアだ、って言いたいねって。内向きに向かなかっただけなんですね。挫折することもあったし。それも、自分が出来なくて挫折したんじゃなくて、周りの力で挫折したっていうのがあるんですね。その時は、その相手にコトバの暴力はかなり向きましたよね。そんなこともやってきたなあ、でもそれを乗り越えてきたんやなあって。乗り越えれたのは、何でかはわからないですよ。乗り越えれたとも思わないし、乗り越えてる途中かなっていう気もするし。すごい複雑なんですけど。どこにゴールがあるんやろうか。…まだ途中なんですよ。とりあえず仕事のことだけがキャリアやって思われてるんだったら、なんか寂しいなあっていう感じがします。いろんな意味でキャリアっていうコトバを使っていきたいなってすごく思います」

小林「最後、塾長さんが言ったはったことをすごく私も思ったんですけど、Ａさんの話の中で、Ａさんがａさんのコトバで語ったはるのがわかりやすかったというか、響いたというか、聞き入ってしまった。なので自分も、自分のコトバで人に自分のことだったり伝えたいことを伝えられるようなコトバを、上手く扱いこなせるようになりたいなと思いました」

Ｅさん「ありがとうございました。今回二回目参加させてもらったんですが、前回最後に、どんどん楽しくなりそうだって言って帰ったと思うんですけど、今回も楽しかったです。キャリアは失敗も大事だろうなっていう話で、僕ちょうど２～３週間前、他の研究者の人と話してて、「僕、失敗待ちしてるんです」って話してたところだったので、ちょっとびっくりした。僕、お調子者で生きてるので、どこかしらガツンと失敗をしないと新しい自分に気付けないし。何でも調子よく行ってしまうと、本当に孤独になってしまう。マイナスじゃない方の孤独感っていうのが、多分お調子者にはあって。失敗っていう体験をしないことには、自分が成長することもないし、新しい道っていうのは開けないなとつくづく今回思いました。失敗しましたけど、乗り越えましたっていう話を次回できるように、目の前にあることを必死にやっていけたらいいかなって思いました。ありがとうございました」

Ｃさん「初めて参加させてもらいましたけど、正直私は聞き取るという能力があまりないので、難しい話をしたはる時は、「？」って感じだった。しゃべるのも苦手なんですけど…。塾長が言ったはった、この瞬間が今幸せやっていうその気持ちは、すごくわかるんですよね。そういう話を聞いて、自分の中に入れたりとかして、自分で上手に表現出来たらなと思います。以上です」

田中「スタッフの田中です。今回お話を拝聴していて、私はわりと、Ｈさんとかがおっしゃった

ように、ストレーターであることにコンプレックスがあると言いますか。そういう気持ちを、知誠館にいることで感じてたのを思い出し始めたということがあったんですけど。Iさんが、ストレーターじゃない人達は、今はそうでも、その渦中にいる時は本当にしんどいとおっしゃったように、私には心の底からは分からないんですけど、きっとその通りなんだろうなと思って。社会全体を見回した時に、キャリアはビジネスキャリアのみ、とか、社会は簡単なフレーズとか簡単なコトバとか、発しやすいコトバとかにどうしても惑わされたり、それが正解であるかのように思ってしまうんですけど。本当のことは、コトバにするのに手間が掛かったりとか、難しかったり。自分が今持ってる語彙では、表現出来ないような気持ちとか感情とかっていうのが、もっと世の中で肯定されていったらいいのになって。マジョリティでもマイノリティでもなく、ストレーターでもいいよね、ストレーターじゃなくてもいいよね、どっちでもいいんじゃないっていうのがもっとみんなで共有し合えたらいいのにな、っていうのはすごく思いました」

Hさん「ここに来ると、感じることがいろいろあって。皆さんのお話の中にいっぱいいい話もあるしヒントもあるし、いつも感じて帰ってます。キャリアの話であるのは、私自身、広い概念で捉えてる。いわば、ビジネスキャリアの部分と、ライフキャリアの部分全体でキャリアやと思ってるので。それって、塾長さんがおっしゃる「物語」。キャリアってそれじゃないの、って実は思ってる部分があります。そんな風に今日も感じさせていただいた時間でした。ありがとうございました」

Jさん「今日初めて参加させていただいたんですけど、皆さんがいろんな話題を提供されるので圧倒されて終わってしまったなという感じです。最後考えてたのが、当たり前って何だろうなって。自分にとっての当り前もそうだし、世間にとっての当り前の基準とか。そういうのもそうだし。そういうのを一回ほどいて考えて、そこからもう一回見てみたいなって。当たり前なんてことなくてもいいんだけどな、っていうことを考えてました。ありがとうございました」

Kさん「えっと…自分は、頭で考えてることとかを口に出した話すのが苦手なんですけど、今日いろんな方の話を聞いて、いろいろ考えることが多くて、それを自分のコトバで伝えていけるような、そういう風になれたらいいなって思いました」

Iさん「楽しかったですね、今日は。若い人がねえ。いつになく多かった。初めてです、この感じ。それが今までで、一番よかったです。皆さん経験がね、話下手っていうのは、まだ慣れておられないのは当たり前で、そんなことは全然問題じゃなくって。でもこれからいろいろ感じたり刺激を受けながら、悪戦苦闘っていうか。当事者である時は本当に辛いと思うんですよ。でも、本当のところ、あるがままにっていうところが行き着くところやなと。いろんな偶然もあったり、それが必然やったり。やっぱりでも、育ってきた環境も影響もある。ああはなりたくないって思ってた親をどこかで和解しながら受け止めていったりとか。そのことが自分のいい経験なのかは知りませんけど、親と同じ道を選んでいくっていうのを意識できてなかったかもしれない。あるいはしてたかもしれないけど。だから悪戦苦闘するし、答えが見つからないまま苦労する。苦しいけど、生き続けるっていうことですよ

ね。放棄しないで生き続けて行かざるを得ない。生きることを諦めないっていうことだけ、持ってたらいいかなあって。行き着くところは、誰の形でもなく、自分のあるがままを受け入れられるようになるっていうのが死に近づいてる人間の目標かもしれないなって。落ち着いていくようにね。思春期は悪戦苦闘の年やし、私くらいの年を過ぎたらね、自分をまとめていく時期に差し掛かっていく、ただ寿命が延びていってるから、まとめていくのにどんな悪戦苦闘が始まるかなあとか。もうわからない。わからないまま、年取っても悪戦苦闘はいろいろ起こりますし。でもだんだん受け入れられるようになっていく。生きることを諦めないことが大事かなと思います。楽しかったです」

Mさん「いろいろ話をいろんな人から聞いて、自分は頭悪いのであんまり難しいことはよくわからないんですけど、こうやって話を聞いて、自分はやっと顔を上げられるように、前に向けられるように、だいぶ先に行けるようになってきたので、先のことも考えさせられました。ありがとうございました」

Aさん「今日話を伺いながら何度か、感極まってしまう時があって。それを落ち着いて聞いていられる時に、瞬間にぐっと気持ちが高ぶったのかなっていうことを思うと、やっぱり…。だいぶ今は仕事もしていますし、いろんなことを考えていけるようになった。なので、ここまでしんどかった時期のことに引っ張られて、引きずられてその時間が止まってしまうようなことも今は少ないんですけれど、今日聞いてても、感極まってしまう時の話っていうのは、自分が一番しんどかった時の感じがそのまま……（涙）……思い返されるというか。その時の感じが蘇ってくる。でもそれは、ちょうど2回くらい前のラウンドテーブルの最後にも、やっぱり生まれ変わって同じ人生を歩みたいとは思わないし……。でも、今日また月日が経って、こうやって来ている自分はまたその時とは違って、自分の人生でよかったと思えるような感じがすごくしていて。今もすごく苦しいけれど、その自分の今の人生を、次生まれてくる時はもっと幸せにっていうのではなく、もう少し自然に自分の人生を引き受けられているし、これからもまた積み重ねていく毎日っていうものに自分自身も向き合いたいと思えるようになっているんだなっていうのは、今回のすごい変化として自分が捉えられているので、そのことも聞きながら確かめられたことがよかったなと思いますし…すみません、泣いちゃった…」

塾長「よかった。よかった、よかった」

川畑「子どもの虐待防止のことをよく考えてたんですけど。地域のいろんな役の人に協力していただいていろんなことをしてるんだけど、どうしても専門家に任せる、みたいな感じになってくることがあるわけですよ。地域の民生委員さんも、役所の皆さんも、他のことやってきているのにいきなり虐待のことしないとあかんっていうのはあるんやけどね。児童相談所が専門やからってなったりする。どうなんやろうね…。例えば電子工学のことなんかは、その専門家しか知らへんし、他の人にはわからへんのやけど、人の気持ちとかっていうことには、心理の専門家もいろいろおるわけやけどね。心理の専門家よりも他の人の方が心理に敏感やって思う人もたくさんいる。ただそういう意味で言えば、人生経験と、それに基づく常識の力っていうのはすごい大事なんで、そこを専門家じゃないからっ

て言わず、皆で磨いていこうよと。専門家って言われる人も、訳のわかったようなわからんようなことを言うんじゃなくて、自分の人生経験に基づいたところで考えていく。そのところも大きく持って、みたいなね。というところがキャリアのことと重なってきて。どう自分が考えて進んでいくかっていうことが大事になってくるんやなっていうことをすごく思いますね。というのが今日の感想です」

塾長「川畑先生、ありがとうございました。Aさんの話、何とも言えないくらいに感動的だったんですけど。彼女の言ったように、2回前、「私はこんな人生は歩みたくない」って確かに言ってました。その時と、今回の違いっていうのが、彼女が生きてきた証なんやろうなって思うんですよ。ものすごくそのことって大事なことやと思うんですよね。生きてる感覚。彼女は地に足を着けるっていうコトバで表現するんやけど、いつも感じられることじゃないのかもしれない。ふとした瞬間に、私は生きてるんやと。地に足を着けて立ってるんやっていうのを感じられる瞬間ってやっぱり感動するんよね。またこういうものを皆で共有できるのは幸せやなって思うし。それは彼女の話だけではなくて、皆の話でもあると思うんですよ。で、D君が、何で俺は呼んでくれへんのやって言ってたけど、ラウンドテーブルは、元々は指導者のための学びの場やった。指導者は指導するんじゃなくて、学ばないといけないっていう前提があって。そういう形でスタートした。今回は初めてのパターンやったんや。でもね、私いつかはそうしたいなと思ってた。私はいつもラウンドテーブルの冒頭で知誠館の生徒のエピソードを紹介してた。それが大体考えるきっかけ、お題やったわけや。でも今回は、卒業生も現役の子も出て来てくれた。それこそ、リアルな「生」なんですよね。コトバなんて足らなくていいんですよ。コトバはコトバ。それこそキャリアだって、キャリアはキャリア。運んでるんですよ。その時の思い、考えであるとか。それは入れ物にしか過ぎない。でも大事なんやけどな。そのコトバを介して伝わるもの、感じ取れるもの。そういうのがやっぱりすごい大事やと思う。Mちゃんが言ってた、私は前に向けるようになってきた、と。彼女は前に向けなかったんですから。ずっと下向いてしか生きてこれなかったんです。私が彼女と会った時に、この子を何とか前を向かせたいって思った。それには、何年もかかる。そんなすぐじゃない。この子が前に向けるようになるまで、何年もかかるわけ。それは、この子にずっと私たち寄り添いながら…。彼女にとっての経験でもあるけど、それは私たちにとっての経験でもある。大人も子どももひたむきさは一緒かもしれません。いろんな葛藤がありながら生きてるんやと思うんですけどね。指導する側とされる側、そんな関係じゃなくて、そんなことを出し合える場になっていったら、こんな場、他にないんじゃないかなって思うくらい素敵な場になるように思うんですけど。実は、私たちは裏庭に小さい森を創ろうと思ってるんです。こういうことを屋外でしゃべりたいなと思ってるんです。真ん中に大きな木を置いたテーブルを囲んで。こういう場は、いろんなところに出来た方がいいかもしれない。こだわりを抱えた若者たちと、こだわりを持って生きてきた大人たちが出会える場。そういうことに発展していくと思うので、いろんなことで力になってもらいながら見守ってもらえたらなと思います。ありがとうございました」

ストレーターではない若者たちのキャリアを見つめてみたいと考えた理由。それは前回、大学生たちの就活の実態に触れ、その渦中で生じる様々な葛藤を知った時に、私たちが普段関わる不登校やひきこもりを経験した若者たちのそれとは、どこか大きく違っているような気がしたからです。それがいったい何なのか。そこを見極めてみたいというのが、今回のラウンドテーブルの目的だったのかもしれません。

ストレーターと、そうでない若者たちのキャリア形成の違い。その一つが、「物語性」ということでした。ストレーターでない若者たちのキャリア形成は、どこか挫折を前提としています。そういう意味では、「セカンドキャリア形成」としての傾向を色濃く持っているのかもしれません。挫折体験からの再出発。そこには自分と向き合い、他者と関わることを通して癒され、自己反省に立ち、自分のこれまでの枠組みを更新し、より大きな枠組みを構築していく、といった変容過程が見られます。だから、その変容を貫く文脈は個人の人生に重なり、彼らのライフストーリーを描くのです。彼らのキャリア形成を「豊かな世界」と表現した参加者がいました。その豊かさとは、経済的なものを指しているわけではありません。社会的なものでもないでしょう。それは、ひたむきに生きようとしている彼らの生き方に対して投げかけられたコトバのように感じられました。

支援と被支援、援助と被援助の壁がなくなる時、そこにはキャリアという共通の話題に対して向き合う人たちが集っていました。若者たちは自分たちのこれまでの経験を振り返り、そこを足掛かりとしてこれらの未来を描き、援助者たちは、若者のキャリア形成に携わりながら、自らのキャリアを問い、新たなキャリア観をそこに付加していこうとする。そんな更新性を備えた学び合いの場に発展していくことを期待しつつ今回のラウンドテーブルの幕を下ろしました。

『幼稚園の現場から』
34・働き方改革・一つの指針

原町幼稚園園長　鶴谷主一（静岡県沼津市）

幼稚園という職場

明るいブラック陽気なブラック♪･･･なんてお気楽に構えていた我が園にもいよいよやってきました、働き方改革の波！　幼稚園教員助手として月給10万円ポッキリで働いていた初任者時代から34年間この職場で仕事をしてきた私のイメージをまず書かせて下さい。〔幼稚園教諭の仕事は、年間を通してメリハリのきいた仕事であると思っています。なんといっても給与や待遇よりも保育者になりたいと思い、夢を実現した教員たちの仕事にかける情熱が、長時間労働もいとわない姿勢を支えてきていたと思います。「もっといい保育をしたい」「もっといい保育者になりたい！」という願いが強いほど準備に時間はかかります。自分のスキルを上げるための練習や研修の時間も必要です。タイヘンだけど楽しく充実感を感じることも多々あります。給料は安いが喜びがあって休みは多い！というのが労働者としてのメリット〕･･･というのが私が持っている幼稚園の仕事なのですが(ˆ_ˆ;)･･･時代の流れはそういう訳にはいかなくなってきています。

まず、次の表をご覧下さい。

2018年度・原町幼稚園休日カレンダー　休日　所定労働時間=8ｈ/日　*印土曜日=5ｈ　学校法人松濤学園原町幼稚園

4

日	月	火	水	木	金	土	労働時間
1	2	3	4	5	6	7*	45
8	9	10	11	12	13	14	40
15	16	17	18	19	20	21	40
22	23	24	25	26	27	28	40
29	30						40
労働日	21	休日	9		労働時間合計		205

5

日	月	火	水	木	金	土	労働時間
		1	2	3	4	5	16
6	7	8	9	10	11	12	40
13	14	15	16	17	18	19	40
20	21	22	23	24	25	26	40
27	28	29	30	31			32
労働日	21	休日	10		労働時間合計		168

6

日	月	火	水	木	金	土	労働時間
					1	2	8
3	4	5	6	7	8	9	40
10	11	12	13	14	15	16*	45
17	18	19	20	21	22	23	40
24	25	26	27	28	29	30	40
労働日	22	休日	8		労働時間合計		173

7

日	月	火	水	木	金	土	労働時間
1	2	3	4	5	6	7	40
8	9	10	11	12	13	14	48
15	16	17	18	19	20	21	40
22	23	24	25	26	27	28	32
29	30	31					0
労働日	20	休日	11		労働時間合計		160

8

日	月	火	水	木	金	土	労働時間
			1	2	3	4	24
5	6	7	8	9	10	11	16
12	13	14	15	16	17	18	0
19	20	21	22	23	24	25	32
26	27	28	29	30	31		40
労働日	14	休日	17		労働時間合計		112

9

日	月	火	水	木	金	土	労働時間
						1*	5
2	3	4	5	6	7	8	40
9	10	11	12	13	14	15	40
16	17	18	19	20	21	22	32
23	24	25	26	27	28	29	32
労働日	20	休日	11		労働時間合計		149

※夏休み日直勤務一人3～5日（表には5で計算）

10

日	月	火	水	木	金	土	労働時間
30	1	2	3	4	5	6	40
7	8	9	10	11	12	13	32
14	15	16	17	18	19	20	40
21	22	23	24	25	26	27	32
28	29	30	31				24
労働日	22	休日	9		労働時間合計		168

11

日	月	火	水	木	金	土	労働時間
				1	2	3	16
4	5	6	7	8	9	10	40
11	12	13	14	15	16	17	48
18	19	20	21	22	23	24	32
25	26	27	28	29	30		40
労働日	22	休日	8		労働時間合計		176

12

日	月	火	水	木	金	土	労働時間
						1	0
2	3	4	5	6	7	8	40
9	10	11	12	13	14	15	40
16	17	18	19	20	21	22	40
23	24	25	26	27	28	29	0
労働日	15	休日	16		労働時間合計		120

1

日	月	火	水	木	金	土	労働時間
30	31	1	2	3	4	5	0
6	7	8	9	10	11	12	40
13	14	15	16	17	18	19	32
20	21	22	23	24	25	26	40
27	28	29	30	31			32
労働日	18	休日	13		労働時間合計		144

2

日	月	火	水	木	金	土	労働時間
					1	2	8
3	4	5	6	7	8	9	40
10	11	12	13	14	15	16	32
17	18	19	20	21	22	23	40
24	25	26	27	28			32
労働日	19	休日	9		労働時間合計		152

3

日	月	火	水	木	金	土	労働時間
					1	2*	13
3	4	5	6	7	8	9	40
10	11	12	13	14	15	16	40
17	18	19	20	21	22	23	32
24/31	25	26	27	28	29	30	8
労働日	17	休日	14		労働時間合計		133

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計	比率	
暦月	30	31	30	31	31	30	31	30	31	31	28	31	365		
休日日数	9	10	8	11	17	11	9	8	16	13	9	14	**135**	37% /年	内有給休暇扱い19日(7,8,12,1,3月)
労働日数	21	21	22	20	14	20	22	22	15	18	19	17	**231**	63% /年	週平均労働時間　(年間労働時間÷365×7)
労働時間	205	168	173	160	112	149	168	176	120	144	152	133	**1860**		**35.7**　＜　40

私どもの園の2018年度・常勤教職員の労働時間・休日カレンダーです。これによると年間労働日数は231日（63%）、休日は135日（37%）、週平均労働時間数は35.7時間です。
労働基準的には何も問題がないように見えますが、これは一日の労働時間を８時間キッチリで計算していますので、実際とはズレがあります。

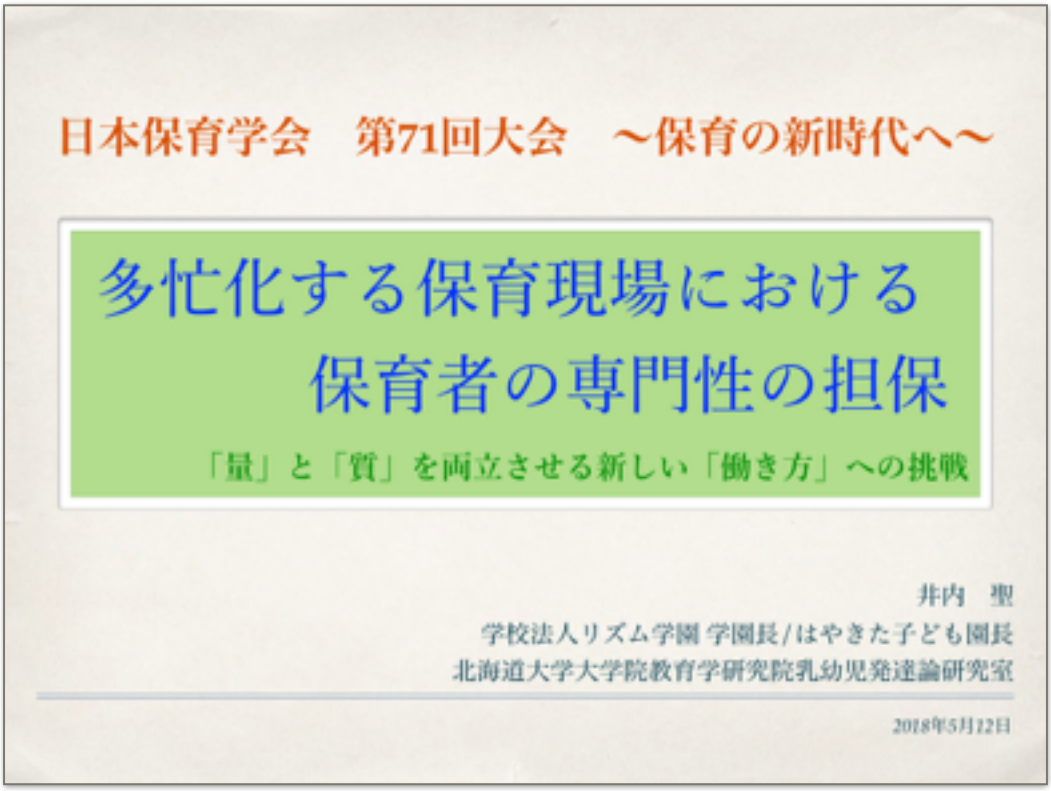
実際には一日８時間で終えられない日が多いのが事実です。業務として残業を指示される場合は残業手当の対象となりますが、終礼が終わって「お疲れ様！」をした後に任意に仕事をしているのです。いわゆるサービス残業というやつです。

就業時間に園を出れば残業が無いわけでなく持ち帰り仕事に変わるだけです。職員の声を聞くと「家に持ち帰って仕事をするより園で済ませていきたい。」と全員が声を揃えて言います。それを容認しているとどうしても帰宅時間が遅くなってしまうのです。

日々残業時間が積み重なってくると、さすがに疲れがたまってきますし、お休みにリフレッシュできたとしても、日々の保育に差し支えが出てくるでしょう。働き方改革の本丸である「時短」を目指すには、長時間勤務を前提とした山積み業務の量を減らすことが必須です。しかし何を減らせば良いのか･･･そのことを考えるだけで残業が増えてしまうので、なかなか着手できないでいました。**いったいどこから手を付けていったらいいのか！**そのヒントになるレポートを紹介します。

井内氏のレポート

私の友人で先進的な取り組みに次々とチャレンジしている井内聖氏が、2018年５月に日本保育学会71回大会に保育者の働き方改革の話題提供を行いました。**単に時短をすれば保育の質が下がってしまうのは明白**です。そこで、何を減らし何を重視するのか取捨選択がポイントになってきます。その大切な視点を担保しつつ、いかに働き方改革を進めていくか、このレポートは多くの園の参考になると思いますので紹介させて頂きます。

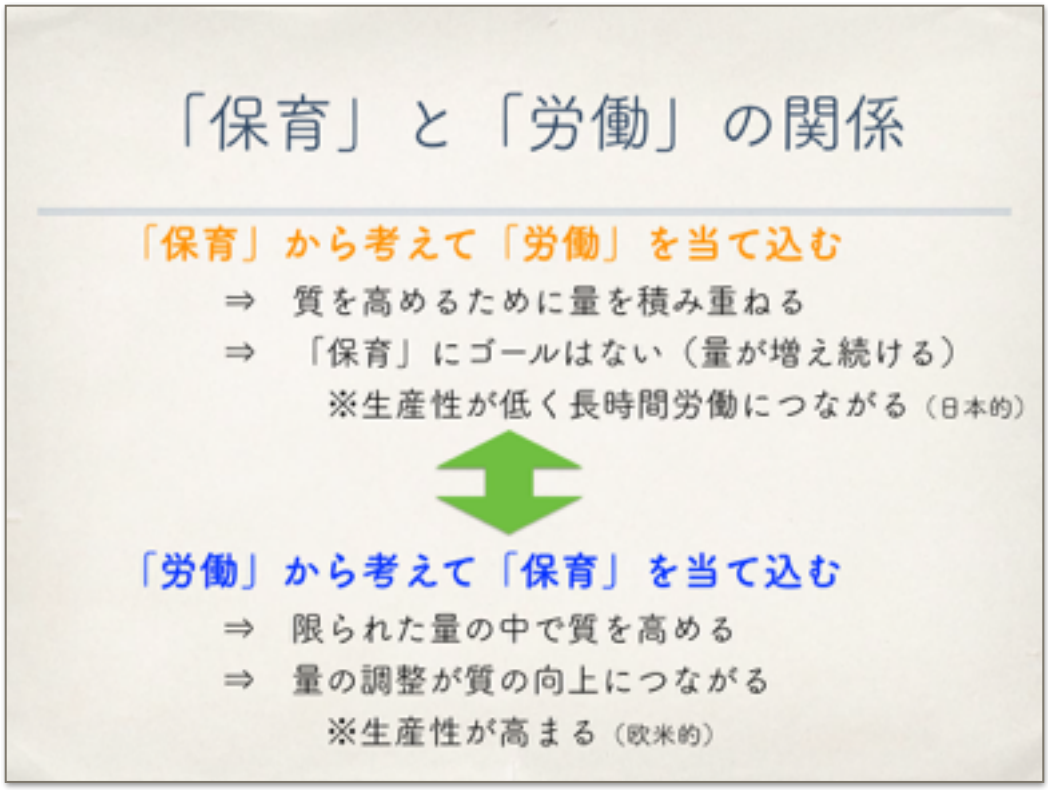


学校法人リズム学園　学園長/はやきたこども園　園長　井内聖氏
http://hayakita-kodomoen.jp/

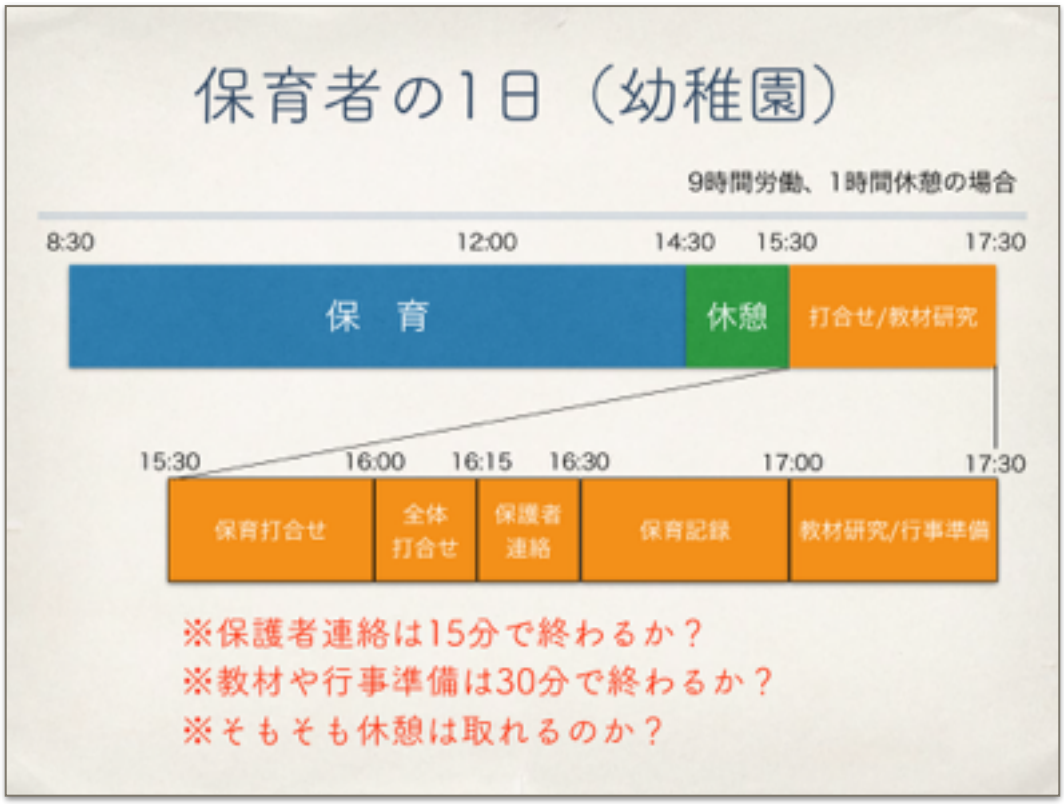
▶まず下の図です。

2018年度から教育・保育要領の改定が行われ、乳幼児の保育現場は、新要領の理解や対応、キャリアアップ制度などが導入され、労働の量が増えていきます。おまけに保育士不足が追い打ちをかけて、保育の質を上げようと思えば思うほど、今までと同じレベルを保とうとするだけでも労働の量は増えていきます。

一度整理して、労働から保育を考えてみようと提案されています。



▶次の表を見ると、２時間で様々な業務をこなさなければならない保育者の現実が明らかになっています。



このオレンジ色の枠内で業務が収まるように、内容を精選しないと働き方改革はできません。
そこで導き出されたのが**「保育者の専門性とは何？」**というキーワードです。

▶それを洗い出すために井内氏は次のようなアンケートを実施しました。

質問項目は、主な保育者の業務をピックアップして19項目。

①登降園に関する対応　②通園バスの添乗　③園で集金する費用の管理　④給食時の対応
⑤園内の清掃・洗濯　⑥提出物の管理等の処理　⑦園行事の準備や運営
⑧出席簿作成や登降園の管理　⑨保育で使用する教材の作成・準備
⑩保育室の装飾や環境整備　⑪保護者向け文書や書類の作成
⑫保育記録などの園児理解　⑬保護者会活動に関する業務　⑭写真販売に関する業務
⑮保護者ボランティアや手伝いに関する業務　⑯指導計画等の作成
⑰児童票や指導要録等の作成　⑱遊具の安全管理　⑲支援が必要な園児・家庭への対応

これらの項目について、

Ａ：保育者が担う専門性の必要な業務
Ｂ：保育者の業務で軽減が難しい業務
Ｃ：保育者の業務だが負担軽減が可能な業務
Ｄ：必ずしも保育者が担う必要がない業務

の４つのレベルに分けて現役の保育関係者に回答してもらったそうです。

■調査方法：ＳＮＳを使ったWebアンケートで2018.4/16～5/6の期間
■調査協力：保育士バンク(株)NextBeat　回答数：246

▶アンケート結果がこちらです。

有資格者の保育者（幼稚園教諭・保育士）が担わなければならない業務の
優先順位が見えてきます。（とてもわかりやすい！）

結果①	登降園対応	バス添乗	現金管理	給食対応	園内清掃等	提出物管理	行事準備運営等	出席簿管理処理	保育教材作成準備	保育室装飾環境
専門性の必要な業務	19%	18%	4%	19%	8%	18%	39%	20%	26%	28%
軽減が難しい業務	17%	13%	8%	17%	7%	22%	25%	25%	15%	11%
負担軽減可能な業務	34%	37%	15%	34%	34%	38%	34%	38%	43%	45%
保育者が担う必要のない業務	30%	32%	73%	30%	51%	23%	2%	17%	16%	16%

結果②	文書作成書類作成	保育記録園児理解	保護者会関係等	写真販売	ボランティア対応	指導計画作成等	児童票要録作成	遊具安全管理	特別支援	
専門性の必要な業務	24%	75%	16%	2%	5%	71%	71%	22%	68%	
軽減が難しい業務	28%	15%	25%	2%	8%	16%	17%	17%	19%	
負担軽減可能な業務	30%	9%	30%	11%	37%	12%	10%	32%	11%	
保育者が担う必要のない業務	19%	1%	29%	85%	50%	1%	1%	28%	2%	

各項目上位４つを抽出

▶上位項目を抽出します。

A専門性の必要な業務

- 保育記録などの園児理解
- 指導計画等の作成
- 児童票や指導要録等の作成
- 支援が必要な園児家庭への対応

B軽減が難しい業務

- 提出物の管理等の処理（ほぼ毎日）
- 園行事の準備や運営（多くの時間を使う）
- 出席簿作成や登降園の管理（毎日）
- 保護者向け文書や書類の作成（ＰＣ使用）
- 保護者会活動に関する業務（保護者対応）

C保育者の業務だが負担軽減が可能業務

- 通園バスの添乗
- 提出物の管理等の処理
- 出席簿作成や登降園の管理
- 保育で使用する教材の作成・準備
- 保育室の装飾や環境整備
- 保育者ボランティアや手伝いに関する業務

D必ずしも保育者が担う必要の無い業務

- 園で集金する費用の管理
- 園内の清掃・洗濯等
- 写真販売に関する業務
- 保護者ボランティアや手伝いに関する業務

▶Ａの業務のための時間確保、Ａの業務の質が向上するための研修時間の確保が、
保育者の専門性を高め、保育現場の質を向上するために必要だと提唱しています。

▶そのためには何かを減らさなければならない。

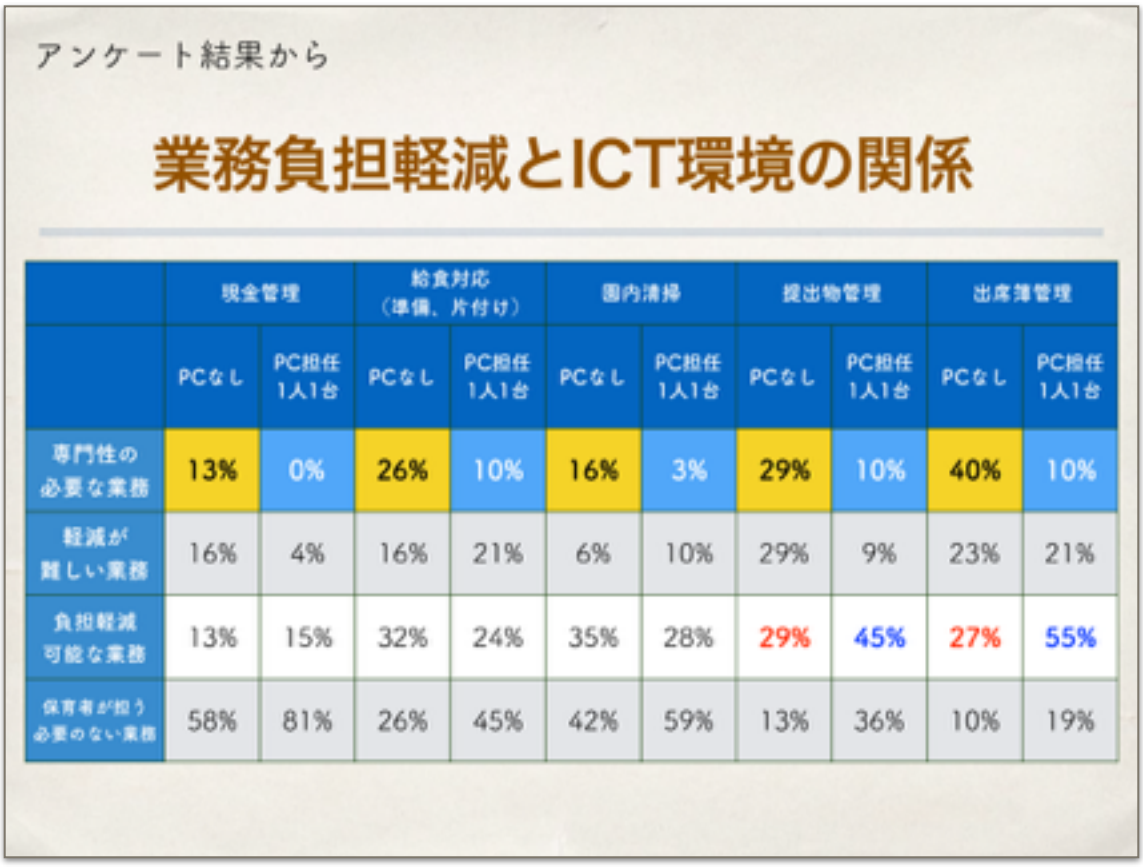
まずＤの業務については、担任等の保育者ではなく事務職員、非常勤、管理職が対応し、ネットの活用で軽減できるとしています。ちなみに弊園ではこれはクリアしていました。

次にＣの業務ですが、担任がこの業務をこなすことができればより良いのですが、担任以外でもできるという割り切りが必要ということでしょう。弊園ではある程度事務職員や非常勤、教務主任が負担することで、半分くらいは軽減されていると思います。保育室の室内装飾は、それぞれの園の文化でもあるので一概には言えませんが、私たちは子どもの絵画作品を主に飾ることで特に担任が製作して壁面を装飾することはしていません。

業務省力化のカギとしているのがＢの業務です。

私も教員に「何がいちばん時間がかかるのか？」尋ねたところ「文書作成」だと言われました。私が教員生活を続けてきて、変わらずに重要視してきたのが「園便り」「クラス便り」のお手紙類です。活動の様子を伝えるとても大切なツールだからです。（マガジン28号でもそのことについて書いています）「保護者向け文書作成」ここをバッサリ切ろう！･･･といっても見る園便り「はらっぱ」は残しましたが、日々発行していたクラス便り（年間40～60号発行していたもの）をやめ、クラス便りはＩＣＴを使って写真とコメントをブログ形式で配信するアプリを使うことにしました。（詳細は次号で！）

▶次の図では、事務的な業務に関して
ＰＣなどの機器の台数によって負担軽減率が大きく異なることが分かります。


アンケート結果から

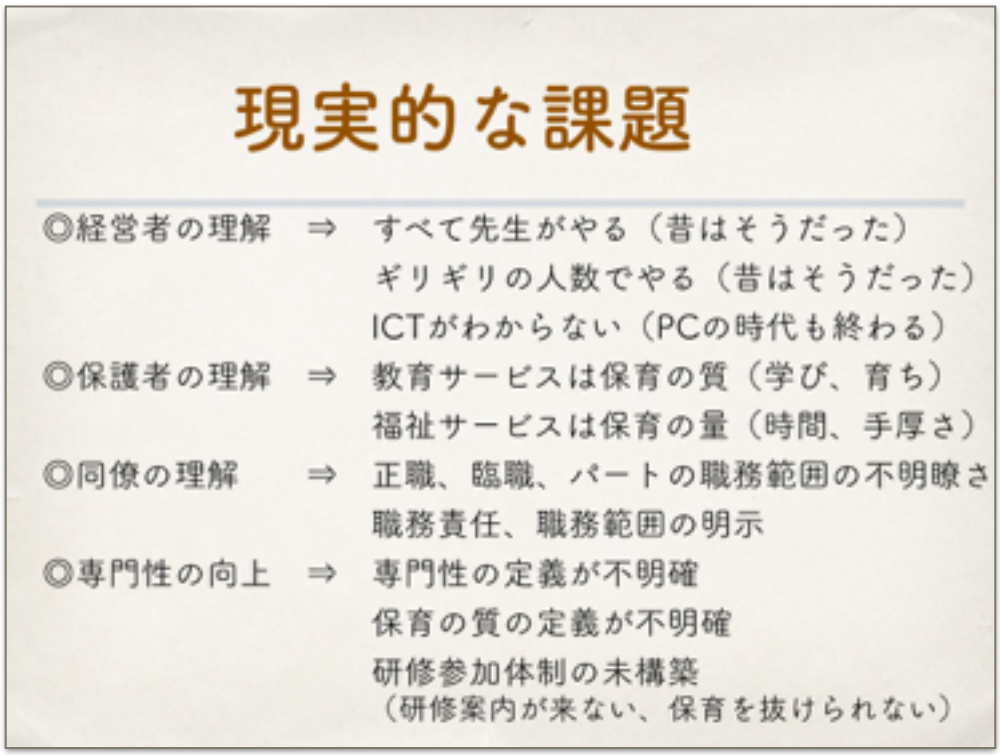
業務負担軽減とICT環境の関係

	現金管理		給食対応（準備、片付け）		園内清掃		提出物管理		出席簿管理	
	PCなし	PC担任1人1台	PCなし	PC担任1人1台	PCなし	PC担任1人1台	PCなし	PC担任1人1台	PCなし	PC担任1人1台
専門性の必要な業務	13%	0%	26%	10%	16%	3%	29%	10%	40%	10%
軽減が難しい業務	16%	4%	16%	21%	6%	10%	29%	9%	23%	21%
負担軽減可能な業務	13%	15%	32%	24%	35%	28%	29%	45%	27%	55%
保育者が担う必要のない業務	58%	81%	26%	45%	42%	59%	13%	36%	10%	19%

▶井内氏の結論は、

保育の質を高めるために、際限なく増えていく長時間労働を良しとするのではなく、**保育者の専門性を発揮できる業務に注力することで、質を上げつつ業務を軽減**することができると提案しています。まず**人を増やし**（有資格者だけでなくＣ・Ｄの仕事を担ってもらえる人材）て**業務の絶対量を減らす**こと、「担任が･･･」という意識を改革し、**業務をシェアする**こと。加えて**ＩＣＴを有効に活用**していくことを挙げています。

▶同時に、解決しなければならない**現実的な課題**も明確にしています。



雇用やＩＣＴの整備には費用がかかります。
経営的にはそこも現実的な課題となっていると私は感じています。（カネがない）
そして井内氏は最後にこう結んでいます。

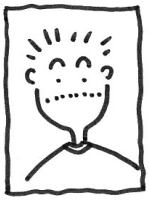
保育者のなり手が多く、
長時間労働によって支えられてきた業界

人口減少が進み、保育者不足が叫ばれる今
働き方改革から保育の質を見つめなければ

保育の質向上は、一部の園、一部の保育者にしか
取り組めない特別なものになってしまう

すべての子ども達の幸せを願うように
すべての保育者の幸せを願う保育界であってほしい

今回は、北海道で素晴らしい実践をされている井内先生のレポートをご紹介しました。次回は、今年度からようやく開始した我が園の働き方改革についてレポートしようと思います。



原町幼稚園　園長　鶴谷主一（57）
1960年生まれ　宮崎のど田舎でやんちゃに育つ
高校は、家を飛び出してみたいと希望して新潟の敬和学園高等学校に進学し寮生活。
受験勉強は皆無で、卒業後実家の幼稚園を手伝ううちに幼児教育の面白さに開眼！
1979年　都農聖愛幼稚園（宮崎県実家にて助手勤務）
玉川大学の通信にて学習を始めるも８年の在籍期間中に単位が取れずに断念。
1984年　彰栄保育専門学校にて免許・資格取得
葛飾みどり幼稚園に教員として勤務
1989年　玉川大学の恩師（故日名子太郎先生）のお誘いを受けて、オイスカ香港日本語幼稚園に主任として勤務。（５年契約のところ地元の事務長と運営方針をめぐり対立し２年で帰国。日名子先生との関係は良好でその後日本での交流を続ける。）
1991年　原町幼稚園（妻の実家）に勤務
2002年　原町幼稚園園長として勤務→現在

ＨＰ：http://www.haramachi-ki.jp/
MAIL：office@haramachi-ki.jp
Twitter：@haramachikinder
Instagram：haramachi.k

▶記事の内容でご感想・ご意見ご質問等ありましたら気軽にご連絡ください。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「幼稚園の現場から」ラインナップ

第１号　エピソード（2010.06）
第２号　園児募集の時期（2010.10）
第３号　幼保一体化第（2010.12）
第４号　障害児の入園について（2011.03）
第５号　幼稚園の求活（2011.06）
第６号　幼稚園の夏休み（2011.09）
第７号　怪我の対応（2011.12）
第８号　どうする保護者会？（2012.03）
第９号　おやこんぼ（2012.06）
第10号　これは、いじめ？（2012.09）
第11号　イブニング保育（2012.12）
第12号　ことばのカリキュラム（2013.03）
第13号　日除けの作り方（2013.06）
第14号　避難訓練（2013.09）
第15号　子ども子育て支援新制度を考える
第16号　教育実習について（2014.03）
第17号　自由参観（2014.06）
第18号　保護者アナログゲーム大会（2014.09）
第19号　こんな誕生会はいかが？（2014.12）
第20号　ＩＴと幼児教育（2015.03）
第21号　楽しく運動能力アップ（2015.06）
第22号　〔休載〕
第23号　大量に焼き芋を焼く（2015.12）
第24号　お話あそび会その１（発表会の意味）
第25号　お話あそび会その２（取り組み実践）
第26号　お話あそび会その３（保護者へ伝える）
第27号　おもちゃのかえっこ（2016.12）
第28号　月刊園便り「はらっぱ」（2017.03）
第29号　石ころギャラリー（2017.06）
第30号　幼稚園の音楽教育（その1・発表会）
第31号　幼稚園の音楽教育（その2・こどものうた）
第32号　幼稚園の音楽教育（その3・コード奏法）
第33号　〔休載〕
第34号　働き方改革・一つの指針（今号）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

福祉系対人援助職養成の現場から㉞

西川 友理

毎年恒例のワーク

この連載の 31 号に書かせていただいた、元学生のエピソード（本来のエピソードから少し改変したもの）があります。以下に再度簡単にまとめます。

…生まれて初めて、児童養護施設にボランティアに行った19歳の学生Aさん。小学校から帰ってきた子どもたちの宿題をチェックした後に、夕食前まで一緒に遊ぶというボランティアです。

Aさんは色んな子ども達から声をかけられ、一緒に宿題をし、遊び、楽しい時間を過ごしました。特に小学2年生のBちゃんは A さんのことをとても気に入った様子。自分に愛着を示してくれるBちゃんに対して、Aさんも嬉しくなってしまいます。

17 時 50 分になりました。その施設の夕食時間は 18 時です。そろそろボランティアの時間は終わり、A さんは帰ろうとしました。するとBちゃんが言いました

「A 姉ちゃんは一緒にご飯食べへんの？」

「うん、お家に帰るわ。また来週来るからね。」

ふーん、とつまらなそうなBちゃん。そしてBちゃんはAさんに言いました。
「A姉ちゃん、お母さんおるの？」

「…さぁ、あなたがAさんなら、何と答える？」と問う私。
ええーっ！と苦い反応をする学生達。
「そんなん難しいわ…！」
「頑張って！あ、あなたがそう答える理由も、一緒に書いてくださいね」
「ええー…。」
学生達はその場で答えを考え、配布された意見用紙にその答えの理由と共に書いて、提出します。
翌週には、私がその答えを、回答者がわからないように加工して一枚のプリントにまとめて配布、このプリントをもとに皆で話し合います。
これは毎年大変、得るものが大きいワークです。もちろんAさんには許可をとり、授業で毎年、使わせていただいています。

ワークの答え

毎年少数ながら『いないよ』という回答をする学生がいます。理由としては『なんだか可哀そうだから』『家族について思い出させたくないから』『私はお母さんがいるけど、Aちゃんにはいないかもしれないから』などなど…。
これには多くの学生が異を唱えます。
「それは…うーん　あかんやろ…。」
「うん、やっぱり嘘ついたらあかんと思うわ…。」
という学生が多い中、一人の学生は
「ええーっみんな、『いるよ』って言うの？俺、これ書いたんやけどさぁ…なんか、俺はいるけど、相手にお母さんいないって、かわいそうじゃない？」という反応。
「可哀そう、って、なんで可哀そうなん？」
「えーだって…。なんか…言いづらいわ…」
「私、父子家庭やで、お母さんおらへんで。私、可哀そうか？」
「う…うーん…」
「それに、いま施設に入所してるってだけで、Bちゃんにお母さんがおるかどうかもわからんやん！」
平成25年に実施された厚生労働省の調査によると、児童養護施設に入所中の子ども達の約86%には、実父または実母がいることがわかっています。このうち27%には実父母両方ともいるとの結果が出ています。
「ああ、そうかぁ…。でも、やっぱり俺はその場でいるよって、言えないと思うなぁ…」

『いるよ、でもお母さんお仕事に出ちゃっているから、晩御飯お姉ちゃんが作らなあかんねん』『いるよ。でも帰ってもお母さんお仕事中だから晩御飯一人で食べなきゃいけないし、みんなとごはんが食べられるAちゃんが羨ましいなぁ』という回答も毎年見られます。
なんだかとても長い回答です。この回答をした学生たちの理由はこうです。
「なんか、嘘ついたらあかんと思うけど、後ろめたくて…。」
「その子は家に帰りたいとか思ってる

んじゃないかと思うと、私だけ家に帰るって、お母さんとごはん食べるって言いづらくて…。」
「言い訳がましいよなぁと思いながら、ついついこんな感じの回答になると思う。」
「それにさ、とても仲良くなった相手なんでしょ？嫌われたりするの、嫌やん。」
これらを聞いて、
「うーん…お母さんいるって答えたら、やっぱり嫌われるって思う？」
と質問する学生がいます。
「嫌われるっていうか…距離とられるかなって思う。私と違う人なんだ、って。」

一番多い回答

例年一番多い回答は『いるよ』とだけ答えるものです。『嘘をついてはいけないと思うから』『本当のことを言ってまっすぐ B ちゃんに向き合いたいから』という理由です。
「やっぱり嘘をつきたくないしね。」
「そうそう、私も、嘘をつくのはダメだと思うから、きちんと本当のことを伝える。」
そこで私は聞きます。
「今日、何日だっけ？」
「え、18 日ですよ。」と、答える学生。
「うん、今あなた、私に嘘をつこうと思った？」
「はい？いえ別に。」
「ですよね。今みたいに、嘘をつく必要のない所では、『嘘をついてはいけない』なんて考えないと思うんです。『嘘ついちゃいけない』『本当のことを言わなきゃ』って思ったってことは、『嘘をつく』という選択肢が頭に浮かんだってことだと思うんだよね」
学生は深くうなづきます。
「うん、確かにそう思いました。」
「一瞬ドキッとしてさ、どう答えようかと迷った。正直言って、嘘つくことを考えたなぁ。」
「そういう気持ちって、何やねんやろ？」
「うーん…やっぱりさ、何か、配慮せなあかんと思うから…。」

一番歓声が上がる回答

『みんなお母さんから生まれて来てるんだよ。だからみんなお母さんはいるよ』という回答には、他の学生達からおお！と歓声が上がります。
「上手い！なるほどねぇ！」
「そうやんな、嘘もついてないし、間違ってないもんな！」
となかなか好評。
しかし、一方で、このような声も上がります。
「うーん…でも、B ちゃんの立場になったら、どう思うかな、この回答…。私やったら、“いや、そういうこと言ってるんじゃなくてさ…！”って思いそう」
「ああ、それこそ“上手い事返したと思ってんねんやろ”って思われそう？」
「そうそう！」
そのうち、一人の学生がボソッとつぶやきます。
「…ていうか、B ちゃんはなんでこんな

こと聞いてきたんやろ…。」

そして、自分がどううまく返答するかではなく、B ちゃんにとって良い答えはどのようなものなのかと、B ちゃんの立場を考えようとしはじめます。

一番皆が静かになる回答

『いるよ』という回答の理由に『これから先、きっと B ちゃんはいろんな家族に出会うから』『いろんな家があって当たり前だから』と書く学生がいます。表現としては他の多くの回答と同じ「いるよ」という言葉であっても、この理由にはみな「うーん…」と、静かに黙っています。

「確かにそうやね…」

「将来的なことを考えたら、ちゃんと伝えた方がいいね。」

「うん。普通に、普通の事として、答えたらいいんやよな。いろんな家があるんやし。」

どの回答にも共通する思い

その他、毎年様々な回答が寄せられますが、その回答のほとんどに共通する思いがあります。

それは、“B ちゃんを傷つけたくない”という思いです。

傷つけるかもしれない対応をするのが怖い、なるべく傷つけないように言葉を選ぶ、傷つけるかもしれないけれどすべきだと思うからする…。

しかし、対人援助という仕事をしている以上、どこかで相手を意図せず傷つける、時には傷つけるとわかっていて傷つけることもあると思うのです。私は、それは必要な摩擦だと思っています。

私はそのように傷つけることや傷つくことを、「人間関係の税金」と考えています。

人間関係の税金

子どもの頃は、せいぜいお小遣いで買える買い物をした時に消費税を払うくらいで、多くの人が税金を払うことは少ないでしょう。

しかし、収入を得るようになったら、それと共に様々な税金を結構払わなければいけません。高い収入を得たら、高い所得税を払わなければいけないですし、住民税や固定資産税、たばこ税に自動車税、高価なモノを買ったら消費税もそれなりにします。

税金を払うのが嫌だからと収入を抑えたり、買い物をしなかったりというのは、本末転倒です。日々の生活が広がりません。

これと同じように、人間関係が狭く浅く限定されている状態であると、傷ついたり、傷つけたりすることも少ないでしょう。しかし、人間関係が広く深くなっていくと、心に痛みを感じる機会が増えたり、意図せず痛みを与えてしまう事が起こります。

それが嫌だからといって人を傷つき、傷つけることを避けると、確かに嫌な目に会うことは少ないですが、人間関係の

広さや深さが限定され、良い目に会う機会も極端に減ってしまいます。

もちろん、一概に無遠慮に傷つけあうことがよいことだとは思いません。

基本的に人間関係は、お互いに対する思いやりや礼儀、配慮をもって作っていくものです。

しかし社会を生きていく以上、傷つけたり傷ついたりするということもあるときちんと知っていく事、またそういう体験に直面する可能性もあるという、一種の覚悟のようなものが要るように思います。

特に人の心や生活に深く入り込む機会の多い対人援助職は、他の職業と比較して、傷つき、傷つける痛みに出会う機会が多い職業かもしれません。何かの機会に、この痛みについて考える機会が必要だと思います。またそのような経験を重ねることで、結果的に、人間関係の対応能力は上がります。

だからといって、この痛みについて教えることは大変難しいです。

授業や教育の中で経験させるようなものではなく、何かの拍子に偶然出会うしかない経験であり、またそれぞれの心の痛みに触れるかどうかも、こちらから意図的に設定は出来ないためです。

だからせめて、ほんの１分ほど、以下のように話します。

「相手に対して、深くかかわって行けば行くほど、何も傷つけないなんてこと、あるいは何も傷つけられないなんてこと、あるでしょうか。」

「友達、家族、恋人…。どうでしょうか。」

「傷つけるのがいいことだとは思わない、だけど、意図せず傷つけること、傷つけるかもしれないと思いつつ勇気をもって行動することは、絶対に避けないといけないことなんやろうか。」

「そしてあなた自身も、誰か大切な人との関わりの中で、絶対に傷つかないということが、あるやろうか。」

「傷つける怖さや傷つけられる怖さを受け入れるという事が必要な時ってやっぱりあるように思うんです。」

いつかやがて何か気付くかもしれないその時の種を蒔くような気持ちで伝えます。

このワークの正解

もちろんこのワークには正解はありません。どのような回答も間違いではないと思います。ただ、回答とその理由には自らの様々な価値観が現れ、同じクラスにいる友人の様々な価値観や考え方に触れられるワークです。

学生にとっても強く印象に残るワークのようで、卒業後の学生からも「あのワークはよかった！」と好評です。

そして私も、とても楽しみにしているワークです。もう何年も恒例行事のように実施していますが、いまだに目が覚めるような回答が毎年寄せられます。その回答は、今回は内緒です。いずれ、またの機会に。

境界あれこれ

9

～　スクール・カーストという境界　～

かうんせりんぐるうむ　かかし

河岸由里子

はじめに

大学生の授業を担当している中で、毎回小レポートを書いてもらう。学生さんたちに自分の子ども時代を振り返る意味で、小学校、中学校、高校時代の自分のことを書いてもらう。その中で、「私はクラスのカーストで下の方にいたので・・・」とか「カーストが嫌だった」等と書かれているのをみることが何度かあり、スクールカーストを今回のテーマにしてみた。

「カースト」とは？

そもそも「カースト」とは何か？

「カースト」とは、ヒンドゥー教における身分制度（ヴァルナとジャーティー）を指す言葉で、ポルトガル語の血統を意味する「カスト」が語源とされる。ジャーティとは「生まれ」「家柄」という意味であり、ヴァルナは「種姓」。

そもそもは、紀元 1500 年ごろにアーリア人がインドに移住する時に、征服層が三つのヴァルナを作り、先住民であるトラヴィタ人を当初の下位のヴァルナとしたことがキッカケであると言われている。その際の社会階層概念では、バラモン（司祭階層）、クシャトリヤ（王族・武人階層）、バイシャ（庶民階層）、シュードラ（上の階層に奉仕する階層）の四つからなっていた。但し、その下にも被差別民（賤民）の様々な集団も存在し、その代表的なものはチャンダーラである。しかし、有名な古典法典である『マヌ法典』では、第五のヴァルナは存在しないとし、これらの被差別民諸集団を社会の正規の構成員として扱っていない。（図１、２参照）

四つの階層については、インド最古の文献『リグ・ベーダ』の中の「原人の歌（プルシャ・スークタ）」で、原人の頭からバラモンが、腕からクシャトリヤが、腿からバイシャが、足からシュードラが生まれたとされている。

現在のインドでは、地域差があるようで、場所

図１＜原型＞

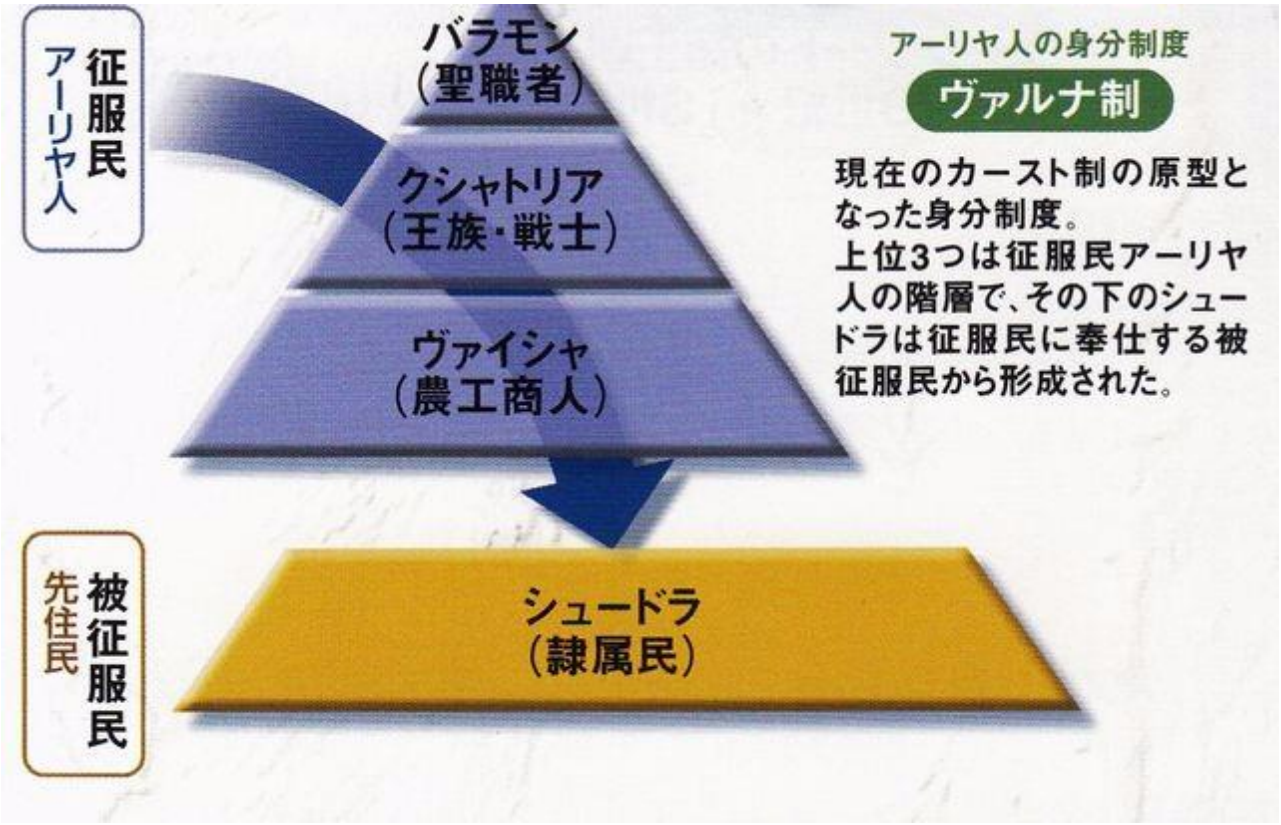
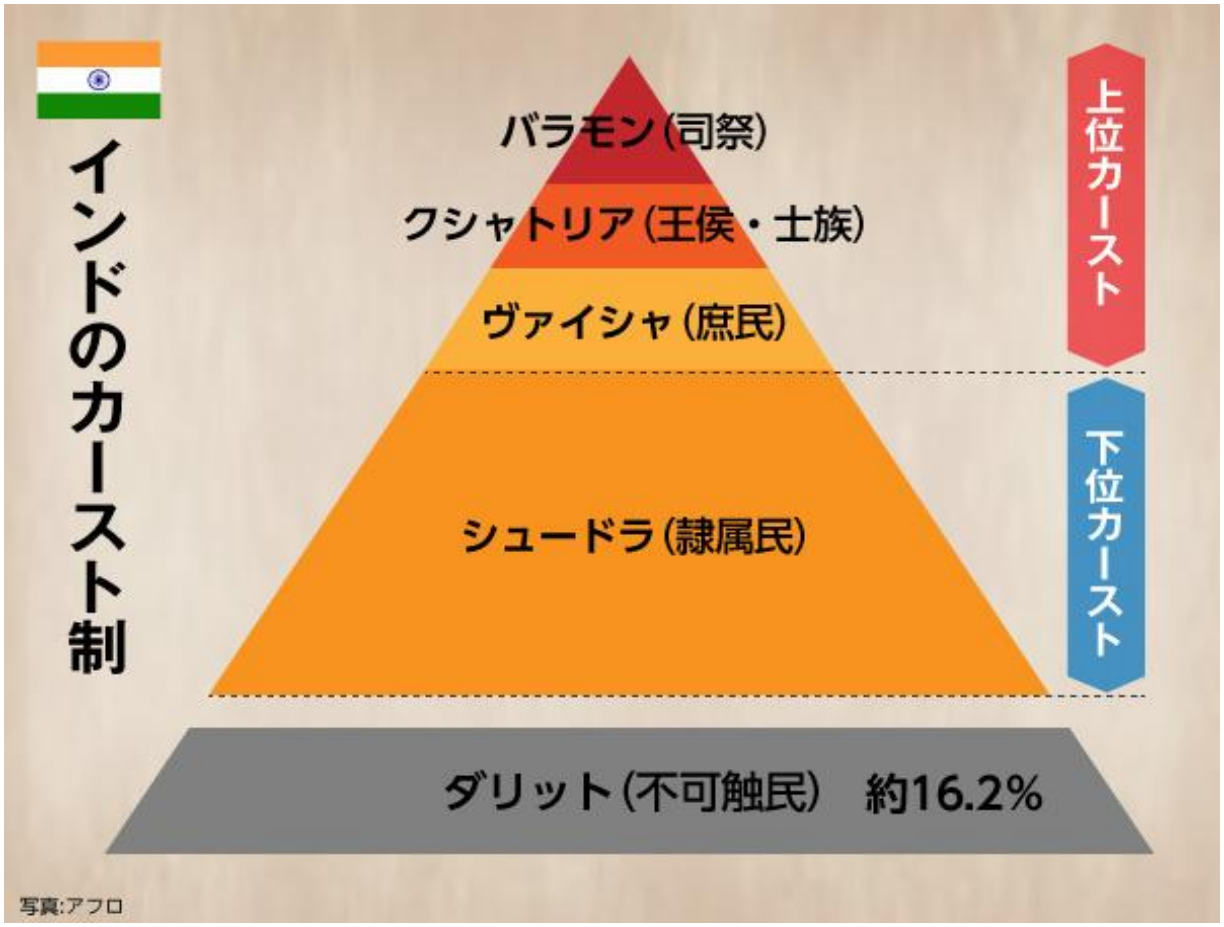


図２＜その後のカースト制度＞



によっては今もカースト制度を重視し、親の仕事が子どもの仕事になるとされ、そこから抜け出ることが出来ないということもあるようだが、古き悪しき制度を意識しなくなっている地域もある。また、IT 関連の仕事はカーストの中にない新しい職業であるため、カーストの影響を受けないとされている。それ故、インドの IT 関連は盛んなのかもしれない。

「スクールカースト」

では、スクールカーストとは一体どのようなものなのか？

調べてみると、元々はアメリカ合衆国の主に高校で始まった階級意識と差別に由来するようだ。

アメフトなど、スポーツで活躍する筋肉質系で持てる男子生徒がトップのジョックと呼ばれ、女子はジョックの取り巻きともいわれるチアガールなどから、特に美人でトップになるような女子高生がクイーン・ビーと呼ばれる。

勉強はできない子たちが多く、この子たちと対抗する形で、ナードと呼ばれる、勉強が出来るがスポーツは苦手な子どもたちなどがいる。

ジョックやクイーン・ビーは、いわゆるオタク系の子やナード、或いは LGBT の子どもたちをいじめの対象とすることも多い。しかし社会に出ると、ナードの方が成功しており、階層としては逆転してしまうようである。社会で成功する多くの人はナード出身であると言われている。

アメリカでこのようなスクール・カーストがあるなら、日本にもあるのではないかということから、ネットで急速に広まったのが日本のスクール・カーストだと言われている。

東京大学社会学研究所の研究員・鈴木翔氏によると、日本の中学校および高校の教室内に「スクール・カースト」があるという。

クラスの「上中下の順位」は・・・

「上」…容姿にすぐれている、運動能力が高い(ここまではアメリカの場合と一緒)、話が面白い、ノリがいい、異性受けが良いなどコミュニケーション能力の高い人物

「中」…「上」の人間ほどではないが、そこそこコミュニケーション能力がある。

「下」…おとなしくて、目立たないタイプ。コミュニケーション能力が低く、話下手。

ということのようだ。

この「下」に入ってしまうであろうタイプには発達障がいの子どもたちが多く含まれるであろうことは容易に想像がつく。

図４のように、「スクールカースト」では、「運動部所属者」の方が「文化部所属者」より序列が上であり、親の経済状況も子どものカーストに影響を与えているのがわかる。そして、最下位に位置する子どもたちは、いじめの対象とされる。

スクール・カーストの実態とは・・・

・クラス内の面倒くさい仕事やきつい仕事（例えば冬の雑巾がけなど）は基本「下」の子どもたちがさせられる。

・女子高生では、「下」の生徒は目をつけられないようにと化粧をしない。

・クラス替えが行われ「キャラ変(キャラの変更)」をしようとしても、情報がすでに学年全体で共有されているため、序列逆転はできない。

・一生懸命努力する＝カッコ悪いという意識があり、「イメージチェンジ」に必死になる姿は嘲笑の的となる。

・上位の生徒の一言で下位の子のランクがさらに下がる。「下位グループ」にも「(下の)一軍、二軍、三軍」がある。すなわち、教室内の階級付けは上位の子が決めることになる。

・リアルタイムブログなどの日記も「閲覧を許される人」と「閲覧できない人」に分けられ、定期的にパスワードが変更されても、教えてもらえな

図３＜アメリカのスクール・カースト＞

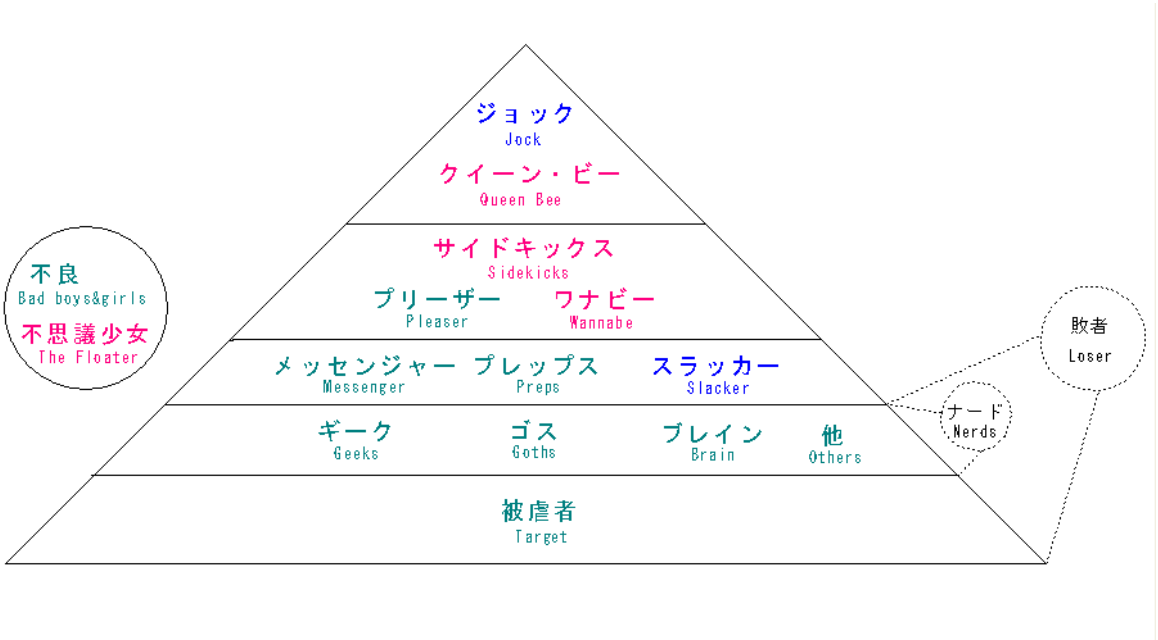
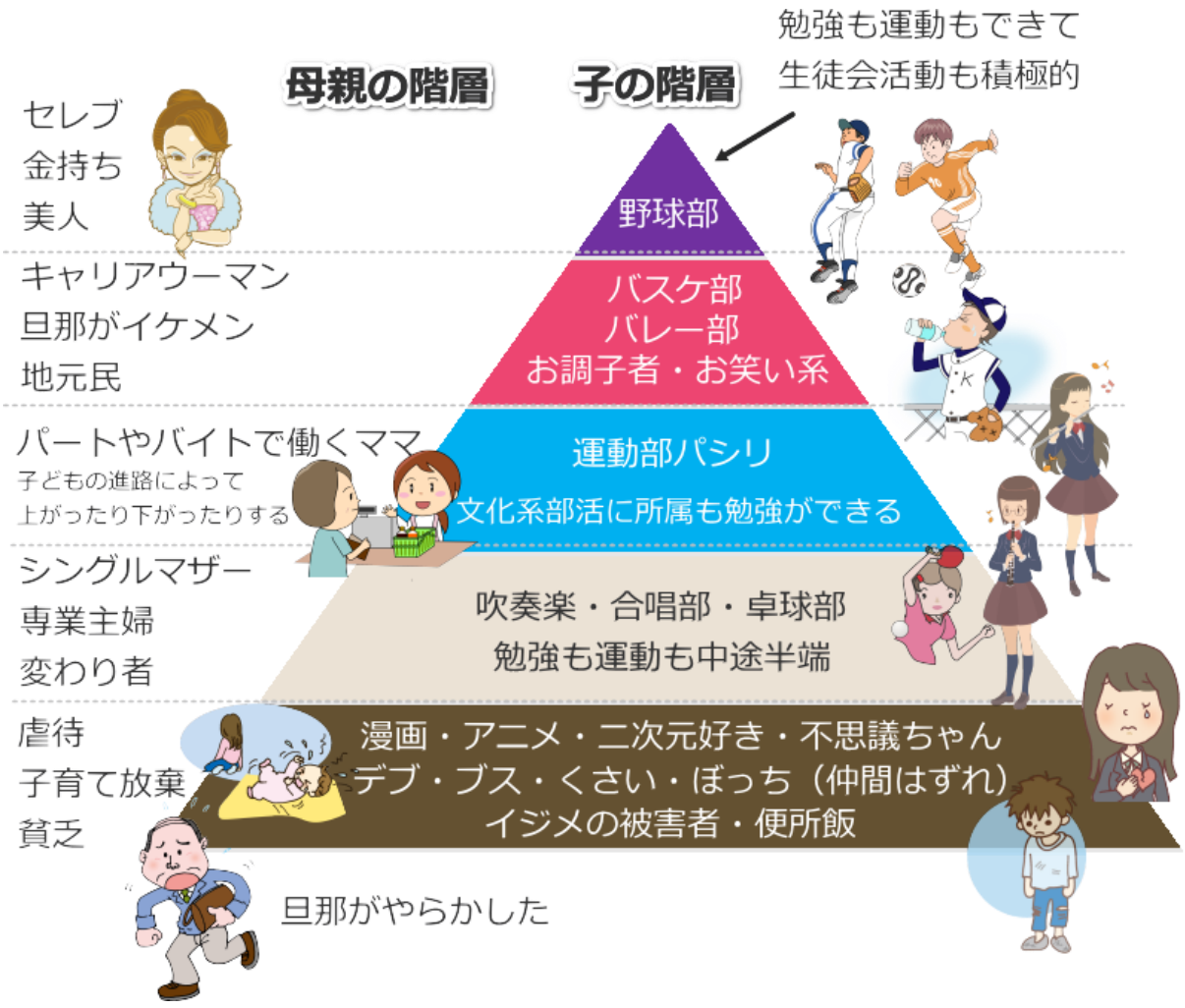


図４＜日本におけるスクール・カースト＞



い場合がある。今まで閲覧できていた「普通」の「リアルに鍵をかけられる」というのだそうだ。
・女子生徒の多くが持つ「プロフィール帳(自己紹介などを書き込めるノート)」を巡って、「上」の生徒が「下」の生徒に「書いて」と頼み、その子は嬉しそうに書き込んだ所で「上」の生徒がそれをゴミ箱に捨てて、教室全体で笑いものにしたりする。

この様な行為は、書き込んだ子の自尊心を酷く傷つけるのだが、他の子の笑いを誘うことから、全く悪気がない。時折、こうした行為の主導権を握る「上」の子は自らを「正義」と思い込んでいたりする。
・「上」の生徒にも義務はあるようだ。

「権力」を持っているがゆえに、ホームルームなどでみんながだまって何も言わないと「上」の人間が何か発言しなければならない。教師に対する悪い態度を敢えて率先して取っていかなければならないこともあるそうだ。例えば、「ばっかじゃないの」とか「チョーむかつく」的な発言。
・上位にいることで、誰にもいじめられないという安心感がある。

子どもたちのこうしたカーストに先生たちは気づいているのだろうか？

気づいている先生も気ついていない先生もいるようだが、最悪はクラス・カーストに先生も同調してしまった場合である。

３０年以上前の話であるが、中学２年生の男子が自殺した。学校で「葬式ごっこ」といういじめがあって、そのいじめに先生も加担していたという事件があった。当時はスクール・カーストというものはなかったが、この生徒は使いっ走りであったことを考えると、今でいうスクール・カーストの一番下位に居たことになる。

先生がそれに気づかないというのは悲しい話である。場合によっては先生が、上位の生徒をひいきし、「中」や「下」の子どもたちから文句が出ることもある。スクール・カウンセラーとして働いていて、上位とされている子が如何に裏で陰生徒は「下」に身分が下がったとわかる。これを湿ないじめをしているかに気づくことがあるが、そういう時いくら先生に話しても、「あの子はそんな子ではない」と表面の良さに騙されていることも時折あるのは事実だ。

いじめによる事件はマット死や川崎の川で亡くなったお子さんなど、中々後を絶たないが、カーストそのものがある限りいじめはなくならないだろう。

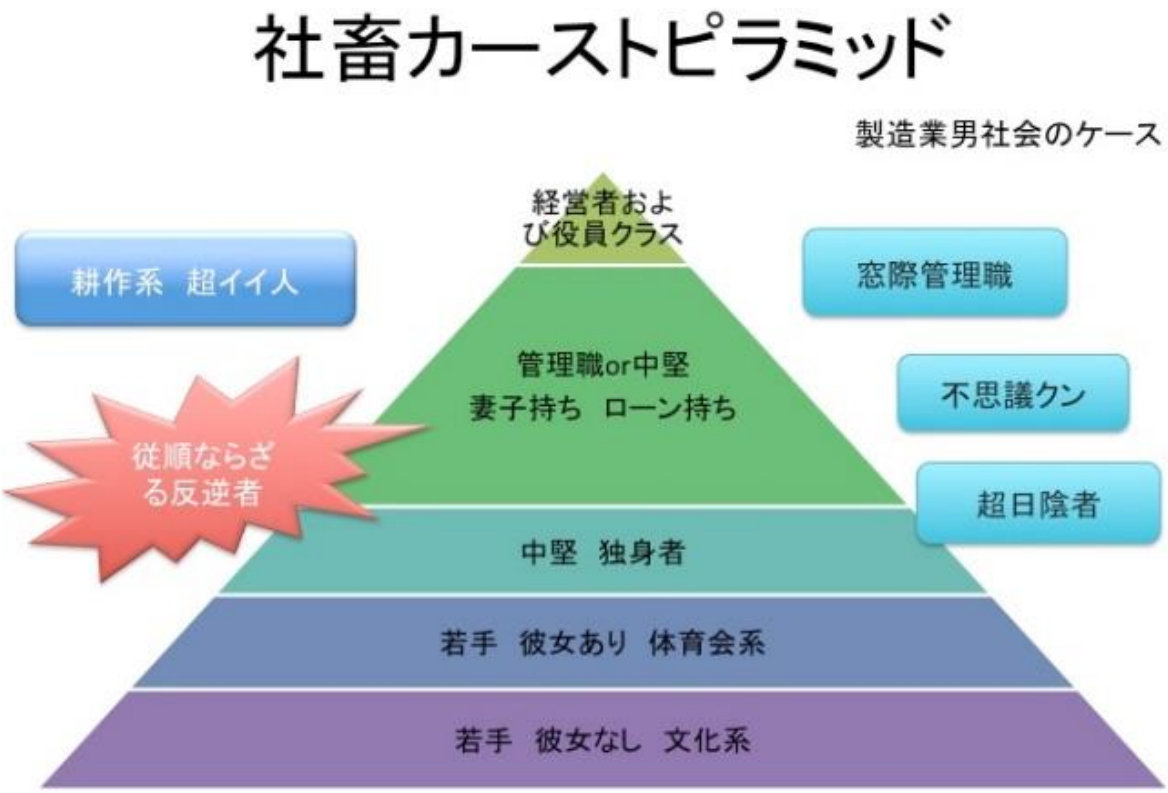
なぜこのようなものができたのだろう？

いじめは昔からあった。「勉強ができる子」「先生の子」「ケンカが強い子」「運動が得意な子」など、一目置かれる子は昔もいた。筆者が子どもの頃は、経済的に豊かな子と貧しい子の差も大きく、着ているものも違った。しかし、筆者の子どもたちの時代には、家が貧しいかどうかは分かりづらくなった。

世の中では、日本航空の倒産など大会社の倒産が続いた時代があり、「寄らば大樹」という考え方が通用しなくなった。それは、日本社会全体、大人たちの間に厭世感や絶望感を与えた。そんな時代に生まれた子どもたちが、丁度大きくなったころにスクール・カーストが発現した。これは必ずしも偶然の一致として片づけられないのではないか？

ここ１０年、子どもたちは、人と摩擦を起こさないように、子どもたちの中で目立たないようにと息をひそめて生きるようになってきたと感じる。喧嘩もしないし、比較的良い子だが、覇気もなく、存在感も薄い子が増えた。こういう子どもたちはスクール・カーストでは下位に位置する。前述の鈴木氏は『勉強ができていい大学に入っても就職がおぼつかない時代になったため、生徒にとって価値ある能力が分散して見えづらくなった』こと、教育現場でも「生きる力」「人間力」「問題解決能力」といった「社会を生き抜くための力」とされるきわめて曖昧なものが重視される

＜図５　社会にみられるカースト＞



ようになったことを、こうしたカーストが生まれた要因として捉えている。

こうしたカーストは子どもたちの間だけにあるわけではないようだ。カーストの図を調べていたときに次のようなものも見つけた。

いじめにしても、差別にしても、大人の世界にあるなら、子どもの世界にないはずがない。子どもは大人を見て育つ。インターネットやテレビから情報を得ている子どもたちの世界には、様々な差別問題、障がい者への不当な扱い、大人同士のいじめの情報が蔓延している。こんな状況で、いじめや差別が無くなるはずはないのである。

まとめ

スクール・カーストにおける境界は明白で、境界をはっきりすることで、自分の位置を明確化しかつ安定化しようとしているようである。それでいて、いつ下の階層に落ちるかわからないという不安の中で、戦々恐々としてもいる。

「こんなバカなことにエネルギーを使っていないで、もっと生産的なことをしよう！」と勇気ある一言を、それこそ上位に位置する子が言えば、少しは変わるのだろうか？

2020 年に小学校、2021 年に中学校で新しい学習指導要領に基づく教育がはじまる。今回の改定では「生きて働く知識、技能の習得」「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成」「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等の涵養」が新しい時代に必要となる資質・能力の育成として挙げられている。そしてそのためには、教科教育、道徳・特別活動、生徒指導・キャリア教育を統合して、「子どもを育てる」「児童が自分の特徴に気付き、良いところを伸ばし、自己肯定感を持ちながら、

日々の学校生活を送ることができるようにする」という共通目標を掲げている。

学習指導要領は何度となく改定されてきた。その結果、学校は本当によくなっているのだろうか？子どもたちは学校を好きになっているだろうか？子どもたちの学校生活は楽しいのだろうか？

運動ができるとか勉強ができるとかのステレオタイプの「優等生」だけが「優れている」と思われがちな学校において、個性を認め合い、それぞれの良いところを見出すような意識が全体に根付くことが、こうした差別や区別の問題の唯一の解決策だろう。そのためには教育の場だけではなく、受験・就職の評価指標を変える必要もあるだろう。

子どもを育てるために、まず社会が変わらないと何も変わらないのではないか。

本家本元のカースト制度も、人権の問題などから非難を浴び、徐々に消滅しつつある今の時代に、なぜ遠く離れたアメリカに追随する形で日本にこんなものが入ったのか。江戸時代の士農工商の身分制度と変わらない、或いはそれより酷いスクール・カースト。チーム学校も大いに結構だが、文明開化を起こせるような、勇気ある子どもたちを育てるためには、社会の我々大人たちの評価基準に疑問を投げかけ、社会全体の変革を進め、同時に教育場面での個性を尊重する意識の育成が必要だろう。スクール・カーストについて書いていて、そんなことを思った。

参考文献

・図１～５　bing.com/images スクールカーストの画像
・鈴木翔（２０１２）　「教室内(スクール)カースト」光文社
・新しい学習指導要領　中央教育審議会,2017

対人援助学マガジン第 34 号

生殖医療と家族援助

～卵子ドナーの悲喜交々～

荒木晃子

「私の卵子を提供します」

前号では、卵子ドナーになる事を切に願うTさんの語りを紹介した。彼女は、卵子ドナーになりたいと望む 200 名を超える女性たちの動機[注1)]を象徴的に語っていた。読者の方が、Tさんの語りに何をおもい、どう感じ、どのような感想を持ったのかは知る由もない。筆者は、利他的精神で自分の卵子を提供したいドナーのおもいに、共感を覚える方や理解を示す方がひとりでも増えてくだされば。彼女たちの行為を決して否定することなく静かにエールを送り、この世に迎えた新たないのちとその家族を温かく見守る社会になればと願うと同時に、自身のおもいを言葉にして語り、それを文字にして公表することを快諾いただいたTさんも同じ思いを抱いていることに今でも感謝している。

前段で、Tさんの語りを象徴的と表現したのには、かつて所属していた団体で公開した「登録卵子ドナーに関する調査報告[注2)]」がその根拠となる。2015 年 3 月報告の時点で、卵子ドナー希望者 232 名、レシピエント希望者 108 名（設立当初からレシピエントは受け付けていない）の応募があり、既にマッチング 23 組が決定していた。ここでは、そのうち 232 名の卵子ドナー希望者の詳細を紹介したい。ちなみに 232 名の内 **174 名**は、ドナー応募要件として、原則 35 歳未満で既に子のいる成人女性、配偶者の同意があること、卵子提供について十分に理解していること、出自を知る権利について十分に理解していること、血液検査や３回以上の臨床心理士によるカウンセリングを受ける必要があることを理解していること、提供のための採卵回数が３回未満であることを了解し、全てに適合している女性たちであった。

ドナー要件に適合しなかった 58 名の内訳は、年齢を超えている 20 名、未婚且つ子どもがいない 12 名、現在妊娠中または授乳中 8 名、既婚だが子どもがいない 7 名、海外在住 4 名、子宮欠損 3 名、病気等で妊娠が不可能 2 名、LGBT当事者 2 名、応募者の最高年齢は 50 歳であった。「既婚だが子どもがいない」7 名のうち、不妊カップル以外に、子どもは産まないと決めているカップルの存在があり、「海外在住」4 名は日本国籍で遠くはインド在住の日本人女性からの応募があった。「子宮欠損」とは先天的に卵子はあるが子宮の無いロキタンスキー症候群の女性を意味し、「病気等で妊娠が不可能」の女性も、自己卵子の提供は不可能ではなかった。結果、ドナー要件に適合しなかった 58 名中、年齢が 35 歳以上は 20 名、子どもを産んだ経験がないが 19 名、現在、通院・採卵が困難な状態（身体、状況）があるが 19 名となり、応募要件と照らし合わせると、「原則 35 歳未満、既に子のいる（過去に出産経験がある）、医療施設に通院し採卵が可能である」女性が要件を満たしていると判断されていた。LGBT当事者に関しては、性別変更

手術前のトランス男性、もしくは、レズビアン女性の可能性が考えられる。

ドナーの動機と社会背景

応募要件を満たした 174 名のうち、様々な手続きを経て正式なドナー登録に至ったのは 70 名、そのうち約 8 割が子育てしながら働いていた。なお、70 名の社会的背景は、専業主婦 15 名、自営業・パート等 14 名、事務職 13 名、医師・看護師等の医療従事者 11 名、営業・販売等 9 名、公務員・教員等 6 名、技術職 2 名であった。専業主婦 15 名を除く 55 名が、仕事と子育てを両立し、そのうえで卵子ドナーになる事を望んでいたこととなる。ドナー登録に至った 70 名は全て 35 歳未満である。子どもはまだ幼く、親の保護が必要な時期にあると考えられるため、相当な覚悟をもって応募を決めたことが推察できる。彼女たちは、どのような動機で卵子ドナーに応募したのであろうか。以下は、団体の審査基準を満たした卵子ドナー候補の応募動機のコメントからの抜粋である。

＜卵子ドナー候補の応募動機＞

・私にも不妊の友人がいる。お役にたちたい。
・自分は問題なく産めたので協力したい。
・困っている人のお役にたてるなら嬉しい。
・献血や臓器提供の様に誰かの役にたちたい。
・少子化が気になるので一人でも子どもを増やしたい。
・夫の子どもが欲しいと思うのは自然なこと。それを手助けできるなら感謝と尊敬の思い。
・3 人産んだがまだ社会に貢献したい。
・母性看護を学び協力したいと思った。
・自分も長期の不妊治療で授かったので、世の中に恩返しがしたい。
・不妊治療し、自分は誰よりも子どもを授かりたい気持ちが理解できる。
・小さい頃からドナーやボランティアに興味がある。

このように、11 例のコメント中、8 例に「貢献」という利他的精神の特徴ともいえる記載があった。なかには、「有償の卵子提供はしたくなかった。無償ボランティアで卵子ドナーになれる日を待っていた」との記述もあった。

当時、団体に寄せられたコメントを見て、筆者は、ドナー登録支援団体で共に活動していた仲間と共に感謝と喜びを分かち合ったことを覚えている。大げさといわれても仕方ないが、ボランティア精神が根付いていない（といわれる）日本も、まんざら捨てたものではないとこころからうれしく思った記憶がある。

「ドナー登録を辞退します」

卵子ドナーの応募要件を満たした者は、書面、医師との面談、意思の確認等様々な手続きを経た後、正式なドナー登録に至る。要件を満たした 70 名中、その時点（H27. 2 月末）でドナー登録者は 27 名であった。登録しなかった 43 名には、各々に事情があった。辞退者 43 名の辞退理由の概要を以下に抜粋し、コメント内にあった質問を矢印➡で記述する。

＜卵子ドナー登録辞退の理由＞

・ドナーに対する保障（制度）がないため。
➡万が一の保障はないのか。
・仕事や子育ての都合で、3 回以上のカウンセリング（に施設へ出向くのは）無理がある。
➡施設の診療時間帯に合わせられない。調整は不可能なのか。
・提携施設は 5 施設のみ（宮城県、東京都、兵庫県、広島県、福岡県）。治療を実施する医

療施設が自宅から遠すぎる。
➡自宅近くの医療施設ではいけないのか。(応募者は全国各地在住)
・出自を知る権利を履行した場合、将来名前がわかってしまうと困る。
➡知る権利は卵子提供で生まれた子どもにあるため、ドナーとドナーの子どもや家族の意思は尊重されないのではないか。
➡産まれた子どもの希望は(絶対)断ることができないのか。説明を受けた医師から、ドナーは断ることができないといわれた。
➡ドナーのプライバシーは誰が守ってくれるのか。

このように、仕事と子育てを両立しつつ、意を決して卵子ドナーの応募し、登録までたどり着いたドナー候補者の様々な辞退理由は、卵子ドナーには生殖医療の領域にとどまらない問題が生じる恐れがある事を裏付けていた。では、ドナーになる動機と意思がありながら、何故ドナーになることを辞退せざるを得なかったのか。次に、辞退者の「ドナー登録しなかった理由」を考察する。

＜登録辞退の理由の考察＞
ドナーに対する保障(制度)がない。
・実際に卵子を提供するために行う採卵、服薬等の医療行為の際に起こり得る事故や副作用等の被害に対する保障がない。

仕事や子育ての都合で3回以上のカウンセリング(に施設へ出向くの)は無理である。夫も同様。
・施設から診察日時を指定されても、施設の診療時間帯に合わせることが困難である。また、日程調整のため、事前の打ち合わせに必要な連絡の時間帯も、勤務中のため不可能である。
・医療施設に出向くには、仕事を休まなければならないが、その際の休業補償がない。また、勤務先に提出する休暇届けに「卵子を提供するため」と書けない。
・子どもが小さいため、遠方の施設へ出向くことが大変。施設へ行くためには子どもを預けなければならない。もし同行させても、(指定された)施設には保育所がない。

指定された医療施設が自宅から遠すぎる。
・登録ドナーは国内に点在するが、実施する医療施設は宮城県、東京都、兵庫県、広島県、福岡県の5都府県のため、大半の登録ドナーは自宅からの通院が不便な状況にあった。受け取ったコメントの中には、「自宅近くの生殖医療施設で(卵子提供やカウンセリングを)実施することはできないのか」との質問事項もあった。

出自を知る権利を履行した場合、将来名前がわかってしまうと困る。
・「知る権利」は卵子提供で生まれた子どもにあるといわれた。では、ドナーとドナーの子どもや家族の権利はどうなのか。尊重されないのではないか。
・施設からは「卵子提供で生まれた子どもの要望は断れない」という説明を受けた。子どもが会いたいといえば、個人的に会うことは可能だが、"子どもの要望は(すべて)断れない"という説明には不安がある。将来的に、夫や成長した実子の意思をそこまで確認できない。
・遺伝カウンセラーと主治医からは、「遺伝上の母親はドナー」との説明があった。確

かに、遺伝上は母親なのかもしれないが、卵子を提供したら母親になるという自覚が自分にはない。その説明をどのように理解すればよいのかがわからないで困っている。
・卵子を提供したことを、わが子へどう説明すればよいかわからない。夫の同意は得たが、まだ幼い実子に、「お母さんの卵子を提供して子どもが生まれた」ことを、どのように伝えていけばよいのかわからない。また、伝えなければならないのか、伝えなくてもよいのかもわからない。

ドナーのプライバシーは誰が守ってくれるのか。

・卵子ドナーのプライバシーを誰が守ってくれるのか。ドナーにも、夫や子どもがいて、親やきょうだいもある。卵子ドナーになる際に、実施した医療施設で夫や子ども達の記録も残ると聞いたが、夫や（私の）子どもの記録までが個人経営の医療施設に保存されることが納得できない。医療施設や OD-NET は、私たち家族のプライバシーを生涯に渡り守りきれるのか心配である。

ドナーとドナー家族の権利

以上、卵子提供登録ドナーから寄せられた様々な意見と質問は、卵子ドナーの登録を支援する NPO 法人と個人経営の生殖医療施設が独自に返答する内容ではないことは明白である。なかでも、自己卵子を提供する強い意志を持ち、家族の同意を得て審査に適合した登録卵子ドナーが、その登録を辞退する理由には、社会へ向けた大きなメッセージがあるように思うのは、筆者だけではないだろう。ドナーの意思を尊重し、ドナーとドナー家族のプライバシーを守り、卵子提供という医療行為への補償、及びその過程で生じる生活・社会保障、不慮の事故への損害賠償など、利他的精神を伴う卵子ドナーの意思と行為に呼応する社会のルールを、彼らは求めていた。卵子ドナーになる事を希望した 200 名を超える女性たちの意思を尊重するのは、提供を受けるレシピエントや、医療行為に携わる医療従事者だけで良いはずはない。本来、医療施設とは、患者への治療行為に対する対価を受け取るのであるから、対価を支払うレシピエントと医療施設との関係は明確である。しかし、卵子を提供するドナーの医療費は、それを依頼するレシピエントの支払いとなるため、医療費を支払う必要のないドナーと医療施設との関係性は明らかではない。更に、ドナーとドナー家族、特にドナー子のプライバシーや彼らが持つ権利は、例え NPO 団体でも、医療施設でも守り切る保証はない。そこに、ドナー登録辞退の大きな要因があるように思う。

ドナー登録支援団体ではなく、卵子提供を行う医療施設でもないのであれば、果たして、卵子ドナーとドナー家族のプライバシーと権利を守るのは社会ではないのか。登録を辞退した卵子ドナーのメッセージは、卵子提供によりこの世に生まれる子ども、及び、その生命の誕生に欠かせない卵子ドナーとドナー家族の意思を尊重し、その権利を守る社会のありようを示唆していた。

注 1）非営利法人卵子ドナー登録支援団体(NPO 法人 OD-NET)2015 年 3 月調査報告

注 2）科研費研究会『多層化する家族と法の全体構造に関する実証的比較法研究』「A2 ユニット　親子の自然と社会性」グループ研究会（於：早稲田大学 2015.3.19

高齢者とのドラマセラピー

尾上 明代

６．架空を楽しむ力（その２）－Ｐ男さん

メンバー同士が和気あいあいと「睦み合う」[i]安心できる空間を作ること、たくさんの笑いが起きるような仕掛けを作ることは、ドラマセラピストの大きな仕事の一つである。どのようなワークを選び、どの順番で組み立てるか、実施中はどのような介入をするか、という仕事は、このような空間がある大前提の上に成り立つ。これはもちろん、高齢者だけではなく、どの対象者の場合も同じであるが、感情を感じ表現することが難しくなってきた高齢者のグループでは特に重要な要素になる。

今号では、そのような空間に遊ぶグループの様子と、認知症が進行した Ｐ 男さんに焦点をあてて記述する。

失敗した気がしない「場」

「正しい・間違い発言」というワークがある。これは、一人ずつ、自分について正しいことと間違っていることを言い、どちらが正しいと思うか、他のメンバーに当ててもらうゲームである。

たとえば、「私は３人兄弟の長男です・私は一人っ子です」、「私は和食が好きです・私は洋食が好きです」など自分の状況や好みをお題にする。ある日このゲームにチャレンジし

てみた。ゲームのやり方を丁寧に説明しても、自分についての正しいこと、間違っていること（いわば嘘）をすぐに思いついて出題するのは難しいので、トレーニーや施設職員がマンツーマンで協力し、準備を手伝った。ルールがわかったつもりでも、皆が答えを考えている間に、つい自分で解答を言ってしまう人もいた。だが私たちスタッフは「おっとー！」と受けるので笑いになる。お題の内容そのものも、それぞれの人柄が出て面白い。前号で紹介した Y 男さんは「私は納豆だけ食べるのが好きか・納豆に卵を入れて食べるのが好きか」という、ちょっと凝ったお題を出したのが興味深かった。ちなみに答えは納豆だけだそうだ。「拙者は・・」といつもお侍さんのような話し方で演技をする女性は、「私は近所を散歩するのが大好きか・デイサービスでのドラマセラピーの時間が大好きか」という出題で、答えはもちろん（！）後者であった。芝居心のある Q 男さんは、自分が踊り好きか、書道好きかを尋ねた。皆が一生懸命に考えて答えを選んだ後、正解を聞くと、「答えは・・・両方！」と言われ、私たちはズッコケた。（その次のセッションでも Q 男さんは両方正解のお題を出した。）今度は P 男さんの番である。彼は自分が歌が好きか、踊りが好きかを尋ねた。このときも皆が悩みながら答えを選び、正解を聞くと、「ほんとは・・・ハーモニカ！」と言われ、私たちはさらにズッコケて大きな笑いが起きた。このように、たとえゲームのルールが理解されなくても、グループ全体が楽しさに包まれ、どんなことも受け入れられる、何か失敗した感じがしない、（むしろ自分の発言が皆に受けた！）という雰囲気が、安心できる場を作り、それがメンバーたちに伝わるのである。ときには「失敗」も自信にさえつながる。これ以降 2 年近く、P 男さんは、認知症がかなり進行したあとまで、楽しく参加し続けたのである。

この日、P 男さんを初めての参加に誘って下さったのは、前回紹介した Y 男さんだったとのこと。いつどのように交流を持たれたのかわからないが、このことにトレーニーたちは感動していた。お二人のためにも嬉しく思った。

その後、同じゲームで P 男さんは「私は以前、バスの運転手をしていたか・タクシーの運転手をしていたか」という出題をした。トレーニーの金光真理さんは、「本当はタクシーの運転手さんだったことを皆に披露したときにちょっと得意そうな表情をされていたので、仕事に誇りを持っていらしたのではないかと感じました。」と記録に書いている。

「すごいねえ」

続いて、一人一文ずつをつなげてお話を作るワークをした。いつも通り、認知症の進行度合いがさまざまな方が混ざっていたが、おそらく一人だけではできない創造的なことを、皆で協力することで成し遂げられたことに改めて感心する。この日、セッションの初めに行なったパントマイムゲームで、A 子さんが結婚式の花嫁さんを上手に演じて下さったのを受けて、私から始めた。

１．尾上　もう少し歩いて行くと彼が待っています。
２．P 男　とてもドキドキしている。
３．Y 男　私もドキドキうれしい。
４．B 子　花嫁さんが声が出なくなった。
５．Q 男　（慰める発言）
６．A 子　本当はこの花婿さんが嫌いなんです。
７．C 子　でも仏滅なので諦めて結婚してしまう。
８．O 職員　「ちょっと待った～！」で、花嫁を好きな男性現る！
９．尾上　この人こそと思い結婚しました。
１０．嶌村（トレーニー）（「花婿役かわいそうね」・・・と受けて）
「ちょっと待った～！」と花婿を好きだった女性が現れ、２組のカップル誕生！

皆さんは、それぞれの発言の後に、「えー？」とか「うぁー！」などとしきりに声を出して反応しながら、誰も手助けなしで文を作っていた。

その後、A 子さんが「やだなあ」といかにも嫌そうに花嫁を演じるところから、2 組が成立するところまで、実際に演じてみた。演じ終わると「２組結婚してどうするのかしら･･･」と、思わぬ成り行きで招待客の懐は大丈夫かと、ご祝儀の話しで盛り上がっていた。架空とは言え、真剣に皆さんが話していたことが愉快に感じられた。

以下は終了後の感想である。

P 男・・・すごいねえ。
Y 男・・・結婚式おもしろかった。
Q 男・・・ありえるね。
A 子・・・楽しかった。
B 子・・・（この日はずっと頭痛で感想なし）
C 子・・・ハッピーエンド良かった。

そして最後に A 子さんから、「O さん、早く結婚して下さいね！」と人気の施設職員への現実的なことばかけがあり、わーっと笑いが起きてこの日は終了した。O さんは、「P 男さんは、最近落ち込んで暗い表情をしていることが多かったのに、セッション中は笑って過ごしていて、本来持っていらっしゃるひょうきんで人を笑わせるような面が見えた」と言っていた。

P 男さんの感想「すごいねえ」は、何を指していたのだろう。花嫁の劇のことかもしれないが、場の力のすごさを感じたのかもしれない。最初のゲームで架空のウサギを月に返してあげるシーンがあったのだが、そのとき、楽しそうにウサギになった気分でぴょんと飛び出して皆の笑いを誘ったり、笑顔で「今度ハーモニカを吹く！」と言って下さった陽気さは、周りにも伝播した。「すごいねえ」と言いたいのは、こちらの方であった。

ドラマセラピーが引き出す潜在力

その後のセッションでの様子は、基本的に上記の雰囲気と変わらなかった。お話作りで、散歩に行きたい犬がいたときは、鎖を放して逃がしてくれる優しさを見せてくれたり、歌を歌う登場人物が出てきたときは、思わず気持ちが表出され、「あ〜歌いたい！」と情感豊かな発言があった。

参加が続いてしばらく経ったころ、ある日の振り返りで施設職員から「P 男さんは認知症が進行しており情緒が不安定。以前は会話が成立していたのに、成り立たなくなってきた。最近、ハーモニカも取り出さない。一つのところにいられない。不安ですぐに立ってしまうし、すぐ『帰る！』と言う。今日も途中退席するのではないかと不安だったが最後まで参加したので安心した。」という話があった。職員のご苦労や心配はよく理解できるが、短時間であっても、ドラマの役をやっているときは、文字通りその瞬間、間違いなく理解しながらその役を演じていることがわかる。そして、それができると P 男さんは安心し、その場に落ち着いて留まっていたのではないだろうか。金光さんは、「認知症だからドラマができないというふうに決めつけない関わりをしたい」と言い、P 男さんの横に座り、トレーニングで学んだミラーイングをすることに集中していた。その対応も奏功したと思われる。彼女は、「ワーク全体を理解できていなくても、楽しく、良い体験をしたという記憶が残れば、一日が豊かに過ごせたという記憶の上書きができて積み重なっていくのではないかと考えます。」とジャーナルに書いている。

あるとき、P 男さんにシンデレラの王子様を演じてもらった。最初は断っていたが、場面を始めるとノリノリになっていった。ただ、シンデレラとダンスをするシーンで、「結婚して下さい」と言うことになっていたのに、P 男さんが照れてなかなか言わないので、シンデレラ役の女性のほうから「いつまでも友達でいてくださいね」とプロポーズの言葉を変えて告白した。この日の感想として P 男さんは「自信を持ってできたらいいんだけど」と言われたが、このエピソードは、P 男さんの感覚が少し内気な普通の男性の反応とも言え、むしろとてもまともだと感じた。

翌回、夢を叶える場面をしたとき、Y 男さんが旧友に会いたいという希望を出し、P 男さんに「６０－７０年ぶりに会う友人になってくれないか」と頼んだ。彼は「自分にはできない。切り替えできないから、嘘（演技）のことはできない。」と、少し頑なに拒んだが、王子様も演じた P 男さんなので、私は「大丈夫、大丈夫」と強めに促し、Y 男さんの元へお連れした。その途端、「懐かしい」と旧友役を見事に演じて下さった。「長くいると涙が出る」「ハグはしないが、声かけてくれてありがとう」というセリフも出た。リクエストした Y 男さんも感慨深い様子で（昔を）「思い出した」と十分に喜んでくれた手応えがあった。「旧友」ではなく、デイサービスの友人同士がお互いを支え合っている姿に映った。

その日セッションに参加した施設職員は、「全体でやろうとしていることは理解してなくても、P 男さんに少しでもこういう時間があれば。」と言われた。病気になるまでは大変穏

やかな方だったという。そして、「最近認知症が進み、様子が変わってきた。ハーモニカも吹かなくなった。日常のP男さんからは否定的な発言が出るが、今は（認知症の過渡期で）仕方がない」と、職員の諦めの感じが伝わって来た。

今ここを生きる

高齢者には、一般的に回想法がよく行われる。もちろん、過去を思い出し語ることはとても重要である。しかし、（認識の中の）過去も未来も無い、という方もいる。だからこそ、安心、嬉しいなどの一瞬を味わうこと、それをその瞬間に表現すること、それを傍らで受け止める人がいることに意義がある。過去も未来も認識できる一般の人間にとっては、それらに影響されずにこの瞬間瞬間を生きることは、実は難しいことだと思う。小さな子どもや高齢者は、それができる特権があるとも言える。

「会話が成立しなくなってきた」というのは、何度か施設職員からお聞きしたが、P男さんがごく短時間でも、架空の設定で「役」のセリフを言えるというのは、言うまでもなく、とても意味があることだ。籠に入ったオウムのパペットになったとき、「ちょっと具合が悪いんだ」と、ご自身の状態をオウムに託して表現したと思われたことがあった。また、勉強するように言う母と、さぼりたい子どものドラマで子どもになったP男さんは、「幼稚園だけでも骨折ったから勉強は大変です」と受け答えしていた。十分以上に会話は成立していた。

そのうち、セッションにお誘いしても、（ご本人ではなく）職員が断ることが増え、少しずつ参加回数が疎らになっていった。実はその頃、急に興奮して大きな声を出すようなことがあったそうで、他の利用者たちへの影響も心配した施設の判断だった。その後、久しぶりに参加されたときは、「緊張した」と言いつつも「幸せを運ぶ鳥」を演じた。日によって波があるが、その日は調子が良かったようだ。

また、セッション前に部屋に入って来て、ハーモニカをとても上手に吹いて下さったこともある。そのまま参加すると思っていたが、途中で退席、再度戻ってきてもう1曲吹いてから出て行かれた。その日、浦島太郎をやる予定だった金光さんは、情景曲を演奏していただくなど、活躍する場を考えていたのにと残念がっていた。しかし、上記の行動の理由として、「この場は自分が受け入れられる場である」という認識があったのではないだろうか。

その後、またしばらく参加がなく、職員たちももうドラマは無理だと感じていたようだったが、あるときまたドラマの部屋を覗かれたので、私たちは歓迎した。その日の職員は心配しながらも良いサポートをして下さった。P男さんは、架空のものを順に渡していくワークを楽しみ、パペットワークでは（セサミストリートの）クッキーモンスターになって、自信を取り戻したように見えた。最後の感想では、嬉しそうに「ここでやっていけそうで

す！」と話していたのが忘れられない。職員によると、この頃は「日常では厳しい顔をしていることも多くてご本人は辛い気持ちでいる」とのことだったが、セッション中はずっと笑っていた。

しばらく経ったお正月のセッションで、今年何がしたいかを参加者に聞いた。P 男さんが笑いながら、「たくさんある。何かなー。」と言っていたのが印象的だった。

その日は、空海が登場する「火正月（かしょうがつ)」というドラマを選んだ。まず私が皆さんにストーリーテリングをする。語りが終わった時に P 男さんから「良いお話しをありがとうございました」ということばが出たことから集中して聞いていたことがわかった。その後の演技化では、空海役の（お酒が好きな）Y 男さんと、おじいさん役の P 男さん、おばあさん役の A 子さんが一緒に囲炉裏を囲んで暖を取り仲良くお酒を酌み交わした。途中、猿役の演技を真似して立ち上がる場面が一度あったが、全体的に落ち着いていて、グループの雰囲気を楽しんでいる様子だった。この日の感想として P 男さんは、「(笑いながら）だめなんですよ。今日は皆さんの協力がありました。」と、初めてメンバーのサポートを意識した発言をした。職員からは「日常は部屋の隅っこに座っている。ただ、最近は以前見られたような急にワーッとなるようなことはない。役をやってセリフを言うことで、自分の役目があると感じられるのではないだろうか」という話があった。まさにドラマで「役割」を受け持つことは、自分の存在意義が感じられる方法の一つなのだと思う。

パントマイムを当てるゲームで上手に独楽に紐をかけて回したときも、Y 男さんと 2 人で狐の兄弟になって、おしゃれなネクタイを結んだときも、「ふり」の動作が上手だった。最後の感想を言う代わりに、小声で「歌おうかな・・。」とつぶやいたのち、「春の小川はサラサラいくよ〜」と元気な声で歌ったこともあった。

架空を扱う能力

必ず実施している「架空のもの」を渡していくゲームは、P 男さんだけでなく、「認知症が進行している」利用者の皆さんが参加可能なゲームの一つである。美味しい食べ物は、間違いなく理解して「食べて」もらえる。特に焼きたてパンなど香りの良いものは、架空でも喜んで「嗅いで」もらえる。動物を渡すときも心身が活性化される。P 男さんに、鶯がとまっている梅の木の枝を渡したときは、自身が瞬間、鶯になったようで、「ホーホケキョ！」と楽しんでいた。また、「われもの注意」のシールが貼ってある重い宅配便の箱のときは、「重い、重い！」と言いながら、隣の人に気を付けて渡し、「あっ大丈夫だった。」（割らずに済んだという意味）と言っていた。（ちなみにこのときは、次の人が箱を開けると「スイカ」が入っており、皆で切って美味しくいただいた。

上記のワークができるためには、架空の設定を理解する力、（理解していたとしても）その現実ではないものを受け入れる力、さらにはそれを楽しむ力が必要である。つまり、自

分という現実と、遊びとしての「架空」を同時に理解し実行する、多層な自己認識力である。ドラマの設定や他のゲームの説明が理解できなくなった人も、今ここにある架空のものを手の上に乗せ、それと関わる・楽しむことはできることがよくわかった。しかも、架空とわかっていて、ふりをするのだから、妄想などではなく健康的である。そしてそれを楽しいと思う心がある。

言い換えれば、このような多層な認識力こそ、人間を人間たらしめている想像力・創造力の根幹ではないだろうか。現実認識を持った上で「ごっこ」「ふり」という架空を扱うドラマセラピーの利点を生かしてこのような刺激を提供することで、消えて行きそうな能力を少しでも保つことができているのかもしれない。

もう一つのポイントは、この一見、単純に見える「架空のもの」を参加者が扱っているときは、(第3回の「Mimicry から Imitation へ」にも記述したように) 自動運動的な動きではなく、創造的な活動であるという点である。つまり、体操などで前に出ているリーダーの動きを、何も考えずに自動的に真似をしているのとは違うのだ。一人一人が受け身ではなく、能動的に関わっている。たとえすぐに忘れても、今このときを主体的に生きることができている。

P男さんは、もうずっと参加していない。しかし、もう2度と参加はできない、と決まったわけではない。

(次号に続く)

＊ 本文では、本質を損なわない範囲で状況・情報を変えてある。

＊ セッション内容の記述は、金光真理さん、嶌村麗子さん、川添真紀子さんのジャーナルを元にしている。

---

[i] 第一回「一期一会」で紹介した参加者が作って下さった俳句、「冬陽(ふゆひ)入れ　ドラマセラピー　睦みあう」から。

きもちは、言葉をさがしている

「紅茶の時間」とその周辺

第33話

水野　スウ

心の居場所

新宿から京王電車に乗って、調布駅で降りる。商店街を数分歩けば、ほら、もう「クッキングハウス」の目印、黄色いのれんが見えてきます。

代表をされているソーシャルワーカーの松浦幸子さんのお話を聞いて、そのひと月後にはじめてクッキングハウスを訪ねたのは、20年ほど前のこと。そこは、おいしい玄米ごはん定食が食べられるレストランで、心病む人たちが自分のペースで働く仕事場であり居場所であり、相手にも自分にもきもちのいいコミュニケーションやメンタルヘルスを学ぶ教室で……と、一言では説明しきれない、とても不思議なレストランでした。

松浦さんのすてきな笑顔、一人ひとりとていねいに向き合う姿勢、メンバーさんたちのかもし出す、自然体で安心の空気がなんとも心地いい。メンバーさんにまじって、コミュニケーションの練習やメンタルヘルスの講座に参加できることも楽しくて、機会をみつけてはよくクッキングハウスに通うようになりました。

心の病気をしても、病院ではなく街の中で、人間らしく、当たりまえにともに暮らしていきたい、きもちを話しても大丈夫な居場所をつくりたい。そう思った松浦さんが、1987年に12畳のワンルームマンションで、ごはんをつくって一緒に食べることから生まれたクッキングハウスは、5年後、レストランに育ちました。お菓子づくりの「ティールーム」や、メンバーさんが夕食を食べながら語りあう場としての「クッキングスター」もはじまって、今や3つあるクッキングハウスは、メンバーさんのみならず、当事者の方、ご家族の方、全国からみえるお客様にとっても、大きな安心と希望を分けてくれる、ますます貴重な心の居場所です。

スウさんのピースウォーク

そのクッキングハウスが毎春ひらいてくれる、「ス

ウさんのピースウォーク」というおはなし会。名づけ親は松浦さんです。テーマは毎回違うけれど、通しタイトルはずっとこれ。以前松浦さんに、石川では市民が平和の想いを持ちよって街なかを歩く「ピースウォーク金沢」というアクションが続いていて、私も毎年一緒に歩くんだよ、と話したことがあって、おそらくそれがヒントになってのネーミングだったのでしょう。意味は、私なりの平和の歩き方、といったところでしょうか。松浦さんから出されるその年どしのテーマは、9条だったり13条だったり12条だったり、「いのちの未来と原発と」だった年もあれば、時には「私の心の居場所の原点」とか、「心の自由を求めて」という年もありました。

それにしても毎年毎年、よく飽きないで呼んでくださること。私だけでない、年間通していろんな方をゲストに、憲法や原発や平和のコンサート、上映会、たねと命のおはなし会、などがひらかれるクッキングハウス。松浦さんの平和を求める強いきもちは、一体どこからくるのだろう。

この国がもしも危険な方向に向かおうとする時、真っ先に軽んじられるのが福祉の分野ではないか。そうなった時、弱い立場にいる人たちの、心のおだやかさや安心な暮らしが脅かされかねないと、松浦さんはずっと前から感じていました。だからこそ、メンバーさんと一緒に憲法を学ぶ。平和がどんなに大切かを知る。平和な社会であってこそ、メンバーさんたちも安心して生きられる。不安だらけの社会には、なんとしてもさせたくない。松浦さんのその願いの強さが、クッキングハウスを支えている屋台骨なんだ、と今は実感しています。

2018年春、14回目を数えるクッキングハウスでのおはなし会。「私たちは　平和のメッセンジャー」というのが今回のご注文のテーマです。クッキングハウスは、文字通り“注文の多い料理店”で、私は毎年、松浦さんからテーマをふられるたび、う〜ん、これをどう料理したらいいんだろう、とうれしく楽しく頭を悩ませます。今回もその場に集まってくださったお客様やメンバーさん、スタッフさんたちとの協働作業で、私たちが平和のメッセンジャーになる、伝える人になるってどういうことだろうね、と考えあい、語りあうことにしました。

伝え方のお手本

私は憲法や平和について語る時、いつもできるかぎり平らに話そうと心がけているけれど、そのお手本は、実はクッキングハウスです。誰かを責める口調や、上から目線で自分の考えを押し付ける“あなたメッセージ”だと、いくら力説しても伝えたいことはまるで伝わらない。反発されるだけで受け取ってもらえない。大事なのは、「私」を主語にして、自分のきもちを“わたしメッセージ”で伝えること。自分ばっかり一方通行で話したら、それって対話じゃないよね。相手のいうこともしっかり聴く。そうか、そんな風に思ってたんだね、と確認する。相手を理解しながら、こちらの伝えたいことを、その人のわかる言葉で平らに話す努力を、けちらない、惜しまない。

こういった伝え方の基本を私に教えてくれたのは間違いなく、クッキングハウスで日常的にしているきもちのいいコミュニケーションの練習、SST（ソーシャル・スキルズ・トレーニングの略）です。心を病んでいる時は対人関係が難しくなりがち。SSTはそんな人のために用意されたリハビリプログラムだけど、私自身が参加してみて、これはどんな人にとっても役に立つな、と。コミュニケーションには練習が必要なんだ、と実感したのです。その意味で、毎春のピースウォークおはなし会は、SSTやメンバーさんとかわすコミュニケーションで練習したことの、応用問題の発表の場だった、といえるかもしれません。

そこには、心の病気を経験し、お薬も服用しているメンバーさんたちが毎回、必ず何人かは参加してくれます。憲法の言葉をなるべくわかりやすくほどいて伝える。大きすぎる声で話さない、攻

撃的な激しい言葉をつかわないで（メンバーさんの中には、あたかも自分が非難されていると受けとってしまう人もいます）、語りかける。そういったことを気にかけながら話すようにしていたら、いつのまにかそれが私の伝え方のスタイルになりました。メンバーさんが安心して聞ける話し方は、きっとこれまで憲法にあまり関心がなかった人にも、若い人にも、ちいさな人たちにも、受け入れてもらえる伝え方なんじゃないかなと思っています。

クッキングハウスで教えてもらったものをここにお還しする、この循環、まるでブーメランみたいですね。でも私、本気で思うんです。平和や憲法のこと、平らに話せるようになりたいって思う人は、クッキングハウスにきて、SSTに参加して、コミュニケーションの練習したらいいよ、って。ま、そうできなくても、少なくともこれだけは一人だってできる。自分の話し方がいつも、上から目線で相手を非難する“あなたメッセージ”になってないかどうか。自分を主語にして、きもちをまっすぐ伝えているかどうか。聞くところによれば、紛争解決学という実践的な平和学の分野でも、“わたしメッセージ”の伝え方はとても高く評価されているそうですよ。

平和ってどんなこと？

おはなし会で度々つかう小さな折り紙は、私の出前に欠かせない小道具。この日も一枚ずつみなさんに配って、最初にしたことが、「あなたと憲法の距離感」のワークでした。この時点では、ほとんどの方にとって、憲法はやっぱり遠いイメージ。ちなみに私の場合は、9年前のここのおはなし会で、娘が憲法13条をすてきに発見してくれて、おかげで憲法との距離が一気に近くなったけど、これはちと特殊な例ですもんね。

その折り紙に、次は言葉を書いてもらいます。あなたにとって、平和ってどんなこと？　どんなイメージ？　どんな時、平和だなあと感じる？　書いたらそれを何人かの人に読んでもらいます。

いろんな家からごはんのおいしい匂いがしてくる
はだかんぼの子どもたちが大きな声あげてはしゃいでる
本音で話せる　違う意見がいいあえる
戦争や飢餓や差別がないこと
家族で食卓を囲みながら話ができること
日向ぼっこしながら眠れること
空が静かで爆音などしないこと
友達を信頼できること
自由に本がよめる、好きな映画が見られる、好きな音楽が聴ける
大声で思いっきり笑えること

いっぱい出てきましたね。私からは、同じ問いかけを紅茶の時間でしてみた時に出てきた言葉を、いくつか紹介しました。

好きな人と結婚できること――今の憲法ができる前の日本では、一家のお父さんが反対したら結婚は許されなかったんです。今は憲法24条のおかげで、結婚したい当人同士がそう望めばできるようになりました。娘はパートナーと出逢ったひと月後に、「私、彼と一緒に生きていくって決めたから。たとえ反対されても一緒に生きていくからね」っていきなり宣言したんだけど、私はそれを聞いた瞬間、あ、24条してる！　って思いましたよ。昔は、個人の意思よりも家という制度が重要なことだったんですよね。

平和、といわれて、思いつくことや場面がたくさんあること――生まれてからずっと難民キャンプで育ったり、子ども兵士にさせられていたりしたら、彼らの平和と私の平和は決して同じじゃないでしょう。

18歳で兵役につかなくていい自由があること――イスラエル人の友だち、ダニー・ネフセタイさんの生まれ育った国では、その年になったら性別に関係なく誰もが、兵役につかなくてはなりません。イスラエルの小学校の教室には「国のた

めに死ぬことはすばらしい」の言葉が大きく掲げられています。過去と違って今の日本で、徴兵制は憲法違反なので、ある日突然、あなたのおうちに、兵士になれ、という令状が届くことはないけれど、イスラエルではそれを拒否すると、その人のその後の生き方にいろんな不利益が生じるそうです。

ここにあげたどれもこれも、一つひとつまるで当たり前のようでいて、かつてはできなかった、許されなかったことばかりです。こうして自由に集まれることも、クッキングハウスやいろんな場所で、平和や憲法のおはなし会ができることも、政治に対しておかしいと思った時おかしいといえることも、もっと身近な例をあげれば、私がいくつになっても着たければ真っ赤な服を着れることも、平和な社会であればこそ。

古くからの紅茶仲間の細川律子さんは、35年余り続く家庭文庫で毎年、平和のおはなし会をひらいています。集いの後のお茶の時間で律子さん、こんなこと言ってました。

——誰もが好きなように集まれること、言いたいことを言えること、戦争はいやですって言えること。それが平和だと思うのね、できない時代もかつてありましたもんね。この文庫も、平和だから続けてこれた。平和の象徴は、安心して、絵本を読んだりおはなしを聞いたりできること。こういう、今あたりまえに思えることも、こうしてちゃんと言葉にしておかないとね。

ちゃんと、言葉にしておかないと、ね。うん、本当にそう思うんです。平和ってどんなこと？と意識すること。それぞれが言葉にした平和を、聞いた人が、ああ、なんか漠然と思っていたけど、これも平和か、あれも平和か、ってあらためて感じる。過去を知り、ほかの国を知ることで、今ある平和の価値に気づいたり、まだ手にしていない平和、すでに奪われかけている平和について、考える。ここに出てきた平和のどれ一つとってみたって、量販店のバーゲンセールに並んでる、安くて簡単に手に入るグッズなんかじゃ決してないんだよ。そんなことに、「平和ってどんなこと？」のいっときを共有しながら気づいてもらえるといいな、そう思ってのこの問いかけでした。

クッキングハウスって何条？

「これって何条？」憲法クイズ。自分たちが普段していることを立ち止まって眺めてみて、これって憲法的には何条にあたるんだろう、と考えてみるクイズのことです。さて、クッキングハウスのしていることっていったい何条にあたるんでしょう。

真っ先に、13条の場、という声があがります。いろんな違いをもった一人ひとりが等身大で認められ、尊重されている。悩んだり困ったことがあれば、松浦さんが聴いてくれる。仲間たちも受けとめてくれる。その大切さは行ったり来たり。どこの職場でもそうなわけじゃないから、この場が13条であるってとても貴重なこと。遠くから来たお客様にもそれが伝わって、初めて来た人も自分が大切にされていると感じることができます。

食べることはいのちに直接かかわること、いのちを支えるごはんをつくるところだから、生存権の25条でもあると思う、の声。そうだね、誰もが人間らしく生きる権利を持っている、という25条を実践している場。松浦さんは、メンバーさんにとってそれが必要なことなら、25条を使って堂々と生活保護を受けましょう、と一緒に市役所に行って、申請のお手伝いをします。

クッキングハウスの応援団であり、伴走者でもあったフォークシンガーの笠木透さんは、「心の病気をした君たちだからこそ、自分の思いを自分の言葉で表現してみたらどうだ？　シェアしあいながらつくっていくと、仲間のよさがわかってくるぞ。さあ、うたづくりをしてみよう！」と、一

から歌のつくりかたをクッキングハウスに教えてくれました。笠木さんの言葉通り、クッキングハウスではもうずいぶん前から、自分たちでつくった歌を歌ってきています。

2017年に満30周年を迎えたクッキングハウス。その特別な日のために、仲間たちは2年がかりで歌をつくり、その歌を織りこんだミュージカルドラマをつくりました。その日、クッキングハウスの仲間たちは大きな晴れの舞台に立って、大勢のお客様の前で1時間半にも及ぶ、「いのちの輝き希望のあかり」のミュージカルを見事に歌いあげたのです。まさに表現の自由の21条をしています。

クッキングハウスでは、私のおはなし会だけでなく、映画「不思議なクニの憲法」上映会をしたり、9のつく日は「平和ランチ」の日と称して、れんこん料理（れんこんは穴が9つあることから、9条とかけているのです）を出したり、自分たちのつくった歌の歌詞にも、平和の希求がいっぱいこめられています。

♪いつもみんなで学び合う　心が平和になるために　一緒に生きて行くために
（小さな居場所）

♪私たちはいつでも　平和でいたいから　あなたも一緒に声をあげようよ
♪平和を求める限りない思い　おだやかな毎日がその証なんだから　平和のうたをいつまでも
（平和のうたをいつまでも）

数えたらいくつもあるある、クッキングハウスでふだんからしていることがそのまま、9条の心であり、不断の努力の12条することでした。こうやって一つひとつあげていくと、クッキングハウスの自分たちが平和のつくり手だったり、平和の表現者だったりしていたんですね。

大胆なレストラン

この日は映画「大胆な平和」の話もしました。軍隊を捨てて70年間、平和を保ってきた中米の小さな国、コスタリカのこと。それはまるで奇跡のようにも思えて、日本語では「コスタリカの奇跡」(*)という題がついているけど、もともとの英語のタイトルは「大胆な平和」というのです、と。それに続けて、日本が戦争に負けた翌年、当時の幣原首相が、日本はもう武器を持たないことにする、とマッカーサーに非武装の9条を申し出たことも、実はすごく「大胆な提案」だったのではないかしらね、とも。

おはなし会のおしまいはいつも、ひとこと感想をいうふりかえりのシェアリングタイムをしますが、この日はコスタリカに関する感想もたくさん出ました。

順にひとまわりして、おはなし会に参加していた娘もふりかえりのひとことを。

――最初に感想いったメンバーさんが、「スウさんのお話楽しみにしてたのに、お昼ご飯のあとで眠くてやっぱり寝ちゃいました」って正直に話したのが、なんともクッキングハウスらしいなあ、って（笑）。今日はじめてここに来た人も、それ聞いて、あ、ここってほんとに思ったこと言っていい場所なんだ、ってきっと安心したと思う。

それがまず一つ目の感想。二つ目は、軍隊を持たない国コスタリカのことを、大胆な平和、って紹介していたけど、それをいうなら、クッキングハウスもまさに大胆！　って思ったんです。30年も前、まだ誰もこんなことしてなかった時代に、松浦さんがクッキングハウスをはじめようとしたこと。多分まわりから、むずかしいよ、無理だよ、っていわれたろうな。でも松浦さんは、そこでやめなかった。

今はまだなくても、こういう場所があった

らいいな。あればどんなにいいだろう。その願いをあきらめないでずっとずっと続けてきて、それが今、こんなすてきな場所になっている。メンバーさんたちが元気になって、全国からたくさんの人もやってきて、クッキングハウスから勇気や希望をもらってる。こんな風になるなんて予想もできないころに、ここをはじめた松浦さんは、だからすごく大胆です。

でもね、社会ってきっと、そうやって最初の誰かが大胆にはじめて、あきらめないで続けてきたからこそ、少しずつかわってきたんだろうし、これからもそうやってかわっていくんだと思います。

ほんとにほんとだ、コスタリカも日本の9条もクッキングハウスも、共通のキーワードは、大胆！

すると松浦さんが、ああ、そういえばね、とクッキングハウスが生まれたころの話をしてくれました。長いこと精神病院に入院していた人が退院後、地域で人間らしく当たり前に暮らしていけるようなサポートがしたくて、松浦さんは、小さなワンルームマンションからクッキングハウスをはじめたのでしたが、

――その頃ってまだ何も制度のない時代でね、こういうことはじめます、といったら、精神障がい者に刃もの持たせていいのか！　って保健所の人が見にきたくらいだったのよ。そんな意味ではたしかに大胆だったのかもしれないわね。もちろん、そんな心配されるようなこと、この30年間で一度もありませんでしたけどね。

松浦さんからこんな話を聞くのは初めてです。制度のない時代、ってどういうことだろう。松浦さんに教えていただきました。

――日本の精神科医療は長いあいだ閉鎖的でね、心の病気になった、というだけで医療と治安の対象にされて、35万人もの人が、病棟で長い年月閉じこめられて暮らしていたの。そんな精神衛生法の時代が、クッキングハウスの生まれた1987年まで続いて、同じ年に精神保健法ができはしたけど、心病む人を、一人の人間として地域で暮らすことを支援する、といった福祉の考え方はまだまったくなかったの。それが、制度のない時代、という意味ね。

その後、障害者基本法ができて、障がい者と呼ばれる人たちの中に、精神の障害を持つ人も含まれることになりました。1995年には精神保健福祉法ができて、自立と社会参加を進めるために必要な援助をしなければならない、となって、障害者手帳や社会復帰のための施設もつくられるようになったのね。障害者自立支援法、障害者総合支援法、そして2016年には障害者差別解消法、と、ようやく障がいのある人もない人も、ともに人間らしく生きるための社会をつくっていこうとする時代になってきた、ということなの。人権を取り戻していく歴史は今やっとこれからはじまるんですね。

私たちは　平和のメッセンジャー

人権を取り戻していく歴史は今やっとこれから、という松浦さんの言葉で、私は12月に観た、30周年のミュージカル「いのちの輝き　希望のあかり」の中で、松浦さんがこう語っていたことを思い出しました。

――私たちは、社会が平和であってこそ、心豊かに生きていけるのです。クッキングハウスの小さな居場所から、平和な社会をつくろうと、呼びかけ、希望を発信し続けていきます。心が豊かになり、一人ひとりが輝いて、幸せに生きていけるように、弱い立場の私たちこ

そが、平和のメッセンジャーなのです。

ああ、ほんとにそうだ、クッキングハウスから発信されるメッセージにはいつも、私の思い願う平和が満ちている、そう感じて、このせりふを聞いた時、胸がいっぱいになったけど、この日聞いた松浦さんの言葉をそこに重ねあわせると、その意味がさらに深くなります。

ミュージカルのためにつくられた歌は、クッキングハウスらしく、食べ物と居場所の歌がいっぱいでした。つらいきもち、うれしいきもち、笑いや涙、夢や平和への思いを歌詞にし、曲をつけたもの。一つとして大げさなものはない。ささやかな幸せ。ちいさなよろこび。それもこれも、社会が平和であってこそ、です。そのことに一番敏感な自分たちから、平和な社会をつくっていこうと呼びかけ、希望を発信してきたクッキングハウス。弱い立場の人たちが安心して暮らせる社会は、実は私たちの誰もが、そのように生きられる社会でもあるのです。

ミュージカルでも描かれていた、この国の精神保健制度の歴史とクッキングハウスの歩みを、松浦さんからあらためて聞かせてもらったことで、どちらが先んじて、大胆に、心病む人たちの生きる道を切り拓き、安心できる居場所を育ててきたか、それがくっきりと見えました。

そんな松浦さんにとって、平和ってどんなイメージですか。

――私にとって平和のイメージは、そうね、みんなが一緒のご飯を食べて楽しそうに語りあっている、それを見ているのが平和、ってことかしらね。

ピース・オブ・ピース

この日のおはなし会のテーマは「私たちは　平和のメッセンジャー」というのでしたね。「平和」を定義する言葉が、ものすごく多様で、あいまいになってしまった今だからこそ、自分が本当に求めている平和って何だろう？　って考えて、たとえ周りからそんなの無理だよ、っていわれたとしても、大胆にそれを望むこと、そのためのふだんの努力を続けることが、これまで以上にいとしい大切なものに思えてきました。

平和のメッセンジャー、の前に、私たちは、って主語のあることが大事ですね。私自身は、この社会の、ほんのちっちゃなひとかけらだけど、そのかけらの自覚をもって、I am a piece of peace. 平和のひとかけらになりたい、と思う。そしてどんなに時代がかわっても、平和のためには戦争もしかたないよね、っていう私にはなりたくないぞ、と決意しています。

この私の決意は、先の「平和ってどんなこと」でも登場した、イスラエル人の友だちのダニーさんとの約束なんです。

私がはじめてダニーさんのことを知ったのは、NHKあさイチの特集番組「戦争はイヤ！　子どもと考える」。登場した子どもたちは小学生から中学生。実際には経験したことのない「戦争」って、いったいどういうものなんだろう。そのことを知るために子どもたちは、戦争を経験したことのある外国のひとの元へ、お話を聞きに出かけて行きました。

その一人が、日本に住んで37年になる、イスラエル人の家具職人、ダニー・ネフセタイさん。18歳から21歳までイスラエル軍に所属していました。埼玉県の秩父にあるダニーさんの自宅兼家具工房を訪ねた日本の小中学生たちに、彼は真剣な表情で語りました。

ダニーさんの生まれ育った国では、高校卒業と同時に、男性も女性も全員軍隊にはいること。通っていた小学校の教室には「国のために死ぬのはすばらしい」という言葉が貼り出されていたこと。人を殺すのは良くないけど、戦争はしょうがない、と小さな頃から教わってきたこと。空軍時代、教官から「君がこの戦闘機を使いこなせば、イスラ

エルの子どもたちが毎晩安心して眠れるんだ」といわれ、みんなのために訓練に励んでいたこと。

そして2008年、イスラエルはパレスチナのガザというところを大々的に攻撃して、空からたくさんの爆弾を落とし、大勢の子どもたちが一度に死んでしまったこと――。

それまで、イスラエルは子どもを殺すような攻撃をする国ではないと信じていたダニーさんは、空爆に参加した仲の良い友人に、どうしてそんな攻撃をしたんだ、と尋ねます。返ってきたのは、「しかたなかった」。その言葉は、ダニーさんがはじめて、自分の生まれた国がしていることを疑いだす引き金になりました。

イスラエルで繰り返しいわれる言葉「戦争はしかたない」と「国のために死ぬのはすばらしい」、この2つが合わさると、疑問もなく人を殺せるようになってしまう。「しょうがないという言葉だけは、使わないでほしい」ダニーさんは目の前の子どもたちに、何度もそう言っていました。

パレスチナと何十年にも渡って争い続けている遠い国で育った、私のまったく知らない人が、その現状をしかたないと認めること、努力を諦めることを、拒んでいる。それがどれほど困難で険しいことか。

日本は、「国のために死ぬのはすばらしい」も「戦争はしょうがない」も70年以上前に捨てた国です。その国に生きている私がたやすく、しかたない、といってしまったら申し訳が立たないのではないか――テレビ画面を前にして、私は強くそう感じていました。

番組を見た日から2ヶ月後、なんとも不思議な糸がつながって、思いがけず埼玉の上尾で、ダニーさんとのコラボトークが実現しました。しかたないをいわない、と決めたのは、その日、私が心の中でこっそりダニーさんと指きりした約束です。

しかたない、という言葉を口にしたとたん、考えはそこでストップしてしまう。それがこと戦争であれば、あらがうことをあきらめ、黙ってその状況をうけいれる自分になってしまう。きっと一人ひとりのそんな、しかたない、が積み重なって、戦争はつくられているんだ。それなら私は、しかたないって言いたくないし、考えることもやめたくない。

その日以来この約束は、ちょっと心が弱った時も、しかたないって私はいわないんだったぞ、と自分を立て直すための言葉になってくれています。そして、どうしても、しかたない、って言葉がこぼれ落ちそうな時、心折れそうな時は、一人でためこまないで、誰かとちょっと話してみる。しかたない、以外の言葉を一緒に探してみる。そんな時間もきっと、私たちには必要なんだと思います。

平和のためには戦争もしかたない、っていう私にはなりたくないよ――こうクッキングハウスのみんなの前でいうことは、私なりの決意表明です。人前で口にすることで、その決意は強くなる。心に決めたことも、言葉にし続けていないと、簡単にうすれていってしまうものだから。

この日はもうひとつ、私が大切にしている言葉を紹介しました。

あのね、あなたのしていることってほとんど無意味だよ。そう、意味なんかほぼない。でもね、あなたはそれをしなけりゃならない。なぜなら、それは世界をかえるためじゃなくて、世界によってあなたがかえられないようにするためだよ。

そんな風なことを昔、ガンジーさんが言ったんです。この言葉、本当に私は何度も噛みしめます。

クッキングハウスでは、最後にもう1回、折り紙で憲法との距離感をはかってもらいました。あら、うれしい、みなさん、憲法との距離が縮まっています。なかには折り紙を胸にぴったりくっつけている人もいて、笑っちゃいます。ま、誰もが1回でそこまで近づくとは思わないけど、おはなし会の前と後で、1ミリでも距離が近くなったらね、それだけでも来た甲斐があるというものですよ。

おしまいのおしまいは、今日のお話のテーマにふさわしく、「平和のひとかけら」という歌を。歌詞は、紅茶の時間を思って私が書いたけれど、同時に、クッキングハウスの日常を歌っているようでもあります。メロディは「ふるさと」なので、歌詞カードを見ながらぶっつけ本番、全員で声をあわせて歌えましたよ。よかったらあなたも、どうぞ口ずさんでみてくださいね。

「平和のひとかけら」

♪きもちいつも言葉に
あなたと語りあう
涙も笑顔もわけあってきた
平和のたね　蒔きつつ

知らないこと学んで
平和のひとかけらに
心の自由求めて
一歩前へ　あなたと

つないだ手のぬくもり
今もわたし　はげます
平和の糸をつむいで
明日へ渡す　ギフトに

(*)
「コスタリカの奇跡～積極的平和国家のつくり方」
監督：マシュー・エディ、マイケル・ドレリング
制作年：2016年
制作国：アメリカ・コスタリカ
配給：ユナイテッドピープル
https://www.cinemo.info/movie
（サイトでDVDも販売されいています）
この映画については前回の32話にくわしく。

盆踊り漫遊

竹中尚文

第３回

1. 日系移民の歴史

はじめに盆踊りが北米の浄土真宗のお寺で盛んに行われていることを紹介し、前回はその始まりについてお話をしました。日本人がアメリカに渡ったので、自然発生的に盆踊りが始まったということではなく、浄土真宗のお寺が深く関わっていたのでした。その理解を深めるために、これから日系移民の歴史的背景についてお話をしてみます。

2. 移民の始まり

日本は明治時代に入り、開国をします。1868 年(明治元年)、アメリカ人の貿易商が 153 人の日本人労働者をハワイに運び、非常に過酷な労働に従事させます。明治政府は、移民たちが劣悪な労働に従事しているので、それ以後の移民を認めませんでした。しかし、明治政府は 1885 年(明治 18 年)に海外移民制限を解除しました。

移民の制限解除の理由を考えると、まず政府の動機があるでしょう。明治政府による経済政策の失政があり、移民が海外から日本に送金をすることで、外貨獲得をしようとしたのでしょう。移民の当初はかなりの人数の「出稼ぎ」が含まれていました。多くの人は単身で海外に渡航し、故郷へ仕送りをしました。その仕送りを見聞きした故郷の人は次の渡航者になっていきました。

次に当事者の動機です。当事者の置かれている経済的状況が劣悪であり、海外の状況の方がよければ、移民をします。近年、中国と日本の賃金格差が大きいときは、日本で中国人労働者を多く見ました。今、中国と日本の賃金格差が少なくなってくると、中国人旅行者をよく見るようになりました。

1885 年(明治 18 年)に、移民が解禁されて、日本から多くの人が移民をしました。

この移民解禁の前にあった最も大きな出来事は、1877(明治 10 年)の西南戦争です。この西南戦争は日本近代の最も大きな国内戦争でした。戦争は、破壊行為ですから経済の大きなマイナスです。戦闘に参加しなかった人々の生活に少なからず影響をもたらしたのでしょう。戦争の勝敗には関係なく、普通の人々の生活を混乱させたのです。間接的な戦争被害者ともいえる普通の人々が、新たな生活を求めて海外に出て行ったのです。この点について、本文末のグラフをご覧いただくと、1899 年(明治 32 年)と 1905 年(明治 38 年)に海外移住者数が急激に増えています。これも、日本の国内事情をいえば日清戦争と日露戦争がありました。戦争は誰が勝とうが、負けようが関係なく、庶民の生活に影響したのです。

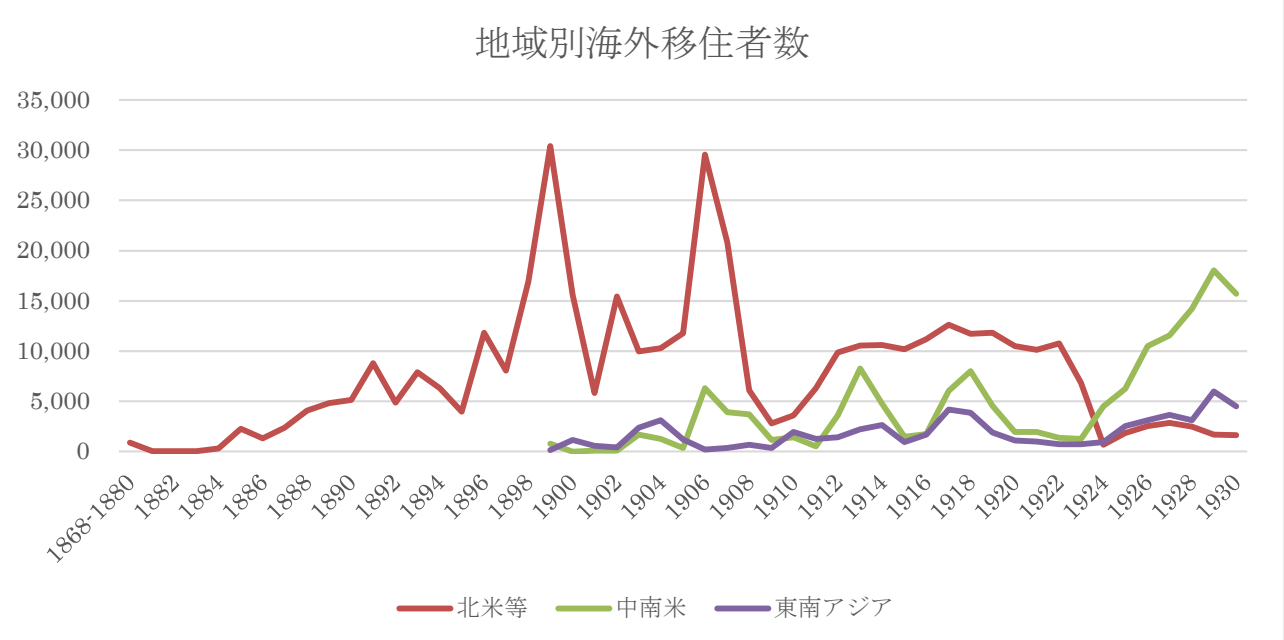
1885 年(明治 18 年)以後、日本を出国する人の渡航先は、北米がほとんどで、次いで南米、東南アジアの順でした。東南アジアへの日系移民ということに驚かれた方には、鶴見良行著『なまこの眼』(筑摩書房)をご一読されることをお薦めします。

渡航先は北米については、ハワイ王国(1898 年にアメリカ合衆国に併合)とアメリカ合衆国本土とカナダです。1885 年から 1924 年までの間に、ハワイに約 20 万人、合衆国本土に約 18 万人が移住しました。同時期、南米には約 7 万人、東南アジアには 3.7 万人です。(本文末のグラフ参照)カナダにはどれくらいの人たちが移住したか分かりません。例えば、1900 年の記録で、日本側でカナダに向けて約 2700 人が出国し、カナダ側で日本からの入国は 6 人となっています。アメリカに入国してからカナダに移動する人もいたでしょうし、その逆もあったでしょう。いずれにしてもカナダに移住した人はそれほど多くなかったようです。(飯野正子著『日系カナダ人の歴史』東京大学出版会)

1885 年(明治 18 年)以後、ハワイ及びアメリカ本土に渡った人に西日本出身者が多かったのは、西南戦争の影響があったかもしれません。あるいは東日本の人達は北海道開拓に向かったのかもしれません。この西日本というのは、浄土真宗本願寺派(西本願寺)の門信徒(もんしんと)の多いところです。この門信徒の要請をうけて、本願寺は 1899 年(明治 32 年)に二人の僧侶を、サンフランシスコに派遣しました。この事をもって、浄土真宗本願寺派はアメリカ開教(かいきょう)に取り組みます。(本願寺史料研究所編『本願寺史』第３巻)

この時代の東西本願寺の海外布教の動向について、次のような指摘があります。幕末の動きの中で、東本願寺は佐幕派の立場をとりました。江戸時代を通じて、東本願寺は徳川幕府に近く、西本願寺は幕府から遠い存在でした。明治維新を迎えて、東本願寺は海外布教に目を向けました。中国大陸での布教を計画して、清から布教権を受けようとしますが、なかなかその許可は出ません。東本願寺は、明治政府にその後押しを頼みます。明治政府は西本願寺が中国大陸での布教の動きがないのに、東本願寺のみに援助をすることはできないと答えます。明治政府の中の長州藩出身者が本願寺派(西本願寺)の門信徒でした。東本願寺のこうした動きは、西本願寺に伝えられていました。西本願寺は中国での布教に可能性を見いだせずに、北米への進出を決定します。北米に移住した日本人を対象とした布教活動であれば、布教権を取得する必要がありません。(川邉雄大著「大谷光瑞と中国布教」『アジア遊学』156 号)

いずれにしても、浄土真宗本願寺派(西本願寺)は、日本からアメリカに移り住んだ日本人のために 1899 年より開教を始めました。開教といいながらも、アメリカの人たちを浄土真宗に勧誘するものではなく、日系移民のためのことでした。同時に、本願寺による開教は米国仏教団(BCA)の設立でもありました。この事は戦後に他の日本仏教宗派のアメリカ進出まで、BCA が日本仏教として宗教的に日系移民の心を支えることになりました。



外務省領事移住部『わが国民の海外発展　　移住百年の歩み(資料編)』の資料よりグラフを作成した。

★★★★★★★★★★★★

★★★★★★★★★★★★

男は痛い！

國友万裕

第28回

『万引き家族』

1. 俺には権力が似合わない

「今更、専任になる気はないでしょう？　先生だったら、非常勤をしながら、書き物でもしていた方がいいと思いますよ」

ある出版社の人と飲んでいたときだ。唐突にそう言われた。

思えば、若い頃は 50 代半ばになって非常勤で生活をしている自分なんて想像もしていなかった。何も保証はないけれど、どこかでポストを与えられる時が来るだろうと思っていた。しかし、こだわりの強い性格の俺は、ポストがもらえるのであればどこの大学でもいいという気にはなれず、また大学をめぐる状況は厳しくなる一方で、とりわけ、俺たちのような文学系の先生がテニュアの仕事をえるというのは急速に難しくなっていった。いまの若い子は文学なんて読まない。俺はジェンダーや映画の研究もしているが、ジェンダー論や映画論のポストなんてさらに少ない。加えて、大学の専任は様々な条件の重なり合いの元に決定して行く。入試みたいに単純に点数で決まるようなものではない。不確定な要素が極めて大きいのだ。

したがって、もう諦めるしかない、とりあえず、懸命に生きていれば、大学のテニュアにはなれないにしても、何らかの道が開けるだろうと思っていた。しかし、他の生きかたを探そうと始めた男性運動は裏目に出た。俺は、新しい生き方、他の世界の友人を求めて運動に参加したのに、日本の男性運動は学者集団。むしろ火に油を注がれるようなことにもなった。さらには、37 歳の時に決定的な決裂が起き、俺 1 人だけグループから村八分の

ようなことになる。今思えば、あの人たちと俺は考え方が違っているのだから、起きるべくして起きたこと。あのまま続けていても、どこまで行っても平行線だっただろう。そのことがわかっていても、つらかった。そのグループで、俺と世代の近かったメンバーたちは、順調に就職は決まり、えらくなって行った。

大学の非常勤講師の仕事を始めた頃から、一生非常勤講師のまま終わって行く先生もいることは知っていた。大学のお昼休み、講師控え室で奥さんの手弁当を食べている先生たちの多くはそうだった。なんとなく見ていて辛いものがあった。非常勤の仕事の場合は、時間給なので、生活のためには仕事をいっぱいせざるを得ず、家庭のある人の場合は、奥さんがお金を稼げる人でなかったら辛い。皆かつては専任を目指していたはずなわけで、その夢叶わず、自分は負け組みたいな痛恨の思いを抱きながら仕事をして行くのは惨めだろう。

俺は非常勤を増やすことよりもむしろ翻訳の道を模索し始めた。けれど、翻訳もそうそう甘い世界ではなかった。大学の非常勤の場合は少なくとも1年は雇ってくれる。しかし、翻訳の場合は、エージェントが気に入らないとその時点でアウトになる。エージェントは翻訳家を育てる気などない。最初から出来上がっている人でないとやっていかれないのだ。

ちょうど 40 歳の時、専門学校の非常勤講師の仕事が入った。あの頃の俺はまだ自分の枠を破ることはできなくて、中学や高校の非常勤はしたくなかった。専門学校は短大と同じ扱いになる。使うテキストも大学と同じだ。専門学校で教えることは、妥協案だった。ここで 5 コマほど仕事をいただいたので、コマ数はそれまでよりも多くなり、最初は心配だった。ところが、実際それに慣れてくると意外にいける。何よりも収入が増えたので、満足に買えなかったものも次第に買えるようになって行った。生活するのにかつかつで、保険や税金もまともに払えなかった頃に比べれば、はるかに生活が良くなった。また 40 過ぎてから徐々に交際範囲が広がり、学者としても認めてもらえるようになって行った。親友と呼べる男性もできた。40 代の後半になると単著や共著も何冊か出すことができて、自分の勉強してきたことを結実させることもできた。それまで散々苦労をかけた母も徐々に幸せになって行った。

世の中もこの 10 年の間には大きく変わった。派遣労働者や契約社員が増えて、定職を持たないことが珍しいことではなくなり、独身者の割合も増え、とりわけ男は生涯未婚率が 4 人に 1 人とも言われている。中年を過ぎて、独身でいることが変に見られることもなくなった。俺は不登校のトラウマを抱え込んでいるが、不登校も今となっては一つの選択肢。様々な本も出ているし、サポート体制も整って来て、不登校が後ろ指さされる時代は終わりとなった。

振り返れば、40 代は充実の 10 年間だった。この上昇気流が 50 代になっても続いてくれることを期待していたのだが、50 になるとスランプが待っていた。また気力もなくなってきたのだ。40 代の頃までは心の中にもやもやした整理できないものがたくさんあった。それを解明するために一生懸命勉強していた。研究がそのまま俺の人生と直結していた。ところが、自分の思いを本にもまとめたことで、

もはや、もやもやがほとんどなくなってしまったのである。

これから人生の新しい局面。確かにそうなのだ。俺は非常勤講師を続けながら、書き物でもしていた方がいいと思う。今は十分非常勤講師の仕事はあるし、生活には困らない。でも、辛い面もある。以前に比べて、非正規雇用に対する世間の理解は深まってはいるものの、俺には権力がない。世の中、いざとなったときには権力が物をいう。そのことを親友に漏らした。

彼からは、「先生に権力は似合わないですよ」と言われた。

そうなんだ。権威主義は俺が一番嫌いなもの。親友から言われたこの台詞は最高の褒め言葉なのかもしれなかった。

2. 脱ぐ男は痛い！

この原稿を書いている時点で、杉田水脈議員のLGBTに対する問題発言で、彼女の進退が問われている。LGBT の権利に対する意識がここまで高まって来たのは驚くべきことだ。俺たちが子供の頃には有識者の人たちが当然のように LGBT をバカにしていた。しかし、時代は変わった。とりわけ、この５年間くらいの変わりようは大変なものである。おそらく、アメリカが同性婚を認めたことが大きいのだろう。日本でも日増しにLGBTの人たちがカミングアウトしていく様子が肌で感じられる。

しかし、男性のジェンダーの問題はいつになったら日の目を見るのか。一部日の目をみてはいるが、それは女性から DV される男性やリストラなどで自殺に追いやられる男性などであり、男性への性的・肉体的虐待の部分への突っ込みはまだ見られないのではないか？

先日、島本理生の直木賞受賞作『ファースト・ラヴ』を読んだ。少女期の性的虐待のトラウマで殺人を犯してしまう若い女性を描いている。女性作家の描くものにはこういう話は本当にたくさんある。しかし、男だって性的虐待は受けているのだ。

例えば、いまだに兵役を男子にのみ課している国はある。体力や運動神経のない男性にとっては、過酷なことである。また、この連載で何度も書いて来たが、裸を強制されることは男性差別なのである。

夏休み前のある日、教え子の男の子と大学近くのカフェで食事をした。若い学生と話ができるのは、先生という職業の一番楽しいところだ。その子は、体育会系で、明るい子で、話がしやすい。授業中にもよく発言してくれる子だった。インスタグラムの話になった。俺はマッチョ研究なので、マッチョの話になり、この頃は「体育系の子だと、自分の上半身裸の写真を自分で撮ってアップしている男の子いるよね」と話をした。すると彼は、「あれは痛いですよ」と言うのだ。彼に言わせれば、俳優さんが裸を見せるのは当たり前のことだけど、普通の男性があそこまでですると無理しているというのが見えるというのである。男優さんだったら、見せるのが商売だから仕方がない、だけど、役者でもないのに、自分の裸身を披露して、「どうだ、俺って、男だろ？」とカッコつけるのは、彼のようなカラッとしたスポーツマンの目から見ても痛々しく映るのだ。やはり、俺の確信はまた一つ深まった。彼と限らず、よほどのマッチョか、

あるいはおふざけタイプの子でなければ、自分の上半身裸の写真なんてださない。体育系のやつであっても、大概の子はむしろ抵抗を示すのだ。この連載で、こういうエピソードは何度も書いて来たけれど、これまで俺が話した男子学生（多くは体育系）で、裸になるのが平気なんて答えた学生は一人もいなかった。暑い夏の練習の後、男ばかりだからまあいいかと上裸になる学生はいるのだろう。しかし、それを強制されることが平気だという子には今の所お目にかかっていない。

なのに、前にも話した女性カウンセラーは、「脱ぐのが好きな男もいる。その時一緒に脱がされた子がいる」と返して来た。俺は 4 年経った今でも、この言葉が胸に突き刺さっている。「脱いだ」ではなくて、「脱がされた」である。女優さんが映画で「脱ぐ」ことはあるが、「脱がされたり」したら犯罪である。おそらく彼女は、男の人なのだから、女が裸にさせられるのとはわけが違うのだと思い込んでいたのだろう。俺みたいなことを言う男には会った経験もないから、そんなことについて考える機会すらなかったに違いなかった。

男性だったら考えられないようなことを女性に課すことは、女性差別であると糾弾される。まだまだ家事や育児をしているのは圧倒的に女性であるにしても、「男性はしなくていい・女性はすべきだ」ということを大っぴらに言うことは許されない。ところが、女性には絶対に強制されないことを男性に課すことは、それが当然のこととまかり通ってしまう。

レイプは、性欲ではなく支配欲だとしばしば言われる。あの時男子中学生全員を脱がせた男の先生は、支配欲を満たしたかったのだ。ひょっとすると性欲もあったのかもしれない。あの先生はゲイだったのかもしれないし、ストレートの男性であっても若い男の子に性的ないたずらをすることはアメリカでは大きな社会問題になっている。今思えば、あの人のしたことは、集団レイプに等しかったのである。そうでなければ、全員を脱がせる必然性なんてない。満員電車で、誰かに触られたとき、混んでいたから偶然触れただけなのか、それとも意図的に触ったのか、それくらいは感知できるという女性が多いだろう。俺はあの時、あの男の先生に性的な意図を感じとっていたのだった。

忘れて欲しくないのは、俺がこの屈辱的な体験を全て話すのには、20 年以上の月日が必要だったということだ。俺と同じ屈辱を味わい、PTSD に苦しんでいる男性は他にもいるだろうが、それを誰かに話すまでには、トラウマとの過酷な闘いが必要となる。したがって、大概の男は蓋を閉めて話さない。だから女性たちは気づかない。男だって傷ついているということを。

俺を苦しめたものは、これだけではなかった。当時、体罰、過酷な叱責など、子供の人権を無視した過酷な先生たちの支配は、枚挙にいとまがないほど起きていた。しかし、今となっては、学校の問題も様々な場所で批判されている。いまでもそういう学校はあるのだろうが、昔に比べればマシにはなってきているのだろう。俺は生まれるのが早過ぎた。世の中は確実に俺が願っていた方向に流れてはいるのだ。

カウンセラーの女性には理解してもらえなかったのだが、実はこの人は、友人の友人に当たる先生の紹介でついたカウンセラーだった。この人を紹介した先生とはその後会って

いないのだが、友人の話だと、「うまく行かなかったっていう話は聞いているから、悪いことをしてしまったとは思っているんだ。だけど、あの時点で紹介できるところがあそこしかなかったんだ。だからマッチングまでは考えていることができなかったんだよ」とおっしゃっていたのだそうである。今はカウンセラーもマッチングを考えるくらいに多様になってきている。昔は、マッチングを考えるほどカウンセラーもいなかったし、多様性を認めない時代だったのである。

あれから 4 年たった。おそらく彼女も、暫くたって、俺が言わんとしていたことを理解してくれているかもしれない。それを祈るのみだ。

3. 故郷への帰還

8 月。1 年ぶりに実家に里帰りした。母は入院中である。右膝の手術を終え、その後リハビリ、9 月には左脚の手術が控えているのだが、土日は家に帰してもらえる。俺も、そうそう長くは帰れないし、母の帰宅に合わせて、週末の土曜日に戻った。母は思っていたよりもはるかに元気で、頭も全くボケる様子はない。右脚の手術の後、しばらく体調が悪くて、辛かったらしいのだが、いまは全く問題ない。「これだけ右脚が動くようになったんだから、左脚の手術もしなきゃね」といたって明るく話していた。

その日のお昼は弟がカレーを作ってくれた。母が入院してから、弟は自炊を始めて、今や料理が趣味のようだ。俺が美味しそうに食べると嬉しそうにしてくれる。弟は、感心するくらいに親思いで、母はつくづく幸せだなあと思う。

その後、3 人でお墓まいり。父の方のお墓だけにしておこうかと母は言っていたのだが、弟の方が母の方にも行った方がいいと言い出し、両方の墓に弟の車で行くことになった。俺を可愛がってくれたのは、母方のおばあちゃん、お金をたくさん残してくれたのは父方のおじいちゃん、感謝しなくてはならないのだろう。しかし、俺はこの町を今でも憎んでいる。それは、俺のその後の苦しい人生の原因を作ってしまったのがこの町だったからだ。俺はこの町の墓で眠るのには、正直なところ躊躇しているのである。母の兄にあたる叔父さんは、死んだら散骨してくれと言い残しているのだそうだ。俺は京都に眠りたい気もするのだが、それでは母や弟に悪いという気持ちもある。でも、どこの墓に入っても、あの世では一緒になれるのではないか。そのことについてはまだ焦って考えることもない。これからまだ 20 年くらいは余生があるだろうから、その間にゆっくり考えればいいのだ。残された人生で全てのわだかまりが消えて、澄み切った気持ちで死を迎えることができたら、それが最高の死に方だろうなあ。

ここ数年で、遠縁のおじさん、おばさんたちは、たくさん亡くなった。皆 80 から 90 くらいの年齢だから決して早死にではない。父方のおじさんやおばさんのことは母から聞いてある程度知っているが、父方の従兄弟姉妹たちが今何をしているのか、従兄弟姉妹たちの子供たちが何をしているのかは、母も詳しくは知らないみたいだった。従兄弟姉妹なんてそんなもの、兄弟だって他人の始まりだというし、まして従兄弟姉妹なんて、親しい従兄弟姉妹でもない限りは疎遠になって行くの

だ。

俺は離れて暮らしているので、もうおじさんやおばさん、従兄弟姉妹たちと一生会う事すらないのかもしれない。それはそれでいいと思う。檀一雄原作の『火宅の人』という映画で、緒形拳と松坂慶子が別れる場面。「駅で別れるなんて嫌だ」と彼女がいう場面が今でも忘れられない。人は知らないうちに別れるのが一番いい。大げさな場所だと余計に悲しくなるのである。もう学生時代の同級生とも一生会うことはないだろう。それでいいんだと思う。

しかし、母や弟とは死ぬまで同体である。これまで俺がここまで生きてこれたのは母と弟のおかげで、母と弟には幸せになってもらわなくてはならない。

母や弟を不幸にしたくない、心労をかけたくない。それが俺の祈りになってきた。これは俺にとっての大きな成長である。若い頃は家族のことなんて考えているゆとりはなかった。感謝はしていても、一番言いたい放題言えるのも母だったから、つい甘えていた。しかし、今は母のことを心配している。もう母は 80 歳だ。余生を幸せに生きて欲しい。

母は死ぬことは怖がっていないようだ。「死んでから先のことを考えるんじゃなくて、生きている間をちゃんと生きていればいいのよ」と母は言った。

翌日は、お昼から豆腐のフルコース。これは俺のおごりだった。小さな和室の掘り炬燵で、3 人でフルコースを品よく食べるのは格別なものがあった。母や弟にひとときの幸せを感じてもらえるのが嬉しかった。

これからは年に３、４回は里帰りしようと思った。俺ももう 50 代半ばだ。自分のしたいことばかり追い求める年齢は終わって来たように感じるのだ。この頃、何をするにも昔ほどのワクワク感がない。昔は映画を見るために大阪や神戸までしょっちゅう行っていた。しかし、いまは京都市内の映画館でも億劫で行く気にならないことが度々である。スポーツクラブも、無理してまでいかない、余裕があるときだけと割り切るようになった。これでいいのかもしれない。自分の体力や気力を考えて、自分のできる範囲のことをしていく。これからはそういう年代に入りつつあるのかもしれないのだ。

とは言うものの、まだ 50 代半ば、先は長い。なんらかの希望や楽しみは持たなくては、余生がつまらないだろう。さあ、これから何を始めようか。

4. メタボからの脱却

1 年ぶりにミニドッグを受けた。なんと体重が 1 年前よりも 12 キロ減り、93 センチあった腹囲が 84 センチになっていた。先生に尋ねると 85 センチ以下はメタボではないとのことで、ついにメタボ脱却である。看護師さんも、去年の記録と比べて、「頑張られましたね」と微笑んでくれた。

とは言うものの、俺は相当普段薬を飲んでいる。心療内科の薬の他に、中性脂肪を落とす薬やコレステロールを落とす薬などを処方してもらって、毎日飲んでいる。最近は便秘にも悩まされるようになり、便秘薬も加わった。正常眼圧緑内障なので、目薬も毎日ささなくてはならない。

これらの薬は治るまでではなく、永久的に服用していかなくてはならないのだ。50 代の

半ばになれば、これくらい薬漬けになるのは仕方がないのかもしれない。今は 100 円ショップに薬を 1 回分ずつ分けていれる容器が売っていて、母はこれを使って、1 日 3 回の薬を忘れないように分けている。俺も刻々と身体は老化しているのである。

しかし、マッサージの人からは、「昔に比べるとだいぶかっこいいカラダになりましたよ」と言われた。彼には 6 年前からマッサージしてもらっているが、ちょうど 6 年前に一度はダイエットに成功して、いまと同じくらいまで体重が落ちた。そのあと徐々にリバウンドしたのだが、彼に言わせれば、6 年前痩せたときの体よりも今の方がかっこいいとのことだ。この 6 年の間に筋トレも多少はしたので、ただ痩せるだけではなく、筋肉のある体になって来た。あと 5 年で還暦を迎えるおじさんとしては上出来である。

メタボ脱却に成功！と Facebook に書くと、30 人以上の人からいいね！が入った。コメントもいくつか入って、お祝いに食事に行こう！というものもあった。結構、俺と付き合いたいと思ってくれている人はいるみたいだ。いまの俺は決して孤独ではないのである。

5.『万引き家族』（是枝裕和監督・2018）

母は幸せそうだし、かつては不肖の息子だった俺も、今は自慢の息子だと言ってくれている。弟は昔から親思いの孝行息子だ。母は自分の人生に悔いはないみたいだが、ただ、弟も俺も独身で、自分が死んだ後老後が寂しいのではないかとそのことだけが気がかりみたいだ。弟はこれから結婚するチャンスもあるだろう。しかし、俺はない。女性恐怖症が抜けないし、弟も「お兄ちゃんは家族は持たない方がいいよ」とポツンと言った。「あんたは合わせられないだろうから」。その通りだった。

昔、俺が好きだった映画評論家に南俊子さんという人がいらしたのだが、彼女ふうの言い方をすれば、『万引き家族』は、「世評、喧しい映画」である。カンヌのパルムドールをとったので、映画館は満席。日本の批評家からの評価もほぼ絶賛に染まっている。しかし、是枝監督の映画は、観る前から大体は読めてしまっている。いつだって、テーマは家族である。今回のこの映画に関していえば、アウトローな家族を中心にしていて、伝統的な家族はもう機能しないから、違った形の家族を模索していくという是枝監督の一貫したテーマで、家族を持てない俺にはどうにも抵抗を感じる部分が出てくる。

この映画、家族の中心となるのがリリー・フランキーと安藤サクラの夫婦であり、それに樹木希林のおばあちゃんが絡み、子供が絡む。また安藤サクラの妹で松岡茉優が出てくる。従って、普通の家族の枠組は全然外れていない。カップルと子供、世代の違うおばあちゃんや妹みたいな家族にしなくても、もっと大幅に従来の家族とは外れた疑似家族を作れないものだろうか。

俺は以前、男性グループの頃知り合った男性のところに、週に 1 度、ご飯を食べに行っていた。これは料理教室と銘打って、数人が集まり、一緒に食事を作って、食卓を囲んで無駄話をする。当時のメンバーは、中心となっている社会運動家のおじさん、当時彼の手伝いをしていた女性、彼女の別れた旦那との間の子供 2 人、元公務員で今は定年退職して

趣味に生きている近所のおじさん、ロースクールの学生で当時３０くらいだったお兄さん、他にも何人かその時その時で集まることもあった。確かに擬似家族という言い方もできたし、普段外食ばかりで、家族団欒で食事をすることのない俺には楽しい面もあった。

しかし、このグループはそのうち自然消滅となり、しかもそのうちの何人かは今となっては憎しみあっている。そんなわけで、血の繋がりもなく、仕事の繋がりもなく、法律上も繋がっていない人々が共同生活するのは絵に描いたように行くものではない。何の拘束もないから空中分解になってしまう可能性が高いのである。

俺だったら、将来はマンションを１軒買って、そのうちの一部屋を客室にして、友人や過去の教え子などが京都に来た時に泊まってくれるスペースにしたいと思っている。確かに一人の老後は孤独だろうから、こういうひと時の居場所を提供することができれば、それも紛れるのではないか。もちろん、これは夢だが、実現すればいいなあと半ば本気で思っている。

俺は里帰りしていた２日間、家族の愛に包まれながらも、母と弟と３人で過ごすのもしんどかった。家族がいると、素っ裸で部屋の中を歩き回ることはできない。俺は超暑がりだが、家族のことを考えればエアコンをガンガン入れることもできない。トイレに行くときも汚さないように気をつけなくてはならない。何事も自分のペースではできなくなるのだ。

『誰も知らない』『そして父になる』『海よりもまだ深く』など、是枝監督の映画は嫌いではないが、是枝監督が提示する家族は、俺みたいな人向けの家族ではないのである。今度は俺みたいな人を主人公にして映画を作ってくれれば、嬉しいのだけど（笑）。

将来の心配しないで出ておいで

世の中しんどいことばかりじゃない、はず。

三嶋あゆみ

援助職のリカバリー

《27》

～「セックスレス」に立ち向かう(8)～

袴田　洋子

「今時のアラフィフの女性たちって、セックスレスの人が多いのかな、やっぱり」

香は、ぼんやり天井を見つめながら独り言のようにつぶやくと、隣で寝ている達夫に顔を向けて、ここ最近の京子とのやりとりを話し始めた。達夫は、かすかな微笑を浮かべながら、香が話すのをどことなく嬉しそうに聞いていた。

「多いか少ないかはわからないけど、少なくとも僕は、30 歳過ぎた頃には、妻とは、レスになっちゃってたからなぁ」

達夫の言葉を聞きながら、香は、達夫と付き合い始めた頃をかすかに思い出せたような感覚になった。達夫と逢うようになってから、もう 25 年経っている。あっという間だったようにも思えるし、そうでないようにも思える。家事と育児と仕事のあいまの「時間」を作ってきた 25 年。正直に言うと、たまに、その「時間」を作ることが、億劫に感じるようにもなってきた。自分もトシをとったのか、とも思う。

でも、この「時間」を作ることは、自分にとって、生きていくためのエネルギーの源だ。この「時間」があるからこそ、夫との家庭生活を継続できているのだ。それは、はっきりと言える。

香は、大学卒業後、薬剤師ではなく一般職で、食品会社に就職した。達夫は、その取引相手の営業だった。香よりも 9 歳年上だったが、彫りの深い顔立ちと筋肉質な体型のおかげで、実際の年齢よりも若く見えた。会社同士の飲み会に誘われ、そこで初めて達夫と会った。何度か飲み会で顔を合わせるうちに、告

白された。妻子持ちだということは知っていたが、好みのタイプだった。「彼氏」は、大学時代を最後に、長らく居ない状態。なんとなく寂しい気持ちがしないでもない。深く考えずに、お互い楽しくやっていければ、いいんじゃないか。

そんな程度に始めた関係だったのが、今や 25 年、である。その間、香も結婚し、妊活し、妊娠し、出産、退職。育児真っ只中の時は、数年、会っていなかったけれど、関係は切れなかった。まるで、夫が二人いるような感じだ。

達夫は、妻と別居しているが、達夫の妻は、離婚する気はないらしい。不倫しているのを妻が知っているのかわからないが、達夫は、あまり気にしていない。妻や子どものことを尋ねると、「心配ないよ」と言って、香には、あまり話そうとしない。まぁ、話されても困るけれど。

香の夫は、自営業である。親の代から続く仏具屋で、香も店を手伝うことがしばしばある。最近は、仏具のミニサイズ化が進み、大型で高価なものは滅多に売れなくなった。これからの子どもの学費だなんだを考えると、夫の収入だけでは、ちょっと余裕がない。ということで、香は、初めて薬剤師として働くことにした。

家事を済ませ、子どもの用事を済ませ、薬局の仕事を済ませ、仏具屋の仕事を済ませ、「時間」を作る。ただし、その「時間」は、公には無いものとして扱われなければならない。が、その架空の時間を作ることは、容易ではない。「大学時代の先輩の家に遊びに行ってくる」が、どこまで夫に信用されているのか、想像すると、もやりと黒色の不安じみたものが広がる。でも、やめられない。この刺激は、手放せない。そう、これは、依存症と言えるような気がする。年明けに、大学時代のクラブの同窓会があり、30 年ぶりに友人たちと再会した。その中の一人、夏子は、香のすぐ近くに住んでいた。しかも、香と同じくらいの映画好きだ。「夏子と映画を観た後、ランチしてくる」も架空の時間にできそうだ。

達夫は、今、賃貸マンションに一人で住んでいた。今年、59 歳になる達夫にとって、香が来訪する時間は、幸福そのものだ。一人でいることの寂しさには、とっくに慣れてはいるが、昨年、急性虫垂炎で緊急手術をした時は、さすがに一人の心細さを感じた。香が入院手続きなど、身の回りのことはしてくれて何とかなったが、その後、ストレスのためか、年齢のためか、体調を崩すことが

多くなった。
　不安に駆られると、うつっぽくなってしまう。香にLINEを送る回数も増える。達夫と違って、香は家庭があるから、頻繁なやりとりは危険である。香に迷惑は絶対にかけたくない。そう思えば思うほど、香と共に過ごす時間は、達夫にとっても、なくてはならない時間のように思えた。
　いつまでこの関係を続けられるか、わからない。行為の最中に、萎えてしまうことも増えた。肉体関係がなければ、香と会うことはなくなるのだろうか。悦びの中に常にある不安。全く逆の感情が、常に同居することへの中毒的な感覚。不倫は、依存症の一種だと誰かが言っていた気がする。多分、本当だ。

　玄関のチャイムが鳴り、ドアを開けると、黄色い薄手のブラウスにベージュのコットンリネンのスカート姿の香が立っていた。
「お腹空いたから、お寿司買ってきたよ」
「寿司もいいけど、香を食べたい」
　59歳で、こんなセリフを言える色気があるって、すごい。でも、まぁ、言われて悪い気はしないかな。
　こんな関係を25年も続けてきて、最近、自分の夫の見方が変わったように思う。実家を継いで、仏具屋の経営を維持して、きちんと稼いで、生活させてもらえている。これって、すごいことだ。夫に感謝しなくちゃ、と思う。だから、墓場まで持って行く。

★★周旋家日記２４★★
「シティズンシップについて考える②ー学生と町内会」

乾明紀

１．はじめに

前回に引き続き、町内会をテーマに日記を書くことにしよう。筆者が担当する初年次必修科目「シチズンシップ」では、学生に町内会について考えてもらう機会がある。このマガジンでも何度か紹介しているが、この授業は知識伝達型ではないのが特徴だ（乾,2017）[1]。出生前診断の是非、原発再稼働の是非、消費税増税の是非、9 条改正の是非、そして、町内会の入会是非という問答（論争的問題）を通じて学生のシティズンシップを高めていくことがこの授業のねらいである。

町内会の入会是非を考えるパートでは、「あなたは、今、住んでいる地域の自治会・町内会に加入しないかと誘われたら、加入しますか？」という問いを通じて、町内会や住民自治について考えてもらった。本稿では、この授業の取組みによって、学生の町内会意識がどのように変化したのかを紹介することとしたい。

2. 先行調査から見る学生と町内会の関係

学生による商店街の活性化やまちおこし活動についての研究は数多くあるが、学生と町内会との関わりについての研究は、管見の限り僅かしかない。単身で生活する学生と町内会との関係を明らかにした清水・中山（2009）[2]の研究や町内会など身近な地域から「してもらった」経験がコミュニティ意識を高めることを明らかにした乾他（2018）[3]の研究など少数である。

清水・中山は、奈良市中心部の町内会長 78 名と所属大学の下宿生 101 名などにアンケートを実施し、以下の 5 つを明らかにした。

① 町内会と学生はほとんど接点を持っていない（町内会長の 43.4%が学生を「地域の一員と思わない」と回答。地域活動に参加した学生は 7.8%だが、地域活動に参加をしたい学生は 50.2%）。
② 学生が町内会に加入する機会がほとんど設けられていない（下宿をしている学生の 86.8%が町内会への加入を「勧められなかった」と回答。 町内会への非加入率は 87.5%）。
③ 町内会長と学生の意らの識に違いが見られた（学生は「ゴミの出し方」などに気をつけていると回答しているが、町内会長は「ゴミの出し方」などに改善を要望しており、相互のコミュニケーションが不足）。
④ 町内会への加入と地域への意識に関連が見られた（町内会に加入している学生は地域への意識が高い）。
⑤ 大学に学生への生活ルールの指導が期待されている（町内会長の 78.2%が大学に期待）。

---

[1] 乾明紀・高野拓樹（2018）論争的問題を導入した主権者教育の試み－2016 年度 京都光華女子大学初年次必修科目「シチズンシップ」の取組み－. 京都光華女子大学・京都光華女子大学短期大学部研究紀要 (55) 11-20

[2] 清水陽子・中山徹（2009）単身で生活する大学生と町内会を単位とする地域コミュニティとの関係－奈良市中心市街地の場合－.日本家政学会誌 60(5) 499-509

[3] 乾明紀・高野拓樹・朝倉眞一・三木俊和・加藤千恵（2018）論争的問題の検討によるシティズンシップ教育とコミュニティ意識の変化. 日本コミュニティ心理学会 第 21 回大会 大会プログラム・発表論文集 52－53

この研究が示すように学生の町内会加入率は決して高くない。また、町内会側も大学生を加入対象者だとは見ていないことがわかる。近年、学生に町内会加入を促す自治会（例えば京都市[4]）もあるが、熱心に勧誘活動を行っている町内会は稀である。別の科目で学生が調査した町内会長のほとんどが、引き継いだ事業をこなすのが精一杯で、学生を勧誘する余裕はなかった。このような先行調査からは、町内会と学生をつなぐ仕組みの必要性が見えてくる。

３．町内会加入の是非

現行の町内会については、肯定的な立場と懐疑的な立場が存在する。

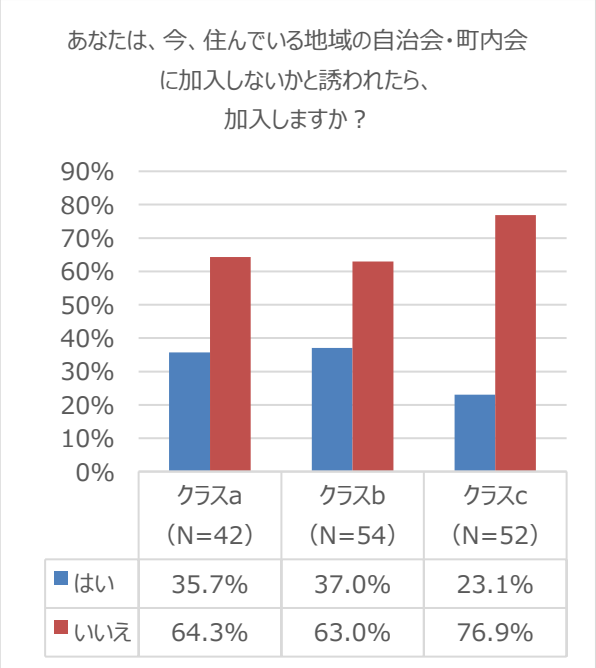
肯定的立場である中田（2007）[5]は、町内会があることで、様々な地域課題に対応することができ、相互扶助機能が維持されてきたと主張する。また、阪神・淡路大震災において、生き埋めや閉じ込められた際の救助者のほとんどが、救助隊（公助）によるものではなく、自力や家族（自助）、友人や近隣住民（共助）によるものだったことから（日本火災学会，1995）[6]、町内会の防災機能に期待する自治体も多い。

対して、吉原（2013）[7]は、町内会は災害時に必ずしも有効的に機能しなかったと指摘する。また、紙屋（2017）[8]は、現在の町内会にある負担感や強制性は、不要な事業を多く抱えているからであり、これからの町内会は、事業をスリム化し、有志だけで組織すべきだと主張する。

朝日新聞デジタルが WEB 上で実施したアンケート[9]では、「必要」・「どちらかといえば必要」が45.1％、「不要」・「どちらかといえば不要」が49.4%と均衡している。現代人にとって、町内会は賛否両論ある組織であるといえる。

４．授業による学生の町内会入会意識の変化

では、学生の意識はどうであろうか。筆者が担当した３クラスで尋ねてみたところ、授業冒頭の回答は以下（図１）であった。クラス c の結果は、筆者の想定どおりであったが、クラス a・b は加入に前向きな学生が想定よりやや多く 3 割を超えた（規範的に回答した学生もいるのかもしれないが･･･）。



	クラスa（N=42）	クラスb（N=54）	クラスc（N=52）
はい	35.7%	37.0%	23.1%
いいえ	64.3%	63.0%	76.9%

図１●学生の町内会加入意識（授業冒頭）

[4]http://www.city.kyoto.lg.jp/bunshi/page/0000196570.html

[5] 中田実（2007）「新版 地域分権時代の町内会・自治会」自治体研究社

[6] 日本火災学会編「1995 年兵庫県南部地震における火災に関する調査報告書」

[7] 吉原直樹（2013）「ポスト 3・11 の地層からコミュニティを再考する」．伊豫谷登士翁・齋藤純一・吉原直樹『コミュニティを再考する』平凡社

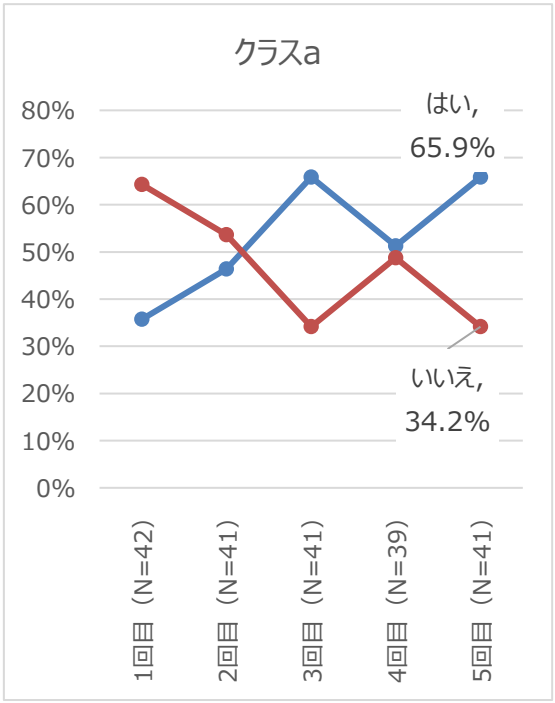
[8] 紙屋高雪（2017）「どこまでやるか、町内会」ポプラ社

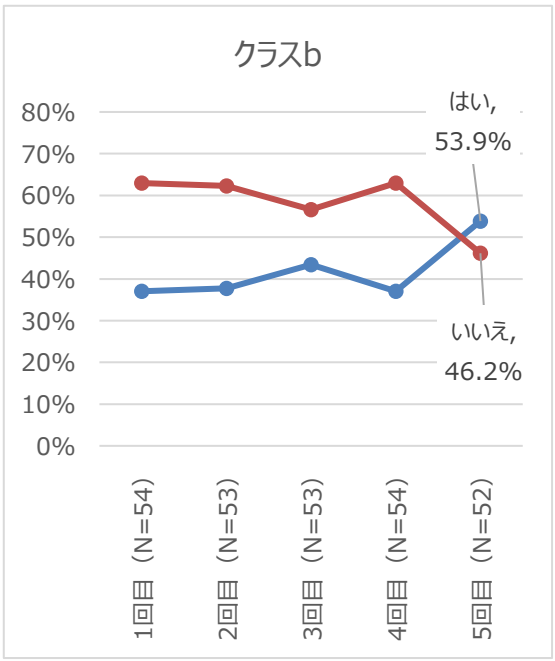
[9]https://www.asahi.com/opinion/forum/013/

その後、次ページの「～授業の進め方（主な内容）～」に示した内容で授業を展開しながら加入是非について尋ねてみたところ、学生の意見は図２のように変化した。各クラスによって途中経過は異なるが、なんと全てのクラスで「はい」と「いいえ」が逆転した。

学生の意見変化が最も大きかったのは 5 回目の質問時だが、その前段の授業内容から町内会が持つ３つの役割（地域課題解決・地域代表性・親睦交流）への理解が進み、さらに町内会が消滅したときの弊害を考えることで、自らの生活に町内会の必要性を感じられるようになったのではないだろうか。

また、質問 3 回目の変化も大きいが、この直前には、阪神・淡路大震災時の「共助」による救助事例などを提示しながら災害時の助け合いについて考えてもらった。学生は、この授業の約一か月前に発生した大阪北部地震での体験も含めて、町内会への入会メリットを具体的にイメージできたのかもしれない。





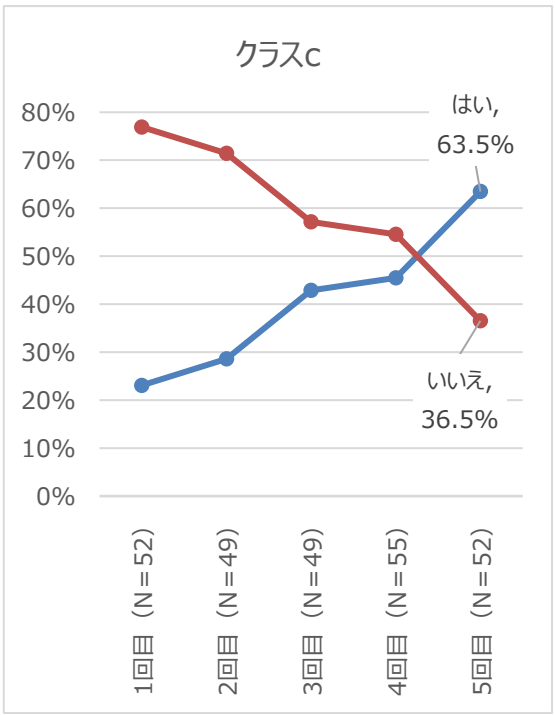


図２●学生の町内会加入意識の変化

～授業の進め方（主な内容）～

【１講目】

★1 回目の質問

（1）自治会・町内会の主な活動（環境美化、住民相互の連絡など）紹介

（2）自治会・町内会の抱える課題（仕事量の増加、担い手不足など）紹介

（3）新潟小学生女児殺害事件と「見守り隊」の人員不足を紹介

★2 回目の質問

（4）④阪神・淡路大震災の救助割合（自力で脱出できなかった人の約 28%は、友人・隣人が救助）紹介

（5）災害に備えての名簿作成と町内会加入の是非を検討

★3 回目の質問

（6）授業のリフレクションシート記入

【２講目】

（7）質問結果と前回のリフレクション内容の紹介

★4 回目の質問

（8）身近な公園の維持管理のあり方を検討

（9）町内会などによる子ども食堂や高齢者の居場所づくりの取組み紹介

（10）町内会の役割（地域課題解決・地域代表性・親睦交流）とその変化を紹介

（11）町内会が無くなった場合の地域社会について意見交換

（12）大阪府北部地震時の自主防災活動（茨木市郡山小学校区）紹介

（13）課題解決に向けた先進的な取組（兵庫県丹波市山王自治会・鹿児島県鹿屋市柳谷町内会・東京都立川市大山自治会）

（14）町内会の今後として「３つの選択肢」を提示

① 自治会・町内会の３つの役割（親睦交流・地域課題解決・地域代表性）が、今後も維持されるように活動する

② 活動（参加・加入）できる人たちが、できる範囲で、地域に必要な活動をする

③ 自治会を解散する

(15)解散した自治会（東京都調布市の「杉森自治会」）紹介

(16)町内会に変わる地域自主組織（島根県雲南市）紹介

(17)(14)に示した３つの選択肢の中から、これからの町内会のあり方を検討（結果は図 3）

★5 回目の質問

(18)授業のリフレクションシート記入

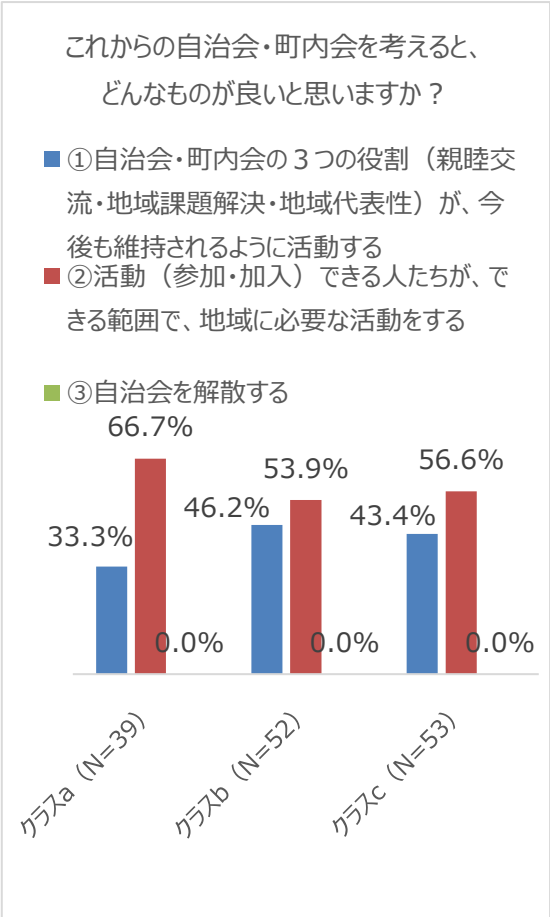


図３●学生が考えるこれからの自治会の役割

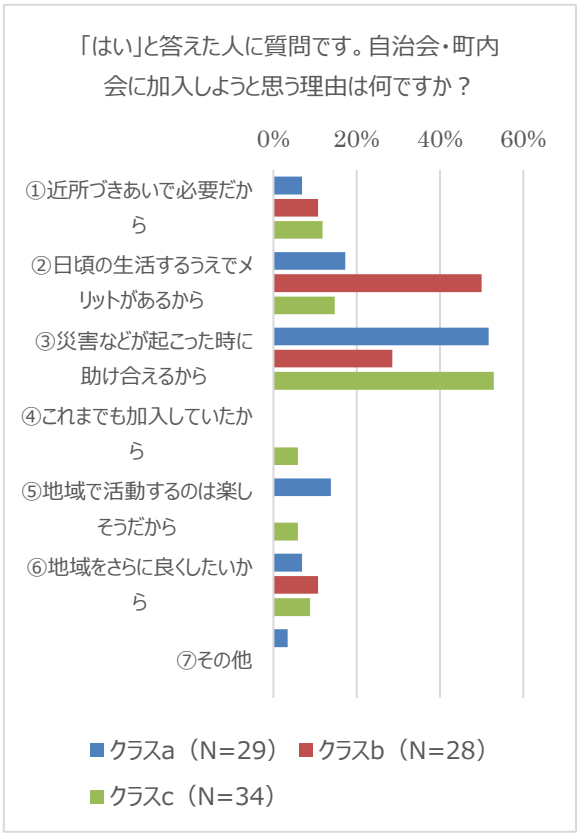
５．学生を地域の一員として、町内会に迎えるためには

今回の調査を通じて、町内会への入会に前向きな学生は、潜在的に 2～3 割存在することがわかった（図１）。また、90 分×2 回の授業であったが、町内会について考えてもらうことで、その人数は倍増したということである（図２）。これらの人数は、町内会の活性化を考える人々にとって、勇気の出るものではないだろうか。

入会理由で最も多かったのは、クラス b は生活上のメリットで、クラス a･c は災害時の助け合いであった(図４)。大阪府北部地震の影響もあるだろうが、これらの機能が理解できるよう学生に伝えていくことができれば、学生を地域の一員として、町内会に迎えることができるのではないだろうか。大切なことは、町内会（地域）と学生のコミュニケーションとそれを通じた相互理解の深化であろう。

今後はこれらのデータを参考にしながら、学生と町内会をつなぐ具体的なマッティングの機会を検討していきたい。

日記はつづく



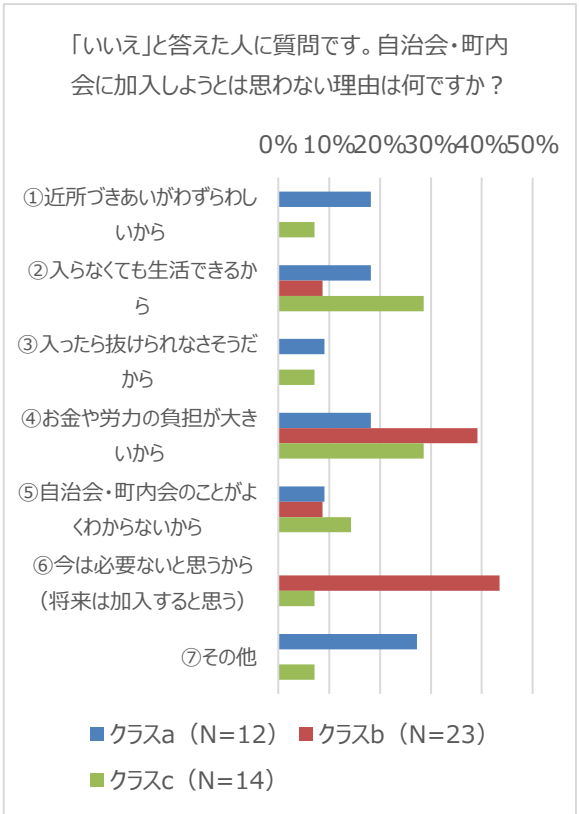


図４●学生の町内会入会是非の選択理

役場の対人援助論

（２５）

岡崎　正明

（広島市）

対人援助職、帰宅困難者になる

2018年7月6日

その日は朝から雨だった。

数日前から降ったり止んだりで、空気は常に湿っていた。天気予報では「記録的な雨になるおそれ」と恐ろしげな予告も繰り返され、みんなそれなりに構えてはいた。しかしいざ事が起こらないと結局その打開もできないという当たり前の中、私たちは思ってもみなかった事態に混乱し、ショックを受け、右往左往した。

「こんなことになるとは」「まさか」なんてことがない人生はないし、「家族にはいろいろなことが起こる」とは本誌の団編集長の言葉だ。まさにその通り。

分かって聞いていたつもりだった。しかし、本当のところでは分かっていなかったのかもしれない。気がつけば私は「まさか」とバカのひとつ覚えのようにつぶやいていた。たかが４０年程度の経験でしか先をイメージできず、渦中の真っ只中にどっぷり浸かってからようやく「これってもしかしてヤバい？」となった。私がアリなら、アリジゴクと目が合う頃になってようやく事の重大さに気づく、そんな間抜けな個体だろう。

だがおそらく、多くの人が私と似たり寄ったりだったように思う。なぜならあの日、私は自分と同じような様子の人にたくさん出会った。みんな私と同様途方に暮れていた。便利になった世の中は、それが機能しなくなった途端、ひどい副作用をもたらすものらしい。

今回の役場の対人援助論では、７月の西日本豪雨災害で私自身が体験し見聞きした、日常がいつの間にか災害場面になる瞬間や、帰宅困難者として感じた思いなどを記録させてもらいたいと思う。

災害場面で対人援助職に何ができるのか、どんなことをイメージしておけばよいのか。その手掛かりの一助となるような記録になることを願って。

いつもの帰り道

職場を出た時はまだ日常だった。17：45 に妻へ「今から帰る」とメール。天気予報をチェックして、日曜に約束した友人家族との釣りには行けるかな？なんて、のんきに考えていた。

いつもなら都市高速を使って 30 分程度の帰り道。雨の週末ということもあって、多少の渋滞は覚悟していたが、それにしても前が進まない。高速も大行列。待つのが嫌いな私は、普段は使わない迂回路へ進んだ。海にかかる橋の上は、雨で川のようになりつつあった。水しぶきを大量にあげながら、私の車も対向車も進んでいた。広島と呉を結ぶ国道 31 号線へ出たが、そこも大渋滞だった。

坂駅前で車はほとんど動かなくなった。職場を出て 1 時間。雨は相変わらず強く、ニュースでは「九州北部に特別警報が出ました」と伝えていた。

この時点でも私にはあまり危機感がなかった。ただ、早く高い所に行こうとは思った。この辺りはもともと埋め立てだ。大きな川は記憶に無いが、それでも万が一の浸水が怖いと思った。1 番安全と思える有料道路を通り、自宅へ帰ろうと考えていた。

さらに 1 時間ほどかけてようやく自宅につながる矢野の住宅街まで来た。この頃から消防や警察の緊急車両がひっきりなしに通り始めた。高台の坂道には、どこから流れてきたのか土砂や折れた枝が転がり始め、それは上に進むほど増えていく。私はようやく「これはちょっと今までと違うぞ…」と感じ始めた。

迷いながらも空腹とトイレのことが頭をよぎり、行列を抜けて目の前に現れたコンビニへ。駐車場はいつもの倍以上の車でひしめきあっていたが、運よく空いたスペースが見つけられた。中に入るとすでにおにぎりは売り切れだったが麺類は残っていた。トイレを済ませ、パスタとお茶などを買って車でテレビを見ながら食べた。隣に停めた車の夫婦もずっと車内におり、私と似たような状況に思われた。長時間駐車で店員から注意されないか心配もしたが、同じような車だらけのためか、声をかけられることはなかった。

家族にメールすると、自宅のある町への道はすべて通行止めになったとのこと。また町内では住宅を巻き込む土砂崩れも起きていると。テレビではついさっき車で走っていた坂駅前が冠水した様子が映し出され、私はここに至ってようやく、今がただ事では無いことを理解した。

職場に戻ることも考えたが、市内に戻る道もまったく動かない。そもそもどの道が安全かも分からない。私はここで車中泊することにした。というか、それ以外の選択肢が見当たらなかった。

しかし振り返ってみると、この時点では正直、まだ本当の意味での深刻さというか、困り感は低かった。もちろん怖いとも感じていたが、不謹慎を覚悟で告白すれば、それと同時に変な高揚感があった。久々に車中泊することや、テレビに見知った場所が繰り返し映し出される非日常に興奮していたように思う。「よし、やったるぞ！」みたいな気概に満ちていた。

あとから考えれば、あれは体が危険を察知してアドレナリンが出ていたのだろう。その反動のため、翌日からどっと疲れが出た。気分も落ち込んで、しばらく立ち直るのに苦労した。

22 時を過ぎ、私はシートを倒して横になった。今起きていてもどうしようないし何もできない。気持ちは落ち着かないが、ここは早めに休んで明日早朝から動けるようにしよう。

そう考えた。
　蒸し暑いのでエアコンをつけたいが、エンジンをつけっぱなしにするのは残りのガソリンや、店側への迷惑も考えるとためらわれた。１～２時間浅い眠りをしながら、時々エンジンをつけエアコンを入れてニュースをチェックする。外は尋常ではないほどの大雨と、何度も通る緊急車両のサイレン音。車内では携帯からエリアメールが繰り返し鳴る。当然熟睡などできるはずもなく、朝５時にはこれ以上休むことを諦めた。３時間は眠れたかな、くらいの体調だった。

朝がきて

　ニュースと家族からのメールを見ながら、今後のことを考えた。ようやく雨は止んできたが、町への道が復旧する見通しは当面立ちそうもないという。
　「何はともあれ水分を確保しないと」
　「携帯の充電があと半分もないな」
　「食料は最悪お菓子でもなんでも口に放り込もう」
　「ガソリンもまだ半分以上あるが･･･大事に使わないと」
　まったく先の見えない状況で、あれこれと対応を考えた。どうする？どう動く？
　とりあえず万が一携帯の充電が切れた時のため、妻や両親などの連絡先をメモ書きした。

　コンビニ店内に入ると弁当・麺類・パンなどはすでになく、携帯の充電器も売り切れ。水とお茶も完売だが、ジュースやお菓子、インスタントラーメンなどはまだあった。何より身につまされたのがトイレの重要性。店内には男女１つずつトイレがあったが、昨晩からすでに行列ができるようになり、早朝からは常に並んで 10～15 分待たなくてはいけない。考えてみれば当然だ。トイレというものは老若男女誰もが平等に、数時間経つと必要になる代物なのだ。案の定コンビニに駐車している車だけでなく、周囲の道路で立ち往生している車から次々と利用者がやってきていた。
　トイレの列に並んでいると、車内のような一定のプライベートが確保できる空間と違い他人との距離が近い。いろんな物が目に入り、考えることも増える。数百メートル先の車から歩いてきたらしい高齢者。イライラした様子の男性。土地勘がなくて不安がっているグループ。知り合いの子どもに順番を譲る女性。行列の目の前にあるアダルト雑誌の表紙をポカンと見ている小学生、などなど。行列全体にジリジリした焦燥感みたいな空気が漂っている。「早くしてくれよ」頭の中で思わずつぶやく。
　その時だった。突然底知れぬ不安感に襲われた。「こういうのって TV で見た避難所の映像によくあるやつじゃ？」「これから私どうなるんだ？」。深刻な恐怖感が急に迫ってきた。

　トイレを終えてしばらくすると、交差点に警察官がいて数人が何か尋ねていた。私も出て行って他に帰れる道を聞いたが、「どこもダメ。このあたりよりひどい」とのこと。その場に集まった人々と、なんとなく会話になる。もちろんみんな知らない人だが、寄る辺なさを抱える者同士の連帯感か、自然に互いを気遣い、協力し合おうとする雰囲気が生まれる。
　「自分広島に来てまだ半年で、この辺の道に詳しくなくて…」「そりゃ不安ですねえ」
　「〇〇方面はこんな感じみたいです（スマホの画像を見せてくれる）」「こりゃひどいね」
　「エコノミー症候群気をつけてくださいね。自分マッサージ師なんで、どっか痛いところとかあったら言ってください」「食糧なら持ってるから。お腹すいたら言って。孫に持ってい

くはずだったんだけど」
　こんなやりとりが飛び交う。それだけで少し元気が出る。本当に助けを借りなくとも、「いざとなったらこんな風に言ってくれる人がいる」「困っているのは自分だけじゃない」と思うだけで、人は結構勇気づけられるものだ。

上手に助けてもらう

　帰宅困難者同士の会話で少し持ち直した私は、「とりあえず今自分にできることをしよう」と腹をくくった。分からない先のことでモヤモヤしていてもしょうがないと割り切れた。
　携帯の充電を優先事項の１番と決め、私は周辺の家を訪ね歩き、充電させてもらえないか聞くことにした。いまだに某元国営企業系のガラケーのため、すぐには見つからない予想はしていたが、何軒か回れば充電させてくれる家もあるだろうと考えたのだ。
　この時普段「対人援助」に関わるものとしての経験が、少しは役立ったように思う。見ず知らずの人に助けを求めるという、なかなかハードルの高い作業。大事なのは、相手が気持ちよくこちらを「助けよう」と思えるか否かだ。そのためにどういう伝え方が効果的か。その辺はある程度理解しているつもりだった。
　まず知らない中年男が訪ねることになるため、不審者と思われないように「お忙しいところ突然すみません。ちょっとよろしいですか？」とワンダウンポジションで丁寧に入る。次に「自分は今あそこで立ち往生しているたくさんの車の中の１人なのですが…」と出自をあきらかにし、ついで「自宅に帰る道が通れずに困っています。家族と連絡をとるために携帯が欠かせないのですが、その充電がなくなってきていまして」と理由を述べたうえで、「厚かましいお願いなのですが、可能であれば携帯の充電をさせてもらえませんでしょうか」と、明確に『何を』助けてほしいのかというオーダーを伝える。初対面に臆しないメンタルも必要だが、これも仕事で鍛えられていたように思う。
　結局７～８軒のお家を訪ねたが、どの家でも大変親切にしてもらえた。やはり人間、弱っている者を鞭打つようなことはできないもので、逆に「お水はあります？」「大変ですねえ。お腹すいてませんか？」などと聞いてくれた方もあり、その言葉だけでもとても助けられた思いがした。ちなみに充電の方はどこのお宅にも適合する機種の充電コードがなく、「そろそろ本気でスマホのことを考えねば…」と痛感するオチがついた。

　トボトボと歩いて車に戻りながら、私は「この先どうしよう。どうすればいいのだろう」と考えていた。いつまでもここにいるわけにはいかない。いずれ食べ物も飲み物も無くなってくる。ガソリンも携帯の充電も減っていく。そうなると、近くに開設された避難所に行ったほうがよいのか？そうすればトイレや食事の心配は回避されるかもしれない。しかしそれはどこにある？車で行って駐車場はある？仮に行けたとしても、じゃあいつまでそこにいる？いつ自宅に帰れ、家族に会える？着替えはどうする？そもそもこの町の住民じゃないけど、避難所は入れてくれるのか？
　様々な心配と不安が浮かんでは消え、考えるだけで気持ちが消耗していく。
　そんな時家族から「町につながる道が１つだけ通行可能になったようだ」との連絡が入った。まだどこのニュースにもなっていない、町内放送だけで知ることができた情報だった。

災害が起きて思うこと

以上がたかだか 20 時間に満たない、私の帰宅困難体験である。このあと普段なら車で 15 分の道を、3 時間かけて自宅に帰り着き、無事家族に会うことができた。しかし同じコンビニにいた帰宅困難者の中には、まだその先の道が通じていないために帰れない人もいたし、職場に戻ってそこでもう 1 日過ごしたという人もいた。

熊野町、坂町小屋浦、呉市天応、安芸区矢野東など、今回の災害で何度も全国ニュースに登場した地名は、私にとって普段の生活圏だった。珍しくもない日常の景色だった。通勤路も、遊びに行った山も、友人が住む団地もそこにあった。

幸い私の自宅も親族の誰も被害はなかったが、友人の中には妊娠中の妻が実家で浸水被害に遭い、翌日の夜にようやく救出されたという人もあった。別の知人からは避難所暮らしの苦労も聞いた。母の友人、職場の同僚の実家、同じ保育園の保護者の自宅など、すぐ身近に被害の話を聞いた。

「あの人と私を分けた違いはなんなのだろう」と答えのない問いが頭を巡り、被害がない自分が何だか申し訳なくすら思えてくる。東日本震災や戦争を生き残った方達の語りに、同じようなものがあったと聞いたことがある。私程度の体験でこれくらいだから、あの人たちはもっと大変だったのだろうと、乏しい想像力を働かせている。

災害から 1 カ月以上過ぎたが、相変わらず道路は復旧していない所も多く、至る所で普段なら起きない渋滞が発生し、正直うんざりする日々だ。ほかにも様々な生活上の影響があり、困ることも多い。しかし直接被害を受けた人のことを考え、とにかく今自分にできることをしようと立ち戻る、そんなことの繰り返しだ。

「まさかここで災害が起こるとは」。誰もがそう口にした。だが今回被害が出た場所は、明治頃には水害があった地域や、そのすぐご近所だった（そんなことも地元の人間なのに知らなかった）。人間の忘れっぽさを改めて理解しておく必要がある。地球規模で考えれば、200 年に 1 度の大雨なんて、よくあることなのだ。

私たちはどこにコンビニがあるとか、どこのスーパーが安いとか、「街」のことはよく知っているつもりである。しかしあきれるくらい自分の住む場所の「地理」を知らない。そのことを思い知らされた。近くを流れる川や、橋の名前を知らない人もざらだ。最低限生きていくための常識として、どんな地形の上で生活しているのかは、知っておくべき情報だろう。

これももう研究されていることだろうが、人はショッキングな出来事を経験した時、それをすぐにきちんと受け止めることは中々に難しい。現実感が伴わなかったり、過小評価して平気なふりをしたり、大きく動揺して思考停止したり。個人差によってもいろいろだが、向き合って消化するには時間がかかるものだ。そのことは知っておいて損はない。自らがそうなった時、自分を待ってやることができるようになるのだから。

体験や気持ちを話すことも大切だと感じた。信頼できる相手や似たような経験をした人に語る行為は、気持ちを整理することにつながる。このあたりでも対人援助職の活躍できる場面はあるように思う。

復興はまだまだこれからだが、少しずつ進んでいる。自分にできることの小ささに時に絶望的にもなるし、悲しい話もたくさん聞いたが、逆に助け合い、支え合おうとするイイ話もたくさん耳にした。私も自分のできることを、怠けず、無理せず、一歩ずつやっていこうと思っている。

臨床のきれはし Sheet 2

浅田 英輔

違う自分になる

なかなかタバコがやめられない。

去年は３ヶ月やめて、飲み会の席でも結構平気だったのだが、だいぶ酔っ払ってから一人で歩いて帰っているときに、ふらっとコンビニに寄ってタバコとライターを買ってしまった。久しぶりに吸ったタバコはうまかったが、それ以降はやめる前よりも本数が増えてしまった。

この間もちょうど買い置きがなくなったのでいい機会と思い１２時間くらいやめたが、結局買ってしまった。「１２時間でいばるの？」と思うのは最もだが、ヘビースモーカーが寝ているわけでもないのに１２時間吸わないというのはすごいことなのだ！

もうこうなったら、「これほどタバコが値上がりして、喫煙場所もどんどん狭くなっているのに吸い続けるという強固な意思の持ち主である」と考えることにしようと思う。他の人よりも多く税金を納めているのだし。３ヶ月やめたときは電子タバコ（ニコチンとかないやつ）を使ったのだが、またAmazonでぽちっとしてしまった。意思が弱い。

そう考えると、自分は意思が強いのか弱いのかよくわからなくなってくる。自分を表す言葉に「意思が強い人」というものがフィットするのかどうか。強い面もあるし、弱い面もある。

多くの人が、何かしらのコンプレックスを抱えていると思う。「いろいろあるけど、このままの自分でよい」と思える人はとても健康的だが、コンプレックスは向上心とも関連してくるだろうことを考えると、新しい自分を求めることは、概ねよいことであろう。

「自分を変えたい」という言い方はあまり聞かれなくなったが、日々悩んでいる人は多いのではないだろうか。

自分は意思が弱いとか、物事が続かない、だらしない、考え方がネガティヴだとか、人付き合いがうまくないとか。

臨床心理の世界では、その原因が幼少期の経験などにあると考えられてきた。愛着の問題だとか虐待やネグレクトなどの生育環境に、今おきている問題行動の原因があるだろう、などという考え方である。それはたぶん間違いではないし、幼少期に適切なかかわりをされなかったことが青年期、成人期においても影響し、社会生活がうまく行っていない人もいる。実際にクライエントである子どもに接していても、きちんとかかわってもらえなかっ

たんだろうなとか、もう少しこの子のこのへんにかかわってくれていたら違っていたかもしれないなと思う場面は多々ある。

しかし、多くの場合、特に中学生や高校生、または大人になってからでは、その原因を解消することはほぼできない。幼少期に戻ることはできないからだ。もちろん、原因解消に近いかかわりをすることはある。ただ、そこだけにフォーカスを当ててしまうと、行き詰まることも多い。おっぱいをあげることもできないし、抱っこして落ち着かせるわけにもいかないからだ。

でも、問題は起きるし、周りが困るのはもちろんだが、自覚しているかどうかは別にして問題を起こしている本人も困っていることが多い。そしてこれは「相談ケース」「問題のある人たち」の話ではなく、表面的には問題が起きていない多くの人にもいえる。

臨床心理に関わる人はもちろん、対人援助を職業としている人の中に、「相談に来るような人たちと自分は違う」と考えている人が少なからずいる。精神科に勤務する人が「自分は精神病の人とは違う、自分は精神病にならない」と思っている人がいるのと同じような感じだ。私は、そういう人は対人援助職として信用できないと考えている。

インターネットの中で「よい医者を見分けるには、『私に勧めているこの治療法を、あなたのお母さんにも勧めますか』と聞けばよい」という意見があったが、実際聞くことがよいかどうかは別にして、そういうことだと思う。精神的な病気にしろ、子どもが起こしている問題行動にしろ、自分や自分の子どもにも起こりうる、地続きのものなのである。

さて、そう考えると、自分の仕事の中でうまくいったことは、自分や友人などの問題にもうまくいく可能性があるのだ。

そこで、今日は「違う自分になること」を考えようと思う。

冒頭に書いたが、自分を変えるということは多くの人が考えているのではないかと思うし、まるまる違う自分にならなくとも、「自分のこういうところはかえたい、なおしたいな」と思う人は多いのではないだろうか。

自分を少しだけ変えるというのは、それほど難しいことでないのだ。思ったように変わるかどうかは別だが、少し変化を起こすことが、大きく変わることにつながっていく。以前かかわったケースでは、子どもの問題行動での相談なのだが、「次に相談にくるまでに、母が美容院にいくこと」を課題にしたことがある。もちろんかかわりはそれだけではないが、子どもの問題行動に直接手をつけていないのに、問題が問題でなくなっていった。少しだけの変化を試してみることで、全体が変わっていくということは時折起こる。そしてそれは、問題に直結していないことでもよいのだ。もしかしたら大して変化しないかもしれないし、問題は変わらないかもしれない。でも、「美容院に行ったから子どもの問題行動が悪化した」ということは起きないだろうと想像できる。何かを変えないと、問題の循環は変わらないのだ。

そう考えると、「違う自分になりたいなら」「自分を少し変えたいなら」いつもと違うことをしてみる、ということが実はとても重要なのだ。そしてそれはそんなに難しいことではない。難しいことをする必要はない。

職場からの帰り道を、いつもと違うルートにしてみる。

電車の中でスマホをいじらず、外の景色をみるようにする。
重い物を買う予定がないから、車ではなく歩いて買い物に行ってみる。
このジャンルの音楽は好まないけど、試しに聞いてみる。
一人で居酒屋に入ってみる。
隣の席の人をランチに誘ってみる。
帰ったら、腰を下ろす前に掃除機をかけてみる。
子どもを夫にあずけて同窓会に行ってみる。
いつもと違う床屋に行ってみる。
一人でソフトクリームを食べる。
出張のときに高いホテルに泊まってみる。
ネットの動画を使ってヨガをしてみる。
唐揚げにマヨネーズをかけてみる。
いつも選ばない味のアイスを食べてみる。
ゲームではいつも戦士を選ぶが、僧侶を選んでみる。
子どもに「宿題しなさい」と言わないでみる。
職場で使うマウスを自分で買ってみる。

なんでもいいから、ほんのちょっとしたことを始めて、少しだけ続けてみよう。できるかぎり「やりたいこと」「やってみたかったこと」「やってていい気分になるもの」をやろう。楽しくなかったら、やめればいいのだ。

困りごとや自信のなさなどを一発で変えてくれる方法があるにこしたことはないが、そんなものはないし、あったとしても一時的な効果しかない。困りごとが起きたときには、その解決を目指すとともに、解決できないときにうまく対応していくことが重要になる。日々発生する様々なストレスにうまく対応することが、自信や心地よさにつながるのではないだろうか。

「ストレスコーピング」という言葉がある。ストレス対処法という意味だ。その例には「深呼吸をする」とか「水を飲む」とか「１０数える」など、「本当にそれ意味あるの？」と思いたくなる簡単なものがある。深呼吸をするだけで全てのストレスが解消されるのであれば、人生はなんと楽なものであろう。

しかし、こういった、いわば「チンケな」ストレスコーピングをたくさん持っていることはとても大事なことなのだ。深呼吸したからといってイライラがゼロにはならないが、１０あったイライラが７ぐらいにはなるかもしれない。そうすると、前向きな対処法も思いつけるようになる。うまく対処できると、いい自分でいられる時間が増えることになる。ストレス耐性や自信などは、小さなものの積み重ねなのだ。そしてそれを「イライラしたとき」ではなく、元気なときにやってみるとよりいいのではないだろうか。

少しだけ「いつもの自分と違う」ことをやってみる。続けてみる。それがいい自分になる、自分のことが好きになる第一歩なのだと思う。

タバコを吸い続けながら「自分はなんと意思の強い人間だ」と思っているうちに、本当に意思が強いひとになってしまうかもしれない！

ちょこっとだけいつもと違うことをしてみよう。（タバコやめろ）

統計的過誤

新版Ｋ式発達検査をめぐって　その㉔

大谷　多加志

執筆者短信にも書きましたが、いろいろなことに手が取られて、今号のマガジンの執筆に十分な時間がかけられなかったように思います。時間をかければ必ずよいものができるというわけではないのですが、今ひとつやりたいのかどうかわからないことに時間と労力を取られている感覚は、どうにもやりきれません。

しかしながら、転んでただで起きるのはなんとなく腹が立ちますので、試験勉強の合間に、K 式について浮かんできた考えをつなぎ合わせて、まとめてみようと思います。今回テーマにするのは、これまでにも何度か取り上げてきた、「検査項目と子どもの能力の関連」についてです。

『～の項目が通過なら、どのような能力があると言えるか』、『～の項目はどのような能力を測定しているのか』という質問は、研修会などで何度も受けてきた質問です。子どもの反応は、知的発達の水準だけでなく、興味や意欲、注意などさまざまな要素の影響を受けますので、検査項目の通過・不通過と何らかの能力の有無を単純化して結びつけることはできないと考え、質問者の方の意図を踏まえた上で、なるべく最善と思える回答をするように心がけてきたつもりです。しかしながら、これがベストと思える答えができているわけでもなく、『なぜこれほど同じ質問が繰り返されるのか？』という疑問や、この問題をもう一段クリアに整理するための視点を持てていないという感覚もありました。

今回、この問題を整理、理解するのに役立ちそうと思ったのが「第一種の過誤」、「第二種の過誤」です。

Type Ⅰ error / Type Ⅱ error

「第一種の過誤」、「第二種の過誤」というのは統計的仮説検定において用いられる用語で、仮説検証における誤り（過誤）の種類を表しています。

これまでにも何度か使ってきた例ですが、学校のテストを例にして考えてみます。例えばある中学校での英語のテストに関して、1 組は平均点が 50 点、2 組は平均点が 53 点であったとします。この時、1 組と 2 組の英語の学力に差があるといえるのか、それとも差はなくて誤差の範囲なのかを検討するために、「統計的仮説検定」という手法が用いられます。

この「統計的仮説検定」では、両者に差はないという仮説（帰無仮説）をまずは立てます。そして、測定された結果が偶然や誤差で説明可能かどうかを検討し、偶然や誤差で説明される範囲を超える差がみられる場合に、帰無仮説を棄却し、「有意差がある」と

いう結論を出すわけです。

ただ、ここで検証されたのは、あくまでも仮説であり、その根拠は「有意差」です。統計的な根拠ではありますが、必ずしも100%の保証があるわけではありません。だから、統計的な根拠から述べた結論が、実は誤っていた、という可能性もあるわけです（誤っているということを証明するのも、また困難ですが）。

この時、実際には帰無仮説を棄却すべきだったのに採択してしまった場合（1 組と 2 組に英語の学力差はないのに、差があるという結果が出てしまう）の誤りのことを、「第一種の過誤」と言います。一方、帰無仮説を採択すべきだったのに棄却してしまった場合（本当は 1 組と 2 組の英語の学力に差があるのに統計的には差がないという結果が出てしまう）の誤りのことを「第ニ種の過誤」と言います。

検査における過誤？

さて、少し回り道をしてしまいましたが、発達検査の話に立ち戻ります。ここではあえて、検査項目を「特定の能力を測定するものである」と仮定します。そうすると、当然、各検査項目は対象者の知的能力を適切に検出・評価することが求められるわけなのですが、やはり誤りもありえます。つまり、「実際はその能力を有しているのに、検査項目は通過しない（－と判定される）」、「実際はその能力を有していないのに、検査項目は通過する（＋と判定される）」という場合です。前者が第ニ種の過誤、後者が第一種の過誤にあたります。まとめると、表 1 のようになります。

表 1. 検査項目の通過・不通過と能力の有無

実際の能力 / 検査の評価	あり	なし
通過（＋）	検査項目は適切に機能している	第一種の過誤
不通過（－）	第ニ種の過誤	検査項目は適切に機能している

このように整理すると、『この検査項目はどんな能力を測定しているのですか？』という質問の背景が、いくつかの要因から生じていることが見えてきます。

一つは、K 式の検査項目それぞれが何らかの能力を測定しているものと考え、単純にそれを知りたいと思っている場合です。これは表 1 で言えば左上の、検査が通過の場合にどのような能力が“ある”と言えるのかを知りたいと思って質問をされているということになります。直接検査を実施する立場ではない人（例えば、療育機関などで、検査情報の提供を受ける立場）が、検査結果を活用したいと考えて、このようなニーズを持たれるケースも少なくないように思います。

二つ目は、質問者自身が、その項目が特定の能力を評価するものであると考えている

場合です。そして、能力が“ある”と思われるのに、検査場面、検査項目上では「不通過」の反応になった場合、どう考えたらよいのか？という疑問が、質問の背景にあるように思われます。「能力はあるのに、検査上では不通過」。これは質問者からすると第二種の過誤のように感じられるのではないかと思います。つまり、「能力はない」という帰無仮説を棄却し、「能力あり」と検出すべきところを、検査が検出ミスを冒していると考えているということです。実際には、K 式の項目は特定の能力の有無を直接的に評価するものではありませんので、なぜ検査場面では持っている能力が十分に発揮されなかったかを考えることは、重要かもしれません。また、『後でやったらできた』、『一人で自由にやっている時にはできている』、『ヒントをあげたらできた』『できそうなのにやろうとしない』というような状況における通過・不通過の判断に関する質問も多く受けていますが、これらの質問の背景にも、この第ニ種の過誤のような思考が存在しているように思われます。

そして、三つ目が、表 1 で言えば「第一種の過誤」。つまり、「能力がなさそうなのに、検査上では通過」となった場合です。検査の実施手続きの中でも、いくつかの項目については「偶然と思われる場合は再試行する」という手続きが規定されているものもあります。つまり、検査上もこのような過誤を避けようという意図は、多少なりともあるわけです。しかしながら、必ずしも偶然とそうでないものの見分けが明確につくわけではありません（再試行でも何となく通過してしまうとか）。『通過であれば〇〇の能力がある』と一面的に断定してしまわない方がいい理由の一つとも言えるかもしれません。また、場合によっては、検査者自身が当該の課題で「求められている能力」を過大に見積もっていることも考えられます。たとえば、試行錯誤しながら答えにたどり着いてもいい課題もあるのですが（ダメな課題もあります）、『お手つきをした場合でも、通過にしていいのですか？』と質問を受けることがあります。これは『課題の意図や解決方法を即座に見出さなければならない』と課題が要求する能力を過大に見積もった結果、生じた疑問であるとも言えるでしょう。

検査項目と能力

もちろん、発達検査が「能力」の評価と全く関連しないわけではありません。狭義の意味での発達評価は、能力の獲得に着目しているものであることは否定できませんし、基礎的な発達の知識として能力の獲得の側面について理解しておくことも重要です。

しかしながら、発達評価が能力の有無だけに着目してしまうのもまた適切ではないと思います。それは、例えば障害を何らかの能力の欠如、と考えることともつながります。また、生活場面で生じている適応上の問題を能力の有無という側面だけから考えてしまうことにもなり得ます。

能力だけでなく、対象者を行為の主体として総合的に理解することが重要であるとするならば、まずは検査場面でそのような視点をもち、検査結果を理解していくことが必要であると思います。

講演会＆ライブな日々⑯

古川　秀明

歌声喫茶

歌声喫茶とは、コーヒー、ジュースなど飲料を供し、アコーディオン、ピアノなどの生(なま)伴奏によって、司会者（うたごえリーダー）のリードで参加者が、歌集をもってともに歌を歌い合う場所。
「うたごえ喫茶」と表記されることも多い。

1954 年（昭和 29）、東京都新宿区歌舞伎(かぶき)町の食堂で、店内にかかっていたロシア民謡のレコードにあわせて客が歌い始めたことにヒントを得て、柴田伸(しばたしん)が「歌声喫茶」灯(ともしび)を始め、50 年代後半から全国に広がった。

ただし、歌声喫茶という呼び方は当初なく、いつしか総称して歌声喫茶とよばれるようになった。灯、カチューシャ、どん底（以上東京都・新宿）、牧場(まきば)（東京都・渋谷）、灯（東京都・吉祥寺）、エルサルバドル（川崎市）、炎(ほのお)（京都市）、こだま（大阪市）などが有名であった。

1960 年ころには『北上夜曲(きたかみやきょく)』『忘れな草をあなたに』『北帰行(ほっきこう)』などが歌声喫茶で歌われることによってヒット曲になり、また『カチューシャ』『灯』『トロイカ』など数多くのロシア民謡が歌声喫茶を通して広まった。

第二次世界大戦後の復興の息吹、新しい時代への希望、労働運動、安保闘争などを背景として生まれた歌の数々、うたごえリーダーたちによって紹介された、世界の歌の数々が歌声喫茶では歌われた。集団就職などで都会に出てきた若者たちの孤独をいやす場ともなった。

しかし、1960 年代のなかばころから客数が減少。安保闘争の挫折(ざせつ)、趣味の多様化、テレビの普及などが諸要因といわれ、歌声喫茶は次々と閉店し、70 年代のカラオケの出現の後、80 年代は、ともしび（新宿、吉祥寺、東京都・亀戸、長野市、大阪市など）、どん底、家路(いえじ)（新宿）、バラライカ（仙台市）などが営業するのみとなった。

1990 年代なかばころから、ともしびによる出前歌声喫茶（うたごえリーダーと伴奏者を派遣し、喫茶店や公民館、ホールなどを会場とする）が盛んに行われるようになり（全国的に年間 200 日ほど）、また、地域での一日歌声喫茶や定期的に開催される歌声喫茶が急速に増えた。関東地域だけでも 100 か所近くが定期的に開催されている。

「個」の文化が浸透し、バーチャルな世界が広がる一方で、人間同士の生(なま)のふれあい、ともに生きることを望む心もまた人々の間に広がっており、こうした動きが文化としての歌声喫茶の再評価につながっている。

2006 年（平成 18）現在、ともしび、家路（新宿）、バラライカ（仙台市）、ゴリ（千葉県船橋市）、ふる里（東京都・八王子）、カンターレ（福岡市）が常設の歌声喫茶として営業中。週末などに「うたごえ」を行う店は全国的に増えている。

このように歌声喫茶は静かに生き続けている。

実際に歌声喫茶に出向き、自分も参加してみた。
そんなに広くない喫茶店に、お客さんが満員だ。
２０人くらいはおられた。
年齢層はだいたい６０代～７０代。
主催者さんによると、８０代後半になるとさすがに出歩くのはきついみたいだ。
そういう場合はこちらから出向くそうだ。
この日の参加者の 7 割は女性。
やはり男女比でいうと、女性の参加者の方が多い。
女性の方が積極的に外に出て、いろんな人とコミュニケーションを取る能力に長けている証でもある。
どうしてもじいさんは家に引きこもりがちになる。
「俺は定年まで会社の重役を務めてきたんだ。なんで今さらわけのわからない連中と一緒に歌など歌わなければならないんだ」
ま、私も男性なのでわからんでもないですが、あっという間に家の中で厄介者にされる可能性があるなぁ。
それに引き換えおばぁさん（失礼しました。淑女の皆様）のお元気なことお元気なこと。
次々にリクエストされて行く。
参加者の歌はなかなか凄い。
歌声喫茶は歌の上手下手を競うところではない。
みんなが一緒に大きな声を出して歌う。

ただ楽しく歌えばいいのだが、この日参加されていた淑女のみなさまはなんとハモっておられた。
ハモるというのは、ひとつの歌を低音、中音、高音、とパートに分けて歌うこと。
かなり音程が問われるし、練習も必要だ。

う〜ん、おじぃさんの声がほとんど聴こえないぞ・・・。

歌の好きな人は多い。
で、その人達が歌を歌うのに一番お手軽なのはカラオケだろう。
日本で生まれたカラオケは今や世界中を圧巻している。
外国に行っても「ＫＡＲＡＯＫＥ」といえば通じるらしい。
若者達のカラオケ人気は根強い。
最近はさらにボーカロイドというのもある。
通称「ボカロ」。
ボーカロイドというのは楽器メーカーのヤマハが開発した音声合成技術。
メロディーと歌詞を入力してキャラクターに歌わせる音楽ソフトのことをいう。
代表的なキャラクターは初音ミク。
もちろん初音ミクという実在の人物はいない。
バーチャルな架空の歌手。
このミクちゃんに歌わせる歌を作って配信する。
それを若者がニコニコ動画などで検索し、気にった曲があればカラオケで歌い、その動画をまた配信する。
と、いくら文章で書いてもいまいちわからないのだが、ボーカロイドは今まさに若者に大流行の最先端音楽だ。
若者達のカラオケでは、いかに自分の歌を機会の初音ミクの歌に近づけるかで必死みたいだ。
う〜ん、人間が機会の声を真似しようとしているのか・・・。
私のように貧しき昭和時代の人間は、ボカロではなくフォークギターだった。
指に豆を作りながら、吉田拓郎やフォーククルセダーズなどの歌を、平凡や明星の付録で付いていた歌本のコード表をみながら必死でコピーしたものだ。
ギターの弾き語りができるようになったら、誰かの部屋や公園なんかに集まって歌を聞いてもらう。
ここらあたりで歌声喫茶との差はあったのかもしれない。
歌声喫茶はみんなで歌うのが魅力なのだが、我々フォーク世代は自分で歌ってそれをみんなに聞いてもらうというスタイルだった。
今のライブやコンサートだって、基本的にはそのスタイルだ。
歌手がいて、観客がいる。
そして、歌手はスーパースターだったのだ。
吉田拓郎も矢沢永吉も間違いなくスーパースターだった。
みんなそのスターに憧れ、必死で真似をした。
しかし、ボーカロイドでは「初音ミク」という実在しないキャラクターが歌い、

みんなが熱狂している。
映像もあるのだが、なんと初音ミクがコンサートを開催し、それにみんなが熱狂する。
初音ミクは機会だから音程は絶対はずれないし、歌い方も完璧だ。
生のアイドルみたいに年齢とともに色あせないし、週刊誌にプライベートを暴かれることもない。
売れなくなったらヘアヌードになって、昔のファンを悲しませることもない。

つまり、初音ミクは生の人間ではないので、経年劣化はないし、いつまででも理想のキャラクターでいてくれる。
実際に恋人は作らずに、アニメや人形などのバーチャルで二次元のキャラクターに恋している若者達が激増している。
生身の恋人だと楽しいこともあるが、ややこしいことも満載だ。
初音ミクは決して裏切ったり傷つけたりしない。
良いか悪いかではなく、これが今の若者の現状なのだ。

若者達はボカロにはまるのだが、高齢者は再び歌声喫茶に戻っている。

ボカロを観た高齢者はわけがわからないかもしれないし、歌声喫茶を観た若者達もわけがわからないかもしれない。
ボカロにも歌声喫茶にも入れてもらえない私の「ぶんぶんばぁさんの歌」はどこに行けばいいのだろう・・・。

さて私がこのボカロで曲を作ろうと思ったらどうなるか・・・。
ひたすらコンピューターと向き合わなければならない。
一音ずつ音符を打ち込み、音の長さ、高さ、ビブラート、強弱などをコツコツと打ち込んで行く。
地道で根気が必要な作業。
正直言って私には無理。
昔ＹＭＯなどのテクノポップが大流行、その流れで小室哲也がシンセサイザーによるコンピューター音楽を大ブレイクさせた。
その頃も今もひたすらギターアナログな私は、まったく興味がわかなかった。
このコンピューターやシンセサイザーの音楽を強力にプロデュースしたのはヤマハだ。
常に新しい音楽の波を生みだし、若者に提供し、収益を上げる。

営業戦略としては秀逸だ。

みんなが歌うという行為の一番最初は、狩猟採集生活をしていた太古の洞窟の中で、夜に火を囲み、肉食獣の攻撃を避けながら収穫の喜びを手拍子で歌ったのが始まりなのだろうか・・・。
いやいや、どうやらそうではなさそうだ。
歌には人類生存の大きな意味がある。

洞窟の中から時は流れ、歌声喫茶があり、流しの演歌があり、ギターやピアノが普及し、カラオケに進化し、コンピューター、シンセサイザー、そしてボカロに発展している。
太古の昔から形を変えながら、人はずっと歌を歌い続けている。
会話することと同様に、人は歌わずにはいられない生き者のようだ。
歌声喫茶で歌う人も、自分で弾き語りする人も、カラオケで歌う人も、ボカロで歌う人も、形や方法が違うだけで、「歌う」、そしてそれを「誰かと共有する」ということは共通している。
どうやらそこには娯楽的要素以上の物があるように思われる。

２０１８年１１月
京都市内にあるカフェで歌声喫茶を再現します。
興味のある方やリクエストのある方は是非お越し下さい。
お問い合わせは私のＨＰ「ｔａｎｔａｎｔ．ｎｅｔ」まで。

シンガーソングカウンセラー
ふるかわひであき

養育里親

～もうひとつの家族～

22

坂口　伊都

はじめに

里子との生活もこの夏休みで丸 3 年が経ちました。里子といることが当たり前になって、これを書いている今日は、この子の 13 歳の誕生日です。せっかくの誕生日、二人で美味しいモノを食べようと企んでいますが、暑くてたまらないので、夕方から母子で出かけようとなりました。明日、家族での誕生会をするので、連チャンで美味しいモノにありつこうとしている二人です（笑）

３という数字は不思議なもので、3 日、3 ヶ月、3 年と一つの節目になる時期と重なります。娘はよく里親家庭になった我が家を火山噴火とその後植物が再生していく過程と似ていると言います。里子が家族に加わったことで、マグマの活動が活性化し、大噴火のマグマで大地を焼き尽くします。それまで生育していた動植物は消滅してしまいますが、新たな命が芽吹いていき、生態系を形作っていきます。我が家でもそれまで築いていた家族のバランスが消滅し、3 年かけてようやく生態系が見えてきたような感覚でいます。それまで、何回もこの子と一緒にやっていくことは無理なのかと葛藤してきました。家族になるって、どういうことなのだろう。そもそも家族とは何かがわからなくなってきます。以前に養子の子は、実子よりも思春期が３倍大変だという話を聞いたことがあります。里子も含めて大変なのはよくわかるのですが、何が違うのだろうと疑問に感じます。実子でも子育ては大変ですから、本当に３倍大変なのか、そう感じてしまう何かがあるのか気になるところです。

里親が、どのように家族となっていくのかを言葉にして整理していくと、何かが見えてくるかも知れません。上手く言葉にできるか自信はありませんが、どうぞ最後までおつきあい下さい。

家族というもの

そもそも「家族」とは何でしょうか。まず制度として戸籍があります。里親は戸籍上の繋がりはありませんので、里子の親権もありません。親権とは、未成年の子を監護・教育し、その財産を管理し、その子を大行して法律行為をする権利を有し義務を負う者となります。里親は、児童福祉施設の長と同様に監護・教育・懲戒の権限と就学の義務が明記されています。監護権の範疇で養育しているという感じです。

広辞苑では、「夫婦の配偶関係や親子・兄弟の血縁関係によって結ばれた親族関係を基礎にして成立する小集団」、大辞泉は「夫婦とその血縁関係者を中心に構成され、共同生活の単位となる集団」とあります。この説明は、家族の概要というところでしょうか。内面に起きる葛藤、トラブル、絆という関係性については触れられていません。内面に何を感じているかの方が「家族」としての本質があり、こだわってしまう部分なのでしょう。

もともと夫婦に血の繋がりはありませんから、家族が血縁関係かどうかを重要視し過ぎる必要もないように感じます。ステップファミリーの連れ子、養子、里子をうちの子と思って接しながら生活している方は大勢います。

私は家族を語る時、生活を共にする単位をまず思い浮かべます。そこが、日常の中の境界線になっています。実の母親であっても、親元を離れ、所帯を持つと感覚が変わってきます。

娘にあなたにとっての家族とは何？と質問すると、うーんと考えてから頼りになるものかなと答えました。「もしかして、宝物って言って欲しかった？」とも付け加えられました。「別にその答えを求めていないけど」と返しながら、そういう一言にこそ、大きな意味合いがあり、家族の親密さや特別感を追い求めようとしているのかも知れません。

家族をイメージする時、制度、生活文化、関係性の３つが絡みあっているように感じています。制度上では、里親と里子の関係は脆弱です。措置権者に関係を委ねざるを得ません。実際は、措置権者である児童相談所の担当者とこの子を中心に据えて、どうしていけばいいのかを考えてもらっていますが、この子との生活が終わってしまうのではないのかという思いを抱く瞬間がたびたびあります。実子であれば、切れることがない責任がつきまとう感覚が強いです。

生活文化については、すり合わせができやすい箇所だと感じます。里子との暮らしは、出産・子育ての時よりも夫婦になった頃を思い出します。どちらもお互いに違う生活文化を抱えながら、すり合わせていく行為でした。夫婦と違うのは、大人同士の恋愛関係ではなく、大人と子どもで出会って間もない関係からで、こちらの生活文化に合わせさることを前提としていたように思います。施設のように起床・就寝・食事・入浴時間等が具体的に決まっているわけではありませんから、見えにくさやわかりにくさがあったでしょう。

迎える家族側は、日々の生活の中で身につけた暗黙のルールが当たり前のようにあります。そこがわからない里子を最初は寛容に受け止めますが、段々と何故できないのと苛立ちを覚え、衝突が起きやすくなります。お風呂に入る順番やご飯を食べる時の席等、生活形態を作っていくとこは自然とできていきましたが、おはよう、行ってきます、ただいま、おやすみなさい等の挨拶は、なかなかできていかない難しさを感じています。

まだ里子とは、阿吽の呼吸に至っていないように感じます。家族の中のコミュニケーションは、相手の出方をある程度予想して、言うべきか引くべきかを瞬時に判断していると思います。何かを取ってきて欲しいと頼む時、息子には何回も聞き流された経験から、言ってもしないと思っているので頼まず、娘に頼むことが増え、娘から苦情が出ます。里子は、頼まれて嬉しそうにする時もあれば、動かない時もあり、頼む前に観察をしていて、この子自身が頼まれ事をされることをどう感じているのか掴めないでいます。口を開けば、文句や誰かを卑下する言葉が並ぶので、言葉だけを聞いて対応すると売り言葉に買い言葉になり、上手くいきません。口喧嘩になると、息子も娘も口をきかなくなって、ふてくさりますが、里子は言葉での応酬を止められません。生活文化のすり合わせは目に見えて体験できますが、家族の親密な関係性は難しい部分のようです。家族と他者に対する態度を息子や娘は使い分けていますが、里子はその部分が薄いように思います。一緒に暮らしているけど、親密な関係に至らないように感じます。

親と子どもの関係

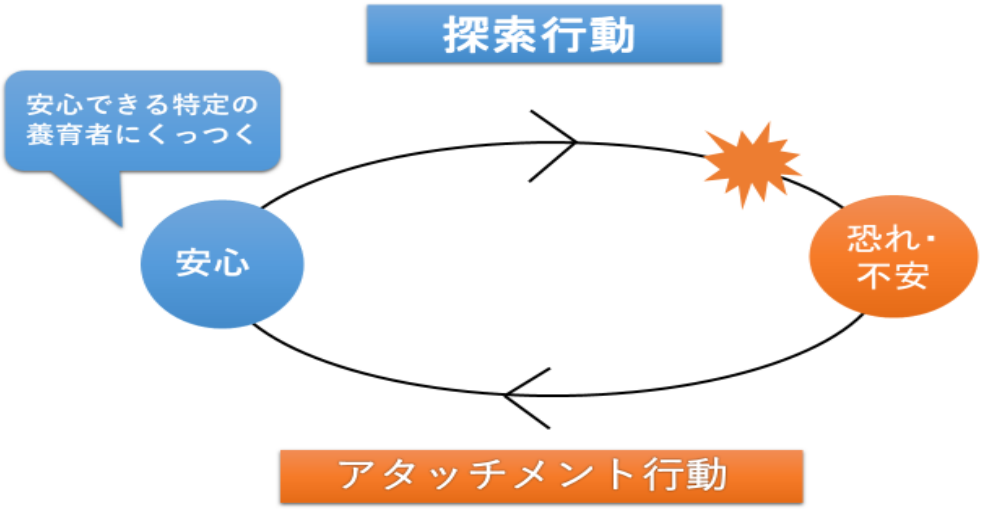
母子関係を語る中で、血のつながりにはどのような意味があるのでしょうか。妊娠に気付いた時、胎動を感じた時、出産、育児と連続して共にいる現実がありました。そこには、子どもを大人になるまで育てていく責任の重さもひしひしと感じました。初めての出産は不安でしたし、産んでからの痛みと睡眠不足との闘いは、気が遠くなり、馬のように生まれてすぐ立って歩き始めてくれたらどれだけ楽だろうと考えたりもしていました。出産後には、名づけをしていきます。どのような形で名づけるかは家庭によって違いがありますが、名づけをすることは、この子の人生の第一歩に同行するという意味あいになり、家族の中の一員として迎え入れるスタートラインとして意識するものなのかも知れません。もちろん、里子の名づけの時を知りませんし、名前の由来にどのような人になって欲しいと願いを込めたかもわかりません。

里子は、小学校 4 年生の時に我が家にやってきました。年齢は 10 歳。10 年間の里子の歴史を私はわかりません。赤ちゃんの時の様子も 2 歳の頃のイヤイヤ期もいたずら盛りの頃も見事に白紙のような感覚です。

ここで実子との大きな違いは、生活を共にしてきたかどうかです。遺伝子的に顔や性格が似ているかどうかという感覚もあるのでしょうが我が家の場合、兄妹で顔立ちも性格も違います。子どもへの心配する所も兄妹で全く異なり、育て方だけ左右されない部分があるのだろうと実感しています。

家族の関係性で難しいのは、親子やきょうだいの関係性を知る事のように思います。子どもにとって、衣食住に関わる存在は必要不可欠で、親がそれを担い、それを前提条件として子どもは成長をします。子どもは自分では何一つできない所から始まるので、親の存在が生死を左右する絶対的な存在として認識します。子どもは、この親の存在を優位に働かせるためにいろいろな態度や行動をパターン化させていき、アタッチメントシステムが形成されていきます。

アタッチメントは、子どもが不安や恐れを感じた時に本能的に特定の養育者にくっついて安心（恒常性）させてもらう行動で、子どもが十分に安心できると外界の世界を探索します。そして、また何か不安や恐れがあれば、養育者にくっつきに行き、安心したら探索行動と取る、この仕組みがアタッチメントシステムです。子どもがくっつこうとした時に養育者が、怖かったね、痛かったねと子どもの気持ちに寄り添ってもらうことが大事だと言われています。養育者がケア



を与えないと保護を求める感情を抑制したり、一貫しない対応の養育者に保護を求めぐずり続けたり、虐待に晒された子どもは、安心感を与えてくれる人が恐怖の根源になり、近づいたり回避したりして定まらない行動を取る等、アタッチメントシステムが変わってきます。

アタッチメントシステムには、特定の養育者がいることが土台になります。里母は、特定の養育者として、どの程度里子に認めてもらっているのだろうかと、懸念を抱いてしまいます。よく信頼関係が大事だと言いますが、信頼されているように思えない場面が多々あり、関係性を築く事に重きを置くと総崩れになるような気がしています。

里子が通っている放課後等デイサービス事業のある職員の方が、里子といい雰囲気で過ごしていましたが、里子が他の子に対して目に余る行動を取ったので、真剣に怒った時、里子が激しく反抗的な態度を取ったそうです。その方は、「里子との関係ができているから、私となら話し合いで解決ができるだろうと考えていたのですが」と、肩を落としていました。その話を聞いた時、関係性に頼る事の脆弱さを痛感しました。そして、関係性は最終目標として捉えることでこの子との暮らしに安全さが確保されるのではないかと感じました。里子は、上のアタッチメントシステムの図の「安心」の部分に人がいるのではなくて、モノがいるようです。モノは、一瞬でも優越感を持て、寂しさを紛らわせたり、現実逃避を手助けしてくれます。それに比べて人は何をしてくれるというのでしょうか。機嫌が良かったり悪かったり、叱られたり、面白かったり、泣きながら怒ったりして、わかりにくいですよね。子どもの言うことをひたすら聞いたり、ずっと遊んでくれるような人ならモノと同じような感覚になれるのでしょうが、そんな大人はいません。

ちょっと上手く回っているかなという時にも、モノにまつわるトラブルがよく起こります。モノに安心の場所を乗っ取られた敗北感。その時は、がっかりします。そこから、じっくり話し合って、人とあなたについて確認をする。そんな繰り返しです。

親というのは、特別な存在として最終的に頼れる相手として子どもに映ります。その親に保護してもらい、安全に過ごすために、誰かから貰ったモノは親に知らせるという躾が幼児期からされていきます。親から離れる時間が長くなると、誰かに貰ったり、買ったモノを親に知らせることが習慣になっていきますが、思春期になっていくと親に隠れてモノを買い、それがみつかれば叱られる経験をします。思春期でも、誰かに

もらったモノを親に知らせた方がいいだろうと判断すれば伝えるでしょう。そして、子どもが年齢を重ねていくと、親から黙認される形でモノを所有していく。里子は、我が家に来た時からモノを隠すということを繰り返しています。決して誰からもらったとは言わない。ただ、自分のモノでないモノを所持していると理由を聞かれ、叱られるから隠す。全く隠す必要のない学校からのプリントも隠している時があります。親として容認されていないのだと感じる出来事です。

里子は、里親は自分のそばにずっといることは認識しているし、特別な人という感覚も芽生えていると思いますが、最後の砦としての存在と思えないようです。だから、里子の言動に傷つくのだと思います。母親として認めてもらえない感じは、存在自体を無視され続けながら生活を共にしている感覚に陥ります。

親というものがどのような存在なのかよくわからず育ってきた里子が、我が家で何を学んでいくのかに辛抱強く付き合っていくしかないのでしょう。私自身も 1 歳の時から会っていない父親に再会したのは中学 2 年の時で、母親から会いなさいと命令され、気が重いまま会いに行きました。出会っても全く父親という気もせず、感動もなく、面白くもなかった再会から父が亡くなるまで、父親という存在がよくわかりませんでした。父親は一番近くて遠い人という印象で、心から打ち解けた感覚もありませんし、聞きたかったいくつもの疑問も聞けずに終わりました。実子の私よりも共に過ごした時間が多く、かわいいと思っている子が他にいるのだろうという考えが消えなかったので、父の懐に飛び込む勇気もありませんでした。これも血の繋がった親子の感覚の一つです。

里子に親子関係を要求してしまうこと自体が、方向性として間違っているように感じます。親子や家族だと思って立ち振る舞おうとすると悪循環に陥り、不適切な関りを減らすことに専念していくと、家族全体のバランスがおかしくなっていきます。家族としての関係性の部分では、まだまだ課題が山積しています。

終わりに

里子を家族と思えるまで時間が必要でした。里子は、里親家庭を家族と認識しているのでしょうか。家族として思ってくれていても、私が感じているものとは違うものかも知れません。里親として家族を改めて作っていく時、自身の家族概念をずらしていく必要があるのではないかと感じています。自分が描いてきた家族に当てはまるわけがないと思う方が、気が楽になります。何度も同じような行動問題を起こし続ける。落ち着いてきてもなくならない、そんな感じです。これは、里親の育て方や接し方で簡単に変わるものでもないようです。トラブルの度に落ち込み、怒り、話し合い、あなたのことを護りたいという気持ちを伝えながら過ごしています。この子にとって、里母ほど激しく、正面切って向き合ってくる存在は他にいないでしょう。里子の行動の意味を言葉にしていき、時間を置いて里子自身に考えてもらい、次からどうしていけばいいのかを考えていきます。里子との親子関係は、「けったい」で一般論では語れません。この際、けったいであると開き直り、その上で何とか家族であろうとする気持ちを持つことが大切なように感じます。家族の形は多種多様です。ちょっと外れた家族を担っていく感覚が里親にはいるのかも知れません。

周辺からの記憶 20

2015 年むつ・多賀城・宮古

村本邦子（立命館大学）

今年度は「災害と女性」をテーマに、全国を飛び回っている。過去にはあちこちへ講演旅行を楽しんでいた時代もあったが、大学の仕事が中心になると、あまりに忙しいので、ごく例外的な継続研修をのぞいて、すべての講師の仕事をお断りするようになった。

例外的なというのは婦人相談員関連のもの。たまたま 2016 年、熊本地震の 1 ヶ月後に熊本でそれが予定されていて、メンバーも会場も被災してキャンセルとなった。それでもみなさんの無事を確かめたく、予定通り押しかけて、4 人の婦人相談員が集まってくれた。被災状況はそれぞれだったが、「緊急時の相談をどうしたらいいのか。過去の記録などあれこれ探したが、何も情報がなく困った。必死の思いでやってきた。自分たちの経験を振り返って、記録を残し、次の災害に役立てたい」との声があがった。感動した。「自分たちの経験を振り返ることから学びを深め、これからに活かす」というのが、十年続けてきた研修の趣旨でもあったから。

あれよあれよという間に、3 ヶ月後に熊本の婦人相談員を集めての振り返り研修とフォローアップのアンケート、半年後、全国婦人相談員連絡協議会でこれを報告した。そこで、ハンドブックを作ろうとなって、編集委員会が結成され、神戸や東北の時の声も拾えたものを加え、1 年後には本当にできてしまった。2017 年秋の全国大会では、このハンドブックが配布され、「次は、これを使った研修をやります」と言う。

あっけにとられているうちに、3 月名古屋、6 月神戸と岡山、7 月は福井と秋田、この後、熊本、静岡、鹿児島が決まっている。本当に素晴らしい。実は、この研修をすると、早速その近辺で本番があって実践編となるというあまりありがたくないジンクスまでできてしまったのだけど。いずれにしても、日常と緊急時は両輪のようにあって、日常の力が高まれば緊急時の力も高まるし、緊急時の力が高まれば日常の力も高まるものだ。

むつ

＜2015 年 8 月 27 日むつへ＞

例年の夏休みフィールドワークとして、飯館、南相馬、福島を訪問後、岩手を抜けて青森へ。途中で小岩井農場に立ち寄ったが、「希望の牧場」と比べ、複雑な気持ちになる。三沢を抜け、六ヶ所村を通り、原子力施設や PR センターの看板をやり過ごし、なんとなく重苦しい気分を抱えたまま、むつへ。

プロジェクトも、はや 5 年目を迎え、十年の折り返し地点。打ち合わせと懇親会で、懐かしいお顔に新たなお顔も見え、いつも変わらず暖かく迎えてくださる皆さんの笑顔に救われるような気がする。今年は院生のむつ参加率が高く、総勢 12 名。

＜8 月 28 日支援者支援セミナー＞

支援者支援セミナーはむつ市役所で。むつ市職員をはじめ、青森県職員、施設職員、弁護士、民生・児童委員、海上自衛隊職員など計 73 名が参加し、12 グループが編成された。

簡単な自己紹介の後、せっかくなので福島でのフィールドワークのことを少し話したいと、「元気アップつちゆ」を立ち上げ、再生エネルギーで地域の復興再生に取り組んでいる加藤勝一さんの話を紹介する。「自分たちの街は自分たちで再生させる」と地域の未来を考える人たち。ここでも、一緒に地域のよりよい家族支援について学び合えたらと導入する。

地元の支援者から、障がい者の自立支援に関わる事例と虐待通告の事例。昨年よりさらに一歩進め、事例提供をしてくださった現地の支援者の協力を得ながらセミナーを進行することができた。毎回、参加者の対象地域を変えているため、新規の参加者も多いが、継続参加者も年々増えている。ワークショップ方式の研修にも慣れてきたのか、スムーズに議論を進めることができるようになってきたことを感じる。最初の頃は参加型のセミナーに戸惑いが大きかったものだ。こうなってくると、せっかくの議論を深めるために、もう少し時間が欲しいところだ。

グループが多いと、個別のグループの中でどんなことが話されたのか全部を把握することはできないが、アンケートを見ると、グループの力によって、私たちが伝えたかったことがしっかりと届いている手応えを感じる。一部を紹介。

・地域の取り組みにつながっていけばいいなと思いました。問題は上部だけでとらえるのではなく根本になるものを見つけることだと感じた。枝葉にとらわれず太い幹を支援していきたい。(５０代男性)

・事例検討で、グループごとに話をしている中でいろいろな視点があり、私自身考えが固着していたところもあり、視野が少し広がったように感じます。ありがとうございました。(５０代男性)

・はじめは不安いっぱいで参加しましたが、いろいろな方々と話す中で妄想がたくましくなったような気がします。勉強になりました。ありがとうございました。(年齢・性別未記載)

・様々な事例へ直接かかわっていると、問題点やリスクの方に注目がいきます。視点をかえてみると、またちがった見方ができること、いい面（家族がもっている力）をひきだしていくことを大事にしたいと改めて思いました。ありがとうございました。(４０代女性)

・時間が短い。(６０代女性)

・２つの事例の学習をして、私の周りに居るかもしれないし、気づいていかなければならないと思いました。地域の中で楽しくよりよい関係を作り、住み心地のよい地域にしたいと思いました。(７０代女性)

・いろんな意見や感想、考え方を知る事ができ、とても良かった。ぜひ次も参加したいと思った。(６０代女性)

・色々な機関の方とお話しできる場で、色んな見方、意見を聞くことができ、勉強になりました。ここでの出会いをきっかけに、今後の業務でつながっていけることが出来たら良いと思います。(３０代女性)

・客観的事実だけではなく、推測すること、想像

することが、新たな事実の発見につながると思いました。大変勉強になりました。ありがとうございました。（４０代男性）

・今日はいろいろな関係機関の人たちと協議ができたことがとてもよかったと思います。様々な立場からの声が直接きけたことで、考えの幅が広がったように感じます。視点を変えることの大切さが印象に残りました。来年度も参加したいと思います。（４０代男性）

院生たちのレポートからも、グループ内での協働の様子がうかがわれ、院生たちにとっては、地域の力を実感する貴重な機会だったようだ。多職種連携や力に焦点を当てた援助視点が、むつの支援者の日常業務に反映されていけばよいなと思う。

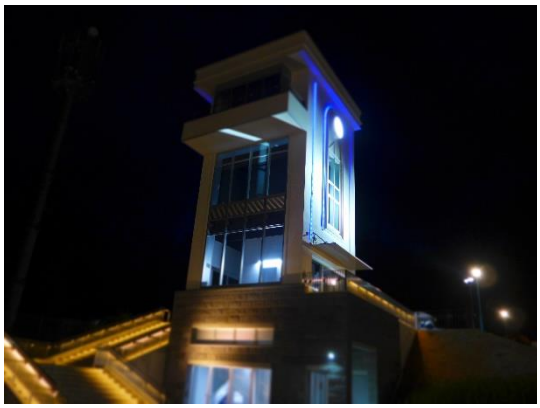
＜8月28日夜のフィールドワーク＞

終了後、図書館でやっている漫画展会場に行き、お父さん応援セミナーを開催する公民館へ。

セミナーは男性のみ参加可なので、女性陣は夜のフィールドワークに案内してもらう。杉浦さんのキャンピングカーに乗せてもらって暗闇を走る。ちょっとした冒険気分。

まずは、この春オープンしたばかりという海望館へ。15m の高さにある塔から大湊湾や市街地を一望できる。ちょうど満月で、月の光が海面に落ち何ともロマンチックな光景だった。一番美しい海岸は米軍基地が置かれていて、アクセスできないそうだ。

そういえば、どの地でもそうだなと思う。その後、安渡館でティータイム。真っ暗闇で日本最古のアーチ式ダムを見学し、毎年恒例の大湊「美味小屋蛮」で男性スタッフたちと合流し、名物アラン・ドロンを食べながら、スタッフ交流。



＜8月29日漫画展と漫画トーク＞

漫画展と漫画トーク。感想ノートやアンケートを見ると、今年は珍しく中学生たちの書き込みが目立った。夏休みということもあって、毎年、この図書館では思春期の子たちがたむろしている風景に出会うが、とくにいじめをテーマにした漫画に反応したようだ。一部を紹介する。

・とても共感できました。また、とても感動したものがとくに最初の漫画です。お父さんのことをみんなが思っていたことを知ったお父さんは、とてもうれしかったと思います。次回のプロジェクトもたのしみにしています！（中学生女性）

・本当にとてもよかったです！！少しですが泣いてしまいました。少しでもこのようなことがないようにいのっていますよ！このようなことをして下さりありがとうございました。（中学生女性）

・ひとつめの物語を読んだことで、家族がきちんと言いたいことを言わなければいけないことが分かりました。心配していることも言わないと分からないので、思ったらすぐに口に出すようにしよ

うと思いました。いじめについても取り上げてかいていて、いじめられる側にも問題があるとは決していいきれないけど、思っていることはきちんといわないと解決できないから、いったほうがいいと思いました。(中学生女性)

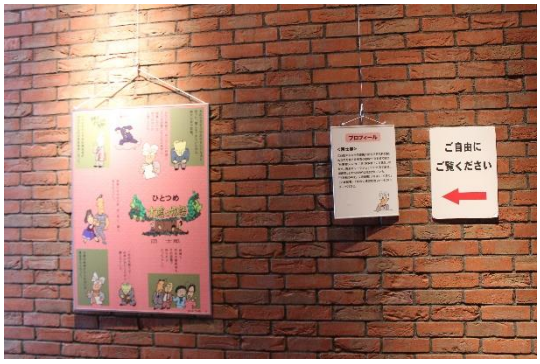
・このきかく最高ですね！とてもいいと思います！これからもファイトです！(中学生女性)

・日じょう的な感じで良かった。(小学生以下女性)

・絵がすごかったです。日常的な風景でした。(小学生以下女性)

なかには若者からのこんなメッセージがあり、感銘を受ける。

・若い身として、見ておいてよかったと思う。心境や思想に格別の変化があったわけではない。むしろ展示されていた漫画は問題を提示しつつも「だからこうだ」と明確な答えを出しているわけではなく、与えられるのは形容しがたい胸中の違和感だけ、だがだからこそ、はっきりとした答えがなかったからこそ僕には興味があった。もし答えを与えられれば、恥ずかしながら未熟な僕は安易にそれを受け止め納得していたと思う。しかし、今回与えられた、というより求められたのは自分自身の思考。何より大事な自分で考える機会を得られたことに感謝したいと思う。またごく幼稚な感想ながら、絵がついていたのでわかりやすくてよかった。文も短くまとめられてあり見やすかった。団氏にはこれからもお疲れの出ないようにと願う。(男 19 歳)



こんな風に反応してもらえると、私たちのモチベーションも上がる。

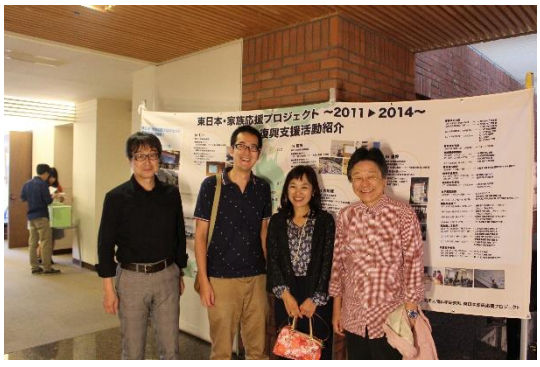
▲▼むつ市長

昨年に引き続き、むつの宮下市長も顔を出してくれ、ご縁の拡がりの面白さについて語り合った。実は、この３月にＮＹで漫画展をしたさい、中村さんと私がセミナー講師をした在米領事館はむつ市長の元職場であり、元同僚たちとご一緒したのだった。一貫したコンセプトで長く仕事を続けていると、偶然のように見えて実は必然ということがあり、いろんなことがつながり拡がっていく。

反省会では、毎年楽しみにしていること、「2020 年までとお話がありましたが、その後なくなるのであればさみしいです」という声も聞こえ始め、これから、「あと何年」と逆算していくことになるのだと改めて思う。この取り組みが十年後も何らかの形で地域につながりと拡がりをもたらし続けてくれるものとして着地して欲しいものだ。

▲スタッフ一同記念撮影

▲反省会



▲駆け付けてくれた元スタッフと

多賀城

＜9月11日支援者支援交流会＞

今回は、前日から明け方にかけ、大雨が関東・東北を襲い、あちこちで警報が出されている状態だった。私自身は一足先に車で出ていたが、仙石線が運休で、院生たちの足が心配だった。東北本線の運行を待ち、国府多賀城経由で少し遅れて到着するとの連絡が入る。さすが我が院生たち！この日は、それまでの大雨が嘘のような秋晴れとなった。

いつものように、この夜は支援者交流会。1年ぶりにお会いした図書館スタッフの皆さんが再会をとても喜んでくださり、十年プロジェクトであることへの感謝の言葉を何度も頂いた。来年からは図書館運営の体制が変わり、図書館自体も新しい場所、新しい建物になる。スタッフも変わることから、交流会では、これまでの経過を懐かしく振り返り、いつもより親密さを感じるものとなった。

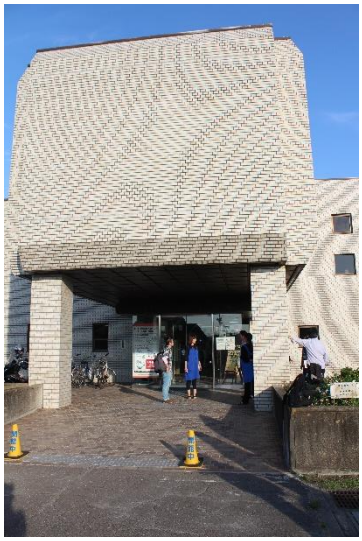
丸山館長が院生たちに、「被災体験を伝えよう」と体験談を語ってくださったことも印象的だった。多賀城は10mもの高い波が一気に来たというわけではなく、徐々に水位が高くなっていったそうだ。館長は丘の上に逃げたが、水が防波堤を越え、「これは危ない」と思った。波の高さが2.3mまで来て、自宅が波に飲まれた。タンクローリーが家にぶつかり、車も流されてしまった。丘の上以外すべて水に飲まれ、家が流されていた。まるで映画の中のようで、現実だと思えなかった。水が引くと自衛隊が救助に駆け付け、小野屋ホテルに避難した。外灯もな

く夜は真っ暗、とても寒くて、赤十字の毛布を５枚着ても寒かった。そんななか、外が明るくなったなと思ったら、小野屋ホテル近くの石油タンクがいきなり炎上した。石油タンクの炎は上へと上がるもので心配いらないが、近くのガスタンクに引火すれば爆発し危険ということで、文化センターへ二次避難。避難所では公務員として市民を守たなければならないので、仕事をしていた。２週間お風呂に入れず、石油などオイル漏れのせいで家の壁は真っ黒になっていた。

館長は、冬に起きた地震でまだよかった、夏だったらさらに悲惨な状況に陥ったのではないかとおっしゃっていた。冬だから支援物資を腐らさずにすんだし、寒さはたくさん着ることで何とか調整することができた。これを参考に、季節のことも考慮して今後の地震対策を考えることが必要だ。このような災害は経験しない方がいいけれど、経験したからこそ、周りの人たちの励ましを多く受け、少しずつ立ち直っていくことができ、人の力の大切さを実感することができたということだった。

津波で流された館長の車の中には，館長の手作り紙芝居が入っていたが、震災後しばらくして車が発見され、車の中から紙芝居が出てきた。紙で包まれていただけだったが、紙芝居は奇跡的に水に濡れずに残っていた。というわけで、これを「奇跡の紙芝居」と呼び、明日のプログラムで披露して頂けるという。私たちの期待も一気に高まった。

＜9月12日お父さん応援セミナー＞



第１部は図書館主宰で、ボイストレーナー＆パフォーマー荒井真澄さんを講師に、「お父さん応援セミナー～絵本 DE ヴォイスパフォーマンス」が開催された。多賀城にもイクメンを育てたいと言う図書館スタッフの思いに関わらず、お父さんの申し込み者が少ないということだった。都会でも最初のうちはそうだったなと過去の仕事を懐かしく思い出す。

男性の先生方を含め 15 名が参加。女性陣はお手伝いの形で参加したが、女性たちがイクメンパパを見守り応援するという構造がうまく作り出されていた。

ボイストレーナーによる指導を見るのは初めてだったが、姿勢、呼吸法、体を動かしながら発声を促すなど、日頃から気になっていた発声と体のあり方についてなるほどと考えさせられることが多かった。

エアテニスをしながら「おはよう」と言い合う「おはようテニス」では、最初恥ずかしそうにしていた人たちも、最後には楽しみながら声を出せるようになっていった。

それから、姿勢や目線、発声の方向など絵本読み聞かせのコツを教え、最後には「あたりまえのこと」という詩の輪読がパフォーマンスされた。これは震災で作られたものなのだろうか。何とも心に染み入る詩で、男性たちがひとりずつ交代に一行ずつぎこちなく読み上げる声が何とも味わい深く、感動的だった。

あたりまえのこと　　矢野竜広

太陽が昇ること
自分の歩幅で 歩けること
ギターを好きなように弾けること
時間を 共に過ごせる友達がいること
思いっきり ボールを蹴り飛ばせること
電車に乗れること
自分の目で ものが見えること
信号を渡れること
まわりに 笑顔があること
目を閉じれば 好きな場所に行けること
寂しいと 感じられること
いろんな人が 世界にいること
家族と一緒に 食事をとれること
明日になれば 明日がくること
空がずっと 消えないこと
トイレに 紙があること
自分の話を聞いてくれる人がいること
店に行けば ものが食べられること
書いたものを 消しゴムで消せること
深呼吸できること
時間が 死ぬまでは残されていること
階段を登れること
花の香りをふと感じられること
波の音が 耳に入ること
何もかも忘れて 笑えること
歯磨きが できること
ぼんやりと 考えたり出来ること
太陽が沈み 月が見えること
当たり前のことなんて
何ひとつない
当たり前に思えてしまうこと
そのひとつひとつが
本当は 奇跡

＜家族応援お話会＞

第２部は、「家族応援お話会」として、多賀城民話の会、丸山館長の奇跡の紙芝居、読み聞かせボランティア「カンガルー読書会」によるお話会ペープサートと盛沢山のプログラムだった。濃縮された企画に少し心配もあったが、乳幼児からお年寄りまで多世代で多様な地域の人々の交流の場となり、部屋が多賀城の人々の温かさでいっぱいになった。

丸山館長の奇跡の紙芝居は、「パンダはなぜかわいいのか」と題する手作り紙芝居。前夜、背景にあるお話を聴かせて頂いたこともあり、紙芝居を読んでくださる館長の暖かい笑顔のむこうにあるたくさんの想いを頂いたような気がする。

なるべく地域の方々の力を中心に、私たちはお手伝いさせて頂く形の企画ができたらと願ってきたので、今回、地域の方々のコラボで企画が実現できたことは本当に嬉しいことだった。

この後、多賀城民話の会の方々とおおぞら保育園との交流も実現したそうだ。プロジェクトをきっかけに地域の力が活性化するとしたら、こんなに喜ばしいことはない。

＜漫画展と漫画トーク＞

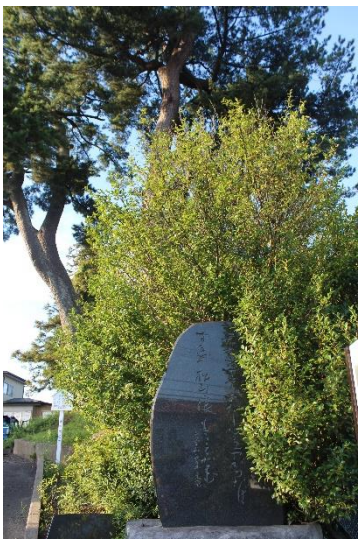
漫画トークは地元の方と支援者で席が埋まり、リピーターもいた。漫画展の感想にも、「毎年ありがとうございます」「今年も楽しみにしてきました」「来年も楽しみにしています」など、短いながら継続的な取り組みが認知されていることがうかがわれる。

「来談者の手にする幸運に同席する。とても素敵な場面だなぁと思います。分からない未来にむけて一歩踏み出しているという言葉に勇気を頂き、明日からまた楽しんで生きて行きたいと思いました。」という感想のほか、「すごくいい話だと思いました。これほどいい応援はないと思った。（小２男子）」という声もあって、何かがきちんと届いているんだなと感じることができた。

来年、この図書館に大きな変化があるが、

時間経過による社会変化とともに、このプロジェクトもある。変化は、十年続けることがもたらす必然とも言えるだろう。復興とはそういうものだ。

次年度から開催を引き継いでくれることになっている C.C.C.のスタッフの方々との交流、意見交換も活発に行われた。寂しい思いもあるが、生まれ変わる多賀城図書館が地域の人々が集える良い場所になるといい。また来年を楽しみに。



◀末の松山

宮古

＜11月5日気仙沼へ＞

一日早く前乗りして、公共交通機関を使って沿岸部を旅してみることにした。ずっと、三陸鉄道に乗って、沿岸部を回ってみたいと思っていたのだ。新大阪を 7:50 発に乗って、東京、一関を経由、JR 大船渡線で気仙沼 14:09 着。まずは、タクシーで気になっていたリアスアーク美術館へ。このあたりも平地で水が来たそうだ。運転手さんの家は大丈夫だったが、被災した知り合いも多いとのこと。防波堤についてさりげなく話題にすると、自分らは海を見て育ってきたし、海を見て判断するから、本当は嫌なんだけれど、上が決めることだから仕方ないとあきらめ口調で言っていた。

リアスアークの展示は、かなり個性的でおもしろかった。展示の意図が明確で、被災者の立場から、自分たちのことは自分たちで主体的に考え実行すべしというメッセージにあふれている。リアスに津波はつきもので、それを含めた津波文化を伝承すること。2006 年に昭和の大津波展をやったが（リアルな絵画）、住民の 1％も来ず、震災を迎えてしまった。「がれき」「未曾有」という言葉の使い方はどうなのかとの問題提起が印象に残る。

足がないので、タクシーを呼んで気仙沼港へ。2 千円強。復興の状況が気になって来たのだと言うと、運転手さんがいろいろ説明してくれる。元は水産業に勤めていたが、被災して、小さな個人の会社だったため再建できず、解雇となったそうだ。それでタクシーに乗るようになった。魚市場も地盤沈下で、かさあげして床が高くなっている。この運転手さんは、みな防波堤に賛成ではないが、いつのまにか決まってこうなったと言う。

「(仮称)気仙沼湾横断橋」建設中

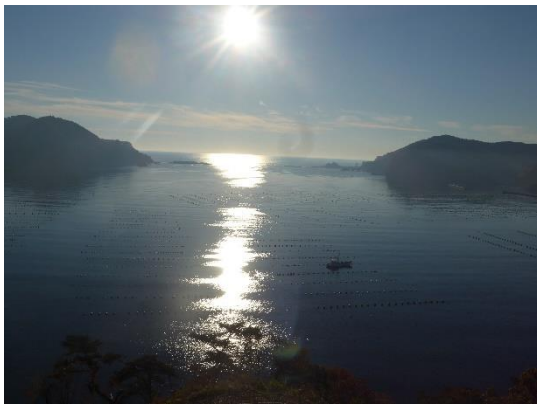
気仙沼港 船舶陸上電源供給施設
No.1
【陸電】
気仙丸
テーマ：メッセージ
昔の気仙沼に戻りますように。
いっぱい魚が取れますように。
遠くに行ってる父さんが帰って来ますように。
海の再生支援プロジェクト
日本財団
The Nippon Foundation

気仙沼お土
気仙沼市

東北は暗くなるのが早く心細いので、早々にタクシーで引き上げ、駅で BRT を待つ。BRT とは震災で運休となった JR 線のバスサービスで、気仙沼と盛をつなぐ大船渡線の線路敷をバスが走る。途中一般道を走る部分もあるが、線路内を走っている時には、自分の乗るバスが遮断機の中にいる格好で、時々混乱する。

途中、「奇跡の一本松」という駅もあった。線路を埋めたコンクリートの専用道路と一般道路の両方を通る。「高田高校」からはたくさんの高校生たちが乗ってくる。とくに被災の影響を感じさせない。10 分ほど遅れて 7 時半前に到着。バスの終点は盛駅の 1 番ホーム。

その夜は、新しくできた大船渡温泉に 1 泊した。露天風呂から流れ星を見た。



＜11 月 6 日三陸鉄道に乗って＞

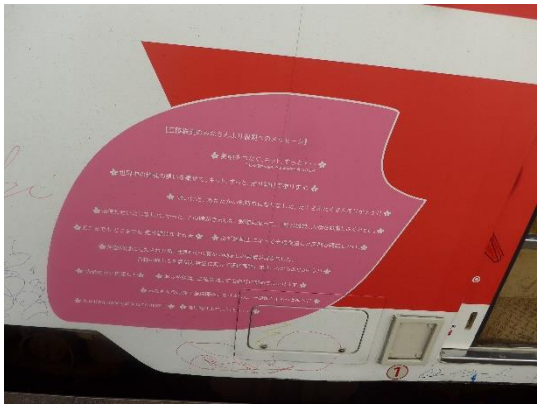
8 時半にタクシーを呼び、大船渡から三陸鉄道リアス線で釜石まで。9:13 発 10:05 着。ずっと海沿いを走る。秋の紅葉日和で海も青く美しい。

釜石まで９つの駅があって１時間弱の行程。お天気も良く、車窓から青い空と海が交じり合う美しい風景を眺めることができる。駅ごとの個性的なしつらいがまた楽しい。恋し浜駅には、ホタテの貝殻でできた絵馬が待合室の窓にびっしりと飾ってあるし、三陸駅には干し柿が暖簾のようにつるされている。平田駅から大観音を臨むともう終点の釜石だ。

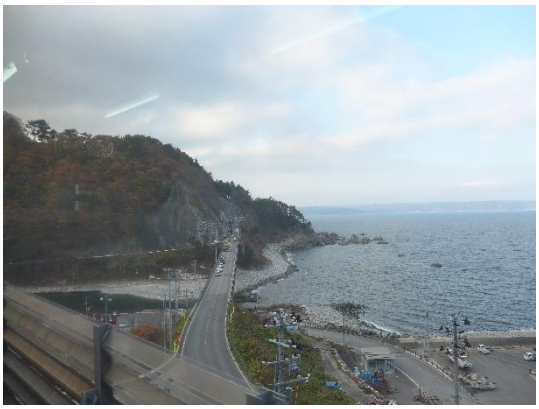
科学の光
さんりく
三陸
SANRIKU
(岩手県大船渡市)

それにしても、どこもかしこも防潮堤の工事中。釜石・宮古間をつなぐ JR 山田線は復旧のめどが立たず、バスを乗り継いで宮古まで行くことになる。釜石を 10:36 発のバスに乗り、山田に 11:24 着。さらにバスを乗り継ぎ、山田を 11:45 発で宮古に 12:45 着。遠い道のりだ。

宿となる熊安前でバスを降りて荷物を預け、そのまま三陸鉄道宮古駅へ。ラッピング列車になっていて、サクラの花びらには、たくさんのメッセージが書かれている。



祝 ありがとう！
ご支援に感謝 さあ一緒に出発進行！



たろう

宮古からはまた三陸鉄道の北リアス線が走っているので、終点の久慈まで乗ってみる。13:15 の北リアス線に乗り、終点の久慈に 14:50 着。途中、16 駅あって、こちらは 1 時間半ほど。2 両編成の小さな列車だが、あまちゃんブームでにぎわっていた。

久慈をぶらぶらして、16:05 発に乗り、宮古に 17:45 着で戻ってくる。

赤や黄色に色づいた山々と輝く海の美しさに始終ワクワクしながらも、実は、南から北まで海沿いに延々と防潮堤の工事が始まっていることが気にかかっている。これからはこんなふうに海がブロックされていくのだろうか。宮古でも、湾岸道路の周辺は大規模改修工事が進み、新たな防潮堤の長大な壁が築かれつつあった。昨年、一昨年の光景との違いに戸惑いを隠せない。

チェックインをすませ、打ち合わせ会場であるよし寿司へ。

＜11月7日宮古でのプロジェクト＞

岩手では5年目だが、宮古での開催は3年目である。8:45にピックアップしてもらい、今年の開催場所である「シートピアなあど」へ向かう。会場設営と打ち合わせ。

漫画展の看板には昨年作成したペイントアートのシーツとプログラム紹介をうまくディスプレイしてくれている。1階ロビーには、立命館大学理工学部の協力のもと地元住民が構想案を出し合って作成した「なあど」周辺の鍬ヶ崎地区未来予想ジオラマが展示されていた。

「なあど」での開催は、以前より検討していたが、なかなか会場の日程が合わず、今年初めての試みとなった。漫画展にはこれまでより立ち寄って足を留めてくださる方が多く、プログラムの方にも昨年より多くの方々にご参加頂けたように思う。

午前の漫画トークには 20 名ほど入り、開会の挨拶時、昨年も見かけた方、最初の挨拶時に涙ぐんでおられる方など数名のお顔が眼に入る。それぞれにいろいろな思いがあって来てくださっているのだろう。

「語り継ぎたい宮古の伝承」では、NPO法人かわい元気社事務局長の横道廣吉さんが、宮古に伝わる「義経北行伝説」について語ってくれた。義経は平泉で自刃したとされているが、宮古においては、亡くなったのは義経の家来であり、義経は逃げ延びて東北を渡り歩いたとされている。その伝説に関わる神社や物が今なお多数残っているそうだ。義経伝説に興味があってプログラムに参加したという地元の女性２人組がいて、興味深かった。

若竹会の企画「アートで遊ぼう」は、いつもながら若竹会の皆さんのクリエイティブなアイディアに感心するばかりである。漫画展の背景に昨年の「アートで遊ぼう」で製作したシーツ絵をさりげなく使ってくれているかと思えば、今年の製作は浄土ヶ浜の立体図で、福祉祭りでの展示を予定してくださっているとのことだ。

やりっぱなしにせず、次につなげていく発想に学びたいと思う。若竹会のスタッフや利用者のみなさんとの再会、アートの協働が嬉しい。

また、今年は勉強熱心な若竹会のみなさんからの強い要望があり、宮古でも「支援者支援セミナー」を実施した。立命館チームも入れて参加者15名。

ホワイトボードに事例の概要を書いたうえで、おおざっぱに今日の流れと趣旨の説明、事例提供者の問題提起。

地元の方が提供してくれた事例は、障害のある成人男性と高齢の父親二人が、被災して自宅を失くし、避難所、仮設住宅、復興住宅と点々とするなかで、さまざまな問題行動が現れ、地域が困っているというものだった。

さまざまな条件を考慮した結果、リフレクティング・プロセスを使った事例検討をすることにする。「A支援者チーム」と「B支援者支援チーム」に分け、まずは、Aチームで話を明確化する。30分ほど話したところでBチームへ。必ず、皆一度は発言するようにして40分。再度、Aチームに戻り、あらためて思ったことの共有15分。

最終的に、被支援者の問題というより、災害後の宮古のコミュニティをどのように再建するかという問題だということが確認された。土地や企画者の個性を十二分に感じ、私たちにとっても学びが大きかった。

「今回の事例検討会では地域をこえて、様々な方と話し合え、いい機会だった、支援者だけで留まらず、地域住民を巻き込んだ話し合いもやってみたい。(30代男性)」「直接の支援者と一歩離れた視点で意見の違いなど見ることができとても勉強になりました。(40代女性)」「自分のものさしで考えることなく、視野を広げてみることが大切だと思いました。(40代男性)」など、生活経験や支援経験が異なる者たちが集まり、多様な視点で議論することの意義がアンケートにも反映されていた。

夜の支援者交流会では、今後のネットワークや来年に向けての積極的な反応が返される。十年後も積み重ねてきたものが地域の力として続いていくように、私たちはきっかけで、現地の力を中心にプログラムを運営することができるようにと願ってきたこともあり、だんだんとそんな形になってきたことを嬉しく思う。

＜11月8日田老フィールドワーク＞

朝 10 時、皆でジャンボタクシーに乗り込み、宮古市田老地区へ。今年も宮古市観光協会「学ぶ防災」ツアーに参加した。

昨年は駐車場だった土地がグランドになり、丘には復興支援住宅が建ち、震災以前にあったものより 4m も高い防潮堤が造られている最中だった。

去年のガイドさんのお顔も見かけたが、今年のガイドさんは女性で、自宅が被災し、義母が流されたという方だった。

浜にはわかめ小屋が並んでいるが、漁師の家は子どもからお年寄りまで仕事を分担する家内工業である。義父は漁師で、戦争と昭和の津波を体験していた。お酒が入るといつもその話をしていたが、自分は「また始まった」という感じで聞いていた。今はそれを後悔しており、たとえ自分自身がみんなから煙たがられても、うるさく伝える役を引き受けようと思っている。

ご自身は浄土ヶ浜のボート観光で働いていて、あの時、ボート観光が始まる少し前、団体の観光が入り、船を出して戻ってきたところだった。船のエンジンが温まっていたので、船長は沖へ出ることを決意し、3 日間、沖で過ごしたそうだ。その間、カモメの餌を食べてしのいだという。

津波のなか一人で沖に出る船乗りの話は何度か耳にしたが、思い浮かべるだけで、恐ろしく壮絶な光景だ。

津波てんでこで、自分も高台へ逃げた。てんでこは、子孫を絶やさないため、家族の絆を信じてそれぞれ逃げるということ。戻った人たちは流された。自宅は浄土ヶ浜の近くにあり、義母が流された。あの時戻っていたらと思うこともあったが、夫とその話題はできない。でも、今は、逃げて良かったと思うことにしている。その分、防災を訴え続ける覚悟だ。

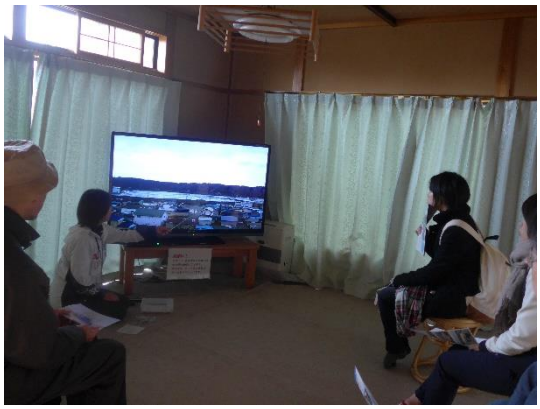
義父は漁師だったが、船を失い、仮設に入ってテレビ（朝の暴れん坊将軍や夕方の水戸黄門など）を見るだけの生活になってしまった。これではと、夫と相談して家を買うことにしたが、新しい家に移る前に、心臓病で亡くなってしまった。2011 年暮れのことである。宮古には医者がおらず、救急所で盛岡まで運ばれたが、手遅れだった。仮設から出るのも微妙である。あいさつをしたり、「また遊びに来てね」とも言いにくい。互いに心情はわかっている。

第一防潮堤に並べられていた石は墓石だったことが、工事中、古文書からわかっ

たそうだ。今は一部が残っている。逃げている最中に交差点で衝突しないよう道の角が直角でないことなど、津波の被害に遭ってから気づいたことがたくさんあった。このガイドさんは、防潮堤に賛成だった。最善の防災をすべき、気を緩めてはいけない。切迫した思いがビンビン伝わってくる。

高さ 10 メートルの防潮堤から周囲を眺めた後、津波水位 17.3 メートルの表示がある製氷施設を見る。たろう観光ホテルは工事中で、5 階までの非常階段を設置しているところだった。ガイドとしてのこれまでの経験から、まんなかにエレベーターを設置してほしいと訴えている。高齢者には 5 階まで階段を上るのは無理だし、雪の日などですべって落ちたら危険。宮古市に要望書を出し続けているが、自分たちの声はなかなか届かないという。

最後に、集会所で、「たろう観光ホテル」社長が撮影した津波のビデオを観た。去年も同じものを観たはずなのに、衝撃が大きすぎたのだろう。初めて観るように感じる場面もあった。この場所に来て、ちゃんと説明を聞きながら観てもらいたいという理由で、このビデオはマスメディアに公開されていないというのにも頷ける。防潮堤の内側には野球場が建設中だった。



昨年と同じコースだが、それから大槌に向かい、福幸きらり商店街で昼食をとる。2011 年 12 月に大槌北小学校の校庭にオープンしたプレハブの仮設店舗。それから、城山公園に上り、町の様子を眺める。かつては大槌の町を一望できたのだろうが、現在は、相変わらず空虚な状態のままある。

今年は空港に戻る前に、急遽、遠野の古民家に立ち寄ることにし、見学させてもらう。遠野物語や民話の語りをやっている大平悦子さんのご自宅だ。私は昨年泊まらせて頂き、語りも聞かせて頂いた。今回は急だったため、大平さん自身はお留守で、家守をしているお連れ合いさんが出迎えてくださった。

なんだか懐かしい感じがする古民家と

古道具、いろりや吊るし柿など、昔話の中に入り込んだ錯覚を覚えたひと時だった。

つづく

病児保育奮闘記

(19)

子どもサポート H&K
大石　仁美

嘔吐.下痢は要注意!

ウイルスの種類はいろいろあるでしょうが、嘔吐、下痢と聞くと、スタッフはかなり緊張します。

かつては、ロタウイルスでこわい経験をしたことがあります。「シャーッ」と異様な音が聞えてくるのです。下痢をした音です。つかまり立ちをしている子の紙オムツを覗いてみると、まるでおしりが水様便の中で泳いでいるよう。

一度の量が多いので、みるみる脱水に。あわてました。ふっくらとした可愛い子のまぶたが萎んでいくのが分かるのですから。ワクチンが出来たおかげで、ロタは近年みられなくなりました。本当に医学の進歩はありがたいです。

冬場に流行るノロウイルス。こちらも大変。それでも、対処の仕方が広く行きわたり、衛生管理が行き届いてきたことなどから、減ってきたなあと実感しています。

どんなウイルスにしろ、処理を誤って、他の子どもに感染させてはいけないし、嘔吐で水分が取れなかったり、取れたとしても、下痢がひどくて、脱水が急激に進んだりしたとき、救急

嘔吐の激しいＡちゃんの場合

普段はとってもひょうきんで、活発な３才のＡちゃん。お母さんに抱っこされてやってきました。昨日から嘔吐が続き、朝ごはんも全く受け付けなかったよう。よほどしんどいのか。布団に寝かせると、うつぶせに臥せったまま、動こうとしません。

小さい子どもがじーっと臥せったまま動かないというのは要注意の症状です。子どもは熱があっても、鼻水が垂れ流しで息がしんどそうでも、泣くことはあっても、動かないということは滅多にありません。昨日から嘔吐が続いているとすれば、睡眠不足もあるでしょうが、それだけではなさそうです。これは注意深く観察しなければいけません。普段のＡちゃんを知っているだけに異様な雰囲気なのです。

スタッフはみな緊張しました。

熱は３７・４℃　この程度なら熱があるとはいえないけれど、微妙なところ。脱水のせいもあるでしょう。可能なら一口ずつでも水分を取

らせて様子をみることにしました。

「あっ、Aちゃんが吐いたよ！」保育士の声で急いで駆け付けると、うつ伏せに寝ているシーツの周りが、粘調な黄色水様液でべっとり汚れています。食事をとっていないので、食物残渣はありません。「しんどいね。」身体をさすりながら声をかけると、薄目を開けて、身体をねじるようにして起き上がろうとします。そしてまた、布団にバタン。自分の一番楽な体位で横になりました。そしてそのまま目を閉じました。眠ってしまいそうな様子なので、しばらくそっとしておくことにしました。

１０分後「あっ、また吐いた！」

少量ではあるけれど、その後１０～２０分間隔で、3回の嘔吐。これはやっぱりいけません。入室してから2時間が経過。排尿がまだなのも気になります。とりあえず親に報告しなくては。お仕事が忙しくてもどうかお母さん、電話に出てくださいねと祈るような気持ちで連絡を入れましたら、携帯電話にすぐ出てくれたので、ほっと一安心。Aちゃんの様子を報告しました。案の定お母さんは手が離せない様子。

「そちらの判断にお任せしますのでどうぞよろしくお願いします。」

「わかりました。それでは今から病院につれてまいります。」

午前中の診察が終わらないうちに急がなくてはと、近くの総合病院に電話を入れ、タクシーを手配。ほどなく病院に到着し、荷物を肩にかけ、ぐったりした子どもを抱いて、受付に走りました。受付のスタッフは、長椅子に座って、子どもを抱いたまま、受付用紙の記載に四苦八苦している私を見かねたのか、窓口から出てきてくれました。子どもの方を抱きとめようとしてくれましたが、Aちゃんが嫌がります。それで、用紙記入の方を手伝ってくれました。なんと親切と感激。小児科外来に電話連絡してくれたので看護師さんたちが待機してくれていて、スムーズに医師の診察を受けることが出来ました。

医師は、以前もお世話になったことのある穏やかな年配の先生でした。予想どおりの脱水で、輸液を開始。ベッドに寝かせるときの、情なさそうなAちゃんの顔を見ていると、昔もこんなことがあったなあと、自分の子どもが何度か点滴をうけた時、泣き叫んでいた情景を思い出し、その時の緊張感がよみがえってきました。「がんばって！Aちゃん。」

ずーっとそばに付き添っていたいのに、看護師さんに追い出されて、しかたなく、部屋の外で待つことに。待つことの長いこと。廊下に貼ってある「予防注射をうけよう」というポスターや、ドクターのスケジュール表、お知らせの張り紙、子どもが喜ぶキャラクターの壁飾りなど、ぼんやりと眺めているうちに、やっと「どうぞ」とドアが開きました。

Aちゃんは処置室の隣のベッドルームに寝かされていました。処置が終わってほっとしたのか安堵した表情。「がんばったね。」と手を握っていると、そのままスーと入眠しました。

子どもの寝顔は、不思議な力を持っているものだと思います。大人の寝顔も良いけれど、子どもは格別。いつまででも眺めていたい。あどけなさ、無心、小さな、か弱い生き物。希望、そして癒し。その小さな命に底知れないエネルギーを秘めて、おとなを励まし勇気を奮い立たせる、そんな存在。お母さんはきっと心配しているだろうな。お家のみんなにとって、宝物のAちゃん。宝物が気持ちよさそうに眠っている。そのそばで、点滴がぽとりぽとりと小さなしずくで落ちていくのを眺めながらどんなにほっとしたことでしょう。

さあ、もうすぐ終わり、と思っていたら、脱水が強いので、もう一本追加しますとのこと。

時計は２時を少しまわりました。予定の時間に帰れそうもありません。病児保育室に電話を入れて経過を報告。すると「長くなるようなら、交代します。」と言って、保育士さんが自転車でかけつけてくれました。私がその自転車ですぐ帰れるようにと嬉しい配慮。職場に帰ってすぐ、お母さんにもう一度電話で報告をし、遅めの昼食をとりました。なんだか食べたのか食べてないのか分からないような昼食でした。

「３時過ぎに母親と交代しました」と保育士が帰ってきて、やっと一件落着です。

対人支援点描（15）

「当事者という存在」

小林　茂（臨床心理士/牧師）

はじめに.

今回の点描が出版される頃には、開催後になってしまうのだが 2018 年 8 月 25 日土曜日に「HIV と仕事」というテーマで市民向けのシンポジウムが開催されることになった。筆者は、はばたき福祉事業団北海道支部という HIV/AIDS 罹患者支援の活動をする団体の派遣カウンセラーという立場でもあり、これにまつわるテーマを取り上げたいと考えた。

この「HIV と仕事」という企画は、もともと年間計画で予定されていたものではなく、2018 年 7 月に札幌で起こったひとつの事件から緊急で企画されたものである。

1. 事件の経緯

公共団体のソーシャルワーカーの求人に応募した男性が HIV に感染者ではないという“虚偽”の申告をしたため内定を取り消された、という事件であるが、以下は、新聞などの報道の記録である。

〇時事通信「ＨＩＶ感染不告知で内定取り消し＝社会福祉法人を提訴」（2018 年 7 月 13 日）

「エイズウイルス（ＨＩＶ）感染を申告しなかったことを理由に、病院が就職内定を取り消したのは違法だとして、北海道の３０代の男性社会福祉士が１３日、病院を運営する社会福祉法人「北海道社会事業協会」（札幌市）に慰謝料など３３０万円の損害賠償を求め札幌地裁に提訴した。

訴状によると、男性は昨年１２月、道内の病院のソーシャルワーカーの求人に応募し、ＨＩＶに感染していると告げないまま内定を得た。しかし、以前に患者として受診したカルテを病院が発見し、電話で「話が違う」などと指摘。男性はとっさに感染していないと否定した。病院は、虚偽の事実を伝えたなどとして内定を取り消した。

提訴後に記者会見した男性は「勝手に人のカルテを見ることが一番の問題点。医療水準は格段に進歩しているが、社会的には差別、偏見が残っている」と話した。

北海道社会事業協会は「訴状が届き次第、検討したい」とコメントした。」

〇共同通信・日本経済新聞社「ＨＩＶ感染告知不要と提訴　病院の就職内定取り消し」（2018 年 7 月 13 日）

エイズウイルス（ＨＩＶ）感染を告げなかったことを理由に病院の就職内定を取り消されたとして、北海道の 30 代男性が 13 日、病院を運営する社会福祉法人「北海道社会事業協会」（札幌市）に対し、慰謝料など 330 万円の支払いを求めて札幌地裁に提訴した。

訴状によると、男性は昨年 12 月、道内の病院の求人に応募。ＨＩＶ感染は告げず、ソーシャルワーカーとしての採用が内定した。１月、男性が以前受診した際のカルテを見た病院側から「話が違う」と電話があった。その後「就労に問題はなく、職場で他者に感染する心配もない」とする主治医の診断書を病院側に送ったが、内定を取り消されたとしている。

男性は、厚生労働省のガイドラインなどに反していると主張。提訴後に記者会見し、「納得がいかない。ＨＩＶに対しては社会的に根強い差別や偏見があり、現状に一石を投じたい」と訴えた。

北海道社会事業協会は「健康問題に関する質問に対し、原告が虚偽の回答をしたことが内定取り消しの理由」とし、争う考えを示した。

2. 問題点

（１）虚偽の申告の問題

筆者は、法律の専門家ではないため、正直理解が及ばないことがある。しかし、今回の事件の北海道社会事業協会の主張は「原告が虚偽の回答をしたことが内定取り消しの理由」であるという。通常の採用時の面接において、求人を出し、雇用を決める企業側の立場からすれば、求人に応募した人から虚偽の履歴や情報がもたらされるとしたら問題となるのは疑いない。多くの場合、採用面接時や履歴書の内容に虚偽がないか、ある程度までは信用するしかない。明らかになるまでわからないといえる。

以前、テレビに頻繁に出演していた経営コンサルタントが、アメリカ留学していた先の大学院を卒業していなかったということが明らかになり、メディアから消えたということがあった。履歴に偽りがあったため、信用を無くしたのである。

こうした例を挙げてみると、履歴が偽られるということは、その人の能力や資格・学位といったものも含めて、業務を遂行する能力も疑わしく、雇用者側の信用も被害が大きい。虚偽が明らかになった段階で、双方が損害を被ることになる。

また、私事であるが、以前、私が勤めていた国家公務員の機関では、採用時に本人や家族、親類に反社会的勢力や政治活動をしていた者がいないかの聞き取りがあった。履歴だけではなく、個人を取り巻くものに対しても注意が払われたのである。このことを例に挙げれば、雇用者が採用する予定の者の身辺をある程度調査することは、雇用者側の組織防衛と責任においてないわけではない。（ただし、私の場合は、採用面接時において、どの人に対してでも調査や聞き取りをするという予告があった。）

だが、今回の健康問題の虚偽は、内定を取り消す理由として、どの程度の正当

性を帯びるのだろうか。これが、B や C 型肝炎や糖尿病という話であるならば、どうであろうか。内定が取り消される事案となったのだろうか。それとも、健康についての虚偽の内容が HIV に関連するものだから問題になったのであろうか。

虚偽には違いないが、内定を取り消す理由となる事項であるのだろうか。

（2）患者の同意がないカルテの目的外使用

今回の事件が複雑なものにしているものに、患者の同意がないカルテの目的外使用の問題がある。今回内定を受けた男性は、その付属の病院の受診歴があったことがわかっている。だからといって、その男性が就職試験を受け、内定をもらったあとに、受診したカルテを見て、事実確認を行う、というのは、明らかに治療のためにカルテを参照したということではない。また、本人の承諾もないままに、これが行われたということは論外である。

さらに、無断で、目的外で、使用されたカルテの内容に基づいて真意が問われたというのは、そもそも虚偽の内容以前に病院側に問題があるというべきものである。

もし虚偽の責任が男性にあるとしても、カルテの取り扱いに関する不義は病院にあるといえると考える。

法律的には、虚偽の以前に不義があるのだから虚偽に当たらないのか、それとも、虚偽は虚偽、不義は不義と別々に扱うものなのか、この辺りについても専門家に聞きたいところである。

（3）HIV/AIDS への偏見と HIV 罹患労働者への影響

今回の内定の取り消しの理由が、例えばソーシャルワーカーという職種であっても、医療関係者が HIV 罹患者であるということで、他の患者や家族に不安や動揺を与えるからという憶測であるならば、どうだろうか。

これは、あくまで憶測であるが、もしそうならば医療機関として HIV に対する知識や理解があまりにも乏しいとしか言いようがない。

現在の HIV 治療は、大昔と違い HIV 治療薬を服薬すれば、糖尿病などの慢性疾患とほぼ変わらない状態まで安定を見せている。平均寿命に至っては、健常者と変わらず、むしろ糖尿病患者の平均寿命の方が短いという研究データが出されている。感染については、最近増加している梅毒などの性病など比べても、格段に感染力が弱い。

また、今回の事件の影響を考えると、労働者は自らの持病に対して雇用側に、どれくらいまで情報を提供しなければならないのだろうか。HIV 罹患者は、自分が罹患者であると公言や申告して生きていかなければならないのだろうか。それを求める企業はあるのだろうか。もちろん、特別な配慮を求める以外に企業に自らの病気を伝えることがなければ、企業の方から強いて申告を求めることもない。それゆえに、今回の事件は、企業に勤める HIV 罹患者の労働者にとっても不安を募らせるものではないだろうか。

HIV に罹患していることを雇用者に伝えていないと、重大な問責事項になるというのだろうか。

3. 偏見差別と無理解

筆者は、長らく統合失調症の当事者とかかわってきた。その後、HIV/AIDS の分野にもかかわることになった。これらの領域は異なるが、共通して偏見差別と無理解というスティグマの問題を思う。理解が及ばないものへの不安や恐怖は、排他的な言動を生み、差別を生み出す。

また、今回の件でも、当事者は社会的な弱者として身を置かなければならない現実を思う。

今回は、半ば公共団体で、それも一番疾患に対して理解があるはずの病院という医療者集団の場で事件が起こったことに問題の深さを感じる。

私自身、支援に携わり、同業の者でも、その専門領域外の医療・福祉支援者と出会うと知識のなさを知らされることが多い。そういう意味でも、啓発活動は続けていかなければならないことを思わされる。

今回の事件が、社会的に意識を喚起されるような良い方向へと向かうことを願わされる。

海の向こうにでて見れば

（11）変化

石田 佳子

生きているものは、常に「変化」と切っても切れない関係にあります。そして変化には、「生産、拡大、進歩」といった（一見） positive な面だけではなく、「衰退、縮小、退歩」という（一見）negative な面もあるのが必定です。今回はこの約 5 年間を振り返って、マレーシアと日本に見られる社会の変化と、マレーシアに移住した自分自身の変化について考えます。

以前のクアラルンプール

私が初めて訪れた 5,6 年前、クアラルンプールの街には、日本ならスクラップにされそうなオンボロ車、無造作に捨てられて通路を塞ぐゴミの山、食堂の床を走り回る太ったねずみ、物乞う人の姿などが溢れていました。中心部では高層ビルやモノレールも見られましたが、郊外へ足を延ばすとジャングルのような空き地と、大地を切り拓き張り巡らせた高速道路が延々と広がって、その所々に朽ち果てそうな家屋がひしめく集落や、周囲と不釣り合いな高級コンドミニアム群などが点在している印象でした。

買い物の支払いは主に現金で、カードの使用に少し不安を覚えました。店舗の設えや人の服装はどこか野暮ったい感じで、どの店へ入っても同じような食べ物（甘辛くて脂っこいお料理と、砂糖と練乳がたっぷり入ったお茶）が出て来ました。タクシーはメーターのない車両が多く英語が通じ難いため、乗る前に値段の交渉をしなければならないのが骨でした。電車もバスも本数が少なく不便でしたが、運転手や乗客は人懐っこく親切で、乗り合わせた客同士で世間話に花が咲く和やかな光景がよく見られました。

近年のクアラルンプール

しかし、この数年の間に、街の様子は激変しました。道路や舗道は整備されてピカピカの新車や高級車が往き交うようになり、街中にはゴミ箱とリサイクルボックスが設置されて衛生状態は格段に良くなりました。中心部と郊外を結ぶ近代的な鉄道が開通して長距離の移動が便利になり、郊外にもお洒落な飲食店街や巨大なショッピングモールが増えています。

また、支払いはキャッシュレスが主流となり、無人で支払いができる場所もあります。街並や人々は目に見えて垢抜け、高価なブランド物を身につける人も増えています。急速に健康志向が昂まり、オーガニック食材やサプリメントの店、フィットネスジムの数が増えました。和食などの各国料理が浸透し、バラエティに富んだ外食が可能になりました。（配車や支払いをスマホで行う）Grab 車がタクシーを上回るほど増え、安く便利に利用できるようになりました。電車やバスの中では、ほとんどの乗客たちが、手元のスマホに見入っています。「物価が上がって生活が苦しくなった」との声も耳にしますが、富裕層や若者たちを中心に概ねこの変化は歓迎されているようです。

マレーシアで目にする「生産、拡大、進歩」という変化

もともとマレーシアは多民族（マレー系、中華系、インド系）を受け入れている国ですが、近年ではより一層多国籍化（特に中東やアフリカなど）が進んでいる印象です。また、子どもと若者の数が多いせいか、若さと活気が漲っている印象です。未だに日本では有り得ないほど雑な面（公共施設や設備の故障など）もありますが、国全体が「生産、拡大、進歩」という『右肩上がり』の流れに乗っているようで、「新しいものをドンドン取り入れて変わろう！」とするバイタリティや、「不完全でも受け入れる」「失敗しても気にしない」といったおおらかさ、「明日はより良くなるはずだ！」という楽天性に溢れているように感じます。

近年の日本（大阪、京都）

では、日本はどうでしょうか？マレーシアに住み海の外から眺めている私には、見えない部分もあるでしょうが、約 5 年間定期的（約半年毎）に帰国して感じるのは、外国人の数が増えていることと日本人（特に子どもと若者）の数が減っていることです。

繁華街や観光地などでは、以前より多くの外国人（観光客）の姿が見られます。今春帰国した際には、大阪の繁華街を闊歩する中国人団体客の多さと、彼らを呼び込むドラッグストアの店員さんが話す中国語の流暢さに驚かされました。また、京都に昔からある商店街（錦市場）で、年配の店主が英語と中国語を共通語のように受け入れて接客しているのを見て感心しました。

一方、少しでも郊外に行くと、シャッターが降りた店ばかりの商店街や、人の住む気配のしない民家などが増えています。自宅のある大阪の郊外では、（通勤時間を除くと）人影が疎らで老人の姿しか見えず、細々と営業して来た少数の商店や飲食店がじわじわと閉業に追い込まれています。

日本で目にする「衰退、縮小、退歩」という変化

総務省統計局によると、日本は 10 年連続して人口が減少しており、その減少幅は 6 年連

続で拡大しているそうです。ただ人口が減るだけではなく、若者が減少して高齢者が増える中で、全体人口が減って行くのです。また、国土交通省は、2050 年までに「人口が半分以下になる所が、現在の居住地域の 6 割以上」と予想しているため、「限界集落」や「廃村」の問題は他人事でなくなるでしょう。

http://www.stat.go.jp/data/jinsui/img/pop.gif

海の外から日本を見ると、そのような現状や（隣の国々で起きている）激しい変化からあえて目を逸らすかのように、有名人のスキャンダルやその場凌ぎのエンターテイメントなど目先の話題に拘泥しているようで、違和感を覚えます。

まるで国全体が「衰退、縮小、老い」という『右肩下り』の現状と向き合うことを避け、守勢にまわっているようで、だからこそ「これからどうなって行くのだろう？」「本当に大丈夫なのか？」という不安を禁じ得ません。

社会全体が「生産、拡大、進歩」という『右肩上がり』の流れにあり、それが当分続くと思える時には、「今我慢すれば、後で成果が得られる」とか「頑張れば、目標を達成できる」というファンタジーに基づく生き方も可能でしょう。しかし、社会全体がそれとは逆の流れに変わったら、従来とは異なるマインドセット一例えば「嫌な会社は辞めても良い。無理をしない」とか「限られた資源（時間、エネルギー、パワーなど）を有効に活用する」などーに変えることが、必要ではないでしょうか？

私自身の変化

自分のことに目を向けると、早期退職して移住したばかりの頃には、有り余る時間を「自分のため（だけ）に時間を使うこと」に理由のない罪悪感を覚え、少し途方に暮れていました。異国という勝手の違う環境の下で、語学力が不十分だったこと、治安に不安があったことから、一人で出歩くこともままならず、「もっと有意義な時間の使い方をしなくては！」と焦っていました。

今思えば、外側（環境や生活の仕方）を変えることは出来ても、内面（染みついた無意識の価値観や考え方といったマインドセット）を変えることが出来なかったため、齟齬や葛藤が生じて空回りしていたのでしょう。既に引退しているにも関わらず、現役時代の手応え感とやり甲斐が忘れられず、「何か私に出来る事はないか？」と対人援助のフィールドを探してもいました。

ちなみに、日本人には「時間を有効に使う」とか「効率的に動く」という身の処し方、「そ

れが善である」という思い込みが、根強く染み込んでいると思います。日本の社会が極めて効率良くシステマティックに動いているため、それに適した行動様式が、もはや意識すらしないレベルの「常識」になっているのです。そしてそれ故に、海外に出て「そうでないのが当たり前」の現実に出くわすと、（イライラしたり怒ったりの）カルチャーショックに陥るのです。その後、いつしか一意識するしないに関わらず一、「（日本の常識を捨てて）目前の現実を受け容れるか？/（不満を抱えたまま）ストレスを溜め続けるか？」の二者択一を迫られ、前者を選んだ者が海外生活に馴染んで行くのでしょう。

話を戻すと、私の場合、生活の仕方については、割とすんなり変える事ができました。むしろ「外国人の集まる高級住宅地で暮らすより、日本人のほとんど居ない下町で暮らす方が、安全だ」と考えていたため、当初から地元の人たちが食べている物を食べ、着ている物を着て、同じ様に振る舞うことに、ほとんど抵抗を感じませんでした。

それが功を奏したのか、言葉の壁が低くなるに従ってーおそらく内面も徐々に変化してー、活動の範囲を広げ、見知らぬ土地を一人で散策したり、貧困地区に通って難民の子ども達と関わったりするようになりました。その結果、これまでは「内向的で、自分の世界に閉じこもりがちな、インドア派」と思っていた自分のことを「好奇心旺盛で、どこへでも一人で行き楽しめる、行動派」と捉え直すことになりました。

私自身の「老い」

しかし近年では、以前にも増して風邪を引き易くなり、体力&気力の衰えと、健康への不安を感じています。客観的には「年相応にエネルギーが枯渇して来た」「少しずつ無理がきかなくなり、できない事が増えて来た」ということでしょう。もし私が日本に居たら（誰もが真面目に働いているように見えるので）、そんな自分を「情けない」「不甲斐ない」と思っただろうと想像します。けれど今は、「ちょっと待てよ。。」と思うのです。「年をとれば誰でも衰え、“できない事”が増えるのは、自然なのに、まるで悪い事のように思わされる社会って、ちょっと厳し過ぎないか？」「老いと向き合うことが難しくて否認したり、渋々認める時には敗北感や喪失感にまみれるのって、変じゃない？」と。。。

人生のタイムテーブル

誰かが、《人の一生（80 年間）を一日（24 時間）に喩えると、20 歳は朝 6 時で、これから何でもできる時。。60 歳は夜の 6 時で、仕事を終えてやっと好きな事（遊ぶ、憩う、休むなど）ができる時。。》と言っていました。

若くて未熟な時には、目の前に多くの選択肢と可能性、そして体力&気力がありますから、「努力すれば、変われる」という夢をみるのも良いでしょう。右肩上がりの流れの中では、

「結果はどうでも、やってみる」「失敗を糧にする」のは、悪くないと思います。

しかし、人生が（「老い」に向かう）右肩下りの流れに入ったら、変えられない事（過去や自分の不出来な部分）については「悔やむよりも受け容れて、許したい」し、変えられる事については「（今あるものを）大切に味わいたい」「（現実を見すえながら）楽しみを創り出したい」と思うのです。

私たちはつい忘れがちですが、人生には限りがあり、いつか必ずそれ（死）が抗えない力でやって来るのです。その時、自分の人生を振り返って「完全ではなかったけれど、良かったな」と思いたい。。。

最近は、マレーシアに住み日本に興味を持つ様々な国出身の人たちと英語でお喋りをする、異文化交流会にはまっています。考えてみれば、現役時代に一番楽しかったのは、精神病院のデイケアで患者さんたちと雑談したり遊んだりすることでした。そんな時には患者さんたちから学ぶ事が多くあり、「援助する側/される側」という括りが薄れて「単なる人と人（ある意味、対等）の関係」になれるように感じたからです。

もしかすると、「対人援助」という仕事を通して私が手に入れたかったのは、「援助する側になる」という『立場』や『役割』ではなく、「人と（深く）触れ合うこと」や「（互いに）心を通わせ合うこと」ではなかったか？また、早期退職（移住）してまで得たかったのは、これまで疎かにして来た「生活の充足」や「（身近な人との）心のふれあい」だったのではないか？。。。と改めて思う昨今です。今の私は一他人に迷惑をかけない限り、他人からどう思われようと一「自分のために、楽しい時間を過ごすこと」を優先したいと願っています。

一番大切なのは、心の声や直感に従う勇気を持つこと。
And most important, have the courage to follow your heart and intuition.

あなたの時間は限られている。だから、誰かの人生を生きて無駄にしてはいけない。
Your time is limited, so don't waste it living someone else's life.
（by. スティーブ ジョブス）

清武システムズ

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

～シーズン２「清シス・アピール」

エピソード 14 ： 境界を歩きたいし歩いている

しすてむ❤きよたけ

ごあいさつ

開いてくださり、ありがとうございます。

今回は、前半はぼくがどんな人であるか…いや、ぼくのあたまの中を描いている。フリーとして働きはじめ、３ 年目。改めて見直している最中であり、先に進んでいる最中でもある。学会のマガジンなので、ちょっとどっかイッテるやつと思うかもしれない。後半は、ここ最近起きたことを。あまり好きではない言葉である「老害」と「ぼくと周辺」だ。

清武ってどんなひと？

序； ぼくの頭の中

今、ぼくは、ベランダでぼんやりしている。見えるのは、電線。聞こえるのは、日本人ではない子どもがはしゃぐ声。それらの隙間をつまずくかのように、ぼくの頭に浮かんでくる絵。自分の人生を現しているかのような、暗闇と明るさの水玉模様。その中に、我慢と進むが一度に過ぎる。それぞれをつなぐ文字、for what。ぼくの頭は、文章？文字ではなく、マインドマップのようにキーワードとその理由が連なり合い、うごめいているのだ。

１；動いて知る社会

清武システムズは、今の時代になんらかのニーズはあると思う。でも、苦戦している。ニーズがあると思うのは、社会にいる僕ら、人間は、世代や生きてきた過程が違うよう、そもそも違う生き物だから、同じ所属ではない、違うという清武の存在が役に立つことがあるように思うのだ。

例えば、集団になると、結束力が高まる。その場の方向性や規律があり、それに対してコミットをしていく。理由は、成果を求められ、（他者からの）評価があるのだ。自

分は違うのに…と思ったとしても、同化していくと、当然思考は同じになる。一方で、言いたいけど、そこから外れることを避けるため、排除されないような振る舞いをしていく。そう…排除されてしまう可能性がある構造が、この世の中には潜んでいるのだと思う。

そこで、どこにも所属しない、独り身から始めている存在が機能することがあるのではないかと思うのだ。硬直している現場で、何か変化を求めているところには、異質な人物は、入るだけで、ことの変化は起きる。違いの可能性に自分で賭けていると言っても過言ではない。

2；存在が既存システムに影響を与えてしまう

しかし、苦戦しているのだ。この実体験は、ほかのエピソードにも記載したかもしれないが、これまで失敗したと思っている一つに、既存の仕組みに大きな影響を与えてきた。いや、与え過ぎてしまっていたのだ。そこから見えてきたことを下記に書いてみたいと思う。

この人は何かしてくれる人だと思ったけど、そうではない！？自分たちにも何かしていかないと変わらないのでは！？と思われてきた。つまり、多くの外から誰かを呼ぶ意味は、まず、内部に課題や問題があり、それにアプローチをしてくれると思っているシステムが出来上がっているのだと思う。しかし、ぼくの場合は、そうではなく、何かちょっとした会話や振る舞いをキャッチしながら、基準は不確かだか、面白いと思ったことに反応する。応援したいことを応援しているのだ。この振る舞いは、他者が、いや今の社会が外部から人を呼び、求める解決アプローチとは違うわけだ。

だから、そこには、齟齬がある。しかし、あれ！？自分たちはどうしたらいいのだろうか？という思考の変化に触れていく。そこからが、僕の本番なのだが、至らずに終わっていることに少なからず後悔は残る。

3；影響を与えすぎてからが本番

影響を与えすぎてしまったが故に終わるのなら、まだまだだと思うとこだ。しかも、繰り返すと、自分をどのように売り出していったらいいのかさえ分からなくなっていく。

というのも、一人で頑張ってみるという期間を設けたことで気づいた。一時、誰にも相談せずに考えてみていたのだ。

この時期、拠点を雑踏である東京一本に絞った。一つ契機だと思うので、ここから振り返ることをしてみた。

4；恐れずに動く

これまでは、人脈というネットワークにいた。東京でも、ないわけではないが、まだ口コミになる形はできていない。あえて言うなら、これまでは、信頼ある人が繋いでくれていたので、成り立っていたのだ。それがなくなれば、なんでもないのならば、今は、自分のビジネスは、どのような社会

の中で、どのような位置にいられるのか見直さなければ、何にもならないと気づかされている時期だと思った。さらに、面白いと思うネットワークには、まだまだ乗れておらず、動きが止まっている。受動的すぎなので、能動的に変えていく時期がやってきた、というわけだ。

～カタチにしたいこと～

振り出しに戻ったようだが、束縛のような集団でなく、誰かに媚をうって生きなければならないようなとこには居ないと思うと、心地よいとも思う。こういう人間が生きやすい社会システムがあるといいな…と思い自分が現実的にできることを試行錯誤している。ただ、まだ、何も手にしてはいない。

～検証中～

改めて記載するが、自分と相手が感じる違和感は、社会に潜んでいる構図に何か一口噛むことができなくはないのでは？と思っている。自分なりのロジックは見出せてはいないが、人は、疑問に思いそこから先に動こうとするモノだと思う。それが、どのようにしたら動き出すのか、実験台はぼく自身だ。

５；お金を出そうと思うか否か

個人的には難点もある。ビジネスとしてどうやっていくのか、だ。

想像してみて欲しい。あなたの現場に呼ぶ場合、清武システムズに払うお金は何に対してか？を。言い換えると、世の中、人にお金を渡すことはビジネスにはならない。お金は、人が何かをしているコト、売るモノ、ノウハウなどに支払われる。そうした明確なものは、今のぼくにはない。

その無さを売りにしているが、新しすぎるから、イキナリ HIT することはない。相当な時間がかかりそうだし、何か考えて動き始める時期に来ているようにも思う。

６；僕の特性 致命的に欠けた文章能力

さてさて、今回も、描いて（書いてるつもりがない）いったらこうなった！をお届けしている。急にこんなことを言うのは、ぼくにはお作法がないので、作法があるのにそれに乗らない、乗れない清武を例に出してみているのだ。

ぼくは、ほんとうは、ちゃんと書けるようになりたい。物を書いているのに、致命的なことにも…文章能力がない。

そこで、文章を書くお作法を読むと、だいたい、テーマを先に決める、そこに合わせて書くようだ。もしくは、書いて、テーマを決め、整理をする。中身は、起承転結。一文は、長くなりすぎずに、分かりやすく。

だが、ぼくは、当てはまっていない。むしろ、できない。だから、読み手は、だからなんだ？と思うかもしれない。

作法は、社会的に暗黙のルールのようになっていて、基盤に相互了解が生まれる。だが、違うと何なのか不明で、嫌になったり、邪魔くさくなる。

それをぼく自身が分かっているなら、ぼ

くが、作法に合わせればいい。読んで欲しいと思っていないわけではないから。そして、社会的に位置付こうと思うならルールに従えばいいのだ。でも、どうしてもできない。

7；文章でリアリティに触れた時期

これらを通して見えるぼくのこと。会話に慣れすぎて、書くということや論じることから随分逃げて生きてきた。

本を読みはじめた年齢は 20 代後半。伊坂幸太郎さんの本を随分読んだと思う。流し読みのようなものだっただろう。

いろんな人が、同じ時間に違う出来事に遭遇していく。意図している人もいれば、していない人もいる。そんななかで、人がモノゴトに出くわしていくあり様が、リアリティを持っていた。ぼくが、伊坂幸太郎さんにはまったのは、リアリティに触れていたからだったのだ。

7； 集中力無しの才能

ぼくの特性？として、何か１つに集中してしいることはない。ぼくは、なにか１つに集中してやることができない。

なんとなく過ごしているなかで、ふと、目にとまることや聞こえてくることが、無数にある。その無数の中でも、選んで残っていく。それを、ぼくは、表したいと思っている。仕事にも活かしていきたいと思っている。（何かの専門性がある人ではないです！）

あれこれある世の中は、ぼくの感覚とては、片付けられず散らかしたままの部屋。そうだ。片付けようとなんかしなければ、飄々と生きていけるだろうに。これしかない！だなんて思うから、見えていることも見失うことだってあるだろう。

だからか、何か一つを極めていくレールにのってこなかったぼくには、いろいろなことに触れること自体が、とても生きやすい。

でも、今の時代は、わかりやすく、コレです！という世の中だと思っている。批判ではない。随分昔は、なんらかのレールにのれない自分に対する劣等感も、もっていたと思う。

8；ハマらないひと

人生、先に決まっていることなんて少ない。目指しているとおりになるだなんてことも少ない。そんな体験をしてきたし、目指していても、違うと思って修正することだってある。ぼくが、まだ、何かにハマったことがないだけなのかもしれないが。

●日常生活で起きた老害

1；老害なんてクソ喰らえ

ハマらないから適当にできることもある。イキナリの例えだが、「老害」対応。新居のオーナーのご主人が高齢で、少々認知症の持ち主だ。よく建物の掃除をしているし、入居者が入るとなれば、部屋への

受け入れ準備を自らしているようだ。だが、浮いたフローリングをビニールテープでくっつけてあったり、スライド式の扉は開けにくいままだったり。なにかと不備が多い。遂に、風呂に浸かったあと、湯を流せば、洗い場に湯が湧き上がるといった排水溝詰まり…。

それを話しに行けば、早朝から部屋に入り込んで来ようとするし、勝手に入って来ようとすることも起きてしまった。遂に、ぼくと相方の奥野はしびれを切らしてしまっていた。というのも、仕事や学校に遅れそうになり、奥野はなんとか間に合った。だが、勝手に入られることは嫌だと２人で判断し、ぼくが家に残った。ぼくは、家の外での暮らしが変わったのだ。家に居ないと勝手に侵入される可能性が２人にとって気持ちがいいものではなかったための判断だったので、それはそれでよしではあった。

２；やり過ごしてしまえ！

では、老害ということばから、なにがおきているのか。言葉を通して振り返ってみた。

まず、ぼくらは、自分たちだけで解決できるわけでもなく、そして、今後も考え、オーナーの上にいる、管理者でもある仲介者に相談にも行った。あの爺さんはダメ呼ばわりだった。

確かにそうだと思う。境界線がなく、あったとしても了解されてないものだ。オーナーであるからいつでも入って良し！ではないのが一般的だからだ。認知症だとはいえ、家の中まで入って来ようとする、時間帯を気にせず訪ねてくることは、了解されていない。むしろ、抑制や制御、予防をする傾向が、世の中にはある。

しかし、ぼくはやり過ごしてしまい、うまいこと回避することも可能なのでは？と思った。

突然部屋に入ってこようとするといった、抑制の無さはどこから来ている？と思ったのだ。ポイントは、建物について何かあれば出てくる人だと思ったので、建物を大事にしてきたし、今もそういう人なのだろうと思ったこと。

そこで、たまたま廊下で会ったとき「ぼくも掃除をしようと思っていたんですよ～嫌いじゃないし、大事にしてるんでしょ？」と話した。そしたら、何か気分よさげに、奥野に謝罪をしてきたらしい。

認知症である自覚がない人。自覚すること、受け止めることが難しいこと。そうだろうな～と思う。自分は自分で、いつどのタイミングで変わってしまったのかだなんて、認知症じゃなくても難しい。認知症だから、どうこうの対応が大切な一方で、認知症でもそこに触れずに過ごせる周囲、周囲が変わることも日々の生活の上で大事なのだろう。

３；境界線の上を歩いていたい

上記を書いたのは、人がなんらかにカテゴライズされると、他者は色眼鏡で見てしまう。それだけを見てしまい、対応してしまうことがある。そうすると、お互いが本

当に大切にしたいことは何かを、マーブリングの絵の具のように一つの水の上で合わせていくことは難しいのだと思う。ぼくは、そうできない状況は望んでいないのだ。

専門家でもないぼくが、これらの願望を言ってもなんの力もない。専門家がいるから、なにも持ってないぼくが、介入できる。専門家でなくても、役割があると入りやすい。そういう時代なんだと思う。

だが、非専門家や役割をもっているが、直接的に相手側とは関係のない場合。これは、普段の生活では多い。街中を歩いていても、一つのビルディングの中で暮らしていても。

だから思う…役割がなくても、隠れているときでも、困難をやり過ごしながら、適度に相手と関わり、お互い知り合っていけたらいい…と。

終；生きづらい時代に入ってしまった？

なんとなく思う。これから、どんどん生きづらくなるのでは？と思う。関係性やカテゴリーに捕らわれた集まりの中に入れられてしまうかのようで。

ぼくは、そんなとことから、逃げてしまうかのように。でも、逃げずに済むような装置として動いていきたい。境界線の上を上手に歩いていきたいとぼくは思っている。そして、それを関わる相手先に還元でき、ぼくも刺激をもらえてら嬉しいと思ってきたのだと思う。

綴り人/しすてむ・きよたけ

通りすがりの旅人です。　清武システムズという看板を引っさげ、お仕事中。めんどくさいことも起きるけど、そっから面白く展開していこうじゃないか！「何か変化を求めているが、手立てがわからない。」そんな時に部品の 1 部だと思って、ぜひ導入を！お願いします。

精神科医の思うこと⑩

自己開示

松村　奈奈子

今年の夏休み前、診察の終わりに患者さんに夏休みの予定を聞いた後に「じゃあ、先生は夏休みどうするの？」と問い返されました。むむっ、なんでこの患者さんは私の事知りたいのかなって考えながら、返答を頭にめぐらせます
実はこんな場面、個人療法家ならしばしば体験する事だと思います。
これまでも、患者さんに治療者として個人の情報を伝える時には、いつも思うことがあるので今回のテーマは「自己開示」
ところで、「自己開示」は「治療者の個人的な情報」や「治療者の感情」を患者さんに話す事です。今回はそのうちのひとつ「治療者の個人的な情報」の開示に関して思うことを。

精神科治療者として「自己開示はタブー」なんてイメージですが、若い頃に上司の診察に同席した時、治療的なテクニックとしてちょっぴり自己開示をしている場面を目にしました。その後、ひとりでの外来診療を始めましたが、初めは私自身にまだ自信なく、治療的に利用する力もなくて、自己開示を避けていた時期もありました。
私自身がアラフォーになり、なんとなく自分の人生が「まぁいいもんだな」と振り返って思えた頃から、自己開示ができる様になったと思います。

この私、けっこうダメダメの学校生活でした。小学校の頃から学校はあんまり好きではなかったです。中学もマラソン大会はずっとベッタ（最下位）だったし、クラブも入らずなんとなく自宅で読書してだらだら生活。高校は、地域から「牧場」と呼ばれていた公立高校で、そこは学生を「ゆるーく放し飼い」する校則の甘い学校。雨の日は気分が乗らず休んだり、昼から映画見に授業をさぼったり、運動嫌いなので運動会はズル休みしました。修学旅行も「スキー旅行」だったので、スキーがしたくなくて仮病を使っちゃいました。高校のマラソン大会は３年連続ズル休み。もちろん成績はよろしくなかったですが、怒られる事もなかっ

たです。中学までは高校入試の内申書があったので「いい子」を演じていましたが、高校では好き勝手しました。大学はとにかく受験の成績さえよければいいって聞いていたので、予備校で頑張りました。その後、医学部には遠まわりの多浪でやっとこさ合格した次第です。時はバブル時代で、父母も「まあいいか」と甘かったからできた事です。ほんと、時の神様に感謝しています。

大学まではふらふらした学生生活でしたが、医学部に進学して専門課程に入ってからはマジメだったと思います。勉強は大変だけど楽しかった。卒業後、ずっと中学生の頃からの夢であった精神科医という仕事に就けてからは「熱血仕事人」。若い時は体力もあったし、休日返上で仕事していました。「熱血仕事人」だけど、もちろん研修医の頃はよく怒られました。そんな時も、友達をはじめ周囲の人々に助けられながらやってきて、今の私があるんだと思います。
こんな自分の人生、けっこう好きです。
もちろん、落ち込んだり、将来への不安でやけっぱちになった事もあります。失敗も後悔もそれはそれで変化するチャンスだったり、人に感謝したり、自分や人に寛容になれるきっかけでした。今は笑ってふりかえれます。

だから、子ども達が、学校になじめなくても、不登校でも、何かに失敗しても、友達がいて夢があれば、まぁなんとかなるんじゃないかって思ってます。
精神科に来る子ども達は、友達をうまく作れなかったり、夢がなかったりします。そこで私の仕事は、一緒によりそって友達を作ったり、その子に合った夢を探したりする事です。
それゆえ、思春期の子ども達には、聞かれればできるだけ素直に自己開示します。夢のヒントになれればいいなと。それは個人的情報を伝えるって感じではなくて、目の前にいる人がどう生きてきたかのお話。失敗という体験が、変化のきっかけという視点で一緒にとらえるようになれたらＯＫです.
そして、周りの大人と違う、ちょっと変わった人生を聞いて、いつでも何かを始められて、いつか笑って過ごせる事も出来るって信じてもらえたら大きな一歩かな。
もちろん、それは話している大人が幸せだと感じていて、イキイキしていないと意味がないと思います。だから私は治療者として、人生にトラブルは起こるけれど、上手に先手をうったり、誰かに相談してたまには逃げたりして、イキイキ過ごせるよう工夫を続けています。
自己開示をすることは、自分の生き方に責任を持つことかなっとも思ってます。

そこで、ちょっと変わった自己開示のエピソード。
総合病院で勤務医をしている頃、すべての研修医が精神科で１か月研修を受けなくてはいけない制度がありました。２週間は、私の診察にずっと研修医が張り付いていました。
ただ見学だけでは意味がないので、患者さんと交流してもらうのが私のスタイルでした。研

修医から患者さんに質問してもらったり、患者さんから研修医に質問してもらったり。
大人の患者さんは「何科の先生になるんですか」「なんで医者になろうと思ったの？」「どんな医者になりたいですか？」なんて定番の質問です。
もちろん、思春期の患者さんにも、同意があれば研修医が同席しました。
外科系に進路を希望する男子研修医３人が女子高生の診察についた時のお話です。
不登校傾向の女子高生が診察に来ていました。ちょっと悪い大学生と付き合ったりして、自分を大事にしてないとこが気になっていました。
女子高生にも質問させてみると、どんどん質問します。最初は「なんでお医者さんに？」から始まって「初めて彼女ができたのはいつ？」「初めてのエッチはいつ？」と、とんでも質問を若い研修医に投げかけました。当然、答えないのかなって私は研修医を見ましたが、研修医３人が素直に少し顔を赤らめたりしながら、自分の恋愛歴を話し出したのです。それは、とても健康的で、女性を大事に思ういい恋愛のお話でした。真摯に答える研修医に、女子高生は嬉しそうでした。
女子高生の診察の後「全部答えなくっても良かったんやで」と研修医に声をかけると「なんだか、誠実に答えなくてはいけない気がして」と３人で笑って返してくれました。
その後、女子高生は悪めの大学生とは疎遠になり、毎日学校に行き、診察に来なくてよくなりました。私が何か出来たというわけではないので、彼らの言葉が効いたのかなって思ったケースでした。
ちゃんと向き合って話した言葉に、人は大きく影響を受けるんだなって思いました。
それは治療者ではなくても、いいんですよね。

で、始めの「先生は夏休みはどうするの？」の質問。
私は素直に「旦那と休暇で高原にごろごろしに行く」と笑って答えました。質問した十代後半の彼は、複雑な成育歴で家族で楽しい夏休みを過ごした経験なく育ったと聞いていましたが、治療を通して、今は夢をもてる状況になったかなと思ったからです。
「いい夏休みですね」と彼は笑って返してくれました。
彼がいつか家族をもって、楽しい夏休みを過ごせるように、願って話しました。
自己開示は個人的な情報といっても、生活全部を話すのではありません。
目の前の患者さんが、私の体験を上手く役立ててくれたらといつも思っています。

おくのほそみち

～　グラデーションの中で　～

１０

理学療法士
奥野　景子

小学五年生の時だったと思う。なぜか友だち 2 人に脇腹を全力でくすぐられていた私は、床をのたうち回りながら笑い転げ、それから逃れようと必死だった。何がそんなに、と今なら思うが、とても楽しかった記憶がある。

教室の床を転げながら逃げまどっていた私は、何とか教室の出入り口にまでたどり着き、上半身を廊下に投げ出すように後ろに転げ倒れた。その瞬間、今まで経験したことのない衝撃が頭に加わった。男の子たちが車いすを全力で乗り回すという遊びをしているところだった。私は、その車いすと絶妙なタイミングで衝突したのだった。あまりに痛かったのと突然すぎる衝撃に驚き、涙も出なかった。周りのみんなは「保健室いく！？」などと騒いだが、私は状況を飲み込むこともできず、「大丈夫だいじょうぶ」と返し、ふらふらしながらトイレに向かった気がする。

「障害は個性である」という言葉を耳にしたことがない人は、少ないのではないだろうか？あなたは、この言葉に対してどのような印象を受けますか？私は、しっくりくるようなこないような気がしている。どちらかと言うと、しっくりこない派である。まだ最後まで読み切っていないが「増補新版　人間の条件　そんなものない」（立岩真也著、2018）という本を読んだ。新曜社から出版されている中学生以上のすべての人に向けた「よりみちパン！セ」シリーズの一冊だ。どんな本だった？と聞かれるととても困る。「中学生でも読める本なんやから、難しいことを簡単にわかりやすく書いてくれてるんやろ～」くらいに思って、手にした本だったが大間違いだった。あと何回かは読まないと、この本の内容を人様に紹介できるようにはなれないように思う。ただ、また読まなきゃいけない本だとは思っている。

なぜ、人に内容紹介もできない本のことを話題に挙げたかというと、この本を読んでいるうちに今回のマガジンに書きたい内容が決まってきたような気がするからだ。本当にそうなのかは私にもわからないが、そんな気がしている。

今回のマガジンでは、「障害は個性である」に隣接していると思われる私が今まで触れてきた、障害（ひとまず表記としてはコレを使用するが、表記をどうするのかは悩ましい）、個性、得手不得手、苦手、得意、不得意などに関するエピソードを書いてみよ

うと思う。また、「そうは言ってもねぇ～」と思う部分もあるため、そのことについても織り交ぜていければと思う。

【　目が見えない人　】

小学一年生の時、何を通してなのかは忘れたが、世の中には目が見えない人がいて、杖を頼りに歩いているということを知った。たぶん「へぇ～」くらいにしか思わなかったのだけど、「目の見えない人が杖を頼りに歩けるんやったら、目の見える自分は目をつぶっても杖なしで歩くことはできる。自分にだってできる！！」と思った。そして、小学校の帰り道に友だちとバイバイしてから、その日は目をつぶって家まで帰ることにした。すぐに出来るというか、いつも通り帰られると思っていた。いつもと違って見えない中で歩くだけと思っていた。でも、目をつぶった瞬間に「あれ？」となった。急に怖くなったのだ。さっきまでそこにあった家の外壁がわからなくなり、自分がまっすぐ立っているのかどうかも怪しくなった。目を開けて壁を確認してから目をつぶってまた開けた。何度か繰り返してから目をつぶり、一歩踏み出してみた。また「ん？？」となる。いつもの一歩がよくわからなくない。歩幅もそうだし、真っ直ぐ前に出せているのかどうかもわからない。なんとなくふらつく気もする。その日は、初日だからと自分ルールを勝手に作り、普通に帰った。

翌日からは、家まで目をつぶって帰ることに挑戦する日々が続いた。途中で心が折れたり、早く帰りたかったり、誰かがいたりして挑戦しない日もあったが、比較的真面目に取り組んだ。でも、どんどん自分ルールは増えていったし、もともと目の見えない人と自分は違うと言い聞かせたり、でも途中で自分の目が見えなくなったらこりゃ大変だなと思ったりもしていた。

何日かして、どんなに頑張っても友だちとバイバイしてから家までの距離を目をつぶったまま帰るのは無理だとわかった。だったら、目をつぶったまま真っ直ぐ歩く練習をしよう、目をつぶったまま次の電柱まで歩く練習をしよう、目をつぶったままぐるぐる回って元の方向を向いていられるように練習しよう、目をつぶったまま真っ直ぐジャンプする練習をしよう、などと色々した。どれもほとんど上手くいかなかったし、怖さとちゃんと出来ない苛立ちから薄目を開けてしまうズルを自分ルールのくせに許容できず、これだったら出来るんじゃないかということを考えてはやってみる日が続いた。一人遊びのようだったけど、出来ないと悔しい負けず嫌いが厄介だった。

で、結局、やっぱり無理！！！となった。今日の挑戦を最後にしようと決め、自分に課した挑戦内容は、簡単すぎないけど頑張ったら出来るだろうというものにした。社宅の駐車場まで約 10m。真っ直ぐ歩いて、右に曲がって、左を向くと正面に駐車場のシャッターがあるコース。目の前に社宅がある場所からのスタートだった。色々と試していたため、これが結構難しいことだとはわかっていた。でも、自分に足りないのは、度胸と自信だと思っていたため、今日こそはできる！今日で最後だからズルはしない！！と決めて望んだ。

何度も歩くコースを目で確認し、イメージしてから目をつぶった。まずは、真っ直ぐ進むのみ。いつもは途中で薄目を開ける

けど、今日は頑張ると決めていた。けど、無理だった。でも、薄目はズルだから一回はめっちゃ目を開けて見てもいいという新たなルールができ、あえていつもより大きめに目を開けた。自分が思っていた以上に手前だった。‘やっぱりなぁ〜’と、それがわかっていたかのように思った。そこから残りの直線はどれくらいかを確認し、再び目をつぶった。自信を持って、怖がっちゃだめだと言い聞かせた。薄目を開けたくなったが、やめた。いつもは自分が思っている以上に進んでいないことが多いから、まだいける、いけた、まだいける、いけた…を何回か繰り返した。さすがにもうあかんやろ…と思ったが、たぶんまだ手前だ。あと一歩で右に曲がればきっとちょうど良い感じになってるはず。そう思って最後の一歩を前に出した。「あれ？」と思って反射的に目が開くと、目の前にはフェンスがあった。そして、フェンスが急速に上に上がっていった。なんだかわからないが、痛くて、怖くて、驚いて、泣いた。

泣きながら起き上がろうとした時にやっと状況が飲み込めた。フェンスが急速に上に上がっていったのではなく、本当のところは、私が下に落ちたということがわかった。あと一歩と踏み出した足は、蓋のないドブにスッと吸い込まれ、私とランドセルは上手にそこに挟まった。大声で泣きながら這い上がった。私がはまったところには、オロナミン〇の瓶が粉々に割れていた。幸い、擦り傷程度の怪我で済んだが、大泣きだった。社宅の目の前だったため、そのまま家に向かおうとしたが、泣き声を聞きつけた隣の家のおばさんが外に出てきた。「そんなに泣いてどうしたの？」と聞かれたが、泣きすぎて答えられなかった。とりあえず早く帰りたかったのだが、おばさんは‘ぬいぐるみをあげるから来なさい’と言った。早く帰りたくて仕方なかったからそのまま帰ろうとしたが、あまりにおばさんが家に来いと言うから行った。

そのおばさんの家の靴箱の上は、ぬいぐるみで溢れている。ぬいぐるみに興味を持たずに育った私にはそんなに嬉しくないのだけど、行かないとおばさんが納得しないような気がして家に行った。社宅からはほんの少しだけど遠ざかった。相変わらず大泣きの私だったが、玄関に入らせてもらい大量のぬいぐるみを目の前にすると「どうせもらうんやったら欲しいのをもらおう」と意地汚さが出てきて厳選した。そのころには、ほぼ涙は止まり、ヒクヒクしてる程度だったが、擦り傷はジリジリと痛かった。よくわからないけど、一番気になったペンギンのぬいぐるみをもらって帰った。小さめで、家にあっても邪魔にならないだろうとも考えた。おばさんは、何か元気づける声を掛けてくれたが、傷の手当てとかはしてくれなかった。でも、嬉しそうにしていたのは覚えている。たまに会うとぬいぐるみをくれる不思議なおばさんで、それまでにも何回もぬいぐるみをもらっていた。あまり嬉しくないのだけど、くれると言うならもらっとこうと、何回ももらった。

その日もお礼を言って家に向かった。玄関を開け、母親を見た途端に涙を思い出して泣いた。ドブにはまったと言って大泣きした。落ちたところに瓶が割れていたと言うと母親は驚いたように私の体をみたが、擦り傷しかないことがわかり、「これくらいなら大丈夫」と言った。私が手に持つぬい

ぐるみを見て「またもらってきたん？」と聞かれ、それにうなずくと良かったねと言われた。少し落ち着いてからなんでドブにはまったのかを説明し、バカだと呆れられた。この挑戦については、人に話すのがなぜか恥ずかしく、母親にも話していなかった。少し話そうとした日もあったが、話の途中で危ないからやめなさいと言われ、それから秘密にしていた。呆れられたのに対して‘やっぱりな’と思う一方で納得できず、今までの数々の挑戦について熱弁し、ドブにはまる瞬間のフェンスが上に上がっていった不思議な感覚についても話した。でも、夕食の準備で忙しい母親は、たぶん半分くらいしか聞いてなかったと思う。その日を最後に私の挑戦は終わった。たまに、再挑戦することもあったが、それまで以上に自分に課す挑戦内容はハードルが低く、自分ルールも自分勝手になっていった。

大人になってからもたまにあの日々のことを思い出す。何を通して目の見えない人の存在を知ったのだろう？隣の家のおばさんは、何者だったのだろう？もし目が見えなくなったらどうなるんだろう？なにか出来なくなるとしたら、何だったら一番生活に支障がないんだろう？などなど。ただ、今あるモノがなくなると、不便になったり、新しい何かに慣れなければいけなかったり、何かと大変なんだろうな～とは思う。

【　‘私’と‘友だち’　】

小学一年生の頃、ほぼ毎日遊んでいたのがもこちゃんだった。そして、遊ぶのはもこちゃんチだった。何度か自分の家に誘ったこともあったが、断られたような気がする。ただ、確実におもちゃはもこちゃんチの方が多かったし、もこちゃんのお母さんは毎回お菓子を出してくれるし、自分の家では遊べないおもちゃで遊べるのも好きで、遊び場はもこちゃんチがほとんどだった。外で遊ぶ日もあったが、それでも待ち合わせはいつももこちゃんチだった。

暑い夏の日、もこちゃんチのお風呂で水風呂に入ろうとなった。幼稚園のプールの頃からもこちゃんが水に顔をつけるのが苦手とは知っていたが、水泳を習っていた私には理解できなかった。二人で仲良くちゃぷちゃぷ遊んでいるうちに、今ならもこちゃんの顔に水をかけるくらいならしても良いんじゃないかと思い、私は少しずつ掛け合いっこする水の量を増やし、少しずつ水を掛ける位置を上げていった。私の思惑はすぐにもこちゃんにバレ、もこちゃんの「やめて！！」という声も徐々に大きく、強くなっていったが、おかまいなしで水を掛けた。結果的に、顔に少しだけ水が掛かったところで「もうッ！！！！やめてッ！！！！！」と、もこちゃんがぶち切れて終わった。ぎゅっと目をつぶり、両手で顔にかかった水を力いっぱい払い落とすようにしながらキンキンする声で言われた。ちょっとこちらが半笑いで引いてしまうくらいのガチ切れだった。

大人になってからこのエピソードについて母親に話したことがある。人生で初めて人にキレられたエピソードとして、おもしろおかしく話した。母親は「へぇ～」と笑った。そして、「ももちゃん、なんか持ってるっぽかったしね～。お母さんは、そう感じてたけど」とも言った。母親の目から見ると、もこちゃんは人と接するのが苦手な印象があったらしい。確かに、人前で話す

のは苦手そうだったけど、人と接するのが苦手な印象はなかった。でも、私が誰かと遊ぶ約束をした後にもこちゃんに誘われた時、一緒に遊ぼうと言っても毎回寂しそうに少し怒ったように断られた。たまに、よくわからないけど機嫌が悪そうな時もあった。もこちゃんが自分以外の人と遊んだ話を聞いたことはなかった。でも、もこちゃんのお誕生日会にはクラスの男の子と女の子の何人かも招待されて来ていた。いつもは、もこちゃんと 2 人きりが多い部屋にたくさんの友だちがいるのが不思議だったけど、お誕生日会は何だか特別で、楽しくて嬉しかった。

小学二年生になる時に、私は父親の仕事の都合で引っ越した。それから、もこちゃんとは何回か年賀状をやり取りしたくらいで、もう連絡はとっていない。数年前に家族旅行で当時住んでいたところの周辺をまわった。もこちゃんチには、当時と変わらない表札があった。でも、なんだか恥ずかしくて、なんとも自信がなくて、前を通り過ぎた。昔は、玄関前で「も～こ～ちゃん、あっそび～ましょ～！！」と大きな声を出していた。

転校先の学校は、少し綺麗で生徒の数も倍ちかくいた。教室や校庭の大きさは、今までより少し大きく、どれも小洒落ている印象を受けた。前の小学校では、みんなランドセルを背負っていたのに、新しい小学校の半分くらいの子は、ランドセルじゃない自分の好きな鞄を使っていた。それが羨ましくて、私も少ししたらお姉ちゃんから使っていない真っ青な斜め掛けの鞄をもらって小学校に行った。真っ黄色の紐でそれなりに派手な、今思えばそれなりにダサい鞄だったが、結構気に入っていた。

新しい学校は、友だちの感じも違った。前の学校では、みんなそれぞれが時々に応じて楽しんでいたのだが、新しい学校では、グループが出来ているようだった。今思うと私自身が成長したから見え方が変わっただけかもしれないし、その年頃の女の子くらいになると仲良しグループっぽくなるのが普通なのかもしれない。ただ、転校のタイミングもあったため、新しい学校はちょっと違うという印象があった。それでも、どこか特定のグループに入るようなことはなく、何かを意識しすぎることもなく、それなりに楽しみながら過ごした。学校が終わる前に誰かと放課後に一緒に遊ぶをして、家に帰るとすぐにその子の家や待ち合わせ場所に走った。私が自分から誘うのは、2～3 人の子のうちの誰かで、自分から誘う時はその子と 2 人で遊ぶことが多かった。数人の子と遊ぶこともあったが、それは誘われた時くらいで、やっぱり誰かと 2 人が多かった。

学年が上がるにつれて、私も仲良しグループ文化に慣れていった。でも、どこかで居心地の悪さも感じていた。ちょっとしたいじめはあるし、ちょっとではないいじめもあった。いじめっ子といじめられっ子がローテーションしていくのを見ていた。いじめられっ子役がなかなか回ってこない自分も、中途半端にいじめっ子役になる自分も、どちらも好きじゃなかった。放課後に誰かと 2 人で遊ぶことはなくなった。それだけでなく、放課後に誰かと遊ぶこと自体が少なくなった。一週間のうち、週に二回は書道教室、週に三回はミニバスの練習があったから、遊ぶための時間が少なくなっ

たこともある。でも、それだけではないだろう。いや、それだけではなかったと断言できる。習い事がない日は、一人でバスケの練習をする事が多かった。たまに、何人かと近所のゲームセンターにプリクラを取りに行ったりもしたけれど、今日は早く帰らなきゃいけないと言ってみんなより早く家に帰り、一人でバスケの練習をすることもあった。思い返すと、遊びでどんなに遅く帰ってきても、夜ご飯までの数分だとしても、一人でバスケの練習をしない日はなかったように思う。雨の日は、家の中で綺麗に拭いたボールに触れたり、玄関でドリブルの練習をしたりしていた。私にとって、一人の時間は必要だった。

今も時間の過ごし方は、あまり変わっていないように思う。でも、昔より快適に過ごせている。そうじゃない時もあるが、それなりにやり過ごせるようになったし、それがそんなに大切じゃないこともわかった。

「みんな仲良く」、「ひとりはみんなのために。みんなは一人のために」。当たり前とされることばかり言う人も、私のことを「いい子」だと言う人も、あまり好きじゃなく、そんな自分が好きじゃなかった時よりも今はずっと、もっと良い。

【　運動神経　】

私は、運動神経が比較的いい方だと思う。幼稚園の時から水泳を習い、小学生になるとサッカーやバスケのチームにも入った。父親とキャッチボールをするのも好きだったし、体育でもラケット競技以外ではたいがい活躍できた。

父親がお休みの日は、一緒に外で遊ぶことが多かった。日頃の練習の成果を見せようとリフティング対決をした。小学三年生くらいの時の私の最高回数は、確か 100 回ちょっとだった。当時の父親の最高回数は、15 回くらいだった。しかも、明らかに上手じゃない感じのリフティングだった。父親は「今日は調子が悪いなぁ～」と言う日もあれば、「けいこは凄いなぁ～」と言ってくれる日もあった。お父さんにも勝てる、と嬉しかった。

幼稚園からしていた水泳では、進級テストのたびに級が上がり、小学校に上がる前にはクロール、背泳ぎ、平泳ぎを習得していた。平泳ぎの級にいた時は、同級生はおらず、一番の仲良しは小学四年生の女の子だった。その子の平泳ぎは、手をかくタイミングと足をかくタイミングが合わなかったり、早すぎたりして、なかなか前に進まなかった。「もっとびゅーんって伸びた方が良いよ」と生意気にもアドバイスをしていたが、それを聞いた後のその子の泳ぎは、それまでよりずっと気持ちよさそうだった。

大学生の時、地元の駅に着いてから家に向かうバスに乗ろうと歩いていた。すると、後ろからドタバタともジタバタともバタバタとも言えない足音を立てながら走ってくる人がいた。前を向いていても、その人の走り姿が見えるようだった。私は、半笑いになりながら歩いた。そして、どうしてもそれを見たくなった。ダメだと思いながらも我慢ができなかった。何かを思い出した振りをして後ろを向いた。違う方向に視線をやり、視界の片隅で見られればと思った。だが、その人は私の視界のど真ん中にアピールしてきた。私が振り向いた瞬間、驚いた顔をしながら手を振ってきたのだ。せっかく半笑いを押し殺して振り向いたのに、

思わず吹き出してしまった。嬉しそうに、驚きながら手を振って走ってきたのは、私の姉だった。衝撃だった。色々な意味で、衝撃でしかなかった。「なんでわかったん！？」と無邪気に聞かれ、素直に振り向いた理由と自分が受けた衝撃を伝えると、はにかんだように笑いながら、いや怒りながら肩を小突かれた。「走り方、教えたろか？」と笑いながらであるものの、それなりに真剣に言ったのだけど、姉にはピシャリと断られた。私は、二人の姉と比べると勉強が出来る方ではなかった。勉強は、そんなに好きでもなかった。二人の姉は、センスの差こそあったものの、勉強に対して真面目に取り組んでいたと思う。私には、それが足りなかった。でも、やりたくなかったし、好きじゃなかったから、別に良いやと思っていた。

【　バナナボート　】

中学校の修学旅行先は、沖縄だった。私は、人生初の沖縄を密かに楽しみにしていた。山に囲まれた町で育った私にとって海は特別だったし、沖縄の海ともなれば、それはまた格別なのだろうと思っていた。先輩は、海でやったバナナボートが特別に楽しかったと言っていた。絶叫マシーンは苦手だったが、海だし、ライフジャケットがあれば溺れないだろうし、バナナボートはきっと楽しいはずだと心を躍らせていた。楽しみすぎて夢にも出てきたくらいだった。でも、私たちの学年は、バナナボートをしないことになったと聞いた。

中学生の時、同級生に持病のある子がいた。激しい運動は難しく、体育も休むことがあった。その子への配慮もあったのだろう。特に理由が言われた訳ではなかったが、みんな何となくそうなんだとわかっていた。正直、夢に出てくるほどバナナボードを楽しみにしていた私にとって、バナナボートがなくなったことはショックだった。でも、沖縄に修学旅行にまで行って、体育の授業みたいに『バナナボートは見学で』いうのもなぁ～、とも思った。とは言え、ショックだったのは違いなかった。私たちの学年は、バナナボートの代わりに三つくらいのプランから好きなものを選んで、それに参加するプログラムが組まれた。私は、海に行きたかったこともあり、あまり人気はなかったものの、海岸で貝やサンゴ礁を拾って、写真立てを作るプランを第一希望にした。もちろん希望は通り、それに参加することになった。

修学旅行の一週間前くらいから天気予報をいつも以上に気にするようになった。なぜなら、修学旅行と季節外れの早すぎる台風がドンピシャにかぶっていたからだった。毎日、台風がどこかに行かないか、消えてしまわないかと願っていたものの、それは中途半端なかたちでしか叶わなかった。修学旅行の二日目までは台風が来ているものの、それ以降は通りすぎるであろうという予報になり、ほぼその通りになった。写真立て作りも、天候によっては準備してもらった材料で作ることになるかもとなっていた。ただ、幸いにも雨は小雨で、淀んだ海の砂浜でサクッと材料を集めて写真立て作りは始まった。一応、幸いにもということにした。自分なりにこだわって作ったものの、根本的にセンスがないため、みんなが作ったものより少しだけ残念な写真立てが完成した。母親へのお土産になったが、も

ちろん好評を受けることはなく、結構早い段階でどこかに追いやられた気がする。

修学旅行から帰って来てからもバナナボートに対する残念さは残っていた。ただ、あの日程だったら結局できなかったなと思うことで納得できる自分もいたが、そう思えない自分もいて、残念さと言うよりわだかまりのようなものが残っていた。

「みんなにとって良い選択」なんて難しいのかもしれない。でも、「自分にとって良い選択」は、出来るのかもしれない。簡単ではないかもしれないけど、後者の方がまだ現実的な気がする。ただ、「自分にとって良い選択」が誰かのそれとは違う場合、それはそれでしっくりこないのかもしれない。

～　終わりに　～

本当は、もういくつかのエピソードがあったのだが、今回は時間切れ。いつも通り提出が遅れてしまった。

小さい頃から色々なことに触れてきたのだな～と、改めて思う。もちろん、どれもが今の私につながっているのだけど、どれもが上手く言葉に出来ない部分がある。

今回のマガジンの副題は『グラデーションの中で』にした。全部書き終わってから付けた副題だ。白黒つけられる物事ばかりではないけど、白黒つけられてしまう物事もあり、白黒つけておいた方が、つけられていた方が都合の良いこともあるように思う。苦手で、不得意で、嫌いで、困ることや不便なこと、嫌なことばかりではないけれど、‘でもな～’と思うこともある。綺麗ごとでも偽善でもなく、事実、現実はやっぱりある。なくならないことだってあるし、中には減らせるものもあるように思う。でも、なくなった方が良いことばかりではないと思うし、減れば良いと言うものばかりでもないと思う。

上手く言えないが、無理して上手く言う必要もなく、大切に言葉にしながら伝えられるようになれば良いなと、改めて思った。

👣　おくのほそみちのこれまで　👣

第 24 号　新連載決意表明
（「執筆者@短信」にて）
第 25 号　リハビリテーションのこと
第 26 号　‘リハビリテーションが行なわれる場’について考える前に
第 27 号　‘リハビリテーションが行なわれる場’について考える前に
二歩目；〇〇〇と私
第 28 号　‘リハビリテーションが行なわれる場’について考える前に
三歩目；‘あなた－私’という　関係　によって変わる‘場’
第 29 号　選ぶということ
一歩目；私の内にある‘絶対’
第 30 号　選ぶということ
二歩目；理学療法士として①
第 31 号　在宅医療について
第 32 号　選ぶということ　三歩目；生き場
第 33 号　理学療法士が指圧を学ぶ

「ありがとう」の言葉の力

馬渡　徳子

今から丁度 27 年前、三人目出産と同時に定年を迎えた義父母との二世帯同居が決まった。大分出身の義父母と山口出身の私とでは、実際に暮らすとお互いに様々な葛藤があった。思ったことを何でも口にして、腹の中に何も持たない義父母と、プライベートでは(笑)グッと言葉を飲み込んでしまう私は、実に対照的で、三年間に三度も胃十二指腸潰瘍をつくった。一方で、さぞや義父母側は、嫁に思ったことを素直に表出してもらえず、はがゆい思いをされていたに違いなかった。

そんな時だった。
私が担当させて頂いている「リウマチ患者会」にて、グループワークをしている時に、最年長の普段言葉の表出が少ない患者さんが、私にこう言われた。「あなたの『すみません』が、とても気になるわ。言われたこちらが、逆に申し訳ない気持ちになってくる。その言葉は、『ありがとう』に置き換えた方が、相手は気持ちいいと思うよ。」

ハッとした。出張の多い私たち夫婦は、同居してからも義父母に留守を頼むことが多く、いつも「すみません」を連発していた。すると、「遠慮しないで。子育てを応援するために同居したのだから。大丈夫だから、任せて。」と返答されていた。

従って、その直後から、「ありがとうございます。助かります。」の言葉に置き換えるようにした。すると、「うんうん。ありがとうって、本当に気持ちいいね。」と返答されるようになった。

「ありがとう」は、双方の存在を承認し、労い合うことのできる力をもっている言葉だと思う。

今年、金沢市教育委員会の季刊誌の夏秋号にコラムを連載している。15 年前から、毎年秋に、小学校の就学時検診時に子育てミニ講座と、小中高校の人権講話に、お招き頂いていて、今回のコラムにつながった。そのご縁の

きっかをつくって下さったのが、元教職員の先程のリウマチ患者さんだった。

「私は、おそらくこの病気にならないと、ソーシャルワーカーという仕事を生涯知らないでいた。社会貢献のできる素晴らしい仕事だと思う。様々な場面で、ソーシャルワーカーという仕事を後世に伝えていかないとね。それが、あなた世代の役割だと思うよ。小学校の保護者や、直接子どもたちに語ることのできる機会に、あなたを推薦するから、一つ一つの機会を大切にしなさい。そして、出逢った人々の明日を生きる力のヒントになれば、と願っています。」と、後押し下さったのだ。

最初から恒例にしているのが、お招き先の状況に合わせて、始めに団士郎さんの「家族の練習問題」を朗読すること。団さんにお断りして、紙芝居にもした。五年前からは、対人援助マガジンの常連である水野スウさんの「ほめ言葉のシャワー」を使ってジョイニングをしたり、「憲法 13 条のうた-ほかの誰とも」をアカペラで歌っている。ご紹介した本と CD は、学校や保育園の図書室に寄贈するという「しかけ」をしてきた。

ですから、「あの時の学生です。」と何年も経ってから、医療福祉系の実習生として再会したり、保護者が相談に来られたり、保護者や教員が、「いしかわ家族面接を学ぶ会」の仲間になったりと、未来につながっていくという楽しみもあった。

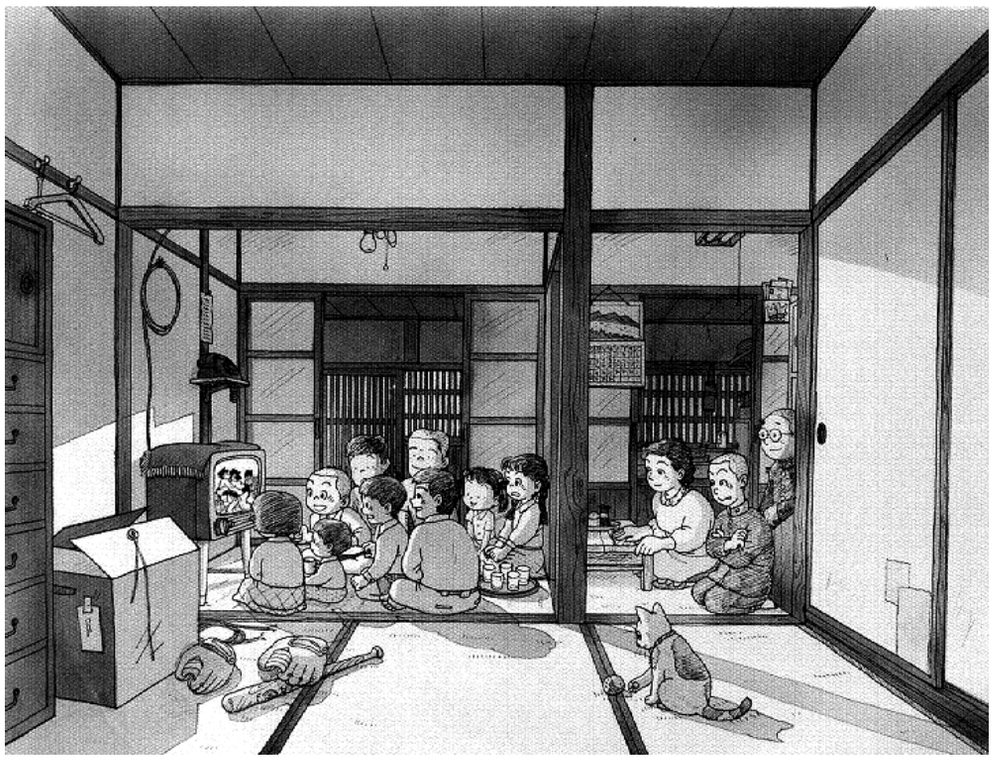
今春、私は、金沢大学大学院に社会人枠で進学した。私を、ソーシャルワーカーとして 36 年間育てて下さったリウマチ患者会の皆さんに、四年をかけて、質的調査研究を通して、求められる社会保障制度について政策提起ができるように、真摯に研究したいと考えてる。

修士論文が完成したら、リウマチ患者さんの墓前に、「ありがとうございました。先生の教えて下さった『ありがとう』の言葉の力を、定年後のこれからも大切に生きていきます。」と、ご報告に上がりたいと思う。

東成区の昭和 やぶにらみ日記

絵＆文　柳 たかを

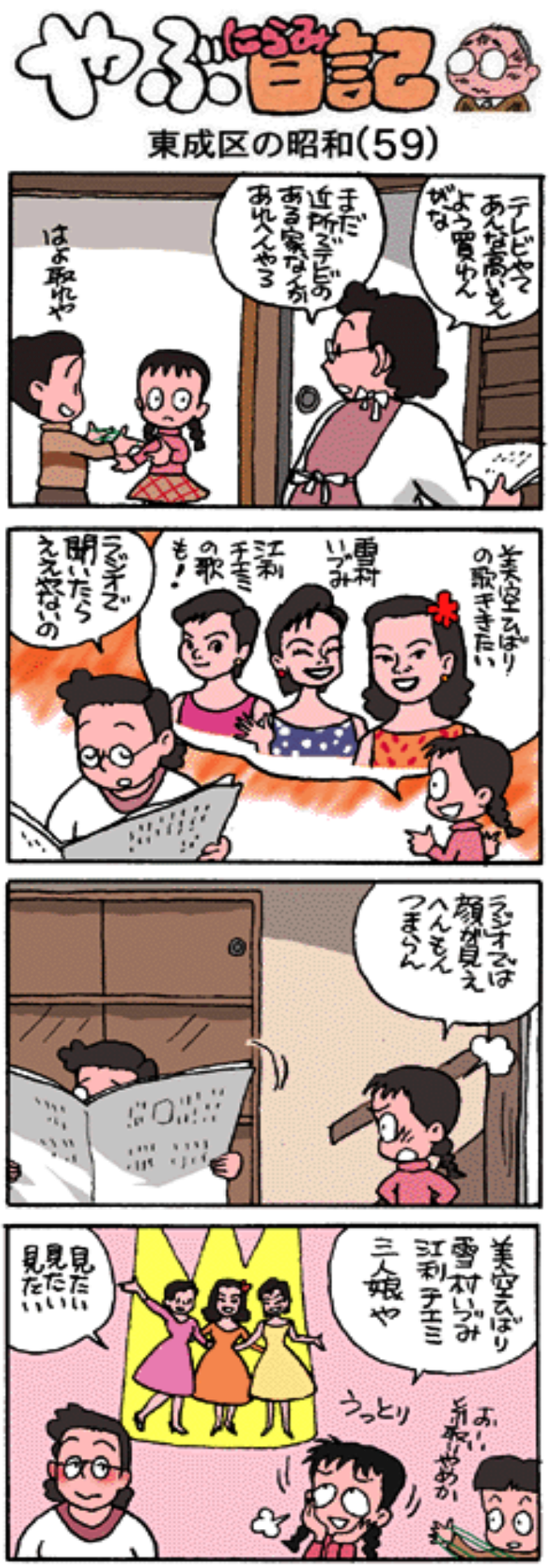
わが家にはじめてテレビが来た頃



当時の紙芝居業は、戦後の引揚者たちなど、職にありつけない男たちの日銭稼ぎ飢えをしのぐ為の非常職だった。
紙芝居業の元締めからその都度紙芝居を借り、子供らの集まる広場などで上演して日銭を稼ぐ。ただ法律で“見料”を取ることが禁じられていたので代わりに水飴・型抜き飴や酢昆布・煎餅などの駄菓子を 5 円 10 円で売って売り上げとした。紙芝居の借り賃と駄菓子の仕入れ代を差し引いたわずかな残りがおじさんの収入だった。

マンガ「東成区の昭和」に描かれている時代は、作者の記憶が残っている 4 ～ 6 歳、昭和 30 年頃。
テレビがわが家にやって来たのは作者が小学 3 年になった昭和 33 年春だと思う。
はじめてテレビを見たのは、その前年、友人宅で見せてもらった西部劇で、アメリカ騎兵隊所属の少年兵と相棒の軍用シェパード犬が主人公の「名犬リンチンチン」だった。
テレビ登場以前に子供たちをわくわくさせ楽しませてくれたのが紙芝居。
本作でも紙芝居を囲む懐かしい子供たちの風景を描かせてもらっている。
紙芝居鑑賞で思い出すのは、おじさんが夕刻鳴らす拍子木の音「チョーン、チョーン」、紙芝居大好きな作者は猛然と 100 メートルほど離れた公園にダッシュ。
おっとと、紙芝居を鑑賞するには駄菓子を買わないと見せてもらえない。
家で日本画を描く父にねだって 10 円硬貨を 1 枚もらい公園に駆けつけた。

ところが、この 5 円 10 円をもらえない子供もいて、その子らは紙芝居が始まると紙芝居を取り囲む集団から少し離れたところに立ち耳をそばだてている。
作者の子供時代にも、紙芝居のおじさんが突然しゃべりを中止し、何度かそうした子らに「あんたら、ただ見したらあかんで」と叫んだのを思い出す。
それを聞いてお金がない境遇のみじめさを想像し、胸が重く苦しいような気持ちになった。
やがて専業主婦だった母親が猛然と保険の外交員などの収入重視の仕事を始めたせいで、上に書いたように我が家にも 14 インチの白黒テレビがやって来る。
昭和の高度経済成長の幕開けだった。


やぶにらみ日記
東成区の昭和(59)
テレビやってあんなあいもんよう買わんがな
まだ近所でテレビのある家なんかあれへんやろ
はよ取れや
美空ひばりの歌ききたい
雪村いづみ
江利チエミの歌も！
ラジオで聞いたらええやないの
ラジオでは顔が見えへんもんつまらん
美空ひばり
雪村いづみ
江利チエミ
三人娘や
見たい見たい見たい
うっとり
おい！新取ってやあか

やぶにらみ日記
東成区の昭和(60)
なあタカオもテレビほしいやろ？ねえ
ボクおっきなったら紙芝居屋さんになんねん
そういう話やのうてね……
自分で紙芝居かいて紙芝居すんねん
エヘヘ
ホホホ
ありんめまいしてきた
ヨロッ
バタン

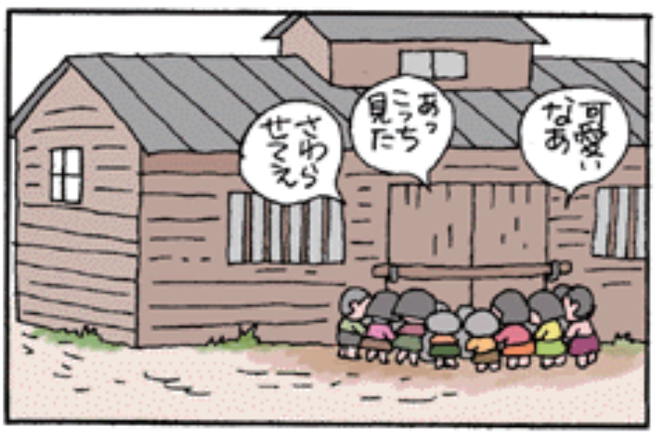
やぶにらみ日記

東成区の昭和(61)

東成区の昭和(62)

やぶにらみ日記

東成区の昭和(63)



東成区の昭和(64)

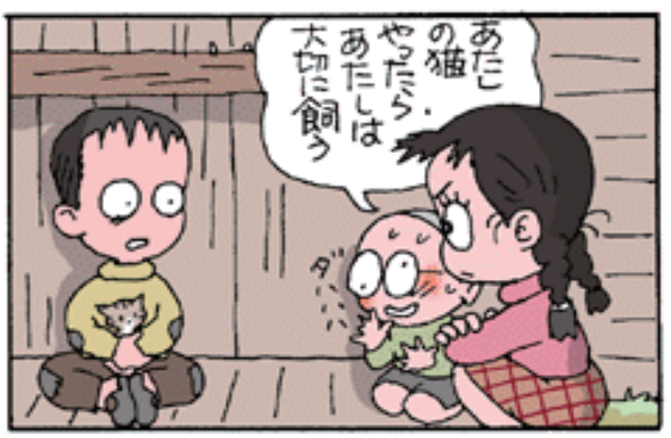
やぶにらみ日記

東成区の昭和(65)

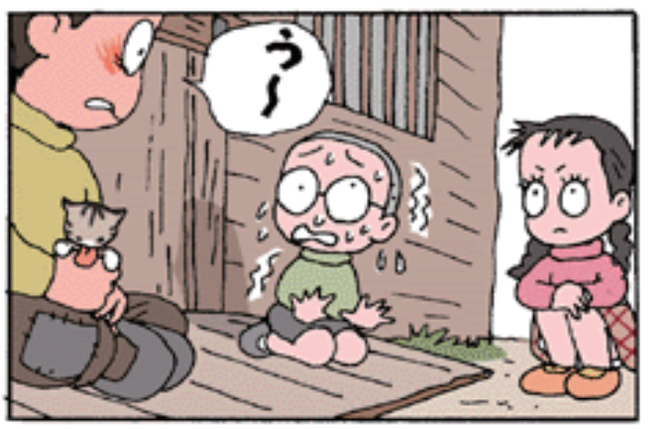
東成区の昭和(66)

やぶにらみ日記

東成区の昭和(67)



東成区の昭和(68)



やぶにらみ日記

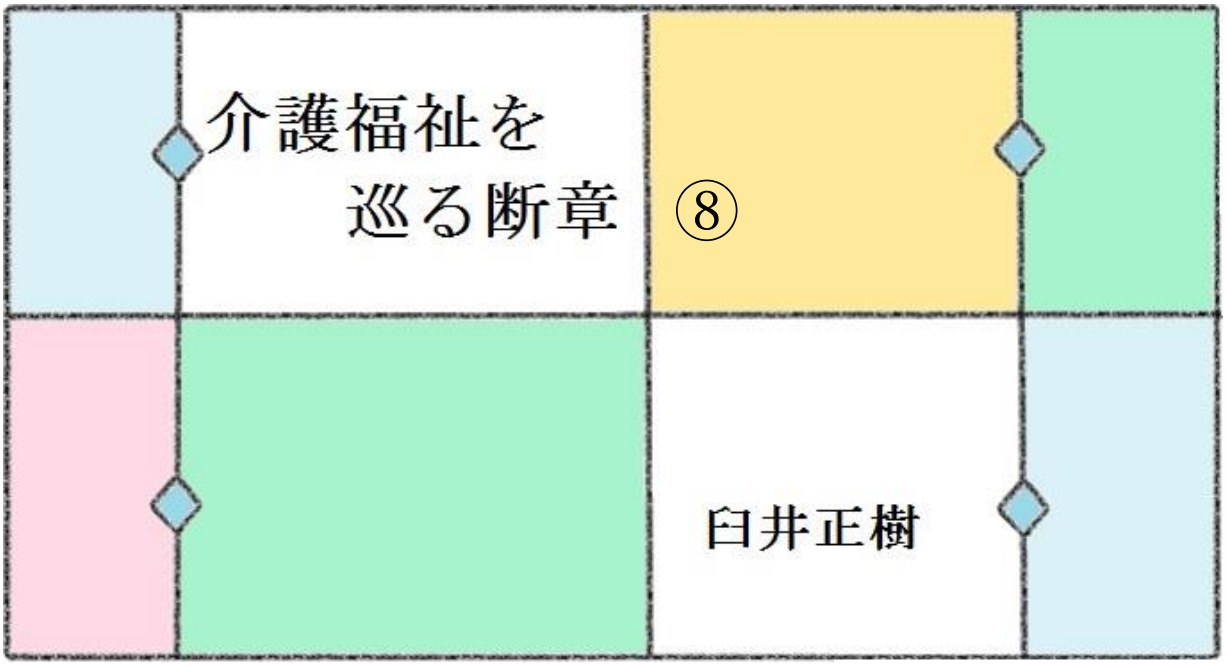
東成区の昭和(70)

東成区の昭和(69)

やぶにらみ日記

東成区の昭和(71)

東成区の昭和(73)



８　親密圏と公共圏

第６回目で介護福祉に関し、次のように論じた。

「介護福祉とは、具体の介護をとおして支援対象者の尊厳を維持しつつ、対象者の状況にあわせてその人なりの親密圏を維持・強化する社会的な支援行為である。」

その後、さらにいろいろと考えたうえで、現在は以下のように整理している。

「介護福祉とは、認知症等に伴って介護が必要な高齢者であっても、人生の最期まで親密圏のなかでその人らしく豊かに暮らすことを支援する文化的な行為である。特別養護老人ホームは、介護が必要な高齢者にとって疑似的・人為的な親密圏を形成するための装置である。」

どちらの定義がよいかは、読まれた方の判断にゆだねることにするが、改めて、ここで考えてきた介護福祉の意味について、さらに詳しく論じておきたい。

どちらの定義も、キーワードは「親密圏」である。親密圏と公共圏の関係について再整理するところから始めよう。第６回目では、「親密圏（intimate sphere)」に関して「公共圏（public sphere)」と対をなす概念であるとしたが、これはあまり正確ではない。ユルゲン・ハーバマスが『公共性の構造転換 市民社会の一カテゴリーについての探求』で論じた公共圏は、権力としての公を制御するための仕組み、公の周辺にあって公に影響を与える枠踏みを指している。従って、ハーバマスによれば、公と公共圏は別のものであり、これに親密圏を加えて、公、公共圏、親密圏という三つの社会空間が存在することになる。なおギデンズは、「親密圏（intimate sphere)」を論じる際、こうした社会の枠組みを意識していないと考えられる。

一方で、私的な領域に関しては、性愛やそこから派生する家族などをベースとする親密な関係に基づくものと、公に相対する意味での私的な活動空間がある。例えば、公的なセクターとの対比で議論される私的な企業

活動等はこうした概念の中に入るが、そこは必ずしも親密な空間ではない。このように考えると、公、公共圏、親密圏という三つの社会空間に、「私」を加え、公、公共圏、私、親密圏という四つの社会空間が存在することになる。このように整理した場合、公共圏と親密圏は、ストレートに対をなす概念であると規定することは難しくなる。

このことを整理するためには、以下の二つが参考になる。

一つは、三田宗介の『社会学入門　―人間と社会の未来』(2006 年・岩波新書) である。この中で見田は、「補　交響圏とルール圏―＜自由な社会＞の骨格構成―」と題する章を最後に配置した。交響圏とは「喜びと感動に満ちた生のあり方、関係性のあり方を追求し、現実のうちに実現することをめざす」社会であり、ルール圏とは「人間が相互に他者として生きるということの現実から来る不幸や抑圧を、最小のものに止めるルールを明確化してゆこうとする」社会である。三田の述べる交響圏は概ね拡大した親密圏と考えて差し支えないと思われる。もう一つのルール圏は、公、公共圏、私の三つの社会空間を示していると考えて、これも概ねよさそうである。このように、三田の言説を借りて公共圏＝ルール圏と再定義することで、もともとの公、公共圏、私、親密圏の四つの社会を公共圏と親密圏の二つに再整理する方法がある。

さらに、「変容する親密圏／公共圏」と題する一連のシリーズの第１巻『親密圏と公共圏の再編』(2013 年・京都大学学術出版会) で落合恵美子は、公共性について、「国家という層」、「公共性の国家による占有を許さない市民社会」、さらには「市場の公共性を認めるという第三の立場」の三層構造があるとしたうえで、公共性の反対概念として家族に代表される「親密性」の領域を提示する。そのうえで、シリーズ全体として「『公共圏』『公共性』の反対概念として『親密圏』『親密性』を選んだ・・」としている。

見田の論考と、落合の論考は異なるものではあるが、二人の言説を基に考えれば、「公共圏」と「親密圏」の二つを対の概念として論じることは、それほど不自然であるとは言えないと考えられる。

このように親密圏について考えることで、人が人生の最後までその生を享受する空間として親密圏を位置づけることが可能になる。人が人であるためには、その人にふさわしい親密性に基づく空間としての親密圏に、どのような状態であれ人は包摂される必要がある。そのための支援を行うのは、現時点での日本における対人援助の専門職で言えば、看護師と介護福祉士がこれに該当する。

看護師は、保健師助産師看護師法の第五条において「厚生労働大臣の免許を受けて、傷病者若しくはじよく婦に対する療養上の世話又は診療の補助を行うことを業とする者をいう」と定義されている。ここでは看護師の役割として、傷病者又はじょく婦に対する「療養上の世話」という概念と「診療の補助」という概念が並列で述べられている。後段の「診療の補助」については、医療の補助あるいは治療の補助と言い換えてもよいと考えられ、一般的には医師の行う治療の補助的行為として整理される。もう一つの「療養上の世話」に関しては、傷病のある人等の療養を世話（ケア）する行為として理解される。

例えば、がんの患者さんでターミナル期に

ある方に対する疼痛管理などを含む看護、パリアティブケアなどは、典型的な療養上の世話に該当すると考えられる。この部分に関し、もし疼痛管理のような医療行為を含む療養上の世話ではなく、より一般化して考えて身体的に様々なことが自らは行えなくなった方に対するケアとすれば、これは介護福祉の範疇になる。

こうしたケアは、一般的に親密性に基づく関係性の中で営まれる援助行為であると考えられてきた。そのことの典型例が、親が子どもの世話として行うケアであり、子が親を介護するケアであった。しかし、それを対人援助の専門性として取り出したとき、もともと親密圏の中で営まれていた行為としての影響を受けることになる。ルールに基づき、正しいことやエビデンスに基づく援助を追求するだけでは、ルール圏、公共圏における援助行為としては成立するかもしれないが、親密圏の中では必ずしも十分な支援とはならない。

例えば、共感的態度とでも呼ぶべきかかわり方がある。自らの置かれた状況の中で悲観的な言動を繰り返す援助対象者に対し、「・・・なんですね」と、相手の主訴を繰り返すコミュニケーションが用いられる。ルール圏、公共圏でエビデンスに基づく支援であれば、「そんなことはありませんよ。・・・ですよ」と相手の言動を否定することが求められるが、共感的態度はそうではない。親密な関係性の下で、まずは援助対象者の言動を肯定することで、援助関係を成立させることが前提となる。これは、医師のなすべき医療行為ではなく、看護という専門性の持つノウハウであり、介護福祉の持つノウハウである。

以前、友人と話していてこのようなことがあった。

友人は、助産学の大学院博士後期課程の学生であった。外国人女性にとって満足度の高い出産時の支援、助産師として行うべきことは何かをリサーチクエスチョンとして研究を進めていた。数百例の外国人女性の出産の支援に関し、アンケート調査を行い、それをもとに論文を執筆した。結果は、とても興味深いもので、そもそも出産は元気な子供が生まれることと母親が無事であることが満たされれば、たいていの場合、一定の満足が得られることが分かった。さらに、個々の助産の行為が妊産婦の満足につながるためには、医療関係者が妊産婦に対して気にかけていること、気遣っていることが非言語的であったとしても伝わることが大前提として必要であり、それが満たされていない状況では、個々の助産の行為がいくらよくても、妊産婦から高い評価をもらうことができないということが分かった。

このことは、次のように解釈することが可能かもしれない。

出産という行為は、親密圏の中で行われる人としての営みである。その出産という行為を援助する助産という専門性もまた、出産しようとする女性との親密性の中に入っていくことで成立するものであると考えられる。だとすれば、先ほどの共感的態度のように、助産師を始めとする医療スタッフが出産しようとする妊産婦との関係性において、援助者側が援助対象者側に対して気遣っていることを積極的に示すことで、必要な援助関係を形成していくことが求められる。

友人の博士論文に関して指導した教員たちは、出産のプロセスに沿った助産師の支援に関し、きちんと整理できていることを評価

して学位を付与した。門外漢の私から見ると、友人の論文は、助産という対人援助の本質に迫るものであったのだが、そこの部分の評価はなかったように記憶している。

そもそも学位論文の評価そのものが、ルール圏、公共圏においてなされるものであり、それを親密圏の中で議論すること自体が難しいのだが、そのことが端的に表れた話であったように思われる。

人が支援を必要としたとき、その支援はどのような支援なのか。親密圏の中で行われるべき支援の必要性なのか、公共圏の中でのことなのか。

知り合いに乳がんの治療に詳しい外科医がいる。彼は、乳がんにおける温存療法の日本での草分けである。彼が外来を担当するときは、一日 100 人を超える患者さんが来院する。そのほとんどは、術後の定期健診である。一人 3 分としても、100 人の外来患者を診るためには 5 時間が必要である。来院する患者さんの中には、遠くからやってくる人もいる。その人たちが、半年に 1 回とはいえ、短い簡単なやり取りだけで遠くからきて満足して帰るものだろうかと疑問に思っていた。これまた知り合いの看護師とそのことを話していたとき、それは前後で看護師がきちんと話を聴いているから満足してもらえるのだ、ということを教えられた。確かにその外科医は、丁寧な話し方ではあるが、しかし核心を外さずに説明をしている。しかしそれだけでは、再発のリスクに不安を感じている来院者に対し、適切な診察とはならないであろう。看護師が親密な関係性の近くまで入り込んで、本人の状態をアセスメントしたうえで医師にゆだねる、医師は看護師からの情報を基に適切と思われる診療上の会話を交わす。この場合、医師はあくまでもルール圏、公共圏の側にいて、看護師が親密圏の中に入り込み、公共圏と親密圏の間を取り持つということになる。

このくらいまで説明することで、最初に掲げた介護福祉に関する定義の意味を理解することは可能になるのではないか。

人は、どのような状態であれ、親密圏を離れて一人で生きることは、不可能ではないし、それでよいという人もわずかではあるが存在する。しかし、集団で生活することが一般的な生物としての人にあっては、その生きる喜びの源である親密圏の中に包摂されていることが、ごく少数の例外を除き望ましいことであると考えられる。

多くの場合、それはパートナーとしての異性との関係であり、家族との関係であるが、それを拡大して、親しい仲間との親密な関係も親密圏となりうる。介護が必要になると、自ら進んでそのような関係性を維持したり作り出すことが難しくなるが、そのようなときに必要な介護の支援を行い、そのうえで家族や親しい友人たちと関係性を確保することが介護福祉の基本であろう。さらに、本人の日常生活能力が著しく低下して来たとき、介護福祉士そのものが援助対象者と親密な関係性を形成することで、必要なことを補うことまで行うことが現場では求められている。

たとえ介護老人福祉施設に入所していても、他の利用者との親密な関係性、介護福祉士の参加した親密な関係性に包まれている限り、その人には生きる喜びがあるのではないか、そのようなことを考えながら、介護福祉のプラスの価値を語る言葉として、冒頭の定義について考えてきた。

町家合宿 in 京都 vol.8

～食事についてその②～

山下桂永子

☆ある年の町家合宿観光の様子

某有名神社の門前通り。外国人観光客でごった返すお昼前の蒸し暑い日差しの中、町家合宿の一行は店先に並んだお土産物や食べ物の屋台を覗き、談笑しながら歩く。

A さん（中学生女子）がお団子を買って食べてよいか聞いてきたので、私は「どうぞどうぞ」と答える。A さんの持つ串団子のあまりの大きさに、一緒に歩いていた B さん C さん（同じく中学生女子）と団子を分けて食べるのかと思いきや、B さんと C さんは食べる A さんをカメラで撮っているが食べるわけではないよう。「B ちゃん C ちゃんは食べないの？」と聞くと、二人とも首を振る。それを見て、私は「A ちゃんそんな大きな団子を今食べてこの後の昼食、食べれるんやろうか、、、」と少し心配になりながらも、大きな団子を気持ちよくもりもり食べながら、B さん C さんのカメラに向けて、インスタ栄えよろしくポーズを決める A ちゃんにつられ、自分も何か食べてみたくなってきた。

「団子って気分じゃないし、牛串焼きとかコロッケってここじゃなくてもいいよなあ、、、」など思いながら歩いていると、店の看板に「うずら」の文字。うずら卵？じゃない。ふと目線を落とすと、うずらの丸焼きがある。「わあ、親鳥のほうか、うずらって」と驚いた私が言うと、町家合宿スタッフの 1 人が「そういえば○○神社前はすずめが食べれるので有名」など教えてくれる。「うずら」の後ろには「すずめ」の文字も見える。うずらの丸焼きはすずめよりは大きくて、にわとりよりは小さめ。身体の部分は魚のように開いてあって、頭はそのままで丸ごと串焼きになっている。若干グロテスクに見えなくもないが、タレをかけて焼いているらしく、テカテカしていて美味しそう。お店の人が「骨ごと食べられますよ」と声をかけてくれる。「鳥の骨ごと？どういうこと？すずめも食べられるんですか？」と聞くと、すずめはお店の中でしか食べられないとのこと。

うずらの串焼き。

食べる私とスタッフと B さん C さん。右下の団子を食べ終わった串を持つ A さんの手にもご注目。

国産鳥（小）うずら一串 700 円。思わず注文。つぼに入っているタレを塗ってもう一度焼きなおしてくれたものを透明パックに入れて渡される。うずらの頭からいく勇気は出ず、（たぶん）肩のあたりをかぶりついてみると、うん香ばしい照り焼きの味。しっかりした肉質の鳥の中に、魚の小骨が多めに入っているような食感。確かに骨ごとバリバリいける。スタッフ同士で味見をしつつ、その様子をカメラで撮っていた B ちゃんと C ちゃんにも勧めるが、2 人は無言の笑顔でまた首を振る。スタッフの 1 人が私に向かって笑いながら「B ちゃん、昔うずら飼ってたんだって、そらかわいそうで食べられないよねえ」私「え！ほんと！？わぁごめん！おいしいけどなんかごめん！」と慌てる私に B さんは「大丈夫」とニコニコ笑ってくれてはいたが、その心境まではわからない。

その後、串団子をたいらげた A さんは、1 時間もしないうちに昼食（バイキング）をしっかり食べ、夜ごはんのカレーはおかわりもして、かつ夜に神社のお祭に出かけた際には、屋台で売っていたチーズダッカルビなるボリュームのあるものをおいしそうにパクパクと食べ、寝る前には差し入れのアイスクリームも食べていた。

一方 B さんは、保護者の方から食べられないものを聞いてはいたが、自分で食べられないものをよけて食べれていたし、C さんも小食ではあるが、朝昼晩と食べないということはなかった。他にも、町家の中では食事が取れるが、人の多いところでは食事ができない D さんなどもいた。

☆食べたり食べなかったりすることを選ぶ。

町家合宿では、基本的に一日三食（原則一食１人 500 円）ついているが、食べる子も食べない子もいる。観光の流れの中での食事になるので、時間も前後して、そのタイミングで食欲がない場合もあるので、基本的には参加者もスタッフも食べたかったら食べるし、食べたくなかったら食べなくていいということにしている。

過去の町家合宿においては、普段は食事が取れなくてやせてしまい、通院しているという子もいたし、食べることに恐怖があって、下剤を持ち歩いている子もいた。そんな中で、私も最初は、参加者が食べるかどうかということを心配して、おせっかいにも食事をすすめるようなこともしていたのだが、最近では「脱水症状なるからこれだけ飲んどいて」とスポーツ飲料を渡したり、お茶や塩分補給の飴を渡したりはするが、それも渡すだけで本当に飲んだか食べたかまでは詮索しないし、食べさせようと思うことはない。あまり食べないと体力が持たない心配もあるので、一応朝食で残ったごはんをおにぎりにして、お茶と一緒にクーラーバッグに詰めて観光に持っていき、食べたい時に食べてもらったりはしているが、それも強制ではない。

なぜか。町家合宿ではみんなそこそこ食べるからである。

不思議なことに、町家合宿では、普段は食事が取れていない子が、大学の学食で「おいしそうだから」と真夏に関わらず、ものすごくボリュームのある鍋焼きうどん定食を、ゆっくりとかみしめるようにたいらげていく姿を見ることがあったり、下剤を持ち歩いていた子が、量はそれほど食べないが、それなりに食卓では周りと話をしながらカレーを食べ、その後下剤を飲んでトイレにこもるということもなく、夜食に用意したおにぎりにも手を伸ばす、という姿を見る。強制してもいないのに、むしろ強制していない方が、食べてくれている。家や普段の食事と何が違うのだろうか。

エアコンのない猛暑の中、体力を使い果たすような強行軍の行程の中で、本能的に身体が食べようとしているのかもしれないが、そこには、やはり「選ぶ」ということと関係があるような気がしている。普段は食べていないけど、誰から強制されることもなく、「これを食べる」と自分で決めることができたから、食べることができたのではないだろうかと思っている。

しかもその「食べる」という選択は１人で決めているわけでも、誰かから強制されているわけでもない。周りの誰かに何かしら影響されたり、自分の影響も与えたりしながらの、集団の中での選択である。町家合宿のメインテーマである「選ぶ」という行為の中には、「拒

否してもいい」という選択肢も含まれている。食べてもいいし、食べなくてもいい。何を食べてもいいし、何を食べなくてもいい。何かしら自分の行動を選ぶということが、誰かの前で自然に表現され、そしてそれがどんな選択であっても、可能な限り受け止めるという仕組みがあって、そこで初めて自由に選択ができるのではないだろうか。

カレーは夕飯の定番メニューの１つ。

あるスタッフの方のお手製フナずしやぬか漬けも登場。チャレンジする子もしない子もいる。

☆町家合宿で気付いた食べるということ

自分の食べたくないもの、嫌いなものはわかるけど、自分の食べたいものはわからない。そういうことは普段の生活で誰にでもあることだと思う。よくあることなのに、それは、自分に何が必要なのか、自分はどうしたいのかに気付くことが本当に難しいということに似ていて、そして同時に難しいのはそれを表現することだと思う。

町家合宿を始める前の私は、「ちゃんとした（健康的であったり、栄養バランスであったりを考えた）ものを毎日朝昼晩しっかりと食べなきゃいけない」という思い込みにしばられていたような気がしている。食べたって、食べなくたっていい、親や友達に勧められたものを断ったっていい。本当に自分に必要なものを自分で選び、何かを拒否することは、相手を否定することとは違う。食べるって、選ぶって、もっと楽しく、もっと自由であっていいのだろうなということは、私自身が町家合宿の中で学んだことである。

☆拒否することやしないという選択があっていい。

話は変わるが、普段、仕事の中で関わる不登校の子を見ていると、明らかに学校に行くのがしんどそうなのに、「行かない」と言えない子が多いと感じる。「行かない」「行きたくない」と言えないのに、結果として学校には行っていない。明らかに行けない状態なのに「行かない」と選べないこと、そしてそれを伝えられないことで毎朝毎朝大変な葛藤でもがいているように思う。そして気がつけば半年、1 年、数年と時が過ぎ、親や先生が「もう無理しなくていいよ」と言うまで、それは続く。そこで誰かが選んでくれた「行かなくていい」という選択肢に待ってましたと飛びつくかと思いきや、あきらめずに「いや、自分は学校に行けるはずなんだ」とまだ不登校を頑張る子もいる。何かを拒否する、いやだと伝えることにひどく臆病であったり、そもそもそんな選択肢はないと思っているのかもしれない。

そんな選択肢のない状況にいる子どもが、町家合宿に来て、拒否をしてもいい、選んでいい、選択肢は無限にある、ということに触れ、その無限の選択肢の中で 1 つを手にとって楽しんでくれたらと願っている。

参加者の希望で、クリームソーダ専門店へ。これがインスタ映えというやつですか。

今回の内容

●「餌をやるから猫が増える」は正しいのか。立命館大猫の会の活動記録からの一考察。

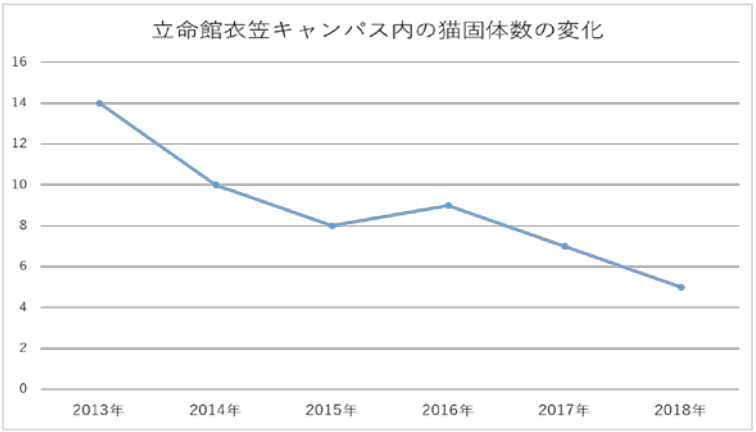
「餌をやるから猫が増えるんだ！」

ノラ猫問題については話をする時によく耳にするのが「餌をやるから猫が増えるんだ！餌やりを禁止すればいいじゃないか！」というご意見です。あれこれ皆で地域猫活動をするとか TNR 活動をするとか時間も手間もかかるややこしいことをしなくても餌をあげている人を特定して強制的にやめさせれば手っ取り早い、低コスト、低労力だという主張です。はたして本当にそうでしょうか。

今回のマガジンでは、猫に対する「可愛い」「可哀そう」といった感情論を除いて「餌やり」について実践データを元に考えてみたいと思います。

大学猫の頭数変化

以下のグラフは、立命館大学衣笠キャンパスにおける大学猫の頭数です。



立命館大学猫の会 RitsCat という大学猫サークルが、毎朝毎晩学内に生息する猫にエサをあげています。１日２回も**エサをあげているのに、猫の頭数が減っています。**

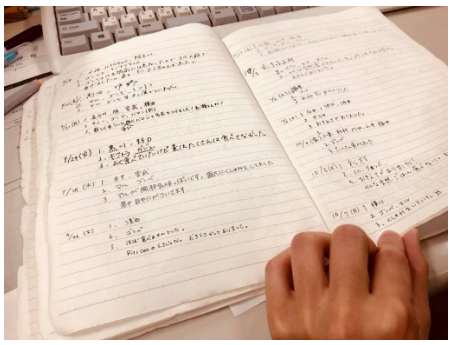
「餌やり」を猫問題の唯一の“**原因**”だと考えてしまえばそこで思考ストップですが、餌を与えながらも猫が減っている事例がある以上、「餌やり」も一つの“**要因**”であると考え、「餌やり」以外にどんな要因がどのように組み合わさればどんな結果が生まれる可能性があるのか、検討してみたいと思います。

※【原因】ある事象を起こした元となるもの。基本１つに特定される。

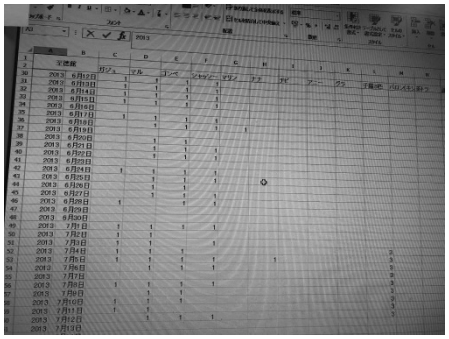
【要因】ある事象が起きたことに対する影響を与えたもの。基本複数存在する。

検討をする材料にしたものは、RitsCat の餌やりノートです。餌やり時に、「どの猫がどこに餌を食べに来たか」が主に記録されています。過去６年分のノートをデータ化し集計しました。とっても大変でした(笑)。

餌やりノート



毎日の記録



データ化（大変でした）

「猫」も「餌やり」も問題の“原因”ではなく“要因”

私たちは、物事を考える時に「A という原因」があって「B という結果」がる。というシンプルな因果論でおさまるように考えがちです。分かりやすいですし、小学生のころからひとつの問題に対して、ひとつの回答欄がある卓上のテストを受け続け、卓上の理論をたくさん身につけて大人になるわけですから当然です。したがって、ノラ猫の苦情が問題になると、まずは下記のような考えが出てくることが多いです。

●ノラ猫の存在が問題なんだ　→　ノラ猫を排除すればいい。

具体案：保健所で殺処分してもらうか、ボランティアに全頭保護してもらおう！

となります。現在は殺処分目的の猫の捕獲ができないことや動物愛護団体はどこもキャパオーバーで全頭保護してもらうことが不可能だとわかると次のステップとして・・・

●餌をやるから増えるんだ　→　餌やりを禁止すればいい

と考えがちです。実際この第二段階に留まり、餌やり禁止看板やチラシ、餌やりをやめるよう説得するということに労力を割いている自治体も多くあります。

私が問題と取り組みを考える上で理論ベースにしている「家族システム論（猫アレンジ Vr)」では、実社会では一つの明確な原因が問題を生み出しているのではなく、様々な要因が影響を及ぼし合って問題を生み出していると考えます。

立命館大学猫の会 RitsCat の活動内容を深堀りしてみる

立命館大学猫の会 RitsCat（以下 RitsCat）は、大学構内を主な生息域とする猫を「大学猫」とみなし、TNR（Trap/捕獲し，Neuter/不妊去勢手術を行い，Return/元の場所に戻すこと)、給餌、糞尿の掃除、を継続的におこない、大学猫に一代限りの命を全うしてもらいながら、猫の繁殖増加や鳴き声、ゴミあさり、糞尿の臭いといった猫トラブルを最小限に抑えた大学環境を確立維持する取り組みです。行政やボランティアとの協働や周辺住民との合意形成はありませんので、狭義の地域猫活動には該当しませんが、取り組み内容は地域猫活動の理論をかなり参考にしています。

RitsCat が大学猫活動によって「猫の頭数がゆるやかに減る」と想定した理論仮設は以下の通りです。

1. TNR の実施により新たな繁殖を防ぐ。
2. 発情期による縄張りを超えた猫の移出移入を防ぐ（不妊手術を実施するため、大学猫のメスは発情期に別コロニーのオスを呼び寄せなくなり移入が減り、大学猫のオスは発情期が来ないため、別コロニーのメスを求めて移出することが無くなると考えられるため)。
3. 時間設定のある餌やりの実施によって新たな猫の移入定住の確立が下がる。
4. 猫が寿命等で死亡していく。

１～４の要因によって猫の頭数がゆるやかに減っていく結果がでると考えています。少し補足します。

「１．TNR の実施により新たな繁殖を防ぐ。」

不妊手術をすれば子どもが生まれないということに関して異論は無いと思いますが、TNR のやり方として、例えば公益財団法人どうぶつ基金が呼びかけている**「即行」「徹**

底」「継続」のような TNR の三大原則をきちんと守れているかどうかは一つの大きなポイントだと思います。猫は１年間に１～４回出産することができ、１度に１～７匹の子どもを産みます。それを忘却し、２０頭くらい未手術の猫がいるのに、月１，２頭ずつ TNR をする計画を立ててしまったり、２０頭中１９頭に TNR をして満足して放置してしまったりすると、「TNR をしたけど猫は減らなかった」という残念な結論に至ってしまいます。しかしそれでは「TNR を実施した」とは言えません。なるべく早く全頭に TNR を実施し、新たな猫の移入や手術もれの猫が見つかった場合はすぐに TNR を実施するという体制を継続することが必要です。

「2. 発情期による縄張りを超えた猫の移出移入を防ぐ」

ノラ猫の生態調査を７年にわたって実施した山根明弘さんの著書「わたしのノラネコ研究（さえら書房)」を読むと、発情期に約６６％のオス猫が自分のコロニー出て、別コロニーの発情期のメス猫に求愛しにいく「繁殖戦術」という行動が観察されています。これを参考に考えると別コロニーのオスは、ただメス猫が居るところではなく、「発情期のメス猫がいるところ」をめがけて遠征してくると考えられます。したがって、TNR を全頭に実施しすることができれば、大学構内に猫が居続けたとしても、発情期が来ないため、別コロニーのオスを呼び寄せなくなると考えられます。また、不妊手術を実施した大学猫のオスは発情期が来ないため、別コロニーの発情期のメスに惹かれて移出していく行動もなくなりネコロニーが安定する可能性が考えられます。

「3. 時間と場所設定のある餌やりの実施によって新たな猫の移入定住の確立が下がる。」

●RitsCat の餌やりルール

各コロニー（現在２カ所)、朝 10 時頃と、夕方１７時頃に当番の学生たちが餌を持っていきます。大学猫たちが食べ終わるまで見守り、食べ終わったら残飯を撤収します。また給餌の間に常設している水皿を洗って新しい水を入れます。猫のトイレスポットの掃除もあわせて実施します。

ここも大きなポイントです。よく、「食べれない子がいると可哀想だから」とか「気が散ると思うから」という理由で、無人状態で何時間も餌を置きっぱなしにしているという話を聞くことがあります。でも、それではたまたまその餌場を通りかかった猫が「ここには餌がある」と気づいてしまう機会もぐっと増やすことになります。そうなると「新しく強い猫が入ってきて、今まで食べに来ていたのに来れなくなってしまった…」という事態になることも容易に想像がつきます。そこで、「決まった時間に決まった場所で、いつもの人が見ている前で」なら餌をたべられるという**秘密のルール**を手術を受けてもらった

（受けてもらう予定の）大学猫たちと管理者が共有することが重要だと考えられます。そうすれば、たまたま大学近隣を縄張りにしている猫が大学構内にふらっと入ってきたとしても、通りかかった時間がちょうど餌の時間じゃないかぎりただの通過で終わるでしょうし、万が一餌の時間に通りがかったとしても見ず知らずの人が近くで見ているところに餌を食べに来れる猫は稀です。**縄張りは人と猫が協力してはじめて安定化するのではないかと感じています。**

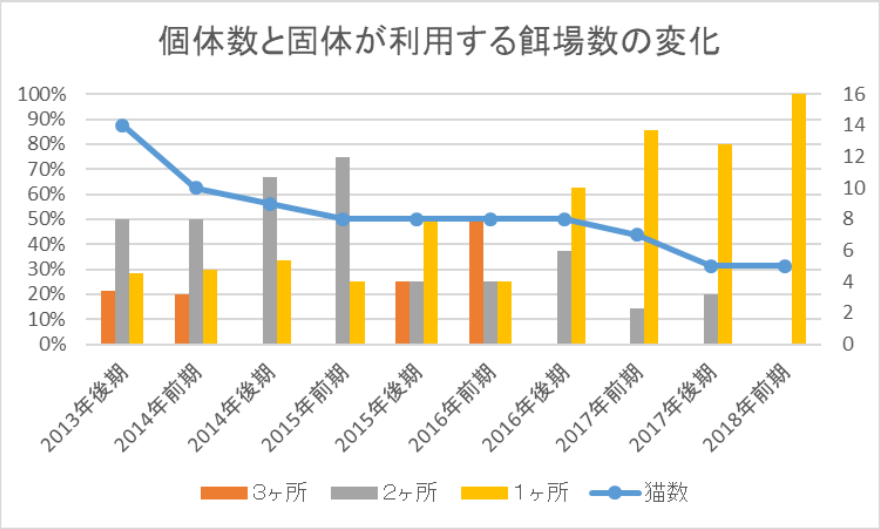
しかし「猫の縄張り意識」について議論が分かれます。例えばアメリカで発表された「ノラ猫数の長期的 TNR＆里親募集プログラムの評価研究」では大学構内で 115 匹 11 コロニーの状態から、①TNR と②里親譲渡、③エイズ白血病検査陽性の猫に対する安楽死、この 3 つを 11 年に渡り実施し大学の猫は 23 匹になったという研究です。そのまとめにおいて、「*長期的な TNR によって長期的にノラ猫の数を減らしていくのは可能である。(中略)。猫は、コロニー間の移動であったり、遺棄によって、新しく加わってくる。****ノラ猫の縄張り意識が薄いことによって、移入を防ぐすべがない。****(後略)*」と結論づけられています。ただし、この論文を読む限りでは、TNR をどのようにすすめていったのか（端のコロニーごとに実施していったのか、まんべんなく実施していったのか、どのくらいのペースで実施したのか）が書かれていないません。また、「*餌はボランティアによって毎日与えられ、残り物がでたり他の動物が食べないように調整された*」と書かれていますが、具体的な給餌方法は書かれていません。RitsCat 給餌方法では 2 つのコロニー、計 5 頭でも 1 時間ほどかかるので、これだけのコロニー数と頭数だとどのように給餌しているのか気になります。また、115 頭中、里親譲渡と安楽死が 90 頭おり、人為的に猫をコロニーから頻繁に抜き取っていることがコロニーの不安定さの要因になっている可能性もあるのではないかとも考えられます。RitsCat の場合、学内で生まれた子猫や遺棄が疑われる子猫を里親に譲渡したことはあるが、基本学生が実施している取り組みのため積極的な保護里親譲渡は実施していません。譲渡した猫は 1 匹の病気の猫を除いて離乳前の幼齢個体でありコロニーに影響を及ぼす以前の個体だと考えられます。したがって、他の論文で猫は縄張り意識が薄いと書かれているから、縄張り意識はないんだと結論づけてしまうのはまだ早いと思います。

次に、RitsCat の活動記録を猫の頭数以外の側面からも見てみたいと思います。

RitsCat の活動結果、餌場の固定化

次の図をご覧ください。ブルーの折れ線グラフは最初に見ていただいた猫の個体数変化を示しています。記録がある 2013 年時は 14 頭の猫が確認されていましたが、2018 年現在は 5 頭に減ってます。活動が始まった 2011 年の頃は 20 頭近くの猫がいたと思います。2011 年から TNR を実施しはじめ、2014 年後期の時点で、学内で確認されている猫の

100%に不妊手術が完了しました。



カラフルな棒グラフは、１頭の猫が利用する餌場の数を示しています。当初は学内に３ヵ所、ネコロニー（猫のコロニー）がありました。したがって餌場も３ヵ所ありました。オレンジの棒は、３か所の餌場に食べにくる猫の頭数を割合で示したものです。14 頭中３頭の猫は３か所の餌場を利用していることが分かります。グレーの棒は２か所に食べにくる猫、黄色の棒は１カ所の餌場に餌を食べにくる猫の頭数を割合で示しています。データを取り始めた 2013 年の時点では、71%の猫が複数の餌場を利用しています。猫の行動範囲が広く不安定だったことが見えてきます。そして、活動を始めてから７年目、TNR を全頭に実施完了してから４年目にあたる 2018 年前期の時点では、生息するすべての大学猫が一カ所の餌場のみを安定して利用するようになったことが分かりました。

まとめ

大学周辺には管理されていない沢山のノラ猫がいるにもかかわらず、大学構内のネコロニーが安定して、ゆるやかに頭数が減っています。

餌をあげているのに猫が減っている要因は、「決まった時間に、決まった場所で、決まった人たちの前でならごはんを食べられる」という秘密のルールを大学猫たちと共有していること。つまり、「**人と猫が協力することによって手術を受けた猫も縄張り続けることができる**」と考えられるのではないかと感じています。

猫の複数の餌場利用が一カ所に固定化したというだけで猫の縄張りが狭くなったと解釈していいのか等少々疑問も残る考察ですが、大学周辺には無秩序にノラ猫がたくさんいるにもかかわらず、キャンパス内の猫の個体は減少固定化し、新たな移入が無いということは猫の縄張りに関する注目できる結果だと思います。

道徳や感情論を抜いて考えた場合に不妊手術を受けた猫がその場所に居続け、新たな移

入猫を防ぐ最大のメリットは「コスト」です。せっかく TNR を実施しても手術を受けた猫は移出し、未手術の猫が移入してくる状態では、未手術の猫が移入してくるたびに不妊手術の費用と労力がかかってしまいます。低コスト、低労力で環境を維持するためには不妊手術を受けた猫たちになるべく長くそこにとどまって縄張りをはっていてもう必要があります。

今回のマガジンでは、猫に対する「可愛い」「可哀そう」といった感情論を除いて「餌やり」について実践データを元に考えてみたい初めに書きました。ここまで書いて少し付け足したいと思います。

「餌やり」については、「可愛い」「可哀そう」**「嫌い」「ムカつく」**といった感情論を除いて「やるやらない」の議論ではなく、環境を良く維持していくための「方法」を考えていく必要があるのではないでしょうか。安直な「餌をやるな」もまた猫や餌を与える人への嫌悪感等が産んだ「感情論」だと言えるでしょう。そしてもちろん、放置したり、ばらまいたりといった無秩序な餌やりも要注意です。

給餌方法以外に見えていない要因がある可能性も十分に考えられます。突然見知らぬ母猫が餌場に現れて子猫をおいて、母猫自身は去っていったという話もいくつかの現場で聞いたことがあります。今回紹介したデータはあくまで、1 カ所の事例です。実施場所の環境要因も大きく影響するでしょう。もっと色んな現場で実施している TNR とマネジメント（大学猫活動や地域猫活動など）の実践を比較検討する必要があります。このマガジンで餌やりに関する考察をあげたのもこの一つの仮説を元に別の現場で活動している人が自分の活動を振り返って、否定や肯定の新たな仮説を立ててくれれば、議論が深まりもっと猫問題を改善するための成功要因が見えてくるだろうと思うからです。自分の現場ではこんな事があった、という情報があればぜひ教えてください（最後にメールアドレスを書いています）。昨年福島大学で開催された第 3 回大学猫シンポジウムに参加させてもらった際にぜひ毎日の活動の記録を取るよう呼びかけました。今年の第 4 回大学猫シンポジウムは京都大学で開催される予定です。沢山の大学の実践か積み重なっていき、なにが見えてくるのか楽しみです。

おわり

小池英梨子
NPO 法人 FLC 安心とつながりのコミュニティづくりネットワーク
「人もねこも一緒に支援プロジェクト」　プロジェクト代表
「ねこから目線。」としてフリーでも活動中。
意見・感想・お問い合わせ：e.kosame12@gmail.com

先人の知恵から
21

かうんせりんぐるうむ　かかし

河 岸　由 里 子

社会が変わり、気候が変わり、人も変わる。長い年月変わらなかったものが、ここ１００年の間に大きく変わってきた。その主たる要因になっているのが人口増加であろう。人が動物界のトップに躍り出て、やりたい放題やってきた結果が自然破壊つながっているとは言えないだろうか？

諺について考えてみると、何百年も変らず、庶民の間で広く伝えられてきたものが、ここ１００年で当てはまらなくなるのかもしれない。それでもやはり、温故知新を通したい。

今回は、「き」「く」で始まる言葉から次の８つを挙げてみた。

- 金石(きんせき)の交わり
- 琴線(きんせん)に触れる
- 金を攫(つか)むものは人を見ず
- 釘を刺す
- 苦言(くげん)は薬なり、甘言(かんげん)は病なり
- 腐っても鯛
- 癖なき馬は行かず
- 口は禍(わざわい)の門(かど)

＜金石の交わり＞

友情のきわめて堅いこと。いつまでも変らない交際のたとえ。「金石の契り」ともいう。「金襴の契り」も固く美しい友情のたとえで、同義語だが、出典は易経。

出典　漢書

友情とは一体何か？どんなものなのか？

最近表面的で、希薄な関係性で「友情」とも呼べない状況にもかかわらず「友達ごっこ」のような関係の子どもたちに出会う。

「友情」という関係性では、お互いに言うべきことは言えるし、互いのことを思い

やり、常にベッタリと一緒に居なくても、信じることができ、だからこそ、進路がかわり、バラバラになったとしても、ずっとその「友情」を保てる関係のことである。

自分の利益を優先し、その為に都合の良い人間関係を構築したとしてもそれは「友情」とは程遠いものにしかならない。「この人にくっついていればいじめられない」とか「一人でいないための人間関係」とか、一緒に居ても楽しくもなんともないのに、作り笑顔で友達のふりをしているような関係は「友情」ではない。

本来この人が好きで、この人と一緒に居て安心でき、繕ったり、気を張ったりすることも無く、素のままでいられ、心が安定し、時には喧嘩をすることがあっても、また仲直りが出来る、そんな関係が「友情」であり、そのように結ばれた関係は金や石のように固く、ずっと変わらない。そんな関係になれる人を見つけるには、傷つくことを畏れてばかりおらずに、積極的に人と関わり、自分にあった人を探していくことではないだろうか。友達作りに消極的な子どもたちには、この諺を贈りたい。

＜琴線に触れる＞

人の心をゆさぶり、大きな感動や共鳴を与えること。各自の心の中の、共鳴して鳴り響く弦に触れる意から。

こんな言葉を知っている子どもは減った。最近の子どもなら「チョー感動した！」とか、「めっちゃ良かった」とかと言った言葉で表現するのだろう。

中学校の音楽で琴を弾く授業を設けている所もある昨今、琴の弦が振動するさまを見たことがある人もいるだろう。琴の弦は長い。それ故、振動が目に見えるほどである。しかし振動は繊細である。人の指が弦に触れることで、美しい音を奏でる。人の心も、ちょっとしたことで、揺さぶられ、良い方向に揺れれば、感動に、悪い方向に揺れれば辛さになってしまうが、この諺が意味するのは、良い方向に揺れることである。

しかし、最近、誤った使い方をされているように思う。「怒りをかってしまう」とか「むかついた」という意味で使っている人がいる。

言葉は歴史と共に変遷するが、諺はずっと古くから、変わらずに来たものなので、正しい使い方を守ってほしいと思う。

＜金を攫むものは人を見ず＞

一つのことに熱中しているものはほかのことがまったく目に入らない事のたとえ。

出典　烈士

金ばかりに目をとらえられるというのは、すなわち欲に目がくらむという意味である。欲に目がくらめば、人に対して疑心暗鬼になり、人を信用できなくなることもある。金だけではなく、他の事でも同様に、何かに熱中してしまうと周りが見えなくなる。それを戒める意味でこの諺を使っている。

＜釘を刺す＞

後になって問題が怒らないように、あらかじめ念を押したり注意したりしておくことのたとえ。釘を打ち付けて固定する意から。「釘を打つ」ともいう。「楔(くさび)を刺す」も同義。

どんな場合でも、先のことをある程度想定して、起こりうる事態に対処できるよう準備したり、根回しをしたりするだろう。子育てでも同様である。

特に、間違った行動に対しては、大抵の保護者が「二度と同じことをしないように」と「釘を刺す」。「次こんなことをしたら〇〇だよ」という。注意というより脅しに近い。何度も同じことを繰り返されると脅したくもなるだろう。釘を刺すのは、先の問題を予防するためである。本当に釘を打ったり刺したりするわけではないのに、それが叩いたり、殴ったりになってはいけない。あくまで、念をおしたり、注意したりすることである。

＜苦言は薬なり、甘言は病なり＞

耳が痛く聴きづらい言葉は薬になり、取り入ろうとするへつらいの言葉は害毒になるということ。「薬」は「やく」とも読む。「甘言は疾(しつ)なり」ともいう。

出典　史記

本人のためになることを言ってくれていても、聴きたくないということは多いのではないか？自分でもここがダメなところと分かっていることを言われると猶更である。

しかし、本人のためになることや、本当のことを言ってくれる人は少ない。おべっかやお世辞に踊らされていては、成長しないばかりか、ふんぞり返ってしまって横暴になったりもする。

「先生」と言われる人は、特に気をつけなければならない。自分の利益のために、そういう立場にいる人には、媚(こび)へ諂(つらう)う人々が群がる。そこに更に金銭や権力が絡むと、何とか学園問題や、文科省の役人の不祥事等が生み出される。

また、他人同士であるならともかく、親子の間で本当のことを言い合えないのは問題である。

子どもが親の悪いところを指摘し始める時期というのがある。父親や母親が今までは絶対だったのに、子どもが成長してくると親のダメなところに気づくようになる。そうなれば、当然指摘が始まる。子どもは正直だし、正しいことが多い。そんな時、「そうだね。お母さんが間違っていたね。」とか「お父さんのやり方ではだめだね。」などと言えればよいが、自分が間違っていても「生意気言うな！」などと怒ったりする人もいる。

「老いては子に従い」という諺もあるように、子どもがある程度大きくなってきたら、この厳しい意見もきちんと聴き、自分自身を修正していけるように、気をつけねばならない。

また時々見かけるのだが、親が子に媚びて、子どもの問題行動や困った性格などに対し、正直に指摘したり叱ったりできずにいる親がいる。子どもは親を下僕の様に扱い、我が物顔でのさばる。そんなことにな

ってしまっては家族自体が崩壊する。

親として子どもに言うべきことはしっかりと言わねばならないし、子どもも親が言うことに対し反発をすることがあったとしても、どこかで親だからこそ言ってくれるのだと思うことも大事である。更に、子どもが成長したら、子どもが親に対して言うことに耳を傾けることができるようになるのが理想である。

昔から、親子関係や友人関係について、この諺を用いて助言することは多い。

特に発達障がいの子どもたちに関わっている人は、子どもたちの特性を中心に、将来を考えられるような目を持って欲しいと思う。

社会はまだまだ発達障がい者に対し、理解不足ではあるが、そのつなぎ役としても、このような考え方が大切ではないか。二次障害になっても、基本的なものは変わっていない。基本的な得意分野を伸ばし、自信をとりもどして前向きに進めるよう支援していければと思う。

＜癖なき馬は行かず＞

一癖あるくらいの者のほうが、ただ大人しいだけの者よりも、いざという時に役に立つということのたとえ。気性が荒くて扱いにくいくらいの馬でないと遠くまでよく走らないことから。

子育ての相談に乗っていると、「やんちゃで困る」とか「自我が強くて頑固で」などと、いう親御さんに会う。まして最近では発達障がいの問題なども、相談の中心になっている。どんな子どもにも、良いところが必ずある、そして、その癖が強いほうが、何かに結びつくことが多い。

例えば、人と関わるのは苦手だが、何か作業にとてつもなく集中できる子は、研究職や職人に向いていたり、自分自身を出すのは苦手だが、演ずるのは凄く得意という子は、役者に向いていたり、喧嘩っ早くて困った子が、ボクサーや格闘技の世界で活躍したり、その子その子の特性を生かすことで、その子が輝けることは多々ある。

＜口は禍の門＞

不用意に言ったことがもとで、災難を招くことが多いので、ものをいう時には慎重にせよといういましめ。「口は禍の元」ともいう。「門」は「もん」とも読む。出典には、「口は是禍の門、舌は是身を斬る刀なり」とある。「口は虎、舌は剣」「多言は身を害す」なども同義語。　出典　事文類聚

「口は禍の元」の方は一般的だろうが、どちらも同じ意味なので、こちらを載せさせてもらった。

この諺は広く知られているので、意味について書くつもりは無い。日々色々なところで、「失言」がもとで失職したり、謝罪をしたりする場面を見ることも多い。最近議員の失言があまりに多く、驚いてしまう。同様に、教育者や指導者の問題もある。

パワハラやアカハラにも関わりの深い「失言」もある。テレビやラジオなどのメディアでの発言、インタビューでの失言も含め、失言をしてしまう場が昔より多い。

こうした「失言」は実際に口で言わなくても、Facebook や Twitter、Line 等でも同様に扱われる。こうした SNS での問題は、小中高の生徒たちの間のみならず、親同士のやり取りにも見られている。

日ごろ関わる子どもたちには、「人の悪口を言えば、必ずどこかからそれが伝わり、いずれ自分に戻ってくる。口は禍の門だから何を言うかをよく考えてから言おうね。」と伝えている。

出典説明

漢書・・・百二十巻

中国の正史の一つ。『史記』に次いで二番目に成立した正史で、高祖から平帝までの前漢２３１年間の史実を記した歴史書。後漢の班固が父班彪の着手した修史を引き継いで完成し、班固の死後、妹の班昭が表十巻と「天文志」を補った。『史記』が上古から漢代までの通史であるのに対し、『漢書』は前漢一代だけの断代史であり、以降の正史の典型となった。

史記・・・百三十巻

中国古代の史書。最初の正史。前漢の司馬遷の著。古代伝説上の帝王黄帝から五帝、夏、殷、周，秦の各王朝を経て前漢の武帝までの約二千数百年の歴史を総合的に記した通史。本紀（帝王の伝記）と列伝（臣下などの伝記）を主体とする本書の歴史記述は「紀伝体」と呼ばれ、以後の正史の規範となった。

事文類聚・・・

古今の事実と詩文を集め、項目別に分類した書。前集六十巻・後集五十巻・続集二十八巻・別集十二巻は南宋の祝ぼくの撰。新集三十六巻・外集十五巻・は元の富大用の撰。遺集十五巻は元の祝淵の撰。

烈士・・・八巻

中国、道家の思想書。戦国時代の思想家列禦冠（列子）の撰とされるが、異説も多い。道家思想に基づいた心虚思想（心をむなしくして欲にとらわれないこと）を説く。寓話が多い。

私の出会った人たち

（6）

関谷啓子

2018年　夏

６・０５

M さんは車椅子での生活ですが、何故か今日は上体がかなり傾いていて、

いくら直してもすぐに傾く・・・と言う１日でした。

時々こんな日があります。

しかし、オヤツも夕食も完食でしたのでご安心ください。

６・１２

今日はご機嫌で、昼食もおやつのゼリーもペロリでした。こちらが一方的に話しかけていると時々「そうやねえ～」とはっきりした返事。

「あれっ、聞こえてはるのですか？」と尋ねると声を立てて笑われます。今日はそんな日でした。

足の爪、固くて左の親指は水虫ではないかと思いました。スタッフの方にお聞きしましたが「そうではない」との返事。

切りにくいのは承知ですが、本人が気持ち悪いだろうから切ってほしい・・・とお願いして帰りました。

６・１５

元気な桔梗や紫陽花をたくさん頂いたので、お福分けに持って行きました。

眠っておられたので起こさずにスタッフの方と話して帰りました。最近は調子が良いですよ・・との話に安心しました。

施設には新しい入居者があり、慣れるまではなかなか大変なようす。怒ったり泣いたりスタッフさんも応待に大変です。

昔、M さんが入居されたときもこんなだったかなあ～と思いながら、廊下まで聞こえてくる声を聞きました。

変な時間に行ったのでおやつは持参しませんでした。

６・２０

午前中に行ったので、洗濯の仕上がりを待つ間ゆっくりと昼食の介助ができました。パクパクと気持ちの良い食べっぷりで完食。

オヤツも楽しみにしておられますよ・・・とスタッフさんの声かけ。

６月なので「水無月」にしましたが、小さく切り分けると上手に食べられます。

口から物を食べるのはエネルギーがいります。そうして食べた物は身について元気になります。

胃ろうにした私の父は、決まった時間に栄養が機械的に管を通じて身体に入りましたが、少しも元気にならず、楽しそうでもなかったのを思い出しました。

ミキサー食でも、口に入れてあげる時は「はい！口を大きく開けて・・・。そうそう上手

ですね」などとついつい大きな声で喋ってしまいます。

これも刺激になって良いかも・・と勝手に解釈しています。

先日持参の桔梗も紫陽花も今日見たら見事にドライフラワーになっていてガッカリ。

忙しいスタッフの方にそこまで期待はできません。

６・２６

梅雨に入って雨が続くらしいので、乾きやすいパジャマを用意しました。楊柳でサラサラと肌触りが良いのです。

今日のおやつは夏らしく「鮎のお菓子」にしました。M さんは求肥がお好きのようです。

喉に詰まらないように皮で包みながら少しずつ口に入れましたが大丈夫でした。

７・３

ロビーにいらしたので、お部屋に移動。両手で顔を覆っておられましたが、おやつを出すと匂いがしたのか手を外されました。

バウムクーヘンだったので右手に乗せてみました。ゆっくりと口に運ばれますが、なかなか口の場所が？わかりません。

最初だけ、ここですよと誘導するとあとはちゃんとできます。食べ終わると「美味しかったですよ」とはっきりおっしゃり恐縮します。

スタッフの方も「オムツ交換の時は大変ですが、終わると　ありがとう　とお礼を言ってくださるのが励みになります」と話しておられます。

こう言うのは生来の事なのだろうかと思ったりします。いずれ同様の道を行くことになる

のだから今から心がけておかなくては・・・と教えられました。

７・１７

遅い時間でしたが、お顔を覗きに行きました。ベッドで横になっておられましたが、スタッフの方が起こして車椅子に座らせてくださったので、

ハンドマッサージをしたり髪をといたりして一方的に私が話しかけました。

最初はご機嫌斜めだったのですが、だんだんと機嫌がなおられ、今度は私の手をマッサージしてくださいました。

初めは私の手を握って何をされているのかわからなかったのですが、マッサージをしてくださっているのだと気づいた時はちょっと感動。

将来、全く話ができなくなっても、「触れ合う」と言うのは感覚として解ってもらえるのでは・・と先日から思っています。

手が終わった後、自己流でデコルテをマッサージしたら、頭を私に預けてゆったりとリラックスされたようでした。

あのような表情は初めてでしたのでちょっとびっくりして、色々と考えさせられました。

７・３１

暑い日が続いていますが、施設内は温度調節されているので、Ｍ さんは汗もかかずにお元気です。

ただ、髪が伸びてうなじの辺りがもしゃもしゃしていたのでカットの予約を入れました。

８月に入れば出張美容師さんがきてくださいますので。

今日は覚醒も良く、「茶摘唄」を歌うと私の膝をトントンと叩いてリズムを取ることもできました。

だめな日は何を試みてもダメなので嬉しい１日でした。

８・３

今日はなぜか洗濯物が多く２回に分けてやりました。下着が多かったので、体調が悪かったのかもしれませんが、スタッフからの特別な連絡はありませんでした。

持参のプリンはツルツルと喉を通ったようです。

話しかけても反応がなく、食事のとき以外はずっと顔を覆ったままでした。

もうすぐ、御主人の命日なのでそんな話もしたのですが・・・。

夕食は鱸の揚げ物・人参グラッセ・オクラとカボチャの蒸し物・にゅうめん・ご飯でした。

ゆっくりですが完食。

８・２１

夕食が始まった時は明るくて、サーっと通り雨のあと、まだ日が残っていました。

みんなが黙々と食事をしていると「あっ　大きな虹！」と誰かの声。

思わず外を見ると、本当に信じられないような大きなクッキリとした虹です。

片脚は雲の中に消えてしまったかと思って視線を移すと随分離れた場所に続きが見えます。

思わずワアーと叫んだほど立派な虹でした。

俯いていた人も車いすの人もみんなで、しばらくは言葉もなく虹を見ました。

スタッフの方が動けない人を窓際まで運んで下さったのも嬉しいことでした。

最近は４階の入居者が少なくなって、食事も以前ほど賑やかではありません。

皆、黙々と食べて、終わった人から歯磨きを済ませ７時には人影も無くなるのがいつもの風景でしたが、

今日は思いがけずみんなで虹を見て食堂の雰囲気が一気に明るくなり、生き生きとしました。

なんだか得した気分。この時間にこの場所に居合わせなかったら、私も俯いたままで気付かずに過ごしていただろうと思うとＭさんに感謝。

「今夜は良い夢みられそうですね」と言って退室しました。

うたとかたりの対人援助学

第７回　かたりの文化としての手話 その１

鵜野　祐介

「ダイバーシティ」と「かたりの文化」

「ダイバーシティ（diversity）」という言葉を最近よく耳にするようになった。「多様性」と訳されることが多い。「かたりの文化」の研究においても、「ダイバーシティ」という視点は注目されている。例えば英国スコティッシュ・ストーリーテリング・センター所長ドナルド・スミスさんは次のように話す（2016 年 6 月 22 日取材）。

将来に向けて、センターが取り組むべき課題の一つが、マイノリティ（少数民族・社会集団）や移民・難民への支援であり、そこで重要となる視点が「文化的多様性［cultural diversity］」だ。スコットランドには古くから「移動生活民［traveling people］」がおり、彼らの所有する伝統文化を尊重してきた歴史がある。一方、アングロサクソン文化によってケルト文化を駆逐しようとした負の歴史もある。文化的多様性の精神を生かし、互いにシェアし互いを理解しようと努めることが今後ますます求められる――。

かたりの文化としての手話

スミス氏へのインタビューから 10 日後の 7 月 2 日、アバディーン大学で行われた「民俗学・民族学・民族音楽学会 2016 年度大会」でエラ・リースさんの研究発表を聞いた。口承文芸の研究者はこれまで「口承文芸＝音声言語によって伝達される文芸」という観念にとらわれてきた。だが、ろう者（聴覚障害者）社会においては「手話」という音声言語ではない身体的言語による「かたりの文化」が伝承されてきた。このことを認識し固定観念から脱却すべきと提言した。

W-J・オング『声の文化と文字の文化』（1982/邦訳版 藤原書店 1991）に代表されるように、従来の研究者は言語文化を「声の文化」と「文字の文化」の二項対立でとらえ、「うた」や「かたり」などの口承文芸は前者を代表する文化との認識の下に考究を進めてきた。これに対して「手話」は、「声の文化」でも「文字の文化」でもないが、ろう者社会における必要不可欠の言語文化として継承されてきた。にもかかわらず、そのことに着目した研究は、管見の限り皆無に等しいとの指摘だった。

リースさんの発表では、「手話」によって昔話や伝説を語るストーリーテラーの活動も紹介された。これはまさに、「かたりの文化におけるダイバーシティ」の具体例に他ならない。筆者にとって大きな衝撃だった。以来、折に触れて関連文献に目を通し、また取材を重ねてきた。これから 2 回にわたり、「かたりの文化」という視点から「手話」について考えてみたい。今回は、ろう教育と「手話」の歴史を辿っていく。

「聾（ろう）」という字

はじめに、「聾」という字について触れておきたい。常用漢字ではないため「ろう」と仮名書きされるのが一般的だが、漢字では「聾」と表記される。白川静『新訂　字統』

（平凡社 2007）には、「龍」に「こもる、たちこめる」などの意があると記されており、「耳」と組み合わせて「聞こえない」という意味になったと考えられる。

一方、1999 年に設立された日本初のバイリンガル・バイカルチュラルろう教育のフリースクール「龍の子学園」（2008 年に改組され学校法人「明晴学園」となる）は名称の由来を次のように説明している。「耳がないといわれている伝説の動物である龍の頼もしいイメージを考え、ろう児も、聞こえないことがマイナスイメージにならず、龍のように雄々しく育ってほしいという願いから名づけた」（クァク・ジョンナン『日本手話とろう教育』生活書院 2017：106）。

「手話」とは何か

クァク（2017）によれば、「手話」は以下のような特徴を持つとされる。①ろう者の集団の中で形成される。②ろう者の親の下に生まれ、家庭の中で手話を習得するろう児もいるが、約 9 割のろう児は聞こえる親（聴者）の下に生まれ、ろう学校で他のろう児に接する中で習得する。③音声言語を見える形で表したものと誤解されてきたが、音声言語とは別の文法構造をもっている。④音声言語と同様に、国や地域などによって異なる。⑤「手の形、位置、動き、手のひらの向き」という 4 つの要素の組み合わせによって違う単語を作り上げ、三次元の空間を使って表される視覚言語である（25-26 より要約）。

ろう教育と「手話」の歴史

ハーラン・レイン（原著 1984/邦訳 2018）『手話の歴史』（上・下巻、斉藤渡訳、築地書館）は、欧米におけるろう教育や「手話」の歴史を、主にフランスのろう者でアメリカ初のろう学校教師となったローラン・クレール（1785-1869）の視点から記したもので読みごたえがある。ここでは邦訳版下巻に付した前田浩の解説を元に、ろう教育と「手話」の歴史を概観しておきたい。

ろう教育に関する記録は、8 世紀初頭、イングランドのヨークの主教であるヘヴァリーの聖ジョンがろう児に言葉を教えたとの伝説に遡る。また世界最初に開かれたろう学校は、フランスのパリろうあ学院である。1760 年ド・レペ神父がパリのムーラン街にある自宅を開放して、身分や家庭状況によらずさまざまなろう児を無償で教えていった。1791 年パリ国立ろうあ学院として認可され、以降イングランド、ドイツ、オーストリアなどヨーロッパ各地にろう学校が設立される。ド・レペの教育方針は、ろう者の言葉である「手話」を学びつつ、フランス語文法を習得するための「方法的手話」（音声語に対応した手話）を考案し、両者を併用して進めていくというものだった。

パリ校からは何人もの優秀なろうの教員が育っていった。その一人であるクレールは、同校で教育助手をしていた頃の 1815 年、アメリカ・コネティカット州ハートフォードからヨーロッパのろう教育を学びに来ていたトーマス・ギャローデットとロンドンで運命的に出会い大西洋を渡る。二人は新しいろう学校作りに奔走し、1817 年アメリカ初の公立ろう学校「コネティカットろうあ学院」をハートフォードに設立する。

口話主義の台頭

「ろう教育の歴史について語る時、手話と口話の対立の話を避けては通れない」（前田 2018：267）。口話法とは発話を中心に始まり、口の動きを読み取る方法（読話）と結びつい

たものである。これをろう教育に取り入れたのは 17～18 世紀のオランダ人医師ヨハン・コンラッド・アンマンで、18 世紀後半のフランスでも口話法を推進するヤコプ・ペレイラが手話法推進者のド・レペと論争を繰り広げたが、やがて手話法が主流となっていった。一方、ドイツとイギリスでは口話法が広がり、19 世紀後半になると、その普及にとって足かせとなる手話法を排斥しようとする口話主義として、アメリカでも大きな影響を及ぼすようになる。

ろう者にできる限り聴者と同じような生活をさせてやりたい、そのために聴者の話す言葉を口の動きで読み取り、音声で話せるようにさせたいという口話法の発想そのものは、ろう教育の基本方針として間違っていない。だが、難聴の程度、先天的か中途失聴か、親が聴者かろう者かなど、さまざまなケースがあるにもかかわらず一括りに扱い、「手話」は口話法を習得する上での阻害要因となるものであるためその使用は全面的に禁止すべきとする「口話主義」の根底には、ろう者やろう者社会が育んできた「手話」という言語文化に対する差別意識が横たわっている。

そしてその背景には、ダーウィンの進化論を人類社会に応用し「野蛮から文明へ」と進化したとする「社会進化論」、社会的強者によって社会的弱者は淘汰されていくのは自然の理とする「社会淘汰説」、優秀な血統を保持するために劣悪な血統は排除されるべきという「優性思想」といった、19 世紀後半以降における一連の社会思潮としての「強者の論理」がある。

前述したスコットランドにおけるアングロサクソン文化によるケルト文化の抑圧のみならず、日本政府による沖縄の人びとやアイヌ民族に対する抑圧も同時代の出来事である。口話主義の台頭もまた、強者である聴者の側からの、ろう者に対する社会的抑圧として理解される。

電話の発明者ベルの功罪

スコットランドの口承文芸を四半世紀にわたって研究してきた筆者にとってはいささか辛い事実だが、アメリカにおける口話主義の普及に指導的役割を果たしたのは、スコットランド出身で電話の発明者として知られるアレクサンダー・グラハム・ベル（1847-1922）である。

23 歳でカナダに移住し、まもなくボストンでろう教育に携わるようになったベルは、ろう者に「音声で話させる」ことに自らの生涯を捧げた。彼の母親も妻もろう者だったが、2 人とも言語を獲得してからの中途失聴者であり、口話法で通じ合うことができた。そのことが彼のろう教育へのスタンスを決定づけたと言える。妻への一途な思いも相俟って、ろう者が話せるための機器を目指して進めた研究が、電話という副産物を生みだした。ただし、皮肉にも「電話はろう難聴者には何の利益ももたらさなかったどころか、時としてろう難聴者の社会参加を阻む機器ともなった」（ibid. 268）。

前田はベルの功罪をこう断罪する。「ろう者はそのグループやコミュニティにあって手話で言語生活をする、そのためそこに口話法が浸透しない原因があるととらえたベルは、ろう者社会の解体を図り、ろうコミュニティを形成する寄宿制ろう学校よりも通学制ろう学校の設立を主張した。さらに優生学の研究を進めた。ろうであることを不幸なこととととらえ、ろう者同士の結婚を妨げ、ろうの子どもの誕生を防ごうとしたのは、人権蹂躙に等しい優性思想の表れと評するしかな

いであろう」(ibid. 268)。

優性思想の影響は日本にも及んでいる。旧優性保護法（1948-1996）の下、ろう者を含む障害者への１万６千件を超える強制不妊手術や中絶手術が行われてきた事実が、今年になって明るみとなったことは、周知の通りである。

ミラノ決議からバンクーバー宣言へ

1880 年にイタリア・ミラノにおけるろう教育者会議において、口話主義者が手話法派の反対を抑えて、音声言語の優位を称え、「手話」は締め出されるべきとする決議が採択された。その結果、「欧米のろう教育において、ろう者のさまざまな人権を踏みにじる基盤の上に口話法が君臨するようになった」（ibid. 270)。

「しかし、手話はついえなかった。確かに、ろう学校など教育の場において手話は排除されたが、教員のいない教室や校舎では、ひそやかに先輩、後輩、同級生たちが手話で語らい続けた。ろう者同士の夫婦、彼らの間に生まれたろうの子どもたち、またその子どもたちと、家庭、一族の中でも手話は生き続けた」(ibid. 270)。

そして 2010 年、カナダ・バンクーバーでの第 10 回世界ろう教育会議において、ミラノ決議は公式に却下される。バンクーバー声明には、「すべての言語とコミュニケーションの形態を尊重することを喚起する」と記されており、そこには口語法も手話法も含まれる。「ここに言語教育の多様性を許容するようになったろう教育の熟成を見る」(ibid. 271)。

日本におけるろう教育と「手話」の歴史

日本初のろう学校は 1878（明治１１）年、古河太四郎によって設立された京都盲唖院である。また 2 年後には東京・築地に山尾庸三によって楽善会訓盲院が設立された。両者を皮切りに　全国各地に盲児とろう児が一つの校舎で学ぶ形の学校が設立されていったが、やがて両者の教育法の相違は極めて大きいと認識されるようになり、１９２３（大正１２）年盲ろうの分離を明記した「盲学校・聾学校令」が出された。

「大正後期から昭和初期にかけてベルの視話法や欧米のろう学校の口話法実践が続々と紹介され、わが国のろう教育は、手話中心の教育方法から、読話と発語による口話法へ傾倒していく……。当時の口話法は手話否定を前提とし、手がかりもなしに子どもに相手の口の動きを読み取らせたり、発語させたりする方法であった」(ibid. 273)。

1960 年アメリカのウィリアム・ストーキーが「手話は、音声言語と同様に、機能的で独立した構文と文法を持つ言語である」と結論づける論文を発表し、潮目が変わった。1960 年代、黒人の公民権運動に影響を受けながら発展したろう者たちの運動は、「手話」の言語的認知を拡げていった。1980 年代には大脳生理学の分野でも「手話」が言語であることが証明された。こうした流れを受けて 1980 年代後半から北欧で「手話」を第一言語とするバイリンガル教育が始まり、アメリカでもバイリンガル・バイカルチュアルろう教育の実践校が増えていった。日本においても「手話」を積極的に取り入れるろう学校が増え、2008 年には「手話」を第一言語とする、前述の「明晴学園」が設立された。

「しかし、今後を楽観視しているだけではいけない」と前田は警告する。障害者福祉全体を見た時、国の施策は前進しているとは言いきれないし、世界でも日本でも弱者を切り

捨てる不寛容の精神が強さを増していると感じられるからだ。文化的多様性を尊重する多文化共生社会の実現に向けて、「手話」をろう者社会における必要不可欠の言語文化として認識するとともに、「手話」を用いて語られるろう者の文化を「発見」し、また自ら「体験」することが、今求められている。

全国高校生手話パフォーマンス甲子園

毎年 10 月上旬、全国初の手話言語条例が制定された鳥取県で「全国高校生手話パフォーマンス甲子園」というイベントが行われていることをご存知だろうか。第 5 回を迎える今年は 10 月 7 日（日）鳥取県米子市で開催される。奈良県立ろう学校の 2 連覇なるか?! ネットでも視聴できる。ぜひ「手話」というかたりの文化を「発見」し、「体験」していただきたい。

ああ、結婚！

―婚活日記―

第7回

黒田長宏

＜2018年5月6日：ネットの婚活で探し出す＞

4つのネット婚活を本格的に始めてみた。怪しい出会い系サイトとは違うと言われている婚活ネットであるが、結婚相談所でさえ、それを利用したサクラに当たってしまう私なので、ネット婚活で大丈夫かという思いもあるが、ネット婚活で決まったほうが成婚料が無い分、経済的に得なのである。

それで、結婚相談所のネット検索にやや力を落としてやるようになってしまい、4つのうちでもMがなんだか臨場感がある。オンラインの人がわかったり、市町村まで出てくると、もしやと思って緊張してしまう。結婚相談所のネットはほとんど顔写真があるのに、Yなんかは顔写真がない人も半分以上かというくらいで、顔写真が出てないのは、ギャンブルな感じがある。しかし本当に50歳だと、出産可能な年齢の人との結婚はそんなに厳しいのかというのを一度の生涯で挑戦しなければならない。年齢だけではなくて年収の面もあるんだろうが。しかし、前回も想定外の出来事の連続だった。まだ具体的な事も起きていないのに、こんなに文字数を使ってしまって良いのか。

＜5月8日＞

飛び石で、今日も多くのネット婚活にほとんどの時間を費やした。Yで気軽な感じでだからだろうが、28歳の人がいいね！みたいなことをして、メールが書けたがそれきり。さすがに22歳差は結婚できないと思い、誰か紹介して欲しいと書いた。Pだったか、2人が足跡をつけてくれたので、メールでフォローしたが、結婚相談所のよりも、一段階アクションが入っているようでもある。とにかく一人見つかれば良いのだ。

Amazonプライムから、『百円の恋』（2014）をみる。性犯罪にあったり、主人公は大変な目に遭うが、合意的な関係の人も一度去り、また戻るが、不合意は当然犯罪だが、合意だとしても、婚前交渉の危険性も孕むのを教えているような、複雑な現代の名作だと思った。無機質な世の中に迷走してしまう人も多いのか。

＜5月9日＞

婚活サイトPはオプションする必要を感じ、さらに出費した。Pはオプションで高いか。結婚相談所のネット婚活から応募が来たが、40歳で再婚の中国の人だった。やたら中国の再婚の人が出

てくるが、専門の相談所があるのだろうか。先日のロシア人の時のように、親と大喧嘩になるのは目に見えているので断った。

＜5月10日＞

これを書くのもまずいのかも知れないが、昨日からだるくて、首かのどのあたりが痛く、寝違えたのか、風邪なのかみたいな、きっとネット婚活のやりすぎだと思う。それで今夜はネット婚活に集中せずに休むつもり。

＜5月11日＞

中国人で再婚の女性、29歳で女の子のある人が応募してくれた。だが、母親が日本人でないと発狂するので、断った。あと1か月で51歳。辛抱。

＜5月12日＞

ネット婚活のやりすぎだと思う。首の痛みや頭痛のため来院。MRI を初めて受けた。

＜5月14日＞

痛み止めを飲みながら、昨夜は数時間ネット婚活をして、今朝ピークよりは軽くなったものの、痛むような気もしながら、早朝からネット婚活。応答なし。どこまで我慢すれば良いのか。でも何もしないと不可能である。何かしていなければ。ネットでないほうで告白もする意気地もない。職があるだけで有難いと思うしかないだろう。大リーグの大谷翔平の活躍など聞くと、そういう人だと婚活は苦労ないだろうなと思う。世代がそもそも違うだろ。

＜5月15日＞

ネット婚活をコツコツやってはいるが、どちらも再婚死別の人で、84歳と77歳の女性が出ているのにはチャレンジャーだなと思った。勇気を与えられるかも知れない。痛みは減ってきている様子。

＜5月16日＞

ネット婚活でそんなに派手な立場ではない人になんとか本命な感じでメールを3日続けて出してしまっているが、しつこいだろうか。ネット婚活によってそういうことができるのもある。別のネット婚活で40歳以上お断りと高ピーな女性がいたので頭にきて、抗議を送ったら、審査の段階で拒否された（笑）。いい加減、世界中で一人でいいのでパートナーが現れてくれー。

＜5月17日＞

新たなネット婚活にもだいぶ送った。M に帰宅後集中し、23時になってしまった。寝ないと。

＜5月19日＞

ケースバイケースで結果論に過ぎないが、お金をたくさん払って必死な結婚相談所の婚活では、私のような不利な条件の人はさらに不利かも知れない。リスクは高いが女性のほうは無料で、男性のほうも比較すればだが安いネット婚活のほうが私のような立場だとましなのだろうか。断りではあるものの2通、直接相手からメールが来たし、どちらもそのネット婚活で知り合って交際しているという。断りの嘘というわけでもないのかも知れない。とにかく探し続けるしかないか。そして52歳の隣県の人から関心を持ってもらったのだが、残念ながら実の子が諦めきれず、美魔女もいるし、実の子を気にしてないなら範疇でもお応え出来ない。私の状態でも全くいないわけではない様子。

＜5月22日＞

本格的で比較的高額な、詐欺師とロシア人との思い出の出来た婚活を休会にして、ネット婚活を2つから3つ増やそうと変更に出た。3つ増やして以前と費用同額くらいだと思う。考えながらやっていきたいと思う。どうも、クレームでもないと思うが、私が送ったメールに対して、クレームなのかな、よくわからないなというメールで返信する人が2人くらい出ていて、1人は本当にクレームに感じたらしく断られて、さきほどまた一人きたが、女性心理というのはよくわからない。心配のつもりで書いてもクレームのように返してくる人がいる。

＜5月23日＞

不定休なので休みがつまった時期ではあるが、集中力があまりなかった気もする。高額で本格的な婚活3つを休会し、3つのネット婚活に登録した。これでネット婚活が7つである。新たに応募していたら一日が終わってしまった。早くパートナーが一人いればよいのだし、時間を勉強に使いたいのだが、ネット婚活とは言え、ほかにどうしていいかわからず、この時間が大事だ。

＜5月25日＞

ネット婚活のMはクレームやお断りでもメールが来る人が出来て、3人目の人が一昨日にメールくれて、昨日もくれたのだが、はっきり交際したいというところまでは行ってない文面ではあるが、1000人以上無反応なのに、一番ましなメールをくれた人が出てきた。ところが、私が応募した癖に、ルックスがいまいちだと思ってしまい、直情的になれず、相手もじれてしまい、とうとう、素直に私のルックスとセンスをよく思ってくれる人に時間をつかうからと書かれてきた後に、私には判断できないから、会うかブロックするかどちらかにしてくれと書いてしまい、相手の出方を待っているところ。『半分。青い』でなくて、半分失敗である。

思えば元妻も婚活詐欺の人も、ルックスの初見はそれほどタイプでもないと思っていたのにも関わらず、固執できるところまで行ったのだった。今回の人だってわざわざ複雑にしないでまず会ってから判断すれば、もっともやもやしなかっただろうに。

失礼になってしまったと思う。だいたい1000人以上が無視なのに、メールを6通くらいもくれたわけである。筆まめな人でもあろうが。しかし、高額を払った婚活より、1例とは言え、1週間ばかりでメール交換をしてくる人がいちおう出来たというのは、高額なネット婚活だから良いわけでもないというわけか。今回の人が会うことを選択してうまくいってしまったら、ネット婚活のリサーチはこれだけで終えてしまうわけだが、そのほうが良いのかも知れないが、こんなに不利な状態でもどこまで私は強欲なのかと。逃した魚は大きいという場合もあるのかも知れない。だいたい37歳である。13歳も若い人である。贅沢すぎたか。欲張りは致命的か。

＜5月25日＞

婚活サイトMで、せっかく返信をくれていた人と交際なしにした。相手にブロックしてもらうか、会ってもらうか選択をゆだねたが、来ないので、

こちらから説明してブロックした。オンラインだったから見たと思う。ただ見てないとしても数か月もすれば忘れてしまうのが現実かも知れない。しかし1000人の女性が返事をくれないのにくれた人は貴重だったのに。私の欲望だが、顔写真で迷う人には極力応募しないことにすべきか。計算が働いた面もある。お会いするまでは迷いを隠して装うことも出来ただろうが、私はそれが出来ない性格だった。でも、刺激になった。高額な婚活でなくても、可能性はあるかも知れない。まだ始めて一週間あたりだ。

＜5月27日＞

実の子が諦められず、それでもさすがにアラフォーの人達に応募しているから難しいのだが、同年代の女性は2人、応募してくれたのだが、残念ながら断っている。このミスマッチは私の強欲なのか。適正年齢というのはある。

＜5月28日＞

美人で36歳から応募がきて緊張が走ったが、文章が機械翻訳調で年収が私の倍もあり、どうみても釣り合わないと思ったのと、勇気が出ずメールを返さなかった。受信拒否を一度して戻してどうするかまた悩んだが、相手からブロックになっていた。また詐欺まがいだったのかどうか。同年代からは2人きていたが、36歳で美人から来るのは初めてである。詐欺師は10歳サバ呼みの35歳だったのだが。ディスカウントスーパーで、婚活事業を地域周辺から茨城県を主な視野に始めたらしい人のちらしがあったが、どうも怪しく感じてしまうものの、金目的もあるとは言え、そういう仲人事業、婚活事業に目を向ける人があるのは悪いことではない。私自身は経営どころか客のほうだが。ネット婚活だって危険性は考えてしまうが。だが、職場では告白の勇気もない。勇気がないという言葉を繰り返している。だから勇気の問題も人生の成功にはあるのだな。

＜5月30日＞

これから出勤。起きてメールを開いたら38歳の人からメール開通してもよい状態になっていて、早速書いた。今度の人は、写真の印象も良く、どうしようか迷うことはなく、有難いと思う。

＜5月31日＞

マッチングしたのかと思っているのだが、相手からメールの返事が来ない。なんなんだ？

＜6月3日＞

マッチングした人でさえメールが来ない（笑）。今日も休日でだいぶ時間をネット婚活に費やしたが、8つのうち、2つ退会した。4つくらいにしたいが、あと2つの退会が思いきれないので、しばらく6つ入っていようかと思う。はやく一人出てきてくれ。

＜6月3日＞

大阪からわざわざ「キモくて迷惑」と書いてきた馬鹿がいた。無言でブロックすればいいのに。ネット婚活には変なのがいて不愉快だ。こっちからブロックした。

＜6月5日＞

焦って腐り気味で母親にもあたったりしていたが、夕方に2人目のメール開封できる人が来て、1人目は依然としてこないが、2人目はメッセージも初めて添えてくれた。そして長くなってしまったが、経営をスタートしたい人らしいので、アイデアを書いてみた。なんとなく癒されて、努力の甲斐はあると思う。腐っているときに現れて気持ちを変えてくれるのは女神だと思っている。

＜6月6日＞

マッチングした人からの連絡は来ないし、今朝みたら、使い方を間違えているに違いないが、アメリカ人の外科医からいいね！みたいなのが来てしまい、対応できるわけがない。しかも、私は身長が165から166センチくらいだと思うが、相手は178センチだったか、大きい人だった。申し訳ないがブロックした。ブロックも思いやりのようなものだと思ってきた。しかし、私のほうも別の意味で突拍子もない選択を続けようとしているのだろうか。マガジンのネタにしかならない事が続く。

＜6月7日＞

ネット婚活をまた一つ解約した。これで5つのネット婚活である。しかし、メールが出来るようにマッチしてくれたのにメールが来ないのはどうしてか。わからない。

＜6月11日＞

しかし、わざわざメール開通してくれた3人からメールが来ない。どうなっているんだ。そして51回目の誕生日が来てしまった。さらに婚活に不利になる。職場の歓送迎会でHさんという事務員がいると教えてもらっていたが、エレベーターに乗っていてようやく名前が一致したが、二度もみた。それを教えてくれた人に伝えた。別のエレベーターでは、後ろ姿がかなり良い人がいるのだが、その人と一緒になった。しかし職場で告白する勇気はない。ないからこういう人生になっているのか。ネット婚活も一体効果があるのかさっぱりわからないが、条件も私なりのが難しいのかも知れないが、今のところ、ネット婚活しか思いつかないのだ。

＜6月14日＞

ネット婚活も最初の大勢から比べると絞り出すようになってしまったが、昨日進めたら、一人、わけありな人がメールを返してくれて、プロフィールを変えてみたらという私の意見に感謝してくれて、早速変えたので、良いことをしたように感じた。さらにいろいろアドバイスしてしまったのだが。だが、交際には至らないのではないか。もう一人、メールできるようにしてくれた人がいるが、返信はない。以前の2人と同じようなケースか。一人現れればいいのだからあせってはいけない。だが、交際にはならないものの、返事をよこす人がいるというのがネット婚活の可能性を感じる。

＜6月15日＞

マガジンのネタが増えるばかりだが、今朝の4時に34歳のかわいい女性からいいねがきて、マッチングしてワクワクしていたら、午前中でブロックされていた。相手がなんらかの間違いをしでかしたのか。良ければ積極的でも了承を得られるはず。持ち上げられて落ちた感じ。昨日書いたわけありの人とも感謝されて終えたのではないか。頑張って欲しいが、どちらも30代前半。連続してきたが、さすがに30代前半とは交流は全くないくらいに思っていたのに残念は残念。17日の午後から夜までネット婚活を集中してやるつもりでいる。懲りてはいけない。諦めてはいけない。そうしたら終わってしまうから。

＜6月17日＞

連休の前半なので、外出の用事を済ませて帰宅した午後から夜まで、ネット婚活を2つ集中してやった。肩こりがする。どちらもオプションが必要なものだったので、まるでギャンブルのように

お金を投入したが、早く勝負しなければいけないし、投資のようなものでもあると思い、思い切って出費した。一人マッチングしたと思ったら、間違えたごめんなさい。というのでブロックされていた。出費に罪悪感があるが、ネット婚活をしなければどうしようもない。と思っているし。

＜6月22日＞

ネット婚活も相当やっても動きがなく、職場の既婚者に30代の知人がいたらと依頼したら、独身者が部屋の中に2人いたのを忘れていて、筒抜けだった。謝礼は誰にでも支払うというオチだった。

＜7月3日＞

前回に書いたちょっとした事件も特にどうにもならず、前回までの休日中にもコツコツと5つのネット婚活を進めていたのだが、メール出来るように開通してくれた4人の人が誰も返してくれず、しかも4人以降、誰も反応もない。しかし、職場で口説く勇気は無く、可能性さえわからないが、ネット婚活に期待するしかない。

前号に比べてかなり動きがない。動きといっても結婚詐欺に遭ったわけだから、将来性は無かった点で変わっていないのだが。提出までに新たな本当の交際を目指す。今朝、サッカーワールドカップで初のベスト8を目指した日本が、2点先制しながら逆転負けを喫した日である。

＜7月9日＞

起きてメールをみたら、久しぶりにマッチングしていた。今度こそ返信があれば良いと思う。

＜7月17日＞

この間に、西日本ですさまじい雨の害が起きてしまった。死者が200人を超え、猛暑の中の復旧の報道がなされている。毎年のように天災があるが、思い出してしまうのは、2011年の大災害と、茨城県では常総市の水害がもう3年前だろうかあった。そんな中で無力にリア充だけ求めている私、私のリア充の定義は、パートナーが見つかる事。対人援助という場で複雑な気もする。ネット婚活だけが出会いの場ではないのはわかっているが、それ以外の場で口説けない。そこで休みにはコツコツネット婚活を進めているが、結果が出ない。マッチングはまた一人出来たが、その後の連絡がない。その前のマッチングの人はちょっと違うかと思ったり、返事もないのでブロックした。効果があるのかもまるでわからないが、始めたばかりの頃に、ずいぶんやりとりした人が一人いたことが可能性を感じさせているし、オプションで課金されてしまうところを抑え気味にして、スタート月は仕方ない面もあったかも知れないが、浪費にならないよう気をつけながら、粘っているしかないと思っている。今までのところ、前回の詐欺師ではあったが、交際中とは全く違う内容になってしまっている。交際している人がいるのといないのとでは感受性というのか、生活というか、人生というか、全然感覚が違ってしまう。この時期は猛暑だし、それも不安を感じさせる。

＜7月24日＞

ネット婚活の進展がまるでない。はじめたばかりの5月のほうがいくらかあったのはなぜなのか。そこらへんが微妙な運命だ。西日本の大災害の後にきた、全国的な猛暑。熊谷市の昨日の41.1度は最高記録だという。今日は休みで、元妻とのトラブルの頃から入っていた、弁護士保険を解約のための電話をした。後日解約書類が郵送されてくるらしい。これも実際には活用しなかったものの、気分的には文字通り保険になっていた面もあると思うが、そんなに弁護士を頼む立場でもないと思い、解約しようと思う。どうにか一

人、パートナーが現れてくれることが一番時間的にも有効な私の人生の援助になるのだが。職場は女性が多くてもやはり口説きに入るのは出来ない。

　ネット婚活はそれに参加する人は何かの特徴もあるのか。競争も複数生じるだろうし、私が実子が諦められないという事情や私の状況もある。休みにコツコツ応募するしかない。実子がもうできない年齢の女性からは数人、マッチングもきたようだが、ブロックせざるを得ない。マッチングして実子も可能性ある年齢の人が3人ほどいるのに連絡が来ない。一体どういうことだ。もう一人いたが、パパ活目的ではないとしても、事業へのお金の見返りがないと判断したのだろう。ブロックされた。

＜8月3日＞

　昨日は、ネット婚活で久しぶりにマッチングだとメールが来たが、サイトを開くと見ることは出来ず、どういうことか質問中。今日はまた別のネット婚活で41歳の人がいいねをくれて緊張感が走り、39歳までにしているが、妊娠率は変わらないのかと調べていたところ、再びみてみると、その人が消えていた。緊張感も消えた。女性の参加者はえらく、突発的な人がいる。

＜8月9日＞

　しかし今回は婚活が全く進まず、前回とまるで違う日記のようでさえある。51歳となり、中年クライシスというのか、今まで離婚裁判などで、仕事の悩みはよくスルー出来ていたなと思ってしまうが、思うところがあって、台風13号の余韻の中を、水戸市まで行って、経営コンサルタントに会いに行って、事業の相談に行った。定年まで近づいたこと、もともと勤め向きで私が無いと自己評価してしまうこと。やっておきたいことがあること。具体的にはまだ書く勇気がないし、まだやっていないのだが、理念的には申し分ないと自負するアイデアを事業化出来ないか。現在こうして唯一連載させていただいている内容と関連すると言えば、だいたい察しがついてしまうだろうか。お会いした経営コンサルタントは同学年の人だった。

＜8月13日＞

　祖母の新盆で今日明日休みをとって、今日もちらほら来客があるが、明日のほうが大変らしい。全て母親が取り仕切ってくれているが、私だけだとどうにもならないと思う。これも今後の不安材料だ。パートナーがいれば、不安を分け合えるのに。経営コンサルタントの先生に、良いかどうかわからないながらも、2通目のメールに創業計画書のデモをもとに添付して計画書を送った。その後、ネット婚活を複数みたが、ピンとこない。動きも止まってしまっている。今後寿命が尽きるまでになんとか乗り切れるのか、攻撃は最大の防御とは表現が荒いが、なにか準備もしないと。前回は詐欺師ながらも、交際相手がいれば、随分違った内容の連載になっていたのに。今号は、猛暑時期も重なったのもあるかも知れないが、スタートは、ネット婚活をいくつもはじめて流れを作りたかったが、不調に終えた。祖母の新盆も終えて涼しくなったら、流れも変わるだろうか。創業計画なんてのは、もがきでもあるのだけれど。生き続けるのは難しい。よく他の人達は生きて頑張っているなとつくづく思ったりする。

〔PBLの風と土　第6回〕

学びの場のプロセスをデザインする戦略

山口 洋典（立命館大学共通教育推進機構准教授）

【前回までのおさらい】

筆者は2017年度にデンマークのオールボー大学で学外研究の機会を得ました。オールボー大学では1974年の開学当初から全学でPBL（Problem-Based Learning）に関するを導入していることで知られています。

連載1回目から4回目までは比較研究で得た知見を報告し、第5回では帰国後に立命館大学で行った公開研究会での質疑応答の内容を中心に、改めて日本での地域連携型の教育実践との考え方の違いに焦点を充てました。その際、オールボー大学以外でのPBLのモデルに触れ、教員と学生の関わり方を紐解く手がかりを示しました。

1. 多様な人々が関わり合う学びの実現

オールボー大学での学外研究を終えて1年あまり、徐々にその内容を紹介する場所が増えてきた。実際、5月28日に立命館大学サービスラーニングセンターによる公開研究会にて、本連載の1回目から4回目を資料として用いつつ、現地での研究成果を報告した。その際のの話題提供の内容は、既に立命館大学サービスラーニングセンターのホームページ上のリレーコラムにて、「問題解決学習における学びの環境のデザインのための視点～デンマーク・オールボー大学における全学でのPBLを事例に～」と題し、紹介する機会を得た（山口，2018a）。何より、前回（第5回）の本連載（第9巻1号、通巻33号）では、公開研究会の席上で重ねられた質疑応答の内容を紹介することにより、日本においてはPBLに対してどのような理解がなされる傾向にあるのか、問題解決と課題解決という語用の問題から検討したところである。

また、7月18日から20日にかけて、米国・ニューオリンズで開催された「国際サービスラーニング・地域貢献学会（International Association for Research on Service-Learning and Community Engagement: IARSLCE）」にて、立命館大学サービスラーニングセンターの事例研究を発表する際、本連載の第4回で紹介した「PBLのはしごモデル」を用いた。具体的には、「Cultivate writing habit for the reflective and active learner in service-learning curriculum: by presenting prompts and 3 principles」（サービス・ラーニング科目での省察的なアクティブ・ラーナーのための書く習慣の涵養の方策：メモの取り方ガイドと3原則の提示）と題したポスター発表を行った。「PBLのはしごモデル」は、科目の進行を7つのステップで整理するという枠組みのため、学びのプロセスについて、いわゆる「見える化」（visualization）のツールとして興味深いと、参加者からコメントが寄せられた。

また、8月9日から10日には、北海道庁による「学びの環境が活性化する指導者研修」事業として、道内の高校教員らを主な対象として開催された「環境の村工コロジーワークショップ」の講師として招聘され、デンマークでの比較研究の知見を共有した。2日間のワークショップでは、本マガジン31号の執筆者短信でも紹介した「Art of Hosting（AoH）」の理念と方法論をもとに、参加型リーダーシップ開発の場づくりに取り組んだ。AoHは日本語の訳が難しいものの、私はデンマークでの3泊4日の合宿型研修に参加した実体験をもとに、「場の担い手に求められる知恵」や「おもてなしのコツ」といった言い方で、その魅力を伝えると共に関心が高まるよう紹介している。何かをする側とされる側の立場を固定せず、その場にいる者の全てが心地よい感覚に浸っている状態となり、その場がもたらされたことによって日々の仕事や生活の環境がよりよいものになっていく契機となるよう、研修という非日常の場と日常の環境とをどう結び合わせることができるか、

AoHの概念を理解するファシリテーターにはその力量が求められる。

こうしてデンマークから帰国後の動きを振り返ってみると、学外研究にあたって掲げたテーマは「参加型学習における問題解決活動と教育実践の相即にかかる理論的・方法論的アプローチ」であったものの、現地での知見を紹介する上では、大学と地域の関係に留まらず、多様な人々がいかに積極的に関わり合うことができるかに重きを置いていることに気づかされる。それは参加者の関心であると同時に、私の関心でもある。実際、前回（第5回）の最後にも、オールボー大学での研究終了直前にご縁をいただいたアイルランドのユニバーシティ・カレッジ・ダブリンでPBLを研究しているテリー・バレット（Terry Barrett）助教授による「学生の発話を理解するためのモデル」を紹介し、学習者の主体的な参加を前提とした学びのスタイルを支える教育者のあり方に注意を向けた（山口, 2018b, p.287）[1]。そこで前号でも予告したとおり、そこで次回は、思考や行動や存在の仕方といった学習者の態度の変容はいかにしてもたらされるか、改めて教育者と学習者の関わり方について掘り下げていくことにしよう。

2. 集団における学びと成長への視点

筆者がテリー・バレット助教授にお会いしたのは、2018年2月16日から19日まで、米国カリフォルニア州のサンタクララ大学で行われた世界PBL会議（PANPBL2018）だった。2月18日の午後、ちょうど、筆者らによるポスターセッションの前、「問題解決学習の新しいモデル：PBLの思考と実践のさらなる可能性を拓く相互に関連づけられた4つの概念（A New Model of Problem-based Learning: Fresh Ways of Thinking About and Doing PBL）」と題した口頭発表を拝聴し、その内容に興味を抱いたのである。4つの理念とは「問題の設定」「教員による個別指導」「プロセスのマネジメント」「創造的な学習」を指し、これらの理念がPBLにおいて実現されるには、学習者が次に示す3つの既成概念を打ち破ることが重要と示された。3つの観点とは、(1)現状の知と新たな知、(2)慣習的に形式化した専門的行動と学習者が探究していく新たな専門職のあり方、(3)現状への満足度と理想像への探求心、これら3つである（Barrett, 2018）。それによって、学習者は自らが囚われている既存の価値観を打ち破り、よりよい未来を創造していくことが可能となる、と示された。

特に興味深かったのは、「マインドフルネス（mindfulness）」という言葉と、心理学の理論の一つである「フロー（flow）」を織り交ぜた実践的研究がなされている点にあった。2つを結び合わせるにあたっては、インド出身の教育学者であるDhiman（2012）の論文から、「マインドフルネスとフローの状態に浸っているとき、自らの関心と注意を払いながら当面の活動に熱心に参画しているという特徴がある」（p.32、訳は筆者）という部分をもとにしている。ちなみにそれぞれの研究では、マインドフルネスの定義として、マサチューセッツ大学マインドフルネスセンターの創設所長を務めたジョン・カバット・ジン（Jon Kabat-Zinn）による「何らかの方法により熟慮してその場に応じ予断を廃して注意を払っている状態」（Kabat-Zinn, 1994, p.4、訳は筆者）を用いている。[2]日本でも日常生活にマインドフルネスの概念が浸透して久しいものの、[3]カリフォルニアでの学会で、仏教の知恵と心理学研究と教育実践とが接合する場に身を置くことになった。

この数年にわたり筆者もまた、災害復興をテーマとした実践的研究において、ハンガリー出身の心理学者であるミハイ・チクセントミハイ（Mihaly Csikszentmihalyi）による「フロー（Flow）」の理論に着目してきた。この「フロー」とは、いわゆる忘我（self oblivion）の境地に至ることを指している。図1で図解される（Csikszentmihalyi, 1990=1996, p.95）ように、この我を忘れて主客の混合や転倒が起こるのは、自らが挑戦する対象と、その対象に臨む自らの能力の折り合いがついている状況（フローチャンネル）に浸っているときであるとされる。別の言い方をすれば、「フロー」とは、集団的な活動に取り組む個々の意欲と能力の両面に着目することで、「今ここ」にいる人たちが積極的にある事柄に取り組んでいくことができるかどうか、そうした場になっているかどうかを評価しつつ、設計していく手がかりとすることができる、という視点である。

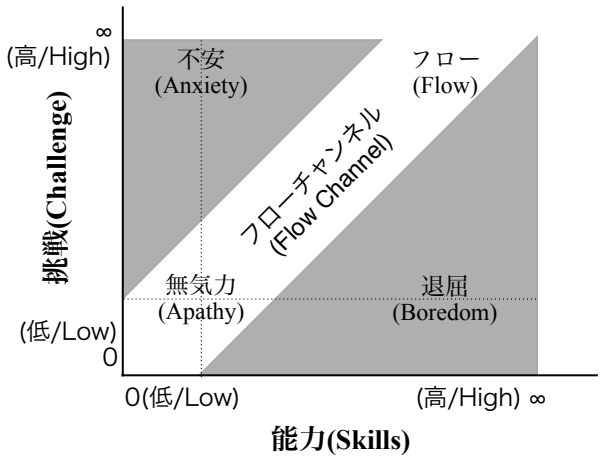


図1：フロー体験の結果と意識の複雑さ
（Csikszentmihalyi, 1990=1996, p.95より筆者作成）

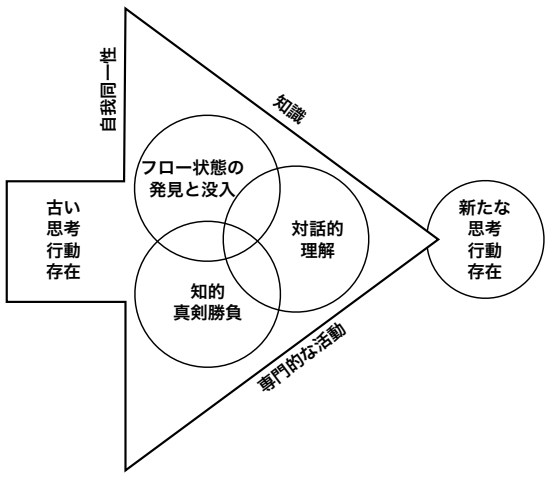


図2：Problem-Based Learningに関する学生の発話を理解するためのモデル (Barret, 2017, p.232、訳は筆者)

筆者は学びの場の評価と設計の観点に用いるに留めているものの、テリー・バレット助教授は、マインドフルネスとフローの理論をもとに、本連載第5回で紹介した「学生の発話を理解するためのモデル」（図2）を構築した。このモデルは、図2が大きな矢印をモチーフにしていることからも類推できるように、学生が古い行動規範から新しい行動規範へと刷新されていくことを概念化したものである。矢印部分の3つの軸では、先述した3つの観点、つまり(1)現状の知と新たな知、(2)慣習的に形式化した専門的行動と学習者が探究していく新たな専門職のあり方、(3)現状への満足度と理想像への探求心、それぞれの観点において前者から後者への移行が重要になることと関連づけられている。そして、矢印の中にある3つの丸により、前掲の「フロー」理論、また学習心理学に基づく「Hard Fun」（前号の連載での脚注で示したように、これを「知的真剣勝負」と訳出した）、さらにPBLは集団的な学習ゆえに学びの共同体のメンバーどうしの相互理解が欠かせないことが示されると共に、さらには3つの丸の相乗効果によって展開可能性が高めることが表現されている。

3. PBLプロセスを効果的する11の戦略

このモデルをもとに、テリー・バレット助教授は、教員によるPBLの展開プロセスをよりよいものにしていく上では、11の戦略（Barret, 2017, pp.154-167）が有効と示している。中には、目を通すだけでは実際に戦略として取り入れていくかどうかの見当がつかないものもあろう。その点は、後で見当していくことにしほう。まずは箇条書きで示してみる。

①高いレベルで挑戦できる問題を設定する
②フローチャンネルに浸り創造性が発揮される問題を設定する
③1科目の流れにおいて全体の重心として講義を据えるのではなく授業開始直後にPBLを用いるなど前後逆にして展開する
④創造性を喚起するために多様なメディアを活用する
⑤フローチャンネルに浸り創造性が高い場となるようにカオスの端（edge of chaos）を理解する
⑥欠席せず気力に満ちて参加し積極的に学び合うように促す
⑦まずは思考の幅を広げた上で議論し徐々に収斂していくような思考を学生に促す
⑧授業運営上のグランドルールやPBLのプロセスでの手順を拘束服のようにあてがうのではなく活動の足場として用いる
⑨創造的な思考ツールをPBLのプロセスに組み込む
⑩高度な情報リテラシーの向上をPBLのプロセスに組み込む
⑪PBLのプロセスでの手順を学術的な専門性や専門家の特性と適応させる

このうち、①〜③は授業設計時に教員が関心を向けること、④〜⑦が授業運営時に教員と学生相互に関心を向けること、⑧〜⑪は授業運営時に特に教員が関心を向けること、と整理でき

る。逆に言えば、いくら緻密に授業を設計したとしても、授業運営時に柔軟な発想で学生と共に場づくりを行っていくことが欠かせないことがわかる。もちろん、学生の自主性・自発性ばかりに依存するのではなく、授業担当者である教員こそ関心を向け続けていけないこともある。ただ、11の戦略の中で、⑤で用いられた「カオスの端」（edge of chaos）という表現は、少々解説が必要だろう。結論から言えば、カオスの端にあるものは秩序（order）である。

Barret（2017）では、edge of chaosについて、自己啓発セミナーや民間のカウンセリングなどで用いられる「神経言語プログラミング」（Neuro-Linguistic Programming）の観点からリーダーシップについて著したO'Connor（1999）の議論を援用している。[4]ただし、先の戦略を取り入れていくためにも、本稿では学術的な議論への関心を少し横に置き、実践的な知見を参照する。具体的には、Visaカードの創業者のディー・ホック（Dee Hock）による造語「chaordic」（Hock, 1999=2001）に着目し、フローチャンネルに浸り創造性が高い場づくりへのコツを見出していく。chaordic（ケイオディック）は文字通りchaos（混沌）とorder（秩序）を合わせた造語であり、ナレッジマネジメントにおいて重要な概念の一つ「創発（Emergence）」がもたらされる状態として、chaordicな状態を目指すこととして位置づけられている。

では、いかにしてカオスとオーダーのあいだ、つまりケイオディックな状態を導くかを考える際には、戦略の⑦が重要となると示しておきたい。これは拡散（divergence）と収束（convergence)との対比を図3のように位置づけてみると、PBLのプロセスにおいては問題の提示時点においては、混沌とした中で議論の幅を広げていき、ケイオディックな状態では創発的な状況から各種のアイデアを整理・具体化し、問題の解決時点に向けて徐々に議論を収束させていく、という枠組みとして理解することができるのではなかろうか。加えて、ケイオディックな創発的な状態こそ、フローチャンネルに浸った状態としても捉えられる。逆に、そのように捉えてみることができれば、PBLのプロセスを効果的に進めていく11の戦略の多くに理解が及ぶだろう。

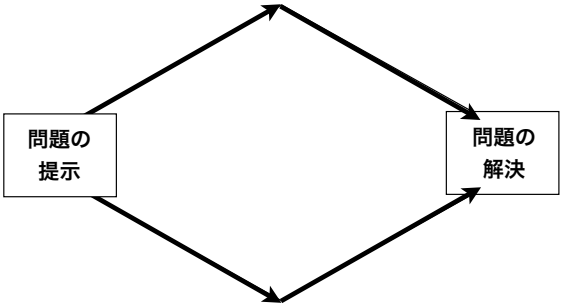


図3：まず拡散的思考・続いては収束的思考を
(Barret, 2017, p.163、訳は筆者、訳出時に一部改変)

4. ツールに依存しすぎずルールを尊重

今回は前回の最後に紹介した「Problem-Based Learning に関する学生の発話を理解するためのモデル」（Barret, 2017, p.232）を解題しつつ、PBLの展開プロセスにおける学びの場のデザインのあり方に迫った。このモデルでは、PBLを構成する「問題の設定」「教員による個別指導」「プロセスのマネジメント」「創造的な学習」の4つの概念において、(1)現状の知と新たな知、(2)慣習的に形式化した専門的行動と学習者が探究していく新たな専門職のあり方、(3)現状への満足度と理想像への探求心、これら3つの観点において学習者が前者から後者の状態のもとで行動できることが重要であると示された。そのため、ミハイ・チクセントミハイによる「フロー理論」のもとに、学生の能力に見合った取り組みを通して積極的な挑戦を促していくこと、また禅を起源とした「マインドフルネス」の視点のもとに、予断と偏見を廃して相互に関わり合うことができるように促していくこと、それらを通して学習者の態度の変容が導かれると読み解くことができる。そうした場づくりの具体的な方策として示された11の戦略では、ディー・ホックの造語を借りると混沌（chaos）と秩序（order）の混交状態であるケイオディックな状態での創発的な対話を導くことが効果的とされ、そのためにPBLのプロセスでは、まずは話題の拡散を、やがて論点を収束させていくことに意義があるとされた。

このように整理してみると、前号まで主に取り上げてきたデンマークのオールボー大学でのPBLでは、プロジェクト志向の問題解決学習において、教員がいかにして学習者の学びと成長に向き合うかについて、いつ・どのように介入していくのかというスーパーバイザーの視点に着目してきたのに対し、今回紹介した11の戦略などは、教

員がいかにして学びの場をコーディネートしていくのかというファシリテーターの視点に着目したと区別することができる。改めて11の戦略を見直してみると、適切な問いの提示（①と②）による対話重視による授業デザイン（③）のもと、多様な知の創造のために多様な素材を活用（④）して創発的な場づくりのために（⑤）互いに貢献しあう（⑥）ことができるよう、教員は雰囲気づくりにあたっていくことが提案されている。これらの戦略が奏功すれば、学習者らはフローチャンネルに浸り、マインドフルネスの高い状態で、他者への思い入れを自らの思い込みとして固定観念に囚われることなく、誠実に、丁寧にプロジェクトが進められると整理することができるだろう。

ただし、教員が奮闘するだけでは、学習者中心の学びの場は生まれない。実際、戦略⑦に基づいて、「混沌の中から秩序を生んでいこう！」などと呼びかけてしまえば、逆に学習者は萎縮して拡散的、拡張的な議論が阻害されてしまう可能性もある。[5] また、PBLに取り組む教員の中では稀だと思われるものの、例えば、教員は学習者の上に立つ存在であるというヒエラルキーや、教員は教育システムにおいて学習者を正しく管理していかなければならないという役割を、一定の責任感の反映として抱いている教員もいるかもしれない。PBLをはじめとした学習者中心とした主体的で対話的で深い学び、つまりアクティブ・ラーニングの展開では、自ずと学びの場は教員のコントロールからは離れたところで学びのプロセスが進展していく。もし、その点に不安がある場合には、戦略⑧にある、授業運営上のグランドルールを、学習者と共に定めることが殊更に重要になる。

グランドルールとは、その場にいる人々が全員守らなければならない事柄であり、必ずしも禁止のルール（例えば、飲食の許可範囲の設定など）だけでなく、促進のルール（相手の意見と異なる場合は自分の意見を代案として提示する、など）も含まれる。こうしたルールを作り、定め、守ることを共に行い、必要に応じて見直すことによって、教員も学習者も共に創発的な議論を行うことができる環境をもたらしやすくなるだろう。その上で、戦略⑨にあるとおり、アレックス・オズボーンによブレーンストーミング、また川喜田二郎によるKJ法などが、それぞれが開発したルールを守りながら、思考ツールとして開発された意味を理解した上で用いることができるのではなかろうか。とかく、誰かによって構築された理論、提案されるアイデア、そして開発されたツールなどは、自らが理解できた範囲で都合良く導入されることがあるものの、参加者全員が共に理解を深めながら意見をしあうことが創造的な場をもたらし、共創的な関係を成り立たせる前提となる。

インターネットによって情報収集が簡便にできる時代にあって、学習とは持つものから持たざるものへ知識の伝達するといった構図には留まらない。逆に言えば、いかにして世界にあふれる膨大な情報を収集し、加工し、編集し、よりよい未来を創造するために携えていく知恵を共創することが、現代的な学習の意義として位置づけることができる。その反動が、教員が学習者に何かを「させる」という課題提示型の教育ではなく、何かが「できる」ようになるために提示された問題から改めて問題を再定義あるいは再設定していく課題探求型の学習への転換という形で、アクティブ・ラーニングの推進が施策として展開されていることにつながっているのだろう。これらは日本に限ったことではなく、戦略⑩にあるように情報リテラシーの向上と、戦略⑪にあるように高度職業人の輩出が、大学の社会的役割として要請されていることが確認できる。

だからこそ、PBLという手法や概念に意味を見出した場合、科目として展開していく場合には、学びの場の創出・拡張 維持、そして収束・解消までのプロセスに、より関心が向くことを期待している。前回も記したとおり、PBLでは何をするかというテーマや内容、そして成果物に着目してカリキュラムが設計される傾向がある。その実践的な意味については一定の理解をするものの、そこに教育的な意義をどのように見出すのか、教員にはその見識が求められる。それは、スーパーバイザーやファシリテーターなど、PBLに取り組む教員に求められる新たな素養に対して、教員という立場が学びの場にいかに存在し機能しなければならないのかという、根源的な素養でもある。

例えば11の戦略では①と②で示されているように、どのような問題を設定するかは、授業の設計当初に教員が行うものであるゆえに、学びの場のあり方を左右する決定的な要素である。そこで次回は、改めてProblem-Based Learningとしての

PBLにおいて問題とは何かに迫っていくこととしたい。また、それはPBLでの学びをどのように評価するかという観点とも通じる論点でもある。単なる小集団によるプロジェクト学習がPBLではないという、PBLの前提について改めて確認しながら深めていくことにしよう。（gucci@fc.ritsumei.ac.jp）

【引用文献】

POWER～市民の力～・A SEED JAPAN(編), (1998) NGO運営の基礎知識. アルク

Bandler, R., Grinder, J. (1982). Reframing; Neuro Linguistic Programming and the transformation of meaning. Moab, Utah: Real People Press. 吉本 武史・越川 弘吉(訳), (1988) リフレーミング―心理的枠組の変換をもたらすもの. 星和書店

Barret, T. (2017) A New Model of Problem-based learning: Inspiring Concepts, Practice Strategies and Case Studies from Higher Education. Maynooth: All Ireland Society for Higher Education (AISHE).

Cayley, D. (1992) Ivan Illich in Conversation. House of Anansi Press, Ontario: Concord. 高島和哉(訳), (2005) 生きる意味―「システム」「責任」「生命」への批判. 藤原書店.

Partridge, C. H. (2004) New Religious Movements, Sects and Alternative Spiritualities. San Francisco: Berrett-Koehler. 井上順孝(監訳), (2009) 現代世界宗教事典――新宗教、セクト、代替スピリチュアリティ. 悠書館

Csikszentmihalyi, M. (1990) Flow: The Psychology of Optimal Experience. New York: Harper and Row. 今村浩明(訳),(1995) フロー体験――喜びの現象学. 世界思想社.

Dhiman, S. (2012) Mindfulness and the Art of Living Creatively: Cultivating a Creative Life by Minding Our Mind. Journal of Social Change, 4(1), 24–33.

Hock, D.W. (1999) Birth of the Chaordic Age. San Francisco: Berrett-Koehler. 村上彩(訳), (2001) 混沌と秩序―世界有数のカード会社・VISAカードの組織改革. たちばな出版

Kabat-Zinn, J. (1994) Wherever you go, there you are: Mindfulness meditation in everyday life. New York: Hyperion.

NHKスペシャル取材班. (2016) キラーストレス：心と体をどう守るか. NHK出版.

O'Connor, J. (1999). Leading with NLP: Essential leadership skills for influencing and managing people. London: Thorsons.

山口 洋典. 2018a. 問題解決学習における学びの環境のデザインのための視点～デンマーク・オールボー大学における全学でのPBLを事例に～ https://secure.ritsumei.ac.jp/slc/activity/column/detail.html/?id=28

山口 洋典. 2018b. PBLの風と土:(5)現在進行形の問題に向き合う学びの視点. 対人援助学マガジン33号 第9巻1号 282-287.

【注】

[1] University College Dublinは、National University of Irelandを構成する大学の一つである。そのため、ダブリン大学と記すことは間違いである。むしろ、ダブリン大学（University of Dublin）はTrinity Collegeを指す。こうした表記の難しさは、英国のカレッジ制に起因する。英国のカレッジ制は、オックスフォード大学やケンブリッジ大学に代表されるように、いわゆる各学部の専門教育は「大学」に属する「カレッジ」が担当し、「大学」は学位授与を行う機関として位置づけられている。この伝統にならうと、ダブリン大学はトリニティー・カレッジ以外にもカレッジがあるように捉えられるものの、実際はトリニティー・カレッジのみによって構成される。よって、National University of Irelandに属するUniversity College Dublinという教育機関と、Trinity Collegeを擁するUniversity of Dublinという学位授与機関とを区別するために、本稿では前者を「ユニバーシティ・カレッジ・ダブリン」、後者を「ダブリン大学」と訳出して取り扱う。

[2] 同センターは1979年に設置され、禅に基づくストレス軽減プログラムを導入したことで知られている。ちなみに正式名称は「The University of Massachusetts Medical School Center for Mindfulness in Medicine, Health Care, and Society」（マサチューセッツ大学医学部附属医学・健康・社会マインドフルネスセンター）である。

[3] 例えば、NHK総合テレビの番組「NHKスペシャル」では、2016年に「キラーストレス」（全2回）を放送し、第2回「ストレスから脳を守れ～最新科学で迫る対処法～」では、マインドフルネスを「世界中で注目される」「瞑想をベースに生まれたプログラム」として紹介した。番組の内容は後日、書籍化（NHKスペシャル取材班, 2016）もなされた。

[4] 本稿では神経言語プログラミングが学術的な理論として位置づけられるか否かの議論については立ち入らない。提唱者らの主張についてはBandlerとGrinder（1981=1988）を、批判的考察はPartridgeら（2004=2009）を参考にされたい。

[5] これは大学でのPBLの場づくりに限ったものではなく、市民活動などの研修のファシリテーターが陥る罠でもある。例えば、プログラムの開始当初は、参加者どうしでの緊張感が高いことや信頼関係が築けていないことなどに対応するため、少し冷え切った状態を打ち破って場を温めていきましょう、という意味で「アイスブレイク」が重要であると言われて久しい（例えば、POWER～市民の力～とA SEED JAPAN, 1998）。そこで、ファシリーテーターが「アイスブレイクをしましょう」などと呼びかけると、「ああ、また何かさせられるのか…」や「早く本題に入ったら？」など、否定的な反応を抱く人も出てくるだろう。もちろん、こうした手段の目的化の弊害は、ファシリーテーターの言動に限ったものではない。実際、イヴァン・イリイチは「逆生産性」という言葉を掲げて、医療システムの制度化が結果として人類の幸福を高めるものになったのか、を問うた（Cayley, 1992=2005）。本稿で示した11の戦略についても、効果的であると示された有用性という価値を全面的に信用して現場に用いるのではなく、示された有用性が自らの現場にで効果的に反映するように、丁寧に場づくりに当たられることを願っている。

接骨院に心理学を入れてみた〔5〕

寺田接骨院　寺田弘志

JR茨木駅近くの接骨院が、私の仕事場です。

体のどこかをいためた人たちが、ここを訪ねて来られます。

「どこが痛むんですか？」

「ひざが痛いんです」

「ひざの前ですか？　後ろですか？　それとも内側ですか？　外側ですか？」

「内側です」

「触ると痛いですか？」

「えっと一、あっ、そこ、そこ！　そこが痛いです」

「ひざをどこかにぶつけたとか、ねじったとかしたおぼえはありませんか？」

「そういう記憶はないんですけど・・・」

「そうですか。では、脚を閉じると痛いですか？　開くと痛いですか？」

「あっ、開くと痛いです。閉じ

るほうが痛くないです」

「ひざを曲げると痛いですか？　伸ばすといたいですか？」

「んー、あんまり曲げ伸ばしでは、痛みは変わりませんね」

「こういう場合、脚の外側の筋肉が縮みすぎていて、脚の内側の筋肉が伸びすぎていたんでいることがよくあります」

「へー、そうなんですか」

「脚の外側の筋肉を触ってみて痛いですか？」

「んー、痛いところはないです」

「脚の内側の筋肉にも、触って痛いところはないですか？」

「えー、はい、ありません」

「おやー、さっき言ったようなタイプのひざの痛みではないようですね」

「あら、そうなんですか」

「では、骨盤を上げて触ると痛いですか？」

「あっ、痛い、痛い」

「ごめんなさいね。じゃあ、骨盤を下げると？」

「あら、痛くない」

「となると、ひざの痛みの原因は、脚ではなくて、腰とか背中とか、上のほうにありそうですね」

「えー、腰とか背中は、何ともないと思っていましたけど」

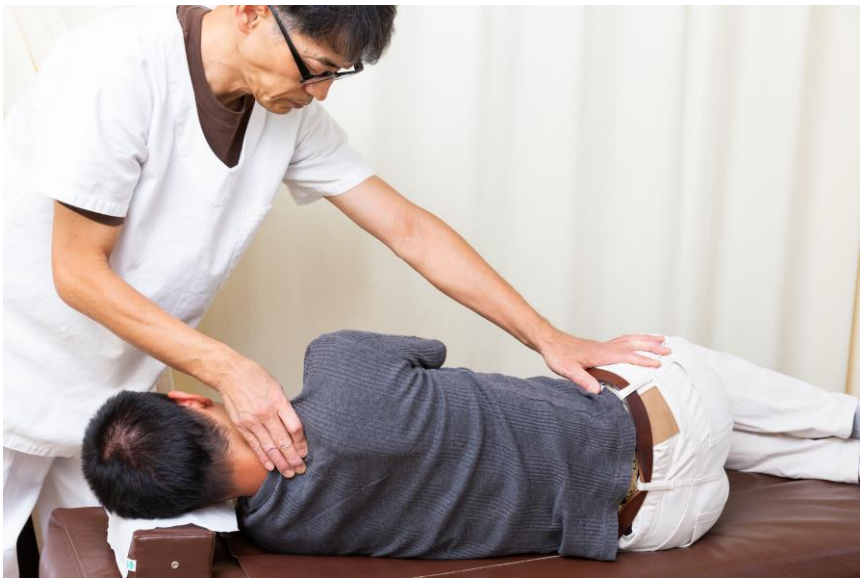
「腰とか、背中を触ってみて痛いですか？」

「んー、いいえ」

「じゃあ、肩はどうですか」

「痛い！　めっちゃ痛い！　先生、ひざを触るより、肩を触ったほうが痛い」

「そうですか。じゃあ、骨盤を下げて肩を触るとどうですか？」



「え、うそでしょ。ぜんぜん痛くない」

「では、しばらくこのまま肩をほぐさせてください」

「はい、ありがとうございます。あー、気持ちいいわー」

「これくらいほぐしてみて、骨盤を下げるのをやめて、肩の痛みはどうですか？」

「いや、もう、ちっとも痛くないわ。さっきと同じ力ですか？」

「はい、同じ力で触ってますよ」

「ゆるく触られてるみたい」

「ところで、ひざの痛みはいかがですか？　はじめはここが痛いとおっしゃってましたね」

「あれ、痛くない。なんでー？」

「ひざの痛みの原因は肩にあったようですね。腰か背中かと思いましたが、もっと上でした」

「肩からひざに来るんですか？」

「首から来る人もいますよ」

「ほんとですかー。びっくりだわ」

体のどこかが痛むとき、痛む箇所自体に原因がある場合と、違うところに原因がある場合があります。

通常は、痛む箇所自体に原因がある場合が多いです。

ただ、当院に来られる患者さんについては、痛む箇所以外に原因がある場合も、かなりの割合であります。

どうしてそうなるかというと、まず、痛む箇所は放っておくだけで治ることがあります。

そういう人は当院には来ません。

また、自分で、湿布を貼ったり、ストレッチをしたり、マッサージしたりして治す人がいます。

そういう人も当院には来ません。

ただ、そういう人が湿布をしたり、マッサージしたりするのは、たいてい痛む箇所自体なのです。

痛む箇所と違うところに原因がある場合、いくら痛む箇所に湿布を貼ったり、マッサージしたりしても治りません。

レントゲンやMRIをとっても、内視鏡で関節の中を見ても、原因は見つかりません。

「自分でいろいろやってみたけど、治りませんわ」

「病院で検査しても、異常ないって言われるんです」

とおっしゃるような方が当院に来られることになります。

ですから、自然と、痛みの原因が、痛む箇所と違うところにある方の割合が当院では高くなります。

もちろん、痛む箇所に原因がある方も来院されています。

そういう方には、痛む箇所に必要な施術をします。

痛みの原因が、痛む箇所以外にある方には、痛みの原因がある箇所に施術をします。

両方に原因があるという場合もあるのですが、そういう方には、両方に施術をします。

このような施術は、以前、心理療法に従事していたときに用いていたシステムズ・アプローチに影響を受けています。

細胞、組織、器官、人体、家族、集団、社会、国など、レベルはさまざまですが、いろんな要素が集まって仕組みとして機能しているのがシステムです。

問題の出ている箇所ばかりでなく、その箇所をふくめたシステム全体から解決を図っていくのが、システムズ・アプローチです。

たとえば、何かの機械で、同じ部品がよく故障するとします。

この場合の対応は、いくつか考えられます。

１　いつ故障してもいいように、交換用の部品を常備しておき、壊れたら交換する。

２　故障する期間を計測して、使用期間を決めて、故障する前に定期的に部品を交換する。

３　部品を改良して、故障しないようにする。

４　機械の構造を見直して改造し、部品が壊れないようにする。

これらの中でシステムズ・アプローチと言えるのが4になります。

これが人の話になると、部品のように交換するわけにはいかないので、そういう選択肢はなくなります。

つまり、人を変えるか、人をとりまく家族・集団・社会などのシステムを変えるかになります。

しかし、問題を抱えている人は、変わりにくいこともあります。

一方、社会とか国は大きすぎて、変えにくいこともあります。

家族なら、協力も得られやすく、変化を起こしやすいので、家族へのはたらきかけは、しばしば有力な選択肢となります。

不思議なことですが、家族が変化すると、問題を抱えている人にも変化がよく起きます。

これが関節の話になると、人の話よりはシンプルです。

時には、家族に協力をお願いしたり、学校や職場に意見書を提出したりすることもあります。

こういうのもシステムズ・アプローチになります。

ただ、それほど頻度は高くありません。

関節なら、人の体というシステムの中で変化を起こせば事足りることがほとんどです。

ある関節だけ治療しても良くならなければ、その関節を動かす筋肉を調整します。

それでもだめなら、体の中心側の関節や末梢側の関節を調整します。

それでもだめなら、もっと離れたところに原因がないか探します。

ウソのような話ですが、右ひざの痛みが、たまに左脚を調整すると消えるといったケースもあります。

どうしてそんなことが起きるのだろうと不思議に感じますが、体をシステムとして考えると理解しやすくなります。

たとえば、右ひざをいためると右脚に緊張して縮んでくる筋肉が生じます。その筋肉の緊張で骨盤がゆがみます。左右対称に（前後に）骨盤がゆがんだ場合は右と同じような筋肉が左脚も縮みます。左右非対称に（右が上がって左が下がるとか、右が前で左が後ろとかに）骨盤がゆがんだ場合は、右とは違う筋肉が左脚も縮みます。

いくら右脚の縮んだ筋肉を伸ばしても、左脚の縮んだ筋肉を放置しておくと、骨盤のゆがみが残っていて、また右脚の筋肉が縮んでしまうことになります。

こんなときに左脚の縮んだ筋肉も伸ばすと、骨盤のゆがみがとれ、右脚の伸ばした筋肉が縮みにくくなり、右ひざの痛みが消えるといったことが起きるのです。

東洋医学（鍼灸など）では、遠隔治療といって、わざと患部と離れたところに治療することがあります。

患部を治すために、患部と離れた箇所に施術するという接骨院はまだ少ないように思います。

もし、原因不明の痛みがあれば、当院を訪ねてみてください。

当院では、患部への施術だけでなく、体をひとつのシステムと考え、患部と離れた箇所からシステムに変化を起こすことで患部の痛みを改善させる施術をおこなっています。

意外なところに痛みの原因が見つかるかもしれませんよ。

現代社会を『関係性』という観点から考える

⑤　「共同体」における「排除」と「包摂」という関係性

～「遠野物語」から考える　（後半）～

更生保護官署職員（認定社会福祉士・認定精神保健福祉士）

三浦　恵子

「関係性」をキーワードに現代社会について考察するこの連載ですが，前回と今回は，私が１０代から愛読してきた『遠野物語』(柳田国男）から「共同体」における「排除」と「包摂」という関係性を考えてみたいと思っています。　民俗学という切り口から対人援助を論じることはかなり異色と思われますが，おつきあい頂ければ幸いです。かなりの長文となりますので，今号は前号に引き続き後半部分を掲載させていただきます。

５　現代の「貧困」と「遠野物語」の時代の貧困の相違～「高齢者」を中心に考える

先述した事例２で詳述した高齢犯罪者に限らず，高齢者は様々な喪失体験に直面する世代でもあります。体力の低下や疾病により「今までできたことができなくなる」辛さ，愛着ある仕事からリタイヤする寂しさ，子供の巣立ちがきっかけとなる「空の巣症候群」と称される喪失感もこれに該当するといえるでしょう。

一方，親世代である高齢者の子供が「引きこもり」などの状態であったり，疾病や障害，あるいは非行・犯罪などの理由で親元からの自立が難しい場合には，「親亡き後」への不安が嵩ずることは想像に難くありません。近親者の悲報に接した際の悲嘆，自身の「人生の残り時間」に思いを致した際の不安も看過できません。

私は自身が記載した「高齢者犯罪」（注１２）において，高齢犯罪者の特徴として下記３点の「関係性の希薄さ」について言及しましたが，これは犯罪に限らず，様々な困窮常態に陥る高齢者に共通するものであると考えています。　ここに改めて３点の「関係性の希薄さ」の現状と問題点について述べさせて頂きたいと思います。

第１にインフォーマルな相互扶助を担う血縁・地縁における関係性の希薄さが挙げられます。地域社会における関係性の希薄さについては，都市部における匿名性の高さやそれに伴う人間関係の希薄さと問題が挙げられることが多くあります。しかし昔ながらの「共同体」としての生活が維持されている郡部においても，地縁・血縁による相互扶助が都市部より強い反面，匿名性の低さや集落の平穏を乱す要素への警戒感の強さが災いし，「共同体」の規範から逸脱してしまった高齢者に対しては，高齢者本人だけではなく家族・親族に厳しい眼差しが注がれたり，相互扶助の枠外に置かれてしまったり，最悪の場合排除につながる事例も私は経験しました。

第２にフォーマルな制度利用（年金や雇用保険，介護保険制度や公的扶助など）について，適切な助言や支援を行う機関や人との関

係性の希薄さが挙げられます。高齢犯罪者による殺人事犯５０件中，親族が被害者となった割合は非高齢者よりも３０％も高いことは先述しましたが，女子高齢犯罪者９名の殺人事犯の被害者は全て親族であり，親族殺事犯の動機・原因として「将来を悲観」「介護疲れ」の２点が高率という調査結果がでています（２０年版犯罪白書，３０６ページ）。

介護の社会化を目的として平成１２年に介護保険制度が導入されましたが，平成２０年版犯罪白書に掲載されている特別調査は，殺人事犯自体の件数が少ないため，平成１０年～１９年の１０年間に東京地方検察庁（本庁のみ）が受理し東京地方裁判所において有罪とされた事犯５０件が集められた関係で，介護保険導入前の事例もありますが，介護保険制度導入後も内容が十分周知されていない，あるいは十分に機能していない時期の事犯も含まれていると推測されます。「将来に悲観」「介護疲れ」により親族を殺害するまでに追い詰められていた高齢犯罪者が，介護保険などの諸制度を十分に使いこなせていたとは考えにくいと推察されます。

第３に，犯罪の抑止力となる，自分の生活する地域社会，職場，家族などへの愛着が挙げられます。第３の事項はハーシーのソーシャルボンド理論の観点からも非常に重要なものであると私は考えます。

つまり，３つの関係性の希薄さゆえに，現代の高齢者は犯罪や生活困窮といった事態に陥りやすいと考えられます。かつての「貧困」がまさに「食事に事欠くような貧しさ」といった極めてわかりやすく，可視化されやすいものであったこと，戦災などを通して「共同体」構成員の多くがそれを間近なものと実感していたゆえに，「貧困」に陥ることの辛さが「体験」として理解されやすく，支援につながる共感をも呼び起こしやすいものであったであろうことは想像に難くありません。

しかし現代の貧困の代表的形態である「関係性の貧困」は一見するだけではそれと気付かれない場合が多く，自助努力を過剰に要求する世相にあっては支援を求めづらい状況があります。

先に「高齢犯罪者による殺人事件の被害者は２８事例が親族，特に９名の女子犯罪者の被害者は全て親族が被害者」であり，「将来を悲観」「介護疲れ」が動機・原因の上位にあると言及しました。社会には「支援につながりにくい人」が少なからず存在することを前提とし，「本当に支援を必要とする人に，必要な情報やケアが届いているか」「相談に出向くことができない人が存在するということを認識し，アウトリーチなどの手法を検討しているか」という観点を真剣に検討しないと，問題は解決しないと私は考えています。

何よりも「福祉のお世話になる」ことを恥と思う気持ちが，相談窓口に向かう心理的ハードルとなっている場合も往々にしてあります。私はこの種の問題を論じる時，いつもある刑事裁判の事例を取り上げています。

平成１８年７月，実母との無理心中を決行し承諾殺人の罪に問われた男性に対し，京都地方裁判所において執行猶予付きの判決が言い渡されました。介護のために仕事を辞め，困窮の中で自らの食事を削り母に食事を与えるなど献身的に介護を続け追い詰められてしまった挙げ句の事件で，母は亡くなり死にきれなかった男性が逮捕されたものです。この男性の「私の手は母を殺めるための手だったのか」という言葉と，東尾龍一裁判官の「本件で裁かれているのは被告人だけではなく，介護保険や生活保護行政の在り方も問われている。こうして事件に発展した以上は，どう対応すべきだったかを，行政の関係者は考えなおす余地がある。」という言葉は，各メディアで報じられ大きな反響を呼びました。私はこの事件とこの言葉は，生きづらさを抱えた人への支援を行うことを職務とする者すべてに発せられた警鐘であると考え，自分自身も心に刻み込み業務に当たっています。（注１３）

しかし当該男性は，執行猶予期間経過後，勤務していた会社を退職した後，琵琶湖にて

投身自殺を図り死亡したと報じられています。

６　遠野の持つ力　異界と接した生活の中から生まれる謙虚さ

ここまでの考察を踏まえて，再び現在の私の「遠野」観を述べさせていただきたいと思います。『遠野物語』『遠野物語拾遺』を幾度となく読み返してみると，「煙花の地」と峻厳な山岳地域の文化が互いに溶け合うようにして存在していることにより，遠野に暮らす人々は常に「自分自身を超えた大きな存在」を身近に感じていることが読み取れます。また，農耕民族が主流となりつつあった当時の日本において，山の恵みに生きる狩猟文化は，時に自分の命を危険に晒しながら他の動物の命を頂くことを日常とするものであるとも考えられます。狩猟を担う人々が山に入るに際し様々なしきたりやまじないを尊重していること，様々な怪異を真摯に受け止めていることからもそれは窺えると思います。

人間は火を使う術を学び試行錯誤の果てに数々の文明を積み重ねることにより今日までの歴史を築いてきましたが，時に「万物の霊長」として驕りたかぶり，数々の過ちを繰り返してきたことは否めません。『遠野物語』等の中でも，自らの才や力を過信し，あるいは自然を恐れず禁忌を犯して身を滅ぼすエピソードがいくつも織り込まれています。祖霊信仰やその土地で信仰を集めている神様，あるいや「お山」といった自然そのものなど対象は様々ですが，「自分自身を超えた大きな力」に畏敬の念を払い，常に人間は万能ではないという考え方に根ざした謙虚な生き方を実践することは，一見民俗学とは全く異なる分野である「アディクション（依存症）臨床」においても極めて重要視されています。

アルコールや覚せい剤依存といったアディクション（依存症）関連問題は，精神保健分野のみならず刑事政策分野においても様々な処遇上の施策が展開されています。「法律（厳罰化）だけ」「医療だけ」では対応しきれない「生き難さの問題」として，依存症当事者が相集い，経験と知恵を分かち合う「自助グループ」や，生活を共にしながら回復を目指す「治療共同体」がこの２０年余りの間に地道に，しかし着実に広がっています。

「自助グループ」や当事者との語りにおいて折々耳にするのが「ハイヤーパワー」という言葉です。それは「自分自身を超えた大きな力」とでも称する存在を表す言葉であり，何とか自力でコントロールできると思っていた飲酒や薬物使用について，自身ではコントロール不能に陥っている「無力さ」を認め，「ハイヤーパワー」に自分を委ねることが回復の第一歩であるとされています。

私は勤務の傍ら，平成９年に依存症専門の電話相談を立ち上げたり，家族のためのグループセッションのファシリテーターを１５年にわたり務め，その後は相談者がよりアクセスしやすい相談窓口として刑事政策に特化した電話相談窓口を準備するなど，２０年以上にわたって依存症の当事者・家族支援ボランティアを続けています。その過程で，自分の無力さを認め，「ハイヤーパワー」に委ねることが，薬物依存症者の回復の転機となる事例を数多く経験してきました。

そして処遇者である私自身も，いかに経験を重ねようとも慢心を慎み，常にアンテナを張って新しい技術や知識を吸収するとともに，当事者や家族から「学ばせていただく」という謙虚さを保ちながら今があるということを忘れたことはありません。何故なら，依存症当事者に対する処遇においては，処遇者が強く自覚していないと，往々にして心理規制をかけることにより当事者の行動をコントロールしようとする失敗を犯しがちであるからです。

おしなべて人間は，「自分は全てをコントロールできる。」という誤った万能感を抱いてしまいがちですが，そうした慢心の背後には常に失敗という陥穽が口を開けているといっても過言ではありません。私は多くの依存症当事者や家族と出会ってきましたが，「絶対」「大丈夫」という過信に足を掬われていった

人は少なくありません。しかし，自身の無力を認め，「ハイヤーパワー」を信じ，謙虚に断酒・断薬を続け，自助グループに身を置きながら回復者の先輩である「先行く仲間」から学び，初めてグループにやってきた「ビギナー」の姿に過去の自分を振り返る日々を送る人々が今も確実に回復への歩みを続けているのもまた現実です。

そんな彼らの姿を見る時，佐々木喜善が語り柳田国男が活写した百余年前の遠野の人の，「共同体」と濃密に接している「異界」にあるモノを畏怖し，時に神としてあがめ，それらの怒りを買うことなく共存していくために，様々な決め事や忌み事を遵守して生活していた姿と，不思議なほどの既視感を覚えることが少なくありません。それは人が生きていく上である意味必要不可欠な謙虚さであるとも言えるのではないでしょうか。

7　過ちを犯した人を「再び受け入れる（Re Entry ）ことが自然にできる社会」とは

先に高齢犯罪者の増加という現象について詳述しましたが，そこには現代の日本社会の病理が凝縮されているといっても過言ではありません。高齢者が陥りがちな「３つの関係性の貧困」は，「派遣切り」「子どもの貧困」といった形で高齢者以外の世代に波及しています。生活上の不安などに対し，過度に自助努力を求めるのではなく，公助としての行政に対策を丸投げするのでもなく，住民参加型の小地域福祉活動の充実など，共助の仕組みを構築することが重要であると考えます。犯罪対策閣僚会議が目標とする「再び受け入れる(Re Entry)ことが自然にできる社会」の根底には社会的包摂の理念があり，国や自治体における政策の充実だけではなく，地域社会における「お互い様」「助け合い」という共助の意識を高めていくことが極めて重要となってきます。

本論冒頭において私は，『遠野物語』『遠野物語拾遺』初読時，これを「共同体」の理念やその存続に反するものを「共同体」の境界外にある異界へと「排除」していくという，いわば「社会的排除」の文脈の中でしか読み解くことができなかったということを述べました。しかし，幾度か精読してみると，例えば第十一話の，嫁姑間の葛藤の果てに実母を殺害した「孫四郎」は，駆けつけた里人に取り抑えられ警察官に引き渡されますが,「狂人なりとて放免せられて家に帰り，今も生きて里にあり。」と記されています。

東京学芸大学教授の石井正己氏は「１００分 de 名著ブックス　柳田国男遠野物語」において,「現代では考えにくいことですが，こういう事件を起こした人間がそのまま村人の一人として生活していたのです。(中略) かつての共同体では，ある家で起こった悲惨な事件を内側に抱え込みながら暮らしてきたことが，この話からはよくわかります。」と述べています。（注１４）

もし同様の事件がこの現代社会で起きていたのであれば，この事件に関わる当事者や家族・親戚は「共同体」としての地域社会での生活を存続することを許されていたでしょうか。家族間葛藤に起因する殺人事件については，その経緯等を含めて地域社会における反応も様々であり，多分に同情的な反応（減刑の嘆願書が裁判所に提出されるなど）がなされる場合もあれば，当事者本人はおろか家族・親族までも地域社会から排除される場合もあります。しかし先述した「孫四郎」の場合は，警察官に引き渡されてからも「鎌を振り上げて巡査を追い廻しなどせし」と記されており，その状況をつぶさに見ていた「里人」から，恐怖ゆえの排除の声があがったことはなかったのかとも考えられますが，結果的に「孫四郎」は「共同体」の中に戻り，里人と共に生活を続けることになったのです。『遠野物語』には詳細は記されていませんが，その過程においては,「共同体」の中で何らかの「助け」や「支え」が，当事者やその家族に対して行われていたのではないかと考えることは楽観的に過ぎるでしょうか。

社会の発展とともに，福祉や医療といったインフラが整備され，医療や福祉といった分野においても様々な法律や制度が整えられていきました。かつては「共同体」における古老の智恵に解決の道を求めていたものは，各種の専門家が生業としてそれを行うこととなっています。時代の流れは確実に地域社会や行政の在り方をも変えていったのです。

しかし「なんでも行政にお任せ」と公助に過度に依存することは，結果的に地域社会の問題解決能力の低下を招く結果になるのではないかという危惧が一方であります。先の東日本大震災においては，少なからぬ自治体，いわば「公助」の中枢が大きな打撃を受け，なかには首長を失った自治体すらありました。自衛隊などの支援，すなわち「公助」が被災地に入るまでの間，地域社会における「共助」が地域住民の命や生活を守った例は枚挙にいとまがありません。私の義父母の本家双方も一瞬のうちに津波に呑まれ，義父母の家も半壊の被害を受けましたが，すんでのところで集落の方々に助けられ，奇跡的に命だけは拾うことができました。

義父母については，特に義父が脳血管障害の後遺症で介護を要する状態のため，次男夫婦である配偶者と私が出来うる限りのケアを続けてきました。ただこの震災以降，専門的な経験や知識を生かした遠距離介護のテクニックや制度利用だけに頼るのではなく，集落の方々との平素のつながりが緊急時にも力を発揮することを実感し，義父母のライフスタイルや集落の在り方に沿った方法で，そのつながりをメンテナンスすることを心がけています。

旧来の血縁・地縁は日常生活でも災害時にも大きな力を発揮しうる貴重な地域の社会資源でもありますが，ただ「そこに在るもの」「在れば当然機能する」と考えることは楽観的に過ぎると私は考えています。地域社会における相互援助・問題解決の機能を高めていくための「仕掛け」や，地域における様々な「縁」を見直し，弱い部分を補強することは必須でしょうし，小地域福祉活動の核となる人材育成も欠かせないでしょう。

遠野は東日本大震災において，甚大な被害を受けた三陸地方の後方支援拠点として大きな役割を果たされました。遠野市の行政としての動きも無論スピーディーかつ的確なものがありましたが，「遠野まごころネット」を初めとする民間団体の動きも特筆すべきものがあったと考えています。

私自身奉職後，平成７年の「阪神淡路大震災」と平成２３年の「東日本大震災」の２つの大災害について，共に復興支援の業務に当たる経験をしてきました。「東日本大震災」の際には，「ボランティア元年」と称された平成７年の「阪神淡路大震災」以降様々な災害復興の場面で積み重ねられてきた理念やスキル，ことに市民の社会参加を促す力としての「ボランティア・コーディネーション」の理念と機能が，復興支援においては最大限に生かされたものと考えています（注１５）。

そしてまさに遠野が「東日本大震災」時に果たした役割は，ボランティアコーディネーションの在り方そのものを体現するものであったと言っても過言ではないでしょう。「孤独死」の増加とともに「無縁社会」とすら称される現代社会において，人と人とのつながりを再構築すること，共同体を構成する市民一人一人が主体的に社会参加し，問題解決に向けて動いていくきっかけをつくることは決して容易ではありません。しかし遠野の地においては，被災地のニーズそして全国から集まる善意のボランティアの人々の想いをきめ細やかに見極めた上で，持続可能な支援の形が編み出されていきました。これは「共同体」内部の構成員相互の結束は強固であっても，ひたすらに同質性を追求し「共同体」外の存在に対して「閉じた」状態であっては決してなしえなかったことであり，「共同体」内部において様々な多様性を認め合い，社会的包摂を目指す文化が醸成されてきた所以ではないでしょうか。

だからこそ，被災地に対して，そして被災

地を支援しようとする団体や人々に対して，遠野は「共同体」を外部に向かって開かれたものとし，それによって，支援の中継地点としての重要な役割を果たされたのだと私は考えます。

そして結果的に，被災地の支援だけに留まらず，多様性を包摂する「共同体」の在り方や，そこにおける人々のつながりの在り方について，地方都市として誇りうる１つのモデルを提示されるまでに至ったのだと思います。

現代の貧しさは，かつてのような「経済的な貧困」だけではなく，「関係性の貧困」にその問題性の根本があると言われています。「無縁社会」という言葉はテレビ番組タイトルとして考案された造語ですが，そうした状況下で，「共同体の中でつながる」「共同体の外でつながる」という遠野の鮮やかな実践は，長く語り継がれ，地方都市の在り方のモデルとして，何よりも文化として語り継がれる価値あるものであると考えることができるでしょう。

7　おわりに

私は一介の読み手に過ぎませんが，３０年以上に亘り『遠野物語』『遠野物語拾遺』に触れ続けていると，それは読み手１人１人の社会での立ち位置や考え方，社会的な経験値の蓄積によって，そのたびに新たな発見や示唆を与えてくれる希有なテキストであると実感しています。『遠野物語』の，そして遠野そのものの，尽きない豊穣さ，色あせることがない魅力はここにあると考えます。

何よりも柳田国男が佐々木喜善の語りを自身の識見や既存の学問領域に押し込めるのではなく，ありのままを記したことにより，それは広く社会に開かれたものとなり，初版発行から１００余年を経過してもなお多様な世代の人々を魅了してやまないものであるのだと考えています。

参考文献

「犯罪白書　平成２０年版」（法務総合研究所）：文中に注釈あり

（１）柳田国男『遠野物語』『遠野物語拾遺』（角川文庫）

（２）パパヤチニカ編集委員会『パパヤチニカ　Vol.２２　２００８春号　特集　デンデラノ境界の野を吹く風』（２００８年）

（３）湯原悦子『介護殺人の予防～介護者支援の視点から』（２０１７年）１７６ページ

（４）平成２４年２月６日，BS 朝日の番組

（５）特定非営利活動法人 PDN ドクターズネットワーク HP より。なお PDN とは経腸栄養法のひとつである PEG（経皮内視鏡的胃瘻造設術）及び関連する栄養療法全般についての情報提供を行う NPO 法人である。）。

（６）平成２８年２月１日発売『週刊ポスト』（２月８日号）に掲載された曾野綾子氏の主張。

（７）厚生労働省の調査による平成２０年のデータでは平均入院日数３１３日，入院患者は３３．２万人。ただし３１３日はあくまで平均値であり，入院患者の中には入院期間が１０年を　　越える者も７．２％存在する。

（８）平成２８年８月１８日 NHK ニュース７（参照：『貧困クライシス国民総「最底辺」社会』藤田孝典　朝日新聞出版　平成２９年３月）

（９）『NHK テキスト社会福祉セミナー　２０１７年４月～９月号』（６４ページ）

（１０）『NHK テキスト社会福祉セミナー　２００９年８月～１１月号』「特集　貧困高齢者の終の棲家はどこに　群馬・高齢者施設「たまゆら火災」の教訓」（１４～２５ページ）

（１１）平成２８年１１月３日，特定非営利活動法人自立支援センターふるさとの会主催「ふ

るさとの会・支援付き住宅推進会議共催シンポジウム『地域に支えられ，地域を支える～地域包括ケアシステムの社会資源として～』」
（１２）三浦恵子「高齢者犯罪」『関係性の社会病理』（学文社：平成２７年度）
（１３）『社会内処遇と福祉の連携～現状と課題』（『犯罪と非行』２０１１．２１１３～１１４ページ）（裁判官の言葉は幻冬舎新書『裁判官の爆笑お言葉集』（長峰超輝）から引用）
（１４）東京学芸大学教授石井正己『１００分 de 名著ブックス　柳田国男　遠野物語』
（１５）『ボランティアコーディネーション力第２版　ボランティアコーディネーション検定公式テキスト』（中央法規　２０１７）

「対人援助通訳の実践から」

第 5 回

飯田奈美子

1. はじめに

前回は、母子保健利用者（外国人）の調査結果をもとに、近年増加している留学生や研究目的で滞在する外国人の出産育児について述べました。今回は、夏休み（原稿執筆時）ということもあり、少し趣向を変えて、対人援助場面の通訳者の育成について研修講師を行う点から感じたことを述べていきたいと思います。

2. コミュニティ通訳の研修

一般的に通訳と聞いて連想される会議通訳等は、通訳養成訓練を行う専門学校で訓練を受けた後、通訳エージェンシーに登録され各通訳現場に派遣され職業として通訳業を行っています。それに対して、医療、教育、福祉という対人援助場面の通訳者の多くは、自治体や NGO 団体に登録し通訳を行い、ボランティアが前提とされています。報酬はたいへん少なく、コミュニティ通訳だけで生活できる程度の報酬はもらえていないのが現状です。また、通訳養成においても自治体や NGO 団体が主催する研修は数日というのが大半であり、系統だてて専門的な技術を獲得するための研修を行っているところは少ないです。

コミュニティ通訳研修が専門的な養成研修が行えない理由としては、自治体や NGO 団体などが研修や養成事業を行うため、予算がなく長期的な研修を行うことができないことがあります。また、研修のカリキュラムの統一化もされておらず、通訳に必要な専門知識や用語、通訳技術について何をどのように学べばいいかが定まっていないこともあり、それおれの団体が何が必要か手探りで考え研修を行っています。医療通訳においては、医療通訳養成のカリキュラム基準が策定されましたが、長時間の研修システムになっており、予算や人的資源の少ない地方の自治体や NGO 団体では、このカリキュラムとおりの研修を行えないところもあります。また、研修を行っても、通訳者の通訳レベルを判定するノウハウを各団体ではもっておらず、通訳者の通訳レベルを各団体が判断するのが難しいという問題もあります。通訳レベルは、言語知識、通訳技術、医療の専門知識、文化や習慣、声の大きさや態度のコミュニケー

ション能力等です。このように予算や人材が少ない自治体や NGO 団体による通訳者の養成には限界があるのです。

研修予算がないのならば、研修費用を高く設定して受講者に支払わせたらいいのではと思われる方もいるでしょう。しかし、コミュニティ通訳はボランティアが主に担っており、そのため高い研修費用を設定することもできないのです。

コミュニティ通訳は職業として成り立っておらず、多くが有償ボランティアです。有償といっても 2 時間 3000 円で交通費込というのが、一般的な報酬額になります。遠方の依頼になると交通費の方が高くついてしまい、ほとんど報酬がないという状態にもなります。

このため通訳者の多くは研修を受けたいと思っても研修費用が払えず研修を受けることもできないのです。特に、英語や中国語以外の希少言語（ベトナム語、タガログ語、スペイン語、ポルトガル語）の通訳は、外国出身のネイティブ通訳者が多く担っています。このような通訳者は、生活をしていくために収入を得なければならい人が多く、コミュニティ通訳の通訳費用では生活できないので他の仕事（工場やコンビニなど）をした方がいいという意見も出ています。医療通訳など、高度な専門知識と技術、経験が必要とされながら、医療通訳に見合う通訳報酬、地位が与えられていません。そのため、優秀な通訳者が仕事にやりがいを感じても生活していけないことから、長年行う通訳者は少なく他職へ流出してしまっているという現状があります。

しかし、最近、訪日外国人の増加、また医療ビザによる医療受診の外国人の増加から医療通訳サービスを始める企業もでてきました。企業による医療通訳では、研修を自前で行っているところもあります（数日間）が、ほとんどが外部（自治体や NGO 団体が行っている研修）に参加するように要請するだけで、通訳者の自己努力に頼っているのが現状です。医療通訳が職業として成り立つことは通訳者の生活を安定させるためにもとてもいいことですが、企業のポリシーと医療通訳という対人援助通訳の特徴がおりあわず、問題が発生するケースもでてきています。

3.「通訳行為」とは？

ある企業の遠隔医療通訳で働いていた通訳者 A さんの事例です。

A さんは、手術についての説明を医師が患者に行っている場面の通訳をしました。その中で、医師は手術のときに「ストッキング」を着用しますと説明をしました。A さんは手術で使用する「ストッキング」がどのようなものかわからず質問をしました。なぜならば A さんが使用する通訳言語では、ストッキングの長さによって表現が異なるからです。医師は説明をしてくれ、その説明を聞いて A さんは正確に通訳をすることができました。しかし、通訳が終わってから、病院の医療コーディネーターから、医師に質問したことをとがめられました。企業の遠隔通訳は 1 分間でいくらと料金が決まっており、通訳者が質問をすると時間が長くかかってしまうから質問をしないようにということでした。

通訳者は医療従事者と同じように医療知識をもっているわけではなく、わからない専門用語がでたときは医療従事者に確認を

して通訳をするように訓練を行っています。しかし、営利目的になるとこのような問題がでてくることが明らかになりました。通訳者も日々専門用語などの知識の向上を行っていかなければならず、勉強をしないということはあってはならないものです。しかし、わからない専門用語が出てきたときに確認をせずに通訳をすることはとても危険です。間違った内容を通訳してしまうことにもなりかねないからです。そのために、研修では、わからない言葉があれば、医師など専門家に確認しましょうと教えています。確認ができないとなると通訳行為が根底から変わってしまうことになります。確認の重要性をもっと知ってもらう必要があると認識しました。

また、別の通訳場面では、今後の治療のスケジュールについて医師から患者に説明があり、それを遠隔通訳で A さんは通訳をしていました。通訳している最中に A さんは患者さんの状況から、内容を理解していないと判断し、医師にもう一度説明してもらうように依頼をしました。医師は了解し、もう一度詳しい説明をしたところ、患者さんは話の内容を理解でき、納得されました。終わってから、この通訳についても医療コーディネーターからクレームがきました。医師にもう一度説明をしてもらうことは、嫌がる医師もいるからしないようにとのことでした。そして、企業の方からも、テンポよく会話が進むことが大事だから、患者側が理解していようがいまいが気にせずに通訳を進めるようにといわれたとのことでした。患者が理解せずに話が進むと、その場では問題なくても、だんだんとわからなくなり、最終的に重要な話を理解していなかったことでトラブルが発生することが多くあります。患者が理解することは、医療者側にとっても有益なことのはずなのに、そのような考えが企業側、 医療者側にないことに愕然としました。

日頃通訳研修をしている私はこの事例を聞いてとても悲しくなりました。患者は、医療者ほど医療知識もなく、裁量権ももたないことから医療者と力の差があります。そのような関係性のコミュニケーションでは、患者が「わからない」ということを伝えることは難しく、さらに日本語ができない外国人の場合はなおさらそれを表明するのは難しくなります。そのため、患者の表情などから理解していないと通訳者が察知した場合は、それを患者に確認し医療者から再度、もしくはわかりやすい説明をしてもらうように「介入」を行うことを上級の通訳者研修では行っています。このような「介入」行為自体が対人援助通訳の独自の専門性であり、もっとも必要な技術であるのですが、現場の医療者を始め、通訳者自身もそのことを知らず、通訳者の介入行為についての理解を得られていないのが現状です。

通訳を行うということは、単に記号としての言語を翻訳するだけでなく、要通訳者同士がお互いの言いたいことを理解して、信頼関係が気づけるように支援を行っていくことです。そのためには、言語を変換する翻訳だけではなく、力の差がある関係性の中でお互いが理解できるように必要な介入を行っていくことも対人援助通訳では求められることだと考えています。しかし、まだまだ「通訳」は、言語変換だけという認識が広がっており、通訳者が行う「介

入」の重要性を理解してはもらえていません。

4. 通訳コーディネーターの育成の必要性

このような事例をきくたびに、どのようにしたらもっと通訳者の役割や行為（専門性）を理解してもらえるのだろうと考えます。今回の事例では、医療者（医師）がクレームを言ったというより、医療コーディネーターからのクレームでした。もちろん医療コーディネーターも医師などの医療者からのさまざまな意見をきいて、通訳側（企業）にクレームを言ってきたのだと思います。ただ、通訳の役割や専門性など対人援助通訳の特徴や使用方法について医療コーディネーターにもっと知ってもらう必要があると感じました。今回の事例の医療コーディネーターだけなく、他の病院のコーディネーターやまた、自治体や NGO 団体のコーディネーターも通訳の本質や現場での問題点を知らないことがあり、現場での問題を通訳者に丸投げしたり、病院などの依頼元の言うことだけをきいて通訳者の意見を聞かないという状況もでてきています。そのため、通訳コーディネーターの育成も急務であると感じました。依頼元側の通訳コーディネーターは、病院の看護師や MSW や医事課や地域連携室職員、行政職員、福祉施設職員など対人援助を行っている職員が担っていることが多いです。このような対人援助者に通訳者の役割や通訳についての注意点をしってもらい、有効に通訳をつかってもらう研修や教育システムができればと考えています。

以上

マイクロ･アグレッションと私たち

～分断から動き出す交流～　4

朴　希沙（Kisa Paku)

前回は、マイクロ・アグレッションに関して行われた興味深い実験を紹介し、なぜ露骨なレイシズムだけでなくマイクロ・アグレッションについて検討することが必要であるかを述べました。今回もふりかえりを行った後、ひとつの事例を紹介し、マイクロ・アグレッションによって生じる「キャッチ 22 状態」について述べたいと思います。

・はじめに　～前回のふりかえり～

私は現在、日本から遠く離れたフィンランドに来ています。今年の夏はフィンランドの人々にとっても猛暑とのことですが、気温は暑くて 30 度前後、夜は肌寒い日もあります。クーラーをつけなくても過ごせる程度の暑さ、という感じでしょうか。

私が暮らしているユヴァスキュラという街は静かなところで、少しのお店と住宅街、あとは湖や森が広がっています。運が良ければうさぎやハリネズミを見ることができ、特段何があるというわけではないのですが落ち着いて過ごすことができる場所です。6 月～9 月まで、3 ヶ月の滞在ですがそれももう半ばを過ぎてしまいました。

普段の生活から離れて見知らぬ土地で過ごしていると、これまでの自分の生活やこれからのことについて少し距離を持って考

えることができるようです。私は現在、大学院に在籍し、マイクロ・アグレッションについてここで紹介したり、マイクロ・アグレッションに関する翻訳書を出版したりしようとしているわけですが、自分が一番したいことは、むしろマイクロ・アグレッションをどのように乗り越えていくことができるのか、その対話の在り方について考えることだと改めて思っています。また日々マイクロ・アグレッションを体験している人々が、いかに自らの暮らしやささやかな体験、願いや欲求といったものと社会的・政治的な状況とを有機的につなげながら、視野を広げ新たな視点を獲得していけるのか、という問いについて探求していきたいと思っています。

さて、前回は旧来の露骨で明確な形の差別（近頃でも露骨で明確な形の差別が散見されるため、もはや“旧来”でもないかもしれませんが…）と、そのかげに隠れて見えにくい曖昧なマイクロ・アグレッションの両方がともに有害であることを述べました。特にマイクロ・アグレッションは被害者においてその精神的エネルギーを枯渇させてしまうという特徴があります。前回は、マイクロ・アグレッションを受けた結果被害者に生じる内的なプロセスの一端を紹介し、それがいかに認知的エネルギーを消耗させ本来の課題から注意をそらしてしまうかについて述べました。また認知的エネルギーに関して行われた実験を紹介することを通して、表面上の行動の下に存在する隠れた差別によっていかに被害者が困惑させられ、心理的エネルギーを消耗させられてしまうか、ということについて述べました。マイクロ・アグレッションは分かりにくいために、被害者にある種の疑惑や迷いをもたらします。今回はその疑惑や迷いについて、ひとつの事例を紹介した後、「キャッチ22状態」という用語から解説してみたいと思います。

・マイクロ・アグレッション：イントロダクション③

–事例②：スーのケース

この事例は、『Microaggressions in Everyday Life』の著者、Derald Wing Sueが実際に体験し、著作にも載せているものです。

スーはある時、アフリカ系アメリカ人の同僚と hopper と呼ばれる小さな飛行機に乗ります。飛行機に乗り込んだ時、スーたちは（白人の）フライトアテンダントに「どこに座ってもよい」と言われました。そこで、スーたちは一番前の空間を広く使える座席を選んで座りました。その座席は、向かい合う形の座席になっており、前の席は空いていました。するとその後に、スーツをきた白人の男性たちが飛行機に乗り込んできます。そして彼らはスーたちの前に座りました。

飛行機が離陸する直前、先のフライトアテンダントは深く頭を下げた上でスーたちの会話を遮り、飛行機の後方に移動してもらえないかと頼んできました。フライトアテンダントは、「飛行機の重さを均等に配分しなければならないから」と言ってきたのです。以下より、本文から引用します。

・・・(有色人種の客である)私たち二人は、

似たようなネガティブな反応をした。飛行機の重さのバランスを保つのは必要なことだと思ったものの、なぜ私たちだけが声をかけられるのだろう？私たちは最初に搭乗した客で、3 人の白人男性は最後に乗り込んできたというのに。なぜ彼らは移動することを頼まれないのだろう？私たちは、私たちの人種のために選ばれたのだろうか？それとも人種などには関係なく、誰にでも起こる偶然の出来事なのだろうか？私たちは、気にしすぎのしみったれた人間なのだろうか？私たちは飛行機の後方に移ることに従ったものの、二人とも憤りと、苛立ちと、怒りを感じていた。そして私たちの日々の人種的な経験の観点から、同じ結論に至った。フライトアテンダントは私たちの人種を見て、私たちを 2 流市民として扱ったのだと。しかしこの出来事はここでは終わらなかった。落ち着くように自分に対して言い聞かせていたにも関わらず、私は自分の血圧が上がっていき、心臓を打つ速度が高まり、怒りで顔が赤らんでいるのを感じた。そしてそのアテンダントが私たちのシートベルトが締まっているかを確認しに来たとき、私は自分の怒りをこれ以上我慢していることができなくなった。自分をコントロールしようと懸命に努力しながら、私は彼女に無理に作った穏やかな声で話しかけた。「あなたは、2 人の有色人種の客に対して、‘バスの後方に行け’と頼んだことを自覚していますか？」と。数秒の間、フライトアテンダントは何も言わなかったが、ぞっとしたような表情で私を見つめた。そして、それが当然とばかりに怒った声で「そうですね、私は今までそのように責められたことはないんですが！よくそんなことをおっしゃることができますね？私は人種で判断などしていませんよ！私はただ飛行機のバランスを保つためにあなたがたに移動をお願いしただけです。ともかく、私はあなたがたにより広い、よりプライバシーが守られる空間を提供しようとしただけです」と言った。

私の考えと感情を説明しようとする試みは、彼女をより防衛的にさせるばかりだった。私が主張するたびに、彼女は自身の行為に対する客観的な理由を伝えようとした。ついにそのフライトアテンダントは会話を打ち切り、これ以上この出来事について話し合うことを拒否した。もしも、私の経験のリアリティに価値を認めてくれる同僚がいなければ、私はこの出来事に対する自分の反応が正しかったのか間違っていたのかをさまよい続けることになっただろう。しかしそれでも、残りのフライトの間中、私はこの出来事に対して気をもみ、苦い後味を感じ続けていた (Sue, Capodilupo, et al., 2007, p. 275)。

上記の事例では有色人種である乗客と白人のフライトアテンダントの両方に引き起こされた心理的なジレンマが描写されています。しかし両者の経験と解釈は異なっていました。このような時、認識の正確さに関した心理的ジレンマが引き起こされ、「誰の現実感覚が正しいのだろうか？」という疑問が生じます。さらにいえば、もし受け手が「これはマイクロ・アグレッションではないか？」と思ったとしても、加害者が自らの意図に気づいていない場合に、どうやってそれを証明すればよいのでしょうか？

このことに関して、著作では①人種的リアリティが白人と黒人で異なっていること、②意図的ではない差別というものは可視化することが非常に難しいこと、③マイクロ・アグレッションの有害性が矮小化されることといった観点から解説されていきますが、今回はこのような場面で被害者（ここではスー）に生じる「キャッチ 22 状態」について説明したいと思います。

・キャッチ 22 状態

マイクロ・アグレッションが生じると、その受け手は非常に困った状況に立たされることになります。それは、「キャッチ 22 状態」と呼ばれています。

例えば、先の事例でフライトアテンダントが有色人種の乗客にのみ飛行機の後方に移動するよう頼んだ時、乗客には様々な疑問が浮かぶと考えられます。それは例えば「こんなことが本当に起こるのだろうか？これは意図的な行動だろうか、それとも悪気なくしてしまった侮辱だろうか？自分はどう応えるべきだろう？モヤモヤしたまま座っているべきか、対決すべきか？この話題を持ち出すとして、どうやってそれを証明する？努力する甲斐のあることだろうか？何事もなかったことにすべきだろうか？(Sue, Capodilupo, et al., 2007, p. 279)」といったことです。ここでは、1.真実を見極めること、2.侮辱や否定から自分を守ること、3.どんな行動を取るべきだったかを確認すること、に心理的エネルギーが費やされています。

そしてその結果、マイクロ・アグレッションに対する最もよくあるリアクションは、何もしないことのようです。これは、①マイクロ・アグレッションが起きたかどうか断定できないため、②どのような応答が最適なのかが分からず応答を決められないため、③マイクロ・アグレッションは瞬間的に生じる出来事なので応答する前にそれが過ぎってしまうため、④自らを守るために経験したことを否定し何も起きてないと信じ込もうとするため、⑤状況に対して行動を起こしても何もいいことはないという考えるため、⑥行動した結果より不利な状況に立たされることを恐れるため、といったことが背景にあるようです。

例えばマイクロ・アグレッションが生じた際、それについて加害者と話し合おうとすれば何が起きるでしょうか？そもそも意図せずマイクロ・アグレッションを行った人に、なんと伝えればよいのでしょう？マイクロ・アグレッションと対決することを決めた結果、敏感過ぎで、こだわり過ぎな「怒りっぽいマイノリティ」というレッテルを貼られてしまうかもしれません。そして、結局の所、そのような感情的な態度や怒りは加害者から病的な人間だと扱われることにつながってしまうかもしれないのです。レッテルを貼られることを始めとした報復に対する恐れは、社会の中で軽んじられている人々の頭の中に常にあると言えます。

Sue はその著作の中で、アフリカ系アメリカ人が差別に対して抗議すると「敵対的で、怒りっぽく、衝動的で、すぐ暴力に訴える」というアフリカ系アメリカ人に対す

る思い込みが強化されてしまうことがあると述べています。確かに、もし抗議する人が異常でないのだとしたら、マイクロ・アグレッションを行ってしまった側に何か問題があるということになります。しかしマイクロ・アグレッションは非常に見えづらいために、被害者に問題があるとみなされやすいのです。

キャッチ22状態というのは、このような状況を表すための用語です。この用語はもともとジョセフ・ヘラーの小説の名前で、そこでは何を行っても除隊がかなわない戦争の狂気が描かれています。つまりキャッチ22状態とは、何も行動を起こさなくても地獄、しかし何か行動を起こしても地獄、という状態のことです。この心理的な葛藤や八方塞がりの状態が被害者の精神的エネルギーを枯渇させてしまうことは明らかです。なおもやっかいなことに、マイクロ・アグレッションは露骨な差別とは異なり、マイノリティ同士のつながりも難しくさせてしまいます。マイクロ・アグレッションを取り扱うことは非常に複雑で一筋縄ではいかないために、容易に「ことを荒立てない方がいい」「くよくよ考えない方がいい」「大したこと無いのに、何をそんなに悩んでいるの？」といった反応を引き起こしてしまうからです。

私はマイクロ・アグレッションの最も深刻な特徴は対話を不可能にさせる点にあると考えています。例えば、旧来の明確な形をとった差別であれば、少なくともその問題を共有し、差別に対して抗議するといった「応答」が可能でした。しかしマイクロ・アグレッションの場合は、差別的なニュアンスを含んだ行為であるにもかかわらず、それについて話すことが上記のような理由から困難になります。そしてそれはマイノリティの孤立化にもつながっていくと考えています。

以上、今回はひとつの事例からマイクロ・アグレッションによって生じるキャッチ 22 状態を紹介することを通してマイクロ・アグレッションがその受け手にもたらす影響の一端を紹介しました。次回は、スペクトラムという観点から露骨な差別とマイクロ・アグレッションについて考えてみたいと思います。

・・・続く

【参考文献】

Sue, D. W., Capodilupo, C. M., Torino, G. C., Bucceri, J. M., Holder, A. M. B., Nadal, K. L., & Esquilin, M.(2007). Racial microaggressions in everyday life: Implications for clinical practice. *American Psychologist, 62*, 271-286.

Sue, D.W.(2010). Microaggressions in Everyday Life: Race, Gender, and Sexual Orientation. Hoboken, N.J.: John Wiley & Sons.

迫　共
（浜松学院大学）

『透明なゆりかご』はこの連載で取り上げたいと思っていたのですが、知らないうちにTV ドラマになっていました。とてもよくできており、毎回、産婦人科で繰り広げられる生命のドラマに感動させられています。

原作者の漫画家、沖田×華（おきたばっか）さんは学習障害や ADHD、アスペルガー障害の当事者。自身の幼少期の経験についても作品に取り上げています。『透明なゆりかご』は 1997 年頃、看護学科の高校 3 年生だった沖田さんの体験がもとになった作品です。母親のすすめで産婦人科の個人病院で見習い看護師としてアルバイトをした体験がもとになり、さまざまな人間模様が描かれています。

産婦人科医療の現場では、出産の喜びだけではなく、中絶や性的虐待など、人生の残酷さや不条理さにも遭遇します。そういったテーマにもストレートに触れる作品ですが、デフォルメが効いた絵柄のせいか、グロテスクな表現にはなりません。それでも、ときには空白の多い絵に描かれていない何かが、読み手の想像力を喚起して、胸に迫る表現を作り出しています。

90 年代後半、「できちゃった結婚」がとても流行っていました。その時期にアルバイトをした沖田さんは、医師から「日本人の死亡原因の第 1 位は、本当は人工妊娠中絶だ」と明かされます。ガンでもなく、心臓疾患でもありません。沖田さんは後のインタビューで、1 日に必ず 1 件から 3 件程度の中絶手術が行われ、夏休みが終わる頃の時期は高校生や大学生がたくさん通院していたと語っています。

妊娠中絶手術の手伝いをした沖田さんは、かき出された胎児の「かけら」を瓶に入れてケースにつめる作業を命じられます。ケースにはもう一つ、すでに瓶が入っており、「よかったね。ひとりじゃなくて」というセリフがつけられています。ケースは業者のおじさんが回収に来て、「今日は 2 体です」と渡されていきます。

中絶胎児の扱いは自治体ごとに違いがあります。沖田さんがアルバイトをしていた地域

では、妊娠 4 ヶ月（12 週）未満の中絶胎児は「医療廃棄物」つまりモノでしかない扱いでした。中絶した女性の痛みとは裏腹に、医療や法制度では実に淡々とした扱いが進められます。

ちなみに妊娠 12 週以降 21 週 6 日までの中絶手術は死産扱いとなり、戸籍に残ります（それ以降は中絶手術はできません）。役所に死産届を提出し、胎児の埋葬許可証をもらう必要も出てきます。

「カレシカノジョの間でできた子を中絶する女は自業自得、この病院でよく言われていたことだ。…私も前はそう思っていた。でもそれがすべてじゃないことをこの仕事をして知った」。これは第四話（一巻）に出てくる作者のモノローグ。中学の後輩に駅前で偶然会った沖田さんは、幼く見える後輩から「堕しに行く」という告白を聞いて驚かされます。「カレシには言った？」と問いかけると「仕事が忙しいみたいで…電話に出なくなっちゃって…」。後輩のつぶやきを受けて、ふたたび作者のモノローグにつながります。「一回逃げた男は何をしても帰ってこない。女が妊娠したと伝えたとたん連絡がつかなくなる。相手に相談することもできず、お金も用意できないまま一人ぼっちで放置されるのを数え切れないぐらい見てきた――。」

性交渉は妊娠につながり、出産は子育てにつながります。知識としては知っていても自分の身に振りかかる事とは想像できず、目先の欲求にしか意識が行かない人も世の中にはいます。それは男性に限らないかもしれませんが、やはり女性のほうが多くの傷つきを抱える可能性を持つことになります。

今年 6 月、千葉県の高校で生まれたばかりの赤ちゃんの遺体が発見されるという事件がありました。誰が産んだのかは分かりません。こうした事件があると産んだ女性に対するバッシングが多く発生します。しかし周囲のサポートがなく孤立した女性が仕方なく起こした出来事だったのではないかと考えてしまいます。

第十話（二巻）にはカナダ人の「ドゥーラさん」が登場します。ひとの名前ではなく、出産前後の女性に付き添う女性のことです。医療職ではなく、出産経験の必要もありません。いくらかの謝礼金を受け取りますが、ボランティアで引き受ける人も多く存在します。

「ドゥーラは赤ちゃんが亡くなった時も付き添うことがあります。産めなかった人はとてもつらい状態にいるけど、私がそばにいるだけで落ち着くこともあるんです…ただただ悲しみをみんなで分かち合えばいいんです」。

そう語るドゥーラのケリーさんも早期流産をしたことがあるといいます。まわりはそれほどショックを受けていなかったのですが、ケリーさんは「せっかく宿した命の光を私は消してしまった」とつらい気持ちになっていました。そのときケリーさんは「流産」という漢字の意味を知ったといいます。「流産で亡くなった赤ちゃんは母親の悪いことも抱えて流してくれる」。死んだ赤ちゃんにも使命があったのだと考えることができた、だからドゥーラ

になったのかもしれないとケリーさんは話しました。

中絶と流産を同じように語られることには抵抗がある人もいるでしょう。でも、小さな命の光が消えていく時間をひとりで過ごすことはとても辛く悲しいことです。そこに付き添い、励ます人がいてくれるならば、どれだけ救われるでしょうか。

生まれた後の赤ちゃんに対しては、万一の場合、行政が保護をします。でも赤ちゃんを生む前の女性は充分に保護されていないように感じられます。妊娠や出産についても、社会保障がケアできる部分があることを、義務教育段階から知らせる必要があると考えます。

参考サイト

○日本の死因第 1 位はガンじゃない!?　産婦人科実録コミック『透明なゆりかご』作者・沖田×華インタビュー
http://gendai.ismedia.jp/articles/-/43299

○妊婦死亡、流産、14 歳の母親……知られざる産婦人科の現場から
http://gendai.ismedia.jp/articles/-/45795

○妊娠 4 か月（12 週）未満の中絶胎児の取扱いに関するアンケート調査結果
http://www.env.go.jp/press/files/jp/6034.pdf

※ 本連載へのご意見、ご感想などをお聞かせください。
sako@hgu.ac.jp 迫 共（さことも や）

『余地』 ～相談業務を楽しむ方法３～

＜おじゃましまーす①＞

杉江　太朗

～「家庭訪問」～

家庭訪問という言葉を聞いたことがありますか？子育て経験のある方や、教育関係の方は、学校の先生が生徒の各家庭を順にまわっていく「家庭訪問」を思い浮かべるのではないでしょうか。友達の家に遊びにいくことをわざわざ「家庭訪問」とは言いませんよね。ネットで検索をすると、ウィキペディアに「家庭訪問」という項目がありました。そこでは、「教師や牧師（！）などが、家庭を個別に訪問すること」と書かれています。また、それ以外にも学校の先生方が家庭訪問する際の対応時のマナーを教えてくれるようなサイトが複数見られました。

日本の中で、牧師が訪問することはないとは思いますが、学校の先生が個別に訪問すること、その際に、玄関先でいいのか、上がってもらうのか、そしてお茶を出すのか、そもそも掃除出来ていないし、えっ！？手土産いるのかな・・・？なんてことで悩んだ経験のある方は多いのではないでしょうか。

私の働く職場でも「家庭訪問」を行うことがあります。今回は、その家庭訪問をテーマに書いていきたいと思います。

～「家庭訪問」の分類～

家庭訪問という方法がどの程度、公式化されているのかは、わかりません。論文を探してみると、保健師や教師の家庭訪問について書かれたものがたくさんあるようです。また行政機関で言えば、生活保護のケースワーカーも家庭訪問をしています。それぞれの機関によって訪問する目的は違うと思いますが、それを目的別に分類して考えてみたいと思います。

① 直接支援型

対象者に対して直接の支援を目的とする訪問。例えば、訪問介護や訪問看護、障害のある家庭や、ひとり親家庭にヘルパーさんが訪問するものなど。保健師が訪問して乳幼児の発達を確認する訪問もここに含めても良いのかもしれない。市町村のサービスの中で、「養育支援事業」という、家庭訪問をして養育のお手伝いをするというものも直接支援型か。ニーズは対象者、利用者にあるため、通される部屋など

は限られているが、おそらく居留守等を使われることはなく、比較的受け入れてもらいやすいはずである。

② 調査型

生活保護のケースワーカーや児童相談所のワーカーなどが対象者の生活環境を調査、確認するための訪問。ニーズは援助者にあるため、家の全体や構造を把握するために、対象者の了解を得た上で、家の中をほぼ全部確認する。また地域によっては、警察官による訪問もあるよう。これは、家の中ではなく、主に家族構成を確認するためのもので、主に玄関先で終わる。援助側がニーズを持っていることから、対象者によっては、煙たがられる可能性もある。

③ 所在地把握型

学校が１年に１度行う家庭訪問は、基本的には、登校ルートやその地域の実情を確認することが目的と言われている。そのように場所を特定し、周囲の状況を把握するための訪問。比較的短時間で終わることが多いはず。また児童相談所でも、担当している子どもがどんなところに住んでいるのかを確認するために、近くに行ったついでに家の前を通ることも。この場合、家庭訪問とは言わないかも知れないが、所在地を把握するためのものである。

④ 営業型

金融機関や水道屋などが営業のために訪問するもの。「〇〇の方から来ました」という営業には注意が必要。「消防署の方から来ました。」「消火器の点検です。」という営業はまずもって詐欺ではないだろうか。もし相手にする場合は、本当にその会社から来ているのか確認するために、名刺やバッジ、社員証など確認するべき。訪問する側は、基本的には受け入れられないものとして訪問するべきであり、受け入れを断られた場合は、すぐに謝辞を伝え、退散すべき。

⑤ 面接型

児童相談所のワーカーや、行政機関の相談員などが面接を目的として訪問するもの。来所が、時間的、距離的、物理的に難しい場合などに行う。子どもと面接をする場合は、家族の了解を得た上で、子どもの自室ですることもある。基本的には、ワーカーの立場で言うと、アウェイである。一方で、生活に入り込むチャンスにもなり、得られる情報は多くなるはず。

⑥ 突撃型

中々、出会えない人に出会うために、相手に訪問することを知らせずに訪問するもの。例えば、児童相談所では、

子どもの安否を確認する目的や、保護者に出会う目的がある場合で、特に保護者の協力が得られないときに、アポを取らずに訪問することがある。生活保護の訪問や呼び出しに応じない場合も抜き打ちで訪問をすることがあるらしい。基本的には面会や呼び出しに応じて頂けないときに行うことが多いのではないか。良く、「突撃訪問」という呼び方をされることがあるとかないとか。

⑦ 介入型

強制的に家庭訪問をするものの典型的な例は、警察官などが行う「家宅捜査」ではないだろうか。裁判所の許可があって行えるもので、受け入れる側にその拒否権は認められないはずである。児童相談所も子どもの安否が確認できない場合、手順を踏み、最終的に家庭裁判所の許可を得た上で、「立入調査」を強制的に行う権限を持ち合わせている。

以上の分類に何か根拠があるのかと言われると実際のところありません。私自身の感覚的なものです。他にも様々な職種の方が家庭訪問をされると思うので、この分類に当てはまらないものもたくさんあると思います。

ここでお伝えしたいのは、目的によって、『家庭訪問』を受け入れる側にニーズがあるのか、『家庭訪問』をする側にニーズがあるのか異なること、そのニーズの所在によって、受け入れる側の心理的な負担が変わること、さらにどのような目的であっても、『家庭訪問』を受け入れる側の陣地に入ることになり、あくまでもペースは訪問される側にあるべきであることなどです。特に行政機関が訪問する場合は、高圧的、侵入的にならないことが最優先です。自分が何の目的で訪問をしているのか、そして相手の本音（仕方なく受け入れてくれているのか、ウェルカムなのかなど）がどこにあるのかを明確に認識しておくことが、その家庭訪問を効果的なものに出来るのかの分かれ道になるように思います。

次に家庭訪問をする際に私が気を付けていることを書いていきます。

～チャイムを鳴らすその前に～

家庭訪問をする目的が様々であることは先ほど書いた通りです。どのような目的であれ、家庭訪問をすることで、その家族が「どのような家族なのか」知るためのたくさんの情報を得ることが出来ます。

＊位置情報を知る

家庭訪問をする前に、まず準備が必要です。スマートホンやタブレットを用意して、グーグルマップで場所を調べましょう。そもそも家がどこにあるのか、近所には何があるのか、最寄駅からどのぐら

いの距離なのか、バスが通っているのか、所属の小学校や保育園までどのくらいの距離なのか、近くの病院は・・・など、あらかじめ位置情報やその周辺の情報を知っておくことで、その家族の生活を想像することが出来ます。

また賃貸の場合、不動産会社のホームページなどで、そのマンションの家賃や間取りを見ることが出来ます。間取りを知っておくことで、何人の家族に対して、何部屋あるのかなどあらかじめ知ることができ、また家賃の相場を知ることが出来るのでその情報も大いに役立つはずです。（当然、訪問時は見たなんて言いませんよ）

＊目的地までの行き方を考える

もし車で行く場合、その家の近くに車が停められる場所があるかどうかを把握しておかなければなりません。駐車禁止のところに停めてしまって、駐車違反を取られては困りますよね。私は、アポを取る際に、近所に車を停める場所があるかどうか確認するようにしています。場合によっては、駐車場を空けてくれたり、近所のコインパーキングやマンションに設置された来客用の駐車場の有無を教えてくれたりします。そのやり取りの中で、家に車が何台あるのか、その人が家の周囲のことをどの程度把握しているのかなど想像することが出来ます。もし聞けなかった場合は、あらかじめ停める場所を探してからいきましょう。行ってから探すと予定していた時間に遅れてしまう可能性も出てしまいます。

電車やバスで行く場合は、当然ですが、時刻表を調べて、遅れないようにしましょう。

＊チャイムを鳴らすその前に

さぁ家の前に着きました。チャイムを押す前に、周辺のチェックをしましょう。

私は、まずマンションの場合、そのマンションの管理会社、駐車場に泊まっている車の車種やナンバープレート、そしてゴミ捨て場や駐輪場、郵便ポストの状態などを簡単に確認するようにしています。マンションの管理会社を知ることで、基本的な特徴（この会社は保証人がなくても契約できる～）などを知ることが出来ます。車の車種を見ることで、どのような所得層が住んでいそうなのか、またナンバープレートについては、県内ナンバーなのか県外ナンバーなのか、特に遠方のナンバーが多く、さらにワンルームマンションなどの場合、会社の社員寮などを兼ねていることがあります。社員寮を兼ねている場合、転出入が多くなったり、そもそも家族連れで生活をする世帯は少なかったりします。またゴミ捨て場や駐輪場の衛生面である程度のマンションの住民のマナーへの意識がわかったり、自転車の種類を見ることで、マンションの住民の大体の家族構成がわかったりします。

通学用の自転車には通学用のシールが貼っていたりしますよね。

一軒家の場合は、大体の築年数、周囲との築年数の差、家の周囲や庭の衛生状態、子どもの用の遊具の有無、車の台数、種類、などを見ています。家の外観はみんなに見られる場所です。ある程度「周囲の目」を気にする場所であるからこそ、その家族の特徴が出るかも知れません。（と言いいながら私の家は雑草が生い茂っていますが・・・）また子どもの用の遊具を見ることで、普段外で遊んでいるのか、どのような遊びをしているのか想像がつきます。この時期はビニールプールが干している場合が多いかもしれません。また大手のハウスメーカーのような、同時期に開拓された新興住宅の中の新築一軒家と、古くからある住宅地にある新築一軒家では、周囲の住民との関係性も変わってくるのではないでしょうか。

＊余談

余談ですが、むかしに、営業をしている時期があり、１日に３０件近く回ることもあったのですが、家の周囲のチェックは徹底的にするようにしていました。営業の場合は、その瞬間が一発勝負になります。家の周囲を見て、とっさに「このような人が出てくる」と想像をしてから（当たるかどうかは別でしたが）チャイムを押していました。花を植えていたり、飾りつけ（クリスマスのイルミネーションなど）をしていたりすれば、セールストークの中で使えます。飾りつけや花は外から見えるものです。飾りつけ敢えて見せているのだと考えたときに、その情報を扱わない手はありません。少しでもネタを見つけた上でチャイムを鳴らして、インターフォン越しに終わらず、ドアを開けてくれて、最初の挨拶まで出来たとき（ほとんどありませんでしたが）、「イルミネーション綺麗にされてますね」と挟むと会話が弾むことに繋がりました。そのあたりが営業成績に影響したかどうかは・・・ですが、今の仕事で家庭訪問をするようになってから、家の周囲を見渡すという癖は大いに役立っています。

チャイムを鳴らすその前に、様々な情報を仕入れておくことで、その人がその場所で「個人」としてどのような生活をしているのか、どのような時間軸で生活をしているのか、さらに地域やご近所という「集団」の中でどのような関わりを持っているのか、どのような関係性がありそうなのかなど想像しやすくなると私は感じています。

またチャイムを鳴らす際は、名札を外すなどの配慮が必要です。その訪問自体をご近所さんに知られたくない場合もあるかも知れません。またチャイムを鳴らしてインターフォン越しに話す場合も、「児童相談所の〇〇です。」と言うのではなく、「〇〇です」と言うようにしていま

す。これも名札を外すことと同じ理由からです。その簡単な配慮が欠けてしまうことで、その家庭訪問を不意にしてしまう可能性があるかもしれません。

～チャイムを鳴らしたその後～次回号に続く

私が目指す、家庭訪問の目的は、あくまでもその家族の生活が将来少しでもより良いものになることです。決して個人のプライバシーを覗くことが目的ではないのですが、受け入れる方からしたら同じような目的で受け入れてもらえているとは思いません。家庭訪問をすることは、相手の生活に侵入することであり、またその時間、相手の生活を止めてしまうことに繋がります。家庭訪問をする、忙しい時間に来てしまって申し訳ないことを伝えた上でさせて頂いています。スケジュール上、夕食の準備時間に重なってしまったときは本当に恐縮してしまいます。

次回号では、チャイムを鳴らしたその後に、どのようなことを気にしながら対応をしているのか、その家族のことを知るために何を見るようにしているのか、家庭訪問の実際を書いていきたいと思います。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

統合失調症を患う母とともに生きる子ども

～ゆりの日常（２）～

♪ ♪ ♪

松岡園子

それぞれの電話　－13 歳－

6 月に入ると、雨の降り続く日が多くなった。

ぼわーん、ぼそぼそ、ぼわーん……。

こもったような響くような声が 1 階から聞こえる日は、起き掛けから黒っぽい霧が 2 階にまで押し寄せてくるような気分になる。

「あぁ…また言うてるなぁ……」

ゆりの溜息交じりの声が、部屋に響く。朝起きるとすぐに部屋のドアまで這っていき、そーっと開けたドアの隙間から頭だけを出し、1 階の物音に耳をそばだてる。そんな習慣がいつの間にかついてしまった。静まり返った 1 階の台所の真上あたりの床から、時々、話し声だけでなく、言葉にならない「うぁーなーうー」と呻くような、重低音の歌声も聞こえてくる。

「……暗っ」

ゆりにはその歌が呪いの歌のように聞こえる。朝から呪いの歌が聞こえる家は、きっとうちだけだろう。さわやかな朝、なんていう言葉はうちにはないのだと考えると、朝から悲劇の歌い手になっている夏子の姿を想像しただけで何だか可笑しくなって、ぷっと吹き出しそうになった。

1 階に下りていくと、歌声は止まった。台所の引き戸を開けると、夏子が目線を下に向けたまま立っている。

「お母ちゃん、おはよう」

「……」

まっすぐ下を向いたままの視線は、ぴくりともしない。

（私が入ってきたことには、気付いていない……か）

「お母ちゃん、これ、昨日千恵ちゃんのお母さんがくれたパン」

そう言ってゆりは、戸棚にしまっていた食パンの袋を取り出した。昨日の夕方、家に千恵ちゃんとお母さんが来てくれて、あれやこれやと差し入れをしてくれた。

「焼くよ」

返事がないので、黙ってトースターに食パン２枚を突っ込んだ。

（返事もしてくれへん人と一緒におって、こっちが独り言を言うてるみたいやわ……）

「お母ちゃん、今日はおばあちゃんの納骨やから、亜紀おばちゃんとかも来るよ」

「ん」

久しぶりに親戚一同が集まることになっていた。だからゆりは、3 日前に祖母の電話帳から料理屋さんを探して電話をかけ、10 人分の法事用の会席料理を今日の 11 時頃に持ってきてもらうよう手配した。法事用の料理の値段はだいたい 3,000 円から 5,000 円ぐらいでと、2 年前に祖父の法事の時に祖母が言っていたのを思い出した。今は夏子が仕事のできる状態ではないし、祖母の貯金にも限りがある。だから値段の高いものを注文するのには気が引けて、3,000 円台のものを注文した。

「えっと、持って帰ってもらうお返しは一家族分でいいから……これでセット OK。あとは、お茶と座布団の準備か」

お客さんをもてなすのって結構好きだなと思いながらゆりは、1 階の客間の隅にお返しの入った紙袋を並べた。のしに書いてもらう内容やわからないことは、祖母の友人の真鍋さんに電話をかけて訊いた。今日は、真鍋さんは来ない。1 カ月ほど前のゴールデンウイーク中に、夜中に真鍋さんの家へ駆け込み、そのまま泊まらせてもらった。そのことを思い出しながらゆりは、今日来る予定の良二や亜紀が、もし真鍋さんと顔を合わせるようなことがあるとどうなるのだろうと想像して、こめかみの周辺にかっと熱を感じた。

あの後、ゆりが奈良の中学校で関係者と話し合いをした後にあおば園に帰らず、亜紀の家へ帰ってきた日、良二が真鍋さんに電話をかけていた。一晩泊めてもらったお礼を言うどころか「身内で何とかするから、今後、余計なことをしないでほしい」とゆりのいる横できつい口調で話しているのを聞いた。それからというもの、頼っていくと間に挟まれた真鍋さんを追い詰めてしまうような気がして、電話をかけようと受話器を上げてはまた下ろすということが何回もあった。

（大丈夫かな……。真鍋さん、もう私たちのこと嫌になったりしてないかな）

無理やり神戸に戻ってきてから 20 日余り。学校へは行っていない。今は手続き上、奈良にいることになっているし、急に勝手に神戸の中学校に行っていいのかもわからない。あれから何度か亜紀からの電話があったが、「やっぱり無理や」と音を上げることがないか探るような口ぶりで、「何か困ったことはないか」「学校はどうするのか」などと色々と訊ねられた。そのたびにゆりは、「別に」「神戸の学校に行く」と言わなければならなかった。きっと

今日、皆で集まった時に、ゆりたちが今後どうするかの話も出るだろう。だから余計に納骨の集まりで手落ちがあることは許されない。そう気を引き締めながら、お茶を淹れる急須のふたを開け、汚れがないか覗いて中をくまなく確かめた。

隣の部屋では、夏子が手をたたいて歌を歌っているのがすりガラス越しに見える。神戸の家で夏子とふたり。全く平気かと言えば嘘になるが、日々の生活の煩わしさよりも、夏子と一緒に過ごせる安心感の方が優っていた。

「おはようさん」

ゆりが玄関を掃いていると、隣のおじちゃんが通りかかった。おじちゃんはゆりの家の隣で酒屋をしている。おじちゃんの家はゆりの家からさらに坂を下ったところにあるため、家と酒屋の行き来する時、ゆりの家の前を通る。今日は日曜でお店も休みのはずだから、ここを通ったりしないはずなのに……？

「あ、おじちゃん。おはよう。おばちゃんは？」

「うーん。大丈夫や、心配いらん」

「うちのおばあちゃんが入院した時に手伝ってもらいながら、今度はおばちゃんが大変やのに、何にもできんで……」

「いやぁ、ゆりちゃんとこも大変やろ。おばあちゃん亡くなってから。今日は何かあるんか？」

「今日は納骨やから、8 人ぐらいお客さんが来る」

そう説明しながらゆりは、祖母が亡くなったことをおばちゃんに知らせた時に、電柱の陰から何度も何度も頭を下げてお辞儀をしている祖母の夢を見たと話すおばちゃんの姿を思い出した。「『ゆりちゃんのこと、どうかよろしくお願いします……』っておばあちゃんに頼まれてる気がしてね」と話す、おばちゃんの声と瞳が震えていた。

先週、いつもおばちゃんがいる時間に回覧板を持って行こうと表の通りから覗いたが、店の中にはお酒を飲みに来ているお客さんが 2 人で座り、大きな声で笑っているのが聞こえた。おばちゃんの姿はなかった。トラックがないから、おじちゃんは配達に行っているのだろう。夜にもう一度覗くと、おじちゃんがいた。訊くと、おばちゃんは入院しているとのことだった。

「ちょっと疲れただけや。おばちゃん、重たいビールのあれも運んだりしてたしな」

そう言いながらおじちゃんは、店の前に高く積まれた 20 本入り瓶ビールが入ったプラスチックケースを指さした。大変なのはうちだけではない、とゆりは気の引き締まる思いがした。

10 時前になると、親戚が集まり始めた。次第に家の中が慌ただしく、2 階への案内、お茶出しと忙しくなってきた。納骨でお墓に行く前の儀式が始まる頃にはその前とは打って変わり、2 階の部屋がしんと静まり返った。

（独り言、言わんとってよ……）
　ゆりは夏子を横目で見ながら、ひやひやしていた。夏子もいつもと違ってお客さんがたくさんいることに緊張しているのか、じっと静かに座ったままだ。
　ピーンポーンと玄関の呼び鈴の音が下の方で響いた。掛け時計を見ると、10 時 50 分を指している。
「あ……、料理屋さんや」
　ゆりがこっそりと部屋から出て階段を下り玄関のドアを開けると、料理屋さんが料理やお椀の入った番重と、お吸い物の入った魔法瓶などを軽のワゴンから次々と玄関の絨毯の上に置いていった。それらを台所へ運び、ゆりが 2 階の部屋へ戻った頃には一連の儀式は終わり、皆で談笑しているようだった。座布団に座り直したゆりは、お茶を用意しようかと考えていた。良二、亜紀の他にも、遠い親戚が集まっていた。ゆりにはあまり馴染みのない人たちだ。
「このところ、ずっと雨続きやったのに。今日は天気で良かったですなぁ」
「ほんまに、今年はよう降りますなぁ」
　会話がふっと途切れて、窓の外で電線に留まったスズメの鳴き声がはっきりと聞こえた。
「……で、どうするんや？」
　誰もが一番気になっているが、なかなか言い出しにくいと思って黙っている様子だったところを、良二がここぞとばかりに口火を切った。皆が黙り、視線が自分と夏子に集まるのを感じたゆりは一度、唇を結んだ。
「……ここで住む。だって、おじいちゃんが建てて、ずっと住んできた家で。友達もここにたくさんおるし……この家、誰も住まんようになったら……」
　ゆりは下を向いたまま、狭くなった喉の奥から声を吐き出した。訊かれた時のためにと、一生懸命に考えた理由だが、話しているうちにしどろもどろになってきた。
「なっちゃんと、ふたりでは無理やろう、ねえ」
　遠い親戚の人たちに同意を求める良二のことを、ずるいと思った。
「何かあってからでは遅いんやぞ」
「別に、何もあらへん。この家出て行ったら、誰も住んでない空き家になってしまう」
「もしな、ゆりちゃん達がここに住まんのやったらな、おじちゃんの息子夫婦たちが代わりにここに住むこともできるで。その時はちゃあんと家を守るから、その心配はいらんよ」
　ゆりが顔を上げた時に、細い目をした男性と目が合った。
　この人、おばあちゃんの兄弟の――
　この人たちはこの家を何やと思ってるんや。おじいちゃんがここにいたら、絶対にそんなことはさせない。この家を愛し、近所の人たちとの関係を大事にして生きてきたおじいちゃんやおばあちゃんの十数年が、簡単に他人のものとすりかわってしまうように感じた。その上、細い目をした男性と良二が目を合わせて頷き合うのを見て、さらに怒りに震えた。
「あおば園みたいに住めるところは、神戸にもあるんやで。神戸がいいんやったら、そこに

行くか」

良二は笑っているようにも見えるが、そう言い終わった後の冷たい眼差しがこっちを向いている。ここは祖父や祖母と一緒に大切に守ってきた家だ。夏子にとっても近くに住む小中学生に英語を教え、その成長を見守り続けてきた場所のはずだ。ここに住むことが、なぜ許されないのか。ゆりは、良二の目をまっすぐに見た。

「どこにも行かん。絶対にここで住む」

良二の右手が、勢いよくゆりの襟元をつかんだ。

「こら、ええ加減にしろ！」

部屋中に響いた大きな声と、襟元をつかんでいる手から伝わってくる激しさに、怖いと思ったゆりは熱い蒸気をかけられたように頭の中がぐらりとした。

恐怖にいたたまれなくなってゆりは部屋を飛びだし、一気に階段を駆け降りた。玄関の下駄箱の上に置いていた、料理屋さんからのお釣りが目につき、それを握って外に出た。家から一番近い電話ボックスが見えると、慌てて震える手でドアを引っ張った。小銭を全部入れ、受話器を取った。数字のボタンを迷いなく押していく。神戸の家に戻ってから、もう暗記してしまうぐらい何回もその電話番号を心の中で繰り返してきた。

プルルル……プルルル――

心臓が迷っている。かけても良いのか、また迷惑にならないか。

「ハイ、真鍋です」

「……うっ、おばちゃん」

「……ゆりちゃんか？　どうしたんや？」

電話機の中でチャリン、と音がした。

「おじちゃんが……怒って」

足もとを見ると、スリッパのままだった。またチャリン、という音がする。

「……おばちゃんのところに行ってもいい？」

「今からか？　ええけど」

電話はそこで切れた。ゆりは、そのまま駅へ向かった。

電車に乗って2回乗り換える。神戸からでも2時間ほどはかかる。足取りは重かった。宝塚駅から歩く道中も、真鍋さんの困ったような顔が頭から離れない。でもさっきの良二のつり上がった目を思い出すと、皆が帰りそうな時間までは、恐ろしくてとても戻ることなどできない。

家が近づいてくると、庭先で花の手入れをしている真鍋さんの姿が見えた。ちらちらと通りを気にして見ていた真鍋さんは、ゆりを見つけるとすぐに手招きした。

「電話が切れてしもたから、心配しとったんや。電車賃はあったんやな」

そう言われた時に、千円札で切符を買ったお釣りの小銭でまた電話をかけ直すこともできたことに気がついた。

「うん、急に電話してしまって……」

「今日はおばあちゃんの納骨の日やろ。何かあったんか」
「奈良のおじちゃんが、神戸で住むって言ったら怒って……ここつかんで」
　ゆりは、自分の襟元を自分の手でつかんでみせた。他の親戚も見ている前でのことだったのだと改めて思い出すと、頭から背中まですーっと血の気が引き、目のあたりが熱くなった。
「えー、そんなことするか。まぁ、腹が立ったんやろうなぁ。それは怖かったな」
「そんなことされたことないし」
「そら、ないやろ。あんたのおじいちゃんもおばあちゃんも、そういう怒り方はせえへんかったからな。まぁ、入り。あんた、スリッパ履いてきたんか」
　真鍋さんの目が少し緩んだ。
「怖かってん。もう靴、取りに帰るんも」
　真鍋さんは台所にゆりを案内すると「これ食べ」と言って、お皿に並べて用意してあったおにぎりと漬物をすすめた。
「ご飯、食べてないんやろ」
　ゆりはその時にお昼の会席料理のことや、納骨の車の手配、お返しに持って帰ってもらう紙袋のことを思い出した。誰かがやってくれているのか。お母ちゃんはあの後どうしたのか。時計は１時をまわっている。
　せっかく朝から用意しておいたのに……と肩を落としたゆりに真鍋さんが優しく言った。
「これ食べたら、家に電話してみ」

　プルルル……プルルル――
　誰が出るのか、お母ちゃんか、それとも――
「はい、吉田です」
　亜紀おばちゃんの声、とゆりは思った。声が震える。
「私、ゆりです」
「ゆりちゃん、どこに行ってるの？　急に出ていって」
「あの……ちょっと、友達の家。夕方に帰るから。お母ちゃんは？」
「夏子？　納骨が終わって、今、皆でお昼を食べてるけど」
「お母ちゃんにも、そう言っといてくれへん？　あ、それと客間に、来てくれた人たちに持って帰ってもらうお返しの紙袋を置いてあるから」
　手落ちがないように準備をしたのに、これでは抜けたところばっかりやと沈んだ気分で受話器を置いた。
「これ、ゆりちゃんに渡そかどうするか、迷ってたんやけど」
　真鍋さんは、半分に折りたたんだメモを差し出した。中には電話番号が書かれている。市外局番から大阪のものだとわかった。
「お父さんのいるところ」
　えっ、と顔をあげたゆりと真剣な顔をした真鍋さんの目が合った。

「おばちゃんは、ゆりちゃんの為を思って色々とやってきた。おばあちゃんと仲良しで、ゆりちゃんが生まれた時からずっと知ってる。だから孫みたいなもんや。そやけど、奈良のおじちゃんたちは、おばちゃんがゆりちゃんになんやかんやしてあげることを、よく思ってないみたいや。おばちゃんちょっと疲れてしもた。一旦、手を離すわ。ゆりちゃん……ごめんな」

やっぱり、とゆりは思った。

「おばちゃんが謝らんでも……。うん、大丈夫。ありがとう」

ごめんな、ごめんな、と真鍋さんは繰り返した。ゆりは何度も首を振った。

「この番号に電話してみる」

奈良や大阪へと帰っていくお客さん達とちょうど入れ違いぐらいで会わなくて済むと思える時間は、4 時だった。長時間、夏子をひとりにしておくことも気がかりで、少し早目に出ることにした。真鍋さんは、タッパーに入れたおかずや野菜、娘の瞳さんが「ゆりちゃんに会った時にあげて」と言っていたというワンピースを、大きな紙袋につめて渡してくれた。ゆりが真鍋さんの家を出て曲がり角を曲がるまで、ずっと見ていてくれているのはわかったが、ゆりは振り返ることができなかった。

神戸まで戻る電車の中で、受け取ったメモの数字を何度も見つめては折り畳んだ。お父さんには今まで 1 回も会ったことがない……。

神戸の家に着き、玄関のドアをそぉっと開けた。隙間から靴を確認する。夏子の靴とつっかけ、ゆりの靴しかない。肩からみぞおち、腕が一気にゆるむのを感じた。玄関の上がり框（かまち）には料理屋さんに返すクリーム色の番重の中に、空っぽのお椀や魔法瓶などがきっちりと並んでいる。家の中は静まり返り、夏子の小さな声が奥の部屋からかすかに聞こえる。

あれからどんな話になったのか。何かしないとこのまま話が進んでいかない。ゆりはポケットから真鍋さんがくれたメモを取り出した。12 年間も会わずに過ごしていたお父さんに電話をいきなりかけるなんて、これまで考えもしなかった。本当は、そんなことになりたくなかった。もし会ったとして、お父さんだと思うことができるのかな。

勇気を出して、ゆりは受話器を取った。ひとつひとつ、数字のダイヤルを回していく。

最後の数字あとひとつというところで、3 回ほど受話器を置いてしまった。4 回目にまた最初からかけ直し、勢いで最後のダイヤルを回した。

プルルル……プルルル――

「はい」

「あの……吉田ゆりといいますが」

「ゆりか」

これまでゆりは、「お父さん」と誰かを呼ぶということがなかったため、「お父さんやで」

と言われた時も、何か違う世界の言葉を聞いているような気がした。お父さんは真鍋さんから事情を聞いたと言って、これまでの大方のことは知っていた。今は、再婚した奥さんとふたりで暮らしているとのことで、その奥さんも電話口まで出てきてゆりと少し話した。
「奈良のおじちゃんの電話番号を教えてくれ」
　ゆりが電話番号を伝えると「またかける」と言って、ガチャリと電話が切れた。
　1時間ほどして、電話が鳴った。お父さんは良二の家に電話をかけ、ゆりたちが神戸の家で暮らすことができるように話してくれたようだった。
「条件があるらしいぞ。念書を書いて渡す」
「ねんしょ？」
　そんな言葉は聞いたことがなかった。
「約束を証明する紙や。『もう世話にならん』と書いてハンコを押して渡すものや」
　頭や肩がわなわなとした不快感に震えた。良二おじちゃんがそんなことを言っているのか。世話にならん、それでいい。何があっても今後一切お世話にならない。世話になんかなるもんか。
「うん、それ書く」
　炎のような怒りの熱を背中に感じながらゆりは、祖母の書簡箋をたんすから引っ張り出し、筆を走らせた。

　木下　良二・亜紀　様
　今後何があっても、一切、お世話にはなりません。
　吉田　夏子・ゆり　1993年6月20日

（ふたりでは何もできんと思ってるんやろ。お母ちゃんとふたりでやってやる、見とけよ！
　将来、立派になって見返してやる！）
　怒りとやっとついた決着への潔さとが心の中でごちゃごちゃに混ざって、嬉しいやら怒っているやらわからないまま、折りたたんだ念書を封筒につっこんだ。

　6月末の金曜日。奈良の中学校に行き、クラスでお別れの挨拶をした。
「短い間でしたが……」
「ほんまに短いなぁ」
　担任だった沖谷先生が言うと、皆が笑った。クラス全体をぐるりと見渡すと、千紗や皆が笑顔でこっちを見ている。この学校に通ったのは3週間ほどだった。そんなに短い時間だったとは思えないほど、たくさんの思い出があるような気がした。
「私も神戸で頑張ります。みんなも元気で頑張ってください」

　その日の夕方、あおば園にも行き事務所で挨拶をした。

「お世話になりました」
「色々大変やと思うけど、元気でな」
　施設長さんも、もう戻って来いとは言わない。
「ゆり姉ちゃん、どこ行くん？」
　部屋の荷物を片付けだしたゆりに、小学生の子たちが集まってきて訊いた。
「うん、違うとこに行って暮らすことになったん。みんなも元気でね」
　愛にもひとこと言っておきたかったが、ゆりが荷物をまとめるために部屋に行くと、部屋にいた愛は何も言わずに出て行ってしまった。ゆりの机の上には以前、ゆりが貸した『魔女の宅急便』の本がきっちりと積まれている。その一番上の１巻のページからはみ出す、写真のようなものに目が留まった。引き抜いてみると、ゴールデンウィークにあおば園の皆で吉野川に行った時の写真だとわかった。女子全員で写る写真の中に、愛もゆりもいる。その裏に、文字が見えた。

　　がんばりや。まけるな！　あい

　部屋の外で、「愛、手伝ってぇ」と食堂のドアを開けて呼ぶ声がした。声のした方へ行くと、食堂横の畳で寝そべって雑誌を読んでいる愛の姿が見えた。ゆりは愛の横まで行き、写真を手に持って言った。
「愛ねえちゃん……これ」
　愛は、雑誌に目を落としたままだった。
「布団の中で、泣いてばっかりしやんときぃや」
「うん……お世話になりました」

　7 月の初旬、中学校の先生 2 人が家に訪ねてきた。そのうちの 1 人の先生が「5 組担任の小泉です」と名乗った。夏子と玄関で先生たちを出迎えたゆりは、準備物や手続きのことをできるだけ聞き漏らさないように、神経をとがらせていた。
（今までのこと、先生達はどこまで聞いてるんやろう）
　先生達は夏子に向かって話す。当たり前か、と思いながらゆりは、体操服やカバンなど準備するものをあれこれ考えていた。夏子もうつむき加減ではあるが、「はい、はい」と返事をしてくれている。
「さっそくやけど、この中の書類書いて、来週持ってきてもらえますか」
　小泉先生はそう言って大きな封筒から中身を取り出し、説明した。家庭調査票と書かれた紙や、制服屋さんのカタログなどが入っていた。ゆりは先生達が帰るとすぐに、家庭調査票を大人のものに見えそうな字で丁寧に書いた。そして夏子と一緒に制服屋さんへ行き、中学校の制服や体操服を注文した。夏子が店員さんと話すことはないが、ゆりだけで行くわけにもいかない。ひとりで行くと「お父さんかお母さんは？　一緒に来てね」と怪しまれたり、

話を通してもらえない。

あと 10 日ほどで夏休みという月曜日の朝、神戸の中学校で転入生として挨拶をすませると、同じ小学校だった友達がたくさん集まってきた。近隣の小学校 4 校から生徒が集まっている中学校だから知っている子は半分以下のはずだが、初日から「よっしー、久しぶり」と、気安くあだ名で呼んでくれる友達がいることにゆりは安心感を覚えた。

次の日の朝、夏子は朝から調子が悪そうだった。朝ごはんを食べずに「しんどい」と言っている夏子の相手をしている内に、学校が始まる時間になってしまった。
「しんどかったら、寝といてね。熱とか出てきたら、病院行ける？　それか、私が帰ってくるまで待っといてね」
そう言い残して、学校へと急いだ。1 時間目の授業は始まっていた。2 日目から遅刻かぁ、でも仕方ない。休み時間に小泉先生が遅刻の理由を聞きに来たため、「お母さんの調子が悪くて」とだけ伝えた。熱や咳が出るような病気なら、病院へ行って薬をもらう。体が元気でも、独り言を言っているだけで病院に行くのだろうか。それが病気なのかどうかがわからなかった。亜紀おばちゃんは病気だと言っていたけど、それ以上詳しいことは何も聞いていないし、よくわからないとゆりは思った。
土曜日の朝、ゆりが起きると、部屋の横にある廊下に面した押し入れの前で、がたがたと音がしていた。すりガラスの入った引き戸の向こうに、動く夏子の姿が見える。しばらく眺めてから引き戸を開けると、珍しく機敏に動く夏子の後ろ姿があった。廊下には、古そうなアルバムが散乱している。その横には、英語で書かれた手紙、今よりもぐんと若そうに見える夏子と外国の人が一緒に写っている写真が沢山あった。
「これ、お母ちゃんの若い時？　どこに行った時の？」
「……のよ」
「……え？」
「捨てるのよ」
「え、なんで……？」
ゆりが夏子の手許を見ると、同じ外国の女性と写った写真だけが 10 数枚握られていた。その中の 1 枚に、ピンク色の浴衣を着た 20 代ぐらいの夏子と、青くて大きな花模様の浴衣を着た外国人の女性が仲良さそうに写っているものがあった。写真の中からふたりの声が聞こえてきそうなほどよく笑っている、お洒落な女性たちという印象だった。今の夏子がこんな笑顔になることがかつてあったなんて。夏子が 20 代ぐらいということは、20 年前の 1970 年代のものか。
「なんで？　思い出の品と違うの？」
ゆりは泣きそうになった。
「仲良かった人と違うの？」

「Mary が写ってる写真は全部捨てる」
「……なんで？」
ゆりの見た夏子の目は鋭く勢いがあり、とても捨てるのを止められそうな感じではなかった。ゴミ箱の中は写真だけでなく、Mary からと思われる手紙でいっぱいになった。
なんで今頃……？
夏子はアルバムにあった写真や手紙をゴミ箱行きとそうでないものに分け終わると、1 階に勢いよく下りて行った。ゆりは、ゴミ箱の中に捨てられた写真を拾い、浴衣姿の写真だけは、こっそりと自分の机の引き出しにしまった。
2 階と 1 階を結ぶ階段は祖母がいた頃とは違い、日を増すごとにゆりの中学校のプリント、服などが雑然と積まれた物置になってきている。玄関の上がり框も、祖母がいた頃にはそこに腰かけてお客さんと話す場所だったが、今ではそこにゆりの中学校指定のカバンや教科書類が陣取っている。その奥の廊下の両側に物が散乱し、日が経つにつれ積み重なっていった。一度物を置く場所になってしまうと、下の方には何があったのかもわからなくなる。
ゆりは土曜日だからゆっくりできるけど、と考えながら朝ごはんを準備しようと 1 階へ下り、台所を覗いた。夏子の調子が日によって違うことがわかってきたが、少しでも独り言が聞こえない時間が長くあると、もう「そういうこと」はなくなったのではないかと大きな期待が膨らむ。しかし、忘れた頃に合わないタイミングで「エッ…違う違う」「ハイハイハイ……」などという声がゆりと夏子との会話をさえぎる。ゆりはそんな時、自分が無視されたように感じる。
「お母ちゃん！」
と言ってこちらに呼び戻すと、夏子は一瞬ハッとするが、ゆりとは視線が合わずまた誰かと話し始める。ゆりは、ハアーッ…と夏子にも聞こえるように大げさな溜息をつくが、もう夏子の心はゆりの姿が見えていないようにどこか遠くへ行ってしまっている。夏子の相手が自分より優先される存在であることが、ゆりを負けたような気にさせ、行き場を失ったその気持ちをどこにぶつければ良いのかがわからなくなった。

月曜日。毎日、朝に中学校のお弁当を作る余裕はない。だから、中学校に行く途中でパン屋さんに寄ってパンを 2 つと飲み物を買うことにした。時間がなくてパン屋さんに行けなかった時は、購買のパンを買う。自分と夏子の朝ごはんに食パンとバナナを用意し、お昼に夏子が食べられそうな焼きそばをテーブルに置いて、身支度を整え学校に出かける。
「お母ちゃん、お昼これ食べてね」
「……」
焼きそばは昨日夕方遅くに行った生協で、半額になっていたものだ。鍵をかける前に、一応「行ってきまーす」とひとりで言った。夏子のことは気になるけれど、勢いで外に出たらまた違うゆりの世界が待っている。

坂道を上ったところにある、どんぐりの木のふもとへと急ぐ。半分くらい坂を上り切ったところで、高く結んだポニーテールの髪を揺らしながら駆けてくる林さんの姿が見えて、ゆりは手を振った。学校に一緒に行こうと誘ってくれてから今日で3日目になる。ここから中学校までの15分ほどの道のりが、ゆりにとって中学生に着替えるための花道のようなものだ。一気に頬がゆるむ。

「お母ちゃんがなー、今日も何か歌、歌っとったわ…」

「へぇー、なあなあ、前の、ハハさんのあの歌、歌ってーやー」

「あねさんかぶり？」

「そぉそぉ」

ゆりは、オホン、と咳ばらいをひとつして歌いはじめた。

「〽あねさーんかーぶりーがーみーえなーいか　えんやーとぉ　まわーしーてぇー　ルルルーン　おーくれーよー　おーくれやっしゃー　おーくれやっしゃー　ぷっ…ふはっ、あーっはははは、お腹いたいー」

林さんは、笑いで体をくねくねさせて、「おーくれやっしゃー」の後に、「おーくれ」「おーくれ」と合いの手を入れる。

「はっはははは、ひー、ほんまにおもしろいな、ハハさん。今度、生で聴きたい」

「あーもう、涙出てきた」

「なぁゆりちゃん、今日、誕生日やろ」

そう言って林さんが、カバンの中から赤い包装紙に金色のリボンがついた包みを取り出した。

「わぁー、ありがと。13歳かぁ。開けてもいい？」

今日は私の誕生日か、家ではそんな会話しなかったとゆりは思った。包みを留めているシールは、昨年までは夏子ともよく寄った、駅前の雑貨屋ベルルのものだった。シールを外すと、中から水玉模様のタオルハンカチと、同じ模様のシャーペンが見えた。

「わぁ、ベルルで買ってくれたんやぁ。かわいい」

「うん、このごろ行ってへんって言っとったやろぉ。夏休みに一緒に行こ」

少しはにかんだような林さんの横顔が優しかった。

1学期の終業式の日。式を終えていつもより早目に帰ったゆりが玄関のドアを開けると、夏子の靴がなかった。

「お母ちゃん……？　あれ、買いものかな」

台所のドアを開けるが、誰もいない。ホワイトボードに目を移した時に、いつもは書かれていない文字がたくさん書いてあるのに気付いた。

ゆりちゃんへ

東京の靖国神社に行きました。すぐ帰ってきます。

「え、東京？　靖国神社って！」
　すぐに林さんに電話をかけた。林さんはそれを聞くと、家にいたお母さんに相談してくれた。
「うちの母さんが、夕方ぐらいまで待ってみぃって言っとぉ」
「うん、わかった。もし、帰って来んかったら？」
「帰って来んかったら……」
　受話器の向こうの林さんの後ろの方で、「泊まりに行ってあげぇ」という声が聞こえた。
　東京への行き方は知っているのだろうか。本当に行ってしまったのか。もし、事故にでもあったら？　心臓が落ちつかない。

　明日から夏休みという時期で日が長くなっている。6時ごろでもまだ明るい。ゆりは、暗くなってきてひとりだったら心細いなと思い、玄関の電気をつけに行った。台所に戻ると、電話が鳴った。ゆりはすぐに駆けていき、勢いよく受話器を取った。警察からだったらどうしようと一瞬、頭をよぎった。向こうからは聞いたことのない女性の声がする。
「ゆりちゃん？　私は東京に住んでいる、あなたのお母さんの友人です。今日は家に泊まってもらうから、心配しないで。明日、靖国神社に行ってから帰るそうよ」
「え……お母ちゃん、一緒にいてくれてるんですね。よかった」
「今日は疲れたみたいだから、もう寝てもらったけどね。学生時代のこと思い出して、懐かしいわ」
「あ、よろしくお願いします」
「ええ、神社も一緒に行くからね。心配しないで。あなたは大丈夫？」
「私は、友達が泊まりに来てくれるから大丈夫です」
「そう、じゃあ、何かあったら電話してね」
　ゆりは女性の言う電話番号をメモにひかえ、受話器を置いた。あぁ、よかったと思うと体中の力が抜けて、その場に座り込んでしまった。それにしても、夏子の原動力は何なのか。ゆりは何か、思い違いをしていたように感じた。東京まで行って友達に連絡をして、急に泊めてもらうことができるなんて。
　話がかみ合わなかったり、独り言を言って相手を困らせたりしていないのかな。電話の女性は優しそうな話し方だったから、病気のこともわかってくれているのかもしれない――
　しばらくぼーっとしていると、電話が鳴った。出ると、林さんだった。
「どうなったー？　父さんも泊まりに行っていいって言ってくれたから、行こか？」
「お母ちゃん、やっぱり東京に行ってたわ。さっきな、東京のお母ちゃんの友達から電話があった。明日帰ってくる」
「じゃあ、お風呂入ってから行くわー。お泊り会やなっ」

1 時間ぐらいして、旅行カバンを抱えた林さんが来てくれた。「母さんから」と言って手渡された紙袋には、温かいおにぎりとコロッケが入っていた。寝る前になっても話が尽きることはなく、あれこれ 2 人で盛り上がった。

「なぁなぁ、見てこのポスター」

林さんは、雑誌の付録についていた、ジャニーズのポスターを広げてみせた。

「うわっ、大きいなぁ。これ部屋に貼ったりするん？」

「もちろんやん、毎日見てたいからなぁ」

そう言ってうっとりしている林さんを見ながらゆりは、お母ちゃんのこともあるけど、こういう話をしているのが楽しくて、それが自分の周りにあることが嬉しいなと思った。

次の日の夕方、夏子は帰ってきた。

「お母ちゃーん、急に遠くにいったら心配するやん。神社、行けたん？」

「ごめんねぇ」

いつになく気分の良さそうな夏子を見て、ゆりも少し嬉しくなった。本当に無事に帰ってきてくれてよかった。

それからも朝起きて、まず耳をそばだてるのは変わらない。

ぼわーん、ぼそぼそ、ぼわーん……。

やっぱり、この声に反応してしまう。でも、以前と少し変わったことがある。それは、ちょっと面白い部分を見つけることができるようになったこと。お母ちゃんの歌う歌は面白い。急に大胆なことをするのも、見方によっては面白い。

ゆりは夏子の声に、少し明るいものを感じ始めていた。

※この物語は実際の体験と、それを探究する虚構の物語をもとにしています。

実在の人物及び団体のプライバシーに配慮し、作中では架空の名称をあてています。

第２回　「生体肝移植ドナーをめぐる物語」

一宮茂子

１　生体肝移植治療の成否を分かつもの――先行研究の検討からみた本研究の位置づけ

第２回目の連載では、先行研究について何が明らかにされ、何が明らかにされていないのかについて論考したうえで、本研究の分析モデルについて紹介いたします。

１-１　医学的枠組みからみた知見

生体ドナーは移植後も生涯にわたりドナーになった現実を生きていきます。医学的枠組からみた生体肝移植ドナーの先行研究は、移植施設となんらかのかかわりがある移植前後の期間の論考が多いと思います。

前回紹介しました生体腎移植は生体肝移植より 20 年以上も前におこなわれていました。そのため生体腎移植をめぐるドナーやレシピエント、家族の精神医学的側面の諸問題からえた知見は、生体肝移植をめぐる患者・家族の治療やケアにおおいに参考になりました。具体的には、生体腎移植ドナー決定をめぐる近親家族の精神医学的・心理的・倫理的・社会問題と対処方法［春木 1997; 2003; 2008］、小児・青年期の生体腎移植の精神医学的問題の実態［佐藤ほか 1990］、移植が成功しても移植後にうつ状態となる逆説的精神症状［福西 1998］、ドナー決定をめぐる家族内力動［成田 1998; 春木 2008］、生体腎移植ドナーとなった母親の経験［長 2001］などです。しかし、これらの先行研究は移植前から移植後数年以内の期間までを対象としている論考が多いことから、その後を生きている腎移植ドナーの生の営みの詳細は明らかとはいえませんでした。

肝移植と腎移植の決定的な違いは、腎移植は移植した腎臓が生着しなくても（移植が失敗しても）人工透析療法という代替療法がありますが[注1]、肝移植には代替療法がなく、現代の医学では再移植しか生きる選択肢がないことです。

日本で生体肝移植がおこなわれてすでに 29 年になります。欧米では脳死肝移植が主流ですが、日本では脳死問題の回避手段として生体肝移植がおこなわれてきました。当時の日本の主要施設の肝臓の移植医たちの専門知や技術、能力は世界トップレベルにあり医学的な知見は豊富に蓄積されていました。しかしながら、ドナー、レシピエント、家族の心理面、倫理面、社会面などの詳細は明らかではなく、関心も低かったと思います。そうしたなかで臨床現場では生体肝移植にかんする医学的枠組から見た研究が多くなされてきました。

具体的には、ドナーやレシピエント、医療スタッフを精神・心理的側面からサポートするリエゾンコンサルテーションサービスの必要性［佐藤ほか 1996］、ドナーの倫理的問題［菅原 2003; 赤林 2006］、患者・家族の当事者同士の支援の意義［柊中 2004］、ドナーのメン

[注1] 透析療法には、血液を体の外部にある「ダイアライザー」と呼ばれる透析器へ導き、浄化された血液を体にもどす「血液透析」と、患者自身の体内の腹膜を透析膜として利用する「腹膜透析」がある。

タルケアを含めたクリニカルパス[注2]［一宮・平井 2003］、ドナーの同意のあり方［藤田・赤林 2006］、ドナーおよび家族の意思決定過程［戈木 2002a; 2002b; 赤林 2006; 一宮 2006; 渡邊 2007］、ドナーの精神医学的問題［野間ほか 2005］、ドナーの自己決定権［中山 2009］などがあります。以上の論考は、移植手術前と移植後数年以内の期間の研究であり、移植後 10 年以上経過した期間については明らかにされていません。

日本肝移植研究会による日本の生体肝移植ドナーに関するアンケート調査報告では、ドナーの 12.4%に何らかの合併症があることが明らかになり、その後に日本初のドナー死亡例が報告され、ドナーにたいする関心が高まりました［梅下・門田 2004］。

そのため同研究会内にドナー調査委員会を設置し、2003 年 12 月末までに日本の施設でおこなわれた生体肝移植の全ドナー2,667 名を対象とした郵送による質問紙調査が 2004 年に初めておこなわれたのです。目的はドナーの健康状態や心理状態などについて手術前後から調査時点までの状況を総合的に明らかにすることと、それらの結果をもとに移植医療の質を向上させることでした。調査内容は術後の回復状況、健康管理状況、当時のインフォームド・コンセント（以下ＩＣと略）にかんする受け止め方やドナー決定までの経験や感情、家族関係などです。その結果は 2005 年 3 月の調査報告書として Web 上で読むことができます［日本肝移植研究会ドナー調査委員会 2005］。その結果、移植後の健康状態の配慮や費用などの経済面、家族やレシピエントとの関係性の変容について、これまでほとんど考慮されてこなかったことが明らかになりました。

そして以下の七つの提言がおこなわれました。それは、(1)ドナーの意思決定に他診療科との連携、(2)術後経過がよくないレシピエントのケアのあり方、(3)術後の健康管理としての退院時の指導改善、(4)ドナー外来ネットワーク（仮称）の構築、(5)ドナー健康手帳（仮称）の開発、(6)ドナー登録制度の拡充、(7)その他の社会的・法的問題などです。

これらの提言は画期的ですが、法律のような強制力はまったくありません。この調査以来 13 年以上が経過した現在、その後の実態調査や、8000 人以上を超える全ドナーを対象とした大規模調査はおこなわれていません。1989 年に生体肝移植が始まって今年で 29 年が経過した現在、その後のドナーの生の営み状況の詳細を知りたいところです。

一宮［2006］は、本研究の原点となったドナー研究について以下のように修士論文で報告しています。論文の主旨は、生体肝移植ドナーをめぐる問題について、ドナー当事者の語りをもとに移植前から移植後を経た調査時点までの期間をドナーの視点から分析したものです。

調査期間は 2005 年 7 月から 3 ヶ月間でした。対象者は Y 病院でドナー手術を受け、術後 1 年以上経過したドナー6 名です。質問内容は臨床経験で一宮自身が疑問に感じていた以下の 5 つです。それは、(1)移植医療を受ける決断の経緯とその時の感情、(2) ＩＣの理解度、(3)もっとも苦痛であったこと、(4)家族支援の状況、(5)日常生活の変化です。すべてのインタビューは一宮がおこないました。分析方法は、Glaser and Strauss［1997 (=1996)］

[注2] クリニカルパスとは、縦軸に安静度、食事、検査、治療、ケア、指導内容などを示し、横軸に入院日から退院日までの時間軸をとりその交点に具体的な内容を記入したスケジュール表のことである。これをドナー用と看護師用の二部作成し、一部はドナーに手渡して入院中の予定を提示し、もう一部は看護師用のチェックリストとして上記と同内容にくわえてドナーの言動や表情などから不安や苦悩などの観察項目を追加して心理的ケアの有無の判断材料とし、退院後の社会復帰にむけての指導も含めて使用していた。

のグラウンデッド・セオリー・アプローチ（Grounded Theory Approach 以下、GTA と略）を応用して、まず 1 事例ごとにデータ産出と分析をおこない継続的比較分析を続けます。第 2 レベルでは面接と分析を継続して要素のソーティングによるカテゴリーを形成します。第 3 レベルではカテゴリー間の関係を検討し理論的飽和がえられるまで続ける予定で取り組みました。この時点での対象者は研究期間の時間的制約のため 6 事例でした。

その結果、収集データから 5 個のカテゴリーと 10 個のサブカテゴリーがえられました。カテゴリーは、「ドナー決断の意思決定過程」、「移植をめぐる家族間の変動」、「医療・医療者への期待と不信感」、「生体肝移植の長所と短所」、「自己納得の過程」となりました。具体的な内容は以下のとおりです。

(1)ドナー決断の意志決定過程は、ほかに選択肢がないなかで究極の治療として、生きるか死ぬか賭けの心境で、家族は移植を選択していました。ドナー決定は家族の重大な問題として浮上し、余儀なくドナーになった人はその過程で苦悩していました。(2) ドナーとレシピエントが同一家族とは限らず、複数の家族が移植をめぐって関係性が変動していました。その家族関係は、移植前から何らかの問題が存在していた事例では、ドナー決定をめぐって家族の情緒的な絆や潜在能力などの強化・弱化が強調されて顕在化していました。移植をめぐる家族問題は、地元病院での治療時点から発生しＹ病院の退院後から、さらに調査時点まで数年にわたって影響をおよぼしていました。(3)家族は医療・医療者に高い期待感をいだいて移植に賭けていただけに、レシピエントが死亡したドナーは医療・医療者にたいして不信感をいだく結果となっていたのです。その不信感は主にコミュニケーション不全に起因し、すべてのカテゴリーに関係して影響を及ぼしていました。(4)移植後の効果は、社会復帰とレシピエントの救命と元の生活ができる喜びであり、事業主、同僚などの周囲の支援であり、移植後の不安を抱えながらも現時点のことを考えて前向きに生きるという人生観の変化などでした。移植後の問題は、ドナーの術後合併症やレシピエントの術後経過不良や死亡による苦悩などの精神的苦痛や医療費にともなう経済的負担などがありました。(5)自己納得の過程は、移植前から調査時点まで数年以上にわたってすべてのカテゴリーに影響をおよぼしていたのです。そしてこれらの 5 個のカテゴリーは複雑に絡んで結節し相互作用を及ぼす結果となっていました。

このような生体肝移植治療は、まさに家族の問題として大きくクローズアップされ、家族抜きでは考えられない医療でした。患者・家族は移植情報をえた時点から、誰がドナーになるのか、その決断に際して相談窓口はなく、家族間で解決する過程で家族ダイナミズムが生じ、家族問題が表面化する糸口となっていました。主にコミュニケーション不全から生じた医療・医療者にたいする不信感は、移植前から調査時点まで見られました。特にレシピエントが死亡したドナーは、調査時点まで数年以上にわたる不信感をいだいていたことから、退院後のドナーや家族にたいするきめ細やかな対応が必要であることがわかりました。生体肝移植は、ドナーとレシピエントの家族を巻き込み、家族間に潜在化していた問題をより複雑にして、医学的諸問題、倫理的問題、社会的問題を浮き彫りする医療であることがわかりました。そのため患者・家族にたいする精神的なケアが重要であり、移植コーディネーター、リエゾン精神科医、ソーシャルワーカーなど、多職種のサポートが必要とされていたのです。現実はそのようなサポートがなされておらず、とくに移植コーディネーターは膨大な業務を少人数で対応しているため更なる手厚い人的支援を要望したいと思います。Ｙ病院では

移植コーディネーターが上記のようなケアや相談の対応にあたっていますが、移植医療関係者や移植施設自体を問題視しているドナーには、移植患者家族団体など外部の中立的な立場の人たちに相談することを勧めます。

1-2　社会学的視点からみた家族愛

1989 年に国内初の生体肝移植がおこなわれて以来［永末 1990］、移植医療関係者の医学・薬学分野の論文は枚挙にいとまがありません。一方、社会学分野の論文は生体肝移植によって生じる家族内の問題を当初から指摘していました。それは臓器提供による家族関係の歪みの顕在化、家族関係の悪化、問題解決や支援や援助の仕組みの欠如［西河内 1991］、家族制度に依拠した「愛」の強制による家族崩壊の危機［岩生 1991］、家族愛の名のもとでドナーを引き受ける自発性の圧力 ［細田 2003; 武藤 2003］などです。

社会学分野のこれらの指摘は重要であり、生体腎移植でもドナーをめぐって否応なく家族を捲き込む「家族ダイナミクス(注3)」を早くから指摘していました［成田 1998］。このことから肝臓に限らず生体移植ならばどの臓器であったとしても家族問題が生じていたことになります。この現実に、移植医療関係者は、ドナーは家族が決めることとして一線を引き［春木 2008: 301］、また看護師である私自身も医療者が不用意に関与できる立場にあるとも思えず、さらに厚生労働省も 2007 年に生体移植は脳死移植のような社会的な行為ではなく、やむをえない場合の例外と規定しています(注4)。このことからも社会学分野の先行研究が指摘している家族内の問題は、たとえ生体移植が起因で生じたとしても、今のところは家族規範による責任として家族内で自己完結しうる以外に方法がないことを示唆しています。

法学分野の論文では、生体肝移植の普及は臓器移植を家族間の私的な問題とみなす傾向を生じさせ、移植医療が広く社会問題であることの認識を遠ざける危惧を指摘しています［青野 1999］。また、宗教学分野の論文では、人は自発的に隣人や社会のために自己を犠牲にする隣人愛を実行できるものであり、臓器提供は愛の行為である、と論じているものもあります［東方 2003］。

しかし、私が移植医療現場で経験してきたことは、「愛」で一括りにしてドナーを引き受けるほど単純な話ではなく、事態はもっと複雑で錯綜していました。たとえば家族や親族がドナーを拒否したため、移植をすれば助かる治療法がありながらレシピエントの自然死を選択せざるを得なかった、あるいは考慮した事例もありました。またドナーをめぐって家族・親族間葛藤を引き起こした結果、万が一の責任を考えると家族以外の他者にドナーは依頼し辛いという家族規範から、たとえ持病があっても近親家族が余儀なくドナーを引き受けていた事例もあります［一宮 2011］。現在のように年齢を問わず医療費が保険適応になったのは 2004 年です［長谷川 2008］。それまでは 1000 万円の高額医療費の準備のため不動産の売却や、親族からの借金で長年にわたる負い目などの事例もあります［一宮 2011］。

ドナーは、ドナー役割を果たせばそれで終わりになるわけではありません。その後のドナーやノン・ドナーも移植をめぐって起きた問題を抱えながら生きていかなければならない

(注3) 家族ダイナミクスとは、ドナーの一個人のレベルを超えて家族全員をいやでも移植の問題に巻き込む性質をもつ家族間の精神力動のことである［春木 2008: 161］。

(注4) 厚生労働省，「臓器の移植に関する法律」の運用に関する指針（ガイドライン）（http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/zouki_ishoku/dl/hourei_01.pdf，2018.8.20 確認）.

現実があります。上記の先行研究は、その後のドナーの生の営みにどのような影響をおよぼしたのかについては論じていません。私は移植後 1 年以上から 10 年以上経過したドナーも対象に含めてこの点を明らかにするつもりです。

1－3　先行研究からみた本研究の分析モデル――ドナーの意味付与の要因連関図

ここでは本研究で用いる分析モデル（ドナーの意味付与の要因連関図）を提示して説明します（図 1）。この分析モデルは以下のようにして作成しました。まずドナーの意味づけにかんする要因を先行研究と私自身の臨床経験およびパイロットスタディーから抽出しました。さらに全対象ドナーの語りを徹底的に機能分析し、カテゴリー化した要因群の相互関係を図に示したものです。

本研究はドナーの入院から退院までのメンタルケアをふくめたクリニカルパスによる効果［一宮・平井 2003］、ドナーからみた生体肝移植治療のプロセスについて、家族・医療者との相互作用過程の分析［一宮 2006］、この二つの研究が礎となっています。さらにドナー家族のケアの事例分析［一宮 2009］、記述研究としてドナーの意思決定過程［一宮 2010］、ドナーからみた生体肝移植後の家族変容［一宮 2011］、ドナーのＩＣの受けとめかたなどがあります［一宮 2012］。

本研究の分析にはドナーの移植前から終末期にいたる時間経過とともに異なる要因が存在し、その要因に関与する関与者も異なっていることから、分析モデルは時間と要因と関与者の三つが相互に影響をもたらしていると考えました。

そこで、まず時間をある一定期間に区切り、ドナーの経験的世界の語りを時間軸にそって“移植前”、“移植後”、“移植後 1 年以上から終末期”の 3 つの期間に分類しました。以下、その期間ごとにドナーの意味付与の要因を列挙するとともにその要因の関与者を提示し矢印で相互関係を示します。図の時間軸の矢印は時間の流れる方向と時間の経過をあらわしています。

ここで用いる【　　】内の強調文字は分析モデルに提示している要因であり、《　　》内の強調文字は関与者です。また関与者は、専門職と非専門職に分けられることから図の上部に専門職、下部に非専門職を配置しました。

専門職は、地元病院、診療所の医師（以下、地元医師と略すが、ドナーの語りには診療所の医師も登場するため必要に応じて診療所医師とも記す）、移植施設である Y 病院医師（おもに移植医であるため移植医と記すが、ドナーの語りには内科医も登場するため必要に応じて内科医とも記す）、移植コーディネーター、看護師です。

非専門職はドナー、レシピエント、家族、親族、事業主、職場の人たち、移植体験患者・家族、知人、近隣地域住民、宗教者、国と地方自治体、NPO 移植患者家族団体（以下、NPO と略）(注5) です。そして、前者は図の上部に、後者は図の下部に配置して要因との関連を矢印で示しています。

つぎに分析モデル（図 1）を挿入し、3 つの時間軸に沿ってその説明をいたします。

(注5) NPO 移植患者家族団体とは、臓器移植者、臓器移植希望者とその家族による臓器移植推進の社会貢献活動と、移植術前、移植術後のサポート、移植にまつわる悩みの相談をおこなう非営利団体である。

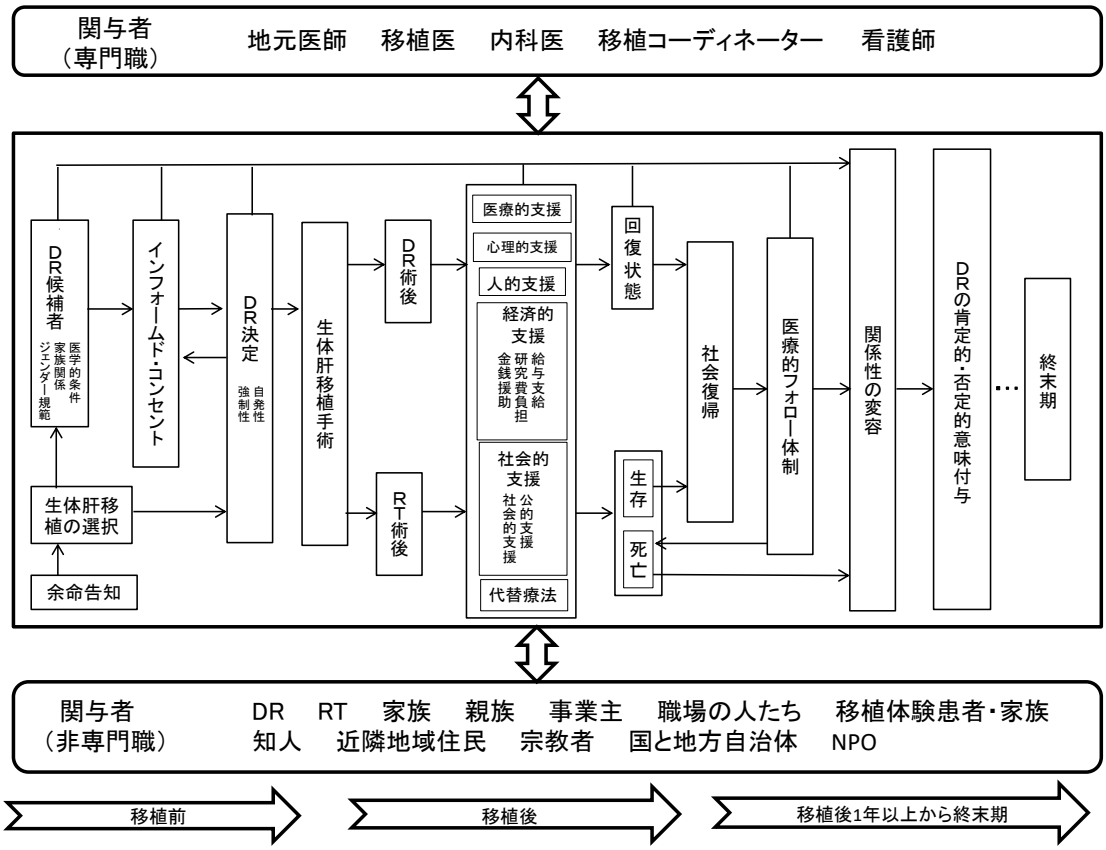


図１　分析モデル（ドナーの意味付与の要因連関図）

（ＲＴ＝レシピエント　ＤＲ＝ドナー　Ｃｏ＝移植コーディネーター　地元医師＝地元の病院や診療所の医師
移植医＝Ｙ病院の医師　内科医＝Ｙ病院の医師　NPO＝NPO 移植患者家族団体）

１-３-１　移植前の要因と関与者

多くの患者は肝不全状態であって余命１年以内の**【余命告知】**を受けています。ただし、先天性胆道閉鎖症などのように胆汁の流れがよくなる手術を受けて病状が改善したものの移植にいたるまでに数年以上の間隔がある場合もあります。患者の治療が限界となったとき最後の治療手段として移植の話が登場します。なぜならば肝不全患者には腎不全患者のように人工透析療法という代替療法がなく、移植をしなければ死ぬしかないためです。そのため原則として従来の治療法では余命 1 年以内が肝移植の適応基準となります［日本移植学会 2017］。

この移植には死体（脳死・心停止）移植と生体移植があります。しかし患者の余命期間を考えると、死体移植である脳死肝移植は待機期間も順番も不明確であり、なによりもそれまで患者の命がもつかどうかもわかりません。また死体移植である心停止肝移植は、肝臓の細胞がダメージを受けて生存率が悪いなどの医学的理由でほとんどおこなわれていません［田村ほか 2009］。したがって多くの場合は生体移植を選択せざるを得ない状況となりま

す。このような情報は多くの場合、これまで治療を受けてきた地元の病院や診療所の医師（以下、**《地元医師》**と略すが、必要時は**《診療所医師》**とも記す）から提供されます。もちろん患者は死を選ぶ権利があります。しかしながら多くの**《家族》**は救命可能な治療法として移植治療の情報を知り得たからには無視できず、後悔したくないという思いと、患者にも生きたいという思いがゼロではなく、また家族が患者の思いを察知して**【生体肝移植の選択】**となることが知られています［一宮 2006; 2010; 2011; 2012］。

この生体肝移植には生体ドナーが必須となります。そのため最初に移植情報を提供した医師である地元医師あるいは診療所医師が、同時に生体ドナーの必要性と医学的な適応条件（年齢、血液型、体格、健康状態など）を説明されることが多いのです。あるいは患者・家族が**《移植体験患者・家族》**、**《近隣地域住民》**、**《知人》**から移植情報をえるばかりではなく Web 情報や移植体験患者の本、医学文献などで確認する場合もあります。とくに移植が成功した患者との出会いは、生体肝移植治療の決断と同時にドナー決断の動機にもなることがあります。また家族が**《NPO 移植患者家族団体（以下、NPO と略）》**に相談する場合もあります。このようにして近親家族内に移植の話がもちこまれます。さらに移植治療情報の詳細を求めて家族が直接 Y 病院の**《移植コーディネーター》**に連絡する場合もあります。

家族のなかには生体肝移植の選択と同時にその場で**《ドナー》**の意思表示をする場合もありますが、その動機は様々です。また**【ドナー候補者】**が複数いたとしても同じような位置づけで並列的に並んでいるわけではありません。そこには「医学的条件」、「家族関係」、「ジェンダー規範[注6]」などによって決まっていきます。そしてドナーは移植施設で正式な説明を受けるまでに近親家族内でおおむね決められていることが多いのです。正式な**【ドナー決定】**は Y 病院の**《移植医》**による**【インフォームド・コンセント】**の最終意思確認で同意書（依頼書）[注7]に署名した時点となります。

この決定までの期間に家族や**《親族》**はドナー決定をめぐって否応なく移植問題にまきこまれ患者、家族、親族関係になんらかの影響をおよぼすことが多いのです。また地元医師の情報提供、あるいは移植医のＩＣによって医学的適応条件を説明すること自体が、逆に近親家族間で暗黙裏にドナーが決まってしまうという圧力になる場合もあります。さらに、ＩＣにおける移植医の説明が患者、家族に過度な救命の期待感をいだかせ、患者、家族自身がこうした移植を Y 病院で受けられるという“選ばれた感”をもつ場合もあり、ますます期待が高まることもあります。この期待感が裏切られた（移植が失敗した）場合、それまでに携わった人たちの関係性にさまざまな影響が生じます。

就業中のドナー候補者は、術後数ヶ月は休養を必要とすることから休職、復職、退職などのため**《事業主》**との関係性がドナー決定に影響を及ぼします。またドナー手術は大手術であるため、たとえ健康体であっても数ヶ月の休養が必要です。その期間の休暇取得や給与保

[注6] 江原［2001］によると「ジェンダー秩序」とは、「性別分業」と「異性愛」のパターンがあり、「性別分業」とは、「男」は「活動の主体」であり、「女」は「他者の活動を手助けする存在」と位置づけている。また「異性愛」とは、「性的欲望の主体」を「男」という性別カテゴリーに、「性的欲望の対象」を「女」という性別カテゴリーに結びつけ、両性間の非対象的な力が重要な構造特性をもつと述べている［江原 2001:130-143］。この知見を参考に「ジェンダー規範」とは、「ジェンダー秩序」を維持するための行動や判断の基準をジェンダー規範と定義する。しかし、ジェンダー規範は男性にかんしては男らしさ、勇気、自己犠牲をする方向に働き、女性の場合は従属、強制に働くが、両者とも逆に働く場合がある。

[注7] 「同意書」は患者が医師に治療を依頼するというスタイルで「依頼書」ともいわれている。

障も生活上必要となります。ドナー決定にはこのように事業主の協力が必要となります。

こうして生体肝移植手術の移植前までの時間軸上における余命告知、生体肝移植の選択、ドナー候補者、ＩＣ、ドナー決定の 5 つの要因は、ドナーの意思決定過程として重要な意味づけをもたらします。また、その期間の関与者は、専門職の地元医師、移植医、移植コーディネーターであり、非専門職はドナー、**《レシピエント》**、家族、親族、事業主、移植体験患者・家族、近隣地域住民、知人、NPO があげられます。そして前述の要因を媒介にして相互作用を及ぼし、良きにつけ悪しきにつけ関与者との関係性に変容をもたらすのです。

１-３-２　移植後の要因と関与者

【生体肝移植手術】はドナーとレシピエントの 2 人がほぼ同時に手術室に入り移植術を受けるという特殊な医療です。本書で紹介する移植後の時間軸とはドナーとレシピエントの移植術後から社会復帰以前までの期間です。

ドナーは健康体であっても、一時期は患者として入院します。**【ドナー術後】**のドナーの**【回復状態】**は、もともと健康体であるため早いとされていますが、人体でもっとも大きな臓器である肝臓の一部を摘出するため、手術侵襲は大きく術後の一定期間は安静と休養が必要となります。こうしたことを見越してある一定期間の有給休暇の使用、あるいは休職や退職をするドナーもいます。ドナー術後の回復状態は、順調に経過すれば約 2 週間で退院となりますが、退院すればすぐに日常生活に戻れるわけではありません。胆汁漏れ、胃の通過障害などの術後合併症によって入院期間が延長し、さらには退院後も年月を要する継続治療が必要となり、再手術を必要とする場合もあります。本来はドナーが社会復帰するまでの期間は術後の療養生活が必要であるため、家族や親族がその支援を行う場合もあります。また退院後のドナーが近隣のホテルに在住しつつレシピエントに付添うこともあります。

一方、**【レシピエント術後】**は ICU（集中治療室）入室となり、移植された肝臓の状態や全身状態を数日間管理したあとは一般病棟に収容されます。レシピエントは移植した肝臓の拒絶反応をおさえるために免疫抑制剤を内服しますが、術後 1 ヶ月から 2 ヶ月で免疫抑制剤の微調節により肝機能が安定し体力が回復すれば退院となります。レシピエントは術後 1 年を経過すれば死亡率は非常に低くなることから［猪俣 1996］、レシピエントの病状が落ち着く目途は 1 年と予測されています。その期間に移植治療が成功して**【生存】**しているレシピエントもいれば、拒絶反応や感染症などの合併症で病状が悪化し、残念ながら**【死亡】**するレシピエントもいます。ドナーは自らの利益となる手術ではなく、レシピエントを助けるための命がけの手術であるため、移植後のレシピエントの生存または死亡、術後の回復状態の要因を媒介にして患者・家族と医療関係者との関係性に変容が生じる場合があります。

移植後のドナーとレシピエントの入院生活を支えるために、家族や親族による付添生活が必要となる場合もあり、家庭に残された子どもたちの日常生活の支援も必要となります。移植治療は入院生活、付添生活、家庭生活といったぐあいに生活の場が同時期に複数となることから、その生活を維持するための**【人的支援】**、高額の医療費や付添の食費、滞在費、交通費などの生活支援のために金銭支援や入院期間および休養期間中の給与の保障といった**【経済的支援】**が必要となります。事業主の就業規則にもとづく休暇取得や賃金保障とい

った社会的支援と医療費助成の公的支援をふくめた**【社会的支援】**も必要です。そしてなによりも重要な支援は移植の成否が不確実な現況にあって移植術を受けたドナーとレシピエントの心の支えとなる**【心理的支援】**です。移植にまつわるさまざまな問題によってこれらの支援を受けたとしても癒されないドナーもいます。とくにレシピエントが急変して死亡した場合は、ドナーや家族にとって辛く、切なく、苦しい思いでいっぱいになります。なかでも移植医による死因や死亡過程の説明に納得できず疑念や不信感を長年にわたりいだき続けた事例では、心の拠り所を宗教者や巡礼などの宗教的行為による**【代替療法】**に求めることもあります。

こうして生体肝移植手術の移植後の時間軸上の要因であるドナー術後、レシピエント術後、回復状態、レシピエントの生存、レシピエントの死亡、心理的支援、人的支援、経済的支援、社会的支援、代替療法はドナーの意味付与に重要な要因となります。なかでももっとも影響が大きい要因はレシピエントの生存または死亡です。

移植後の時間軸の関与者は、専門職の移植医、内科医、**《看護師》**、移植コーディネーターと非専門職のドナー、レシピエント、家族、親族、事業主、**《国と地方自治体》**、近隣地域住民、NPO、**《宗教者》**、**《職場の人》**です。そして、前述の要因を媒介にして関与者間に相互作用を及ぼし、良きにつけ悪しきにつけ関与者との関係性に何らかの変容が生じるのです。

１-３-３　移植後１年以上から終末期までの要因と関与者

移植後 1 年以上から終末期までの時間軸上では、ドナーとレシピエントの社会復帰後から終末期までの期間をさしています。社会復帰までの期間は個人差があるため明確な区切りはできず、この期間に含めています。

本論文では終末期となったドナー対象者は含まれていませんが、ドナーの肯定的・否定的意味付与は、**【終末期】**まで追跡しないと最終的な結論はえられないという意味で、「･･･」のあとに終末期という要因を配置しています。この期間の要因は**【社会復帰】**、**【医療的フォロー体制】**、**【関係性の変容】**、終末期の 5 つです。回復状態が順調で移植前の職場に復職するドナーもいる一方で、合併症で入院期間が延長して退職するドナーもいます。どちらにしても主婦業もふくめて職に就いているドナーやレシピエントは社会復帰にむけて休職、退職、復職という素因がここには存在しているのです。なによりもレシピエントの社会復帰はドナーの期待に応えた結果となり従来の医療の目標を果たしたことになります。

ドナーもレシピエントも生涯にわたる医療的フォロー体制が重要です。ドナーは術後合併症の併発や移植前より持病がある人はもちろんのこと、健康体であったとしても健康診断のような定期的な受診が必要です。居住地が遠方であるとか、レシピエントの死亡後に Y 病院と縁が切れる場合がありますが、地元病院や職場の健康診断などでなんらかの医療的フォローを受けることが今後の健康管理として重要です。

一方、レシピエントは移植肝臓の拒絶反応を抑えるために原則として生涯にわたる免疫抑制療法が必要です。この療法によって免疫力が低下すると感染症にかかりやすくなります。そこで拒絶反応を抑えつつ感染症を防止するという二律背反性のもとに免疫抑制剤の微調整が必要になるわけです。さらに薬の副作用や体調管理の必要性から、レシピエントは

原則として生涯にわたる定期的な通院検査が必要となります。一方、移植後年月をへたレシピエントが再度肝不全状態となれば再移植が必要となりますが、次々と家族を傷つけて移植することを拒否するレシピエントもいます。その場合、レシピエントは終末期となり死にいたります。

移植後のレシピエントが終末期を迎えたときの医療的フォロー体制の実際はどうなのでしょうか。生体肝移植の症例数が 8000 事例をはるかに超えた現在は、移植施設と地元病院が連携しているとされ、レシピエントは地元病院で治療を受けることになっています。しかしその実態は明らかではありません。移植医療関係者は、生体肝移植はポピュラーになり地元病院でも術後の対応は可能とみなしていますが、ドナーやレシピエントのなかにはそのような実感をもてない人もいます。このようなことから、医療的フォロー体制がドナーの意味付与に影響をおよぼすと思われます。

移植後 1 年以上から終末期までの時間軸の関与者は、専門職の地元医師、移植医、**《内科医》**、移植コーディネーターと、非専門職のドナー、レシピエント、家族、親族、事業主、国と地方自治体、近隣地域住民、NPO、宗教者、職場の人たちです。そして、前述の要因を媒介にして関与者間に相互作用を及ぼし、良きにつけ悪しきにつけその後の関係性に変容が生じるのです。そして関与者との関係性の変容は、これまで述べてきたドナーの意味付与の要因連関図のすべての要因が、関係性の変容に帰結することになります。

ドナーは生体肝移植ドナーという出来事を経験したとしても、それは長い人生のなかでほんの一時点にすぎない出来事であったはずです。しかしながらその出来事がドナーにおよぼした影響は肯定的、否定的を問わず、関与者になんらかの関係性の変容をもたらすことになります。その後のドナーはその関係性のなかでその後の人生を生きていかねばならず、移植後 1 年以上から終末期の時間軸上において、前述の関与者との関係性の変容という要因が**【ドナーの肯定的・否定的意味付与】**に大きな影響をおよぼすと考えられます。

これまで述べてきた要因を移植前、移植後、移植後 1 年以上から終末期という時間軸上に、ドナーの意味付与に影響をおよぼす要因を図に示したのが、本研究の分析モデル（生体肝移植ドナーの意味付与の要因連関図）です（図 1）。この要因連関図は、見てのとおりすべての要因が関連しあい、関与者間に相互作用をおよぼしています。以下この図をもとに、移植前、移植後、移植後 1 年以上から終末期の時間軸にそって、これらの結節を解きほぐして事例を分析していきます。

次回の連載では研究方法と倫理的配慮について述べます。

２　文　献

赤林朗，2006，『生体肝移植の心理・社会的、倫理的側面についての研究』2003-2005 年度科学研究費補助金研究成果報告書，東京大学.

青野透，1999，「『任意』の臓器提供――再移植をめぐって」『法学セミナー』536: 48.

長佳代，2001，「生体腎移植を受けた子どもの母親の体験」『日本小児看護学会誌』10(2): 1-8.

江原由美子，2001，『ジェンダー秩序』勁草書房.

藤田みさお・赤林朗，2006，「成人間生体肝移植における三つの自発的同意のありかた――ドナーを対象としたインタビューから」，心療内科 10(3): 207-211.

福西勇夫，1998，「臓器移植精神医学に関する研究」『精神医学』40(12): 1343-1347.

Glaser. B. G. and Strauss. A. L., 1997, *The discovery of grounded theory: Strategies for qualitative research*, Chicago: Aldine publishing Company. （=1996，後藤隆・大出春江・水野節夫訳『データ対話型理論の発見――調査からいかに理論をうみだすか』新曜社．）

春木繁一，1997，『透析か移植か――生体腎移植の精神医学的問題』日本メディカルセンター.

春木繁一，2003，『腎移植をめぐる母と子，父――精神科医が語る生体腎移植の家族』日本医学館.

春木繁一，2008，『腎移植をめぐる兄弟姉妹　精神科医が語る生体腎移植の家族』日本医学館.

長谷川唯，2008，「日本における移植コーディネーターの成立」立命館大学大学院先端総合学術研究科 2007 年度博士予備論文.

細田満和子，2003，「生体肝移植医療――不確実性と家族愛による擬制」『家族社会学研究』14(2): 148-156.

一宮茂子，2006，「ドナーからみた生体肝移植――グラウンデッド・セオリー・アプローチによる家族・医療者との相互作用過程の分析」立命館大学大学院応用人間科学研究科 2005 年度修士論文.

一宮茂子，2009，「生体肝移植ドナーの家族のケア――義理の親子間移植」『臨床看護』35(10): 1452-1457.

一宮茂子，2010，「生体肝移植ドナーの負担と責任をめぐって――親族・家族間におけるドナー決定プロセスのインタヴュー分析から」『Core Ethics』6: 13-23.

一宮茂子，2011，「生体肝移植をめぐる移植後の家族変容――ドナーインタビューの分析より」『Core Ethics』7: 1-10.

一宮茂子，2012，「生体肝移植ドナーが経験したインフォームド・コンセント――ドナーインタビューの分析より」『Core Ethics』8: 53-62.

一宮茂子・平井美紀，2003，「生体肝移植ドナーのメンタルケアを含めたクリニカルパスの有効性」『日本クリニカルパス学会誌』5(2): 363.

猪股裕紀洋，1996，「肝移植」『日本外科学会雑誌』97(11): 978-983.

岩生純子，1991，「これまでも『生きること・死ぬこと』は奪われていた（脳死・臓器移植を問う――「治療」とは何か、「障害」を生きるとは）」『技術と人間』臨時増刊号: 83-91.

柊中智恵子，2004，「家族性アミロイドポリニューロパチー（FAP）患者・家族にとっての当事者同士の支えあいの意義」『日本難病看護学会誌』8(3): 282-292.

武藤香織，2003，「『家族愛』の名のもとに――生体肝移植と家族」『家族社会学研究』14(2): 128-138.

永末直文，1990，「執刀記――日本初の生体肝移植――今初めて明かされる難手術までの一部始終！」『文藝春秋』68(1): 228-238.

中山茂樹，2009，「生体移植と『患者の自己決定権』」城下裕二編『生体移植と法』日本評論社．55－67.
成田善弘，1998，「腎移植をめぐる患者心理と家族内力動」『精神医学』40(12): 1337-1341.
西河内靖泰，1991，「生体肝移植をどう考えるか（脳死・臓器移植を問う――生体肝移植を考える）」『技術と人間』臨時増刊号: 134-145.
野間俊一，2005，「置き換えられる身体／置き換えられる生――生体肝移植医療における精神医学的・心理社会的諸問題」山中康裕・河合俊雄編『京大心理臨床シリーズ2 心理療法と医学の接点』創元社，98-116.
戈木クレイグヒル滋子，2002a，「さいごの賭け―第 1 報：医師と患者側が造血幹細胞移植に踏み切る状況」『Quality Nursing』8(1): 57-65.
戈木クレイグヒル滋子，2002b，「さいごの賭け―第 2 報：治療が失敗しても両親を後悔させないための仕組み」『Quality Nursing』8(2): 151-159.
佐藤喜一郎・赤星恵子・鈴木泰代ほか，1990，「小児・青年期の生体腎移植の精神医学的問題」『児童青年精神医学とその近接領域』31(5): 327-350.
佐藤喜一郎・遠乗秀樹・取出涼子，1996，「肝移植のコンサルテーション・リエゾン精神医学」『臨床精神医学』25(12): 1481-1487.
菅原寧彦，2003，「ドナーに関する倫理的問題――移植医の立場から」『ジュリスト』1252: 127-129.
田村純人・菅原寧彦・國土典宏，2009，「肝移植の現状――世界の趨勢とわが国の展望」『移植』44(5): 429-437.
東方敬信，2003，「人格的冒険としての臓器移植――キリスト教倫理から」『ジュリスト』1252: 129-132.
梅下浩司・門田守人，2004，「生体肝ドナーの術後合併症と予後――日本肝移植研究会のとりくみを中心に」『外科』66(9): 1019-1023.
渡邊朱美，2007，「生体肝移植のための臓器提供者を決定する家族の意思決定プロセスモデルに関する研究」『お茶の水医学雑誌』55(1･2･3): 27-53.

３　オンライン文献

厚生労働省，2007，「『臓器の移植に関する法律』の運用に関する指針（ガイドライン）」（http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/zouki_ishoku/dl/hourei_01.pdf, 2018.8.20 確認）.
日本肝移植研究会ドナー調査委員会，2005，「生体肝移植ドナーに関する調査報告書」（http://jlts.umin.ac.jp/images/donor_survey_full.pdf，2018.8.13 確認）.
日本移植学会，2017，「臓器移植ファクトブック 2017」（http://www.asas.or.jp/jst/pdf/factbook/factbook2017.pdf，2018.8.19 確認）

「盲ろう者」として自分らしく生きる

～私にとって障害・仕事・支援とは～

中　條　與　子（Nakajoh Yohko）

第２回　同じ空間にいた友人の言葉から、「点」と「線」を結びなおす。

私の日常①　誕生日を祝う

1.　はじめに

今号から次の 3 つのテーマ、

1. 私の障害について
2. 障害と仕事
3. 支援をうけるものとして

の「1. 私の障害について」から開始予定だったが、完成していないことをお詫びしたい。

今回は「私の日常」を書く。今後の連載にも、「私の日常」コーナーを併設して登場させたい。

2.　私の日常①　誕生日を祝う

友人と久しぶりに再会。数年違いで天神祭奉納花火の日に生まれた者同士、誕生日が近かったので、一緒に美味しいものを食べる事に決定。共通の知人に教わったイタリアのお店で、お互いの近況と、ひと皿ごとにいろいろな味を楽しんだ。料理が終わると、頼んだコーヒと一緒にデザートが運ばれてきた。白いお皿のまわりにチョコで“Happy Birth Day!!”とデコレーション。友人が予約の際に、特別にリクエストしてくれたようだ。私が予約をしていたら、こんな嬉しいケーキに出会えない。

ケーキを食べ終わると、友人がもう私たちしかいない事を教えてくれる。振り返ると、1 組が会計を終えて去ろうとしていた。客は私たちだけ。話を聴いて喋りながら、料理を食べていると、私の目線は一緒に食べている友人の口や目元、口に運ぶ料理で、狭い視野がいっぱいになり、周囲の存在を忘れてしまった。友人から状況を教わらなかったら、私の「KYちゃん」度が更に力強く発揮したに違いない。

いそいそと私たちは会計をすませると、友人

が手引きは大丈夫かと訊ねてくれた。行きは夕暮れでまだ見えるので断ったが、玄関の方向を見るとガラス張りの向こうは、暗闇の中にポツポツと光がある。私は網膜色素変性症の症状の一つ、夜盲のため、夜や暗闇が見えない。お言葉に甘えて、手引きをお願いした。側にある友人の右肘を左手で持ち、半歩ほど下がって歩き始めた。

お店を出ると、夜風もない、蒸し暑いお風呂のような空気をあびる。しかし、私たちは美味しい時間の余韻に浸る。何が一番好きな味だったか、報告し合う。

友人は料理が美味しいだけでなく、お店の雰囲気もとても良かったと、ため息のような声で語る。それを聞いて、お店の場所は、大きな湖がある県で少し遠いことが気がかりだったが、喜んでくれて安心した。

予約して良かったと、友人は話を続けた。私たちが入店してしばらくすると、すぐに満席になったそうだ。玄関には席が空くのを待つ客たち、諦めて店を後にした客もいたそうだ。そういえば、共通の知人から、予約した方がよいと言われたことを思い出した。

私たちの隣にいた客のことも、教えてくれた。予約なしで入店した客だそうで、注文した料理がなかなかこなかったようだ。なんとなく、男女のカップルがいたような気がするが、私からは、楽しんでいるように感じたので、想像とは違った状況のようだ。

あと、小さな子供と一緒の家族連れが多かったとの事だった。確かにトイレに行く時、テーブルとテーブルの間を歩いていくと、小さい子供が目に入り、子供の元気な高い声が聞こえた気がする。背丈が低い子供は、私の視野の中に見えることが少なく、下手すると蹴飛ばす可能性がある。注意深く歩く事に気を取られて、それ以上の感想は持たなかった。

友人と同じ空間にいて、イタリアンを食べて、喋り、楽しんだ。友人の言葉から、私の感じていたお店の印象とは違った。一瞬一瞬の目の前で起こっている「点」は、見えて、聞こえているかもしれないが、点と点を結ぶ「線」までは気づきにくい気がした。私が妄想で線を引いているかもしれない。

共通の知人には、料理が美味しかったこと、友人が喜んでいたこと、サプライズのケーキを伝えるつもりだった。それに加えて、友人の言葉から点の記憶が線になった、お店が満席だったこと、予約して良かったこと、子供の家族連れが多かったこと等、一人では「点」のままで出てこなかった、お店の雰囲気などの感想とともに伝えた。

木陰の物語にまつわる対話

団士郎×岡田隆介

第一回

この新連載について、説明しておく。

ここで行うのは、私（団士郎）の漫画作品「木陰の物語」にまつわる対話である。

200話を超えている「木陰の物語」は一般読者を対象に長期連載してきたものだ。現在も、「月刊学校教育相談」誌、「月刊福祉」誌、季刊「かぞくのじかん」誌に連載中である。

そのマンガを、あえて読者対象層を狭め、もっと意図的に解説的対話をしてみるのが本企画である。

そもそもは 2017 年の夏、ナラティヴセラピーの翻訳や著作の多くある小森康永氏（愛知県がんセンター医師）からの声かけから始まっている。

「グラフィック　メディスン（GM）というものがあって、欧米では 10 年ほどの経過実績がある。学会も開かれていて、そこでは時には医療関係者自身が漫画を描いて、医学教育に貢献している。団さんの描いているものと共通するものがあるのではないか」という説明だった。

GMがどんなものなのか今ひとつ分からなかったが、マンガの可能性の話としてはよく理解できた。そしてGMの作品として翻訳出版されていた「スティッチ」、「母のがん」を読んだ。

とても深い中身の読み応えある作品だった。一般のコミックスのように、多くの読者、大きなマーケットを期待して創作されているものではない。当然出版社もマイナーだった。

なにかを本当に届けよう！と思う時、誰にもわかりやすくするというのは得策ではない。むしろ、確実に届く少人数向けのコンテンツを固めることだ。そしてそれが確かなものに出来上がっていたら、いずれは多くの人にも届くだろうと期待して辛抱することだ。

私の作品の中から岡田さんが選んで、それについて対話すれば、読者を絞った、家族心理臨床版GMのような作品が創れるかもしれないと思った。

そして、昨秋から準備に入り、12 月に広島で岡田さんと会って話し、2018年春、制作のための対話を、LINEを使って繰り返した。

この連載が続いたら、何か新しいものに出会えそうな気がしている。

2018/9/15　団士郎

←

人間コミュニケーション論と題した授業をしている。

若者のコミュニケーション力批判がかねてから鼻についていた。

そこで、徹底した実習授業をと、毎週、毎週、対話の実技をさせている。百人規模の教室では、異色の授業になっている。

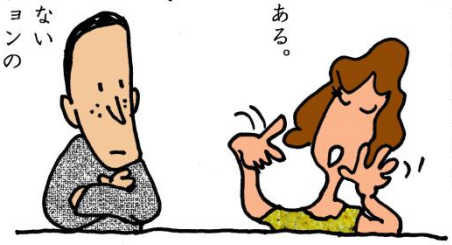
宿題

木陰の物語

とにかく様々な切り口から、受講生のコミュニケーションに関する思いこみにお節介し続けている。

その一つに、自分の関係世界における、具体的な悩みを探して報告し、相手に助言を求めるというエクササイズがある。

その日に教室でペアになった未知の人に、自分の上手くいっていないコミュニケーションの悩みを手短に話す。



バイト先の上司ととか、サークルの下級生、両親、友人、彼女、彼氏等、いろんな関係の一寸した悩みが話される。

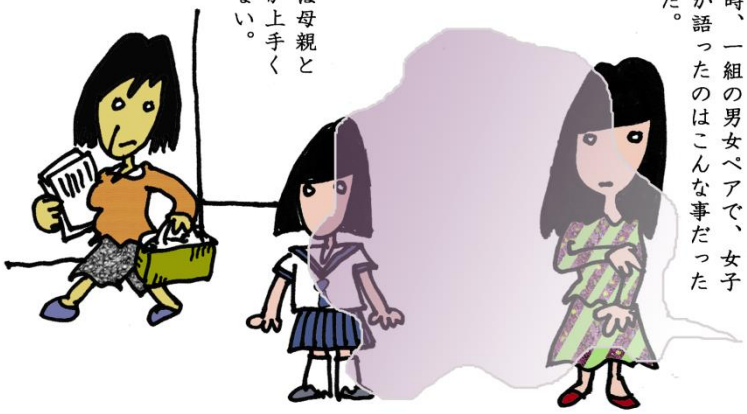
聞かされた方は、それに何か一つ必ず具体的な提案をする。

助言された側は、出来るだけそれを次回までに実行してみる。

このポイントは、アドバイスする側が相手のことをあまり知らない事である。

人は事情を知れば知るほど、他人の事について軽々しくは語れなくなる。

ある時、一組の男女ペアで、女子学生が語ったのはこんな事だったそうだ。



自分は母親となぜか上手くいかない。

共働きで頑張り屋の母と、いつの頃からかぎくしゃくしたままである。

下宿暮らしになる大学を選んだのも、心の底にはそれがあった。

妹は母と似た頑張りっ子で、地元大学の一年生。私は帰省も滞りがちで…

聞かされた男子学生は、

突然そんなこと出来るはずがないと彼女は思った。

でもそこで、講師がいつもいう「固めてしまった説明に自分を閉じこめるな。自分のために自由だということを忘れるな」を思い出した。

土曜の午後、彼女は連絡もせずに帰省した。

家族は驚いたが、特にいつもと変わりなく、あっという間に時間は過ぎた。

月曜の朝には又、大学に戻らなければならない。家族もそれぞれ出勤、登校する。

彼女は決心して家族の弁当を作ることにした。

翌朝、自分の分も含めて四つの弁当を整えて、それぞれに「はい！」と手渡した。

バタバタとあっけなくみんなが出てゆき、彼女も最後に戸締まりをして家を出た。

と母親は冷やかした。

あんな事くらいで、何かが変わるとは思っていなかったが、やはり少しは期待があったのか、ちょっと気持ちは沈んでいた。

夕刻の授業に出て、下宿に戻った夜遅く、妹から電話があった。

「お母さん、お弁当箱洗いながら、泣いてた…」

涙が出た。

母に、そしてそのことを伝えてきてくれた妹に、とても素直になれる気がした。

採点されるわけでもない宿題がまた一つ、大きな仕事をしてくれたと思ってレポートを読んだ。

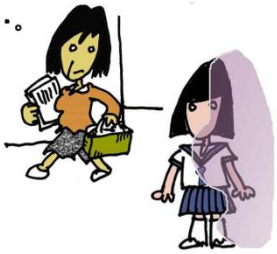
対話

岡田隆介　　団士郎

木陰の物語を家族の日常として味わう人、臨床の手引きとして携える人、時代の警鐘として読む人、人間の生き様として噛みしめる人など、いろんな人がいろんな風に読んでいると思う。で、自分の場合は、という話題から入るね。

最初に取り上げるのは「宿題」。というのは勝手にこれを代表作だと思っているので。

本でも映画でも、始まると一歩先、さらには結末を予想しながら味わわない？予想通りの大団円とか、裏切りのどんでん返しとか・・。



「宿題」はどうなんだろうと思うと、結末は予想通りなんだけど、そのプロセスに予想もしなかったことがあって。

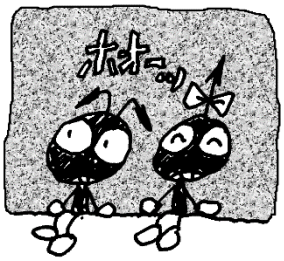
例えば、授業だから言わなければならないから言った男性学生の軽いアドバイス。読者からすれば、ここはサラッと読み過ぎるところ。

それを「ちょっと待って、ここにも大事なことがある」とばかり、「深い事情を知らないからこそ言える事がある」とくる。こういう「予想外」がグサッとくる。

そして「そんなこと実行できるはずがない・・・」という予想に、
「とりあえずやるだけやってみよう、課題なんだから」という枠。

心を込めないから、逆にうまくいったりする。心を込めたり、思い詰めたりすると、相手にも同じものを期待してしまう。

確かに、たいていの場合、期待外れになって、その結果、怒りが生じる。で、今までと同じ、自分が努力したって何も変わりはしないと。
それを「とりあえずやっとこう」と枠付けしている。



これ、まさに心理臨床そのもの。このあたり、臨床を知りたい学生さんはどう感じているかな？
自己責任、自己決定、主体性、なんてものを脇に置いて、こころなんかを持ち出さない方がうまくいくことがある、と心理臨床家が説く。学生さんにこの逆説がうまくわかってもらえたか、と気になった。

作品のキモでもあるから。まぁ、キモだらけではあるんだけど・・。
そして実家に帰る、ここから先はアルアルの予想通りの展開。

信頼できる人の言葉だからとか、親が言うのだからとか、そういう前置きで自分の行動選択を語りたがる人は多いね。

そうそう、臨床場面でも、「先生がそう言うなら・・・」、なんてよく聞く台詞。だけど実行するかは別よね。

学生さんは助言に従って、まじめに努力し、変わろうと踏み出した。少し期待もする。ヒトって努力への報酬を求めるものだから。
でも、現実は、この程度じゃ何も変わらなかった。やっぱりと思いつつ、失望も。

もしかしたら家族や助言した男子学生への怒りもあったかもしれない。自分を慰めながら帰る彼女。両親はどうなんだろう？この辺は予想通りの展開だね。

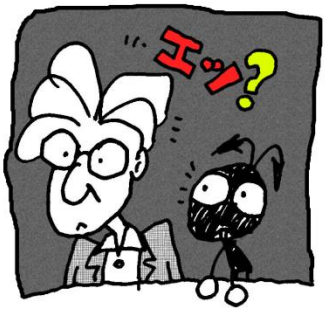
良いわけじゃないのに、予想通りを喜ぶ感覚ってあるね。「ほーら、やっぱりね！」とか。

母親のテレ隠しみたいなセリフは、「ここは昔のままよ、何も変わっていないから安心して帰ってきて」という誠実さでもあるんだけど、実はまさに現状維持のシステムでもある。
ここまで、彼女の予想通り、読者の予想通りで来た。

ここで、それをひっくり返すのが妹です。ボクはこの妹にやられた。これが臨床のセンス！と。

妹が持っている運と言うのもある気がする。母がキッチンで泣いているのを目にできるタイミングなんて、そんなに長い時間じゃない。

ボクは実際に母が泣いていたかどうかなんて、どうでもいいと思う。



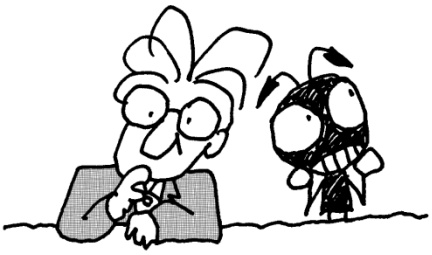
人がすごいのは現実とは別に、イメージができること。そして、それを共有する術、言葉を持っているところだから。

そうそう、どう語られるかだもんね。少なくとも姉妹の間では、やり取りを通じて現実になっている。妹と姉との間で、それで合意できたら現実として機能する。

そうか、それは思ったことがなかった。確かにそうだ。物語は事実だけで構成される必要はないよね。

そんな場面を妹は、ずっと心の中で願って待っていたとか。
母は本当に泣いていたのか？という視点は、これまでなかった。面白いなぁ。

うん、イメージとして持てたらいい。
イメージする力、それを共有して合意する関係、そこもこの作品のキモだと思う。



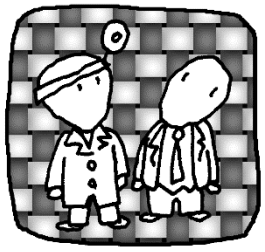
人との関係は、事実よりも対象への思い込みや、決めつけの結果である事が少なくないね。

そうそう、それもある種のイメージだけど、同意や合意や共有というのが欠けていたら、ただの思い込みで終わってしまう。

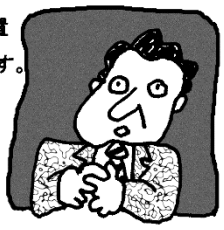
今、思ったんだけど、岡田さんはよくこういう語りをするよね。私は結構、起きた事実から語りたがるんだけど。この違いは何だろう？

そう？それは気がつかなかった。違いと言えば、ボクは部分にこだわるところがあって。団さんは、全体というか、世の中とか時代とかというメガネで見てるといつも感じてる。

医療背景と心理臨床背景の差なのかなぁ？



それってマンガ家の視点じゃないだろうか。目の前のことを切り取って、いったん離れて時代や人間といった、それこそイメージの中に置いて、それから紙面に戻す。違うかな？

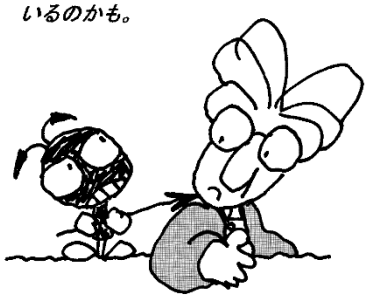


なるほどなぁ。自分の視点だと思ってるから、漫画家の視点だなんて、この頃余り考えなくなっていたなぁ。

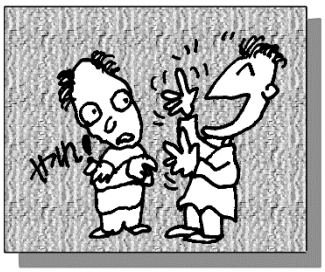
それより最近ますます、何も変化の起こせていないセラピーにイラッとしてる。

それはいっしょ。だからムキになって「既に変わっている部分」を探してる、なければ創ってでもという勢いで。

私は人には何かが起きると思いたがっているのかなぁ。言葉を信じながら、一方で言葉ばかりを支えにしすぎる専門家のメンタリティを嫌っているのかも。



起きたことから大きな影響を受ける人の姿を知っているからかな。説明より事実の方が強いって思ってる。



まさにそれ。すっごく大きな視点でしょ、ボクはそういうのが浮かんでこないから、どうコメントしていいかわからない。ボクは接写で撮る、団さんはズームで寄った後、引いて撮る。

マンガに戻すと、妹の電話は読者にとって完璧に予想外。ストレートに応じきれなかった母の哀しさも含めた家族というものが伝わってくる。で、一気に読者の緊張がストンと緩和される。

まさに桂枝雀さんの言う緊張と緩和です。
この落差にウルウル・・。この予想を裏切る落差が大きければ大きいほど、こころは震える。

木陰の物語は臨床家が描いているんだなぁという感想でした。

共有したいと願うイメージが母娘にあるのかな。
それをうまくセットさせてあげることがはじめの
一歩か?

そう、それを嗅ぎ取った妹の役割、あの電話のコマを描くのが援助者の役割かなと思った。

よく、どうなれば今より少しはマシですかって聞くよね。それをどう投げかけたら関係に処方できるのかな?

どうなればマシですかってたずねても、いい返事が帰ってくることってあまりなくない?それくらいバイアスがかかった現状認識にどっぷりなんだろうね。
で、ここなんか前よりマシなんじゃないですかって言ってしまう。そこからイメージしてもらう的な。

自分たちで生み出せるように対応するのは何が秘訣なのかな・・・
事実として泣いていなくても良い、というのが「宿題」の心理臨床家読みの胆ということで描いてみるわ。

ほんまですか、楽しみです
しゃべりながら考えがまとまっていくのが楽しかった。

岡田隆介

団さんとは、これまでも研修会などで会うといろんなことを明け方までしゃべるようなことがよくありました。「木陰のおしゃべり」企画は、そうした経験がベースにあると思います。言うまでもないけど7：3くらいで団さんがしゃべり、夜が更けると8：2くらいになるわけです。

ですが今回は Line を使い文字でやりとりしたので、わたし、けっこう頑張ってます。読者が作品を選んで作者にぶつける形になったので、当然といえば当然ですが。

「木陰の物語」というこの時代を刻んで後世に残る作品に、ほんのわずかですが接点を持てる幸運を大事にしたいと思います。ちょっとはしゃぎ過ぎた感じもするので、もう少し作者の思いを引き出す方向に頑張るべきかな、でもインタビュアにはなりたくないし、まあ宿の夜でいきましょう。

実は、家族療法学会で団さんが小森さん（愛知県がんセンター）からリフレクティングチームみたいだと言われたと聞き、「即、いただき！」という気持ちになっています。

高齢者二人が宿で話し込んでいるような「木陰のおしゃべり」に加わっている気分でご覧いただけたら幸いです。

編集後記

編集長（ダン　シロウ）

世の中に様々な編集の不正が漂っている。

医大の入試において,最終的合否判定を一部の人間の価値観の反映で,女性を排除していた。試験は公正だと思わせ、競わせたあげくの事だった。

許認可事業での手続き不正や、記録の改ざんもあったが、これもカテゴリーとしては編集作業である。

編集の行われない雑誌（社会）はあり得ない。世界の出来事をすべて報道するニュース番組があり得ないように、常に編集作業はあらゆる場所で目的に合せて行われている。だから姿勢が問われる。

ジャーナリストが求められる姿勢、国家公務員が求められる姿勢、権力者が問われる姿勢。そこでグズグズと不正を容認してしまうと、社会構成員みんなの気持ちをくじく。

頑張っても仕方がない。みんなやっているんだから、少しくらい良いだろう。どうせ悪いことして儲けたに決まっているから、盗んでもかまわない。

そんな行動基準の次世代を育ててはならない。それは私たちの世界と未来社会への破壊行為だ。人類はこれまでも、何度も同じ悪事（たとえば戦争）を繰り返してきた。だからどうせまたやるのだと結論するか、愚かしく繰り返してはならないと何度でも語るかは、私達が選ぶことが出来る。

*

家族療法学会誌の編集をしている K さんと話していて、250 人ほどの学会員で,マガジン連載者が 50 数人なんて考えられないと言われた。そんな発想をしたことがなかったことに気づいた。確かに、会員の執筆比率は驚異的なのかもしれない。小さな学会だが、この辺を自慢材料にできるかな。

又、ページナンバーの入力ミスを発見。左甚五郎の忘れ傘だと思っておいてください。

編集員（チバ　アキオ）

聴いた話によると、地球上の生命の始まりはウイルスのような非常に微細なものの集合体であったらしい。その生命を繁栄させて、維持しようと思うと様々な環境に適応しないといけない。その時に初めて、集合体から「個」に分かれる必要が出てきたと。それが「個」の始まりだという。集合体であれば、じわじわ広がり存在し続ければよかった。集合体内での新陳代謝はあれど、集合体としては継続維持された。「個」に分かれると、様々な環境に適応するので、繁栄し、広がった。でも、「個」となった為に、「生死」というものが伴うことになった。それが「生死」の始まりであると。これらの起源が示すものは、「個」であることが万能ではないことを示している。個人主義というのは万能ではない。生命は全体を意識して、社会とは切っても切らずに歩んできた。それが今、「今だけ、金だけ、自分だけ」の「3 だけ主義」に代表される、利益誘導型の社会（政治）が蔓延し、お金や「個」でしか考えていない怖さを感じていると聞いた。「我々はどうしたらいいですか？」とその方にきくと、「医師会のように介護、福祉業界が結束しないといけない」と。

実際はどうだろう、国から介護、福祉職に処遇改善費が出ていたりしても、福祉職にお金が回ってくるのは、職場を通じてである。その方が都合がいい人がいるから、このやり方が継続しているのだろう。直接福祉職にわたすことが始まると、結束が助長される恐れがあり、怖いのであろう。基地問題、原発問題等の常套手段である。

「個」は「元集合体」であるという話を聞くと、ユングの集合無意識周辺の話も合点がいく。また、システム論で考えることも納得である。地震、豪雨、続く台風など、自然災害は集合体としての意識を問い直しているようにも思われる。持つものと持たざる者。自分だけはいい思いをしたい。今だけ、金だけ、自分だけの蔓延。それも個々のレベルで打破しなくてはいけない。

無料で読める、著者の意志で社会に意味があるから書き続ける、他者にも自分の経験を役立てて欲しい…「3 だけ主義」から解放されているマガジンというメゾレベルの集合体。ミクロ、メゾ、マクロへの作用も実感しながらの 34 号である。

編集員（オオタニ　タカシ）

「ダークツーリズム」という言葉がにわかに注目を集めている。レジャーとしての観光が楽しみを求めるものであるのに対し、ダークツーリズムは人の死や悲しみに関わる地を訪れるもので、目的や意義は通常の観光とは大きく異なる。前号の短信に書いたが、今年の 5 月に東日本大震災の被災地を巡った。ニュースや報道で知っているつもりでも、やはりその場に行かないとわからないことがある。帰宅困難区域や住居制限区域、避難指示解除準備区域に至るまでの道のりの中で見かけた廃屋のひとつひとつに、そこに住む人々や家族の営みがあったこと、それが有無を言わせぬ強制的な力によって断絶されたことが、その場を訪れたことでまざまざと感じられた。事象と

しては、「大震災」、「原発事故」とくくることができるが、それが個人や家族に及ぼした影響や被害は、個別的である。そのことに想像を巡らせざるを得ないものが、何気ない風景の中に無数に存在していた。

今号の編集作業中にも、台風 21 号の被害があり、北海道の震災が起こった。台風に関しては、自身の勤務先も 2 日間の停電に遭い、電気の無い中での業務を余儀なくされたが、報道では見えないところで大小さまざまなことが起こっている。マガジンの連載の

テーマもその多くが、ニュースで大きく報じられる事件のようなものではない、小さな、しかし確実に今そこにある人々の営みを取り上げたものである。すぐ身近にも、自分の想像が及ばないものがあると知っておくこと。それが、自分の常識だけに縛られない思考と想像力を与えてくれるように思っている。

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町４３８

ランブラス二条御幸町４０２　仕事場Ｄ・Ａ・Ｎ

対人援助学マガジン

通巻34号

第9巻　第二号

２０１８年０９月１５日発行

http://humanservices.jp/

第35号は2018年12月15日
発刊の予定です。
原稿締切2018年11月25日！

常に新規執筆者を求めていますし、お誘いすることもありますが、執筆依頼はしていません。自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分の専門分野の今の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

連載誌ですが必ず何回以上と決めているわけではありません。必要な回数（ずっと・・・というのもありです。）を、書いていただけるよう設定します。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

執筆資格は学会員であること。したがって書いていただく方には、対人援助学会への入会をお願いします。まだ登場していない分野、様々な立場の方達の対人援助領域からの積極的発信を期待します。

対人援助学会事務局

〒603-5877　京都市北区等持院北町 56-1
立命館大学大学院応用人間科学研究科内
TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

対人援助学会事務担当

入会・退会・変更届

〒540-0021　大阪市中央区大手通 2-4-1
リファレンス内
TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

表紙の言葉

今回の表紙は、２０１８年東日本家族応援プロジェクト用に制作したカラーパネル「沖に向かって泳ぐ」からの一コマ。

人生において人は、ついつい安全な沿岸を遊泳してしまう。しかしいつか時が来たら、何が待ち受けているかは分からなくとも，沖に向かって泳ぎ始めなければならない。

私にとってこの感覚は五十歳で公務員を辞めて独立し、仕事場Ｄ・Ａ・Ｎをスタートしたことだった。その結果として、立命館の大学院で働くことになり、それと東日本大震災がクロスして，１０年プロジェクトが始まった。

小冊子「木陰の物語」制作も含め、様々なことが１９９８年に沖に向かって泳ぎだしたことがきっかけになった。

「何が待っているか分からない」は決して否定的な言葉ではない。そもそも人生に何が待ち受けているかは分からないのだから、そこに重ねて言う「沖に向かって」は決意を後押しする言葉なのだ。　　（２０１８／９／７）